

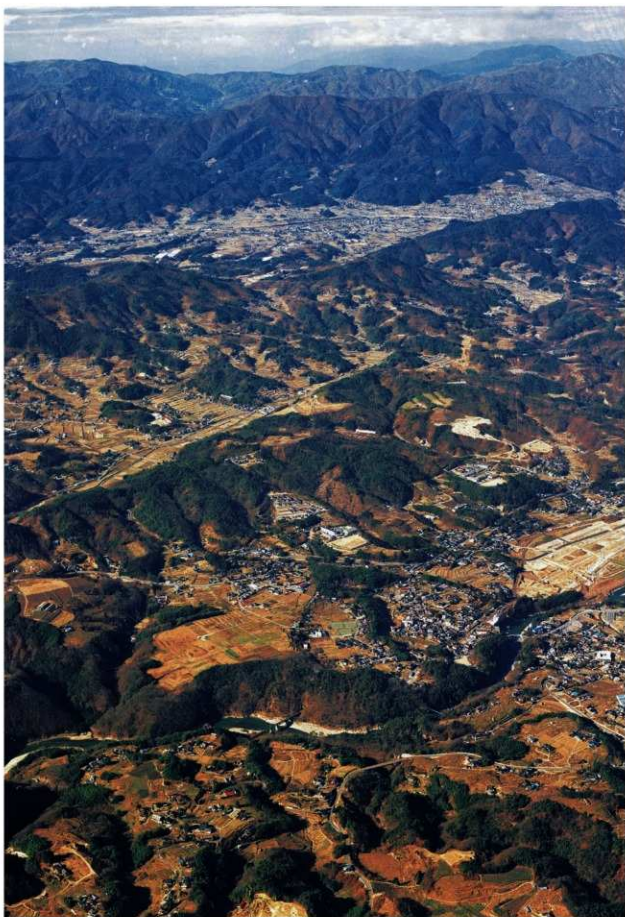
国道 474 号（飯喬道路）  
埋蔵文化財発掘調査報告書 4

—飯田市内その 4—

かわじだいまょうじんばら  
**川路大明神原遺跡**

2010. 3

国土交通省中部地方整備局  
長野県埋蔵文化財センター



天竜川に臨む台地上に広がる川路大明神原遺跡（南東から）



遺跡主要部全景（南西から）



8区縄文時代遺構群（北から）

## 序

三遠南信自動車道は、三河、遠江、南信濃の三地域を結ぶルートとして、完通した暁には、人の移動や物資の流通に大きな役割を担い、広域的な経済・文化圏の形成に寄与することが期待されています。三遠南信自動車道の一部である飯橋道路建設用地内の遺跡保護については、平成 11 (1999) 年から長野県埋蔵文化財センターが記録保存を実施しています。本書は、このうち飯田市川路地区に所在する川路大明神原遺跡の発掘調査報告書です。

長野県南部を貫く天竜川に沿って延びる伊那谷は、古来より文化伝播の通廊でありました。弥生時代には稲作文化が伝わる道となり、古代には美濃国から上野国へ続く当時の幹線道路である東山道が通っていました。伊那谷の南端に位置する飯田市周辺は、この通廊の南の玄関口として、また、秋葉街道や三州街道などの集束点として、西や南からの文化と信濃の文化の接点となる地域であり、人や物の動きの歴史を考えるうえで重要な地域です。この地に残された人々の活動の痕跡は旧石器時代から近世にわたり、これまでも多くの先達によって発掘調査が行われ、数々の成果が示されてきました。

本書に報告する川路大明神原遺跡の発掘は平成 11 年から 17 年にかけておこなわれました。調査成果の詳細は本文を御覧いただきたいと思いますが、縄文時代中期の大規模な集落跡や、伊那谷南部では確認例の少ない陥し穴による縄文時代の狩猟域が捉えられ、当時の集落様相の変化や生業活動の実態を考えるための貴重な資料を得ることができました。

飯橋道路の建設に伴う発掘調査は今後も継続して行われます。長野県埋蔵文化財センターは、現在、天竜川東岸地域の調査を進めており、それによって得られる知見とともに、本書に報告した調査成果が、飯田市をはじめとした伊那谷地域の歴史解明の一助となることを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘から報告書刊行に至るまで、深いご理解とご協力をいただいた国土交通省、飯田市、飯田市教育委員会などの関係諸機関、地元の地権者や関係者の方々に深甚なる謝意を申し上げます。

## 例 言

- 1 本書は長野県飯田市に所在する川路大明神原遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 ただし、旧石器時代に係る部分については、『国道 474 号（飯喬道路）埋蔵文化財発掘調査報告書 2-飯田市内その 2-』において報告するため、本書では簡潔に触れるにとどめた。
- 3 調査は、一般国道 474 号（飯喬道路）建設工事および関連工事に伴う事前調査として実施し、国土交通省中部地方整備局（平成 13 年まで建設省中部地方建設局）からの委託事業として、財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センターが実施した。
- 4 遺跡の概要は、長野県埋蔵文化財センター刊行の『長野県埋蔵文化財センター年報』16～25 ほかで紹介しているが、内容において本書と相違がある場合は、本書の記述が優先する。
- 5 本書に掲載した地図は、飯田市発行の飯田市都市計画基本図（1:2,500）・飯田市地形図（1:10,000）・飯田市遺跡分布図（1:25,000）、国土地理院発行の地形図（1:25,000 時又、1:50,000 時又）、国土交通省飯田国道事務所作成の地形図（1:1,000）をもとに作成した。
- 6 本書で扱っている国土座標は、国土地理院の定める平面直角座標系第Ⅷ系の原点を基準点としている。座標値は 2002 年以前の日本測地系（旧測地系）による。
- 7 発掘調査にあたって、以下の機関・諸氏に業務委託もしくは協力を得た（敬称略）。  
測量・航空写真撮影：㈱アイシー、㈱日本空間情報技術（旧㈱ジャステック）、新日本航業㈱  
放射性炭素年代測定：㈱加速器分析研究所  
石材鑑定：国立大学法人 信州大学理学部教授 原山 智  
石器実測・トレース：㈱アルカ  
黒曜石産地推定：独立行政法人国立高等専門学校機構 沼津工業高等専門学校教授 望月明彦  
遺物写真撮影：㈱長野フジカラー
- 8 竹佐中原遺跡で後期旧石器時代を遡る可能性をもつ石器群が発見されたことを契機として、竹佐中原遺跡等調査指導委員会を組織した。指導委員の方々には、竹佐中原遺跡だけでなく、他の遺跡の調査についてもご指導いただいた。ご芳名を記して感謝します（敬称略）。  
戸沢充明 大竹憲昭 小野 昭 神村 透 佐川正敏 佐藤宏之 松島信幸
- 9 以下の諸氏・諸機関にご指導・ご協力をいただいた。ご芳名を記して感謝します（敬称略）。  
岡田正彦 小林正春 坂井勇雄 渋谷恵美子 下平博之 寺平 宏 羽生俊郎 馬場保之 原山 智  
水野明子 望月明彦 山下誠一 吉川金利 吉川 豊 飯田市教育委員会  
飯田市上郷考古博物館 飯田市川路支所（現川路自治振興センター） 飯田市国県関連事業課 三遠南信道対策委員会
- 10 発掘調査の担当者、発掘補助員、整理補助員は第 2 表に記載した。
- 11 本書は、上田典男・鶴田典昭・費田 明・若林 卓が執筆を行い、上田典男が校閲し、平林 彰が総括した。上田・鶴田・費田・若林の分担は以下の通りである。  
上田典男：第 2 章第 2 節  
鶴田典昭：第 4 章第 3 節 3 (2) ①～⑬・⑱～㉔・㉘～㉚・(3)  
費田 明：第 4 章第 3 節 1 の中期前葉以前に関する部分、3 (1)・(2) ⑩・㉓・(4)、第 4 節 2 の ST01  
若林 卓：上記以外および編集
- 12 本書付録の CD には以下の内容を収録した。  
土坑一覧表、付属坑付土坑一覧表、陥し穴一覧表、土器・土製品観察表、石器観察表、剥片・砕片集計表、黒曜石産地推定分析台帳、黒曜石産地推定結果報告書、放射性炭素年代測定結果報告書
- 13 本書で報告した遺跡の記録類・出土遺物は飯田市教育委員会に移管される予定である。

## 凡例

- 1 遺構番号は、遺構種ごとに付してあるが、発掘時の番号を変更しなかったため欠番がある。
- 2 実測図の遺物番号は、土器・土製品ごと、石器ごとの通し番号となっている。実測図の遺物番号は、表、写真とも共通する。
- 3 本書に掲載した実測図の縮尺は原則として以下の通りである。

### 主な遺構実測図

竪穴住居跡 1:60 住居内施設 1:30 土坑・陥し穴 1:60

### 主な遺物実測図

土器 個体 1:4 破片 1:3

土製品 1:3

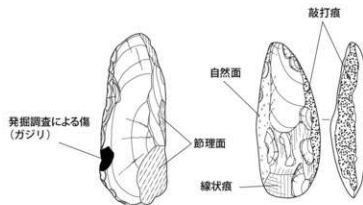
石器 2:3 石鐮 石匙 石錐 搔器 削器 楔形石器 小型の石核・原石などの小型石器  
 1:2 打製石斧 横刃型石器 研磨痕がある剥片 刃器 礫器 石錘 磨製石斧 磨石  
 凹石 敲石  
 1:3 大型の石核 磨石 凹石 敲石 砥石  
 1:6 石皿

- 4 遺物写真の縮尺はおおむね実測図と同縮尺である。
- 5 基本層序および遺構覆土、観察表中の土器胎土の色調は『新版 標準土色帳』による。
- 6 遺構の計測値中、〈 〉で括った数値は推定値を示す。
- 7 竪穴住居跡の床面積は、竪穴の下端線を床外縁としてプランニメーターで計測した。
- 8 土器観察表の法量は、〈 〉が復元値、( ) が残存値を示している。
- 9 実測図中の網掛け部分や記号、模式的表現は特に断りのある場合を除いて以下の事象を示している。

遺構図 密な(濃い)網掛け：被熱赤変部分 疎な(薄い)網掛け：焼土粒分布範囲

●：土器出土位置 △：石器出土位置 □：礫出土位置

遺物図 石器(下図参照)



# 目次

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

挿図目次・挿表目次・写真目次

第1章 発掘調査の経緯と方法	1
第1節 発掘調査の経緯	1
1 一般国道474号(飯喬道路)の建設計画	1
2 埋蔵文化財の保護協議と長野県教育委員会による分布調査	1
3 長野県埋蔵文化財センターによる発掘調査と受委託契約	1
第2節 発掘の方法	4
1 遺跡名称と遺跡記号	4
2 調査グリッドの設定と呼称	4
3 遺構名称と遺構記号	4
4 遺構の発掘	6
5 測量と写真	7
6 遺跡の公開	7
第3節 整理の方法	7
1 基礎整理作業	7
2 本格整理作業	8
3 資料の収納	8
第2章 遺跡の環境	9
第1節 遺跡の位置と地理的環境	9
第2節 周辺遺跡と歴史的環境	11
第3章 遺跡と調査の概要	15
第1節 遺跡の概観	15
1 遺跡の範囲と地形	15
2 これまでの発掘調査	15
第2節 発掘の概要と経過	18
1 平成11～13年度	18
2 平成14・15年度	22
3 平成16・17年度	23

第3節 層序	24
第4章 遺構と遺物	30
第1節 概観	30
第2節 縄文時代の遺構	54
1 竪穴住居跡、竪穴状遺構	54
2 土坑	118
(1) 付属坑付土坑 (2) 二段掘り土坑 (3) 方形・長方形土坑	
(4) 被熱・集石土坑 (5) その他の土坑	
3 陥し穴	140
4 小形ピット集中地点	162
第3節 縄文時代の遺物	163
1 土器	163
(1) 出土土器の概要 (2) 遺構出土の土器 (3) 遺構外出土の土器	
2 土製品	190
(1) 土偶 (2) 土製円盤 (3) その他の土製品	
3 石器	237
(1) 石器群の概要 (2) 石器の観察 (3) 黒曜石産地推定分析について	
(4) 磨製石斧の製作について	
第4節 弥生時代および時期不明の遺構と遺物	296
1 弥生時代の遺構と遺物	296
2 時期不明の遺構	298
第5章 結語	301
引用・参考文献	
写真図版	
報告書抄録	



## 挿図目次

第1図	飯橋道路と発掘調査遺跡の位置	2	第41図	SB06 実測図	61
第2図	調査グリッドの設定	5	第42図	SB07 実測図	61
第3図	周辺遺跡分布図	10	第43図	SB08 実測図	63
第4図	遺跡と地形	16	第44図	SB09 実測図 (1)	64
第5図	調査範囲図	19	第45図	SB09 実測図 (2)	65
第6図	年度別調査範囲図 (1)	20	第46図	SB10 実測図	66
第7図	年度別調査範囲図 (2)	21	第47図	SB11 実測図	68
第8図	土層柱状図 (1)	25	第48図	SB12 実測図	69
第9図	土層柱状図 (2)	26	第49図	SB13 実測図 (1)	71
第10図	土層柱状図 (3)	28	第50図	SB13 実測図 (2)	72
第11図	遺構配置図 割付図	31	第51図	SB14 実測図	73
第12図	遺構配置図 (1)	32	第52図	SB15 実測図	74
第13図	遺構配置図 (2)	33	第53図	SB16 実測図	76
第14図	遺構配置図 (3)	34	第54図	SB17 実測図	77
第15図	遺構配置図 (4)	35	第55図	SB18 実測図	79
第16図	遺構配置図 (5)	36	第56図	SB19 実測図	80
第17図	遺構配置図 (6)	37	第57図	SB20 実測図	82
第18図	遺構配置図 (7)	38	第58図	SB21 実測図 (1)	84
第19図	遺構配置図 (8)	39	第59図	SB21 実測図 (2)	85
第20図	遺構配置図 (9)	40	第60図	SB22 実測図	86
第21図	遺構配置図 (10)	41	第61図	SB23 実測図	87
第22図	遺構配置図 (11)	42	第62図	SB24 実測図	88
第23図	遺構配置図 (12)	43	第63図	SB25 実測図	89
第24図	遺構配置図 (13)	44	第64図	SB26 実測図	90
第25図	遺構配置図 (14)	45	第65図	SB27 実測図	91
第26図	遺構配置図 (15)	46	第66図	SB28 実測図	92
第27図	遺構配置図 (16)	47	第67図	SB29 実測図	94
第28図	遺構配置図 (17)	48	第68図	SB30 実測図	95
第29図	遺構配置図 (18)	49	第69図	SB33 実測図	96
第30図	遺構配置図 (19)	50	第70図	SB34 実測図	97
第31図	遺構配置図 (20)	50	第71図	SB35 実測図	99
第32図	遺構配置図 (21)	51	第72図	SB36 実測図	100
第33図	遺構配置図 (22)	51	第73図	SB37・38 実測図 (1)	101
第34図	遺構配置図 (23)	52	第74図	SB37・38 実測図 (2)	102
第35図	遺構配置図 (24)	53	第75図	SB39 実測図	104
第36図	SB01 実測図	55	第76図	SB40・41 実測図	106
第37図	SB02 実測図	56	第77図	SB42 実測図	108
第38図	SB03 実測図	57	第78図	SB43・44 実測図	110
第39図	SB04 実測図	59	第79図	SB45 実測図	111
第40図	SB05 実測図	60	第80図	SB46 実測図	112

第 81 図	SB48 実測図	113	第 124 図	土器実測図 (9)	201
第 82 図	SB49 実測図	115	第 125 図	土器実測図 (10)	202
第 83 図	SK19・31 実測図	116	第 126 図	土器実測図 (11)	203
第 84 図	SK150・762・890 実測図	117	第 127 図	土器実測図 (12)	204
第 85 図	付属坑付土坑実測図 (1)	123	第 128 図	土器実測図 (13)	205
第 86 図	付属坑付土坑実測図 (2)	124	第 129 図	土器実測図 (14)	206
第 87 図	付属坑付土坑実測図 (3)	125	第 130 図	土器実測図 (15)	207
第 88 図	付属坑付土坑実測図 (4)	126	第 131 図	土器実測図 (16)	208
第 89 図	付属坑付土坑実測図 (5)	127	第 132 図	土器実測図 (17)	209
第 90 図	付属坑付土坑実測図 (6)	128	第 133 図	土器実測図 (18)	210
第 91 図	二段掘り土坑実測図 (1)	129	第 134 図	土器実測図 (19)	211
第 92 図	二段掘り土坑実測図 (2)	130	第 135 図	土器実測図 (20)	212
第 93 図	長方形土坑実測図 (1)	132	第 136 図	土器実測図 (21)	213
第 94 図	長方形土坑実測図 (2)	133	第 137 図	土器実測図 (22)	214
第 95 図	被熱・集石土坑実測図	134	第 138 図	土器実測図 (23)	215
第 96 図	その他の土坑実測図 (1)	137	第 139 図	土器実測図 (24)	216
第 97 図	その他の土坑実測図 (2)	138	第 140 図	土器実測図 (25)	217
第 98 図	その他の土坑実測図 (3)	139	第 141 図	土器実測図 (26)	218
第 99 図	その他の土坑実測図 (4)	140	第 142 図	土器実測図 (27)	219
第 100 図	陥し穴実測図 (1)	146	第 143 図	土器実測図 (28)	220
第 101 図	陥し穴実測図 (2)	147	第 144 図	土器実測図 (29)	221
第 102 図	陥し穴実測図 (3)	148	第 145 図	土器実測図 (30)	222
第 103 図	陥し穴実測図 (4)	149	第 146 図	土器実測図 (31)	223
第 104 図	陥し穴実測図 (5)	150	第 147 図	土器実測図 (32)	224
第 105 図	陥し穴実測図 (6)	151	第 148 図	土器実測図 (33)	225
第 106 図	陥し穴実測図 (7)	152	第 149 図	土器実測図 (34)	226
第 107 図	陥し穴実測図 (8)	153	第 150 図	土器実測図 (35)	227
第 108 図	陥し穴実測図 (9)	154	第 151 図	土器実測図 (36)	228
第 109 図	陥し穴実測図 (10)	155	第 152 図	土器実測図 (37)	229
第 110 図	陥し穴実測図 (11)	156	第 153 図	土器実測図 (38)	230
第 111 図	陥し穴実測図 (12)	157	第 154 図	土器実測図 (39)	231
第 112 図	陥し穴実測図 (13)	158	第 155 図	土器実測図 (40)	232
第 113 図	陥し穴実測図 (14)	159	第 156 図	土器実測図 (41)	233
第 114 図	陥し穴実測図 (15)	160	第 157 図	土器実測図 (42)	234
第 115 図	陥し穴実測図 (16)	161	第 158 図	土器実測図 (43)	235
第 116 図	土器実測図 (1)	193	第 159 図	土製品実測図	236
第 117 図	土器実測図 (2)	194	第 160 図	石鎌の長幅比	244
第 118 図	土器実測図 (3)	195	第 161 図	打製石斧の長幅比	246
第 119 図	土器実測図 (4)	196	第 162 図	打製石斧の欠損分類	246
第 120 図	土器実測図 (5)	197	第 163 図	横刃型石器・剥片 A 類の長幅比	247
第 121 図	土器実測図 (6)	198	第 164 図	磨製石斧関連資料の長幅比	248
第 122 図	土器実測図 (7)	199	第 165 図	石鎌の長幅比	253
第 123 図	土器実測図 (8)	200	第 166 図	硬砂岩鎌の長幅比	254

第167図	石器実測図(1)	259	第188図	石器実測図(22)	280
第168図	石器実測図(2)	260	第189図	石器実測図(23)	281
第169図	石器実測図(3)	261	第190図	石器実測図(24)	282
第170図	石器実測図(4)	262	第191図	石器実測図(25)	283
第171図	石器実測図(5)	263	第192図	石器実測図(26)	284
第172図	石器実測図(6)	264	第193図	石器実測図(27)	285
第173図	石器実測図(7)	265	第194図	石器実測図(28)	286
第174図	石器実測図(8)	266	第195図	石器実測図(29)	287
第175図	石器実測図(9)	267	第196図	石器実測図(30)	288
第176図	石器実測図(10)	268	第197図	石器実測図(31)	289
第177図	石器実測図(11)	269	第198図	石器実測図(32)	290
第178図	石器実測図(12)	270	第199図	石器実測図(33)	291
第179図	石器実測図(13)	271	第200図	石器実測図(34)	292
第180図	石器実測図(14)	272	第201図	石器実測図(35)	293
第181図	石器実測図(15)	273	第202図	石器実測図(36)	294
第182図	石器実測図(16)	274	第203図	石器実測図(37)	295
第183図	石器実測図(17)	275	第204図	SB47実測図	297
第184図	石器実測図(18)	276	第205図	SB31・32実測図	299
第185図	石器実測図(19)	277	第206図	ST01実測図	300
第186図	石器実測図(20)	278	第207図	竪穴住居跡時期別分布(1)	302
第187図	石器実測図(21)	279	第208図	竪穴住居跡時期別分布(2)	303

## 挿表目次

第1表	受委託契約一覧	3	第6表	器種別の住居内出土率と遺構外出土率	242
第2表	調査体制	3	第7表	器種別石材組成	243
第3表	周辺遺跡一覧	13・14	第8表	竪穴住居内剥片集計表	251
第4表	石器分類表	237	第9表	黒曜石産地推定結果集計表	255
第5表	遺構別器種組成	238～241	第10表	磨製石斧関連資料	256

## 写真目次

PL1	遺跡主要部全景、7区遺構群、平成12年度調査範囲全景	PL15	縄文時代竪穴住居跡・竪穴状遺構
PL2	8区・9区・19区遺構群、平成13年度調査範囲全景	PL16	縄文時代竪穴状遺構、弥生時代竪穴住居跡、時期不明竪穴状遺構
PL3	11区・12区・20区・21区・8b区・15b区・20b区・8c区・9b区遺構群	PL17～23	縄文時代土坑
PL4～10	縄文時代竪穴住居跡	PL24～26	縄文時代陥し穴
PL11	縄文時代竪穴住居跡・竪穴状遺構	PL27～42	出土土器
PL12～14	縄文時代竪穴住居跡	PL43	出土土器・土製品
		PL44～56	出土石器

## 第1章 発掘調査の経緯と方法

### 第1節 発掘調査の経緯

#### 1 一般国道474号(飯商道路)の建設計画

三河(愛知県)、遠江(静岡県)、南信州(長野県)の3地域を結ぶ三遠南信自動車道は、長野県飯田市の中央自動車道を起点として、静岡県浜松市三ヶ日町の東名高速道路までを結ぶ延長約100kmの自動車専用道路である。長野県内は起点側から、飯商道路・小川路峠道路・青崩峠道路の3区間に分かれている。飯商道路は、中央自動車道から分岐する飯田市山本地籍の飯田南ジャンクション(以下JCT)から飯田南インターチェンジ(以下IC)、天竜峡ICを経て飯田市上久堅の飯田東ICに至る延長14.6km区間として、平成2(1990)年11月1日に基本計画が決定され、平成4(1992)年度に事業化が決定した。平成9(1997)年2月5日には整備計画が決定となり、平成9年度から建設省中部地方建設局飯田国道工事事務所が用地取得を開始した。その後、平成16(2004)年度に飯田東IC～喬木IC(喬木村氏乗)間が小川路峠道路から編入され、飯商道路は延長22.1kmとなった。

飯商道路は、平成20(2008)年3月に飯田山本IC(旧称飯田南JCT・IC)から天竜峡ICまでの区間の供用が開始となり、中央自動車道(山本地区)・天竜峡(川路地区)間の移動時間は大幅に短縮された。

#### 2 埋蔵文化財の保護協議と長野県教育委員会による分布調査

飯商道路建設事業用地にかかる埋蔵文化財の保護については、建設省中部地方建設局飯田国道工事事務所(現国土交通省中部地方整備局飯田国道事務所)と長野県教育委員会が平成5(1993)年から6年(1994)にかけて協議を重ねた。その結果、保護措置は記録保存とすること、そのための発掘調査は、飯田国道工事事務所が財団法人長野県埋蔵文化財センター(現財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター、以下、長野県埋蔵文化財センターと呼称する)に委託して実施することが確認された。

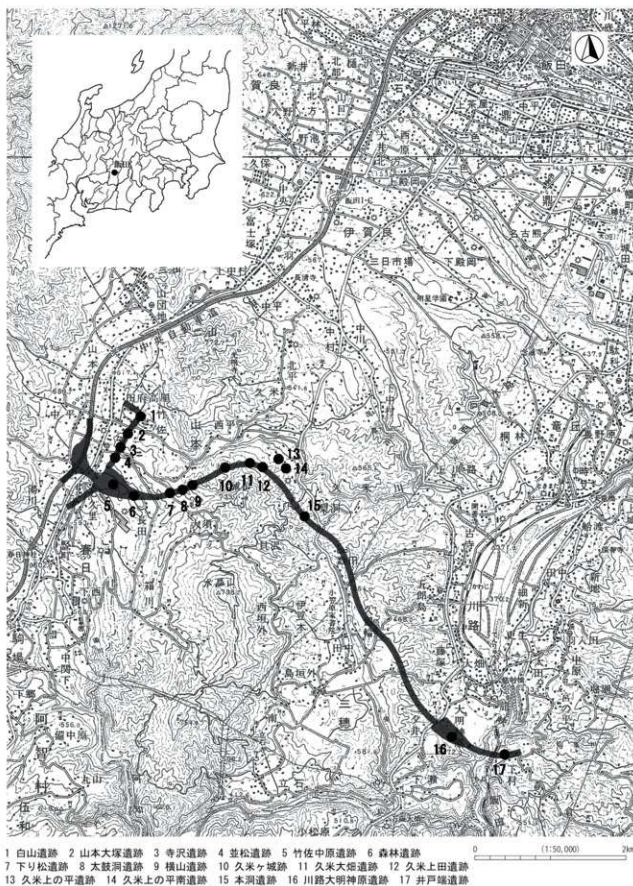
長野県教育委員会は、平成6(1994)年7月21日の協議結果を受けて、飯商道路事業用地内の遺跡を確認するため、同年11月に、飯田市教育委員会の協力を得て、飯田南JCTから飯田東IC間について現地踏査を中心とした詳細分布調査を実施した。その結果、川路大明神原遺跡では、遺跡範囲全体に縄文時代等の遺跡が分布していることが確認され、発掘調査が必要であると判断された(長野県教育委員会1997)。

#### 3 長野県埋蔵文化財センターによる発掘調査と受委託契約

長野県埋蔵文化財センターによる飯商道路事業用地内の発掘調査の実施については、平成9(1997)年度から現実化への動きが強まり、飯田国道工事事務所・長野県教育委員会・長野県埋蔵文化財センターが、実施に向けての調整協議を続けた。

飯商道路事業用地内の発掘調査は、平成11(1999)年、天竜峡IC・サービスエリア部分にあたる飯田市川路の川路大明神原遺跡に始まり、翌平成12年には飯田市山本地区諸遺跡の発掘が開始された。天竜川西岸地域で発掘調査を実施した遺跡は16遺跡あり(第1圖)、現在、天竜川東岸地域の発掘調査が進行中である。川路大明神原遺跡の発掘調査は、平成17(2005)年まで発掘作業および基礎整理作業を、平成18年度～20年度に報告書刊行に向けた本格的な整理作業を行い、平成21年度に報告書を刊行した。

発掘調査は長野県埋蔵文化財センターと事業主体である建設省中部地方建設局、平成13(2001)年度からは国土交通省中部地方整備局が年度ごとに受委託契約を交わして実施した。平成11年度から21年度ま



第1図 飯高道路と発掘調査遺跡の位置

第1表 受委託契約一覧

年度	契約期間	契約額 (円)	作業内容	発掘遺跡	整理遺跡
平成11	4月1日～3月17日	71,962,821	発掘、基礎整理	川路大明神原遺跡	川路大明神原遺跡
平成12	4月1日～3月16日	152,139,157	発掘、基礎整理	山本地区陸遺跡、 川路大明神原遺跡、 飯田南 JCT 関連遺跡	山本地区陸遺跡、 川路大明神原遺跡、 飯田南 JCT 関連遺跡
平成13	4月1日～3月18日	158,103,502	発掘、基礎整理	山本地区陸遺跡、 川路大明神原遺跡、 飯田南 JCT 関連遺跡	山本地区陸遺跡、 川路大明神原遺跡、 飯田南 JCT 関連遺跡
平成14	4月1日～3月18日	100,563,063	発掘、基礎整理	山本地区陸遺跡、 川路大明神原遺跡、 飯田南 JCT 関連遺跡	山本地区陸遺跡、 川路大明神原遺跡、 飯田南 JCT 関連遺跡
平成15	4月1日～3月19日	80,013,749	発掘、基礎整理	山本地区陸遺跡、 川路大明神原遺跡、 飯田南 JCT 関連遺跡	山本地区陸遺跡、 川路大明神原遺跡、 飯田南 JCT 関連遺跡
平成16	4月1日～3月18日	92,900,540	発掘、基礎整理、本格整理、 報告書発行	山本地区陸遺跡、 川路大明神原遺跡、 飯田南 JCT 関連遺跡	山本地区陸遺跡、 川路大明神原遺跡、 飯田南 JCT 関連遺跡
平成17	4月1日～3月20日	62,753,174	発掘、基礎整理	山本地区陸遺跡、 川路大明神原遺跡、 飯田南 JCT 関連遺跡	山本地区陸遺跡、 川路大明神原遺跡、 飯田南 JCT 関連遺跡
平成18	4月1日～3月31日	46,572,798	発掘、基礎整理、本格整理	山本地区陸遺跡、 井戸端遺跡	山本地区陸遺跡、 井戸端遺跡
平成19	4月1日～3月31日	55,896,542	発掘、基礎整理、本格整理	井戸端遺跡、 下村遺跡	山本地区陸遺跡、 川路大明神原遺跡、 井戸端遺跡、 下村遺跡
平成20	4月1日～3月31日	85,824,762	発掘、基礎整理、本格整理、 報告書発行	下村遺跡(鶯ヶ城跡)、 井ノ口遺跡	山本地区陸遺跡、 川路大明神原遺跡、 下村遺跡(鶯ヶ城跡)、 井ノ口遺跡
平成21	4月1日～3月31日	65,738,070	発掘、基礎整理 報告書発行	下村遺跡(鶯ヶ城跡)、 井ノ口遺跡 鬼釜遺跡	下村遺跡(鶯ヶ城跡)、 井ノ口遺跡、 鬼釜遺跡

第2表 調査体制

年度	所長	調査部長	担当課長	本會関連作業の担当調査研究員							
平成11年	佐久間鉄四郎	小林秀夫	百瀬長秀	市川隆之 若林 卓							
平成12年	佐久間鉄四郎	小林秀夫	百瀬長秀	青木一男 西嶋 力 若林 卓							
平成13年	深瀬弘夫	小林秀夫	百瀬長秀	青木一男 西嶋 力 若林 卓							
平成14年	深瀬弘夫	小林秀夫	百瀬長秀	若林 卓							
平成15年	深瀬弘夫	市澤英利	平林 彰	若林 卓							
平成16年	小沢舜夫	市澤英利	平林 彰	石上周蔵 若林 卓							
平成17年	仁科松男	市澤英利	平林 彰	石上周蔵 白沢勝彦 若林 卓							
平成18年	仁科松男	市澤英利	平林 彰	鶴田典昭 若林 卓							
平成19年	仁科松男	平林 彰	上田典男	鶴田典昭 若林 卓							
平成20年	仁科松男	平林 彰	上田典男	鶴田典昭 賢田 明 若林 卓							
平成21年	仁科松男	平林 彰	上田典男	鶴田典昭 賢田 明 若林 卓							
平成11～17年度	発掘補助員										
荒井邦子	伊藤和恵	伊東裕子	井ノ口隆男	小野寺修代	金澤勢津子	金田 都	川手清三	北川 彰	北沢一高	北沢兼男	北沢昭美
吉地竹虎	木下貞子	木下由紀子	木下義男	小林重夫	佛山勝三	島岡正子	島岡吉人	清水信子	下平隆司	所沢ちづ子	関口達彦
竹村和子	竹村剛一	竹村サダエ	竹村定清	谷村悦子	中島貴子	中島俊明	中野清里子	中野充夫	仲村 信	中村地香子	中山健次
林 伸好	原 敦	原 一廣	原 清子	福岡勝利	牧内 修	牧内福一	牧ノ内昭吉	松井明治	水野明子	巖島正三	森本和宏
山田康夫	機前 許										
平成18～20年度	本格整理補助員										
浅井とし子	阿部高子	石田多美子	市川ちず子	井原真弓	白田知子	宇賀村節子	大林久美子	小日向教博	窪田 順	小林知子	
近藤朋子	斎藤いづみ	坂口信子	坂田恵美子	塩野入京美	清水栄子	鈴木幹子	高橋康子	武井洋子	鳥羽仁美	中村恵恵子	
西村はるみ	日向富美子	本原さとみ	矢島美雪	柳原理子	山下千幸	渡辺久美子					

での受委託契約一覧は第1表に、調査体制は第2表に示した。

## 第2節 発掘の方法

長野県埋蔵文化財センターでは、調査法の共通認識と調査の統一性を図るため「遺跡調査の方針と手順」を作成しており、これを基本とした上で、遺跡の状況に応じた計画・方法を策定して発掘調査を行った。

### 1 遺跡名称と遺跡記号

遺跡の名称と遺跡記号は、下記のとおりである。遺跡記号は、記録の便宜を図るため、遺跡名を大文字アルファベット3文字で略表現した記号である。1文字目は長野県を9分割した地区記号で、下伊那郡・飯田市を示す「I」、2文字目および3文字目は遺跡名をローマ字表記したなかの二文字を選択したものである。各種の記録類や遺物の注記に遺跡記号を利用している。

遺跡名称：川路大明神原遺跡（かわじだいみょうじんばらいせき）

遺跡記号：IDM

### 2 調査グリッドの設定と呼称（第2図）

国土地理院の平面直角座標系第Ⅷ系の原点（ $X = 0.0000$ ,  $Y = 0.0000$ ）を基点に、200の倍数値を選んで東西方向・南北方向の測量基準線を設けた。これをもとに、調査対象範囲全体をカバーするように調査グリッドを設定し、「大々地区」「中地区」に区画した。なお、「小地区」は大地区を $2 \times 2\text{m}$ の400区画に分割したものであるが、本遺跡の調査においては設定しなかった。

大々地区は $200 \times 200\text{m}$ の区画で、北西から南東へⅠ・Ⅱ・Ⅲ・・・のローマ数字番号を与えた。

大地区は、大々地区を $40 \times 40\text{m}$ の25区画に分割したもので、北西から南東へA～Yのアルファベット番号を与えた。

中地区は、大地区を $8 \times 8\text{m}$ の25区画に分割したもので、北西から南東へ1～25のアラビア数字番号を与えた。遺構測量の基準・単位としたのが、この中地区である。

グリッド名の実際の表記においては、読み取りやすさを考え、各地区番号の間に適宜ハイフンを挿入することがあり、本書中でもそうした表記になっている場合がある。

グリッド杭の打設は測量業者に委託して実施した。座標値については、発掘調査期間が日本測地系から世界測地系への変換の時期と重なっており、統一性を保つため日本測地系の座標値で統一している。

### 3 遺構名称と遺構記号

遺構名称は検出時に決定するため、遺構の性格に適合しない場合がある。そのため遺構は、主に平面形状や分布の特徴を指標として区分し、遺跡記号と同様に、記録の便宜を図るため遺構記号を用いた。

遺構番号は時代などに関わらず種類ごと、検出順に付けた。混乱を避けるため、一旦記号・番号を付けたものは原則として変更していない。発掘の結果、遺構でないことが判明したものについては欠番とした。遺構内施設についても同様である。

発掘作業および本書で用いた遺構記号には以下の種類がある。

SB：3mを目安とし、平面形がそれ以上の大きさの方形、長方形、円形、楕円形の掘り込み。

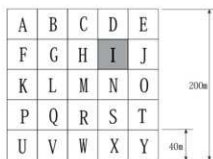
【例 竪穴住居跡、竪穴状遺構】

SK：単独もしくは他の掘り込みとの関係が認められないSBよりも平面形が小さな掘り込み。

【例 土坑】

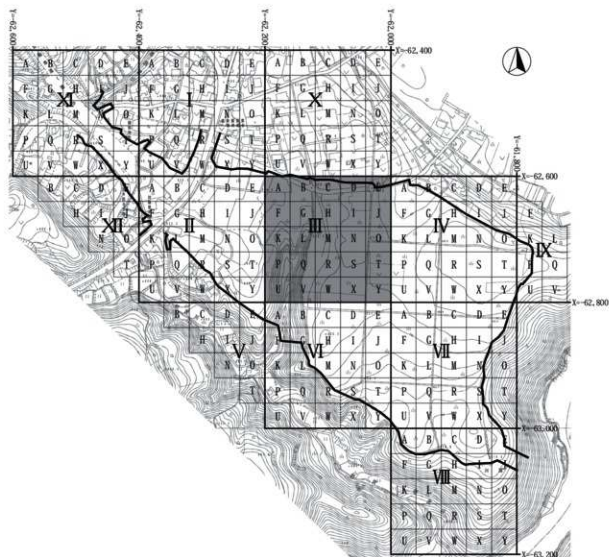
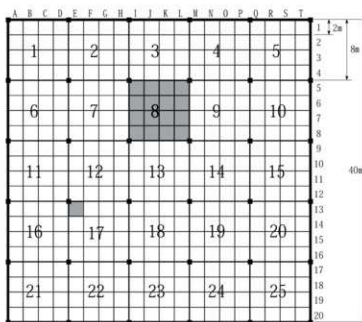
大々地区(200m): I・II・III…VI…

大地区(40m): A・B…R…



中地区(8m) III 108

小地区(2m) III E13



第2図 調査グリッドの設定



ST:SB よりも平面形が小さな掘り込み 4 基以上が一定間隔で多角形状に並ぶもの。ただし、削平等により竅穴を失った住居跡の柱穴配置と推定されるものについては SB とした。

【例 掘立柱建物跡】

SD:帯状の細長い掘り込み・落ち込み。【例 溝跡、自然流路跡】

SF:単独の焼土集中部・被熱面。【例 被熱土坑】

#### 4 遺構の発掘

##### (1) トレンチ調査

調査対象範囲がおおよそ 150,000ml と広大であるため、まず、遺構・遺物の分布状況と土層把握を目的としたトレンチ調査を行った。トレンチは可能な限り広範囲に設定し、遺構が濃密に分布する可能性が高い平坦地については比較的密に入れ、遺構分布が希薄と思われる谷部や斜面については地形と土層の関係把握に重点をおいて選択的に設定した。トレンチは重機を用いて幅 2~3m に掘削し、人力で壁面、底面を清掃して、遺構確認を行い、土層を観察・記録した。

##### (2) 遺構の検出

トレンチ調査で遺構が確認できた地点を中心に面的調査区を設定した。表土から遺構検出面である黄褐色土 (IV a 層・4 a 層) 上面までの土層除去は基本的に重機を用いて行い、その後、人力で掘削面を精査して遺構を検出した。8b・9b 区においては、IV a 層の直上に堆積する黒褐色土 (II b 層) の下部に遺物の包含が認められたため、その部分を人力で掘り下げながら遺構の検出を図った。しかし、検出は困難で、遺構のプランを確定するには IV a 層上面まで下げざるを得なかった。

##### (3) 遺構の掘り下げ

竅穴住居跡の発掘は、土層観察用のベルトに沿った先行トレンチで、床面と壁面の確認を行うとともに、土層の堆積状況を把握してから覆土全体を掘り下げた。覆土の掘り下げは可能な限り分層発掘を行った。床面では精査を行い、柱穴、竪、周溝などの住居内施設を検出した。ベルト部分の掘り下げと住居内施設の調査は、多くの場合、併行して進めた。

土坑と建物跡の柱穴は、覆土を半載し、土層の堆積状況を観察した後に完掘した。ただし、覆土中に遺物がまとまって出土した場合は、それより上位を全体に掘り下げ、遺物の出土状態を記録してから下位の掘り下げへと進んだ。

溝および自然流路跡は、全体のプランを検出した後、走向方向に直交する先行トレンチを複数箇所設定し、それぞれの土層堆積状況を観察しながら掘り下げた。

##### (4) 遺物の取り上げ

遺構内遺物の取り上げは、まとまりをもって出土した場合、あるいは床面(底面)出土の遺物は、その出土状況図を作成して取り上げた。

遺構外の遺物の取り上げについては、出土位置と標高を記録(ドット図を作成)して取り上げた場合、中地区単位で取り上げた場合、調査区単位で取り上げた場合がある。後二者の場合でも、「中央区」「東南部」などと、なるべく位置を特定するようにした。基本としたのは中地区単位の取り上げである。出土層位については、検出面一括がほとんどであるが、表土(耕作層、造成層を含む)および攪乱(自然営力によるものを含む)層と検出面との間に明確な遺物包含層が認められた場合は、その層名を付して取り上げた。なお、

IV層・4層以下に遺物は確認されなかった。

## 5 測量と写真

### (1) 測量

遺構図・土層図・遺物ドット図の作成は、調査研究員およびその指導の下に発掘補助員が行った。前記の測量基準杭を基準とする簡易遺り方測量を基本としたが、遺構平面図の一部に、業者委託の単点図を結線して作成した場合と空中写真測量により作成した場合がある。縮尺は1:20を基本とし、必要に応じて1:10図を作成した。委託遺構配置図は遺構個別図と業者委託の単点測量による地形図を合成した。

### (2) 写真

遺跡の景観や遺構の撮影にはモノクロネガフィルム（フジネオパン）とカラーリバーサルフィルム（フジクローム）を併用した。サイズは35mm（135）および6×7（120）で、カメラは各々ニコンFM2（35mm）およびペンタックス67（6×7）を使用した。35mm撮影はすべての対象に対して行い、6×7撮影は選択的に使用した。撮影は調査研究員が行い、現像と焼付けは業者委託とした。また、平成11～13・16年度には業者委託により空中写真撮影を実施した。

## 6 遺跡の公開

発掘調査では、縄文時代の人々が大明神原に残したさまざまな痕跡がみつかった。近隣住民をはじめと地元のの方々に、発掘された資料を生の状態で見ていただき、加えて発掘調査の様子を実見していただくため、平成11～13年度に、以下の日程で、遺跡の現地見学会を開催した。

平成11年度は10月31日（日）に実施し、縄文時代の陥し穴・縄文中期前葉の竪穴住居跡などの遺構や出土遺物を公開した。当センターとしては下伊那地域で初めて行った現地見学会であったが、地元の方の関心が高く、50名以上の見学者が集まった。

平成12年度は10月29日（日）に実施した。本年度は、縄文中期中葉末～後葉の集落跡とそこから出土した遺物を主な対象として現地を公開した。あいにく小雨の中での見学会となったが、50名以上の熱心な見学者が訪れた。

平成13年度は10月19日（金）に実施した。縄文中期中葉末～後葉の集落跡を対象としたが、調査三年目ということで、本年度は、むしろ発掘作業の実際の様子を実見していただくことに主眼を置いて、発掘現場を一般に公開した。平日にもかかわらず、近隣住民をはじめ40数名の見学者があった。

上記以外にも、発掘中に訪れる地元住民の方々等に常時対応し、遺跡の状況を説明している。

なお、平成14・15年度はトレンチ調査を行ったのみで遺構・遺物が検出されなかったため、また、16・17年度については、11～13年度と調査内容が重複するため、現地見学会は実施しなかった。

## 第3節 整理の方法

### 1 基礎整理作業

平成11（1999）年度～17（2005）年度の冬期間に、当該年度の調査で得られた遺物や記録類の基礎整理作業を行った。遺物の洗浄と出土箇所（遺構・地区）ごとの仕分け、写真の現像・焼付け・アルバム貼付（取納）・注記は基本的に発掘作業期間内に終了させており、基礎整理ではその補足と以下の作業を行った。

遺物は注記を行い、材質（種別）・取り上げ単位ごとの数量・大まかな器種を確認して台帳に登録した。

図面は調査研究員および発掘補助員が手測により作成した原因、測量業者作成の原因を台帳に登録するとともに、記載内容を点検・修正しながら、矛盾を調整し、記録漏れを補った。写真については台帳登録を行った。なお、モノクロフィルムはベタ焼きを貼付し、カラーリバーサルフィルムについては、35mmはマウントを付け、6×7はマウントを付けずに収納している。写真の注記は、35mm カラーリバーサルはマウントに、その他はアルバムに、遺跡記号・撮影日・地区・撮影内容・撮影方向を記している。

## 2 本格整理作業

報告書作成に向けて、記録類相互を調整して遺跡の所見を総合し、調査成果を公表できるように整備する作業を平成18(2006)年度～20年(2008)年度に実施した。

図面類は、基礎整理作業で作成した修正図をもとに、個別遺構図、土層図、遺構配置図(全体図)などを作成した。製図ペンでトレースを行ったものと、アドビイラストレーター10を用いてPC上でデジタルトレースしたものがある。

遺物は土器・土製品、石器・石製品に大別して整理作業を進めた。

土器は重量・破片数を計測して遺構・グリッド単位に接合を行った。遺構間の接合も試みたが接合する例はなかった。さらに分類を行い、図化するものを抽出した。図化する土器のなかで脆弱なものは実測前に接合補強と復元作業を行った。図化は手実測により、長野県埋蔵文化財センター規格の実測用紙に図化した。縮尺は原則として1:1である。破片資料を中心に拓本も多用した。トレースは製図ペンを用いて行った。図化した土器については観察表を作成した。

石器は分類と計測を行いながら、図化するものを抽出し、観察表を作成した。石器の実測は、表面・裏面・側面・断面を基本とし、必要に応じて上面・下面も図化した。実測・トレースの一部について、作業の迅速化を図るため、業者に委託した。長野県埋蔵文化財センターで行ったトレースはすべて製図ペンを用いて行ったが、業者委託したものはデジタルトレースである。

遺物の写真は業者委託により実施した。撮影にはカラーリバーサルフィルム(フジクローム)を使用した。サイズは、単体写真は35mm(135)、集合写真は6×7(120)を基本とした。図化した遺物すべての写真撮影は行っていない。

図化するために抽出した遺物には、遺跡ごと、材質ごとに通し番号(管理番号)を付け、図化・台帳登録など各種作業の管理に用いた。

## 3 資料の収納

遺物・実測図面・写真は、報告書刊行後、長野県教育委員会から飯田市教育委員会へ譲与の上、保管される予定である。

遺物は、材質・種別ごとに報告書掲載(図化)遺物と非掲載遺物に分けた上で、土器・土製品は出土遺構・地点別に、石器・石製品は器種別にテンバコに収納するとともに、遺物収納台帳に登録した。

実測図面は、手実測遺構図・委託測量図、遺物実測図別に通し番号(図面番号)を付けて図面収納台帳に登録し、図面ファイル等に収納した。

写真は、発掘作業で撮影した遺構関係写真と、整理作業で撮影した遺物写真とに分けて写真収納台帳に登録し、アルバム(ファイル)に収納した。

## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 遺跡の位置と地理的環境 (第1・3図)

川路大明神原遺跡は長野県飯田市南部、川路地籍に所在する。日本列島のほぼ中央、北緯 35 度 26 分 07 秒、東経 137 度 48 分 51 秒に位置し、天竜川右岸の段丘上に立地する。

諏訪湖に源を発する天竜川は、長野県南部を貫いて流れ下り、静岡県浜松市と磐田市の境を成して遠州灘に注ぐ。木曾山脈と伊那山地に挟まれた天竜川流域に南北に長く広がる盆地を伊那谷(伊那盆地)と呼ぶ。伊那谷は、南北の長さ約 60km、幅が 4~10kmほどあり、天竜川の氾濫原とその両側に形成された段丘、支流の扇状地から成る。幾段にも及ぶ複雑な段丘地形と、支流が段丘を深く刻んだ田切地形の発達は、伊那谷の地形上の特色となっている。伊那谷の南部、下伊那地域に属する松川町から飯田市にかけての部分は飯田盆地と称される。飯田盆地の南端は、飯田市南部にある天竜峡で、伊那谷の終点をなす。それより南方は山地が迫って平地は狭隘となる。山系と水系が複雑に入り組み、河川沿いの山間に狭い小盆地が点在する地形が三河・遠江にかけて広がっている。

伊那谷とその東西を画す伊那山地・木曾山脈の基盤となるのは、領家帯に属する花崗岩類、火砕岩類、変成岩類である。伊那山地と赤石山脈の間には中央構造線が走っており、中央構造線から東側は三波川帯、戸台構造帯、秩父帯、四万十帯に属する岩石類が基盤をなしている(下伊那地質誌編集委員会 1972)。秩父帯・四万十帯に産出する硬砂岩・緑色岩・チャートなどの堆積岩は、三峰川、小沢川の流れにより天竜川へと運ばれ、伊那谷地域において、旧石器時代から古墳時代に至るまで、石器石材として長く利用された。(飯田市教育委員会 2003a)

川路大明神原遺跡が所在する飯田市川路地区は、飯田市街地から南へ 8kmほどの郊外にあり、東は天竜川を挟んで龍江地区に対し、北は久米川を挟んで竜丘地区、南は弟川を挟んで三穂地区に接している。天竜川は竜丘地区時又を過ぎると川路・龍江両地区に広い氾濫原をつくり、そのなかを緩やかに南流して天竜峡の狭窄部にいたる。川路地区の地形は、東に天竜川に面した氾濫原があり、西側には標高 450~550mの丘陵が南北に伸びて三穂地区との境を限る。氾濫原と丘陵との間は数段にわたる段丘地形を成す。

最下段の段丘は、北から久保田・辻前・留々女・殿村・富岡・月の木の面で、天竜川の氾濫原からやや高まった標高 380m 前後を測る。下段は、花御所・今洞・身射山原・坊垣外・道上から大野・大畑に至る狭い平坦面で、現在、国道 151 号が通っている。標高 390~400m、天竜川河床との比高約 30m を測る。中段は、東原の面で、標高 410~415m、天竜川河床との比高約 50m を測る。上段は、琴原から藤ヶヶ峰・上平・祢宜屋平・初ノ免・藤塚原・大明神原へと続く。標高 420~440m、天竜川河床との比高 60~80m を測り、川路地区では最も連続の良い面である。最上段は中原の面で、所沢川を挟んで大明神原の南に位置する。標高 450~470m、天竜川河床との比高 90~110m を測る。これらの段丘は、北から相沢川、留々女沢川、南沢川、ねぎや沢川、観音沢川、大畑沢川、初沢川といった、西の丘陵から流れ出す小河川に開析されて、さらに細かい地形に分断されている。

川路大明神原遺跡は上段面の南端部に位置する大明神原に立地する。大明神原は川路地区の段丘面では最も広い平坦地であり、北を大畑沢川、南を初沢川に開析された台地状の地形を成す。この台地のほぼ中央に、所沢川の支流となる谷が南から挟み入し、台地を東西に分割している。西部は西方の丘陵裾から続く緩い傾斜地となり、天竜川寄りの東部は西部よりやや高まった地形となっている。



第3図 周辺道跡分布図

## 第2節 周辺遺跡と歴史的環境 (第3図、第3表)

飯倉道路の建設に伴う今回の発掘調査では、遺構の有無、遺物の多少など時期による違いはあるものの、旧石器時代から弥生時代に至る各時代の資料が得られた。ここでは、周辺に分布する遺跡を中心に、川路地区の歴史的環境について概観したい。なお、第3図、第3表とも424が川路大明神原遺跡である。

**旧石器時代** 伊那谷の旧石器時代の遺跡は調査例が少なく、実態が明らかになっているとは言い難い。そうしたなか、当センターが調査を実施した飯田市山本地区の竹佐中原遺跡は、旧石器時代の最古段階の遺跡として注目を集めている。発見された石器群は、日本列島に渡ってきた初期の段階の人類が残したものと位置付けられている。また、同じように最古段階に位置付けられている石子原遺跡も山本地区に所在する。山本地区を中心とした地域が、こうした旧石器時代の人々の生活の拠点となっていたことは間違いないだろう。

一方、伊那谷南部の他の遺跡では、旧石器時代の石器が単独で発見されている事例が多い。生活の痕跡を残さないまでも、食料獲得や石器石材入手のために、天竜川や川路地区を含めた周辺の段丘上に旧石器時代の人々が足を運んだことは否めない。本遺跡でも槍先形尖頭器と彫器が発見されている。川路地区では旧石器時代の石器を出土した唯一の遺跡となり、この地域が旧石器時代の人々の活動範囲の一角を占めていたことが推察される。

**縄文時代** 草創期や早期といった初期の段階の川路地区は、旧石器時代の様相と大きな変化はみられない。該期の遺物が確認されるのは開善寺境内遺跡(228)、殿村遺跡(412)と本遺跡の三遺跡しかない。いずれの遺跡も中小河川が天竜川に注ぎ込む地点に面した段丘上に位置し、生活の痕跡となる遺構等は発見されていない。竜丘地区に所在する開善寺境内遺跡は、久米川の左岸に位置する。殿村遺跡は川路地区最下段の段丘上で、留々女沢川右岸に位置する。本遺跡は上段の段丘上で、初沢川左岸に位置する。本遺跡では今回の調査で遺構がみつかったが、むしろ、生活の拠点は天竜川から離れた標高の高い地域にあったと考えられる。押型土器の立野式の標識遺跡である立野遺跡は伊賀良地区に位置する。立野式期の集落は座光寺地区の美女遺跡などもみつかっており、天竜川東岸では上久堅地区の北田遺跡や当センターが調査した鬼釜遺跡でも同時期の住居跡もしくは遺構がみつまっている。

前期になると、殿村遺跡、川路大明神原遺跡のほか、最下段の段丘上に位置する月の木遺跡(419)、下段の段丘上に位置する今洞遺跡(405)、や竜丘地区の上の坊遺跡(226)、龍江地区の龍江大平遺跡(509)で遺構・遺物が発見されている。生活の拠点が天竜川の最下段の段丘まで降りてきたことを物語る。月の木遺跡では前期前半の東海系の木筒式土器を伴う竪穴住居跡が検出されているが、川路地区で主体となる時期は前期後半から前期末である。かつて、宮沢恒之氏は「地域の特性に見合う文化内容の洞察」を標榜し、伊賀良地区の山口遺跡と今洞遺跡の資料を使い、該期の土器編年を組み立てた(宮沢1966)。各遺跡の調査で蓄積された資料群は、文化内容を洞察するに足る資料となっており、機は熟している。今後の研究に期待するところである。ともあれ、飯田市域に限られることではないが、在地の土器型式と北白川下層式や大歳山式等の併存及び影響関係は、関西地方との強い交流があったことを物語るものであり、川路地区も同様な様相が窺える。

中期になると、爆発的に遺跡数が増える。第3図に示した遺跡分布図のほとんどすべてが該期の遺跡として飯田市の遺跡地図に登録されている。生活の拠点・活動の範囲が大きく広がった証しである。竜丘地区に所在する城陸遺跡では竊穴式～籐内式併行期の集落跡が発掘調査された。出土土器は、在地の土器と共に八ヶ岳山麓・関東・東海・北陸・関西地方の土器やそれらの影響を受けた土器群で構成されており、

その様相は本遺跡と類似する。該期の広域にわたる濃密な地域間交流が想起される。

後期及び晩期になると、中期にみられた隆盛は遺跡数からも一気に衰える感がある。川路地区では、本遺跡で後期の遺構がみつまっているが、久保田遺跡で堀之内式・加曾利B式土器が、今洞遺跡で氷I式土器が出土している程度である。

弥生時代 濃尾平野で一旦足踏みした弥生文化の波は、天龍村満島南遺跡や旧南信濃村尾ノ島館遺跡等を経て伊那谷に至り、座光寺地区の石行遺跡や豊丘村の林里遺跡が形成される。遠賀川系土器が出土した林里遺跡は天竜川左岸の低位段丘上に立地し、中期前半には、同じ天竜川左岸に喬木村の阿島遺跡が、右岸には松尾地区の寺所遺跡がある。阿島遺跡は、中期前半土器型式の標識遺跡である。

川路地区では、殿村遺跡や井戸下遺跡で中期阿島式期の竪穴住居跡が調査されている。井戸下遺跡は、最下段段丘上の月の木遺跡の北西に隣接し、さらに低い位置にある。天竜川氾濫原に近接する微高地上に存在すると考えられ、阿島遺跡と立地が類似する。つづく中期後半の北原式期の遺構・遺物は発見されていない。後期になって、井戸下遺跡・東原遺跡・本遺跡で住居跡が、久保田遺跡で方形周溝墓が、花御所遺跡で遺物が見つまっている。井戸下遺跡では、中期と後期の文化層の間に間層があることが確認されており、中期後半はより高い段丘上に生活の拠点を移していたことが予想される。

いずれにせよ、伊那谷南部は、県下でも早い時期から弥生文化が定着した地域の一つとして数えられ、個性のある独特な伊那谷弥生文化が発展する基盤となった地域として位置付けられよう。

古墳時代以降 伊那谷南部の古墳分布は、天竜川の低位段丘面に多く築造され、川路・竜丘・松尾・座光寺地区を中心に密集する。川路地区では、久米川に面した花御所・久保田地蔵と、天竜川が狭窄部（天竜峽）に向かう月の木地籍に集中する。伊那谷南部は、北信地方の善光寺平南部と並んで、古墳の最も多い地域であり、川路地区もその一翼を担っている。川路地区の古墳時代の集落遺跡には、久保田遺跡・留々女遺跡・辻前遺跡・殿村遺跡・井戸下遺跡があり、井戸下遺跡における集落の消長は、対岸の龍江地区細新遺跡（505）と呼応するかのよう同じ変遷をたどっている。また、殿村遺跡では、「準構造船をかたどり人物が乗ると考えられる船形埴輪」と「棟持ち柱をもち華麗な装飾が施された家形埴輪」が集落内の竪穴から出土しており、遺物ともども注目を集めている。

川路地区の古代遺跡では、辻前遺跡で掘立柱建物跡・古瓦・銅碗等がみつかっており、寺院跡との関連が注意されているほか、久保田遺跡や留々女遺跡で集落がみつまっている。また、井戸下遺跡では水田跡もみつきり、古代史を探る上で、居住と生産および信仰といった面からのアプローチが可能になってきた。

川路地区の中世遺跡では、井戸下遺跡が注目されよう。堂宇的な小規模の四面庇建物跡を中心に、大型の掘立柱建物跡3〜4棟、さらに周辺に小建物跡や土坑が分布し、周囲は溝で画される。15世紀代を主体とする有力者の屋敷地とみられるが、有力者すなわち武士ではなく、豪農的な性格が強い有力者の居住地と推測されている。

川路地区では、天竜川の氾濫原に近接する数段の段丘上を、時代によって、または時代の中で人々が段丘を昇り降りしながら生活してきたことが窺える。発掘調査という手段によってはじめて、天竜川の水害を幾度となく被りながらも、営々として、この地を居住域や生産域、墓域として開発してきた先人に出会うことができ、彼ら彼女らは、広域的な人的交流を背景に、不断の生活力や行動力をもって生を全うしていったことに、現代の我々は学ぶことが多いのではなからうか。

第3表 周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	旧石器	時期										遺構確認○				備考		
			縄文					弥生					古墳	奈良	平安	中世		近代	不明
			草	早	前	中	後	中	後	前	後								
21	久米ヶ城跡																○		堀切・土塁・郭
26	伊豆木城跡																○		堀切・土塁・郭
27	夜明山衝跡																		中世・伝承
28	川路城山城跡																		中世・破壊
29	徳島城跡																		中世・伝承
41	龍江城山城跡																○		堀切・郭
42	鷲ヶ城跡																○		一部発掘調査済、堀切・切岸・郭
192	駄科権現堂				○														宮城遺跡として一部発掘調査済
193	安宅下																○		
196	長野原				○						○								
197	地蔵子									○									
207	内山										○		○						一部発掘調査済
208	宮下原				○						○								
209	久保尻										○								
210	前の原				○											○			一部発掘調査済
211	駒沢川北																		
212	小池										○		○						一部発掘調査済・構造改善実施済
213	安城垣外					○						○							
214	殿垣外											○							
215	大産											○							
216	小池下											○							
217	駒沢南					○													
218	待田										○	○	○						一部発掘調査済・構造改善実施済
219	塚原																		
220	ガンドウ洞																○		
221	島																○		
222	釜山下											○							
223	釜山下											○							
224	竜舌大塚																○		
225	西の森																		
226	上の坊				○	○													一部発掘調査済
227	開善寺裏																		
228	開善寺境内		○	○		○					○	○	○				○		上川路興寺・一部発掘調査済
229	高野尻											○							
294	牧山A					○													
295	牧山B					○													
347	久米上の平					○													
348	久米上の平南					○													
383	下瀬原					○													
384	野添					○													
385	本洞					○													
386	数田												○						
387	豊住																○		
390	伊豆木田中					○													
392	石原田					○							○						
393	島平																		
396	入道洞												○						高松古墳群
397	肥田					○													
398	フジガクボ																		
399	川路牧山																		
400	一本平																		
401	花御所												○						
402	井ノ下											○							
403	罾原					○						○							
404	明殿脇					○						○							
405	今洞					○						○							一部発掘調査済
406	久保田					○	○	○	○	○	○	○	○	○					一部発掘調査済
407	勝治ヶ峯					○													
408	御料山原					○											○		
409	坊垣外					○							○						
410	留々女										○	○	○	○					相沢川右岸を辻前遺跡、下流JR川路駅西側を留々女遺跡として発掘調査
410	辻前					○					○	○	○	○					相沢川右岸を辻前遺跡、下流JR川路駅西側を留々女遺跡として発掘調査



第3表 周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	旧石垣	時期						遺物確認○						備考		
			縄文			弥生			古墳		奈良		中世			近代	
			草	早	前	中	後	晩	中	後	前	後	奈良	平安		中世	近代
411	川路上平																一部発掘調査済
412	殿村		○		○			○	○	○					○		一部発掘調査済
413	弥重屋平					○								○			一部発掘調査済
414	道上					○					○						
415	富岡					○				○	○						富岡遺跡の南東側に井戸下遺跡が所在し、弥生中期・古墳中期の集落・中世の屋敷跡を発掘調査
416	初ノ免					○				○							
417	川路横塚外					○				○	○						
418	藤塚原					○											
419	月の木										○					○	
420	大畑山					○											
421	川路大野					○				○	○						
422	川路大畑					○				○	○			○	○		
423	東原														○		一部発掘調査済
424	川路大明神原	○	○	○	○	○	○	○	○								一部発掘調査済
425	川路大中原					○				○							一部発掘調査済
485	上の城									○					○		
486	龍江横山																
488	谷ヶ原																
489	福岡									○							
490	成田									○							
491	龍江城									○	○				○		一部発掘調査済
492	龍江阿高									○	○						一部発掘調査済
493	御亀																
494	定藏寺付近									○							
495	新地																
496	田中上									○	○						
497	田中下									○	○						
498	一本木										○						
499	川狩																
500	金治ヶ原									○						○	
501	羽入田原上																
502	羽入田原									○							
503	羽入田																
504	龍江石原									○							
505	橋新									○	○		○				
506	更生下					○				○	○						一部発掘調査済
507	大田下									○	○						
508	大門																
509	龍江大平					○					○			○			一部発掘調査済
510	鶴平					○											
511	声ノ口					○					○						
512	西ヶ賀志																
513	堰田																
514	堰田上																
519	井戸端													○			
520	岩塚外																
521	左邊																
522	和城																
523	八ノ倉										○						
524	千安柏原																
525	金野																
543	下村													○			
545	宮ノ平										○						
547	中原										○						
544	福沢										○						
7	上川路庚寺										○						布目瓦出土
22	東葉跡																近世
龍53	尾林1号葉跡															○	尾林葉跡群
龍54	尾林2号葉跡															○	尾林葉跡群
龍55	尾林3号葉跡															○	尾林葉跡群

### 第3章 遺跡と調査の概要

#### 第1節 遺跡の概観

##### 1 遺跡の範囲と地形（第4・5図）

川路大明神原遺跡は飯田市川路 5435 ほかに所在する。名勝天竜峡にほど近い、天竜川右岸に臨む段丘上に立地している。『飯田の遺跡』（飯田市教育委員会 1998a）によれば、南は初沢川の浸食により断ち切られた急崖、北は下位へ下る段丘崖～大畑沢川の浸食崖に画された、およそ、長さ 900m、北西部幅 530m、南東部幅 420m、面積 290,000m<sup>2</sup>の範囲が遺跡となっている。

遺跡のほぼ中央に、初沢川の支流にあたる谷ないし窪地が南から北へ挟み入り、これを境にして遺跡内の微地形は東西で大きく分かれる。西部は、西方の丘陵裾から延びる緩傾斜地となっている。北側と南側が尾根状の微高地を成し、両者の間に介在する沢状低地が遺跡中央の南北谷へ連なる。最高所にあたる西端の標高 460m、最低所の東端の標高 420m を測る。

東部は、西部の末端より高まった地形を成している。遺跡東端部に近い IV T18 グリッド辺りが最高所で、標高 436m、天竜川との比高 75m を測る。地形は、そこから南と北西の段丘縁に向かって緩やかに傾斜しており、最低所にあたる南端部の標高は 410m である。段丘縁には、幾つかの谷状地形が入り込んでいるが、なかでも、Y = 62,000 ラインあたりに対向するよう南北から挟み入る谷の規模が大きい。この二つの谷と遺跡中央の南北谷に挟まれた、幅 120m、長さ 500m ほどの南北に細長い範囲は、東部で最も平坦な部分である。後述する縄文時代中期の集落はこの部分に営まれていた。縄文中期集落跡と天竜川との比高約 70～73m、距離は約 350～400m である。

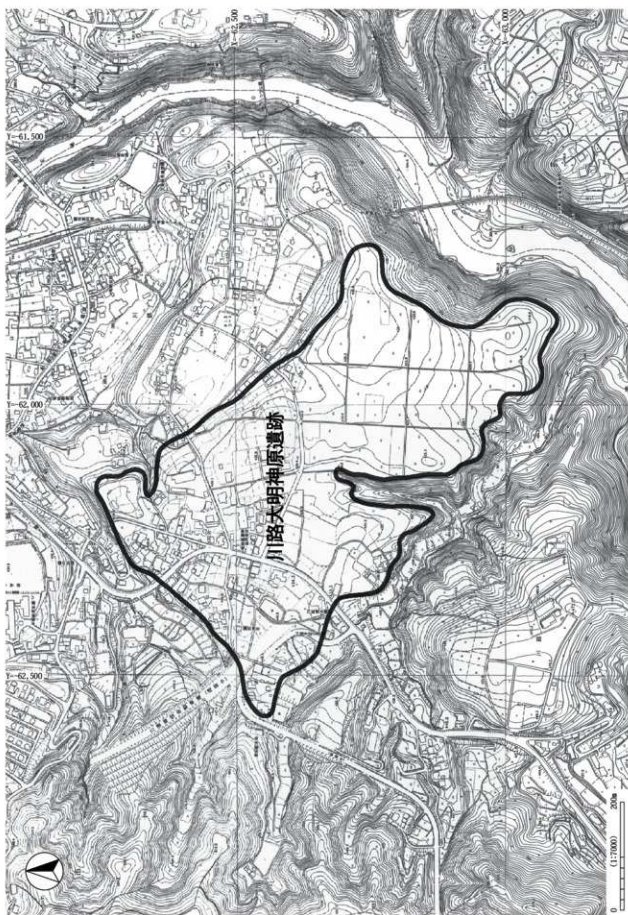
大明神原は、全体として台地状の地形を呈しているが、上述した微地形の相違から、中央の南北谷より西部を西部傾斜地、東部を東部台地と、以下呼称することにする。発掘調査前は、西部傾斜地の微高地は主に宅地と畑地であり、沢状低地部分は水田として利用されていた。東部台地はほとんどの部分が畑地ないし荒地であった。大明神原ではかつて広く桑園が営まれており、調査前にも桑林の一部が残っていた。

##### 2 これまでの発掘調査

川路大明神原遺跡は、大正 10 (1921) 年に鳥居龍藏・市村成人氏が川路の遺跡調査を行った頃から、縄文時代中期の遺跡として知られていた。昭和 19 (1944) 年、大明神原を東西に横断する道路の拡幅工事中、焼石とともに土器・石器が発見された。昭和 33 (1958) 年の大沢和夫氏による現地確認を経て、昭和 39 (1964) 年、大沢氏を担当者として、この地点の発掘調査が行われた。その結果、長径 6m、短径 5.5m ほどと推測される縄文時代中期後半の堅穴住居跡が明らかになり、炬を中心にして 6 基の柱穴をもつ構造が想定された（遮那 1965、佐藤 1991）。なお、報文（遮那 1965）には「本遺跡は、(中略)、飯田市川路大明神原 5437 番地札立場と呼ばれる地籍に位置する」とあり、この地点は飯橋道路調査 8c 区 (5437-1) の北側に隣接する箇所（現在は市道道路敷内）にあたる可能性が高い。

その後、平成 11 (1999) 年から平成 17 (2005) 年にかけて、長野県埋蔵文化財センターが飯橋道路の建設に先立って発掘調査を実施した。その内容は本書において詳述するところであるが、東部台地の西側縁辺部の平坦地に縄文時代中期の集落跡が広がっていること、遺跡内の広範囲にわたって縄文時代の陥穴が分布すること等が明らかになった。

また、平成 17・18 (2005・2006) 年に、飯橋道路調査地の北側で、飯田市教育委員会による発掘調査が行



第4図 遺跡と地形

われている。調査地点は東部台地の西縁部平坦地を主体とする以下の4箇所である。

宅地造成に先立つ川路 5501-1 番地周辺の調査では、平坦地上で縄文時代中期後葉の住居跡 10 軒・土坑等多数が確認された。一方、斜面部から西側の谷状低地部では遺構・遺物とも検出されなかった。なお、開発側との協議により、盛土造成がなされ遺構は保護された(飯田市教育委員会 2008b)。調査範囲は飯喬道路調査 19 区からおおよそ 30m～120m 北側の範囲である。

県道敷設に先立つ川路 5522-1・5537 番地の調査では、西側谷状低地およびその縁辺部の調査が行われたが、遺構・遺物とも確認されなかった(飯田市教育委員会 2008b)。調査地点は飯喬道路調査 19 区からおおよそ 300m 北方である。

携帯電話中継基地局鉄塔建設に先立つ川路 5244 番地の調査では、縄文時代中期の土坑 11 基、弥生時代後期の住居跡 1 軒が発掘された(飯田市教育委員会 2008a)。調査地点は、飯喬道路調査 10 区の、市道を挟んだ北側隣接地である。

個人住宅建設に先立つ川路 5236-10 番地の調査では、縄文時代後葉ないし後半の住居跡 4 軒、縄文時代中期後半と思われる土坑 24 基が発掘された(飯田市教育委員会 2008b)。18m × 7m ほどの小面積の調査区ながら、上記の遺構が密集した状態で検出されている。調査地点は飯喬道路調査 19 区のすぐ北側に隣接する。

## 第2節 発掘の概要と経過 (第5～7図)

川路大明神原遺跡にかかる飯喬道路建設予定地は、西部傾斜地の南部から東部台地の南側大半、遺跡範囲のおよそ半分を占めている。対象面積の広さや用地取得状況等から、発掘調査は平成11(1999)年から平成17(2005)年にかけて、7年にわたる長期の調査となった。1964年の大沢和夫氏らによる発掘調査はごく断片的なものであり、表探遺物など地表踏査で得られる資料は限られていて、既存情報は少なかった。遺跡内容や遺構・遺物の分布状況が不明確であったため、まずトレンチ調査を行い、面的調査が必要な範囲を決定する方針を立てた。7年間の調査で、面的調査範囲は、当時の未取得地や現道に区切られた1～2区を設定した。なお、東・西あるいはa・b・cに細分した調査区もある。

### 1 平成11～13年度 (第6図)

#### (1) 平成11年度

平成11年度は、西部傾斜地でトレンチ調査、東部台地でトレンチ調査と面的調査を行った。調査期間は4月22日～11月19日、調査地は飯田市川路5475ほか、調査面積は22,500㎡である。

飯喬道路建設に伴う発掘調査の初年度にあたり、まず、調査補助員の募集、器材の調達、関係諸機関や各業者との協議・調整、さらに、遺跡内の表面遺物採集を兼ねた踏査などの発掘準備を4月22日～5月21日に行った。

本年度は、東部台地の飯喬道路用地範囲のうち、用地取得がほぼ終了した南半部を調査対象としていたが、対象範囲のほぼ全域においてトレンチ調査を行った結果、濃密な遺構分布が確認される部分がある一方で、遺構・遺物が分布しない部分もあることが判った。当初予定より、面的調査を要する面積の減少が予想されたため、次年度以降の予定地にもトレンチを入れることとした。そして、準備段階の踏査と比較的多くの遺物が採集された東部台地西縁部の北側(8区部分)、さらに西部傾斜地の国道151号より東側の水田として利用されていた谷状低地部分でトレンチ調査を実施した。西縁部北側では予想通り遺構・遺物を検出したが、西部傾斜地の谷状低地部分では、堆積層上部に水田層数枚を確認したものの、現代から連続する水田層であり、明確な水田面は確認されず、遺物やその他の遺構も検出されなかった。

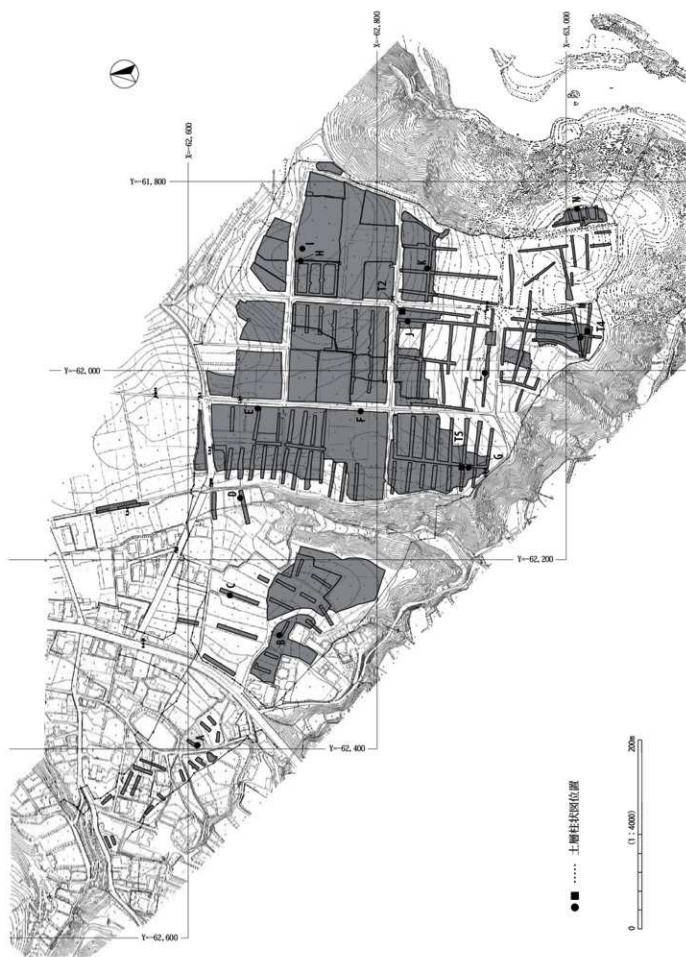
面的調査は、東部台地の用地南半部について、トレンチ調査で遺構分布が認められた地点を中心に面的に広げ、遺構の精査を行った。面的調査範囲については表土剥ぎを行った順に1～7区の呼称を与えた。東部台地西縁部の7区では陥し穴のほか、縄文時代中期前葉の竪穴住居跡3軒・竪穴状遺構1基と土坑多数が確認された。台地頂部付近の中央～東側にあたる1・2区では陥し穴・土坑・竪穴状遺構が、また、南縁部に位置する3・4区では集石土坑と土坑若干が散在的に分布する。地点により遺構の種類や分布状況に差異があることが明らかになった。

#### (2) 平成12年度

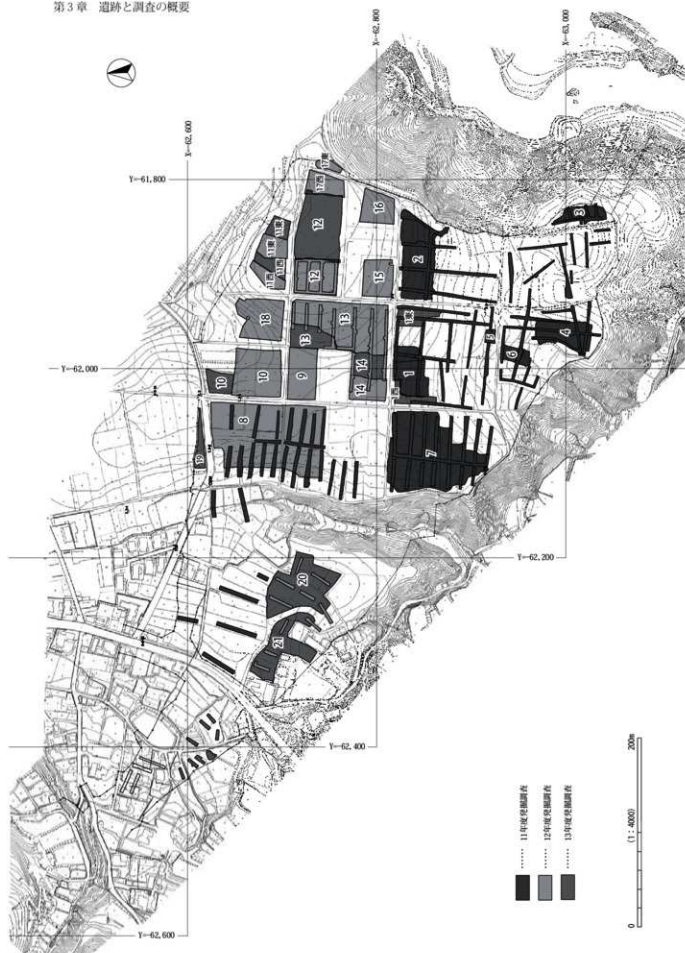
平成12年度は、西部傾斜地でトレンチ調査、東部台地でトレンチ調査と面的調査を行った。調査期間は4月17日～12月23日、調査地は飯田市川路5435ほか、調査面積は25,940㎡である。

西部傾斜地では、南部の尾根状微高地の頂部から斜面部にかけてトレンチ調査を行った。その結果、西部(21区)で竪穴状遺構1基・土坑、東部(20区)で竪穴状遺構1基・土坑が確認された。竪穴状遺構はともに、時期は明確でないものの、方形基調のプランと想定される形状を示していた。

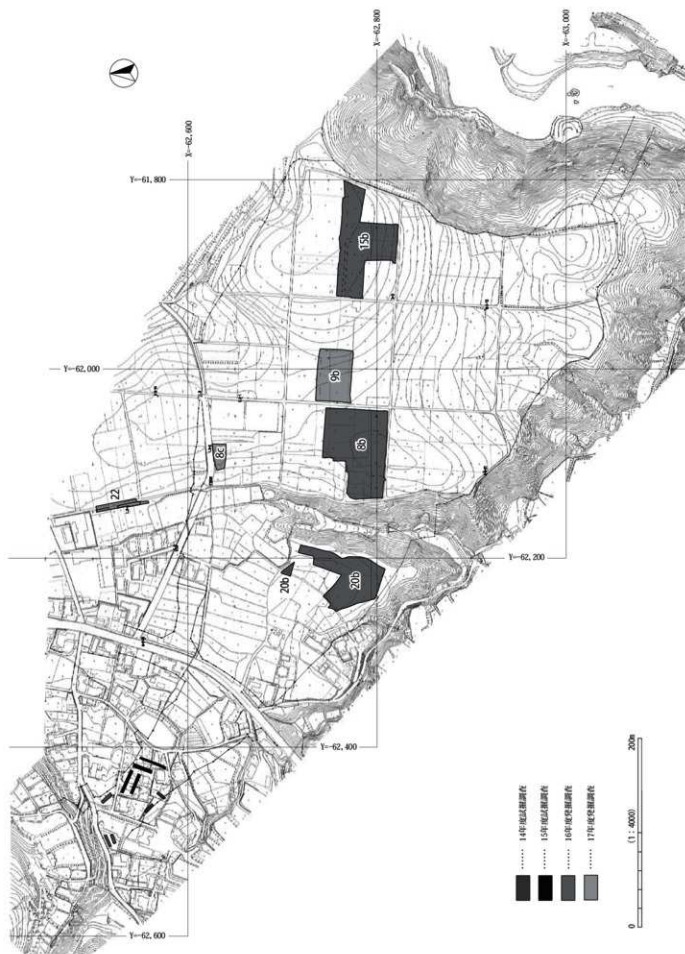
東部台地では、昨年度のトレンチ調査で濃密な遺構分布が確認されていた西縁部(8区)については当初



第 5 図 調査範囲図



第6図 年度別調査範囲図(1)



第7図 年度別調査範囲図(2)



から面的調査の対象とした。その他の部分についても、トレンチ調査を行った結果、広い範囲で遺構分布が確認されたため、トレンチ設定域の大部分で面的調査を実施することとした。

面的調査範囲は8～18区を設定した。11区・17区についてはそれぞれ東西二細分したため、合計13箇所の調査区となる。西緑部にあたる8区では、縄文時代中期前葉～後葉の竪穴住居跡27軒と土坑多数、および陥し穴が確認された。昨年度に調査した7区の状況とあわせ、東部台地西緑部が長期にわたり居住域として選定されたことが明確になった。一方、7区とは異なって、遺構の大多数が中葉末～後葉であるという状況も把握された。東部台地中央から東部に位置する他の調査区では、18区南東部で確認した縄文時代の住居跡1軒を除いて、検出された遺構は土坑と陥し穴であり、居住域としての性格が明確な西緑部とは異なる様相が捉えられた。

### (3) 平成13年度

平成13年度は、西部傾斜地で面的調査・トレンチ調査、東部台地で面的調査を行った。調査は4月23日に開始し、11月16日～12月18日の山本地区調査のための中断を経て、12月21日に終了した。調査地は飯田市川路5435ほか、調査面積は14,110㎡である。

西部傾斜地の面的調査は、南部の尾根状微高地にあたる20区・21区について行った。東寄りの20区では、縄文時代の方形竪穴状遺構1基のほか、土坑、陥し穴が確認された。特に、東部台地にはごく少ない縄文時代後期の土坑が集中して分布することが特徴的である。西寄りの21区では、方形竪穴状遺構2基のほか、土坑、多数の小形ピットが確認された。遺構の時期は総じて不明確であるが、覆土の線相から近現代にごく近いと考えられるものであった。国道151号より西側では、21区から続く尾根状微高地でトレンチ調査を行ったが、遺構・遺物は確認されなかった。

東部台地の用地北半部は、これまでの調査によりほぼ全域に縄文時代の遺構が分布することがわかってきた。本年度はトレンチ調査を実施せず、当初からの面的調査を行う計画を立てた。ほとんどの調査区は既存調査区を拡張しないしその間隙を埋めるかたちでの設定となり、1区拡張部(東・西)・10～14区および19区を発掘した。既存調査区に接する場合はそのいずれかの地区番号を引き継いでいる。東部台地西緑部の用地北端に位置する19区は、狭小な調査区ではあるが、縄文時代中期前葉～後葉の竪穴住居跡8軒等の遺構が濃密に分布し、西緑部の縄文中期集落跡が飯橋道路用地の北側にさらに広がる状況が明らかとなった。前述した飯田市教育委員会の調査でそれが確認されている。東部台地中央から東部に位置する他の調査区では総体的に昨年度の調査結果をトレースする状況であったが、12区では縄文時代の竪穴住居跡1軒が確認されるとともに、付属坑をもつ土坑の存在が目立った。なお、10・11・12区において、遺構調査終了後に、重機により、IVa層(地山ローム)のトレンチ調査を行ったが、遺物は検出されなかった。

## 2 平成14・15年度(第7図)

用地取得等の関係から、平成14年度・15年度は面的調査を実施せず、国道151号より西側の部分で、主にトレンチ調査を行った。

平成14年度の調査は平成15年1月23日および2月7日に実施した。1月23日の調査地は川路5613-4ほかの宅地部分である。遺跡の西端部に近く、西部傾斜地南側の尾根状微高地が北側の谷状低地へと移行する斜面部にあたり、昨年度トレンチ調査範囲の北西に隣接する地点である。対象面積は700㎡、トレンチ掘削面積は80㎡である。現地表(宅地盛土面)下約80cmの、基盤と思われる橙褐色土(4層対応)まで掘り下げたが、遺構・遺物とも検出されなかった。2月7日は川路5754-1ほかの畑地550㎡について工事立会を行った。西部傾斜地南側の尾根状微高地が南側の谷へと下る斜面部にあたり、昨年度トレンチ調

査範囲の西に隣接する地点である。遺構はもちろん遺物も全く確認されなかった。

平成15年度は、7月14日～17日に、川路5613-18ほかの宅地部分1,500㎡を対象としてトレンチ調査を行った。トレンチ掘削面積は260㎡である。調査地は、平成14年度の1月23日調査地点の北側に隣接する部分で、谷状低地部から北側微高地南斜面にあたる。地表下40cm（微高地）～150cm（低地部）の基盤と思われる明黄褐色～にぶい黄褐色土（4層対応）まで掘り下げたが、遺構・遺物はまったく確認されなかった。

### 3 平成16・17年度（第7図）

#### (1) 平成16年度

平成16年度は、西部傾斜地で面的調査・トレンチ調査、東部台地で面的調査を行った。調査期間は4月23～8月25日、調査地は飯田市川路5450-6ほか、調査面積は15,100㎡である。

西部傾斜地の面的調査は、南部の尾根状微高地にあたる20b区について行い、土坑、陥し穴を確認した。西部傾斜地では、陥し穴は、東端部に分布が限定され、かつ縁辺部を主体に営まれている。

トレンチ調査は遺跡の西端部で実施した。地形的には微高地部分にあたるが、遺構・遺物とも確認されなかった。本年度で西部傾斜地の発掘は終了したが、国道151号以西の飯商道路用地内については、遺構・遺物が認められず、生活の痕跡はこの範囲に及んでいないと考えられる。

東部台地の面的調査は、8b区および15b区を発掘した。西緑部の8b区では、北の8区や南の7区に比べて遺構の分布密度は希薄であるが、縄文時代の竪穴住居跡4軒・竪穴遺構1基と土坑、陥し穴が検出された。住居跡の時期は、縄文中期初頭2軒・前葉1軒・中葉末～後葉初1軒であり、西緑部における縄文集落の形成が中期初頭まで遡ることが確定した。東端付近にあたる15b区は、平成12年度に調査した12・15～17区と同様な状況であったが、本地区の調査により、東部台地東端部の台地最高所付近の直径100mほどが陥し穴分布の空白域であることが明確になった。

#### (2) 平成17年度

平成17年度は、最後に残った東部台地の残存部分である8c区・9b区の二箇所を面的に調査したほか、市道48号線の改修部分のトレンチ調査・面的調査（22区）を実施した。調査期間は8月18～12月2日、調査地は飯田市川路5430-1ほか、調査面積は2,600㎡である。

8c区は西緑部に位置する。小面積の調査区ながら、縄文時代中期中葉末～後葉の竪穴住居跡2軒・竪穴遺構1基と土坑のほか、本遺跡では初見となる弥生時代後期の竪穴住居跡1軒を調査した。中央部に位置する9b区では、住居跡は確認されず、陥し穴と土坑が散在的に検出された。

市道48号線は、飯商道路本体工事部分の北側、東部台地西緑部と西側の谷状低地（窪地）の境を南北に走っており、飯商道路の建設に伴って拡幅・改良される。現道西側の畑地部分にトレンチを入れたところ、縄文時代の遺構と遺物が検出されたため、面的に広げて精査することとし、22区を設定した。遺構・遺物の分布が現道下に及ぶ形勢を示していたため、所定の手続きをふみ、48号線を一時通行止めにして発掘を行った。その結果、縄文時代中期の土坑や遺物が検出された。

### 第3節 層序 (第5・8～10図)

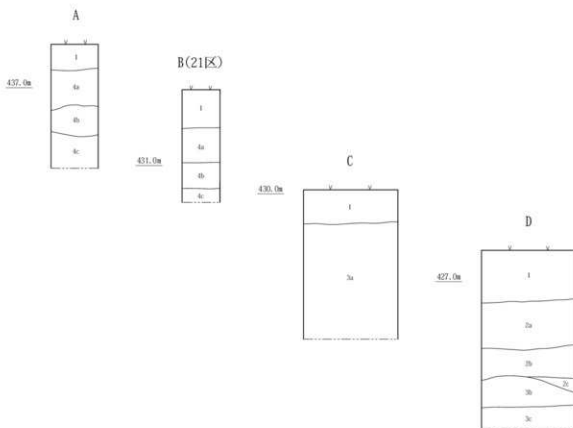
層序は平成11・12年度に行ったトレンチ調査での土層観察により概略が把握された。その後の調査の進行に伴う新たな観察結果を加え、本格整理作業時に層序を確定した。遺跡中央を南北に伸びる谷状地形を境に、西部傾斜地と東部台地では対応する土層が確認されなかったため、遺跡全体を通した基本層序の設定は困難であるが、西部、東部それぞれでは下記のように整理される。以下、西部と東部に分けて層序を記述する。両者を区別するために、西部傾斜地の土層番号にはアラビア数字を用い、東部台地の土層番号にはローマ数字を用いる。

#### 西部傾斜地 (第8図)

- 1層：調査範囲全体の表土（耕作土、造成土、攪乱を含む）を一括する。
- 2層：遺跡中央の南北谷を埋積する層で、砂を含む灰色系粘土と泥炭質土の互層。3層を切る凹部（流路部分と思われる）に堆積する。以下のように細分される。
  - 2 a：灰黄褐色（10YR5/2）～灰白色（10YR7/1）粘土。粗砂が混じる。
  - 2 b：黒褐色土（10YR3/1）。泥炭質。粗砂が混じる。下部にはにぶい黄褐色（10YR7/3）粘土ブロックの層状堆積が数枚含まれる。
  - 2 c：褐灰色（10YR4/1）粘土。粗砂を多く含む。
- 3層：南北の微高地間に介在する沢状低地部分に堆積する粘土・砂・砂礫層。以下のように細分される。
  - 3 a：粗砂をほとんど含まずしまりのある粘土・粗砂を多く含む粘土・細砂～粗砂が複雑で不規則な互層を成す。色調は灰白色～明オリーブ灰色（5GY8/1～7/1）が基本。4層より新しい。
  - 3 b：灰白色（5Y7/1）砂。4層より新しいと推測される。
  - 3 c：砂礫。礫は風化していない。4層より新しいと推測される。
- 4層：南側の微高地部分を形成するシルト・粘土・砂・砂礫層。扇状地堆積物と考えられ、3層より古い堆積層と推測される。以下のように細分される。
  - 4 a：明褐色土（7.5YR5/6～5/7）。シルト質。白色岩片・粗砂が混じる。しまりあり。20区・21区の遺構は本層上面の検出となる。
  - 4 b：灰黄褐色～明黄褐色土（10YR6/2～6/6）。シルト質。白色岩片・粗砂が混じり、ところによりそれらの多い部分が互層状となる。ややしまりあり。
  - 4 c：灰黄褐色～にぶい黄褐色（10YR6/2～5/3）砂・シルト。しまりあり。基調は砂で、粗砂主体部分・細砂主体部分・シルトが不規則な互層状をなす。山寄りの国道151号西側部分では、東側に比べて砂粒が粗くなる傾向があり、A断面では礫も多く認められた。

#### 東部台地 (第9図)

- I層：調査範囲全体の表土（耕作土、造成土、攪乱を含む）を一括する。
- II層：東部台地上の窪地および谷状部を埋積する層。灰黄褐色～褐色土（II a・II c）と黒褐色～暗褐色土（II b・II d）とに大別される。
  - II a：褐色土（7.5YR3.5/5）。しまりなし、やや粘性あり。8b・9b区のII b層直上に存在する。8b・9b区の発掘段階ではII層と呼称した。
  - II b：黒褐色～暗褐色土（10YR2/3～3/3）。しまりなし、炭化物粒が混じる。8区南端部から8b区北



第8図 土層柱状図 (1) (1:40)

東部・9b区西部を経て14区西部に延びる僅かに窪んだ地形内に堆積している。この窪地は、Y=-62,000ラインあたりに南から挟入する谷状部から、西縁部頂部を横断するように延びている。8b区・9b区では下部に縄文時代中期の遺物包含が認められる。8b・9b区の発掘段階ではⅢ層と呼称し、遺物注記にはⅢ層を用いた。

Ⅱc：灰黄褐色～褐色土（10YR5/2～4/6）。しまり良好で、粘性が強い場合と弱い場合がある。ローム粒子を含み、ところによりロームが基調となる。台地を浸食する谷の内部に堆積している。L断面ではⅡdと互層となる様相が顕著である。

Ⅱd：暗褐色～黒色土（10YR3/3～1.7/1）。粘性は強いが、しまり良好の場合と不良の場合がある。台地を浸食する谷の内部に堆積する。L断面ではⅡcと互層となる様相が顕著である。

Ⅲ層：Ⅳ層直上にある暗褐色土で、ローム質のⅣ層が土壌化したと考えられる。台地最高所の17区・12区・11区・13区北東部から18区の谷状部にかけて認められる。他の部分ではみられない。本層分布範囲では、遺構は本来、本層上面で検出されるはずであるが、表土除去の際に剥ぎ取ってしまった部分が多々あり、確実に本層を掘り込む遺構を確認した例はない。

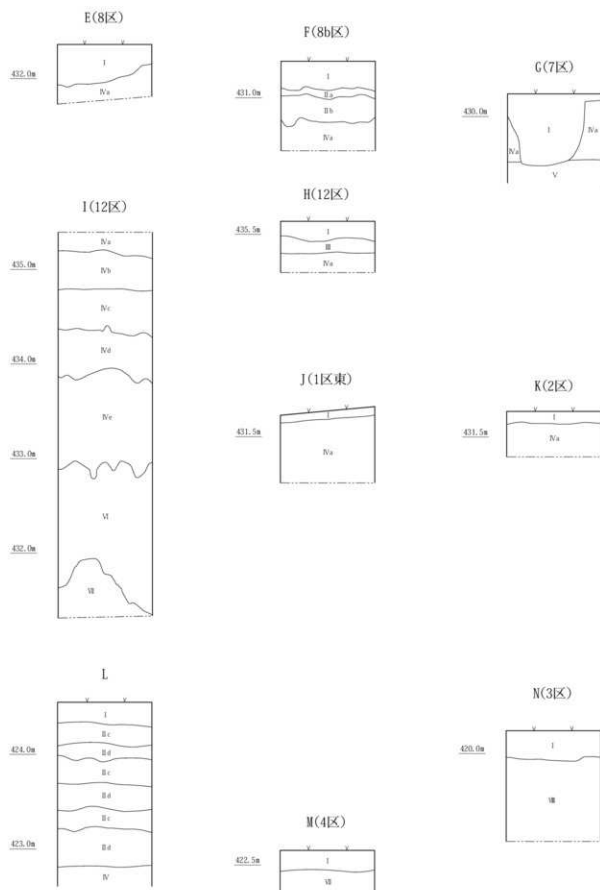
Ⅳ層：東部台地の基盤最上部となるローム質の層。以下のように細分される。

Ⅳa：明黄褐色土（10YR～2.5Y6/5～6）。ローム質。一般にしまりに欠ける。ところにより、やや赤みを帯びて橙色となり、また顕著な酸化鉄濃集のため硬くしまる部分がある。東南部を除いて東部台地のほぼ全域で認められる。遺構のほとんどは本層上面で検出した。

Ⅳb：にぶい黄色～にぶい黄褐色土（2.5Y6/4～10YR6/4）。ローム質。ややしまりあるものの、Ⅳaに似ており、同一層の部分的変化と捉えることもできよう。I断面のみで確認。

Ⅳc：にぶい黄色土（2.5Y6/4～6/5）。ローム質。ややしまりがある。I断面のみで確認。

第3章 遺跡と調査の概要



第9図 土層柱状図 (2) (1:40)

IVd: IVe 層土とV層土がブロック的に混じる。I断面のみで確認。

IVe: 明黄褐色土 (2.5Y7/5)。ローム質。しまりがあって緻密。下部にはVI層に多く含まれる橙色ブロックが僅かにみられる。I断面のみで確認。

V層: にぶい黄褐色～オリーブ黄色砂・砂質土 (2.5Y6/3～5Y6/3)。ややしまりがあるが、もろい。7区南端部のほか、8区北西部の斜面下部 (標高429.6m)、2区南端から約54m南の地点 (標高427m) 等でIVa層直下に認められる。VI層と一連の層と考えられる。

VI層: にぶい黄褐色 (10YR5.5/4) の砂混じりシルトの基調に7.5YR6/8 橙色ブロック (10～30mmが主体) が多量に混じる。白色岩片も全体的に散在。橙色ブロックが多い部分と少ない部分が交互に重なる様相を示している。I断面で確認。

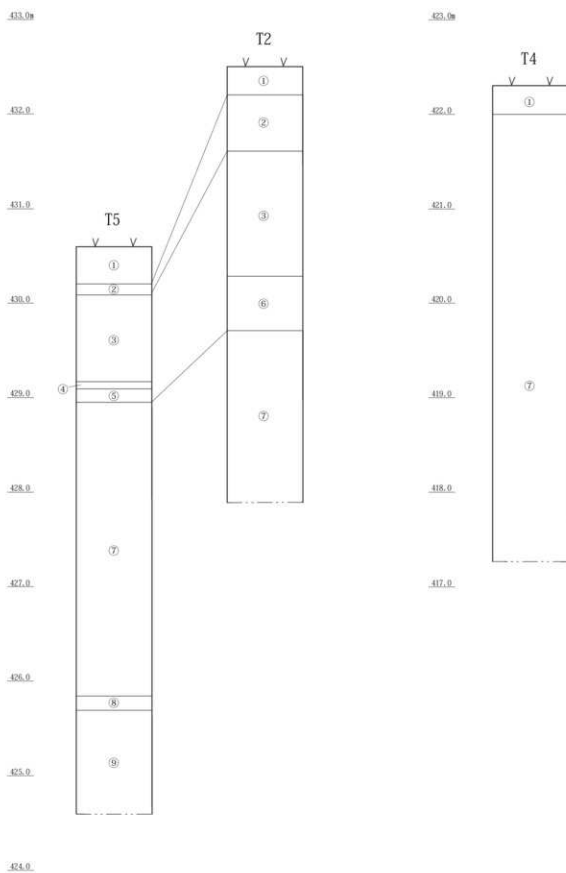
VII層: 灰白色粘土 (7.5YR8/2～10YR8/2)。直上に堆積するVI層との境に黒色物質が薄い層状に挟在している。I断面で確認したが、後述するように東部台地全域に存在すると考えられる。4区の遺構は本層上面の検出となる。

VIII層: 浅黄色～にぶい黄褐色粘土 (2.5Y7/4～6/4)。砂を含む。下部は淡い色調でしまりが硬い。上部は橙色を帯びてしまりも減ずるが、漸移的に変化し、分層はできない。3区(N)で確認。VII層と一連の粘土層と考えられる。3区の遺構は本層上面で検出した。

平成11(1999)年度の発掘終了に伴い、松島信幸・寺平宏氏により、大明神原の段丘表層堆積物の調査が行われた。東部台地南半部を主体に6箇所のトレンチを設けて、土層を観察・記録し、試料採取・分析を行っている。調査結果は松島・寺平氏により報告された(松島・寺平2000)。第10図は、その報文所載の主要トレンチT2・4・5層序説明図(図3)をもとに作成したものである。元図を単純化して層序を①～⑧層にまとめ、標高と復元した表土層を加えたが、元報告の論旨を歪めないように配慮したつもりである。以下に各層の特徴を簡潔に記す。なお、T4では、①・⑦層のみが確認されている。

- ①層: 表土。T2では鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah)を含む。
- ②層: 褐色土。T5では御岳第1軽石(On-Pm1)を含む。T2では始良丹沢火山灰(AT)を含む。
- ③層: 灰褐色～褐色土・砂。上面は凹凸をなす。粗粒(5～10mm)のOn-Pm1を含む。On-Pm1は、粒径からみて、天竜川上流から流れてきて再堆積したもの。T5では最下部にOn-Pm1・白色長石岩片を多く含む層があり、その上は斜層理が顕著である。T2では上部が赤色風化しており、下部はオレンジ色大粒On-Pm1が混入。
- ④層: 灰色粘土。On-Pm1を含まない。T2には存在しない。
- ⑤層: 黄褐色軽石層。細粒(4～5mm以下)On-Pm1の水中堆積。単層として成層している。軽石は磨耗しておらず、ほぼ現地性の降下軽石であろう。T2には存在しない。
- ⑥層: 砂・シルト・粘土の逆級化互層。On-Pm1を含まない。T5には存在しない。
- ⑦層: 青灰色～青緑色粘土。無層理。T5では、直上の⑤層との境界は、腐食質黒色有機物を挟み、凹凸を呈し、小規模の時間間隙がある。T4では、5m以上の層厚があり、上部30～40cmが赤褐色風化している。
- ⑧層: 黄褐色砂。天竜川の川砂と同じ砂。
- ⑨層: 礫層。褐色風化が目立つ。礫種は花崗岩・ホルンフェルス・砂岩・粘板岩・チャート(赤チャートあり)・緑色岩など。花崗岩礫の大半はくさり、砂岩の周りには風化殻が発達している。礫種と古流向(S10°W)から天竜川の河床礫。T2・T4では未確認。

第3章 遺跡と調査の概要



第10図 土層柱状図 (3) (1:40)

東部台地のE～N地点等で認識されたIV～VIII層と、T2・4・5の②層以下を対比すると、IV層が②層、V・VI層が③層、VII・VIII層が⑦層にそれぞれ対応することが理解される。

IV層は東部台地最上部を形成するローム質の層である。細分したIV a層は東南縁部を除いて東部台地のほぼ全域にみられる。IV b～IV e層は台地最高所の12区に開けた深掘坑Iのみで認識される層で、他の箇所では確認していない。Gのほか、8区北西部の斜面下部、2区南端から約54m南の地点等で、V層の直上にIV a層を確認しているが、これらの地点はいずれもIより低い位置にある。このことから、Iより地形的に下る部分には、IV b～IV e層が定着しなかったか、あるいはIV a層形成以前にIV b～IV e層が流失したことを推測しておきたい。逆にIV aが消失したことによりIV b以下が変質して、IV aと区別がつかない状態になった可能性も否定できないかもしれないが、ここでは上記のように考えておく。

V・VI層はOn-Pm1を多く含む砂基調層で、東南縁部を除く東部台地全域に存在すると思われる。松島・寺平氏は、On-Pm1が伊那谷上流部を厚く覆った後の火山灰土石流による洪水堆積物との見解を示す。

VII層は層厚3m～5m以上の厚い粘土層である。東部台地全域に広がっていると捉えてよいだろう。T4が位置する4区では表土直下がVII層となっており、IV層～VI層が存在しない。谷を挟んで4区の東にある舌状部分、さらにその東に隣接する3区でも表土直下に粘土層が露出する。3区の粘土層をVIII層としたが、VII層と一連の粘土層であることは確実であろう。台地東南縁部では、VII・VIII層の上部以上の地層が浸食により消失した可能性が高い。この厚い粘土層について、松島・寺平氏は、伊那谷上流部に広く存在していた水期の粘土質堆積物が、地球規模の気候温暖化（間氷期への移行）に伴う降雨量の増加による大規模な洪水に流され、天竜峡狭窄部に集中して広い泥湖が出現したとの仮説を立てている。

VII層の下には天竜川の礫層が堆積している（⑨層）。

地層の形成年代については、T5でVII層（⑦層）の直上にOn-Pm1の水中降下層（⑤層）が堆積しているため、VIII層の堆積はOn-Pm1の噴出年代より古く、VI層（および④層）以上の堆積はそれより新しい。On-Pm1の年代は、一般に約10万年前（町田・新井2003）とされているが、松島・寺平氏はそれより遡る可能性を指摘する（松島・寺平1999では12万年前と推定）。また、T2の②層にATの含有が認められることから、IV a層の形成は、ATの噴出年代2.6万～2.9万年前（町田・新井2003）とあまり隔たらない可能性もあろう。

西部傾斜地で確認した土層は東部台地の様相とは大きく異なる。沢状低地部分には谷理めの黒褐色土や粘土・砂・砂礫が堆積している（3層）。微高地部分の土層は、砂や岩片が混じるシルト・砂・礫の不規則な堆積が互層状に繰り返されている（4層）。西部傾斜地では深掘トレンチの掘削を実施していないので、下位の土層状況を掴んでいない。しかし、松島・寺平氏によれば、西部傾斜地は、東部台地より新しく形成された新期扇状地である。観察された4層の様相も扇状地性の堆積物であることを示すと考えられる。



## 第4章 遺構と遺物

### 第1節 概観 (第11図～35図、付図1・2)

飯倉道路の建設に伴う今回の発掘調査では、旧石器時代の遺物、縄文時代および弥生時代の遺構・遺物が確認された。

旧石器時代の遺物は、整理作業の過程で、黒曜石製槍先形尖頭器や黒曜石の石刃、珪質凝灰岩の剥片等を確認した。いずれも検出面や縄文時代の遺構覆土から出土した断片的な資料である。これら旧石器時代の資料については、別書(長野県埋蔵文化財センター2010)において報告をおこなう。

縄文時代の遺構は、遺跡内の広い範囲に及んでいるが、時期や種類により分布傾向に違いがみられる。

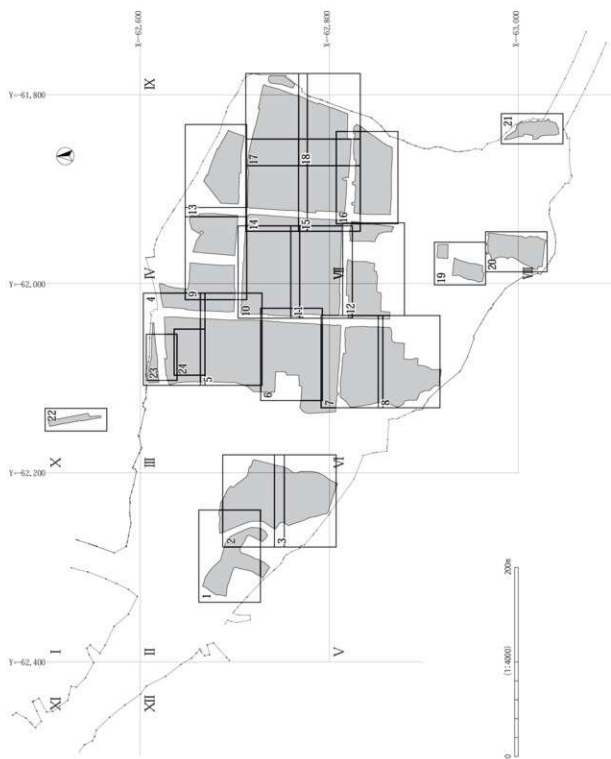
縄文時代の遺構は、遺跡内の広い範囲に及んでいるが、時期や種類により分布傾向に違いがみられる。早期および前期の遺構については、不明瞭なところもあるものの、西部傾斜地の20b区で検出された被熱土坑1基は早期前葉の可能性があり、また、東部台地の東部にあたる11・12・15b区では、前期末葉に属すると思われる土坑6基が検出されている。中期は東部台地西縁部を中核として集落が営まれた時期である。該期に属すると考えられる竪穴住居跡46軒・竪穴状遺構4基および多数の土坑が検出された。竪穴住居跡は西縁部の7・8b・8c・19区に集中しており、初頭～前葉と中葉末～後葉の二時期に大きく分かれる。土坑もこの二時期のどちらかに属するものがほとんどを占めると考えられるが、初頭～前葉の土坑は、東部台地の西縁部から中央部・東部に広く展開する。中葉末～後葉の土坑は西縁部にほぼ限られ、該期住居跡の分布範囲に概ね重なる。中期中葉は8・19区で土坑が5基検出された。後期の遺構は、初頭に属する土坑が8区で1基、西部傾斜地の20・20b区で10基認められる。

詳細時期を特定し難い縄文時代の遺構として、被熱・集石土坑と陥し穴がある。被熱土坑・集石土坑は、3・4区・8～7区・20b区等の台地縁部に主に分布している。陥し穴126基は、東部台地から西部傾斜地東端部にかけて広く分布し、東部台地では中期の住居跡・土坑群の分布範囲と重複する。出土した僅かな土器や放射性炭素年代測定結果、遺構の切り合い関係等から推測して、陥し穴は集落存続期の中期より古い一群と新しい一群があるとみられる。

縄文時代の土器は、早期前葉、前期前葉・後葉・末葉、中期初頭～後葉、後期初頭・前葉が認められる。主体をなすのは中期初頭～前葉および中期中葉末～後葉である。後期初頭は一定量が認められるものの、その他の時期は少ない。石器は、石鏃、石錐、石匙、削器、搔器状石器、楔形石器、打製石斧、横刃型石器、刃器、鏝器、磨製石斧、石核、原石、磨石、凹石、敲石、石錘、砥石、石皿、台石等のほか多数の剥片・破片が出土している。剥片・破片を除けば、打製石斧と横刃型石器が圧倒的に多く、次いで石錘・敲石・磨石・石鏃・石核・磨製石斧が多い。石器の時期は、中期初頭～前葉および中期中葉末～後葉の遺構から出土したものが多くことから、その時期が主体と思われる。なお、集落内で磨製石斧の製作が行われていたことを示す資料が確認された。

弥生時代は、8c区で、後期に属する竪穴住居跡1軒を検出した。

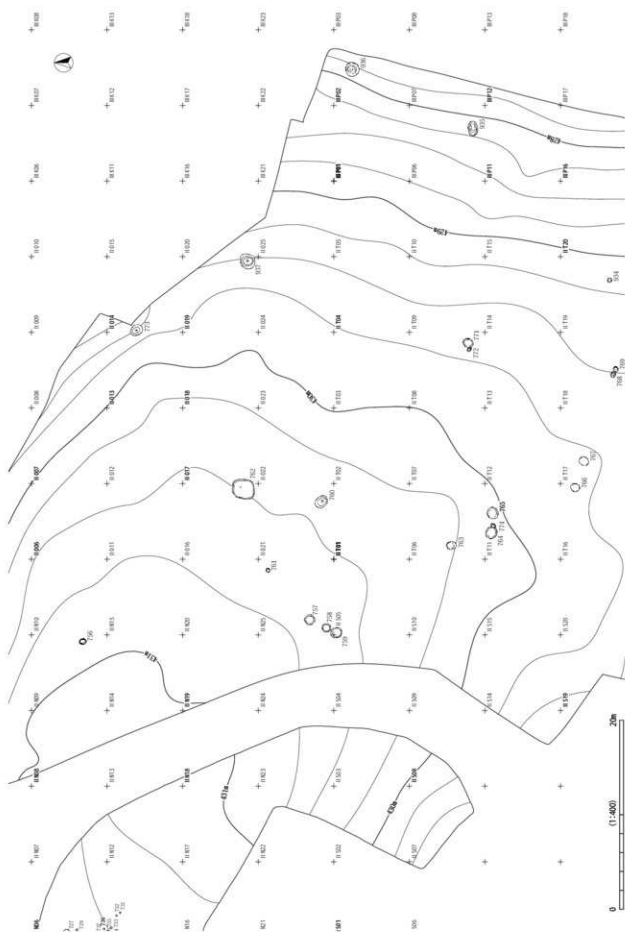
上記の遺構のほか、東部台地東南縁部に位置する4区で掘立柱建物跡、6区で自然流路跡が捉えられ、西部傾斜地の21区で竪穴状遺構を検出した。いずれも時期は明確でない。なお、21区においては、40cm前後以下の小形を主体とした土坑が数多く検出されたが、覆土の様相から、近現代にごく近いものと考えられる。



第 11 図 遺構配置図 割付図

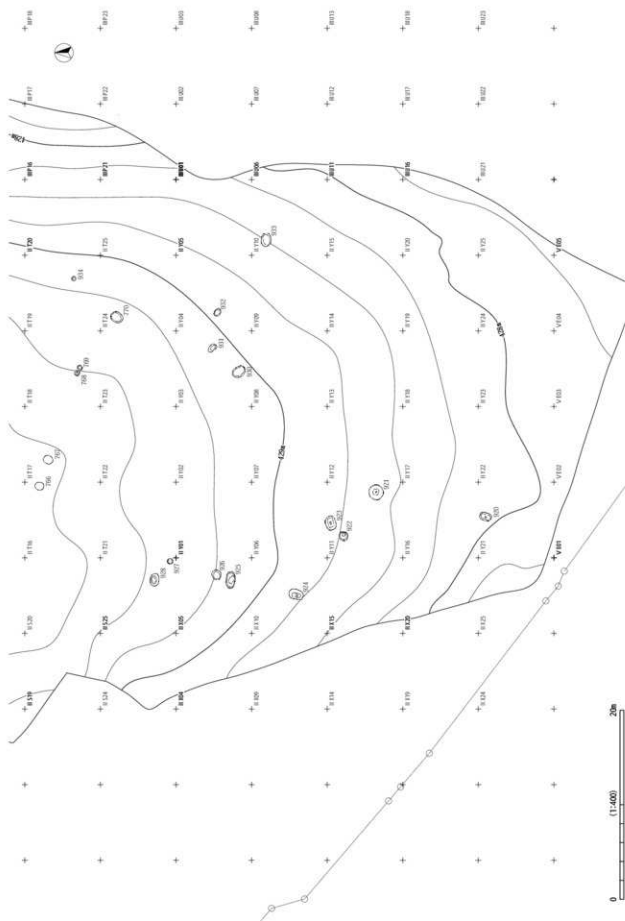


第12図 遺構配置図(1)

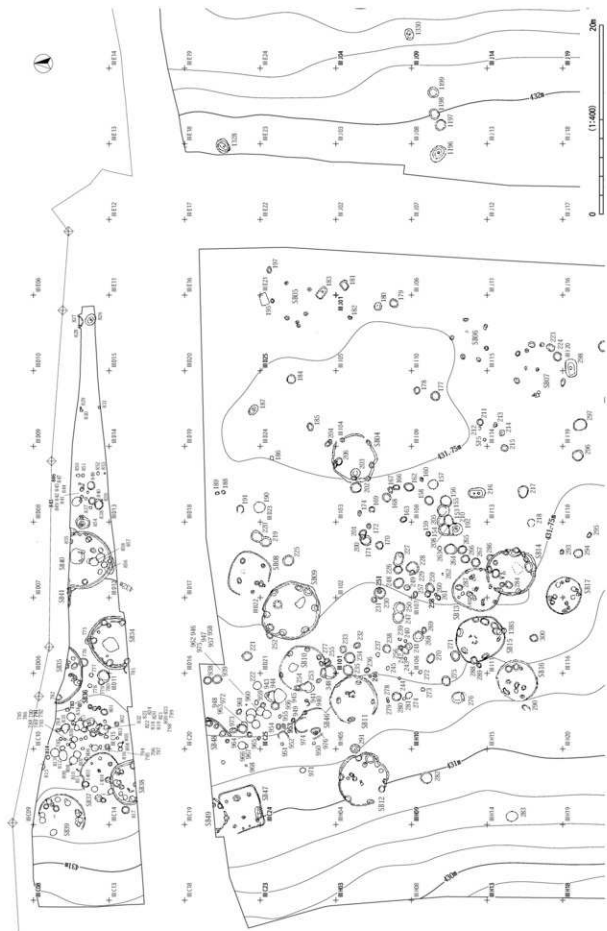


第 13 図 遺構配置図 (2)

第4章 遺構と遺物

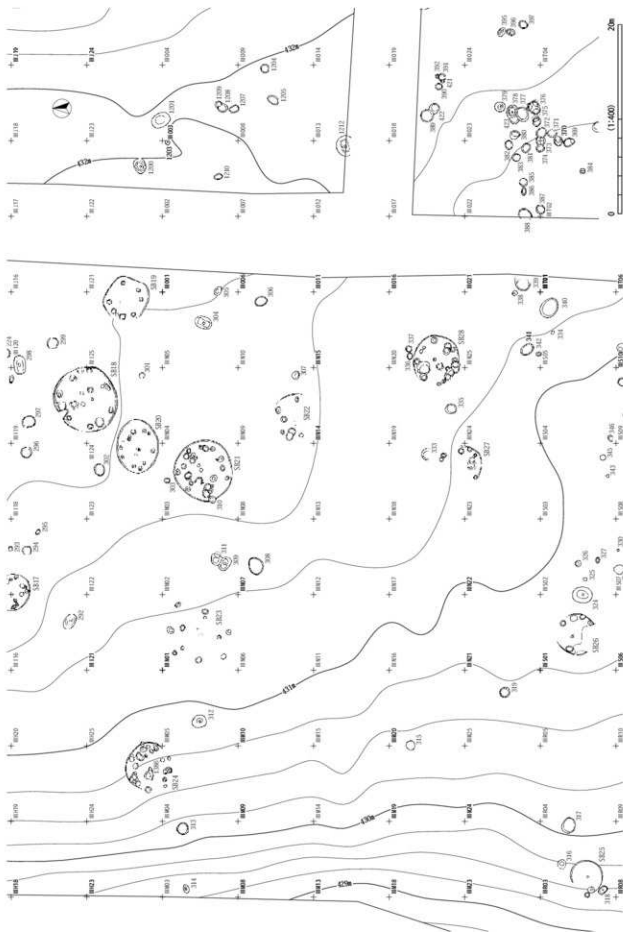


第14図 遺構配置図(3)

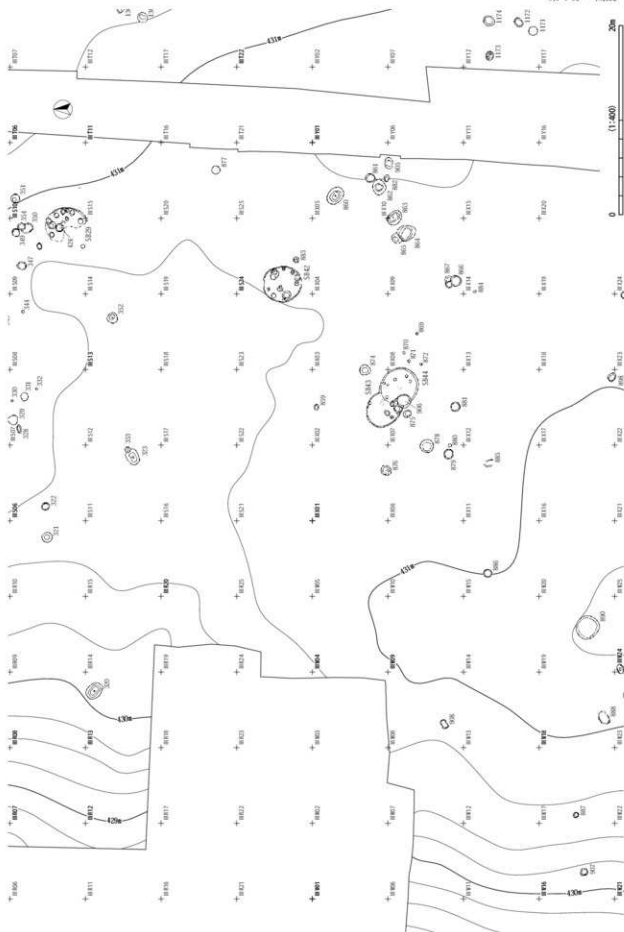


第 15 図 遺構配置図 (4)

第4章 遺構と遺物

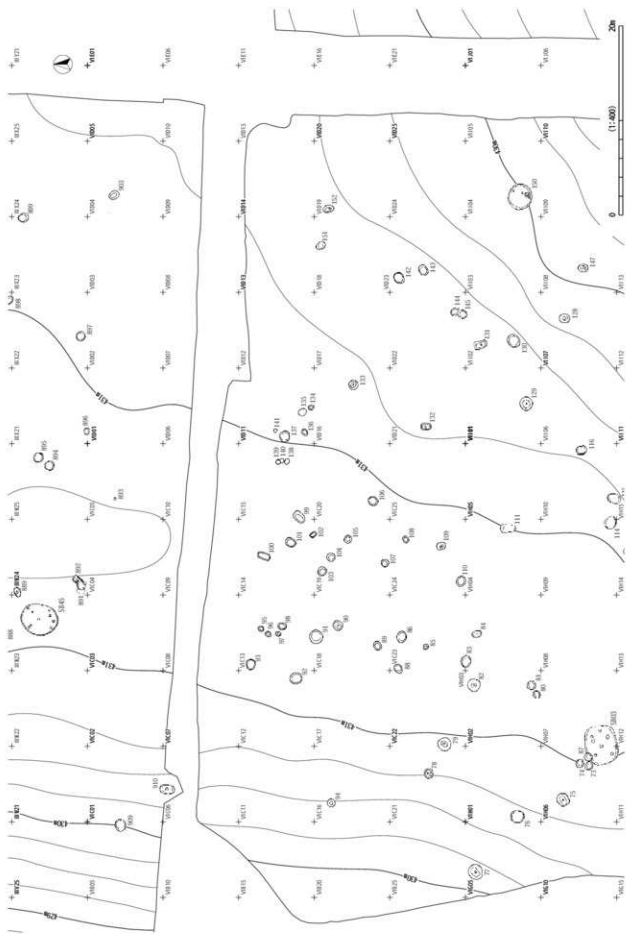


第16図 遺構配置図(5)

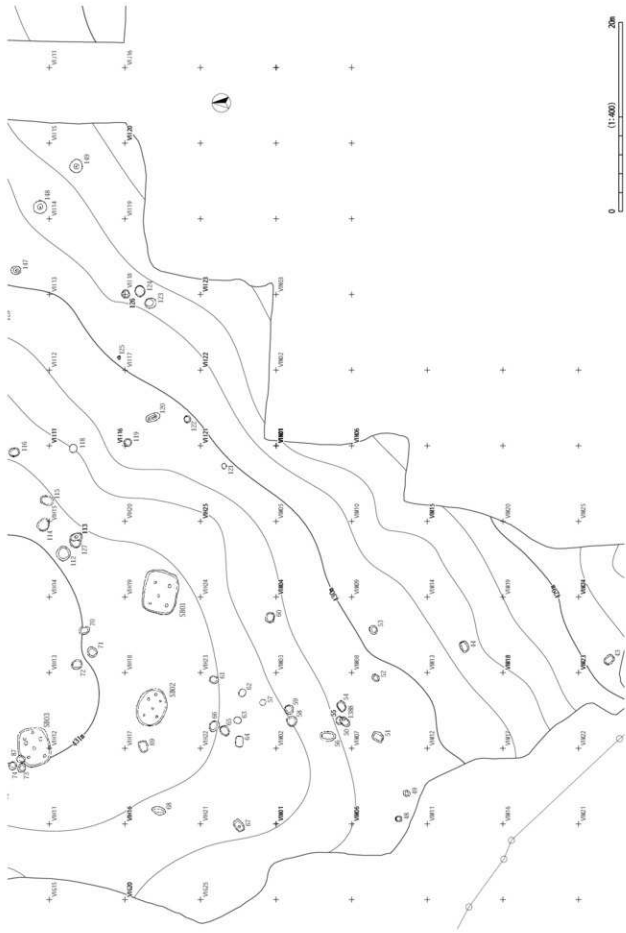


第 17 図 遺構配置図 (6)

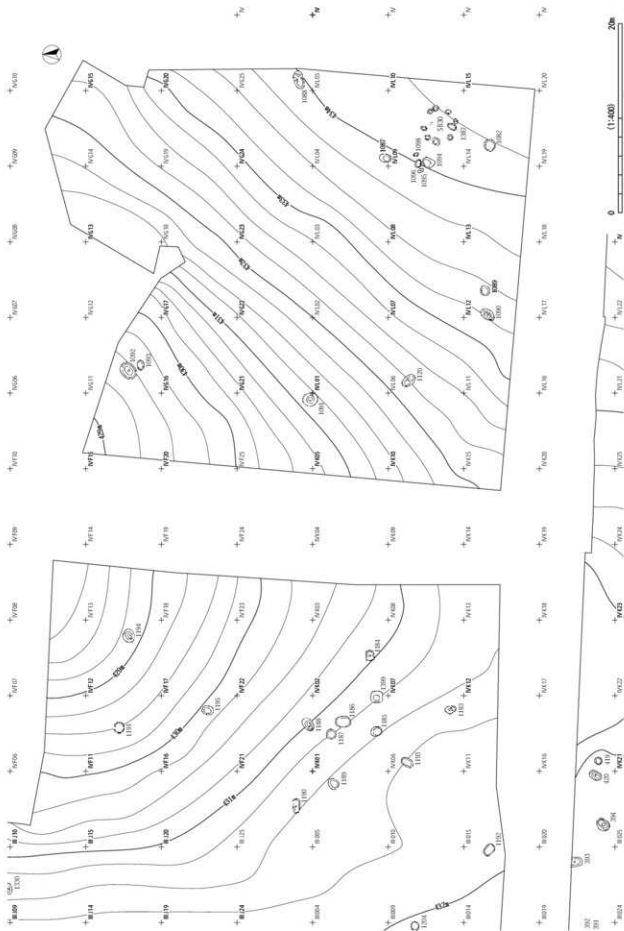




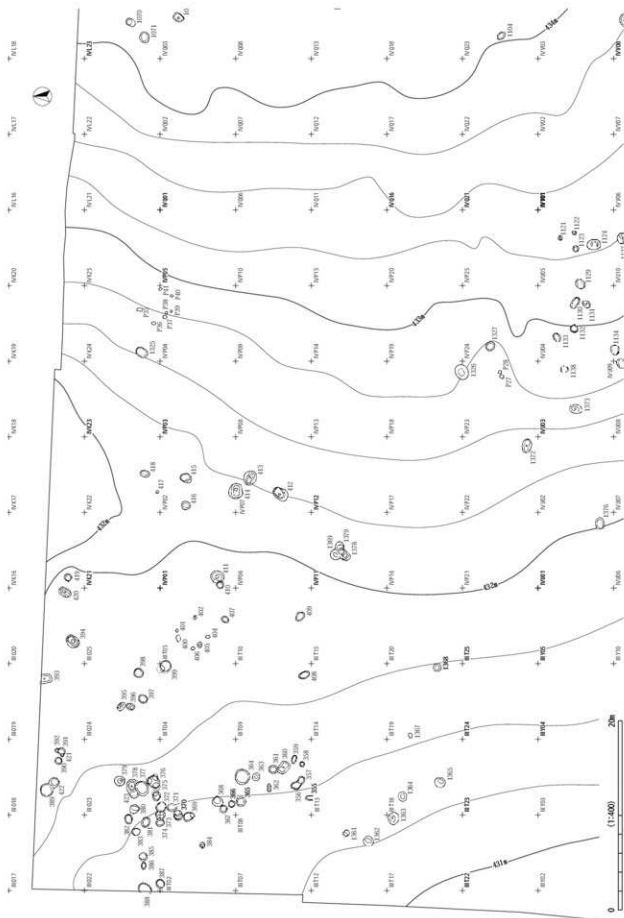
第18図 遺構配置図(7)



第 19 図 遺構配置図 (8)

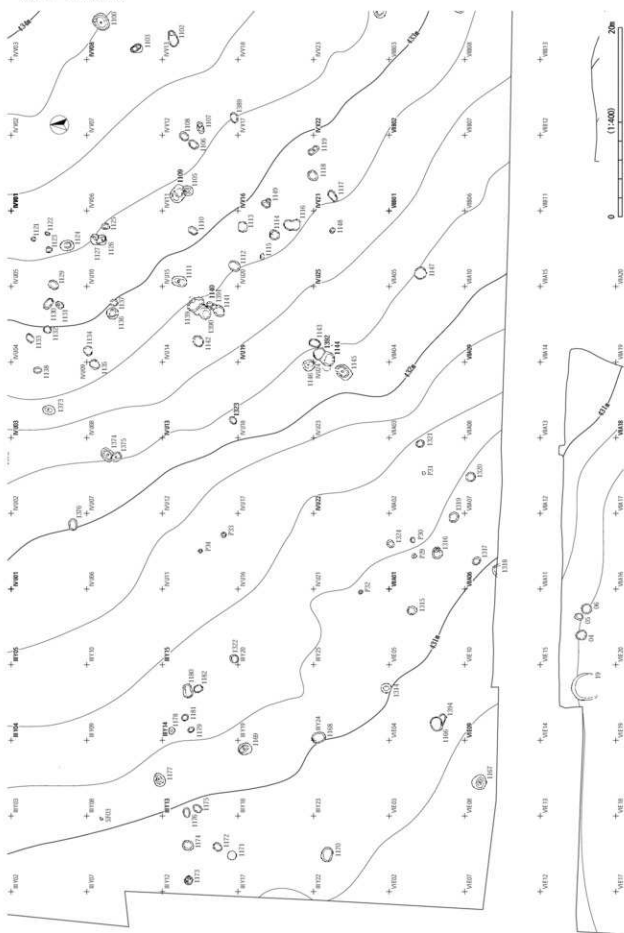


第20図 遺構配置図(9)

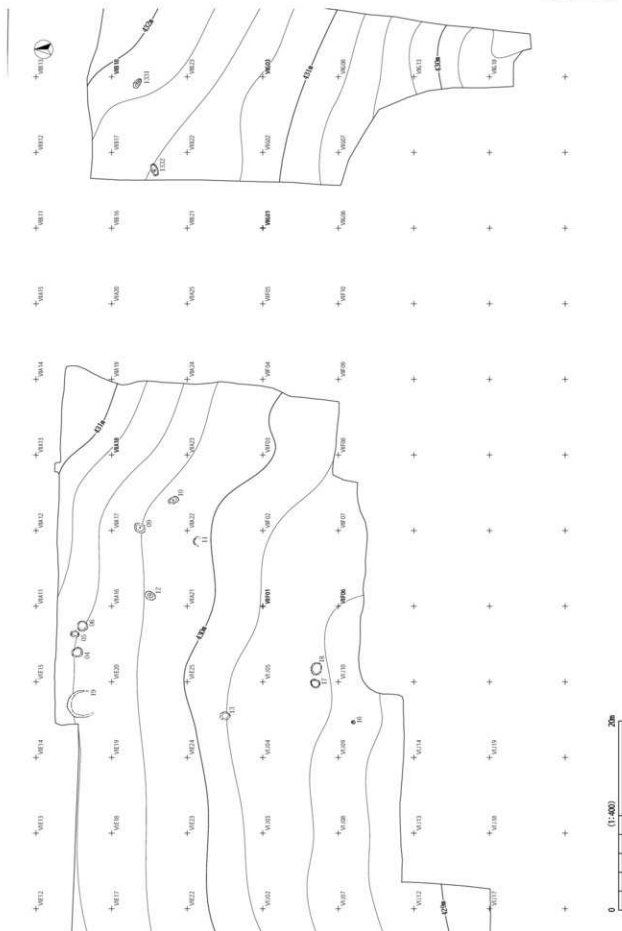


第 21 图 遺構配置図 (10)

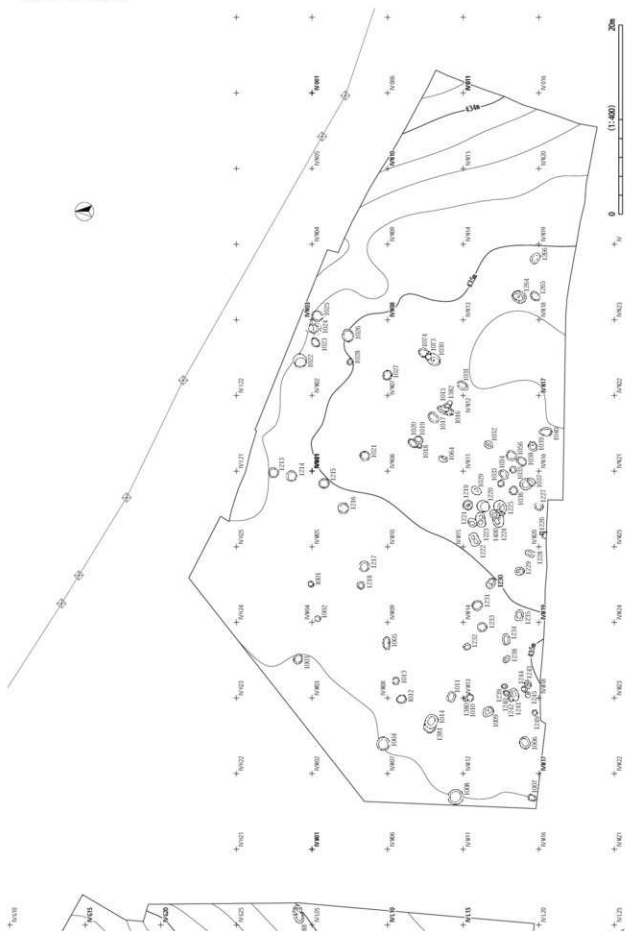
第4章 遺構と遺物



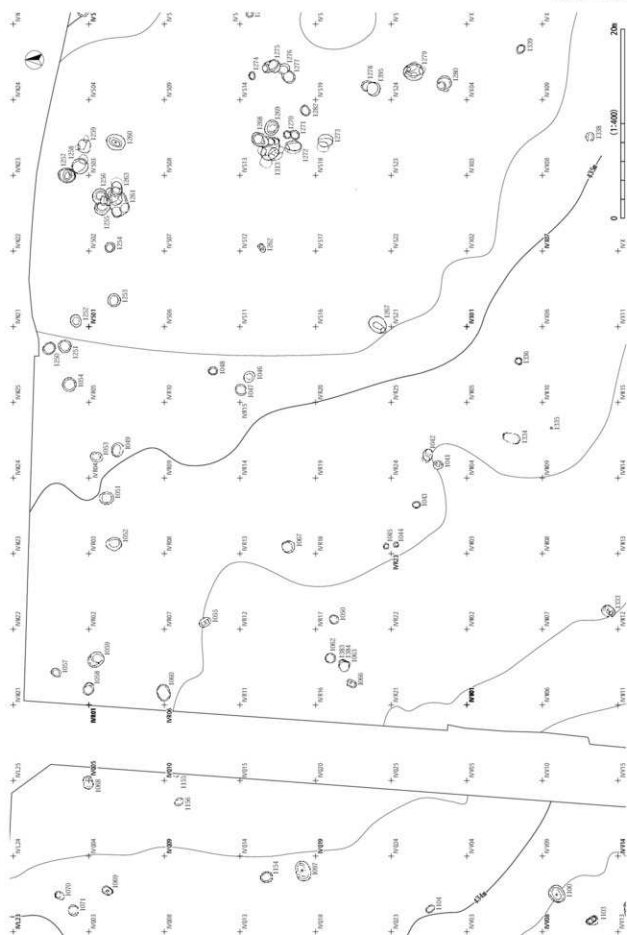
第22図 遺構配置図(11)



第 23 图 遺構配置図 (12)



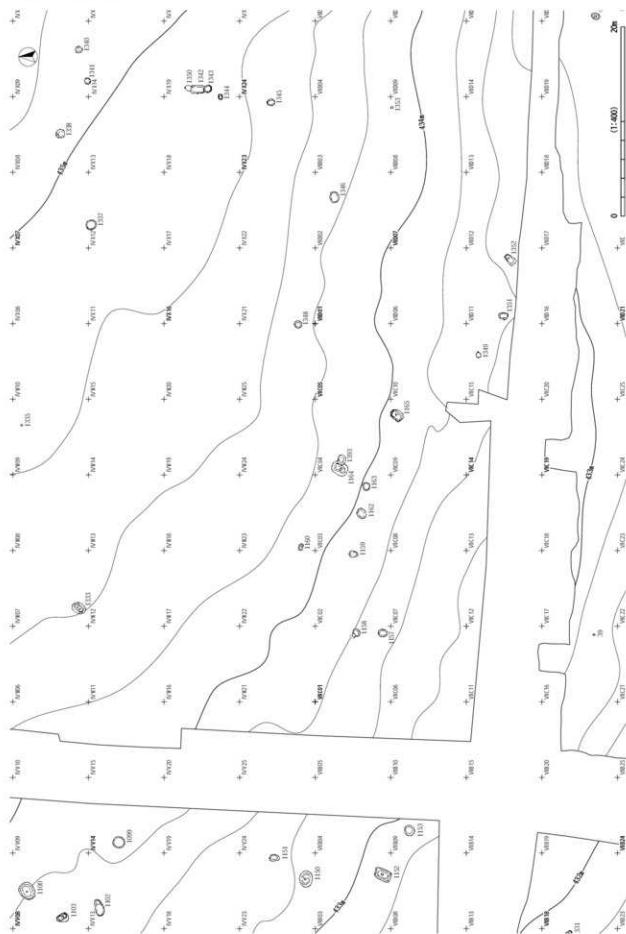
第24図 遺構配置図(13)



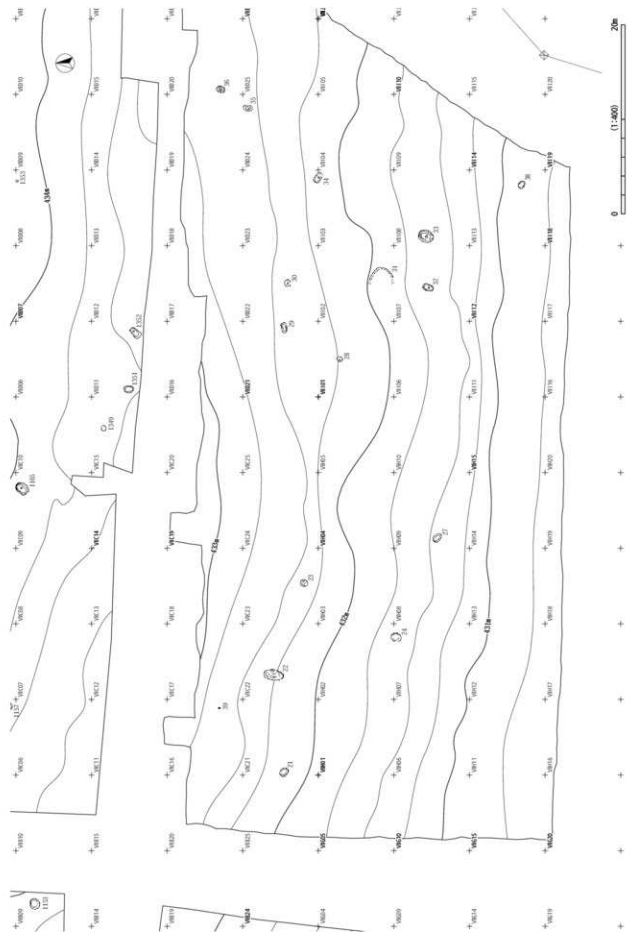
第 25 图 遺構配置図 (14)



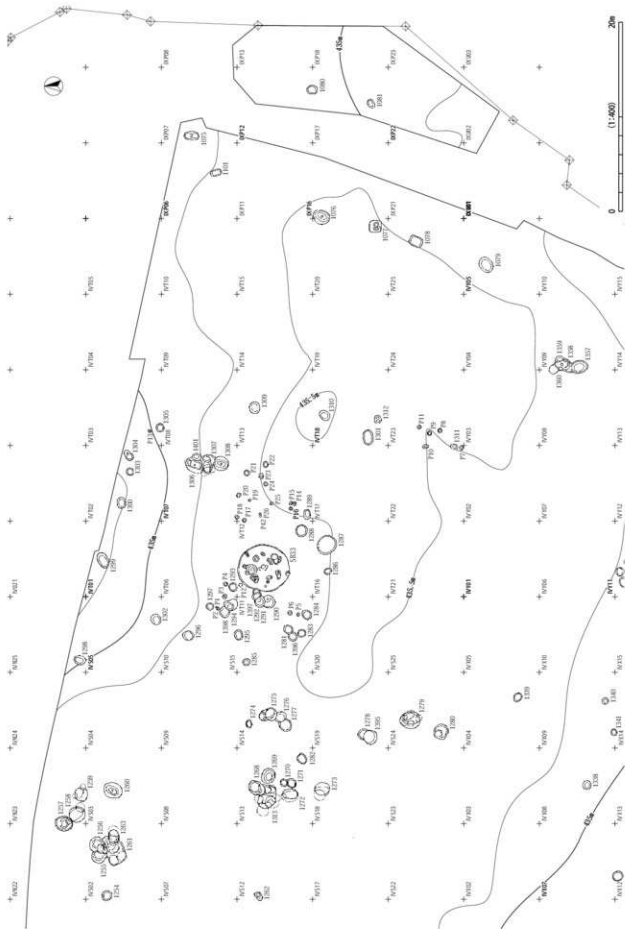
第4章 遺構と遺物



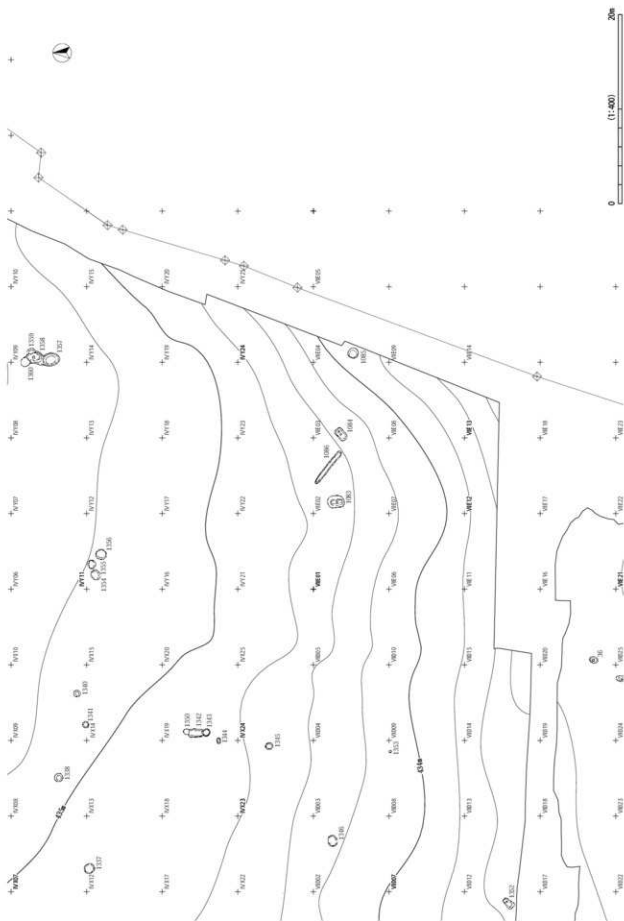
第26図 遺構配置図(15)



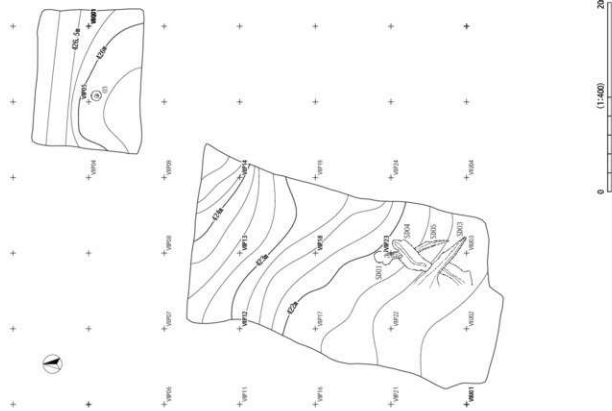
第 27 图 遺構配置图 (16)



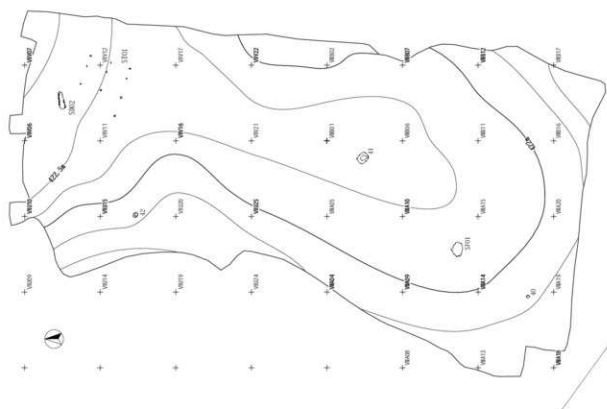
第28図 遺構配置図(17)



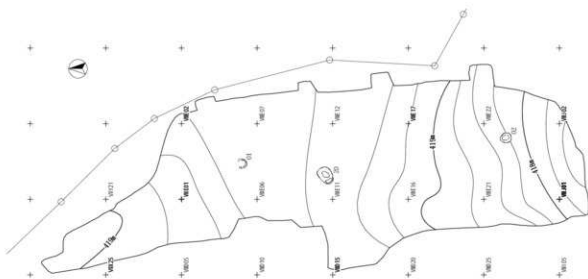
第 29 图 遺構配置図 (18)



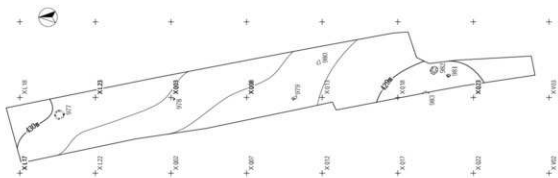
第30図 遺構配置図 (19)



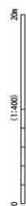
第31図 遺構配置図 (20)

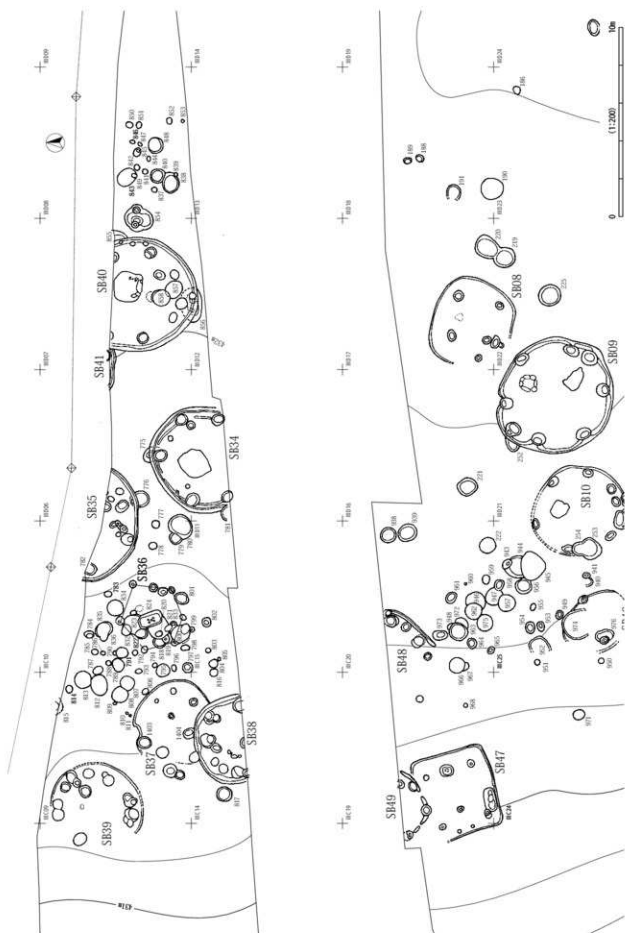


第 32 図 遺構配置図 (21)

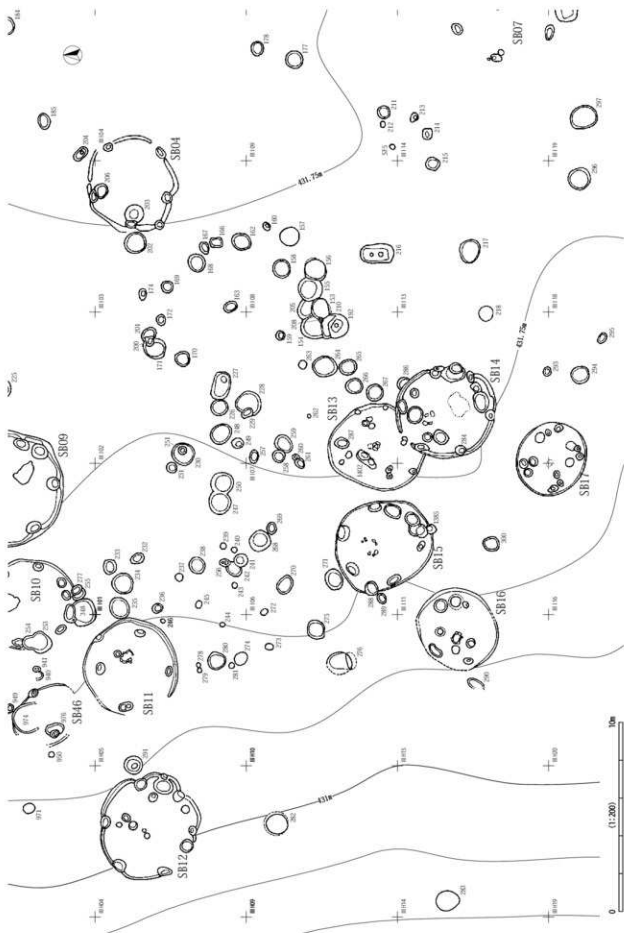


第 33 図 遺構配置図 (22)





第34図 遺構配置図 (23)



第 35 図 遺構配置図 (24)



## 第2節 縄文時代の遺構

## 1 竪穴住居跡・竪穴状遺構

竪穴住居跡は46軒が確認された。東部台地頂部の平坦地に分布するが、44軒が、19区から7区までの西縁部に集中している。その他の区域では、東部台地東側の12区、18区でそれぞれ1軒が検出されている。時期的な内訳は、中期初頭2軒、前葉8軒、中葉末～後葉26軒である。残り10軒については、中期に属すると推測されるものの、詳細時期を特定することは難しい。

竪穴状遺構は6基を数える。規模と構造の相違から、竪穴住居跡や土坑と区別した遺構である。東部台地西縁部に3基を検出したほか、東部台地中央～東側の1区・2区、さらに遺跡中央の谷を挟んだ西部傾斜地の20区に、それぞれ1基が存在する。時期の内訳は、中期初頭～前葉2基、中葉末～後葉1基、中期1基、時期不明確2基である。

なお、遺構の時期比定の鍵となる出土土器の時期区分については、第3節1に記述した。

**SBO1** (第36・116・117図、PLA・27) 位置：7区中央部、VI H18・19 グリッド

形状：隅丸長方形 規模：長軸459cm、短軸370cm、床面積12.6㎡ 長軸方向：N81° W

検出：トレンチ調査において、IV a層上面で一部が確認され、その後の面的精査でプラン全体を検出した。覆土：二層に分層された。壁～床面を褐色土(2層)が覆い、さらに中央の凹部に暗褐色土(1層)が堆積する。

床・壁：竪穴掘り方底を平坦に整形して床面とする。全面がやや硬化している。貼床は認められない。斜めに立ち上がる壁は最大高28cmが残存する。

柱穴：方形に並ぶP1～4の4基を検出した。配置は竪穴西側にやや偏っており、東壁との間隔が他より若干広い。各柱穴はほぼ円形で、深さ60～70cmを測る。細く深い形状である。

炉：床面中央やや西寄りに位置する土器埋設炉である。床面を長径40cm、短径30cm、深さ20cmの楕円形に掘り込み、その底面に土器を設置する。炉体土器(1)は胴下部以下を切り取った深鉢で、口縁部を欠く。内面は強く摩滅し、アバタ状の凹みが多く形成されており、使用に伴う痕跡と考えられる。二次被熱のため脆くなっていたのか、取上げ時に細かく割れてしまった。炉底は赤変していない。炉体土器の上端にかぶさるような状態で細長い礫が検出されたが、炉石とは考え難い。

遺物出土状況：遺物は縄文土器と石器があり、その大部分は覆土2層の中央付近に集中している。床面検出の遺物はない。土器は中期前葉に属するものである。大形の破片があり、全体形をほぼ復元できるものもある。石器は楔形石器2・二次加工がある剥片1・打製石斧5・横刃型石器4・刃器1・磨製石斧未成品2・石核1点が確認された。なお、剥片・破片については、付録CD所収の「剥片破片集計表」を参照していただきたい(以下、同様)。

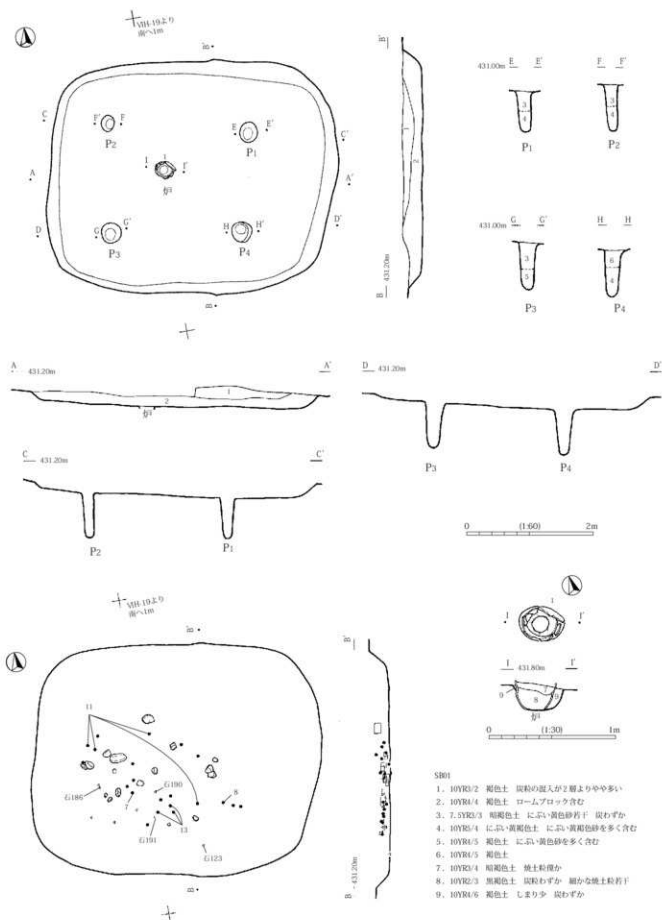
時期：炉体土器と覆土出土土器から、中期前葉の所産と考えられる。

**SBO2** (第37・117・159図、PLA・27・28・43) 位置：7区中央部、VI H17 グリッド

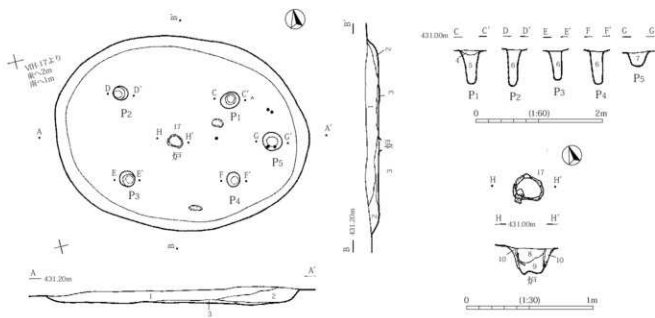
形状：楕円形 規模：長軸402cm、短軸306cm、床面積7.96㎡ 長軸方向：N74° W

検出：IV a層上面の検出である。

覆土：三層に分層された。床面直上をにぶい黄褐色土(3層)が薄く覆い、壁際ににぶい黄褐色土(2層)が断面三角形に堆積し、さらに残りの凹部を褐色土(1層)が埋積する。



第36図 SB01実測図



SB02

1. 10YR4/5 褐色土
2. 10YR5/4 濃い黄褐色土 地山ロームの含有多 砂の間に細かな炭粒や軽褐色土粒が少々散っている
3. 10YR5/4 濃い黄褐色土 2層に色調は似るがより粒子が細かくわずかに粘性あり
4. 10YR4/6 褐色土 やや砂混
5. 10YR5/6 黄褐色土 1層より砂混入多い 地山砂ブロック混 軟らかくしまりなし
6. 10YR4/6 褐色土 地山砂・砂ブロック混 軟らかくしまりなし やや粘性あり
7. 10YR4/3 濃い黄褐色土 わずかに炭粒混入 砂を含み 粘性なし
8. 10YR3/2 黒褐色土 炭・粘土・黄褐色土混入する
9. 10YR2/1 黒色土 キメ細かな土質だが粘性あまりなし 炭粒多
10. 8.75YR3/4 暗褐色土 しまり少 黄ブロック混 内側は熱炭混

第37図 SB02 実測図

床・壁：壁穴掘り方底を平坦に整形して床面とする。全面がやや硬化している。貼床は認められない。斜めに立ち上がる壁は最大高20cmが残存する。

柱穴：P1～4の4基が主柱穴と考えられる。各柱穴はほぼ円形で、深さ45～60cmを測る。細く深い形状である。そのほか、主柱穴より平面規模がやや大きく、深さ20cmの浅いピットP5が壁穴長軸上の東壁近くに検出された。主柱穴とは思えないが、性格は明確でない。出入口に関連するか。

炉：床面中央に位置する土器埋設炉である。掘り方は長径35cm、短径25cmの楕円形に掘り込む。深さは20cmを測り、底面からやや浮かせて土器が設置される。炉体土器(17)は口縁部および胴下半以下を切り取った深鉢である。内面はさざくれたように摩擦しており、使用に伴う痕跡と考えられる。炉底は赤変していないが、炉体土器の外面に接する部分の掘り方埋土は赤変している。炉掘り方南東部から、その内壁に貼り付くような状態で、1/4周ほど回る土器口縁部片(23)が出土した。SB45と類似した在り方である。ただし、土器片の内面は滑らかで、摩擦やアバタ状の凹みは認められない。

遺物出土状況：遺物は縄文土器・土製品と石器があり、ほとんど覆土1層から散在的に出土した。量は少なく、床面検出の遺物はない。土器は中期前葉に属する。土製品は土偶脛部片1点が炉覆土から検出された。石器は打製石斧3・磨製石斧1・磨石1・台石1点が認められる。

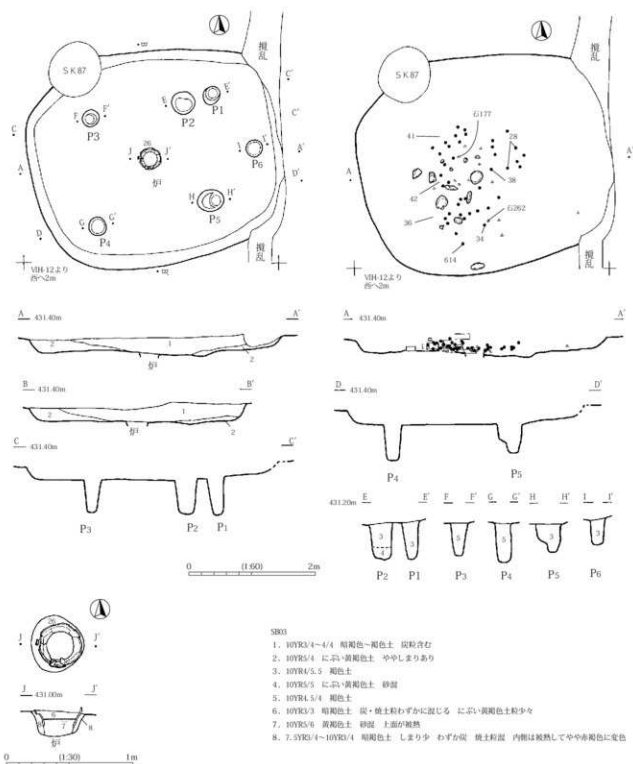
時期：炉体土器と覆土出土土器から、中期前葉の所産と考えられる。

SB03 (第38・118・119・159図、PL4・28・29・43) 位置：7区中央部、VI H06・07・11・12グリッド

形状：丸みを帯びた長方形 規模：長軸402cm、短軸341cm。床面積9.8㎡ 長軸方向：N81° E

検出：IV a層上面の検出である。SK87に切られる。

覆土：二層に分層された。壁際～床面中央付近にかけてに濃い黄褐色土(2層)が断面三角形に堆積し、



第38図 SB03実測図

さらに中央の凹部に暗褐色~褐色土(1層)が堆積する。

床・壁：竪穴掘り方底を平坦に整形して床面とする。壁際50cmほどを除いてやや硬化している。貼床は認められない。斜めに立ち上がる壁は最大高27cmが残存する。

柱穴：P1あるいはP2~P5の5基が主柱穴と考えられる。ただし、P1とP2が同時存在か、時期差をもつのか明らかでない。各柱穴は円形ないし楕円形で、深さ50~60cmを測る。細く深い形状である。P5は二

段掘り状をなす。また、主柱穴よりやや浅いビット P6 が壁穴長軸上の東壁近くに検出された。

**炉:** 床面中央やや西寄りに位置する土器埋設炉である。掘り方は直径 45cm の円形に掘り込む。深さは 20cm を測り、底面からやや浮かせて土器が設置される。炉体土器 (26) は胴下部以下を切り取った深鉢である。炉内の土層は上下二層に分かれ、下層は、炭粒や焼土粒を含まない黄褐色土で、その上面が被熱赤変していることから、炉底を形成する置き土と考えられる。炉掘り方上部に、1/4 周ほど回る土器胴部片 (31) が入っていた。SB45 と類似した在り方である。ただし、土器片の内面は滑らかで、摩滅やアバタ状の凹みは認められない。

**遺物出土状況:** 遺物は縄文土器・土製品と石器があり、その大部分は覆土 1 層の中央付近に集中している。床面検出の遺物はほとんどない。土器は中期前葉に属するものである。大形の破片があり、全体形をほぼ復元できるものもある。土製品は土偶腕部片 1 点が覆土 1 層から検出された。石器は石鏃未成品 1・石匙 2・楔形石器 1・二次加工がある剥片 1・打製石斧 4・横刃型石器 6・磨製石斧 1・打製石斧未成品 3・磨石 2・凹石 1・敲石 1・石錘 2 点が認められる。

**時期:** 炉体土器と覆土出土土器から、中期前葉の所産と考えられる。

#### SB04 (第 39 図、PL5) 位置: 8 区北部、Ⅲ D23・24、Ⅲ I03・04 グリッド

**形状:** 円形 **規模:** 残存長軸 531cm・残存短軸 477cm、床面積 18.8㎡ **長軸方向:** N56° E

**検出:** IV a 層上面の検出である。削平により壁と床を失う。攪乱が多く、当初プランは明瞭でなかったが、掘乱を除去すると、柱穴・周溝が明瞭にあらわされる。SK203・206 に切られる。

**柱穴:** P1・2・3・5・6 が主柱穴と考えられる。周溝と連結するように掘り込まれ、ほぼ等間隔に配されている。各柱穴は楕円形を呈し、深さは 40~50cm を測る。P2 は覆土の中心に柱痕跡ないし抜き取り痕と思われる黒~暗褐色土層が認められ、その直下には硬くしまった黄褐色土層がある。そのほか P4 が検出された。形態的には主柱穴とほぼ同様だが、P3・P5 間の外側に張り出した位置にあり、主柱とは異なる性格が考えられる。なお、SB05・06 は本遺構と類似した柱穴配置を示す。

**炉:** 主柱穴配置の中央東寄りに被熱赤変部分があり、炉の痕跡と考えられる。構造・規模は不明である。

**周溝:** 幅 15~25cm、深さ最大 20cm が残存する。攪乱により P1・P5 脇の部分が底部まで失われているが、各柱穴を連結するように掘り込まれ、P2 と P6 付近に一箇所づつ途切れがあるものの、ほぼ全周する。柱穴に接続する直前で内側に屈曲する場合が多い。

**遺物出土状況:** 周溝・P4・P5 および本遺構を切る攪乱から、縄文土器、石器が少量出土した。土器はいずれも小細片で、中期中葉~後葉と思われるもの数点あるが、詳細は不明である。石器は異形石器 1・横刃型石器 4・敲石 1・石錘 1 点が認められる。

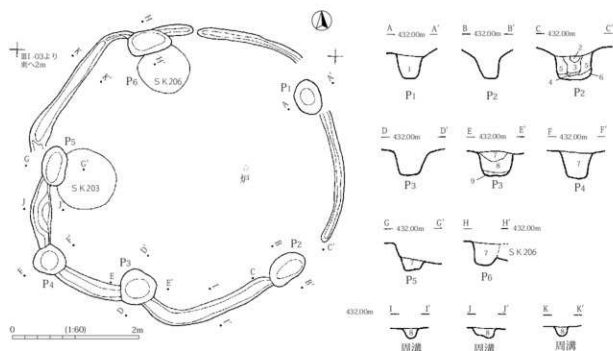
**時期:** 住居構造からすれば中期前葉以前に遡る可能性は低いだろう。SB05 と類似した柱穴配置を示すことを考慮して、中期中葉~後葉 1 期の幅の中で捉えておきたい。

#### SB05 (第 40 図、PL5) 位置: 8 区北部、Ⅲ D25・E21 グリッド

**形状:** 柱穴配置から円形と推測 **規模:** 残存長軸 498cm、残存短軸 441cm **長軸方向:** N74° E

**検出:** IV a 層上面の検出である。削平されて柱穴のみ残った壁穴住居跡と判断した。

**柱穴:** P1~5 が主柱穴と考えられる。各柱穴はおおむね円形、深さは 20cm 程度で、坑底レベルはほぼ揃う。そのほか 2 基のビットが検出された。P6 は主柱穴とほぼ同形同大であるが、P1・P2 間の外側に張り出した位置に掘り込まれており、主柱とは異なる性格が考えられる。P7 は他の柱穴に比べ浅いが、長軸上で P7 のすぐ内側に位置しており、その先後は不明ながら P7 の建て替えとも考えられる。柱穴は P4 と P6 を



SB04

1. 10YR2/3 灰褐色土 黒小ブロック少々
2. 10YR2/2 灰褐色土 黒小・黄白ブロックと黒ブロック入る。柱痕跡か
3. 10YR3/3 暗褐色土 5cm以下の黄白ブロックを含む。柱痕跡か
4. 2.0YR5.5/5 明褐色土 粘質固結ブロック入る。硬くしまっている。置土少
5. 10YR3/3 暗褐色土 肥土としては2層に似るが黄白ブロック・黒ブロックの柱が多い  
C (1~2cm) 跡も少ない
6. 10YR3/3 暗褐色土 S層より黄色粘子の含有多い
7. 10YR2/3 暗褐色土 黄アロウ塊層少々
8. 10YR4/4 褐色土 黄ブロック少々
9. 10YR4/5 褐色土 1~2層に比べやや細かく粘性あり

第39図 SB04実測図

結ぶラインを中軸として左右相称に配されている。なお、SB04・06は本遺構と類似した柱穴配置を示す。  
**遺物出土状況**：P3から縄文土器小片が2点、P4から中期中葉末～後葉1期の土器（細線紋土器）の小片1点が出土した。石器は横刃型石器1点が出土したのみである。

**時期**：P4出土の土器片からすれば、中期中葉末～後葉1期の可能性が考えられようか。

**SB06** (第41図、PL5) 位置：8区北部、Ⅲ110・15グリッド

**形状**：柱穴配置から円形と推測 **規模**：残存長軸486cm、残存短軸396cm **長軸方向**：N72° E

**検出**：IV A層上面の検出である。削平を受け、柱穴と炉痕跡のみ残存する竪穴住居跡と判断した。

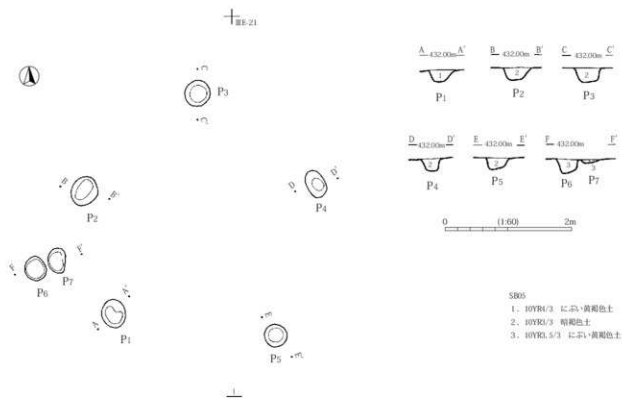
**柱穴**：P1～5が主柱穴と考えられる。各柱穴は円形ないし楕円形で、深さは20cm強～40cmを測る。P1とP6には、柱痕跡ないし抜き取り痕と思われる暗褐色土層が認められる。P6は主柱穴とほぼ同大同形であるが、P1・P2間の外側に張り出した位置に掘り込まれており、主柱とは異なる性格が考えられる。柱穴はP3とP6を結ぶラインを中軸として左右相称の配置を取る。なお、SB04・06は本遺構と類似した柱穴配置を示す。

**炉**：主柱穴配置の中央からやや東寄りにある被熱赤変部分と炉痕跡と考える。構造・規模は不明である。

**遺物出土状況**：P2・6から縄文土器小片が4点出土した。中期中葉と思われるものが1点ある。石器は横刃型石器1点が出土したのみである。

**時期**：SB05と類似した柱穴配置を示すことを考慮して、中期中葉～後葉1期の幅の中で捉えておきたい。

**SB07** (第42・120図、PL5・29) 位置：8区北部、Ⅲ114・15・19グリッド



第40図 SB05実測図

**形状：**柱穴配置から円形と推測 **規模：**長軸 612cm、短軸 519cm **長軸方向：**N34° E

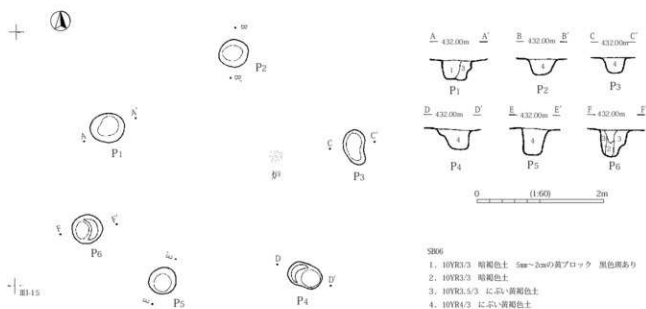
**検出：**IV a 層上面で、直径約 6m の円周上にピットが連なる状況と、その内側に被熱赤変部が確認された。削平を受け、ピットと炉痕跡のみ残存した竪穴住居跡と判断した。

**柱穴：**P1・2・6・7・10 が主柱穴と考えられる。各柱穴は円形ないし楕円形で、深さは 30cm 強～50cm を測る。発掘時点では、P7 と P6 の間に存在する SK223・224 を、形態が上記の 5 基と大きく違うため、別遺構として扱った。そして、六角形状の配置を成していた主柱穴 6 基のうち、南東の 1 基が SK224 に切られて消失したと考えた。しかし、率直に SK224 を本住居跡の柱穴とみなすこともできよう。そのほかに、P3・4・8 の 3 基の円形ピットが検出された。P3 は P2 と P4 の中間に、P4 は柱穴配置の中央に位置する。どちらも主柱穴より小形だが深くしっかりしたピットである。主柱穴ではないにせよ、上屋構造に係る何らかの柱穴である可能性があろう。P8 は小形で浅く、柱穴とは異なる機能を想定しておきたい。

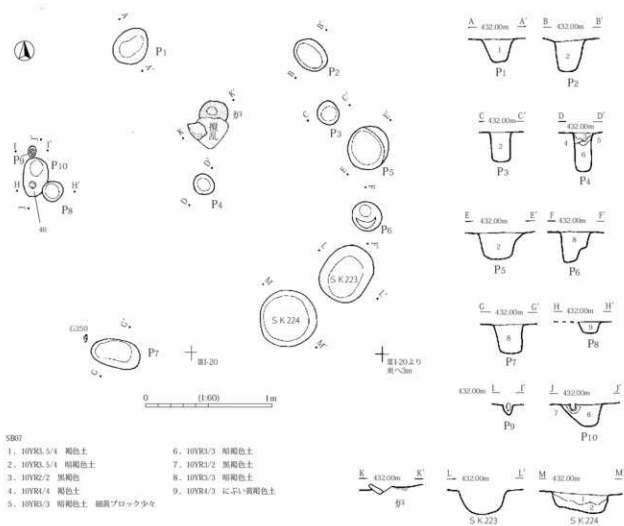
**炉：**柱穴配置の中央から北へ 1m ほどの位置に、中心がわずかに窪む被熱赤変部があり、炉痕跡とみなしてよいだろう。構造・規模は明らかでないが、この被熱部を切る攪乱の中に焼けた角礫が入っており、石を伴う構造であった可能性があろう。

**その他の施設：**P5 は、主柱穴に比べて、平面規模が大きく、貯蔵穴の可能性を考えておきたい。発掘時点では別土坑とした SK223 についても、そうした想定が可能かもしれない。P9 は磨石 1 点が入った小ピットで、磨石は側面を上下に向けて垂直に立った状態で検出された。しかし、底面から浮いており、意図的な埋納とみなすには材料不十分である。

**遺物出土状況：**縄文土器、石器が少量検出された。土器は、P10 の覆土上部から中期中葉末～後葉 1 期に属する小形鉢 (46) が出土したほかは、P1・5・6 から細片数点が出土したのみである。石器は石礫未成品 1・石錐 1・削器 1・黒曜石原石 1・磨石 1・敲石 1 点が認められる。ただし、黒曜石原石 (250) は P7 の西



第41図 SB06実測図



第42図 SB07実測図



側20cmの検出面で見つかったもので、本遺構に伴わない可能性がある。形態からは旧石器時代の遺物であることも推測し得る。

時期：P10出土の小形鉢から、中期中葉末～後葉1期と考えておきたい。

**SB08** (第43・120図、PL5・29) 位置：8区北部、Ⅲ D17・22グリッド

形状：丸みを帯びた方形 規模：長軸468cm、短軸423cm、床面積(15.2)㎡ 長軸方向：N77° W

検出：Ⅳa層上面の検出である。攪乱により南西部の壁を失う。

覆土：暗褐色土(1層)の単層である。

床・壁：竪穴掘り方底を平坦に整形して床面とする。全面がやや硬化している。貼床は認められない。壁は最大高14cmが残存する。

柱穴：P1～4が主柱穴と考えられる。配置は全体的に東側に若干偏っている。各柱穴は円形ないし楕円形で、深さは20cm程度と浅い。坑底レベルはほぼ揃う。そのほかP5・8・9の3基のビットが検出されたが、形態や位置からみて、主柱穴とは性格が異なるものであろう。

炬：P1とP2の中間に位置する。床面を平面円形・断面逆台形に掘り窪めたもので、規模は直径28cm、深さ13cmを測る。壁面～底面が強く被熱し、赤変部分は厚く広い。他住居跡の土器埋設炬は、掘り方内壁がほとんど焼けていないか、赤変部分の厚さが薄いので、本住居の炬は、炬体土器を伴わない構造であると理解しておく。

遺物出土状況：縄文土器、石器が覆土から散在的に出土した。床面検出の遺物はない。土器は中期後葉2期に属するもので、大形の破片もある。石器は石鏃1・削器1・微細な剥離のある剥片1・打製石斧6・横刃型石器4・磨製石斧1・石核1・磨石1・敲石1・石錘2点が認められる。

時期：覆土出土土器から、中期後葉2期の所産と考えておきたい。

**SB09** (第44・45・120・121図、PL5・29・30) 位置：8区北部、Ⅲ D21・22グリッド

形状：円形 規模：長軸666cm、短軸594cm、床面積27.9㎡ 長軸方向：N39° W

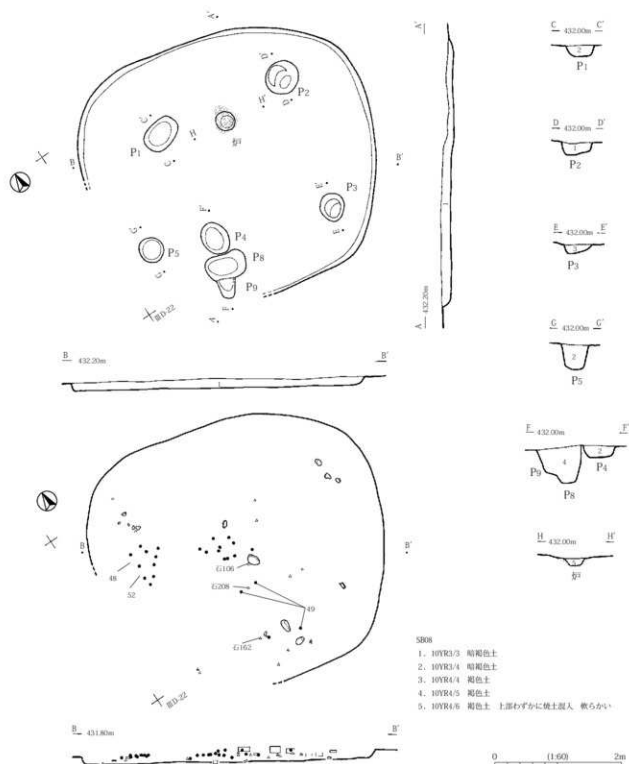
検出：トレンチ調査において、Ⅳa層上面で一部が確認され、その後の平面精査でプラン全体が検出された。SK252に切られる。

覆土：二層に分層された。壁際～床面中央付近にかけてにぶい黄褐色土(2層)が断面三角形に堆積し、残りの凹部に暗褐色～褐色土(1層)が堆積する。

床・壁：竪穴掘り方底を平坦に整えて床面とする。貼床は認められない。全面がやや硬化しており、炬1～炬2間を中心に、東側の硬化が相対的に強い。壁は最大高18cmが残存し、垂直に近く立ち上がる。

柱穴：8基が検出された。壁際に周溝と連結するように掘り込まれている。P1・2・4・5・9・7の6基がほぼ等間隔に配され、これらが主柱穴と考えられる。さらにP2とP4の中間にP3が、P9とP7の中間にP8が位置する。各柱穴は、楕円形ないし円形を呈し、上面規模90cm～70cm、深さ60cm前後と大形であり、坑底レベルがほぼ揃う。ただし、P8については、他に比べ若干大きく、より壁に寄っており、また、竪穴長軸からP9側にずれた位置にあることから、貯蔵穴などの性格も推測できようか。

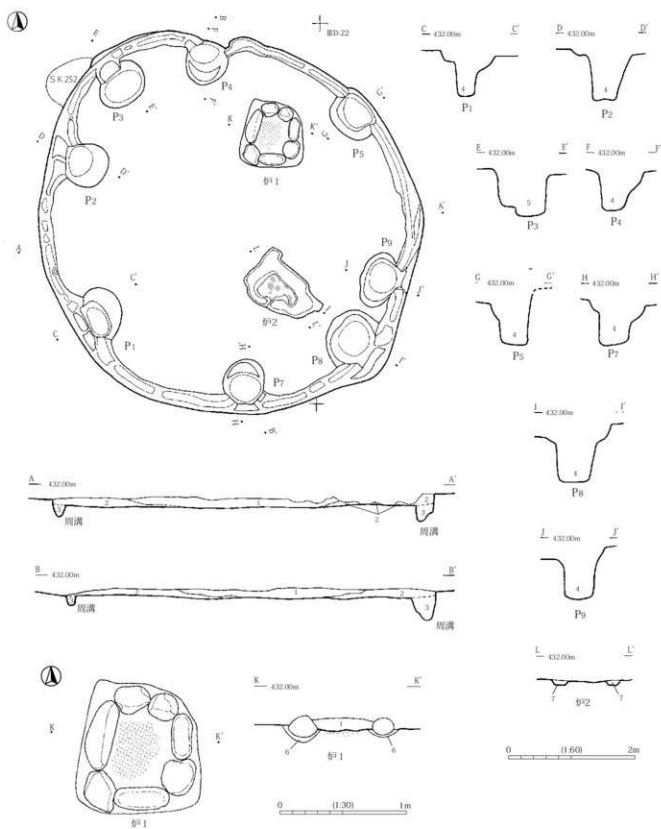
炬：2基検出された。炬1は石圍炬で、床面中央と北東壁の中間あたりに位置する。幅25cm、深さ10～5cmの溝を方形に廻らせ、そこに石7個を据え付けている。規模は炬石内縁で測って60×50cmほどで、長軸はN8° Eを示して竪穴長軸に対して傾く。被熱赤変した炬底は周囲の床面レベルとほとんど差がない。炬2は、竪穴長軸上で、床面中央と南東壁の中間に位置する。炬石は残っていないが、被熱赤変部を取り巻いて幅25cm前後の浅い溝が120×85cmの不整長方形に廻り、赤変面レベルが周囲の床面と同じである



第43図 SB08実測図

ことから、炉1と同様な構造をもつ石囲炉と考えられる。ただし、長軸は竪穴の長軸にほぼ平行する。炉2から炉1への作り替えが行われた可能性が推測されるが、炉2の炉石抜き取り痕を埋め戻した状況を示す明確な証左（貼床など）がないため、同時に存在していた炉2基のうち、炉2のみ炉石が抜き取られた可能性も否定はできないだろう。

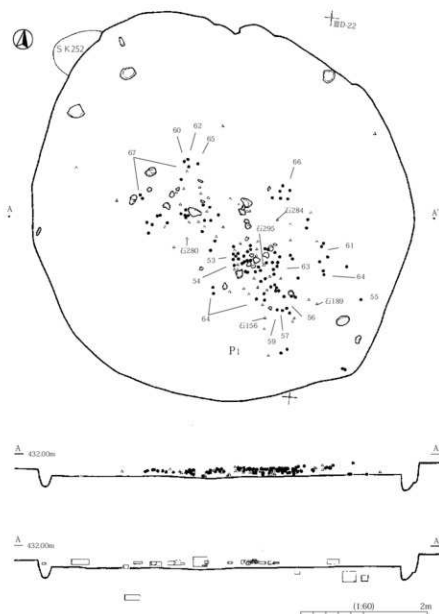
周溝：主柱穴を連結するように掘り込まれ、壁下を全周している。P5を除き、柱穴に到達する直前で内側



SB09

1. 10YR2/3 暗褐色土
2. 10YR1/3 に近い赤褐色土 壁近くは黄色が相対的に多い
3. 10YR2/3～5/3 黒褐色～暗褐色土
4. 10YR2/4 暗褐色土 灰陶わずかに含む
5. 10YR4/6 褐色土 ローム混わずかに混入
6. 10YR3/4～10YR4/1 暗褐色土
7. 10YR3/4～4/4 暗褐色土 灰粒・粘土粒少々 炭粒少々ロック若干

第44図 SB09実測図(1)



第45図 SB09実測図(2)

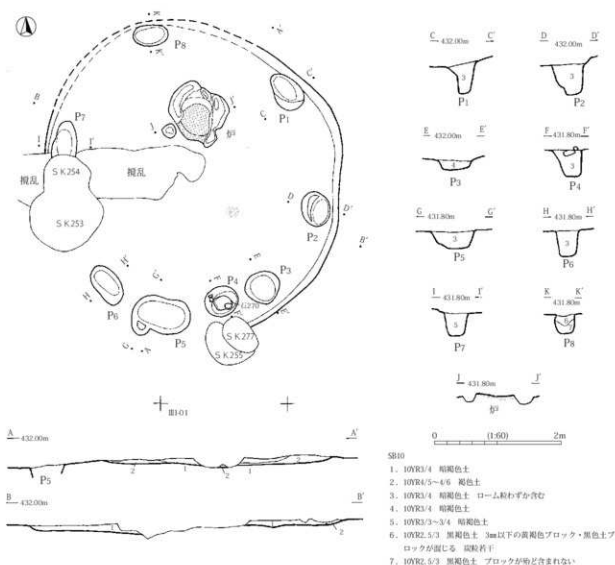
に屈曲する。幅20cm前後で、深さは10~30cmとばらつきがあり、段を成して溝底レベルが変化する箇所が認められる。ただし、その箇所には明確な規則性は看取されない。

**遺物出土状況：**縄文土器、石器が比較的多く出土した。遺物は覆土1層に集中しており、床面検出の遺物はほとんどない。土器は、中期中葉末~後葉1期に属するものを若干含むが、中期後葉2期に属するものがほとんどを占める。石器は石鏃未成品1・削器1・楔形石器2・微細な剥離のある剥片1・打製石斧23・横刃型石器18・研磨痕のある剥片1・刃器1・磨製石斧未成品1・石核2・磨石8・敲石7・台石1点が認められる。

**時期：**覆土出土土器の主体である中期後葉2期の所産と考える。

**SB10** (第46・122図、PL6) 位置：8区北部、ⅢC25・D21グリッド

形状：円形 規模：長軸〈530〉cm、短軸〈470〉cm、床面積〈18.8〉㎡ 長軸方向：N19° W



第46図 SB10実測図

検出：IV a層上面の検出である。削平および攪乱により北部・西部の壁を失っている。SK254に切られる。SK253・255・257と切り合うが、その先後は不明。

覆土：二層に分層された。北・南壁際を主体に褐色土（2層）が断面三角形に堆積し、残りの凹部に暗褐色土（1層）が堆積する。

床・壁：竪穴掘り方底を平坦に整えて床面とする。全面がやや硬化している。貼床は認められない。壁は最大高10cmが残存する。

柱穴：P1・2・4・6・7・8の6基が主柱穴と考えられる。壁際にほぼ等間隔で掘り込まれている。各柱穴は楕円形を呈し、深さ30～50cmを測る。坑底レベルはほぼ揃う。そのほか、P3・P5の2基のピットを検出したが、主柱穴に比べて浅く、平面的な位置からしても、柱穴とは異なる性格が考えられよう。

炬：床面中央からやや北に位置する。炬石は残っていないが、長径60cm、短径50cmを測る被熱赤変部を、炬石抜き取り痕と思われる溝状の窪みを取り巻くことから、石囲炬であることが推測される。炬石抜き取り痕は床中央側が開くコ字状を呈している。床中央側には炬石が存在しなかったか、あるいは石を埋設しない構造の可能性がある。また、中央南東寄りにも小範囲の被熱赤変部がある。

**遺物出土状況**：縄文土器、石器が出土したが、その量は少ない。覆土から散在的に出土しており、床面検出の遺物はほとんどない。土器はすべて小破片の状態で検出され、中期後葉2期のものが僅かに混じるもの、ほとんどは中葉末～後葉1期に属する。石器は石鏃1・楔形石器3・微細な刺鏃のある剥片2・打製石斧6・横刃型石器6・磨製石斧2・磨石1・敲石3点が認められる。

**時期**：土器出土土器の主体である中期中葉末～後葉1期の所産と考えておきたい。なお、本遺構を切るSK254からは中期中葉末～後葉1期の土器がまとめて出土している。

#### SB11 (第47・122図、PL6) 位置：8区北部、Ⅲ C25・H05 グリッド

**形状**：円形 **規模**：長軸<500>cm、短軸492、床面積<18.6>㎡ **長軸方向**：N54° E

**検出**：Ⅳ a層上面の検出である。削平により南西部の壁を失っている。

**覆土**：暗褐色土(1層)の単層である。

**床・壁**：竪穴掘り方底を平坦に整形して床面とする。東半部全面が硬化している(平面図の1点鎖線で区切った範囲)。貼床は認められない。壁は最大高8cmが残存するにすぎない。

**柱穴**：P1～4が主柱穴と考えられる。配置は竪穴中心からやや西に寄っている。各柱穴は楕円形ないし円形を呈し、深さ40～75cmを測る。P3は底が一段深くなった部分が認められる。

**炬**：床面中央よりやや東に位置する石囲炬である。炬掘り方は直径80cmの範囲を深さ10～15cm掘り窪めるが、中央の40×40cmほどの部分を若干高く掘り残しており、これが炬底となる。炬石はこの台状部の周囲を廻る溝状部分に据えられている。炬石の並びは乱れているが、炬の規模は、炬石内縁で測って40×50cmほどと推測される。炬底は被熱赤変している。なお、炬の東側に接して掘り込まれたP5は、被熱部分や炭化物は認められなかったものの、炬の構造ないし使用のあり方に関係するものかもしれない。

**周溝**：南東側半分のみに掘り込まれている。南東部が最も深く20cm強を測り、北と西へ向かうにつれ浅くなる。周溝の北端は、長径40cm、深さ20cmほどのビット状となっており、何らかの柱穴あるいは出入口に関連する施設の可能性があろう。

**遺物出土状況**：縄文土器、石器が出土したが、その量はごく少ない。覆土やビット・炬から散在的に出土しており、床面検出の遺物はない。土器はすべて小細片の状態で検出され、中期中葉～後葉2期が混在している。石器は打製石斧2・横刃型石器3・台石1点が認められる。

**時期**：土器は中葉末～後葉1期の割合が多いように思われるが、総量が少ないので、帰属時期の判断は難しい。中期中葉～後葉2期の時間幅の中で捉えておくにとどめたい。

#### SB12 (第48・122・159図、PL6・30・43) 位置：8区北部、Ⅲ H04 グリッド

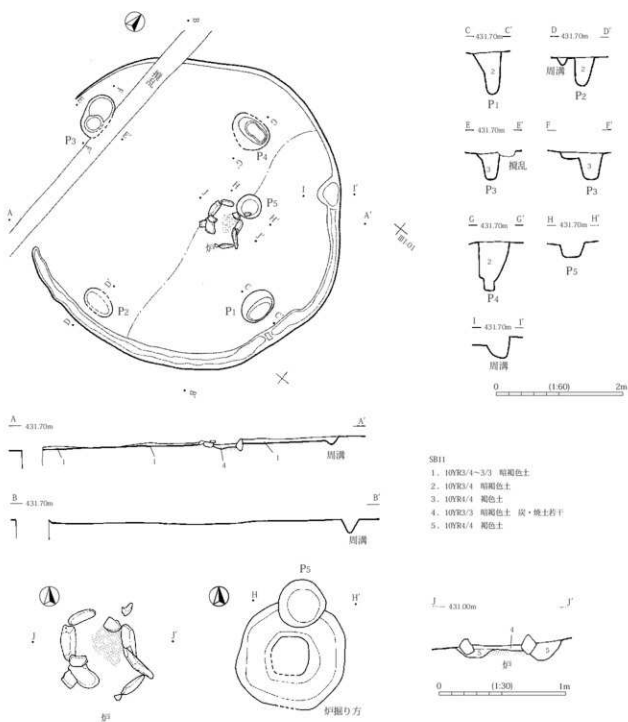
**形状**：円形 **規模**：残存長軸585cm・残存短軸521cm、床面積22.7㎡ **長軸方向**：N70° E

**検出**：Ⅳ a層上面の検出である。削平により、壁のほとんどを失う。北東部に壁と覆土が若干残存するが、地形的に下る南西側では床も失っている。

**覆土**：暗褐色土(1層)の単層である。

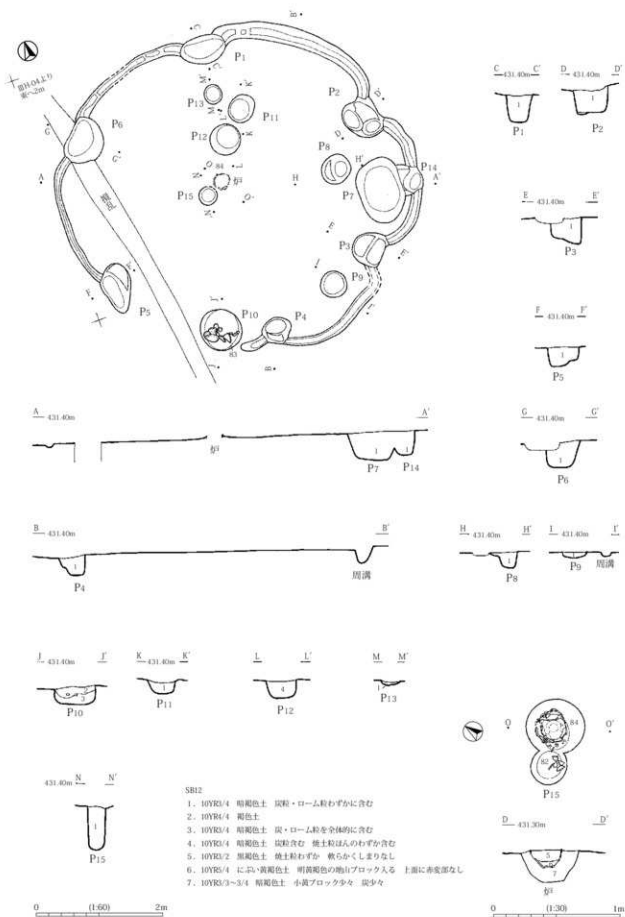
**床・壁**：北東部(P1～P3間辺り)に若干残る。残存部では、竪穴掘り方底を平坦に整えて床面としており、全面がやや硬化している。貼床は認められない。壁は最大高7cmが残存するにすぎない。

**柱穴**：P1～6が主柱穴であると考えられる。壁際に周溝と連結するように掘り込まれ、ほぼ等間隔に配されている。各柱穴は楕円形ないし円形を呈し、深さはおおむね40cmほどである。南西部に位置するP4・5が若干浅いのは、削平のためと思われる。そのほか、P7～14の8基のビットを検出したが、主柱穴に比べて浅く、平面的な位置からしても、主柱穴とは異なる性格が考えられよう。



第47図 SB11 実測図

如：床面ほぼ中央に位置する土器埋設炉である。長径48cm、短径42cm、深さ26cmの掘り方内に暗褐色土を充填し、炉体土器を据え付ける。炉体土器(84)は胴下部～底部で、上端を僅かに削平されたようだが、深さ15cmが残存する。底部は穿孔されていない。炉体土器内の埋土は二層に分層されるが、層厚5cmを測るにふい黄褐色土の下層は、焼土粒を含み軟らかくしまりのない黒褐色土の上層とは明確に区別される。下層上面に被熱赤変はみられないが、土層性状の顕著な差異から、下層は炉底を形成する置き土であると理解する。如の西側に接して掘り込まれたP5は、被熱部分や顕著な炭化物は認められなかったものの、炉と関連する施設かもしれない。



第48図 SB12実測図



周溝：南西の一部で途切れているが、削平によって消失した可能性がある。残りの良い北東部では、深さ最大20cmを測る。各柱穴を連結するように掘り込まれ、柱穴に接続する直前で内側に屈曲する。

その他の施設：柱穴P2・P3間では周溝の外側への張り出しが強く、この部分にP7が掘り込まれている。規模も大きく、柱穴ではない機能が推測される。貯蔵穴の可能性を想定しておきたい。

遺物出土状況：覆土やピット、炉から縄文土器、石器が出土したが、その量は少ない。床面出土の遺物はない。土器は中期中葉末～後葉1期と思われるものである。なお、P1から匙形土製品1点が出土している。石器は掻器状石器1・二次加工がある剥片1・微細な剥離のある剥片1・打製石斧1・横刃型石器5・磨製石斧1・石核2・磨石2・敲石1・石錘1点が認められる。

時期：炉土器の時期が不明確であり、他の出土土器も量的に少ないが、SB09と柱穴・周溝の構造が類似する点を考慮して、中期中葉末～後葉1期と捉えておきたい。

**SB13** (第49・50・122・123図、PL7・30・31) 位置：8区北部、ⅢI06・07・11・12グリッド

形状：歪んだ円形 規模：長軸507cm・短軸441cm、床面積16.1㎡ 長軸方向：N25° E

検出：IV a層上面でSB14と一部重複して検出された。やや不明瞭ながら本住居跡がSB14を切るかと判断して掘り下げを進めたが、調査の過程で切り合いが逆であることが判った。SK287・1402に切られる。なお、SB14との重複部分については、出土遺物を区別して取上げている。

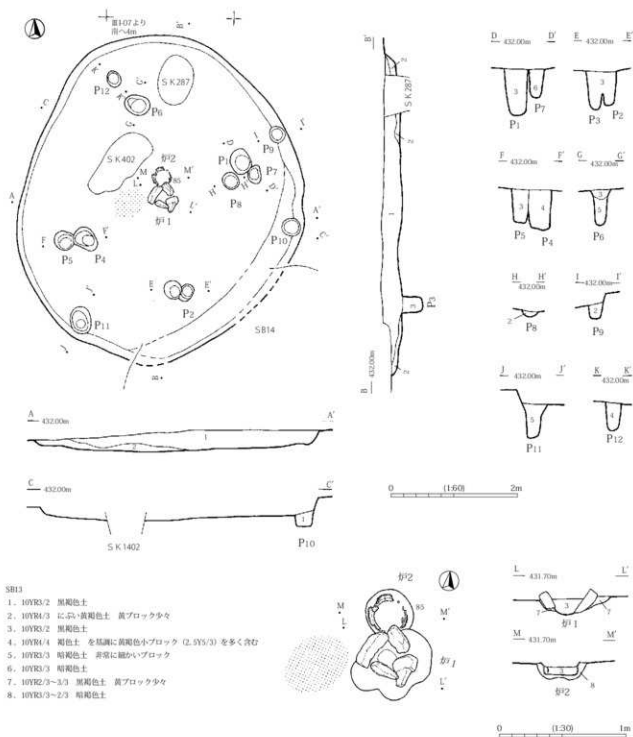
覆土：二層に分層された。壁際から中央付近にかけて、にぶい黄褐色土(2層)が断面三角形に堆積し、残りの空間を黒褐色土(1層)が埋積している。

床・壁：竪穴掘り方底を平坦に整えて床面とする。貼床・硬化面は認められない。壁は最大高24cmが残存し、斜めに立ち上がる。

柱穴：P1～7が主柱穴と考えられる。各柱穴は楕円形ないし円形を呈し、深さは45cm～70cmを測る。P6を除く6基はそれぞれ2基が対をなして相接しており、一方から他方への建て替えが推測されるが、新旧を指摘することは難しい。内側のP1・3・4に比べて外側のP7・2・5が揃って小振りであることからすれば、内側の一群と外側の一群が各々セットをなすとも考えられる。P12も柱穴と思われるが、P6から離れており、主柱穴に含めると配列が歪むという難点がある。壁際に位置するP11も柱穴であろう。柱穴配置のほぼ中心軸上にあり、主柱穴と同様な規模をもつ。ここでは、出入口施設ではなく、上屋構造に連なる柱穴として捉えておきたい。そのほか、P8・9・10の3基のピットを検出したが、主柱穴に比べて浅く、平面的な位置からしても、主柱穴とは異なる性格が考えられよう。

炉：床面中央に石囲炉と土器埋設炉が相接して位置している。北側の炉2は土器埋設炉である。直径35cm、深さ15cmの掘り方内に、深鉢の胴下部以下と口縁部を切り取った炉土器(85)を設置している。炉底に被熱赤変部は認められない。南側の炉1は石囲炉である。土器埋設炉の一部を切って構築され、長径65cm、短径50cm、深さ15cmの掘り方内に、長方形の石4個を方形に組んでいる。その規模は炉石内縁で測って一辺30cm程度である。炉底に被熱赤変部は認められない。柱の建て替えに伴って炉2から炉1へ作り変えたことが推測されるが、炉内の覆土は炭化物や焼土粒を含まない黒褐色土で、両炉とも同じ性状である。また、土器埋設炉を貼床等により埋め戻した痕跡もない。構築に時間差はあるものの、両炉は併存してともに使用されていた可能性もあり、決着を付け難い。なお、石囲炉の西側床面に焼土粒の広がり認められた。被熱部ではないので、炉の使用に伴うものとする。

遺物出土状況：縄文土器、石器が比較的多く出土した。覆土中の遺物は、大部分1層から検出され、また、中央付近に多い傾向があるものの、全体として散在的な在り方である。床面検出の遺物はほとんどない。土器は、中期中葉の可能性のあるものを僅かに含むが、ほとんど中期前葉に属する。石器は石鏃2・石鏃末

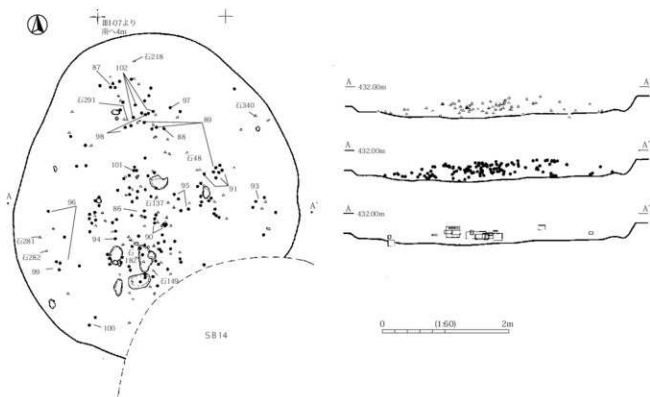


成品 1・石匙 1・抉入削器 1・削器 4・楔形石器 2・打製石斧 19・横刃型石器 17・刃器 1・磨製石斧未成品  
1・石核 1・原石 2・磨石 2・敲石 6・石錘 5・石皿 2・台石 1点 が認められる。

時期：炉土器と覆土出土土器から、中期前葉の所産と考えられる。

SB14 (第51・124・159図、PL7・43) 位置：8区北部、Ⅲ107・12グリッド

形状：円形 規模：長軸531cm・短軸490cm、床面積19.5㎡ 長軸方向：N24° W



第50図 SB13実測図(2)

**検出:** IV a層上面でSB13と一部重複して検出された。やや不明瞭ながらSB13が本住居跡を切るかと判断してその掘り下げを進めたが、調査の過程で切り合いは逆転した。SB13と重複する部分では壁と床を掘り抜いていたが、SB13の床面で本住居の周溝延長部が検出されたことにより、プランをほぼ把握できた。なお、東端部では、削平のため壁が消失している。SK284・285に切られる。なお、SB14との重複部分については、出土遺物を区別して取上げている。

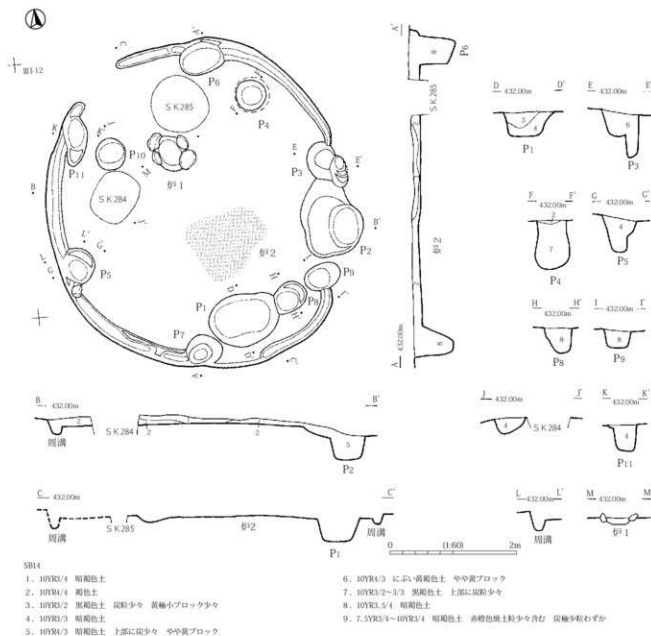
**覆土:**二層に分層された。壁際から中央にかけて、褐色土(2層)が断面三角形に堆積し、残りの窪みを暗褐色土(1層)が堆積している。

**床・壁:**壁掘り方底を平坦に整形して床面とする。貼床や硬化面は認められない。壁は最大高14cmが残存する。立ち上がりは急角度である。

**柱穴:**P3・9・7・5・11・6の6基が主柱穴と考えられる。壁際の周溝と重複する位置に、ほぼ等間隔に掘り込まれている。各柱穴は楕円形を基調とし、深さは30cm~50cmを測る。また、壁からやや内側にP4・8・10が位置し、さらにP3の坑底には一段深くなった部分が東側にある。これらは、それぞれP6・P9・P11・P3の柱に建て替える前の柱穴である可能性がある。

**炉:**床面中央からやや北西に位置する石囲炉を炉1とした。規模は炉石内法で長径40cm、短径30cmである。炉掘り方は、長径40cm、短径30cm、深さ10cmの楕円形に掘り窪めるが、周縁の幅10cmほどの部分を炉底より5cmほど高く形成した棚状部分に炉石を設置している。炉石は対面する4個が遺存する。炉底には被熱赤変部は認められない。また、石囲炉と対蹠的な位置にある1.2×1mの不整形の被熱赤変部を炉2とした。上面は平坦で周囲の床面とレベル差がなく、炉石抜き取り痕は認められない。

**遺物出土状況:**縄文土器、石器が出土したが、その量は少ない。覆土やビットから散在的に検出され、床面出土の遺物はほとんどない。土器は、僅かに中期前葉を含むが、ほとんど中期中葉末~後葉1期に属する。石器は削器1・二次加工がある剥片2・微細な剥離のある剥片1・打裂石斧4・横刃型石器9・刃器1・



第51図 SB14実測図

磨石2・敲石1・石錘1・台石1点が認められる。

時期：覆土出土土器から、中期中葉末～後葉1期の所産と考えておきたい。

**SB15** (第52・124・159図、PL7・8・31・43) 位置：8区北部、Ⅲ106・11グリッド

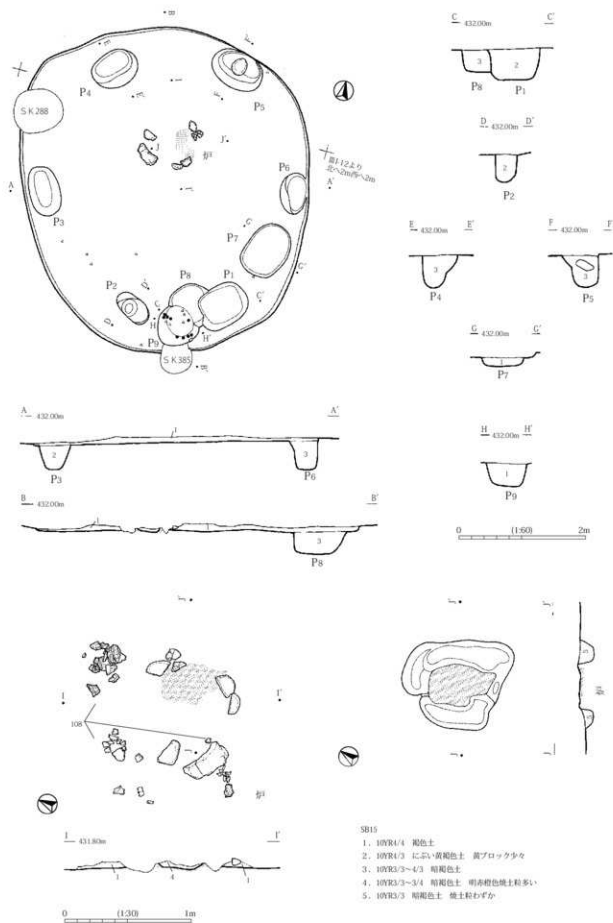
形状：円形 規模：長軸516cm・短軸468cm、床面積18.6㎡ 長軸方向：N16° W

検出：IV a層上面の検出である。SK288・1385に切られる。

覆土：褐色土(1層)の単層である。

床・壁：竪穴掘り方底を平坦に整えて床面とする。貼床や硬化面は認められない。壁は最大高8cmが残存するにすぎない。

柱穴：壁沿いに掘り込まれたP1～6が支柱穴と考えられる。P1とP2の間隔がやや狭いほかは、ほぼ等間



第52図 SB15実測図

隔に配置されている。各柱穴は楕円形を呈し、深さは40cm～50cmを測る。そのほか、P7・8・9の3基のビットが検出されたが、その位置や形態から、柱穴ではない機能を推測しておく。

**炉：**床面中央やや北側に位置する石囲炉である。50×35cmの被熱赤変部を取り巻いて、炉石抜き取り痕と思われる深さ5～10cmの溝状の窪みが廻っている。炉石は石組みとしては残っていないが、周囲に一部被熱赤変した礫が分布しており、これらが炉石に該当すると考えられる。

**遺物出土状況：**床面や覆土、ビットから縄文土器、石器が出土した。出土量は多くはない。ただし、炉の北側から西側にかけての床面に土器片がまとまって検出され(108)、P9の覆土上部にも遺物がまとまる傾向がみられる。土器は中期中葉末～後葉1期に属する。また、P1から土偶頭部片1点が出土した。石器は二次加工がある剥片1・打製石斧2・横刃型石器9・石核1・石鏢3点が認められる。

**時期：**出土土器から、中期中葉末～後葉1期の所産と考えておきたい。

**SB16** (第53・125図、PL8・31) 位置：8区北部、ⅢH15・ⅢI11グリッド

**形状：**円形 **規模：**長軸435cm・短軸402cm、床面積12.8㎡ **長軸方向：**N47° E

**検出：**Ⅳa層上面の検出である。溝状攪乱が中央部付近を南北に貫いて壁と床を破壊している。また、西端部の壁が削平されている。

**覆土：**二層に分層されたが、下層の暗褐色土(2層)が壁穴の大部分を埋積しており、上層にあたる暗褐色土(1層)は西寄りのごく一部分で認められるにすぎない。

**床・壁：**壁掘り方底を平坦に整えて床面とする。中央部から北西の壁際が硬化している(平面図の1点鎖線で囲った範囲)。貼床は認められない。斜めに立ち上がる壁は最大高26cmが残存する。

**柱穴：**壁に沿って掘り込まれたP1・5・8・7が主柱穴と考えられる。平面形は円形を基調とするが、P1は中央がくびれた細長い形状で、区別することはできないものの、本来2基が重複する可能性もある。また、P5はやや大形である。各柱穴の深さは40cm～50cmを測る。4基の位置からすれば、攪乱で消失した柱穴もあることが推測される。そのほか、P2・3・6・7の4基のビットが検出されたが、位置や形態からみて、柱穴ではない性格が考えられる。

**炉：**床面中央西側に位置する石囲炉である。規模は炉石内法で直径40cmを測る。長径90cm、短径50cmの不整楕円形の範囲を最深25cm掘り窪めた掘り方内に、暗褐色土を敷き詰めて、5cmほど嵩上げた炉底をつくるとともに炉石を固定する。炉石は扁平な礫8個を円形に配している。南東側(中央側)の3石は平置きに設置され、その真中の石は端整な板状角礫を用いている。他の南西～北東側の5石は立置きに据え付けられている。炉底は赤変していない。

**その他の施設：**P4・6は顕著な袋状を呈しており、貯蔵穴の機能を推測しておきたい。

**遺物出土状況：**覆土やビット、攪乱から縄文土器、石器が出土した。出土量は多くはない。床面出土の遺物はほとんどない。炉の東側に、床面からやや浮いて浅鉢1個体がまとまって検出された(129)。また、P3の底部付近にまとまっていた深鉢がほぼ完形に復元された(113)。土器は中期中葉末～後葉1期に属する。石器は二次加工がある剥片1・打製石斧3・横刃型石器6・磨製石斧1・石核1・磨石4・敲石2点が認められる。

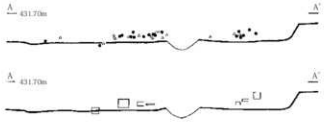
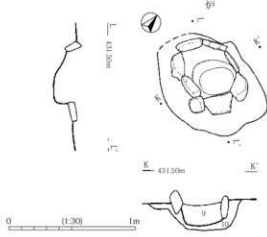
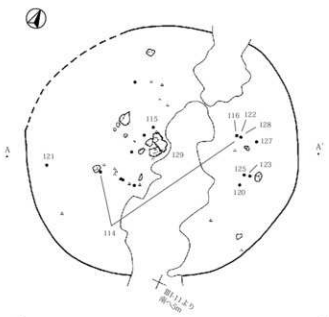
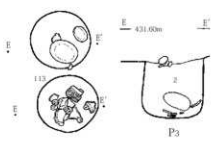
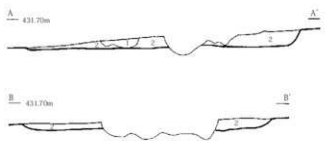
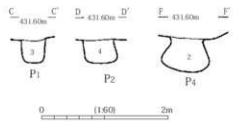
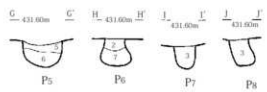
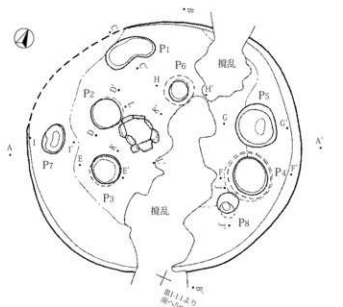
**時期：**出土土器から、中期中葉末～後葉1期の所産と考えておきたい。

**SB17** (第54・126図、PL8・9・32) 位置：8区北部、ⅢI11・12・16・17グリッド

**形状：**円形 **規模：**長軸402cm・短軸354cm、床面積10.3㎡ **長軸方向：**N48° E

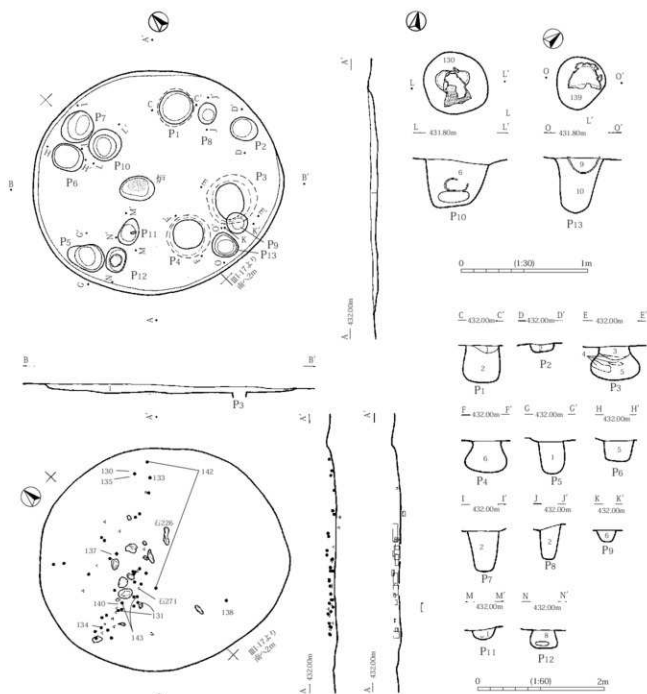
**検出：**Ⅳa層上面の検出である。

第4章 遺構と遺物



- SB16
1. 10YR2/2-2 黒褐色土 腐葉や多い
  2. 10YR2/4 暗褐色土
  3. 10YR4/5-5 に近い黄褐色土 炭ブロック含む
  4. 10YR4/4 暗褐色土 細小炭ブロックわずか
  5. 10YR2/2-2 暗褐色土
  6. 2.5Y/5 黄褐色土
  7. 10YR4/3 に近い黄褐色土 炭粒わずか 炭ブロック少々
  8. 10YR2/4 暗褐色土 炭・地土粒ごくわずか
  9. 10YR2/4 暗褐色土 炭ブロックわずか

第53図 SB16実測図



第54図 SB17実測図

覆土：暗褐色土（1層）の単層である。

床・壁：竪穴掘り方底を平坦に整えて床面とする。貼床・硬化面は認められない。壁は最大高7cmが残存するにすぎない。

柱穴：方形に配置されたP5・7・8・13が主柱穴と考えられる。各柱穴は円形ないし楕円形を呈し、深さ



45cm～60cmを測る。北西側の2基は南西側に比べやや小形である。また、P5にはP12・11、P7にはP6・10、P8にはP2、P13にはP9が各々隣接している。建て替え前の旧柱穴、あるいは主柱穴と関連する何らかの施設かもしれないが、不明確である。P10を除き、主柱穴より目立って浅い。そのほか、P1・3・4の3基のピットを検出したが、いずれも柱穴ではないと考える。

**炉：**床面中央やや南西寄りに、長径53cm、短径40cm、深さ1～2cmのごく浅い楕円形の窪みがあり、その底面が被熱赤変している。これが炉跡と考えられる。

**その他の施設：**P1・3・4は顕著な袋状を呈しており、貯蔵穴の機能を推測しておきたい。

**遺物出土状況：**覆土やピットから縄文土器、石器が出土した。出土量は多くはない。床面出土の遺物はほとんどない。P10の底部付近に扁平礫があり、その上に横位で収められたような状態で深鉢1個体が出土した(130)。また、P13の覆土最上部から深鉢の大形破片が検出された(139)。土器は、僅かに初頭～前葉を含むものの、ほとんどは中期中葉末～後葉1期に属する。石器は二次加工がある剥片3・打製石斧6・横刃型石器2・刃器1・磨製石斧1・磨製石斧未成品1・磨石2点が認められる。

**時期：**出土土器から、中期中葉末～後葉1期の所産と考えておきたい。

**SB18** (第55・127・159図、PL9・43) 位置：8区北部、Ⅲ I19・24 グリッド

形状：円形 規模：長軸693cm・短軸642cm、床面積33.9㎡ 長軸方向：N55° E

検出：Ⅳ a層上面の検出である。

**覆土：**二層に分層された。褐色土(2層)が西部～南東部の壁際に断面三角形に堆積し、さらに、床面～竪穴内空間の大部分を暗褐色土(1層)が埋積する。

**床・壁：**竪穴掘り方底を平坦に整えて床面とする。全面硬化しているが、南西部の硬化が相対的に弱い。貼床は認められない。壁は最大高22cmが残存し、垂直に近く立ち上がる。

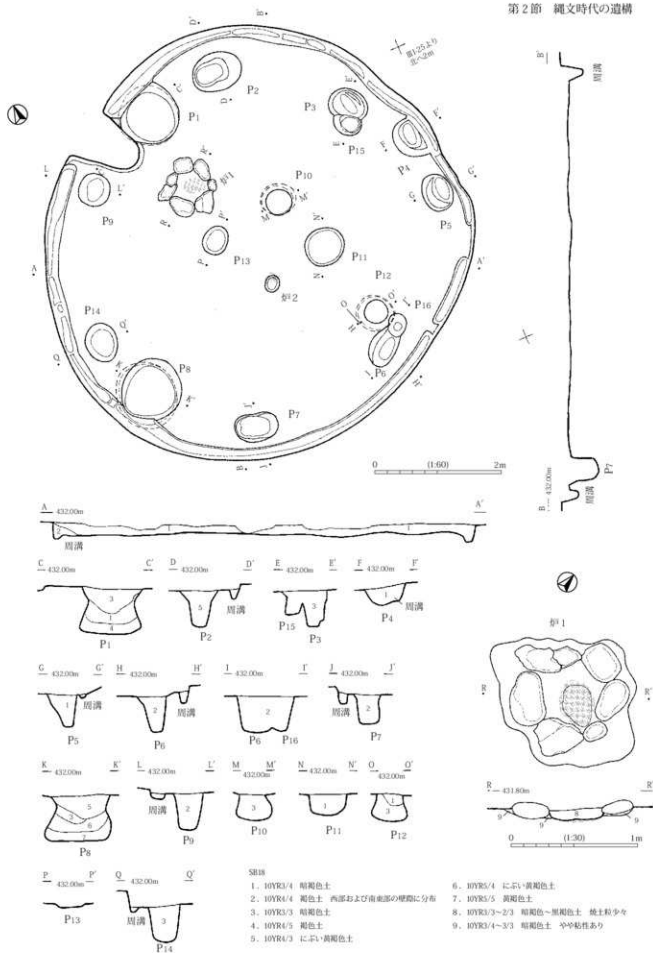
**柱穴：**壁に沿って周溝よりわずかに内側に掘り込まれた、P2・3・5・6・7・14・9の7基が主柱穴と考えられる。P2～3～5間がやや狭いほかは、ほぼ等間隔に配置されている。各柱穴は楕円形ないし円形を呈し、深さ50～60cmを測る。P3・P6に付随するように、P15・P16が存在している。切り合いの先後は確認できない。建て替え前の旧柱穴、あるいは主柱穴に関連する何らかの構造を示しているかもしれない。そのほか7基のピットを検出したが、いずれも柱穴ではない性格を推測する。

**炉：**2基検出された。炉1は床面中央から1mほど北西に位置する石囲炉である。規模は炉石内法で直径50cm、床面からの深さ10cmを測る。床を1辺100cmほどの不整形に掘り窪めた内部に、扁平な礫7個を五角形状に組んでいる。南側(中央側)の1石は、厚さが均一な板状角礫を平置きしてあり、その上面を床面と同じレベルに揃えている。他の6石は扁平な円礫をやはり平置きに設置するが、上端は床面より3～7cm高い。炉底は被熱赤変している。炉2は炉1と対蹠的な位置にある。直径25cm、深さ2cmの円形を呈するごく浅い窪みの、中央側の底面～外縁が被熱赤変している。

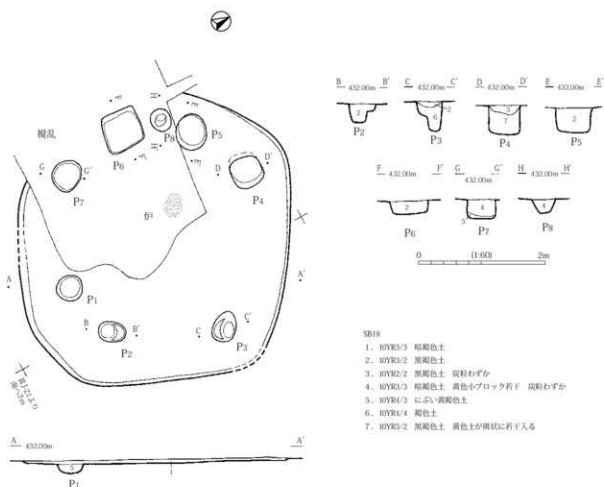
**周溝：**南東部の途切れ部2箇所と、後述の棚状施設部分を除いて、周溝が壁下をほぼ全周している。深さは10～15cmを測る。

**棚状施設：**北西壁から地山が竪穴内側に張り出す部分が認められる。炉1に向かって舌状に突き出しており、長さ100cm、幅は付け根部分で100cm、先端部で60cmを測る。地山を掘り残して造り出した棚状施設と考えられる。形状・規模は異なるもののSB37にも同様な施設がみられる。

**その他の施設：**棚状施設の北東に隣接するP1をはじめ、P8、P10、P12は、いずれも顕著な袋状を呈するピットであり、貯蔵穴と推測しておきたい。P1・P8は大形、P10・P12は小形である。また、P7とP14間には周溝に接してP4が掘り込まれている。出入口と関連する施設ではなからうか。



第55図 SB18実測図



第56図 SB19実測図

**遺物出土状況:** 覆土やピットから縄文土器、石器が出土した。出土量は多くはない。大部分は覆土1層から散在的に検出され、床面検出の遺物はほとんどない。土器は、僅かに初頭～前葉を含むものの、ほとんどは中期中葉末～後葉1期に属するものである。なお、土製円盤1点が覆土から出土した。石器は打製石斧7・横刃型石器3・打製石斧未成品1・石核1・磨石2・凹石3・敲石2・石錘1・台石1点が認められる。  
**時期:** 出土土器から、中期中葉末～後葉1期の所産と考慮しておく。

**SB19** (第56・127図, PL9) 位置: 8区北部、Ⅲ I25・J21グリッド

**形状:** 五角形気味の円形 規模: 長軸 <470> cm・短軸 432cm、床面積 <16.0> m<sup>2</sup> 長軸方向: N62° W

**検出:** IV a層上面の検出である。攪乱により中央部～西部の床、西部の壁を失う。

**覆土:** 暗褐色土(1層)の単層である。

**床・壁:** 壁掘り方底を平坦に整えて床面としている。残存部では貼床・硬化面は認められない。壁は最大高7cmが残存するにすぎない。

**柱穴:** P2・3・4・8・7が主柱穴と考えられる。壁からやや内側に掘り込まれている。各柱穴は円形ないし楕円形を呈し、深さ30～45cmを測る。柱穴配置は五角形を成しており、竪穴形状もそれに対応するような平面形を呈する。また、P1・5は、P2・4とそれぞれ対をなすようにも見え、上層構造に関連する可能性があるかもしれない。そのほかP6を検出したが、柱穴とは考え難い。

炉：攪乱底の、床面中央やや北西にあたる位置に被熱赤変部が認められ、炉の痕跡と考えられる。赤変面は長径40cm、短径30cm残存する。レベルは床面から4～7cm低く、若干の窪みをもつ構造か。

その他の施設：P6は明確な方形のピットで、他の住居跡にみられない特異な形状である。性格は明らかではないが、貯蔵穴であろうか。

遺物出土状況：縄文土器、石器が出土したが、その量はごく少ない。覆土やピットから散在的に出土しており、床面検出の遺物はない。土器はすべて小細片の状態で検出され、中期中葉～後葉2期が混在している。石器は打製石斧1・横刃型石器3・石核1・敲石1・石錘1・石皿1点が認められる。

時期：土器は中葉末～後葉1期の割合が多いように思われるが、総量が少ないので、帰属時期の判断は難しい。ここでは中期中葉～後葉2期の時間幅の中で捉えておくにとどめたい。

SB20 (第57・127図、PL9・32) 位置：8区北部、ⅢI23・24グリッド

形状：楕円形 規模：長軸570cm・短軸444cm 長軸方向：N84°E

検出：IVa層上面で明瞭な楕円形プランが検出された。先行トレンチで、東部～北部の床面に段差があることが判り、2軒が切り合っている可能性を考えて、断面・平面を精査したが、覆土は一樣で、区分できなかった。全体の掘り下げ時においても、覆土中に床面の存在を示す状況はみられなかった。そのため、棚状に高まった拡張部をもつ住居と判断して発掘を行った。しかし、出土遺物の洗浄を経て、炉体土器と覆土出土土器とに大きな時期差があることが明らかになり、やはり、2軒の重複であると考えに至った。以下、発掘時の認識に基づいて住居構造について記述し、その後、切り合いについての所見を示す。なお、上記の規模・長軸方向は、当初検出プランの値である。

覆土：一樣な黒褐色土(1層)である。

床・壁：「棚状拡張部」を除いた主要な床面は楕円形を呈し、長軸460cm・短軸375cm、面積13.8㎡、長軸方向N60°Wを測る。壁穴掘り方底を平坦に整えて形成され、中央部に向かって僅かに窪む。全面がやや硬化している。貼床は認められない。壁は最大高20cmが残存し、斜めに立ち上がる。棚状拡張部は、床主要部の東～北側に存在し、最大幅65cmの平面三日月形を呈する。掘り方底を平坦に整えて床面としており、貼床・硬化面は認められない。棚状拡張部の床面は、主要な床面から5・6cm高まっており、その立ち上がり部は斜めである。

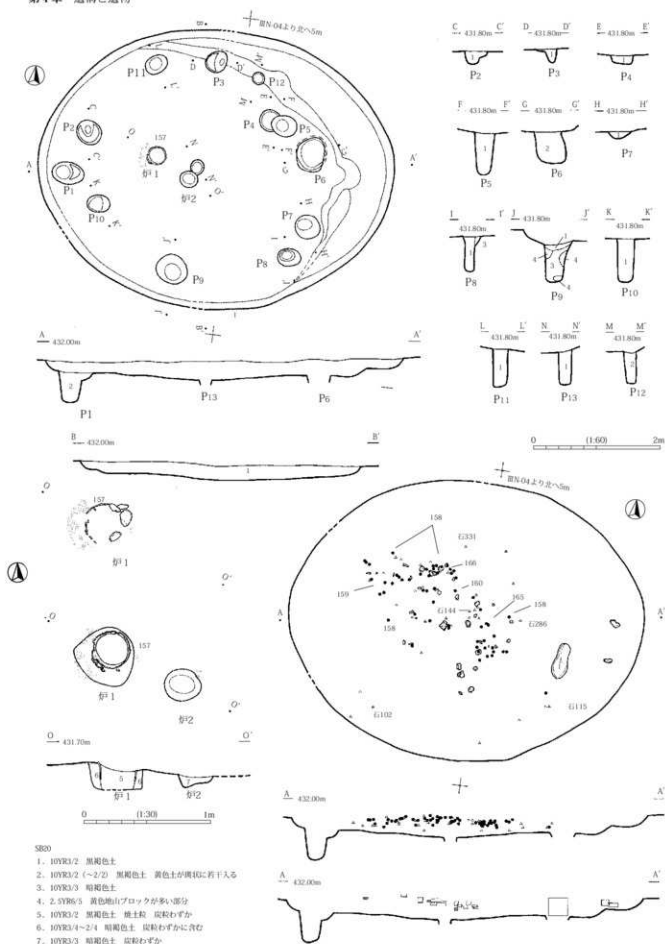
柱穴：円形ないし楕円形のピット13基が検出された。ほとんどは主要な床面の外縁に沿って掘り込まれており、P13のみ中央に位置する。深さ50cm以上の深い一群と、深さ20cm以下の浅い一群があり、前者が柱穴と考えられる。位置からみて、そのうちP1・11・5・8・9を主柱穴と推測する。五角形をなす配置である。なお、拡張部にはピット等の施設はまったく認められない。

炉：2基検出された。炉2は、主要床面の中央に位置する長径30cm、深さ10cmの浅い円形のピットで、北東側の壁と肩に被熱赤変部が認められる。P13と接するが、切り合いの先後は捉えられなかった。炉1は、炉2から北西に位置する土器埋設炉である。長径45cm、深さ20cmほどの歪んだ円形の掘り方内に土器を設置する。炉体土器(157)は胴下部以下と口縁部を切り取った深鉢である。炉体土器周囲の床面は部分的に被熱赤変して硬化している。炉底に被熱赤変部は認められない。炉体土器の東半部は、上端が欠けて、西半部に比べ高さが5cmほど減じている。この部分を録取るかのように4個の礫が検出されたが、炉構造の一部を成すものか不明確である。

その他の施設：P6については、他のピットより大形で、やや袋状をなすことから、柱穴ではない機能も想定しうるであろう。

遺物出土状況：縄文土器、石器が出土した。出土量は比較的多い。そのほとんどは、主要床面に対応する

第4章 遺構と遺物



第57図 SB20実測図

部分の覆土から出土している。土器は、中期前葉を若干含むものの、ほとんど中葉末～後葉1期に属する。石器は石磯6・石磯未成品1・楔形石器2・二次加工がある剥片1・打製石斧13・横型石器4・刃器1・打製石斧未成品1・原石1・磨石1・敲石3・石錐3・台石1点が認められる。

時期ほか：炉体土器は中期前葉、覆土出土土器は中期中葉末～後葉1期という不整合が生じている。単に埋没時間の長さとして理解するには、両者の時期差は大きい。発掘では切り分けることができなかったものの、異なる時期の住居跡2軒の重複と考える（検出数2軒として計上）。上記の「主要床面」部分が中葉末～後葉1期の住居跡に相当し、「棚状拡張部」および「炉1」が切られ残った前葉の住居跡にあたりと理解しておきたい。その逆はないと考える。ただし、中葉末～後葉1期の住居床面に、前葉住居の跡が露出していた可能性を想定しなければならず、また、柱穴配置についても、前葉の竪穴に整合的な柱穴がみつからないという難点があり、不明瞭なところが残る。

**SB21** (第58・59・128図、PL10・33) 位置：8区中央部、Ⅲ N03 グリッド

形状：円形 規模：長軸651cm、短軸615cm、床面積28.8㎡ 長軸方向：N81° E

検出：Ⅳ a層上面の検出である。SK310に切られる。住居内施設の配置や切り合い等から、2回の建て替え、すなわち三段階の変遷が推測される。上記の形状・規模・長軸方向および下記の覆土・床・壁の記述は最終段階に対応するものとなる。

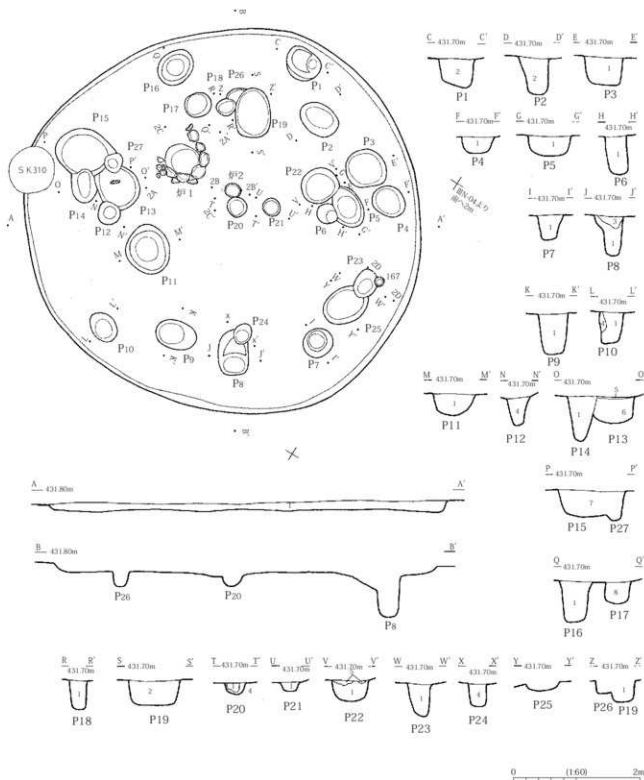
覆土：暗褐色土（1層）の単層である。

床・壁：竪穴掘り方底を平坦に整形して床面としている。P13・22最上部には貼床と思われる硬い明黄褐色土層が認められるが、それを除いて貼床も硬化面も認められない。壁は最大高15cmが残存する。

柱穴：第一段階の主柱穴はP6・24・12・18と考えられる。4基が台形気味の方形に配置されている。各柱穴は直径35cm前後の円形を呈し、深さ40～60cmを測る。第二段階の主柱穴はP2・23・8・10・(14)・(16)と考えられる。6基が六角形状に並ぶ。各柱穴は楕円形を呈し、長径45～60cm、深さ50～60cmを測る（P14・16を除く）。第一段階より規模が大きい。第三段階の主柱穴はP1・4・7・9・14・16と考えられる。P14・16が前段階の位置を踏襲し、この2基を基点に、配置を逆時計回りに若干振ったような状況である。そのためか、配置は全体的に竪穴の東北にやや偏っている。各柱穴は楕円形を呈し、長径50～60cm、深さ30～70cmを測る。

炉：3基が検出された。それぞれ各段階の柱穴に対応すると考えられる。炉2は竪穴中央やや北西に位置する土器埋設炉である。床を直径40cm、深さ3cmほど掘り窪めて炉体土器を据え、炉体土器内に褐色土を敷いて炉底をつくっているが、炉体土器は一部を残すのみ（173）で、大部分が抜き取られている。炉底および炉体土器西側の床面に被熱赤変がみられる。本遺跡では、中期前葉から後葉にかけて土器埋設炉から石囲炉への変遷が捉えられるので、炉2を第一段階の炉と考えておきたい。炉3は第二段階の炉と認識される。柱穴配置の中央からやや北西に位置する。炉石は残っていないが、被熱赤変面を取り巻いて、炉石抜き取り痕と思われる溝状の窪みが廻ることで、石囲炉と推測し得る。溝状窪みは外縁で一辺70cmの方形を呈する。炉1は第三段階の炉と考えられる。柱穴配置の中央からやや西に位置する石囲炉である。第二段階の炉3の北西部を切って掘り込まれた長径60cm、深さ20cmほどの炉穴の周囲に炉石を配している。炉石は、明確な掘り方が認められず、床面に直接設置したような状況である。炉石配列の北西側を欠くが、失われたのか、本来なかったのか明確でない。炉底は赤変していない。

埋設土器：P4・P7中間の壁近くに位置し、第二段階の柱穴P23を切って構築されている。第三段階に伴う施設と考えられる。直径23cm、深さ20cmを測る掘り方内に、底部を穿孔した小形深鉢（167）を正位に埋設する。蓋と思しきものはなかった。土器内の覆土は1層と同じ性状で、土器内に遺物は認められない。

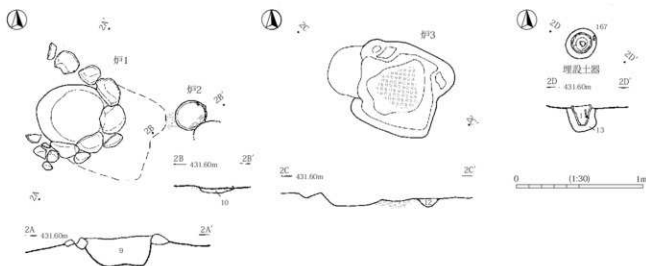


SB21

1. 10YR3/3 暗褐色土
2. 10YR2/3 黒褐色土 縦溝状アブロック少々
3. 10YR2/2 黒褐色土
4. 10YR4/3 にじみ黄褐色土
5. 10YR6/6 明黄褐色土 硬くしまる
6. 10YR2/2 黒褐色土
7. 10YR3/4 暗褐色土 黄色部分が覆れた埴状に入る

8. 10YR3/2 (~2/3) 黒褐色土 黄色部分が覆れた埴状に入る 炭粒わずか 全体に汚れた砂礫
9. 10YR2/3 黒褐色土 炭粒 焼土粒少々
10. 10YR4/4 褐色土 焼土粒が若干(土層中に多い)
11. 10YR3/3-3/4 暗褐色土 焼土粒少々
12. 10YR3/3 暗褐色土 焼土粒少々 砂石残さ取り層
13. 10YR3/4 暗褐色土 炭アブロック若干 中々粘性あり

第58図 SB21実測図(1)



第59図 SB21実測図(2)

**その他の施設：**主柱穴と認識した14基のほか、ピットは13基が検出された。そのなかには柱穴と考え得る形態のものも存在するが、前の14基と積極的に関連付けことが難しい。また、大形のP3・11・13・15・19・25などは貯蔵穴とみることでもできようか。これら13基については、どの段階に伴うものか判然としない。切り合いの先後がわかる例としては、P20がP2を切り、P14がP13を切る。なお、P13・22は、貼床に覆われること、柱穴に接近しすぎていることから、住居より古い土坑と考える。

**遺物出土状況：**縄文土器、石器が出土したが、その量は少ない。覆土やピット、炬から散在的に出土しており、床面検出の遺物はほとんどない。土器は中期中葉末～後葉1期に属するものである。石器は石鎌4・石鎌未成品1・楔形石器2・二次加工がある剥片2・打製石斧4・横刃型石器8・刃器2・磨製石斧1・磨製石斧未成品1・石核1・磨石2・敲石5・石錘2点が認められる。

**時期：**埋設土器やP2の炬体土器残片、覆土出土土器から、第一段階から第三段階まで中期中葉末～後葉1期の所産と考えられる。

**SB22** (第60・128図、PL10・33) **位置：**8区中央部、Ⅲ N09 グリッド

**形状：**円形ないし楕円形 **規模：**残存最大長468cm **長軸方向：**不明

**検出：**Ⅳ A層上面の検出である。削平・攪乱により北～西～南部を失っている。

**覆土：**二層に分層された。東壁際には褐色土(2層)が断面三角形に堆積し、その上に暗褐色土(1層)が堆積している。

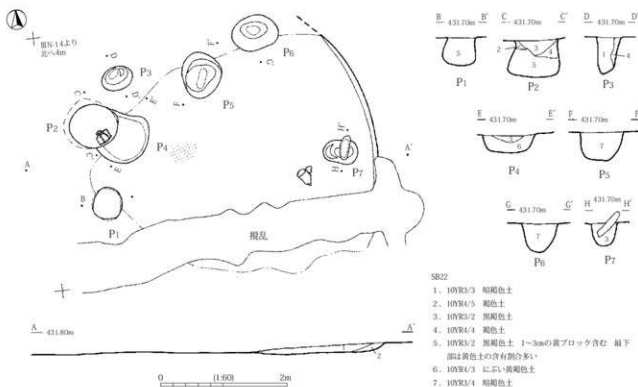
**床・壁：**壁・壁掘り方底を平坦に整形して床面とする。残存部(平面図の1点鎖線で囲った範囲)がやや硬化している。貼床は認められない。壁は最大高13cmが残存する。

**柱穴：**P1・3・6・7が柱穴に該当し、壁寄りにほぼ等間隔で掘り込まれていたものと推測されるが、南部では、想定される位置にピットが検出されなかった。各柱穴は楕円形を呈し、深さ40～60cmを測る。そのほか、P2・4・5の3基のピットを検出したが、位置や形態からみて、柱穴とは考え難い。

**炬：**P1とP5の間にある被熱赤変部が炬の痕跡と推測される。掘り込みや炬石は認められなかった。赤変部の周囲、長径60cm短径30cmほどの範囲には焼土粒が分布している。

**その他の施設：**P2は明瞭な袋状を呈し、柱穴より規模が大きいことから、貯蔵穴と考えておきたい。P2とP4との切り合いは捉えられなかった。





第60図 SB22実測図

**遺物出土状況:** 縄文土器、石器が出土したが、その量は少ない。P2の底面付近にまとまっていた浅鉢1個体(183)、P7西側の床面付近の石皿1個体を除けば、覆土からの散在的な出土である。土器は中期中葉末～後葉1期に属するものである。石器は石鏃1・石匙1・微細な刺鏃のある刺片1・打製石斧1・横刃型石器3・敲石2・石錘2・石皿1点が認められる。また、P7覆土からは長さ50cmの細長い大形の花園岩礫が出土している。

**時期:** 出土土器から、中期中葉末～後葉1期の所産と考えておきたい。

**SB23** (第61図、PL10) 位置: 8区中央部、Ⅲ N01・02・I21 グリッド

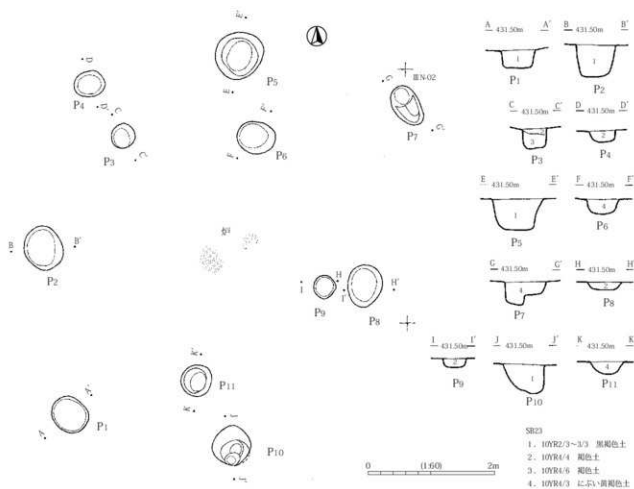
**形状:** 不明 **規模:** 下記 **長軸方向:** 下記

**検出:** IV a 層上面で、長径7m、短径6mほどの範囲に11基のピットが多角形状に並ぶ状況と、その内側に被熱赤変部が確認された。削平を受け、ピットと炉痕跡のみ残った竈穴住居跡と判断した。

**柱穴:** 11基のピットが検出されたが、柱穴配置としては、① P1・2・3・6・8 (9)・10 と、② P2・4・5・7・6・8 (9)・11 の二通りの組み合わせに分けるのが妥当と考える。①、②とも、ややびつながら六角形配置となる。各柱穴は円形ないし楕円形を呈し、長径35～77cm、深さ15～50cmと規模にばらつきがある。P2とP8 (9) が二つの配置に共通し、一方から他方への建て替えが行われたことが推測されようか。①の柱穴配置の規模は長軸長670cm、短軸長545cm、長軸方向N67° E、②は長軸・短軸とも570cmとなる。**竈:** P2とP8の中間辺りの位置に、40cmほど離れて2箇所の被熱赤変部があり、炉の痕跡と推測される。建て替え前と建て替え後に、それぞれ対応するものと考えておきたい。

**遺物出土状況:** 柱穴内から縄文土器、石器がごく少量検出された。土器はすべて小細片で、中期前葉から後葉と推測されるものの、それ以上の特定は困難である。石器は敲石1点を認めるにすぎない。

**時期:** 不明瞭ながら、縄文時代中期前葉～後葉と考えておきたい。



第61図 SB23実測図

**SB24** (第62・129図、PL11・33) 位置：8区中央部、Ⅲ H24・M04 グリッド

形状：円形 規模：長軸〈530〉cm、短軸〈500〉cm、床面積〈20〉㎡ 長軸方向：N35° E

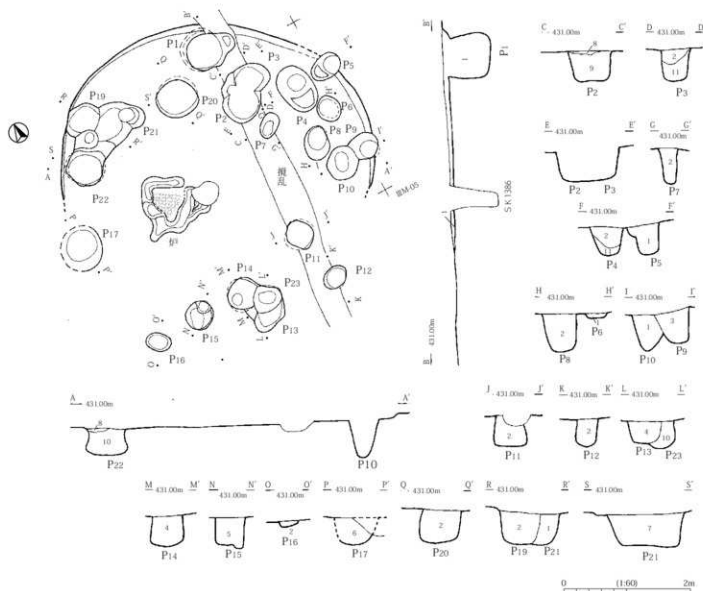
検出：Ⅳ a層上面の検出である。削平により南側の壁・床が失われ、また、溝状の攪乱が東部を切っている。SK1386に砂跡を切られる。

覆土：暗褐色土（1層）の単層である。削平のため北半部に薄く残存するにすぎない。

床・壁：竪穴掘り方底を平坦に整形して床面とする。P22の上面に貼床と思しき明黄褐色土層が認められるが、それを除いて貼床や硬化面は認められない。壁は最大高10cmが残存する。

柱穴：円形ないし楕円形のピットが21基検出された。P6・16を除く19基は、平面規模には相違があるものの、いずれも50cm前後の深さを持ち、柱穴として機能しうると考えられるが、明確な主柱穴配置を識別するのは困難である。ただし、ピットは壁寄りの部分に環状に分布するが、壁際に位置するP1・5・9・12・13・17・19などの一群と、やや内側に位置するP4・10・11・14・23・15・21などの一群に分かれるように見受けられる。切り合いの先後がわかるP9とP10、P13とP23、P19とP21をみると、いずれも前者が後者を切っている。内側の一群から壁際の一団への建て替えが行われた可能性が考えられるのではなかろうか。なお、P6・P16は他に比べて極端に浅く、柱穴とは考え難い。

炬：床面中央の西寄りに位置する。炬石は残っていないが、被熱赤変部を取り巻いて、炬石抜き取り痕と思われる深さ10～5cmの溝状の窪みが廻ることから、石囲炬であることが推測される。炬底は周囲の床面とレベル差がない。なお、炬石抜き取り痕が赤変面を東西に二分割するように切り込んでおり、複炬構造



SB24

- |                                               |                                                             |
|-----------------------------------------------|-------------------------------------------------------------|
| 1. 10YR3/3 暗褐色土                               | 7. 10YR4.5/4 褐色土 黄ブロック含む しまりあり                              |
| 2. 10YR4/4 暗褐色土                               | 8. 10YR5/6-2 5YR6/6 明黄褐色のブロック                               |
| 3. 10YR3/3-3/4 暗褐色土 灰粉少々 下部はやや黄色が濃くなるが分層は出来ない | 9. 10YR4/6 褐色土 中位に黄褐色色層あり                                   |
| 4. 10YR4/3-4/4 暗褐色土 灰粉わずか                     | 10. 10YR4/4 褐色土 明黄褐色 (2.5YR/3) のブロック (1~2m) が多く混じり懸濁状 しまりあり |
| 5. 10YR4/4 暗褐色土                               | 11. 10YR5/4-4/4 に近い黄褐色土                                     |
| 6. 10YR4.5/3 褐色土                              |                                                             |

第62図 SB24実測図

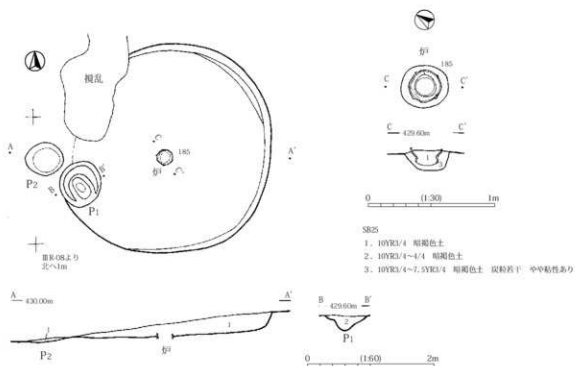
をもっていたか、あるいは作り替えが行われた可能性が考えられる。炉石抜き取り痕に囲まれる部分は、西側 50 × 50cmほど、東側 20 × 10cmほどである。

**遺物出土状況**：縄文土器、石器が出土したが、量は少ない。覆土から散在的に出土しており、床面検出の遺物はない。土器はすべて小細片の状態で検出されたが、時期がわかるものは中期中葉末～後葉1期に属する。石器は搔器状石器1・二次加工がある剥片1・横刃型石器1・磨製石斧1点が認められる。

**時期**：出土土器から、中期中葉末～後葉1期の所産と考えておきたい。

**SB25** (第63・129図、PL11・33) 位置：8区南西部、Ⅲ R03グリッド

形状：円形 規模：長軸 351cm、短軸 <330> cm、床面積 <8> m<sup>2</sup> 長軸方向：N41° E



第63図 SB25実測図

**検出:** IV a 層上面の検出である。削平・攪乱により西端部の壁・床を失う。

**覆土:** 暗褐色土 (1 層) の単層である。

**床・壁:** 竪穴掘り方底を平坦に整形して床面とする。貼床や硬化面は認められない。壁は最大高 28cm が残存し、比較的急角度で立ち上がる。

**柱穴:** 円形ないし楕円形のピットが 2 基検出されたが、形態や位置から、どちらも柱穴とは認め難い。特に P2 は本遺構に伴わない可能性もあろう。

**炉:** 床面中央に位置する土器埋設炉である。長径 38cm の円形の範囲を深さ 15cm 掘り窪めた掘り方内に、暗褐色土を充填して炉底をつくり土器を埋設する。炉体土器 (185) は胴部以下を切り取った深鉢である。炉底は赤変していない。

**遺物出土状況:** 炉体土器を除けば、遺物は覆土から縄文土器、石器がごく少量検出されただけである。土器はすべて詳細時期不明の小細片であり、石器は横刃型石器 1・凹石 1 点が出土したにすぎない。

**時期ほか:** 炉体土器から中期前葉の所産と考えられる。本住居跡は、小形で、明確な柱穴が認められない。通例の竪穴住居とは構造的に異なるものといえる。

**SB26** (第 64・129 図、PL11) 位置: 8 区南部、III S01 グリッド

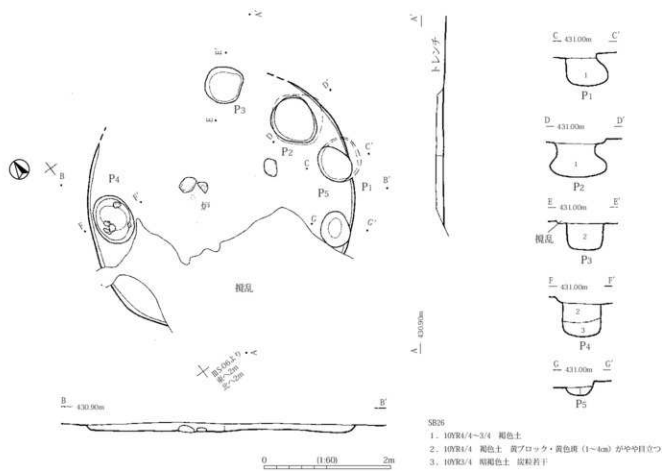
**形状:** 円形 規模: 長軸 447cm、短軸 <430> cm、床面積 <14.0> m<sup>2</sup> 長軸方向: N77° E

**検出:** IV a 層上面の検出である。攪乱により北端部と南部の壁・床を失う。

**覆土:** 褐色土 (1 層) の単層である。

**床・壁:** 竪穴掘り方底を平坦に整形して床面とする。残存部はやや硬化している。貼床は認められない。壁は最大高 12cm が残存する。

**柱穴:** 円形ないし楕円形のピットが 5 基検出されたが、形態や位置からみて、柱穴と認識しうるのは P3・4 であろう。深さは 40~50cm を測る。P5 は他に比べ浅すぎるため、柱穴とは認め難い。また、P1・2 は柱



第64図 SB26実測図

穴ではない性格を推測しておきたい。

**炉：**床面中央やや北西に直径10cmほどの被熱赤変部があり、その脇に2個の石が隣接して残されていた。石は埋設された状況にはなく、抜き取り痕も認められない。このことから、床面に石を直接置き並べた石囲炉であった可能性が考えられる。炉底は周囲の床面とレベル差がない。

**その他の施設：**P1とP2は明瞭な袋状を呈することから、貯蔵穴と考えておきたい。

**遺物出土状況：**縄文土器、石器が出土したが、その量は少ない。覆土やビットから散在的に出土しており、床面検出の遺物はない。土器は中期中葉末～後葉1期に属するものである。石器は石鏃1・石鏃未成品1・打製石斧3・横刃型石器4・刃器1・磨製石斧1・石錘5・砥石1点が認められる。

**時期：**出土土器から、中期中葉末～後葉1期の所産と考えておきたい。

**SB27** (第65図、PL11) 位置：8区南部、Ⅲ N18・23グリッド

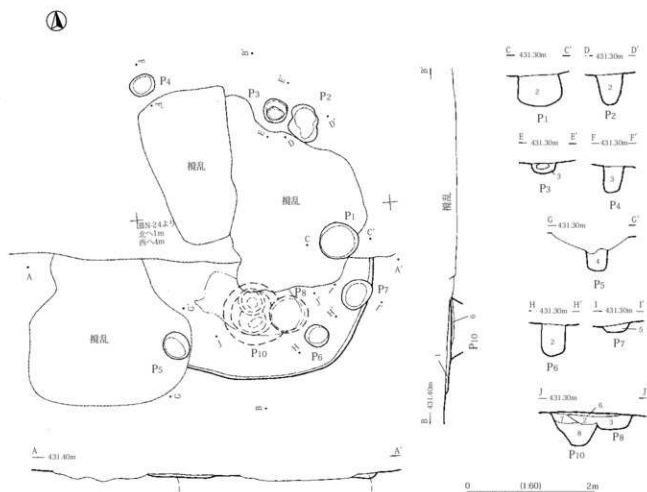
**形状：**楕円形 **規模：**長軸〈570〉cm、短軸〈440〉cm **長軸方向：**〈N33° W〉

**検出：**Ⅳ a 層上面の検出である。削平や攪乱により破壊され、壁・床は南東の一部が残るのみである。

**覆土：**暗褐色土(1層)の単層であるが、薄く残存するにすぎない。

**床・壁：**おおむね壁穴掘り方底を平坦に整えて床面とするが、P8・10の上部のみ貼床が施されている(平面図の1点鎖線で囲った範囲)。貼床部分を除いて硬化面は認められない。壁は最大高10cmが残存する。

**柱穴：**壁際に位置するP1・6・5、さらにP2・4が柱穴であろう。各柱穴は円形ないし不整形円形を呈し、深さ40~50cmほどである。P7・3は他に比べ浅すぎるため、柱穴ではなく、別性格とみなしておきたい。



SB27

- |                                              |                                  |
|----------------------------------------------|----------------------------------|
| 1. 10YR3/4 明褐色土                              | 5. 10YR3/2 黒褐色土                  |
| 2. 10YR3/3-3/2 暗褐色土 細かな黄ブロック若干 炭粒若干 ごく僅かな焼土粒 | 6. 黄色ブロック 硬くしまる 炭床               |
| 3. 10YR3/2 黒褐色土 細かな黄ブロックと炭粒若干 焼土粒少々          | 7. 10YR3/4-4/4 暗褐色土 黄色細少ブロック・炭少々 |
| 4. 10YR3/3 明褐色土 細かな黄ブロック僅か ただし縦近くはその割合が大きい   | 8. 10YR3/2 黒褐色土 細少黄ブロック少々        |

第65図 SB27実測図

炬：確認されなかった。

その他の施設：P8とP10は貼床に覆われている。建て替え前の施設であるのか、本住居跡より古い遺構であるのか判然としない。

遺物出土状況：縄文土器、石器が出土したが、その量は少ない。覆土やピットから散在的に出土しており、床面検出の遺物はない。土器はすべて小細片で、時期がわかるものは中期中葉末～後葉1期に属する。石器は微細な剥離のある剥片1・研磨痕のある剥片2・磨製石斧1点が認められる。

時期：出土土器から、中期中葉末～後葉1期の所産と考慮しておく。

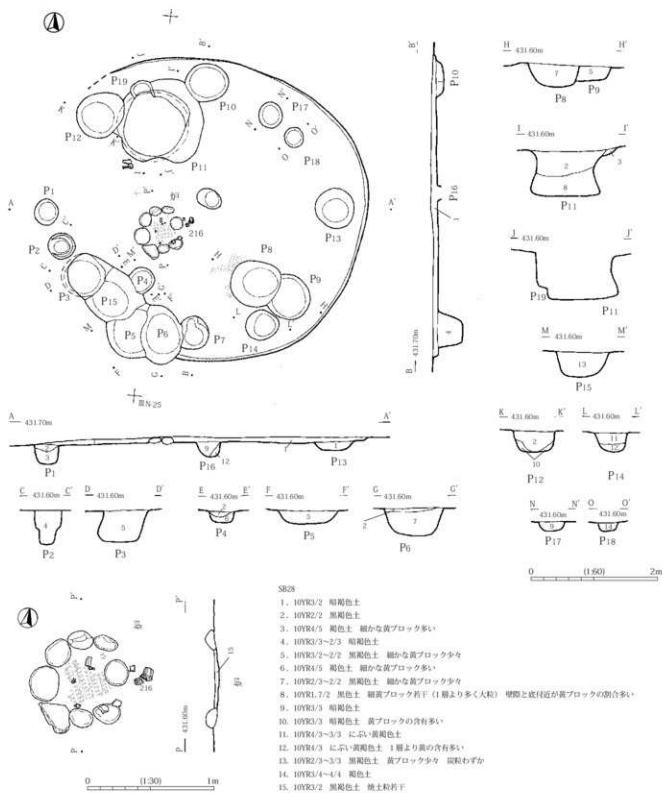
SB28 (第66・130図、PL11・35) 位置：8区南部、Ⅲ N19・20グリッド

形状：円形 規模：長軸<530>cm、短軸480cm、床面積<20>㎡ 長軸方向：N75° W

検出：Ⅳ a層上面の検出である。削平のため、壁の西部が失われている。

覆土：暗褐色土(1層)の単層である。

床・壁：竪穴掘り方底を平坦に整えて床面とする。全体がやや硬化している。貼床は認められない。壁は最大高8cmが残存する。



第66図 SB28 実測図

柱穴：壁に沿って円形のビットが分布している。深さ、平面規模とも差が大きく、明確な主柱穴を識別するのは困難であるが、西～南の壁際に位置する P19・1・2・7・14などは30cm～50cmの深さをもち、主柱穴の可能性が高いと思われる。とはいえ、北東壁沿いの P10・17・18・13は深さ10cm程度にすぎず、この間には浅いビットしかないなど不明確なところも残る。

炉：床面中央に西寄りに位置する石囲炉である。規模は炉石内縁で長径50cm、短径40cmを測る。炉石は掘り方をもたず、直接床面に設置されており、南西端の1石のみ角礫を用いている。被熱赤変した炉底は中央に向かって僅かに窪む。また、P8の西側に、これに切られる被熱赤変部がみられる。明確ではないが、石囲炉を作る前の旧炉の痕跡である可能性も考えられる。

その他の施設：P3・11は袋状を呈するピットで、その形態から貯蔵穴としての機能が推測される。ただし、P19の存在や出土土器からすれば、P11は本住居跡より古い土坑の可能性もあろう。

遺物出土状況：縄文土器、石器が出土したが、その量は少ない。覆土やピットから散在的に出土しており、床面検出の遺物はごく少量にすぎない。土器は中期中葉末～後葉1期に属するものがほとんどである。石器は石鏃1・石匙1・楔形石器1・打製石斧7・横刃型石器6・磨製石斧1・磨石1・敲石1点が認められる。

時期：出土土器から、中期中葉末～後葉1期の所産と考えておきたい。

#### SB29 (第67・129図、PL12) 位置：8区南部、Ⅲ S09・10 グリッド

形状：円形ないし楕円形 規模：残存最大長445cm 長軸方向：不明

検出：Ⅳa層上面の検出である。削平や攪乱により、南西部を主体として、大きく破壊されている。

覆土：黒褐色土(1層)の単層である。

床・壁：壁掘り方底を平坦に整形して床面とする。残存部はやや硬化している。貼床は認められない。壁は最大高12cmが残存する。

柱穴：壁や床残存部の外縁に沿って、円形のピットP7・8・4・9・10・5・6が並ぶ。深さ45cm前後で、坑底レベルもほぼ揃うが、明確な支柱穴を識別するのは困難である。袋状の形態のものもあり、柱穴とは異なる性格のピットを含む可能性があろう。また、南から西側にはP1・2しか検出されておらず、柱穴配置には不明確な点が残る。

炉：床面中央の東寄りに位置すると思われる石囲炉である。床面を5cmほど掘り窪め、その縁辺に石を配置するが、明確な掘り方は認められない。炉底は一部赤変している。炉石は現状4個の石がU字状を呈して並んでいるが、開口する南西側の石が攪乱により飛ばされた可能性が高い。

その他の施設：P8は明瞭な袋状で上部がラッパ状に広がる形態である。貯蔵穴か。

遺物出土状況：縄文土器、石器が出土したが、その量はごく少ない。覆土やピットから散在的に出土しており、床面検出の遺物はない。土器は中期中葉末～後葉1期に属するものがほとんどである。石器は打製石斧1・横刃型石器1点が認められるにすぎない。

時期：出土土器から、中期中葉末～後葉1期の所産と考えておきたい。

#### SB30 (第68図、PL12) 位置：18区南東部、Ⅳ L09 グリッド

形状：柱穴配置から円形と推測 規模：残存最大長415cm 長軸方向：不明

検出：Ⅳa層上面で、直径4mほどの円周上に8基のピットが連続して並ぶ状況と、その内側に被熱赤変部が確認された。削平をうけて、柱穴と炉痕跡のみ残存した竪穴住居跡と判断した。

柱穴：配置は、東側の4基と西側の4基が、およそシンメトリーをなす。それぞれの柱穴群の北端にあたるP5・P6と、南端のP2・P8の間隔が広い。各柱穴は、円形ないし楕円形を呈し、深さは20cm前後を測るが、P8のみ60cmと深い。

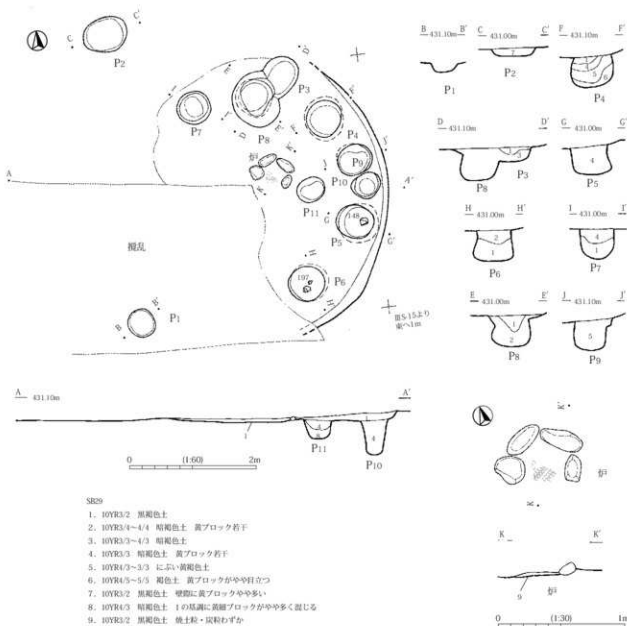
炉：柱穴配置の中央から北へ1mほどの位置に被熱赤変部があり、炉の痕跡と考えられる。

遺物出土状況：遺物はP8の覆土最上部から台石1点(343)が出土したのみである。

時期：縄文時代と思われる。



第4章 遺構と遺物



第67図 SB29実測図

SB33 (第69図、PL12) 位置: 12区北部、IV T11グリッド

形状: 円形 規模: 長軸549cm、短軸489cm、床面積19.5㎡ 長軸方向: N4° E

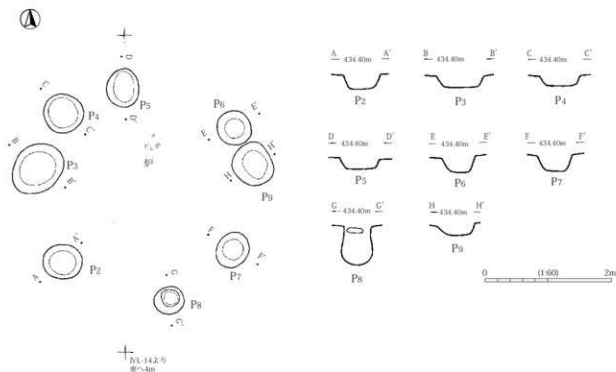
検出: IV a層上面の検出である。

覆土: 暗褐色土(1層)の単層である。

床・壁: 壁穴掘り方底を平坦に整えて床面とする。貼床・硬化面は認められない。壁は最大高4cmが残存するにすぎない。

柱穴: 床面中央と壁の中間あたりに円形を基調とするピットが環状に分布する。P1・9・8・19・6・13など40cm以上の深い掘り方をもつ一群と、P5・10・20など30cm以下の浅い一群があり、前者のうち幾つかが主柱穴と考えられる。ただし、平面規模にはばらつきがみられる。

炉: 床面中央に、長径45cmほどの範囲で僅かに窪む部分があり、その内部に被熱赤変面が認められる。これが炉跡と考えられる。その西～南縁部には、深さ20～30cmの平面L字形を呈する溝状の凹部が存在し



第68図 SB30実測図

ている。石組みを伴う構造であった可能性があろう。

**その他の施設：**P14・16は、他のピットと違い、壁に接して掘り込まれており、性格が異なる可能性があろう。出入り口施設に関連するか。また、P2・4・7など柱穴としては不自然な形態・位置のものがあり、それらは別土坑の可能性もあろう。

**遺物出土状況：**縄文土器、石器が出土したが、その量はごく僅かである。土器は、床直上およびピットから、中期と思われる土器の小細片9点が検出されたにすぎない。石器は石鏃3・二次加工がある剥片1点が認められる。

**時期：**住居構造や出土土器から、中期の所産と考えておきたい。

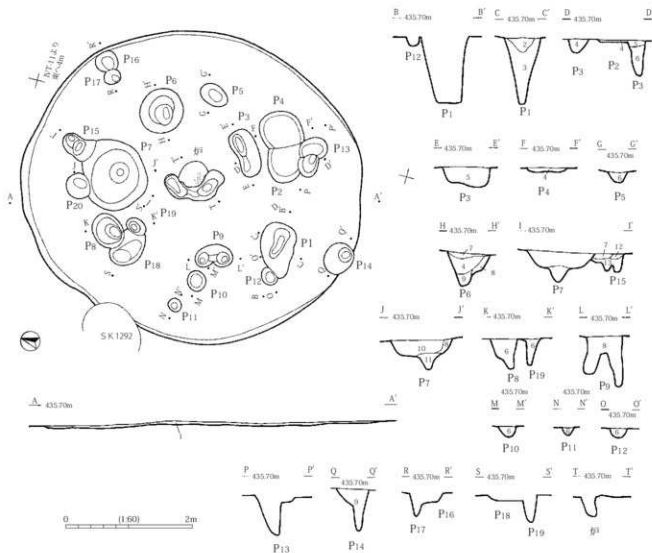
**SB34** (第70・131・132・159図、PL12・34・43) **位置：**19区、Ⅲ D06・11グリッド  
**形状：**円形 **規模：**長軸〈580〉cm、短軸〈510〉cm、床面積〈20.4〉㎡ **長軸方向：**N59° E

**検出：**Ⅳa層上面の検出である。市道造成の擾乱により南部が失われている。

**覆土：**八層に分層された。壁際になぶい黄褐色～暗褐色土(8・7層)が断面三角形に堆積し、その上に壁際～床面中央付近にかけて炭粒を含む暗褐色土(6層)、さらに炭粒を多く含む黒褐色土(5層)が残った床面を薄く覆う。残りの空間になぶい黄褐色土と暗褐色土の互層(4～1層)が埋積している。

**床・壁：**竪穴掘り方底を平坦に整形して床面とする。全面が硬化している。貼床は認められない。壁は最大高35cmが残存し、垂直に近く立ち上がる。

**柱穴：**壁沿いに掘り込まれたP1～5が主柱穴であり、本来、6基が六角形配置をなしていたと考えられる。各柱穴は円形ないし楕円形を呈し、P2が若干浅いものの、長径70cm・短径60cm、深さ60cm前後と、規模・形状ともほぼ揃っている。そのほか、P6～9の4基のピットを検出した。P4に西隣するP6は、長径45cmと主柱穴より小振りだが、同程度の深さをもち、地山由来の黄褐色土で埋戻されている。P4に建て替えられた柱穴であると思われるが、不要となった別性格の施設である可能性も考えられよう。P6～9は長



SB33

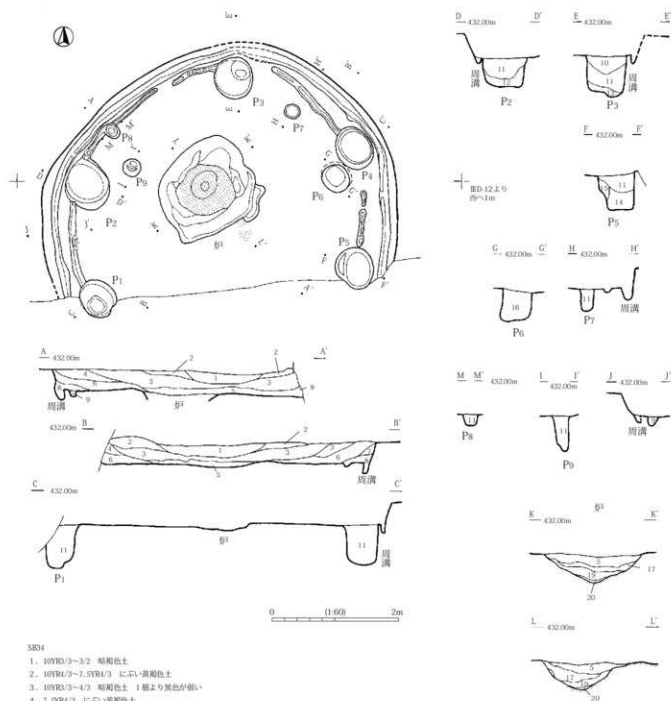
- |                                                        |                                            |
|--------------------------------------------------------|--------------------------------------------|
| 1. 10YR3/4 暗褐色土 黄褐色ロームを含む                              | 7. 10YR4/4 褐色土 しまりあり                       |
| 2. 10YR2/3 黒褐色土 ローム含まず 3~5mm大炭粒が若干まばらに含む 糠を含む<br>しまりあり | 8. 10YR5/6 黄褐色土 ローム主体 しまり受け軟らかい            |
| 3. 10YR3/5 赤い-黄褐色土 ローム粒面粒状に含む しまりに欠ける                  | 9. 10YR4/5 褐色土 ローム含む しまり受け軟らかい             |
| 4. 10YR5/8 黄褐色土 褐色土を含む しまりなく軟らかい 粘性あり                  | 10. 10YR2/3 黒褐色土 ローム炭粒状に含む 1mm大炭粒を含む しまりあり |
| 5. 10YR3/4 暗褐色土 ローム含まず 1~2mm大炭粒若干含む                    | 11. 10YR3/4 暗褐色土 ローム炭粒状に含む しまりに受け軟らかい      |
| 6. 10YR4/4 褐色土 ローム粒状含む 粘性あり しまりに欠ける                    | 12. 10YR3/4 赤い-黄褐色土 しまりに欠ける                |
|                                                        | 13. 10YR5/8 明黄褐色土 しまりに受け軟らかい               |

第69図 SB33実測図

径25cm前後とかなり小形で、主柱穴とは異なる性格をもつものであろう。

**炉:** 床面中央北西寄りに位置する。石囲炉と考えられるが、炬石は遺存していない。150×110cmの長方形を呈する深さ40cmの掘り込みの南東辺に、幅20cm、深さ5cmほどの浅い張出部が付く。他の南西～北東辺の斜面中段(床面から20~30cm前後下)には、テラス状の緩傾斜部が廻っている。このことから、南西～北東辺は緩傾斜部上に平石を立て置きにし、住居中央部にあたる南東辺では、張出部に平置きした構造を推測する。炉底は広く被熱赤変している。赤変部は厚く、最大5cmもある。

**周溝:** 深さ15~20cmの周溝が壁下を全周している。また、その内側に、主柱穴を連結するように掘り込まれた溝が存在する。深さ5~10cm程度と壁下を廻る周溝より浅く、部分的に小ビット状に落ち込む箇所がある。P2・P3間では、壁下周溝との間隔はごく狭いが、P1・P2間およびP3~P5間では広がっている。  
**遺物出土状況:** 縄文土器、土製品、石器が出土した。出土量は比較的多いが、ほとんど覆土からの出土で



SB34

1. 10YR3/3-3/2 暗褐色土
2. 10YR1/3-7.5YR4/3 に近い黄褐色土
3. 10YR3/3-4/3 暗褐色土 1層より黒色が強い
4. 7.5YR4/3 に近い黄褐色土
5. 10YR2/2-3/1 黒褐色土 炭粒・炭粉を多量に含む 暗褐色土粒も含む 明褐色色 10YR6/6-7.5YR6/6の地山礫小ブロック若干
6. 10YR3/3 暗褐色土 地山礫小ブロックが目立つ 全体として炭状 炭粒若干
7. 10YR3/4 暗褐色土
8. 10YR4/3 に近い黄褐色土
9. 10YR3/3 暗褐色土
10. 10YR1/4-4/4 暗褐色土 11層よりやや黄色 炭色を帯びる
11. 10YR4/4 暗褐色土 細かい明褐色地山ブロック(5mm以下)と細かい黒褐色ブロック(5mm以下)を含む 全体として細かいブロック層相
12. 10YR3/4 暗褐色土 地山礫とそのブロック(2-3cm)が多く混じる
13. 10YR4/4 褐色土 地山礫とそのブロック(2-3cm)の混入が3層より多い
14. 10YR3/4 暗褐色土 11層に似るが黄ブロックの混入が少ない 炭層多し
15. 10YR5/4 に近い黄褐色土 地山礫子の混入多い
16. 明褐色地山土で埋められている
17. 10YR3/3-3/4 暗褐色土 細かい明褐色地山ブロックを含む 炭粒わずかに 焼土粒若干
18. 10YR5/4 に近い黄褐色土 ブロックを含まない均質な土
19. 10YR1/3-3/2 黒褐色土 5層に似て炭粒・焼土粒を多く含む地山礫ブロックも混むが、粒径がより小さく均等に混じる
20. 5YR3/4-7.5YR3/4 暗赤褐色 焼土粒子が均等に混じり込んだシルト

第70図 SB34実測図

ある。土器は、前後の時期を僅かに含むが、中期後葉2期に属するものがほとんどを占める。土製品は、土製円盤1点・環状を呈すると思われる土製品1点が検出された。石器は石鎌2・石錘1・異形石器1・不定形石器1・楔形石器2・二次加工がある剥片1・微細な剥離のある剥片1・打製石斧16・横刃型石器5・研磨痕のある剥片1・刃器1・磨製石斧2・磨製石斧未成品2・石核2・磨石4・敲石4・石錘7点が認められる。

時期：覆土出土土器の主体である中期後葉2期の所産と考えておきたい。

**S B 3 5** (第71・133図、PL12・33) 位置：19区、Ⅲ C10・D06 グリッド

形状：円形ないし楕円形 規模：確認最大長606cm 長軸方向：不明

検出：Ⅳ a層上面の検出である。遺構の大部分は調査区外に存在し、確認できたのは南側の一部に限られる。SK782に切られる。

覆土：暗褐色土(1層)の単層である。

床・壁：壁掘り方底を平坦に整形して床面とする。全面がやや硬化している。貼床は認められない。壁は最大高20cmが残存し、垂直に近く立ち上がる。

柱穴：円形ないし楕円形のピット10基を検出した。明確な主柱穴を指摘することは難しいが、P1・2・4・5・6のいずれかに主柱穴の可能性を考えておきたい。ただし、長径70～40cm、深さ40cm～70cmと、規模にはばらつきがある。そのほかP7・8・9・3・10の5基のピットを検出した。P10は掘下げていないため不明確だが、P7・8・9・3は20cm以下と浅く、規模も小さい。主柱穴とは異なる性格を推測しておきたい。

周溝：深さ15cm前後に掘り込まれ、確認した限り、壁下を全周している。

遺物出土状況：縄文土器、石器が出土した。出土量は多くはない。P5の上部から大形の破片2個体が各々まとまって出土した(252・253)ほかは、覆土やピットからの散在的な出土である。床面検出の遺物はない。土器は中期後葉2期に属するものがほとんどを占める。石器は楔形石器1・打製石斧1・横刃型石器1・磨石1・石錘1点が認められる。

時期：覆土出土土器の主体である中期後葉2期の所産と考えておきたい。

**S B 3 6** (第72・132図、PL12) 位置：19区、Ⅲ C10 グリッド

形状：円形ないし楕円形と推測 規模：残存長軸420cm、残存短軸370cm 長軸方向：N54° E

検出：Ⅳ a層上面の検出となる。Ⅲ C09 グリッド東部からⅢ C10 グリッド南西部には土坑が集中しているが、そのなかに直径30～40cmほどの柱穴様の小形土坑が多く検出されていた。規則的な配置がみられるか検討してみたところ、六角形状に並ぶ6基が把握された(P1～6)。さらに、それらに囲まれた内部に被熱赤変部と黒褐色土の広がりが見られた。削平されて、部分的に残存する壁穴住居跡と判断した。

覆土：炭粒を多く含む黒褐色土(1層)の単層である。周囲の土坑とはやや性状が異なる。

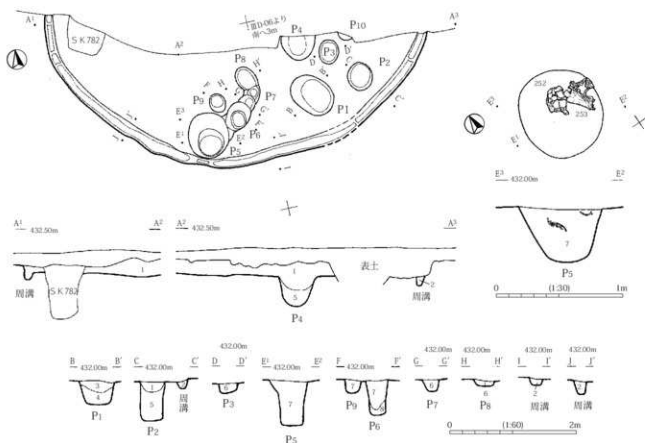
床・壁：覆土残存部を含めて貼床・硬化面は認められない。壁は残っていない。

柱穴：P1～6が主柱穴と考えられる。各柱穴は円形ないし楕円形を呈し、深さはP1・2が60cmと深いが、P3～6は40cmほどである。そのほか、柱穴配置の中に存在するP7～10の4基を本住居跡に含めたが、別遺構に伴うものかもしれない。

炉：柱穴配置の中央から北東1mに被熱赤変部があり、炉跡と考えられる。掘り込みは認められない。

遺物出土状況：ピットや覆土から縄文土器、石器が、少量出土したのみである。床面検出の遺物はない。土器は中期中葉末～後葉1期に属する。石器は横刃型石器1点が認められる。

時期：出土した土器は少ないが、中期中葉末～後葉1期の所産と考えておきたい。



SB35

1. 10YR3/4 暗褐色土 細か～明黄褐色地山ブロック (5mm以下) を含む
2. 10YR3/3～3/1 に近い暗褐色土
3. 10YR2/3 黒褐色土 1cm以下の明黄褐色地山ブロックと 1cm以下の黒色ブロックを含む
4. 10YR3/3 暗褐色土 3層より地山粒子の含有が多い、黒色ブロックは少ない
5. 10YR3/3～4/3 暗褐色土 1層より地山細ブロックと地山粒子の含有が多い
6. 10YR3/3 暗褐色土 地山ブロック (1cm以下) が混じる
7. 10YR2/3～3/3 黒褐色土 細か～明黄褐色地山ブロック (5mm以下) を含む
8. 10YR3/4～4/4 暗褐色土 地山ブロックとその粒子の混入が多い、ブロックは7層より大きい

第71図 SB35実測図

SB37 (第73・74・134図、PL12・13・35) 位置: 19区、ⅢC09・14グリッド

形状: 楕円形 規模: 残存長軸530cm、短軸〈430〉cm、残存床面積12.0㎡ 長軸方向: N45° W

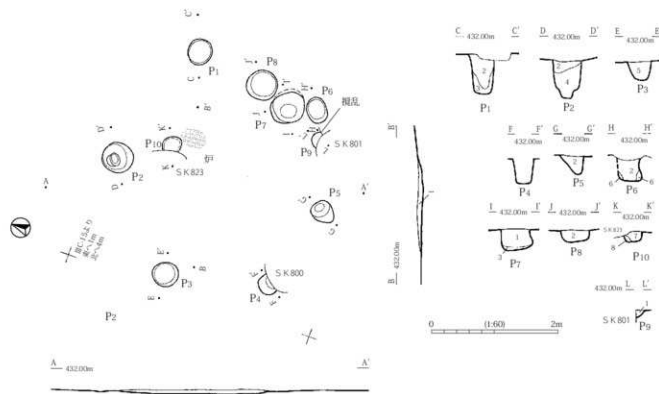
検出: IV a層上面の検出となる。SB38、SK1403・1404に切られる。

覆土: 二層に分層されたが、性状は似通っている。壁際～床面中央付近にかけて暗褐色土(5層)が断面三角形形状に堆積し、残りの空間を暗褐色土(6層)が埋積する。なお、層番号はSB38を含めた通し番号である(ピット込み)。

床・壁: 竪穴掘り方底を平坦に整形して床面とする。貼床・硬化面は認められない。壁は最大高16cmが残存し、斜めに立ち上がる。

柱穴: 円形ないし楕円形のピット9基を検出した。壁ないし床面残存部外縁に沿って掘り込まれている。長径25cm～75cm、深さ10～50cmと規模にばらつきがあり、主柱穴の明確な組み合わせを抽出することは難しい。なお、P7の底面は床面から80cmを測り、とびぬけて深い。P7はSB38に属する可能性が高く、この点は後述する。

炉: 小形の石囲炉で、床面中央からやや東寄りに位置する。床面を直径30cm、深さ10cmほど掘り窪めた掘り方内壁に、楕円形の石4個を方形に組み合わせて据え付けている。炉底は赤変していないが、掘り方の北西～南西部層に、部分的な赤変部が認められる。



SB36

1. 10YR3/2 黒褐色土 非常に細かい炭粉がやや目立つ 地山細ブロック (3mm以下)・黒い黒ブロック (1cm以下) を含む
2. 10YR3/3 暗褐色土 地山細ブロック 炭粉若干
3. 10YR3/3 に近い黄褐色土 地山粒子の含有率が高い
4. 10YR3/2 暗褐色土 2層より地山ブロックが少ない 空隙やや多い
5. 10YR3/2 黒褐色土 1層に似るが地山ブロックの混入 (特に下部) が多く黒色ブロックを含まない
6. 10YR3/4 に近い黄褐色土 地山粒子の含有率が高い
7. 10YR3/2-3/3 黒褐色土 地山細ブロック 炭粉若干
8. 10YR4/4 褐色土

第72図 SB36実測図

**その他の施設**：北壁に地山が壁穴内側に張り出す部分が認められる。西端をSK1403に切られるが、平面台形を呈し、現状で長さ40cm、幅は付け根部分で80cm、先端部で50cmを測る。地山を掘り残して造り出した棚状施設と理解する。形状・規模は異なるもののSB18にも同様な施設がみられる。

**遺物出土状況**：覆土やビットから縄文土器、石器が出土した。出土量は多くない。土器は中期前葉に属する。石器は石匙1・楔形石器1・二次加工がある剥片1・打製石斧6・横刃型石器1・刃器1・磨製石斧未成品1・敲石2・石錘2・台石2点が認められる。

**時期**：覆土出土の土器から中期前葉の所産と考えておきたい。

**SB38** (第74・134・135図, PL12・13・36) 位置：19区、ⅢC14グリッド

**形状**：円形ないし楕円形 **規模**：残存最大長460cm **長軸方向**：不明

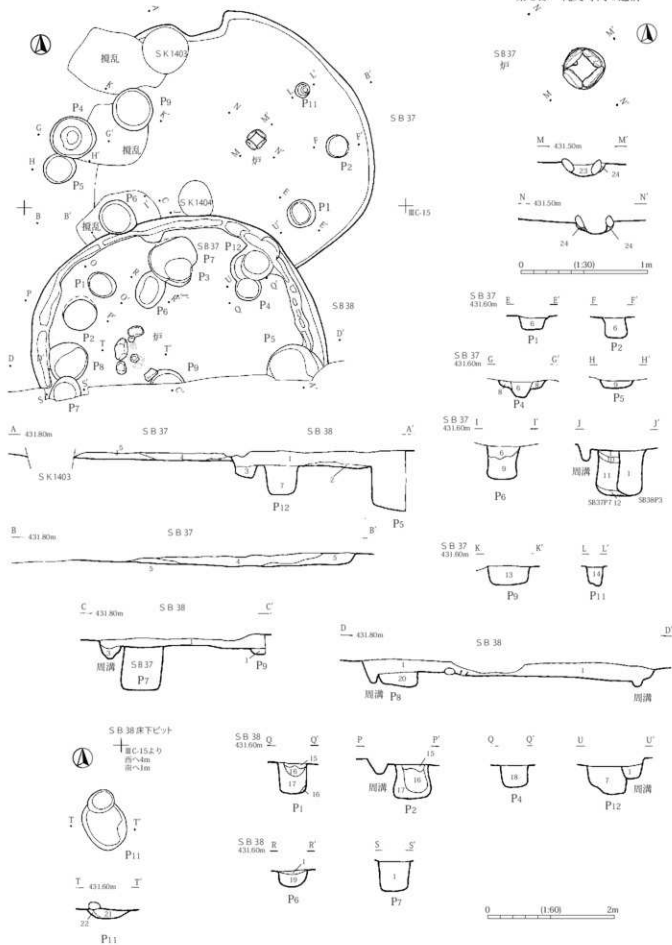
**検出**：IV a層上面の検出となる。市道造成の攪乱により南半部が失われている。SB37、SK1404を切る。

**覆土**：二層に分層された。床面直上をにぶい黄褐色が部分的に薄く覆い(2層)、その上に黒褐色土(1層)が堆積する。なお、層番号はSB37を含めた通し番号である(ビット込み)。

**床・壁**：壁穴掘り方底を平坦に整形して床面とする。全面がやや硬化している。貼床は認められない。壁は最大高27cmが残り、急角度で立ち上がる。

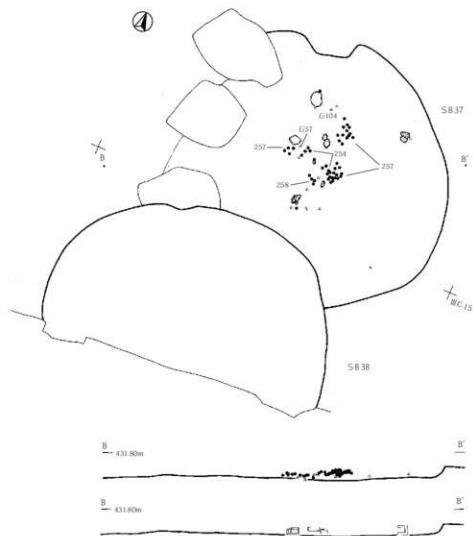
**柱穴**：壁沿いに掘り込まれたビットのうち、深めの掘り方をもつP1~5・7・12が主柱穴と考えられる。各柱穴は円形ないし楕円形で、おおむね深さ50cm前後であるが、P3・5は70cmと深く、またP5は平面規模も

第2節 縄文時代の遺構



第73図 SB37・38実測図(1)





SB37・SB38

- |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>1. 10YR3/2-3/3 黒褐色土 地山ブロック含まない</p> <p>2. 10YR1/3-3/3 にふい黄褐色土 地山土ブロックを多く含む</p> <p>3. 10YR1/4 暗褐色土 地山土ブロックと黒褐色土の割合に細かい(3mm)ブロック</p> <p>4. 10YR2/2-3/4 暗褐色土 黒色炭あり</p> <p>5. 10YR3/2-3/4 暗褐色土</p> <p>6. 10YR3/3 暗褐色土 地山ブロックが平ら面に混入</p> <p>7. 10YR3/3-3/2 暗褐色土-黒褐色土 1cm以下の細かい地山ブロックが若干散在</p> <p>8. 10YR1/4-3/4 褐色土</p> <p>9. 10YR3/2 黒褐色土 地山ブロックが散在 やや空隙あり</p> <p>10. 10YR3/2 黒褐色土を基調に赤-地山ブロックが多く混じる 貼床か</p> <p>11. 10YR3/2 黒褐色土 地山土ブロック(20cm以下)が散在 空隙多い</p> <p>12. 10YR1/3-4/2 にふい黄褐色土 灰礫物を含まない</p> | <p>13. 10YR4/3-4/4 にふい黄褐色土 黒褐色土ブロック・地山ブロックが横状に不明瞭に混じる</p> <p>14. 10YR2/4 黒褐色土 炭粒わずか</p> <p>15. 10YR2/3-3/3 黒褐色土</p> <p>16. 10YR3/3 暗褐色土 地山土ブロック含む</p> <p>17. 10YR4/3-4/4 にふい黄褐色土 地山粒子の含有が多い</p> <p>18. 10YR3/3-4/3 暗褐色土 やや空隙あり</p> <p>19. 10YR4/4 褐色土 暗褐色と黄褐色の細かいブロック状</p> <p>20. 10YR4/5 褐色土 黄色土が横状に入る</p> <p>21. 10YR4/3 暗褐色土と黄褐色の細かいブロック含む 粘土粘若干</p> <p>22. 10YR4/3 にふい黄褐色土 地山土ブロック含む</p> <p>23. 10YR2/2-3/2 黒褐色土 粘土が細かく粘色あり</p> <p>24. 10YR4/4 褐色土</p> |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

第74図 SB37・38 実測図(2)

他に比べて大きい形勢を示している。P1・2には柱痕跡を反映するかとも思われる土層がみられる。P12については、周溝に切られる状況が認められることから、本住居廃絶前には埋没していたと考えられ、P12からP4への建て替えが行われたことを推測する。なお、本住居P3に切られるSB37P7には、埋土上部に貼床の可能性をもつ層(10層)が存在する。SB37の壁の延長ラインに沿って位置することからSB37に含めたが、P12とP4の関係と同様に、SB37P7が、P3に建て替える前の本住居の柱穴である可能性を想定しておきたい。

炬：床面中央西寄りに位置する被熱赤変部が炬跡であろう。赤変部を取り囲むように5個の石が残ってお

り、石囲炉であった可能性がある。赤変面の直上には土器底部が残されていた。炉構造と関係するか。また、この炉跡直下の重複した位置に、長径80、短径65cm、深さ15cmの楕円形の掘り込みP11が検出された。図化記録を取り忘れてしまったが、底面には被熱赤変部が認められた。P11は作り替えられる前の旧炉にあたる事が推測される。

周溝：P7脇から、周溝が竪穴北半部の壁下を廻り、P5に接続する。深さはおおむね15cm程度である。

遺物出土状況：縄文土器、石器が出土したが、量的には多くない。覆土やピットから散在的に出土しており、床面検出の遺物はほとんどない。土器は、中期前葉・中期中葉末～後葉1期を僅かに含むが、中期後葉2期に属するものがほとんどを占める。石器は石鏃未成品1・不定形石器1・二次加工がある剥片1・打製石斧4・横刃型石器6・磨石2・石錘1点が認められる。

時期：覆土出土土器の主体である中期後葉2期の所産と考えるべき。

### SB39 (第75・135図、PL13・36) 位置：19区、ⅢC08・09グリッド

形状：円形 規模：長軸〈480〉cm、短軸〈480〉cm、床面積〈17.0〉㎡ 長軸方向：N10° E

検出：Ⅳa層上面の検出となる。攪乱により、西半部の壁立ち上がりやを失い、そのほかも、いたるところ破壊されている。

覆土：攪乱により遺存状況は悪いものの、二層に分層された。壁際～床面中央付近にかけて暗褐色土(2層)が断面三角形に堆積し、残りの凹部を黒褐色土(1層)が埋積する。

床・壁：竪穴掘り方底を平坦に整形して床面とする。貼床・硬化面は認められない。壁は最大高7cmが残存するにすぎない。

柱穴：壁に沿って円形ないし楕円形のピットが掘り込まれているが、主柱穴の明確な組み合わせ・配置を指摘することは困難である。深さは、P6・9がそれぞれ15・20cmと浅いが、他は30～50cmを測る。相対的に大形の一組と小形の一組が認められ、柱穴の組み合わせを一定程度あらわしている可能性がある。大形のP4を小形のP5が切ることからすれば、すべてではないにせよ、前者から後者への建て替えが行われたことも推測できよう。なお、P16は他に比べ内側に位置すること、P12については形態から、柱穴ではない性格を推測しておきたい。

炉：竪穴中央北寄りに位置する攪乱内に被熱赤変部が認められ、炉の痕跡と思われる。赤変部は床面から20cm低い攪乱底に残されており、掘り込みを伴う構造であったことは確実である。

その他の施設：P12は他に比べ大形で、袋状を呈する。貯蔵穴としての機能を想定しておきたい。

遺物出土状況：覆土やピット、本遺構を切る攪乱から縄文土器、石器が出土した。量的には多くない。床面検出の遺物はない。土器は中期前葉を僅かに含むものの、中期中葉末～後葉1期に属するものがほとんどを占める。石器は石鏃2・楔形石器3・打製石斧8・横刃型石器1・刃器1・石核1・磨石1・破石3・石錘1・台石1点が認められる。

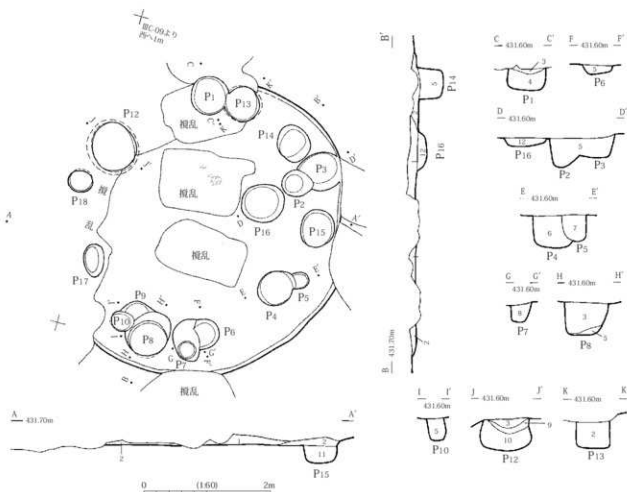
時期：出土土器から中期中葉末～後葉1期の所産と考えるべき。

### SB40 (第76・136・137・159図、PL13・36・37・43) 位置：19区、ⅢD07・12グリッド

形状：円形 規模：長軸〈650〉cm、短軸605cm、床面積〈25.9〉㎡ 長軸方向：N0° E

検出：Ⅳa層上面の検出となる。調査区外にある北側1/3ほどが未調査である。平面検出では周囲の地山と覆土の境界が不明瞭であったため、東西(調査区北壁沿い)・南北方向にトレンチを入れて床面と壁の立ち上がりを確認した。これをもとに仮プランを引いて掘り下げを進めたが、最終的には、壁面を下から追いつけるかたちでプランを確定した。他遺構との切り合いについては、SB41、SK855・856・857・858を切

④



SB39

- |                                                                                                                                                                                                                                 |                                                                                                                                                                                                                                                     |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>1. 10YR3/2 黒褐色土 5mm以下の地山粒を含む 灰粉少々</p> <p>2. 10YR3/3~4/3 暗褐色土 5mm以下の地山粒を若干含む 1層に比べ基調に地山粒の混入が多い</p> <p>3. 10YR3/2 黒褐色土</p> <p>4. 10YR3/3~3/4 暗褐色土 地山ブロックと地山粒子が混状に入る</p> <p>5. 10YR3/3 暗褐色土 地山ブロック混入</p> <p>6. 10YR3/4 暗褐色土</p> | <p>7. 10YR3/3~3/4 暗褐色土 5mm以下の地山ブロックが若干混入する 黄色が強い部分で混状に入る</p> <p>8. 10YR3/3~3/4 暗褐色土</p> <p>9. 10YR3/4 暗褐色土 1層の基調に地山土が混状に不規則に混入</p> <p>10. 10YR4/4 暗褐色土 地山ブロック混入</p> <p>11. 10YR4/4~3/4 褐色土 上部に地山ブロック混入</p> <p>12. 10YR3/3~4/3 暗褐色土 黄と暗褐色が9:9や混状</p> |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

第75図 SB39 実測図

ることを確認した。

**覆土：**四層に分層された。壁際に褐色土・にぶい黄褐色土（4・3層）が断面三角形に堆積し、その上の壁～床面を暗褐色土（2層）が覆う。さらに、残りの窪みを黄褐色土（1層）が埋積している。

**床・壁：**竪穴掘り方底を平坦に整形して床面とする。全面が硬化している。SK856覆土の上には黄褐色土主体の貼床が施されている。SK857・858部分には貼床はないが、他の床面と同様に硬化している。壁は最大高50cmが残存し、垂直に近く立ち上る。

**柱穴：**壁沿いに掘り込まれたP1～6が主柱穴と考えられる。P2～5は円形を呈し、長径50～60cm、深さ60cm前後と、規模・形状ともほぼ揃う。P1・2は全体を確認していないが、同様な形態であろう。P5には柱痕跡ないし抜取り痕とも思われる土層変化が認められる。調査区外の未確認部分には主柱穴1基ないし2基が存在し、全体として七角形ないし八角形状の配置をなすことが推測される。

**炉：**床面中央や北寄りに位置する石囲炉である。一辺150cm、深さ40cmの方形掘り込みの各辺斜面にテラス状の緩傾斜部をつくっており、そこに炉石を設置していたと思われるが、炉石が遺存するのは南辺に限られる。南辺では床面から10～20cmほど低い位置に緩傾斜部を設け、そこに平置きした60×20cmの板状石を中央にして炉石を据え付けている。西辺の緩傾斜部も南辺とほぼ同じ深さにあるが、北・東辺ではさらに10cmほど深い位置にあり、炉石の用いられた方を反映する可能性があらうか。炉底は広く被熱赤変しており、赤変部は厚く、最大8cmもある。

**周溝：**深さ15～25cmの周溝が壁下を廻っている。

**その他の施設：**周溝南端の想定住居中軸上に位置するP8、そして、周溝東端の内縁に對を成すように掘り込まれたP7・12については、そのどちらかが出入り口施設に関連する機能を推測しておきたい。

また、P3とP8の間にあるP9には、深さ80cmの掘り方ほぼいっばいに粘土が詰まっていた。粘土層中には不規則な間隙がみられ、そこに暗褐色土が入り込んでいた状況が観察された。このことから、P9は不定形・不定サイズの粘土塊を詰め込んだ粘土貯蔵施設であると理解する。

P9に貯蔵された粘土は、どのような性格のものか。その一端に迫るために、この粘土で土器製作が可能かどうか、陶芸家水野明子氏に試して頂いた。この粘土の原土100%に加水・潰し・練りを施し、5日間寝かせたものを素地にして成形、焼成を試みた。成形してみると、この素地は粘性・可塑性に欠け、折り曲げたり、接着のため加圧すると、ひび割れを起こす。乾燥が進むにつれて、この傾向はさらにつよくなる。こうした状況から、この粘土は、このままでは土器成形、特に組作りには適していないと考えられる。また、素地に山砂を加えた場合（重量比20%）には、上記の欠点がより顕著にあらわれる結果となった。焼成は板状のテストピースを用い、電気窯で6時間（最高温度750℃）焼いた。焼成品は脆く、特に山砂入りは簡単に折れてしまった。この粘土を発酵させるなどの処理を施せば、あるいは土器製作に適した状態に変化するのかもしれないが、今回は試していない。P9に貯蔵された粘土は、採取したままの状態の粘土か、または土器製作を目的としたものではないか、そのどちらかであろう。粘土の用途は明確にならなかったが、今後、類似遺構が検出され、さらに深い、また、異なる方向からのアプローチがなされることを期待したい。

**遺物出土状況：**縄文土器・土製品、石器が出土した。出土量は比較的多いが、覆土やビットから散在的に出土しており、特定の層に集中する傾向はみられない。床面検出の遺物はほとんどない。土器は、中期中葉末～後葉1期を備かに含むが、中期中葉2期に属するものがほとんどを占める。土製品は土偶頭部片1点が覆土から出土した。石器は石鎌1・石鎌未成品1・楔形石器4・二次加工がある剥片3・微細な刺離のある剥片4・打製石斧25・横刃型石器25・刃器1・磨製石斧6・磨製石斧未成品3・石核2・磨石1・敲石2・石錘4・石皿2点が認められる。

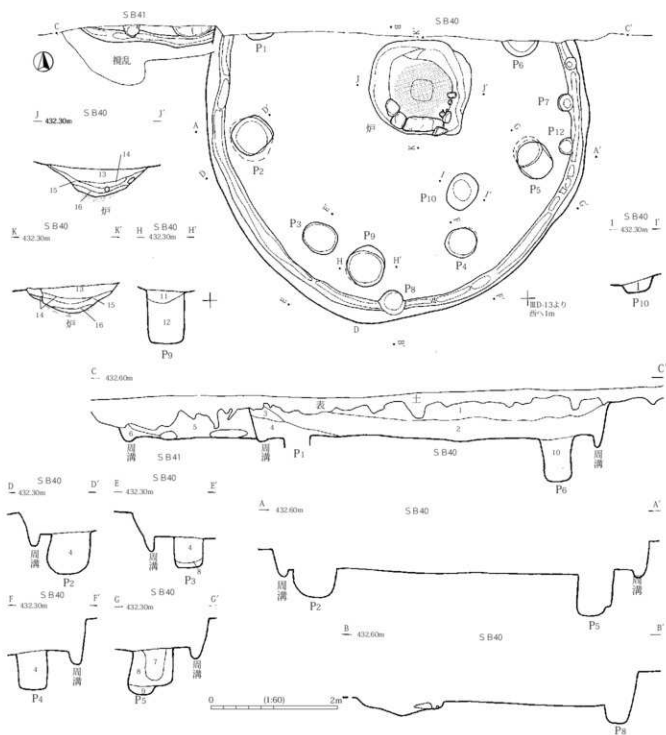
**<sup>14</sup>C年代測定：**輻加速器分析研究所に委託して、炉内出土の炭化物の放射性炭素年代測定（AMS法）を行った。測定結果は4160±40yrBP（半減期5,568年）である。付録CDに測定結果報告書を収録したので参照されたい。暦年較正年代（使用プログラムOxCal3.10）では2890BC（95.4%）2620BC（95.4% probability）となり、小林謙一氏による縄文時代の実年代推定（小林2008）に対比すれば、縄文中期後葉（曾利Ⅰ～Ⅱ式古から曾利Ⅳ式併行期）に相当しよう。

**時期：**覆土出土土器の主体である中期中葉2期の所産と考えておきたい。上記の放射性炭素年代測定結果は、その理解に整合的である。

**S B 4 1**（第76図、PL13） 位置：19区、Ⅲ D06・07 グリッド

形状：不明 規模：確認最大長220cm 長軸方向：不明

第4章 遺構と遺物



SB40・SB11

1. 10YR3.5/4-3 黄褐色土 炭粉が散らばる(2層ほどではない) 2層土が痕跡に入る
2. 10YR3.0/3 暗褐色土 炭粉が目立つ(5mm以下が多く全体的に散らばる) 1層土が痕跡なし 1層土に若干入る 地山ブロック少々 西壁・南壁に近い部分は黄色を帯びてくる
3. 10YR3.0/4-4 黄褐色土 10YR3.0/4-4 黄褐色土
4. 10YR3.4/3-3 褐色土 2層土が痕跡に入る
5. 10YR3.5/3 濃い黄褐色土 10YR3.4/3土が10YR3.4/2土中に痕跡に入る 炭粉は少ない
6. 10YR3.5/4 濃い黄褐色土 5層よりも黄色土多い
7. 10YR3.4/4 暗褐色土 8層より地山土ブロックが多い 炭も多い
8. 10YR3.4/4 褐色土 4層に似るが地山土ブロックがやや多い
9. 10YR3.4/3-3/4 褐色土 炭粉若干 上面が硬くしまっている
10. 10YR3.4/4 暗褐色土 2層に似るが黄褐色地山土の痕跡散らばりが多く隙間を欠く
11. 10YR3.4/4 褐色土 4層に似るが褐色・黄褐色の痕跡散らばりがやや多い
12. 10YR3.1 灰褐色粘土 不定形・不定サイズの粘土塊が詰まっている その間隙に褐色土が入り込む
13. 10YR3.0/3 暗褐色土 粘土粒がわずかに散らばる
14. 10YR3.0/3 暗褐色土 13層に比べ炭粉が細かく量的にも少なく黄褐色色が見られない 細かい粘土粒若干
15. 10YR3.0/3-3/3 黄褐色土 地山土ブロックが多く散らばる 粘土粒若干
16. 7.5YR3.2-3/1 黒褐色土 赤褐色粘土粒が多く散らばる 地山土ブロック若干 やや粘性あり

第76図 SB40・41実測図

**検出:** IV a 層上面の検出となる。ほとんどの部分が調査区外にあり、確認できたのは南端のごく一部である。調査区北壁際に SB40 の西端部を切る擾乱があり、それを除去する過程で検出した。この擾乱により壁の大部分が失われている。断面観察により、SB40 に切られることを確認した。

**覆土:** 二層に分層された。壁際にはぶい黄褐色土 (6 層) が断面三角形に堆積し、その上にぶい黄褐色土 (5 層) が堆積して床面を覆っている。

**床・壁:** 竪穴掘り方底を平坦に整形して床面とする。貼床は認められないが、床面は硬化している。床面レベルは SB40 とほぼ同じである。壁は最大高 12cm 残存するにすぎない。

**柱穴・炉:** 確認されなかった。

**周溝:** 深さ 5~10cm の周溝が壁下に存在する。

**遺物出土状況:** 遺物は、覆土から縄文土器片 2 点、敲石 1 点が出土したのみである。土器片のうち 1 点には縄文が認められるものの、詳細不明である。また、床面直上で大形の扁平礫が検出されたが、加工・使用痕はみられない。

**時期:** SB40 に切られるため、中期後葉 2 期以前の所産である。周溝をもつことから、中期前葉以前には遡らないと考えておきたい。

**SB42** (第 77・138 図、PL13・14・37) 位置: 8b 区北部、Ⅲ S23・24 グリッド

**形状:** 円形 規模: 長軸 411cm、短軸 381cm、床面積 11.0m<sup>2</sup> 長軸方向: N24° W

**検出:** Ⅱ b 層下部の掘り下げ中に、直径 4m ほどの範囲に遺物が集中する部分が認識され、竪穴住居跡の存在が予想されたものの、プランは判然としなかった。遺物を残し、周囲のⅡ b 層を含めて 10cm ほど掘り下げ、IV a 層上面に至ってプランが確定した。本来、Ⅱ b 層中までは壁が立ち上がるはずである。

**覆土:** 二層に分層された。北東部の壁際にはぶい黄褐色土 (2 層) が断面三角形に堆積し、残りの空間を黒褐色土 (1 層) が堆積している。2 層は北東部の小範囲のみみられる。

**床・壁:** 竪穴掘り方底を平坦に整形して床面とする。貼床・硬化面は認められない。壁は最大高 14cm を確認した。

**柱穴:** 壁沿いに掘り込まれた P5・8・10・2・11 が主柱穴と考えられる。やや狭い P10・P2 間を除いて、ほぼ等間隔に配置されている。各柱穴は円形ないし楕円形を呈し、長径 40~50cm、深さ 50~70cm を測る。

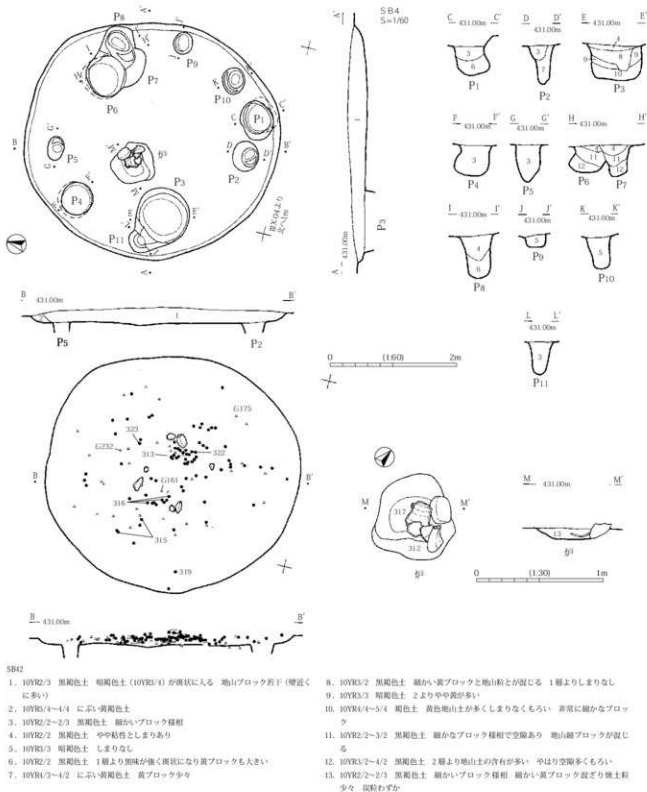
**炉:** 床面中央からやや北西寄りに位置する。長径 70cm、深さ 40cm の不整な円形を呈する掘り込みの斜面に炉石を据え付けている。炉石は、北東部に 2 石が遺存する。炉底には内面を上にした大形の土器片 (312・317) が残されていた。土器片内面にはさざくれたようなアバタ状の窪みが多数形成されており、使用に伴う痕跡と考えられる。こうした特徴から、炉底に土器片を敷き、炉縁に石を設置した構造と理解しておく。炉底に赤変部は認められないが、炉石の内面が焼けている。

**その他の施設:** P9 は小形で浅く、出入口施設に関連する機能を推測しておきたい。P1 と P4 は、主柱穴より大形で、やや袋状を呈する形態からすれば、貯蔵穴の可能性があらう。P11 と重複する P3 は、本住居に伴わない可能性も考えられよう。

**遺物出土状況:** 縄文土器、石器が出土した。出土量は比較的多いが、覆土やビットから散在的に出土している。床面検出の遺物はほとんどない。土器は中期中葉末~後葉 1 期に属するものである。石器は石鏃 1・石錐 1・微細な剝離のある剥片 1・打製石斧 2・横刃型石器 5・磨製石斧未成品 2・磨石 1・凹石 1・石錐 1・石皿 1・台石 1 点が認められる。

**時期:** 炉底に敷いた土器および覆土出土土器から、中期葉末~後葉 1 期の所産と考えられる。

第4章 遺構と遺物



第77図 SB42実測図

SB43 (第78・139図、PL14・38) 位置: 8b区北部、Ⅲ X02・07グリッド

形状: 楕円気味の円形 規模: 長軸 <400> cm、短軸 351cm、床面積 <9.8> m<sup>2</sup> 長軸方向: N50° W

検出: IV a層上面の検出である。SB44 および SK906 に切られる。平面精査では、SB44 との切り合い関係は明確にならなかったが、両者にまたがる東西ベルトの断面で、本住居跡の覆土を切るSB44 西壁立ち上

がりを確認し、切り合い関係が把握された。

覆土：黒褐色土（1層）の単層である。

床・壁：竪穴掘り方底を平坦に整形して床面とする。貼床・硬化面は認められない。壁は最大高12cmが残存する。

柱穴：円形ないし楕円形のピット7基を検出した。各ピットは、長径35～80cm、深さ15～40cmと規模にばらつきが大きい。また、西側にはピットが認められない。このため、明確な主柱穴を指摘するのは困難である。壁際にある大形のP6や、中央寄りに位置するP2は、柱穴でない性格も考えられよう。

炉：床面中央からやや東寄りに被熱赤変部があり、炉跡と考えられる。掘り込みは認められない。赤変部は長径50cmと30cmほどの不整な形状2ヶ所が隣接しており、赤変して硬化した部分が、現状、僅かに盛り上がっている。炉の構造を反映している可能性があろう。

遺物出土状況：縄文土器・石器が覆土やピットから散在的に出土した。出土量は少なく、床面検出の遺物はほとんどない。土器は中期初頭に属するものである。石器は微細な剥片1・打製石斧2点が認められる。

時期：覆土出土土器から、中期初頭の所産と考えておきたい。

**SB44**（第78・139図、PL14・38） 位置：8b区北部、ⅢX02・07・08グリッド

形状：楕円気味の円形 規模：長軸440cm、短軸381cm、床面積10.7㎡ 長軸方向：N56°W

検出：Ⅳa層上面の検出である。SB43を切り、SK906に切られる。平面精査では、SB43との切り合い関係は明確にならなかったが、両者にまたがる東西ベルトの断面で、SB43の覆土を切る本遺構の西壁立ち上がりを確認し、切り合い関係が把握された。倒木痕が南東部を大きく攪乱している。

覆土：四層に分層された。北東の壁際に暗褐色土（4層）が断面三角形に堆積し、さらに壁～床面を黒褐色土（3層）が覆う。残りの窪みを明黄褐色土（2層）・暗褐色土（1層）が埋積している。

床・壁：竪穴掘り方底を平坦に整えて床面とするが、中央に向かってやや窪む。中央部（平面図の1点鎖線で囲った範囲）が硬化している。貼床は認められない。壁は最大高18cmが残存し、斜めに立ち上がる。

柱穴：床面およびSK906・攪乱壁面で円形ないし楕円形のピット9基を検出した。各ピットは、長径25～35cmほどで、平面規模にさほどの差はないものの、深さは10～40cmとばらつきが大きい。SB43と同様に、明確な柱穴を指摘するのは困難である。

炉：床面中央に被熱赤変部があり、炉の痕跡と考えられる。ただし、攪乱のため北西端部が僅かに残存するのみで、構造は不明である。

遺物出土状況：縄文土器・石器が覆土から散在的に出土した。出土量は少なく、床面検出の遺物はほとんどない。土器は中期初頭に属するものである。石器は石鏃1・石錐1・二次加工がある剥片1・打製石斧1・横刃型石器1・石核1・凹石1・石錐1点が認められる。

時期：覆土出土土器から、中期初頭の所産と考えておきたい。

**SB45**（第79・140図、PL14・15・38） 位置：8b区南部、ⅢW23グリッド

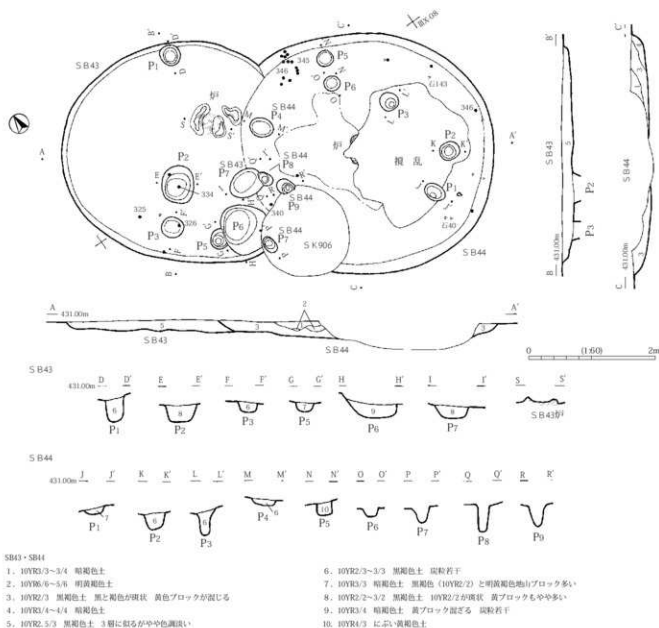
形状：楕円形 規模：長軸396cm、短軸324cm、床面積9.0㎡ 長軸方向：N7°E

検出：Ⅳa層上面の検出である。

覆土：暗褐色土（1層）の単層である。

床・壁：竪穴掘り方底を平坦に整えて床面とする。貼床・硬化面は認められない。壁は最大高7cmが残存するにすぎない。

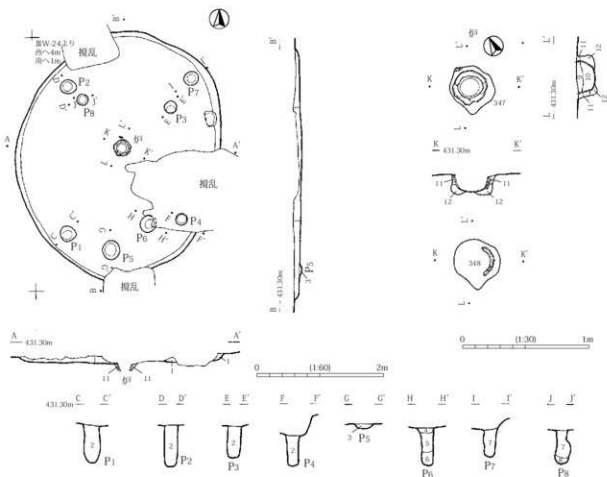




第78図 SB43・44 実測図

柱穴：8基のピットを検出したが、P5を除く7基が主柱穴である可能性がある。各柱穴は、直径25cm前後の円形を呈し、深さは45～65cmを測る。細く深い形状である。P2・7・4は、それぞれP8・3・6のやや外側に位置しており、規則性・関連性が窺える。P6の最上層(4層)はしまりがあって硬く、これを粘床と捉えれば、内側のP8・3・6から外側のP2・7・4への建て替えが推測されよう。柱穴配置は建て替え前と後、どちらも台形に近い形状を呈する。P5は、ごく浅いため、柱穴とはみなし難い。出入り口施設に関係するものであろうか。

炉：床面中央に位置する土器埋設炉である。長径40cm、深さ15cmほどのやや不整な円形の掘り方内にて、土器を埋設する。掘り方底は周縁部がやや深くなっており、中央部を相対的に高く掘り残した形態である。炉体土器(347)は、鉢ないし深鉢の口縁部で、胴部以下を切り取っている。内面にはアバタ状の凹みが多数形成されており、使用に伴う痕跡と思われる。また、掘り方内には、炉体土器に接して、大形の土器片が埋置されていた。この土器片(348)は、1/4周ほど廻る頸部と思われる破片で、内面にはアバタ状の凹



SB45

1. 10YR3/3 暗褐色土 均質でやや粘性土と見らる
2. 10YR3/3 暗褐色土 黒褐色土層間色・灰の細かいブロック (5mm以下) しまりなし  
下部では褐色ブロック状でよい・黄褐色の均質な土
3. 2層に亘る粘土と灰のコントラストが強く、黄ブロック少々散る
4. 10YR3/3-2 暗褐色土 しまりがあって硬い・黄褐色 (1m以下) の細かい小ブロック状散る
5. 10YR3/3-2/3 暗褐色土 1m以下の黄ブロック状 軟らかくもろい
6. 10YR3/6-4/6 黄褐色土 しまりなく軟らかい
7. 10YR3/3 暗褐色土 黄褐色・黒褐色の細かいブロックが散る しまりなくもろい
8. 10YR4/6-5/6 褐色土 しまりなく軟らかい
9. 7.5YR3/4 暗褐色土 炭粒多い・砂しもあり
10. 7.5YR2/2-2/2 黒褐色土 炭粒・黄ブロック少々 炭粒多い しまりなし
11. 10YR4/4-4/3 褐色土 明黄褐色の小ブロック状 砂体に埋まる部分軽く赤色
12. 10YR2/1 黒褐色土

第79図 SB45 実測図

みやササクレがみられることから、炉体で使用された可能性がある。作り替え前の旧炉の一部を新しい炉に付加するという一種の儀礼行為を示すものかもしれない。

**遺物出土状況**：縄文土器・石器が覆土から散在的に出土した。出土量はごく少なく、床面検出の遺物はほとんどない。土器は中期初頭から前葉に属する。石器は石鏃1・刃器1点が認められる。

**時期**：炉体土器から、中期前葉の所産と考えられる。

**SB46** (第80・140図、PL15・38) 位置：8c区、ⅢC25グリッド

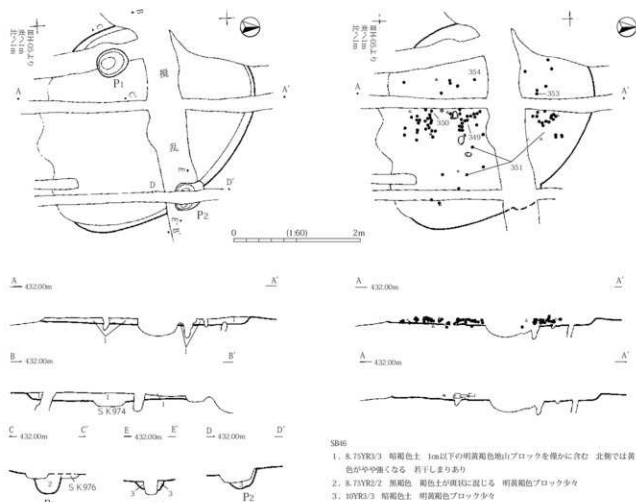
**形状**：楕円形 **規模**：長軸<390>cm、短軸300cm、床面積<9.0>㎡ **長軸方向**：N37°W

**検出**：Ⅳa層上面の検出である。北西部と南部を削平されている。当初、プランはあまり明瞭ではなかったが、縦横に走る溝状攪乱の断面で壁立ち上がりを把握して、プランを確定した。SK974を切る。

**覆土**：暗褐色土 (1層) の単層である。

**床・壁**：壁穴掘り方底を平坦に整形して床面とする。貼土・硬化面は認められない。壁は最大高12cmが

第4章 遺構と遺物



第80図 SB46 実測図

残存する。

柱穴：南西部に P1、北東部に P2 の 2 基のピットが検出されたが、柱穴と認識してよいか不明確である。どちらも円形で深さ 25cm ほどを測る。P2 は竪穴壁に重なって掘り込まれている。

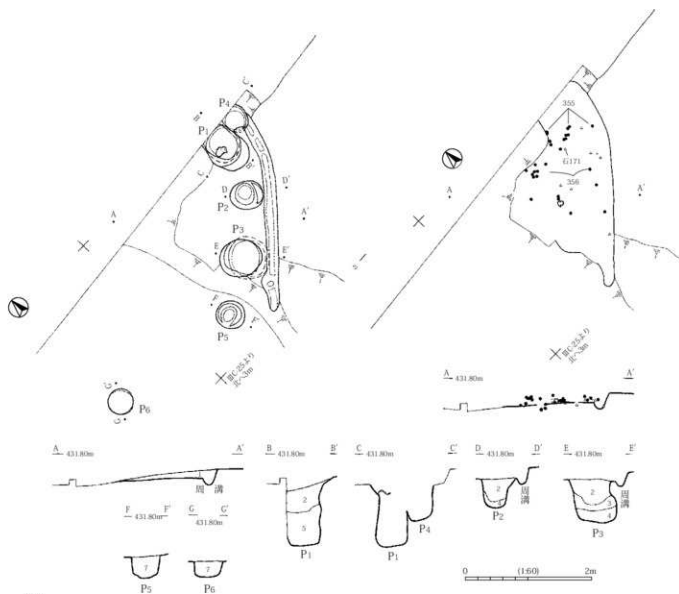
遺物出土状況：遺物は覆土や攪乱から縄文土器、石器が出土した。出土量は多くはなく、床面検出の遺物はほとんどない。土器は、中期中葉末～後葉 2 期に属するものが混在する状況である。石器は打製石斧 3・横刃型石器 3・敲石 1 点が認められる。

時期ほか：中期中葉末～後葉 2 期と考えておけるが、それ以上の限定は難しい。本遺構は、小形で、炬や明確な柱穴が認められない。通例の竪穴住居とは異なる竪穴状遺構として捉えておきたい。

SB48 (第 81・140 図、PL15・38) 位置：8c 区、Ⅲ C20 グリッド

形状：円形ないし楕円形 規模：残存最大長 525cm 長軸方向：不明

検出：Ⅳ a 層上面の検出となる。北側を市道造成で大きく切れ、また、西部を削平されて、床面は南東部を残すのみである。残存部の外縁ラインをもとに竪穴形状・範囲を推定すると、西側の削平面で検出され際に完掘していた土坑 2 基を、本遺構の柱穴として把握することが妥当と考えられた。そのため、その土坑 2 基を、本住居跡の P5・P6 に変更した。



SB48

1. K. 579R3/3.5-4 暗褐色土
2. K. 579R2/3.3-3.7 暗褐色土 1.5mm以下の明黄褐色ブロックがやや目立つ 黒色土が縦状に若干混じる
3. K. 579R1/3 におい黄褐色土 1.5mm以下の明黄褐色ブロックが目立つ 1層土が縦状に若干混じる
4. 1079R4/3 におい黄褐色土 明黄褐色ブロックが少々混じる
5. 1079R3/3 暗褐色土 しまりなく黒灰を若干含む 黄ブロックは少ない
6. K. 579R2/3.5 暗褐色土 細かなブロック土
7. K. 579R2/3 暗褐色土 5mm以下の黄ブロックやや多い 全体として細かなブロック様相

第81図 SB48 実測図

覆土：暗褐色土（1層）が薄く残るのみである。

床・壁：竪穴掘り方底を平坦に整形して床面とする。残存部は全面硬化している。貼床は認められない。壁は最大高14cmが残存する。

柱穴：壁沿いに掘り込まれたP2・5・6が主柱穴であると考えられる。各柱穴は長径40～50cmの円形を呈する。深さは、P6・P5の削平分を復元して、40～60cmを測る。また、P1・P4も位置からみて柱穴の可能性はあるが、P1は他に比べてかなり深く、P4は周溝を断ち切るように掘られていることからすれば、性格が異なることも考えられよう。

その他の施設：P3は、主柱穴より大形で、やや袋状を呈する。貯蔵穴の可能性はあるか。

遺物出土状況：遺物は縄文土器、石器が出土した。出土量は少ない。P1から深鉢の大形破片が出土したほ

かは、覆土中からやビットからの散在的な出土である。床面検出の遺物はない。土器は中期後葉2期に属するものである。石器は二次加工がある剥片1・微細な剝離のある剥片1・打製石斧1・横刃型石器5点が認められる。

**<sup>14</sup>C年代測定:** 側加速器分析研究所に委託して、P1の2層下部から出土した炭化物の放射性炭素年代測定(AMS法)を行った。測定結果は4190±40yrBP(半減期5,568年)である。付属CDに測定結果報告書を収録したので参照されたい。暦年較正年代(使用プログラムOxCalv.3.10)では2900BC(24.2%)2830BC、2820BC(71.2%)2630BC[95.4% probability]となり、小林謙一氏による縄文時代の実年代推定(小林2008)に対比すれば、縄文中期後葉(曾利Ⅰ～Ⅱ式古から曾利Ⅳ式併行期)に相当しよう。

**時期:** 出土土器から、中期後葉2期の所産と考えたい。上記の放射性炭素年代測定結果は、その理解に総合的である。

**SB49** (第82図、PL15) 位置: 8c区、ⅢC18・19グリッド

**形状:** 円形ないし楕円形 **規模:** 残存最大長375cm **長軸方向:** 不明

**検出:** Ⅳa層上面の検出となる。北側を市道に大きく切られ、また、削平されて、ビットと周溝のみが残る。弥生後期のSB47の床面北端で検出され、調査区外に延びる形勢を示していたため、市道際に残っていた土手を除去して調査区を拡張し、周溝延長部と新たなビットを検出した。

**柱穴:** 確認したのは住居跡の南端部のみであるが、SB04などに類似した柱穴配置を取ると推測される。P1・3が主柱穴と考えられ、周溝に接して掘り込まれている。各柱穴は円形を呈し、深さ50～60cmを測る。

P2は、形態的には主柱穴とほぼ同様であるが、P1・P3間の外側にやや突出した位置に存在し、周溝はビット中央に連結するように掘り込まれている。構造的に主柱とは異なる機能を想定しておきたい。P4は、浅めで周溝から離れており、主柱穴ではないだろうが、性格は判然としない。

**周溝:** 深さ10～15cmを測る。P2とP1・3間で各々一箇所途切れる部分がある。

**遺物出土状況:** 遺物は縄文土器片1、横刃型石器1点が出土したのみである。土器は、半載竹管状工具による縦位の平行沈線に密接施文しており、中期と思われるが、それ以上の限定は難しい。なお、SB47から縄文土器が検出されており、隆帯文・沈線文が観察されるもの数点あるが、いずれも小片のため、詳細は不明確である。

**時期:** 縄文時代中期の所産と考えられる。住居構造からすれば、中期前葉以前に遡る可能性は低いであろう。中期中葉～後葉と推測しておきたい。

**SK19** (第83図、PL15) 位置: 1区、ⅥE14グリッド

**形状:** 円形または楕円形 **規模:** 残存最大長284cm、残存床面積2.9㎡ **長軸方向:** 不明

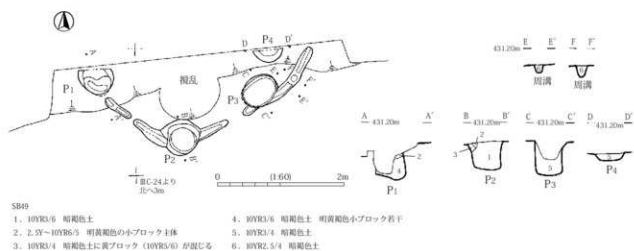
**検出:** Ⅳa層上面の検出となる。攪乱により南部が失われている。

**覆土:** 五層に分層された。壁際にぶい黄色土(5層)が断面三角形に堆積し、黄褐色土(4層)が床面を覆う。残りの凹部を黒褐色土が埋積する(3・1層)が、一部壁際に暗灰色土が介在する。

**床・壁:** 堅く掘り方底を平坦に整形して床面とする。貼床・硬化面は認められない。壁は、最大高38cm残存し、斜めに立ち上がる。

**柱穴・炉:** 確認されなかった。

**遺物出土状況:** 遺物は、覆土から出土した縄文土器片8点、横刃型石器1点だけである。土器はすべて小細片で、文様が観察されるものは1点のみである。半載竹管状工具による縦位の平行沈線に密接施文しており、中期と思われるが、それ以上の限定は難しい。



第82図 SB49 実測図

**時期ほか:**縄文時代中期と考えておきたい。SKとして登録したが、本遺構は平坦で広めの底面をもつことから、土坑ではなく、竪穴状遺構と判断した。小形で柱穴・炉など内部施設が認められない簡素な構造であり、通例の竪穴住居とは異なる性格が推測されよう。

### SK31 (第83図、PL15) 位置: 2区、VII I02 グリッド

**形状:** 円形 **規模:** 残存長軸 282cm、残存短軸 258cm、床面積 <4.7> m<sup>2</sup> **長軸方向:** N87° W

**検出:** IV a 層上面の検出となる。攪乱により西部を失う。ただし、残存する東部の床面から連続する半円形の部分が、周囲の明黄褐色の地山よりやや暗色を呈しており、西部の床面範囲・形状をほぼとどめていと認識した。

**覆土:** 暗褐色土 (1層) の単層である。

**床・壁:** 竪穴掘り方底を平坦に整形して床面とする。貼床・硬化面は認められない。壁は、最大高 23cm 残存し、斜めに立ち上がる。

**柱穴・炉:** 確認されなかった。

**遺物出土状況:** 遺物は、覆土から出土した縄文土器片 5点、微細な剥離のある剥片 1点だけである。土器はすべて小細片で、沈線施文した 1点のみ文様がみられる。時期の特定は難しい。なお、東南部の床面上で大形礫が検出されたが、加工・使用痕跡は認められない。

**時期ほか:**縄文時代と考えるにとどめたい。本遺構は、平坦で広めの底面をもつことから、土坑ではなく、竪穴状遺構と判断した。小形で柱穴・炉など内部施設が認められない簡素な構造であり、通例の竪穴住居とは異なる性格が推測されよう。

### SK150 (第84・146図、PL15・16・40) 位置: 7区、VI I04 グリッド

**形状:** 円形 **規模:** 長軸 272cm、短軸 254cm、床面積 4.0m<sup>2</sup> **長軸方向:** N68° W

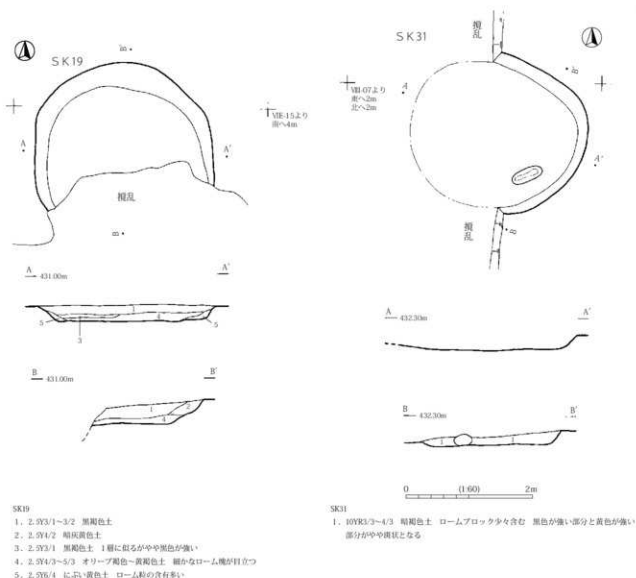
**検出:** IV a 層上面の検出となる。北部が攪乱され、壁の上部を失う。

**覆土:** 暗褐色土 (1層) の単層である。

**床・壁:** 竪穴掘り方底を平坦に整形して床面とする。貼床・硬化面は認められない。壁は、最大高 26cm 残存し、斜めに立ち上がる。

**柱穴:** 直径 20cm ほどの円形ピットが 3 基検出された。壁際に掘り込まれた P1・P2 は深さ 65cm・85cm を測

第4章 遺構と遺物



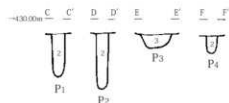
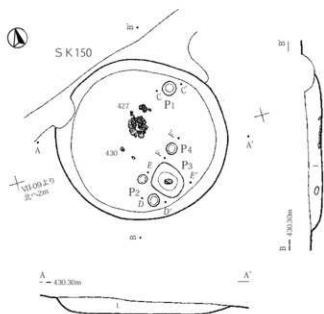
る。P4は竪穴内側、P1・P2の中間付近に位置し、深さは30cmと他2基に比べて浅めである。覆土は同じ性状の暗褐色土である。P1・2を主柱穴として捉えておくが、変則的な柱穴数・位置であることから、通常の竪穴住居の上屋とは異なる構造であることが推測される。P4は補助的な柱穴、あるいは仕切りなどに関連するものか。

**その他の施設：**壁近くのP2脇に位置するP3は、柱穴に比べ大形で浅い。柱穴とはみなし難いが、性格は不明確である。貯蔵穴であろうか。

**遺物出土状況：**遺物は縄文土器、石器が出土したが、量的には多くない。床面中央で深鉢1個体がまとめて検出された(427)ほか、覆土やピットから散在的に出土した。土器は中期前葉に属するものである。石器は横刃型石器1・磨石1点が認められる。

**時期ほか：**出土土器から、中期前葉の所産と考えられる。本遺構は、小形で、柱穴が変則的であり、炉も認められないことから、通例の竪穴住居とは性格が異なる竪穴状遺構と捉えておきたい。

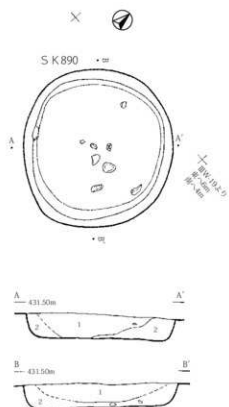
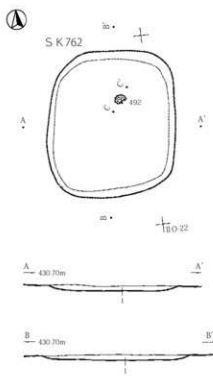
SK762 (第84・151図、PL16) 位置：20区、II O16・17グリッド



SK150

1. 10YR3/2 暗褐色土 黄ブロック状 炭粒わずか 硬帯  
りは黄色がやや強い
2. 10YR3/4~3/5 黒褐色土 しまり・粘性なくボソボソし  
た土
3. 10YR3/3 暗褐色土 1層と同じ

0 150 2m



SK762

1. 10YR4/3~3/3 におい・黄褐色土 黄褐色ブロック少々  
硬帯ではやや黄色が強くなる
2. 10YR3/4 暗褐色土

0 150 1m

SK890

1. 7.5YR3/4~10YR3/4 暗褐色土 7.5YR3/4暗褐色に10YR3/2  
黒褐色10YR2/2が混状に入る 南西部では2層との境界が不  
明確
2. 10YR5/4~4/4 におい・黄褐色土 南西部では1層に近似する  
暗褐色色が混状に入る

0 150 2m

第84図 SK150・762・890実測図



**形状**：隅丸方形 **規模**：長軸 235cm、短軸 205cm、床面積 3.4㎡ **長軸方向**：N9° E

**検出**：4 a 層上面の検出となる。トレンチ調査により一部が確認され、その後の面的精査でプラン全体が検出された。

**覆土**：にぶい黄褐色土（1層）の単層である。

**床・壁**：竪穴掘り方底を平坦に整形して床面とする。貼床・硬化面は認められない。壁は最大高 9cm が残存するにすぎない。

**炉**：床面中央からやや北側に位置する土器埋設炉である。長径 28cm、深さ 8cm のやや不整な円形の掘り方内に土器の底部（492）を据え付けている。土器内面は白くささくれたような状態を呈している。

**遺物出土状況**：遺物は、炉体土器のほか、石核 1 点が覆土から出土したのみである。

**時期ほか**：縄文時代の所産であろうが、炉体土器が無文の底部であるため、時期の限定は困難である。本遺構は、炉を有し、平坦で広めの底面をもつため、土坑ではなく、竪穴状遺構と判断される。小形で柱穴が認められない簡素な構造をもつ。

**SK890**（第 84 図、PL16） **位置**：8b 区、Ⅲ W19 グリッド

**形状**：円形 **規模**：残存長軸 246cm、残存短軸 236cm、床面積 3.1㎡ **長軸方向**：N45° W

**検出**：IV a 層上面の検出となる。

**覆土**：二層に分層された。壁際から床面中央にかけて凹レンズ状ににぶい黄褐色土（2層）が堆積し、残りの空間を暗褐色土（1層）が埋積している。

**床・壁**：竪穴掘り方底を平坦に整形して床面とする。貼床・硬化面は認められない。壁は最大高 40cm が残存し、急角度で立ち上がる。

**遺物出土状況**：遺物は覆土から縄文土器、石器が出土したが、量的には少ない。土器は中期初頭～前葉に属するものである。石器は石鏃 1・打製石斧 1・石核 1・凹石 1・敲石 1・台石 1 点が認められる。

**時期ほか**：覆土出土土器により、中期初頭から前葉の時間幅の中で捉えておきたい。本遺構は平坦で広めの底面をもつことから、土坑ではなく、竪穴状遺構と判断した。小形で柱穴・炉など内部施設が認められない簡素な構造であり、通例の竪穴住居とは異なる性格が推測されよう。

## 2 土坑

縄文時代に属すると思われる土坑は 904 基を数える。陥し穴と認定した遺構（126 基）については土坑から分離させて次項で報告することとし、この総数には含めていない。

土坑の形態は、円形～長方形、特小～特大形、また、単純な掘り込み、内部にさらなる掘り込みをもつもの、被熱部や多量の焼礫を伴うものなど多様である。数量的には、平面円形ないし楕円形を呈して内部施設を作わない単純な掘り込みが大多数を占める。

以下、土坑を、構造や形状の特徴から、(1) 付属坑付土坑、(2) 二段掘り土坑、(3) 長方形土坑、(4) 被熱・集石土坑、(5) その他の土坑、に 5 大別して記述する。

なお、付録 CD に、付表として「土坑一覧表」、「付属坑付土坑一覧表」を取録したので、個々の土坑の属性についてはそれを参照されたい。付表および以下の本文記述における、特小～特大形の規模区分と、平面形状の円形（方形）・楕円形（長方形）、長楕円形の区分は以下の数値を基準とした。

**規模**：開口部（検出面）の短軸長を基準にして、以下のように分ける。

特小形：短軸長 40cm 未満

小形：短軸長 40cm 以上 70cm 未満

中形：短軸長 70cm以上 120cm未満

大形：短軸長 120cm以上 160cm未満

特大形：短軸長 160cm以上

平面形：開口部（検出面）の長軸長と短軸長の比により、以下のように分ける。

円形（方形）：長軸長/短軸長=1.2 未満

楕円形（長方形）：長軸長/短軸長= 1.2 以上 2.0 未満

長楕円形：長軸長/短軸長= 2.0 以上

#### (1) 付属坑付土坑（第85～90図、PL17～19）

坑底縁にピットを掘り込んだ土坑で、ピットは直上の土坑壁を外側に抉るとともに斜め下方に深く掘り込まれる。こうしたピットを「付属坑」と呼称する（記号P）。付属坑が取り付く地表からの掘り込み部分は「本体坑」として部位分けしておこう。付属坑には内部にさらなるピットを伴う場合があり、「支坑」と呼ぶこととする（アルファベットの枝番を付す）。

確認数は26基を数える。すべての実測図を掲載した。

##### ① 本体坑の形態

本体坑は開口部・底部ともに平面円形ないし楕円形を呈する。底部は概ね平坦であるが、短軸方向では丸みを帯びる場合、また、付属坑方向に傾斜する場合がある。壁面は急角度で立ち上がる場合が多く、オーバーハングする例もある。付属坑を3基以上もつ本体坑の残存底面はかなり狭くなっている。

平面規模は、前述した規模区分の中形16基、大形5基、特大形4基が認められる。深さは、SK369が16cmと最も浅く、SK1259が118cmと最も深い。深さと平面規模は相関しないようである。SK1401は、陥し穴SK1306とほぼ完全に重複しており、SK1306に本体坑をすべて壊されたか、調査ミスにより本体坑壁・底を掘り抜いてしまったか、そのどちらかと考える。したがって、本体坑の規模は明らかでない。

埋没状況については、ほとんどの土坑で、埋土は、レンズ状堆積を示して幾層かに分層されること、地山黄褐色土（ローム）の含有割合が壁際に近いほど高くなっていることから、意図的・一時的に埋め戻されたのではなく自然埋没したと考えられる。

##### ② 付属坑の形態

付属坑は、本体坑底縁を斜め下方に掘り込むが、本体坑底より高い位置に横穴状に掘り込む例が僅かながらある。開口部に比べて奥側が広がる形状、すなわち袋状を呈して外側へ大きく突出する場合が多い。規模は、SK891P3が幅42・奥行34・深さ16cmと最小であり、SK1313P2・同P3など幅・奥行130cm以上・深さ65cm以上の大形もある。SK1273の付属坑は本体坑に匹敵する90cmの深さをもつ。総じて、支坑を伴う付属坑の規模が大きい傾向がある。

付属坑の設置数は1基から4基まで認められる。付属坑1基の土坑15基（SK276・311・369・370・375・399・800・1042・1116・1144・1158・1263・1267・1272・1273）、2基の土坑5基（SK1139・1258・1259・1307・1401）、3基の土坑4基（SK376・891・1024・1261）、4基の土坑2基（SK1279・1313）を数え、付属坑が1基のみ付設された例が大半を占めている。

付属坑の設置位置・掘り込み方向については、以下のように整理する。付属坑が1基の場合は、本体坑の一方の端部付近に付設されるが、本体坑長軸方向からやや振れた方向に掘り込む例がみられる。SK1273はそれが極端で、長軸と直交する方向に掘り込まれ、位置も本体坑長辺部の中央にかなり寄っている。付属坑が2基の場合には、本体坑の両端部に付設される場合（SK1258・1259・1307）と、端部と長辺部中央に各1基が付設される場合（SK1139）の二類型が認められる。前者の場合、片方1基が長軸からややずれた

位置・方向に掘り込む傾向があり、SK1259 はそれが顕著である。SK1401 は後者に該当するかもしれない。付属坑が3基の場合は、本体坑の中心から放射状に掘り込まれるが、設置位置は等間隔ではなく、本体坑の一方の端部に1基が配され、もう一方の端部に2基が隣接する状態といえよう。付属坑を4基もつSK1313・1279は、本体坑の両端部と長辺部に、それぞれ一対が配置された状況をみせる。

付属坑が複数存在する場合、それらが同時に掘り込まれたのか、時間差をもつのか、その確定は難しい。ただし、SK1259 に顕著なように、2基の付属坑が対向的な位置にありながらも、一方が長軸からずれた位置・方向に掘り込まれる傾向があることに注意しておきたい。このことは、ずれる付属坑(SK1259ではP2)の本体坑長軸を挟んだ相称的な位置に、もう1基の設置が想定されていたことを示唆するのではなからうか。SK376・891・1024・1261の付属坑3基の配置状況は、まさにそうした結果であるように感じられる。付属坑が、間隔をおいて段階的に増加していった可能性を推測しておきたい。また、SK1279では作り替えが確認された。埋土の切り合いから、P3を含めて一部埋没していた本体坑を掘り返し、さらにP1を掘り込んだ経緯が判る。一旦廃絶した後に、再構築が行われた例として理解し得る。

付属坑には内部に支坑を伴うものがある。SK1261P1に3基、SK1279P1に1基、SK1307P2に2基、SK1313P3に2基、同P4に2基の支坑が付随する。支坑は、壁と底の境界部を袋状に掘り込む場合がほとんどで、形態や位置・方向は付属坑に類似する。掘り込みが浅いもの(SK1279P1-a、SK1307P2-a・b、SK1261P1-c)、深いもの(SK1261P1-a・b、SK1313P3-a・b)のほか、底面レベルが付属坑底より高いもの(SK1313のP4-a・b)が認められる。支坑は、本体坑中心から見て付属坑の左右両端あるいは左端に設置されるが、SK1261のP1-cのみ本体坑中心に向かって小さく掘り込まれている。

付属坑の埋没状況については、埋土に意図的に埋め戻した様相は認められず、付属坑(最終)と本体坑とが一連の埋積過程で自然埋没したと考えられる状況である。したがって、付属坑、本体坑ともに内部の空間を保ったまま廃絶している。

### ③ 分布(第15・16・18・21・22・24・25・26・28・34・35図、付図1)

付属坑付土坑は東部台地頂部の平坦地に分布しており、斜面から谷状部には存在しない。分布の様相をみると、分散して存在するもののほかに、一定の範囲にまとまって分布する箇所が認められる。まとまりの範囲は、A群:12区(ⅣN・R・S・Tグリッド)、B群:9区(ⅢO・Tグリッド)、C群:13区(ⅠUグリッド)の三箇所を認める。A群は東部台地の東端部付近に広がる。12基が存在し、かつ大形・特大形ものが集中する。支坑を伴う付属坑をもつものはA群に限られる。B群は西縁部寄りに位置し、中形および大形の5基が群在する。C群は中央部に位置し、中形および大形の3基がまとまっている。

群内の分布様相をみると、1m以内に隣接する2基が、小単位を成す状況が認められる。A群ではa:SK1258・1259、b:SK1261・1263、c:SK1272・1313、d:SK1307・1401の4小単位が、B群ではe:SK369・370、f:SK375・376の2小単位が認められる。こうした小単位が2mほどの間隔をおいて対を成し、中単位を構成している。A群ではa・bが中単位であり(1)、cは南に2m離れたSK1273と組み合せて一つの中単位を成すと考えられる(2)。B群ではe・fが中単位である(3)。さらに、A群の中単位1・2間約15m離れているが、2およびSK1279・1267・1042相互の間隔は10m・18m・12mと近似している。B群でも、中単位3とSK399の間隔は14mである。このように捉えると、群内に複数が隣接しない場合でも、一つの中単位として理解し得ると考えられる。したがって、相互に13m前後離れたC群の3基は、それぞれが一つの中単位であると認識する。そして、こうした中単位が複数組み合せて、大単位であるA群、B群、C群を構成している。このように、群内の各単位は相互に関連するとともに、重層関係をもつ。また、B群e・fに顕著なように、付属坑付土坑は単独で存在するのではなく、周辺に付属坑をもたない円形・楕円形の土坑が伴う。むしろ、円形・楕円形土坑のまとまりのなかに付属坑付土坑が存在し、両者が複合して単

位を構成していると理解される状況であろう。B群e・fの南側には円形・楕円形土坑のみで構成される単位もある。

各単位が、同時に存在していたのか、時期差をもつのかということについては、A群内の小単位であるSK1272・1313の2基が、またSK1307・1401の2基がそれぞれ重複していることや、各単位の土坑数の相違からみて、先後関係を詳らかにできないものの、それぞれのレベルで時期差をもつ単位があると考えてよいだろう。一定範囲の一部分に土坑の構築（小・中単位の形成）が繰り返された結果、3箇所の大きなまとまりが形成されたことが推測される。同一範囲を占有する集団により、土坑群に対して継続的な管理が為されていたことは想像に難くない。

西緑部の8b・8・19区には、付属坑付土坑は4基確認されるが、それらは相互に35～115mほど離れて分散し、付属坑付土坑同士がまとまる状況は認められない。A～C群が展開をみせる東端部～中央部とは分布状況が異なっている。こうした相違が生じた背景として、集落の居住域内に構築されたものと、居住域外の区域に構築されたものに、使用や管理のあり方に違いがあった可能性が考えられる。ただし、東部のA群の範囲内に存在するSB33や、同じく東部に位置するSB30が、付属坑付土坑と同時期である可能性は残る。なお、西緑部の4基それぞれの近隣に中期前葉の住居跡が存在することは興味深い。

#### ④ 遺物出土状況

付属坑付土坑26基のうち、4基で土器片が、12基で石器が出土した。しかし、遺物は埋土中に少量が無秩序に含まれる状態である。これらの遺物は土坑が埋没する過程で流入あるいは投棄されたもので、その土坑本来の機能とは結び付かないと考える。人間を含めた動物遺体や植物遺体を確認した例はない。

#### ⑤ 時期

26基のうち、ある程度時期を推定し得る土器を出土したのは3基である。SK370・1273の土器は中期前葉から遡っても前期後半までには納まると思われ、SK800の土器は中期前葉および中期中葉末～後葉に相当するものと考えられる。

また、加速器分析研究所に委託して、SK891付属坑P2およびSK1307付属坑の埋土から出土した炭化物の放射性炭素年代測定（AMS法）を行った。測定結果は、SK891が4740±60yrBP、SK1307が4730±40yrBP（半減期5,568年）である。暦年較正年代では、前者が3650BC（62.7%）3490BC、3470BC（32.7%）3370BC [95.4% probability] (OxCal v3.9)、後者が3640BC（62.7%）3490BC、3460BC（32.7%）3370BC [95.4% probability] (OxCal v3.10) となる。小林謙一氏による縄文時代の実年代推定（小林2008）に対比すれば、両者とも縄文前期末葉から中期前葉（十三罈塚式から路沢式併行期）に相当しよう。なお、付属CDに測定結果報告書を取録したので参照されたい。

構築数や分布状況からみて、付属坑付土坑は、それほど長期にわたって作られ続けたとは考えにくい。周辺に存在する土坑をみてみると、出土土器は少ないが、前期前半以前および中期後葉以降に属するものはみられず、割合としては中期初頭が圧倒的に多い。前述するように、諏訪地域では付属坑付土坑の類例が多く確認されており、それらは概ね前期末～中期初頭と考えられるものである。

傍証的な材料に多く依存することになるが、以上から、本遺跡の付属坑付土坑は、概ね中期初頭の所産とみておきたい。ただし、中期前葉の集落に伴うもの含まれる可能性がある。なお、SK800は中期中葉末～後葉の遺構群と激しく重複しており、切り合い関係が明らかにならなかったため、その出土土器の内容と帰属は確実性に欠けるところがある。

#### ⑥ 機能・用途

遺物には、土坑の用途を示唆するような種類、また、そうした出土状況が認められない。このため用途の特定は容易ではないが、集落での定住生活に密接に係わる施設であることは確かだろう。本体坑の形状

は、壁面が急角度で立ち上がる場合が多く、袋状となることも多い。一般に袋状土坑は、植物質食料、特に堅果類の貯蔵穴として理解されている。本遺跡のような乾燥地に設置された例でも、秋田県梨ノ木塚遺跡 SK219 や、宮城県小梁川遺跡 352 号土壇など、炭化した堅果類の層が坑底に遺存する事例がみられる(塚本 1993)。動物性食料については、袋状土坑内の温度・湿度環境が、その貯蔵には不適當であるという永瀬福男氏の指摘がある(永瀬 1982)。

北関東～東関東地方、特に栃木県では、縄文中期の群在する袋状土坑が多く確認されている。栃木県上河内村(現宇都宮市)梨木平遺跡の第1・2・4次調査では、計107基の袋状土坑が検出され、そのうち39基は土坑底に「子ピット」を付設していた。子ピットの多くは壁際に位置し、設置数は1～5基、さらに子ピット内に「孫ピット」を掘り込む例もある。海老原郁夫氏等は、これら群在する袋状土坑を、開口部に蓋をして密閉した空間に堅果類を蓄えた食料貯蔵施設であると考えた。子ピットの機能については、水抜き穴や柱穴といった説を否定し、ピット空間の中で最も「常温」を維持しやすい部位であることから、変質しやすい物質を納めた「特別室」との解釈や、親ピットの「補助機能」といった解釈を示した(海老原・常川 1975、海老原 1986)。壁際に子ピットをもつ袋状土坑と、本遺跡の付属坑付土坑とは構造的に類似している。孫ピット(支坑)の存在も共通する点である。

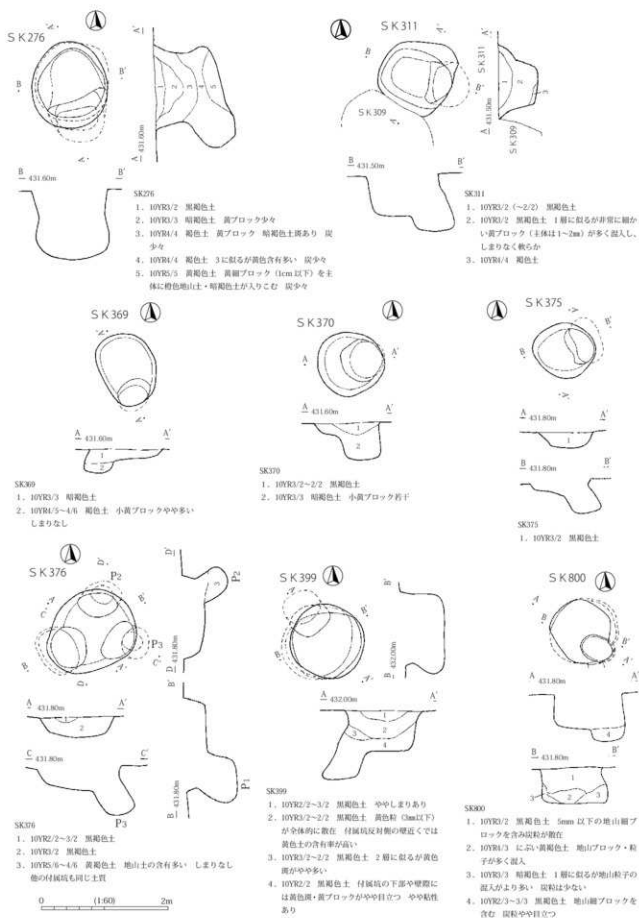
堅果類の遺存など直接的な証拠は見つからなかったものの、本遺跡の付属坑付土坑についても、その主な用途として植物質食料の貯蔵を推定しておきたい。貯蔵空間は本体坑と付属坑(支坑も含めて)とに分かれるが、付属坑は幅・奥行130cm以上、深さ65cm以上のものもある。大形の付属坑に堅果類を直接バラで充填すると、取出しが困難になる場合が予想される。また、付属坑1基あるいは2基の場合は、本体坑も収納スペースとして充分使用可能と考えられるが、本体坑に直接バラで充填するならば、付属坑の存在は不合理である。籠や袋などに詰めて貯蔵していた可能性があろう。付属坑3基の場合には、本体坑の底面は狭くなり、利用する際の足場を確保するならば、そこに物を置く余地はほとんどなく、貯蔵施設としての主要な機能は付属坑が担うことになる。「特別室」かどうかは明確でないが、貯蔵物の内容等により各付属坑を、あるいは付属坑と本体坑を使い分けていた可能性は考えられるのではなからうか。

前述したように、付属坑付土坑は単独で存在するのではなく、周辺に円形・楕円形土坑が伴う傾向が認められる。それらを基本的に同様な機能を担う施設群として捉え、付属坑をもたない円形・楕円形土坑についても、その主な用途は食料貯蔵であったと理解しておきたい。むしろ、円形・楕円形土坑が貯蔵穴として一般的な形態であり、付属坑付土坑は、それらとはやや異なる使用方法を取っていたことが考えられる。

#### ⑦ 他遺跡の状況

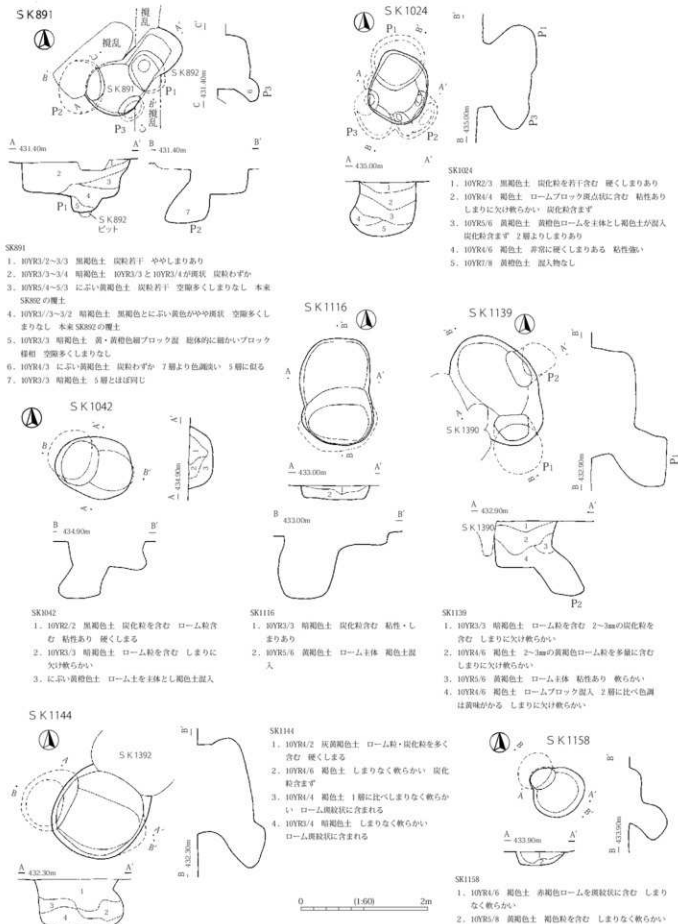
付属坑付土坑の類例は、いまのところ、飯田市内および伊那谷の他の遺跡ではみつからないようである。しかし、伊那谷でも北端にあたる辰野町には神谷所遺跡(辰野町教育委員会 1992)があり、さらに、隣接する諏訪地域には検出遺跡が多く、岡谷市扇平遺跡(岡谷市教育委員会 1974)、諏訪市一時坂遺跡(諏訪市教育委員会 1988)、茅野市小堂見遺跡・北山蒲瀧沢 A 遺跡・大六殿遺跡(茅野市教育委員会 1996a・1996b・2002)、馬捨場遺跡(長野県埋蔵文化財センター 2002)、原村長峰遺跡(原村教育委員会 1992)などの報告例がある。上記の諸遺跡の事例をみると、いずれも前期末ないし中期初頭の集落に伴うと考えられるもので、分布は、住居に隣接するか、あるいは近接した一定の範囲にまとまる土坑群のなかに存在する傾向を示している。諏訪地域の付属坑付土坑は、本遺跡のそれと形状・規模とも酷似しており、集落内での在り方にも通ずるところがあって、本遺跡とのつながりを感じさせる。

1 遺跡の検出数は1～4基と多くはないものの、付属坑付土坑の分布は、前期末葉～中期初頭に諏訪地域で一定の広がりをもち、下伊那の北端部にも及んでいた。貯蔵穴に付属坑を付設する慣行は、面的な広がりを見せる諏訪地域から、下伊那南部の本遺跡にもたらされた可能性があろう。今後、上伊那南部から下

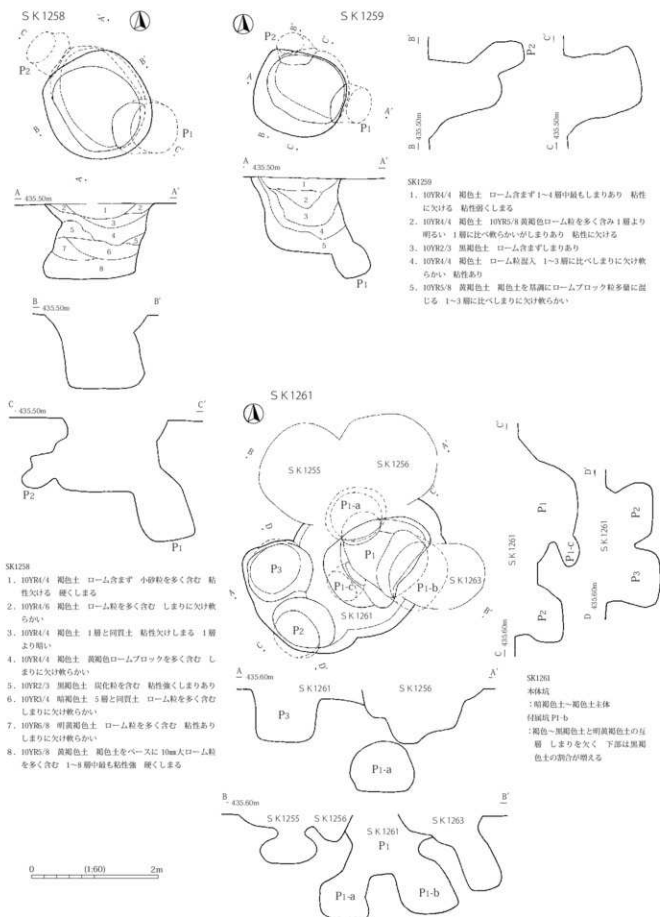


第85図 付属坑付土坑実測図(1)

第4章 遺構と遺物



第86図 付属坑付土坑実測図(2)



第 87 図 付属坑付土坑実測図 (3)

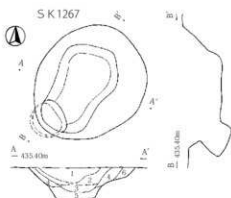


第4章 遺構と遺物



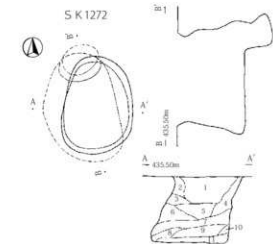
SK1263

1. 10YR5/8 黄褐色土 粘性・しまりあり
2. 10YR4/6 褐色土 5~10mmローム粒を多く含む 粘性・しまりあり
3. 10YR4/6 褐色土 2層に比べ少ない・ロームも多い 炭化粒を含む
4. 10YR5/8 黄褐色土 褐色土を基調とし黄褐色ローム粒を多量に炭化粒に含む 粘性あり しまりに欠けらかい
5. 10YR6/8 明黄褐色土 褐色土を炭化粒に含む 硬くしまる



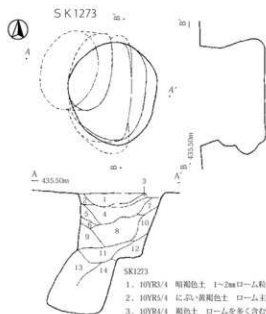
SK1267

1. 10YR2/3 黒褐色土 2~3mmの炭化粒を含む 硬くしまる
2. 10YR3/4 暗褐色土 3~5mm大ローム粒を多く含む 硬くしまる
3. 10YR5/8 黄褐色土 ロームブロック主体 粘性強
4. 10YR4/4 褐色土 ローム粒が炭化粒に多量に混入する
5. 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒を含むが3・4層に比べ少ない 硬くしまる
6. 10YR6/8 明黄褐色土 ローム粒主体 しまりに欠けらかい



SK1272

1. 10YR3/4 2~3mmローム粒 3mm程度の炭化粒を含む 粘性あり 硬くしまる
2. 10YR4/4 褐色土 黄褐色ローム粒を炭化粒に含む しまりあり
3. 10YR4/4 褐色土 2層に比べ少ない・ロームも多い しまりに欠けらかい
4. 10YR4/4 褐色土 2~3層に比べローム多い しまりに欠けらかい
5. 10YR3/4 暗褐色土 1層に比べ軟らかく しまりに欠ける
6. 10YR5/4 濃い黄褐色土 黄褐色ローム粒を主体に褐色土混入 しまりに欠けらかい
7. 10YR4/4 褐色土 黄褐色ローム粒を炭化粒に含む しまりに欠けらかい
8. 10YR6/8 明黄褐色土 ローム主体 粘性強
9. 10YR4/4 暗褐色土 黄褐色ローム粒を含む しまりに欠けらかい
10. 10YR5/4 濃い黄褐色土 黄褐色ローム粒を主体に褐色土混入 しまりに欠けらかい
11. 10YR4/4 褐色土 ローム粒がまばらに硬くしまる

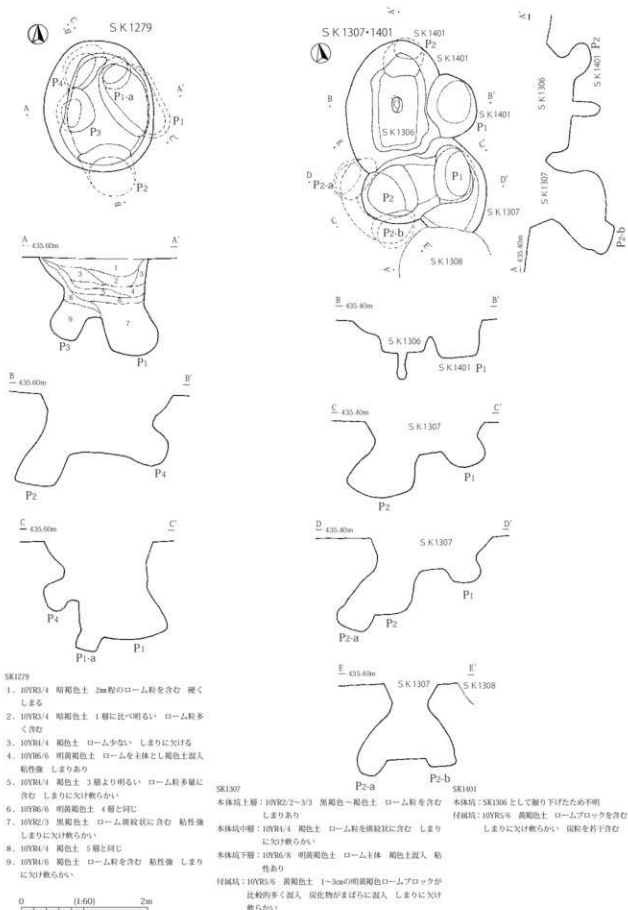


SK1273

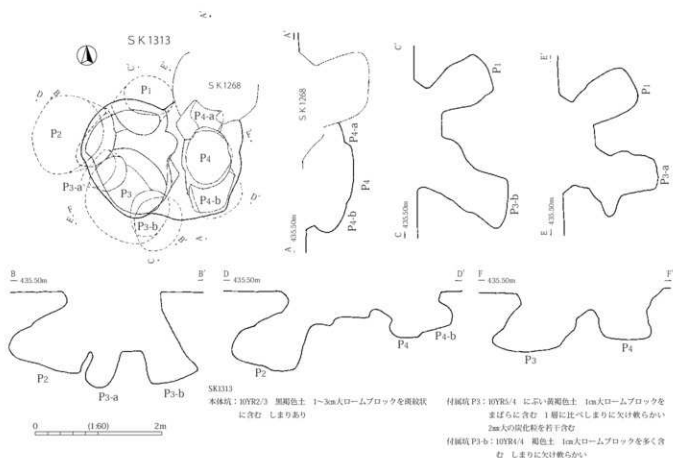
1. 10YR3/4 暗褐色土 1~2mmローム粒を含む 硬くしまる
2. 10YR5/4 褐色土 濃い黄褐色土 ローム主体 粘性あり
3. 10YR4/4 褐色土 ロームを多く含む
4. 10YR2/4 暗褐色土 1層と可同
5. 10YR5/4 濃い黄褐色土 2層と可同
6. 10YR2/4 暗褐色土 2層に比べローム多量
7. 10YR4/4 褐色土 ローム多く含む 4層に比べ軟らかい
8. 10YR3/4 暗褐色土 ローム多く含む 4層に比べしまりに欠けらかい
9. 10YR6/8 明黄褐色土 粘性強 しまりに欠けらかい
10. 10YR4/4 褐色土 7層に比べローム多く しまりに欠けらかい
11. 10YR2/3 黒褐色土 しまりに欠けらかい
12. 10YR5/4 濃い黄褐色土 粘性強 しまる
13. 10YR6/8 明黄褐色土 9層に炭化
14. 10YR2/3 黒褐色土 11層に炭化

0 (1 60) 2m

第88図 付属坑付土坑実測図(4)



第 89 図 付属坑付土坑実測図 (5)



第90図 付属坑付土坑実測図(6)

伊那北部の状況が明らかになれば、伊那谷における付属坑付土坑の出現や伝播の様相も明確になってくるであろうし、用途を考究するための材料も増加すると思われる。

(2) 二段掘り土坑(第91・92図、PL20)

底部に一段深い掘り込みを有し、二段掘り状となる形態であるが、付属坑付土坑とは異なって、掘り込みは垂直方向に行われ、外側への挟り込みを伴わない。一段深い掘り込み部を下部部と呼称する。

確認数は18基を数える。すべての実測図を掲載した。

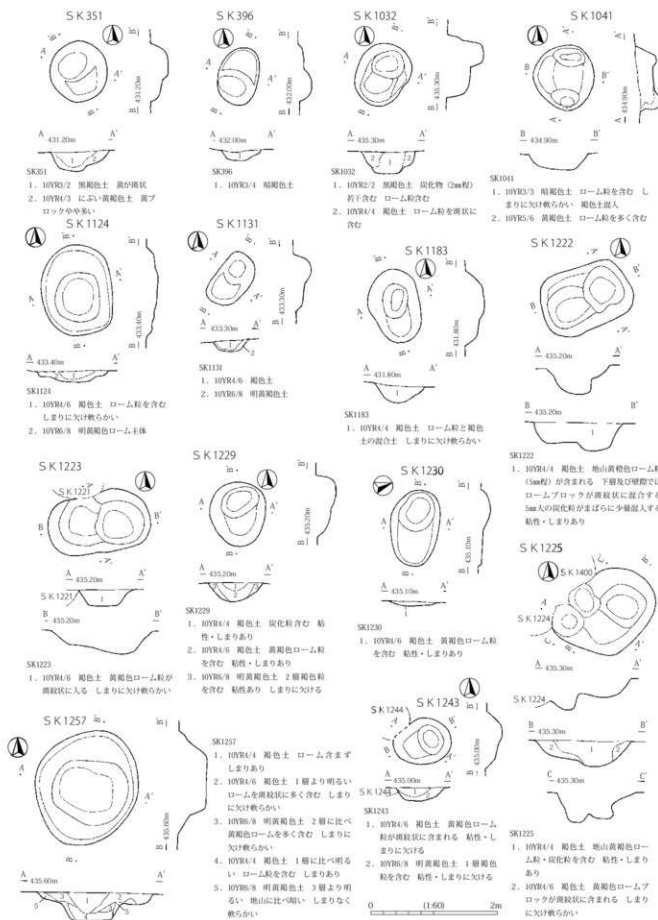
① 形態

平面形は円形ないし楕円形を呈し、長方形気味のものも1例ある。平面規模は、小形2基、中形15基、特大形1基が認められる。底部は概ね平坦であるが、下部部方向にやや傾斜する場合がみられる。壁面は斜めに立ち上がる例がほとんどであるが、比較深いSK1032は急角度である。深さは、SK1230が7cmと最も浅く、SK1032が40cmと最も深い。埋没状況については、ほとんどの土坑で、埋土がレンズ状堆積を示すこと、地山黄褐色土(ローム)の含有割合が壁際に近いほど高くなっていることから、意図的・一時的に埋め戻されたのではなく自然埋没したと考えられる。

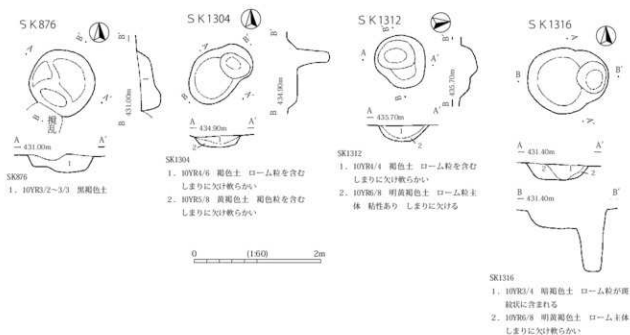
下部部の位置・形態により以下の四類に分類する。

1類: 下部部が土坑底の長軸方向の片側半分程度を浅く掘り込むもの。

SK351・396・876・1032・1131・1183・1222・1223・1229・1230・1243・1225・1312の13基が該当する。下部部の深さは7~21cmで、10cm前後のものが多い。



第91図 二段掘り土坑実測図 (1)



第 92 図 二段掘り土坑実測図 (2)

2類：下段部が土坑底の片端を円筒状に深く掘り込むもの。

SK1304・1316 が該当する。下段部の深さはそれぞれ 54cm・62cmである。

3類：下段部が土坑底の両端に掘り込まれるもの。

SK1041 が該当する。下段部は楕円形を呈する土坑底の両端に、長軸に直交する楕円形に掘り込まれている。1類に比べて掘り込みの範囲は狭い。深さは 7cmを測る。

4類：下段部が土坑底の中央部に掘り込まれるもの。

SK1124・1257 が該当する。下段部は、それぞれ深さ 9cm・28cmを測る。

② 分布 (第 16・17・20・21・22・24・25・28 図、付図 1)

東部台地頂部の平坦部に分布するが、西縁部には少なく、大部分は東部～中央部に存在しており、大きくは付属坑付土坑と似た分布傾向を示す。付属坑付土坑のまどまりの外縁付近に存在する傾向が顕え、さらに、東部の 11 区で一定の範囲に 7 基がまとまる箇所がある (IV M13~15・N11 グリッド)。このまどまりは 12 区の付属坑付土坑 A 群 (IV N・R・S・T グリッド) の北東側に隣接する。11 区のみまどまりは全て 1 類である。2~4 類は分散している。また、二段掘り土坑の周辺にも円形・楕円形土坑が存在する。

③ 時期、機能

ある程度時期を特定し得る土器を出土したのは 2 基で、SK1222 の土器は中期初頭～前葉、SK1225 の土器は中期初頭に属する。周辺土坑の出土土器のほとんどが中期初頭であることを併せ、概ね中期初頭の所産とみておきたい。ただし、付属坑付土坑と同様に、中期前葉のものが含まれる可能性はあろう。

機能を推測し得るような種類、また出土状況を示す遺物はない。形状の特徴は、1・4 類の下段部は浅く、2 類の下段部は細めで深く、ともに下段部構築の目的が貯蔵であったとは考えにくい。3 類は小口に板状の物体を埋設したことを想像させる形態である。分類した形態はそれぞれ機能差を反映すると思われるが、いま、合理的な解釈を提示することができない。分布状況からすれば、付属坑付土坑を含めた貯蔵穴群と何らかの関係をもつ可能性は考えられるのではなかろうか。

## (3) 長方形土坑 (第93・94図、PL20)

長方形の平面形状をもち、内部施設がない単純な掘り込みである。SK43・44・50・51・54・60・64・69・99・100・181・195・908・1078・1234・1235・1342の17基を認める。すべての実測図を掲載した。

## ① 形態、分布 (第15・17・18・19・26・28図、付図1)

平面規模はすべて中形となる。土坑底は概ね平坦であるが、短軸方向ではやや丸みを帯びる場合がある。壁面は、ある程度の深さを有するものは急角度ないしほぼ垂直に立ち上がる。深さは、SK181が20cmと最も浅く、SK51が90cmと最も深い。埋没状況については、埋土がレンズ状堆積を示し、地山黄褐色土の含有割合が壁際に近いほど高く、意図的・一時的に埋め戻された様相は認められない。

長方形土坑は東部台地頂部に分布し、西縁部と東部に存在しており、中央部にはみられない。分布の様相をみると、西縁部南端部側あたる7区南半に、7基が集中している(MH16～M23グリッド)。他の部分では、2基が近接する場合は3箇所で見られるものの、総じて分布は分散的といえよう。また、周辺に円形・楕円形土坑が伴うとは必ずしもいえないようである。

## ② 時期、機能

17基のうち、3基から土器片が出土しているが、いずれも小細片や無文の土器片で、量的にもごく少ないため、出土土器から編年時期を特定することは困難である。

土坑の機能を推測し得るような種類、また出土状況を示す遺物はない。形状については、壁の下部が垂直に近く立ち上がる傾向が窺える。この特徴は、長方形を呈する陥し穴の下部形状に通ずる。しかし、底部施設を確認した例はない。なお、墓塚であることを示す材料は認められなかった。

## (4) 被熱・集石土坑 (第95図、PL21)

被熱痕跡や焼礫が認められ、火を焚く行為に関係する機能が想定される土坑である。9基を確認し、そのすべての実測図を掲載した。

## ① 形態

土坑掘り方の平面形は概ね円形ないし楕円形を呈する。平面規模は、SK40の特小形、SK42の小形を除いて中形となる。深さは、SK02が50cmあるほかは、一般に浅く、SK42は8cmしかないが、土坑規模さらに礫の様態は遺構の残存度にもよると思われる。なお、SK1037は南側が一段深くなっているが、その部分は、礫の密度が低くなっていることからみて、新しい別土坑である可能性もあろう。以下、焼礫(赤変礫)が検出されなかったものを被熱土坑、焼礫を伴うものを集石土坑に分類して記述する。

**被熱土坑** 被熱痕跡があり、焼礫が認められない土坑である。SK931・1219、SF01が該当する。

SK931: 楕円形で船底状を呈する土坑底の片端に被熱赤変部が存在する。

SK1219: 円形で平坦な土坑底の中央に凹部があり、そこが赤変している。

SF01: 埋土下部に炭化物・灰を多く含み、上部～外側に焼土が顕著に堆積している。土坑底に赤変部は認められない。

**集石土坑** 焼礫を伴う土坑で、被熱赤変部が認められる場合と、ない場合がある。焼礫の様態により以下のように三分類する。

1類: 焼礫が密集するもの。SK02・316・42・123が該当する。

SK02: 楕円形で平坦な土坑底の片半部が二段掘り状の凹部をなし、その底面が赤変している。焼礫は凹部内と間層を挟んだ上部の二群に分かれる。上群の礫量は多く、下群は少ない。

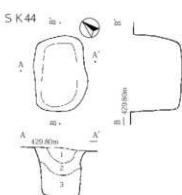
SK316: 円形で平坦な土坑底の中央が凹み、そこが赤変している。礫量は少なめで、土坑中央部に集中している。

第4章 遺構と遺物



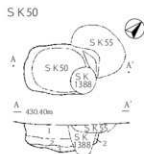
SK43

- SK43
1. 10YR3/3~5/3 に近い黄褐色土
  2. 10YR5/6 黄褐色土
  3. 10YR5/6 黄褐色土と 10YR6/6 暗黄褐色土の中間の色調土
  4. 10YR3/4 に近い黄褐色土 径1~2mの地山ブロック (2.5YR3/3~7/3) をやや多く含む



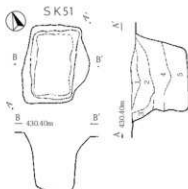
SK44

- SK44
1. 10YR3/3 暗褐色土 炭粒・砂粒少々
  2. 10YR4/6 褐色土 やや赤味を帯びる 炭粒わずかにあり
  3. 2.5YR3/6/4 に近い黄褐色砂質土と2層士のブロック (径3~5m) がラミネーションを呈する



SK50

- SK50
1. 2.5Y5/5 黄褐色砂質土 緑灰色砂の地山ブロック (1~2m) が散在
  2. 5Y6/4 オリーブ黄褐色砂 緑灰色砂の地山ブロックも多い
  3. 10YR4/4 褐色土 褐色土の基調に地山礫砂が混入したブロックも多い



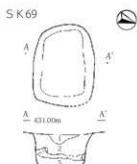
SK51

- SK51
1. 10YR4/4 褐色土と 10YR3/4 暗褐色土の中間の色調土
  2. 10YR4/4 褐色土
  3. 2.5Y5/4 黄褐色土 地山(砂)の含有が多い
  4. 10YR4/4 褐色土 に近い黄褐色土 (2.5Y5/4) の地山ブロック (径2~4m) を含む
  5. 2.5Y6/3~6/4 に近い黄褐色砂質土と地山ブロックがラミネーションを呈する



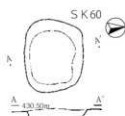
SK54

- SK54
1. 10YR3/3 暗褐色土 炭粒少々
  2. 10YR4/5 褐色土 に近い黄褐色土 (2.5Y5/4) 地山ブロック (径3~4m) 若干
  3. 2.5Y5/4 黄褐色土 地山(砂)の混入が多い
  4. 10YR6/5 褐色土~2.5Y4/4 オリーブ褐色土の中間の色調土 地山砂ブロック (2.5Y6/4~5/4) を少し含む



SK69

- SK69
1. 10YR3/4 暗褐色土と 10YR4/4 褐色土の中間の色調土
  2. 10YR3/6 黄褐色土 オリーブ黄褐色地山ブロックわずかにあり
  3. 5Y6/3 オリーブ黄褐色砂質土 木炭粒ないしはもぐら穴であろう 空堀が多く空しくなりし
  4. 10YR5/4 明黄褐色土と 10YR5/6 黄褐色土の中間の色調土 しまりあり 汚れのない均質な性状
  5. 10YR4/4 に近い黄褐色土 オリーブ黄褐色地山ブロックがラミネーションを呈する



SK60

- SK60
1. 10YR4/4 褐色土 壁際には近い黄褐色土 (10YR5/4) になるが解りきりは出来ない



SK64

- SK64
1. 10YR3/4 暗褐色土
  2. 10YR3/4 褐色土 明黄褐色 (2.5Y7/3) ~ 黄 (2.5Y7/4) の地山ブロック (1~2m) を若干含む

SK64

- SK64
1. 10YR3/4 暗褐色土
  2. 10YR3/4 に近い黄褐色土
  3. 10YR3/4 褐色土 明黄褐色 (2.5Y7/3) ~ 黄 (2.5Y7/4) の地山ブロック (1~2m) を若干含む

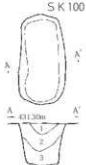
SK60

- SK60
1. 10YR3/2 暗褐色土 均質で黄ブロック粒どなし
  2. 10YR3/2 暗褐色土~10YR4/3 に近い黄褐色土 黄と暗褐色部分とがややラミネーションを呈する



SK181

- SK181
1. 10YR3/3 暗褐色土

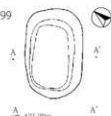


SK100

- SK100
1. 10YR2/3 暗褐色土
  2. 10YR4/4 褐色土
  3. 10YR5/5 に近い黄褐色土 黄色ローム土がややラミネーションを呈する

SK100

- SK100
1. 10YR2/3 暗褐色土 粘性あり
  2. 10YR3/3 暗褐色土



SK99

- SK99
1. 10YR3/2 暗褐色土 均質で黄ブロック粒どなし
  2. 10YR3/2 暗褐色土~10YR4/3 に近い黄褐色土 黄と暗褐色部分とがややラミネーションを呈する



SK195

- SK195
1. 10YR2/3 暗褐色土 粘性あり
  2. 10YR3/3 暗褐色土



第93図 長方形土坑実測図 (1)



第94図 長方形土坑実測図(2)

SK42：少量の焼礫が土坑壁寄りにやや偏って集中している。土坑底に赤変部は認められない。

SK123：多量の焼礫が土坑壁寄りに偏って集中している。土坑底に赤変部は認められない。

2類：焼礫が散在的な在り方を示すもの。SK1037が該当する。

SK1037：礫量は多いが、礫間に間隙があり、埋土の下位から上位中に満漏なく散在する状況である。  
土坑底に赤変部は認められない。

3類：大振りの扁平な焼礫1個が土坑底に密着して存在するもの。SK40が該当する。

SK40：土坑底に赤変部は認められない。

集石土坑1類とした4基は、いずれも焼礫の集積と土坑底との間に炭化物を多く含む土層が介在する。被熱土坑のSK1219とSF01も土坑底の直上に炭化物を多く含む土層が堆積しており、さらに、SK1219は、礫を除いた形態が1類のSK316に酷似する。礫が認められないため被熱土坑に分類した上記2基も、本来的には礫を使用していた可能性があるのではなからうか。

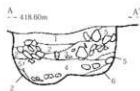
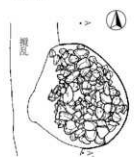
## ② 分布(第14・16・19・31・32図、付図1)

被熱・集石土坑は西部傾斜地および東部台地の縁辺部に散在的に分布する。西部傾斜地東端部の20b区にSK931、東部台地西縁部の8区にSK316、7区にSK123が位置する。東部台地の東南縁部にあたる4区にはSK40・42、SF01の3基が、3区にはSK02が存在し、東端部の11区ではSK1037・1219が近接している。占地を微視的にみれば、SK1037・1219は平坦地の内側にやや入り込んでいるが、その他は台地頂部の平坦地から谷や段丘崖の斜面への移行部に位置する。総じて、東部台地西縁部を中核とした中期中葉末～後葉の集落の領域外に存在するように思われる。



第4章 遺構と遺物

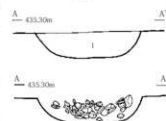
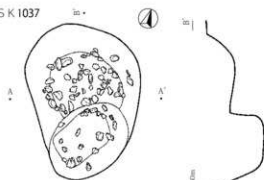
S K 02



SK02

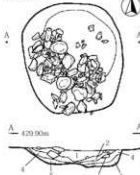
1. ややにぶい黄褐色土 しまりあり粘性あまりなし  
ローム起層であらう 周囲の地層は粘黄褐色ローム
2. にぶい灰黄褐色土 炭・焼土粒わずかに含む 礫多し
3. 暗灰色土 炭粒を多く含む 焼土ブロックもやや多い しまりなく軟らか 礫多し
4. 黒色土 炭粒を多く含む 焼土粒もやや多い しまりなく軟らか
5. 暗灰黄褐色土 2層と3層の中間の硬相
6. 暗灰色土 黄褐色ローム粒・黒色土粒を多く含む

S K 1037



1. 10YR2/2 黒褐色土 炭化物を比較的多く含む (10m大も若干認められる) しまりに欠ける 多量の礫が散在的に含まれるが特に集中することはない

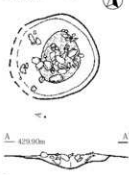
S K 123



SK123

1. 10YR3/4 暗褐色土 汚れが目立つ しまりなし 炭屑多し
2. 10YR2/1 黒色土 炭粒が多い 粘性あり しまりなし
3. 10YR4/4 暗褐色土 しまりなし 2層と4層間にブロック状になっている
4. 10YR2/2 黒褐色土 炭粒多い (2層よりは少ない) しまりなし 礫は4・2層中・上面に殆ど集中する
5. 10YR4/4-5/4 褐色にぶい黄褐色土 炭わずかに しまりなし

S K 316



SK316

1. 10YR2/1 黒色土 炭化物を多く含む しまりなく軟らか

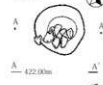
S K 40



SK40

1. 2.5Y3/1 黒褐色土 粘性強くしまっている 炭粒多く含む

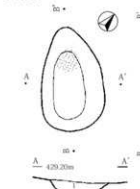
S K 42



SK42

1. 2.5Y3/1 黒褐色土 炭化物多量に含む 粘性強くしまっている

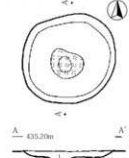
S K 931



SK931

1. 5YR4/8 赤褐色土 ローム質粘質土 焼土粒 (3mm) 混

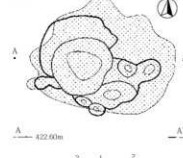
S K 1219



SK1219

1. 10YR4/6 褐色土 黄褐色ローム粒・炭化粒を含む しまりに欠け軟らかい

S F 01



SF01

1. 5YR7/8 橙褐色土 焼土粒の集合 炭粒含む
2. 10YR/2 灰黄褐色土 炭粒含む 粘性あるがしまりなし
3. 10YR/4 にぶい黄褐色土 焼土粒・炭粒若干含む 粘性強くしまりあり
4. 10YR/1 褐色土 炭化物・炭を多く含む 粘性強くしまり不致

0 (1:40) 2m

第95図 被熱・集石土坑実測図

## ③ 時期

9基のうち、3基で土器片が出土した。SK931の土器は早期前葉の立野式である。SK1037・1219の土器は中期初頭～前葉に属する。SK1037は2基の土坑が切り合っている可能性があり、不明瞭なところもあるものの、これら3基が、それぞれ早期前葉および中期初頭～前葉の所産である可能性が考えられよう。SK1219と形態的に類似するSK316は、それに近接した時期であろうか。他のものについては、所属時期は不明といわざるを得ない。

## ④ 用途、使用

集石土坑は、一般に、石蒸しや石焼き調理の施設として使われたものと考えられている。本遺跡でも、こうした理解に否定的な材料は得られていない。集石土坑は、飯田市内では黒田大明神原遺跡・美女遺跡・大門原遺跡（飯田市教育委員会 1997・1998b・2001a）、石子原遺跡（長野県埋蔵文化財センター 2007）等で確認されている。これら4遺跡は縄文早期前半～前期末にかけての事例である。

黒田大明神原遺跡の報告書では、総数28基の集石（土坑）がA～E類に形態分類された。その分類と本遺跡の集石土坑を対比すると、遺構の残存度を考慮しなければならないが、本遺跡の1類は、黒田大明神原遺跡A類（掘り込み内部に密集する多数の赤化礫および炭化物を含む）に相当する。2類のSK1037はB類（掘り込み上面に赤化礫が散漫に分布する）に近い。3類のSK40はE類（掘り込み底部に大形の礫を敷き周囲に礫が配置される。礫には赤化がみられる）下部の残存である可能性があろう。本遺跡では、掘り込みをもたないC類は確認されていない。

また、黒田大明神原遺跡では、分類された形態が集石（土坑）の使用過程をある程度反映していると考え、A類は使用直後ないし造営直後の形態に極めて近く、B類は使用後あるいは廃棄後の形態に近いと推定されている。大門原遺跡では、黒田大明神原遺跡に準拠して形態分類をおこないつつ、A類の土層が、底面から上面にかけて、焼土層→炭化物層→礫層の順となることから、集石土坑の使用過程として、掘り込み内部の加熱（焼土層）→礫の加熱（炭化物層）→本来の目的（調理）が推測され、A類は使用直後の形態と考えられることが指摘された。

本遺跡では、集石土坑1類は、礫を加熱した施設、あるいは礫の加熱と食材の調理を一連で行った施設で、使用直後の状況をとどめていると推測しておきたい。礫の集積の下に存在する炭化物を多く含む土層は、礫の加熱のために火を焚いた痕跡と考えられる。土坑底の赤変部形成については、燃焼時間や回数にもよると思われる。SK02は、上下二群に分かれる礫集積から、少なくとも2回の使用があったことが窺える。2類としたSK1037の近隣にはSK1219が存在しており、両者の関連を想像させる。礫加熱・調理施設であるSK1219で用いた礫をSK1037に廃棄した可能性、あるいはSK1219で礫の加熱が行われて、SK1037で調理された可能性が考えられようか。3類としたSK40については、底部に配石構造をもつならば、1類とは機能・目的が異なる可能性もあろう。被熱土坑のSK931は埋土に炭化物が認められず、集石土坑の底部だけ残存したものであろうか、判断が難しい。一般的な呼称に従って炉穴としておきたいが、単独で存在しており、集石土坑と関連するのかわどうかを推定する材料に欠ける。

## (5) その他の土坑（第96～99図、PL22・23）

上記(1)～(4)を除く土坑を一括する。平面形状が円形ないし楕円形であるため、(1)～(4)の形態と対比する場合には円形・楕円形土坑と表記した。以下の本項では、単に「土坑」と呼称する。

総数は834基を数え、本遺跡の土坑の主体を占める。実測図の掲載は、規模・形状、遺物や礫の出土状況を勘案し、代表例を選択して掲載した。

## ① 形態

平面形状は円形ないし楕円形であるが、長楕円形を呈するものが僅かにある。平面規模は特小形～特大形まで認められるが、特大形は4基のみである。深さは、4cmしかないものから、100cm程度のものまでみられる。SK1268が110cmと最も深い。断面形状は、円筒状、U字状、逆台形状、タライ状、袋状等が認められ、平面楕円形のなかにはまれに船底状を呈するものがある。円筒状は特小～小形に限られ、特小形が圧倒的に多い。U字状は中～大形も僅かながらあるが、特小～小形が主体で、やはり特小形が大形を占める。逆台形状・タライ状は規模を問わず認められる。袋状は中形～大形にみられ、片側のみ袋状を示す片袋状とも呼ぶべき形状(第97図SK1355・1356等)が中形～大形に若干ある。深さとの関係では、深さ30cm未満の浅いものの大多数は逆台形状であるが、30cm台になるとタライ状が大幅に増加し、40cm台では袋状が加わる。崩壊や削平を考慮すれば、中形・大形の土坑は、機能時には概ねタライ状ないし袋状であったことが推測される。同様に、特小～小形のU字状のものは、本来円筒状の形状をもっていたとみることが可能だろう。時期による土坑形態の差異は認められないようである。

埋没状況については、埋土は、単層のものも多いが、地山黄褐色土の含有割合が壁際に近いほど高く、レンズ状堆積を示しており、意図的・一時的に埋め戻された様相が認められる例はない。

土坑から出土した遺物は土器・石器・土製品があり、また礫を伴う場合もみられるが、その多くは埋土中に混在するとみなされるものが圧倒的である。

## ② 時期

834基のなかで、ある程度時期を特定し得る土器を出土した土坑は143基である。土器は竪穴住居跡と同時期の中期初頭～前葉および中期中葉末～後葉2期が圧倒的に多い。そのほか、前期前葉・後葉・末葉、中期中葉、後期初頭・前葉を認めるが、前期前葉・後葉はごく僅かで、しかも、それぞれ中期前葉・後期前葉と混じて出土している。出土土器がないか、あっても詳細不明な場合も多いが、分布状況や切り合いなど他遺構との関係も合わせて勘案すると、土坑は、中期初頭～前葉および中葉末～後葉2期に所属するものがほとんどを占めると推測される。その他の時期では、前期末葉・中期中葉・後期初頭に属するとと思われるものを若干認め得る。

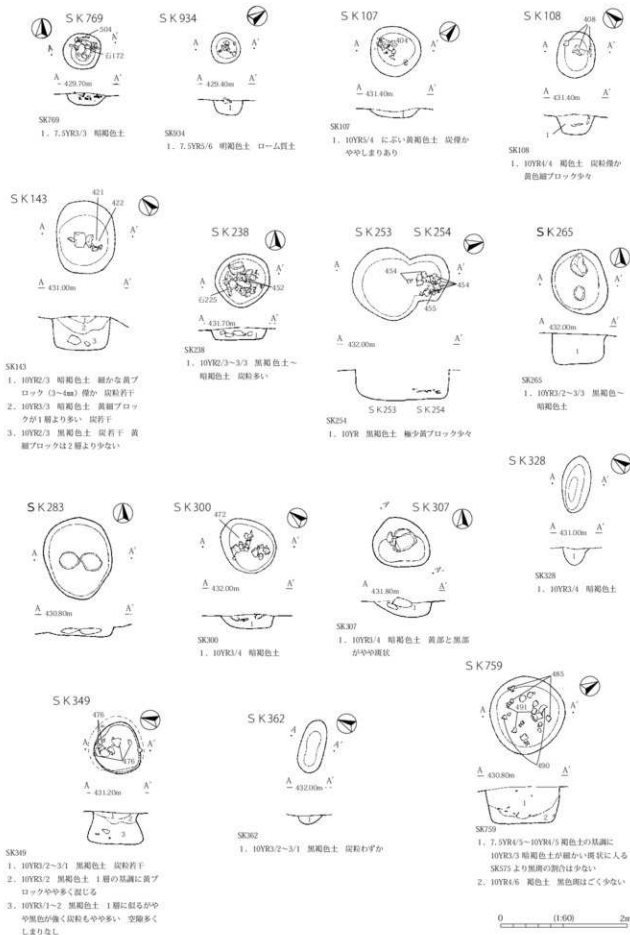
また、輻射加速器分析研究所に委託して、SK1020およびSK1337の埋土から出土した炭化物の放射性炭素年代測定(AMS法)を行った。測定結果は、SK1020が $4370 \pm 40$ yrBP、SK1337が $2960 \pm 50$ yrBP(半減期5,568年)である。暦年較正年代では、前者が3100BC(95.4%)2900BC[95.4% probability](OxCal v3.10)、後者が1370BC(2.2%)1340BC、1320BC(93.2%)1010BC[95.4% probability](OxCal v3.9)、となり、小林謙一氏による縄文時代の実年代推定(小林2008)に対比すれば、それぞれ、中期中葉から後葉(井戸尻1式から曾利Ⅱ式古併行期)、後期末～晩期初頭(後期安行式から大洞B2式併行期)に相当しよう。なお、付属CDに測定結果報告書を取録したので参照されたい。この測定結果からすれば、土器は確認されなかったものの、後期末～晩期初頭あるいはそれ以降の土坑が僅かながら存在する可能性もあることになろうか。

## ③ 分布(第12～35図、付図1)

前期末葉と思われる土坑は、東部台地の東部にあたる11・12・15b区で6基検出されている。中期初頭の土坑群の近隣に存在し、それらと時間的に連続することが推測される。中期初頭～前葉、特に中期初頭の土坑は、東部台地の西縁部から、竪穴住居跡の分布が希薄ないしは存在しない中央部～東部にも広く展開している。中葉末～後葉2期の土坑分布は、西縁部の8b・8c・8・19区にほぼ限られ、該期の住居跡の分布に概ね重なる。中期中葉と思われる土坑は8・19区で5基が認められ、中葉末以降の土坑分布範囲に含まれる。後期初頭の土坑は、8区に1基、西部傾斜地東端部の20・20b区に10基が分布する。

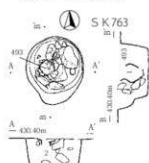
20・20b区の後期初頭の土坑群は、単独あるいは隣接する2～3基が小単位をなす様相が顕著であり、小

第2節 縄文時代の遺構



第96図 その他の土坑実測図 (1)

第4章 遺構と遺物



SK763

1. 10YR3/3~2/3 暗褐色土 炭粒若干
2. 10YR4/4~3/4 褐色土 比較的円筒で折れ少ない



SK882

1. 10YR2/2 黒褐色土 炭粒若干 埋跡と下部に地山(細小)ブロックが少々混じる



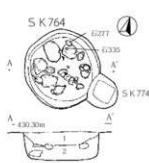
SK1012

1. 10YR4/4 褐色土 赤褐色土 ロームが塊状に混入するしまりに欠け散らかしい
2. 10YR6/6 に近い黄褐色土 褐色土混入 炭粒・ローム粒含まず



SK1355

1. 10YR3/3~3/4 暗褐色土 1m以下の黄ブロックが中や目立つ(特に下半部) しまり少
2. 10YR4/4~5/4 褐色土 しまりなく散らかしい



SK764

1. 10YR3/3~2/3 暗褐色土 炭粒が目立つ
2. 10YR3/3~7.5YR2/3 暗褐色土



SK886

1. 10YR2/3 黒褐色土 黒色が強い部分と褐色及び黄色が強い部分が塊状 炭粒やや目立つ しまり強い



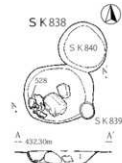
SK1204

1. 10YR4/4 褐色土 ローム粒含む しまりあり



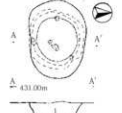
SK1356

1. 10YR2/2~2/3 黒褐色土 細かい炭粒若干 黒褐色(10YR3/1)粘土粒(1m以下)を若干含む 細か(黄)ブロック若干
2. 10YR3/3~4/3 暗褐色土 基層は1層と3層の対照的性状 それに1層土が塊状に入る
3. 10YR3/3~5/3 に近い黄褐色土 黄ブロック混じる 2層に比べ中や空隙多し しまり少



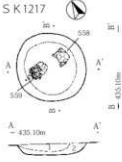
SK838

1. 10YR3/3~4/3 暗褐色土 やや黒色が強い部分と黄色が強い部分が塊状



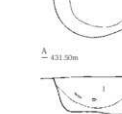
SK905

1. 10YR2/3 黒褐色土 5cm以下の地山(ブロック)少々 炭粒目立つ
2. 10YR2/3 黒褐色土 1層に似るが地山(ブロック)がやや多い 空隙多くもろい 炭粒目立つ 全体に細かなブロック(5cm以下)



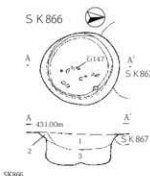
SK1217

1. 10YR6/4 褐色土 黄褐色粒を含む 炭粒を若干含む 粘性・しまりあり
2. 10YR6/6 明黄褐色土 1層褐色土・地山黄褐色粒を含む 粘性・しまりに欠ける



SK91

1. 10YR2/2 黒褐色土 炭粒やや多い
2. 10YR4/4 褐色土~10YR2/4 暗褐色土 黄色が強い部分と暗褐色部分がラミナ状 中央部ではラミナ不明瞭で若干炭粒が混じる



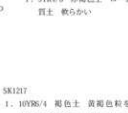
SK866

1. 10YR2/2~3/3 黒褐色土 炭粒若干
2. 10YR4/2~4/3 灰黄褐色土 1層に地山土が多く混入
3. 10YR2/2~2/3 黒褐色土 1層より黒色が強く空隙やや多い



SK926

1. 5YR4/3 赤褐色土 ローム質粘土 散らかしい



SK806

1. 5YR4/3 赤褐色土 ローム質粘土 散らかしい

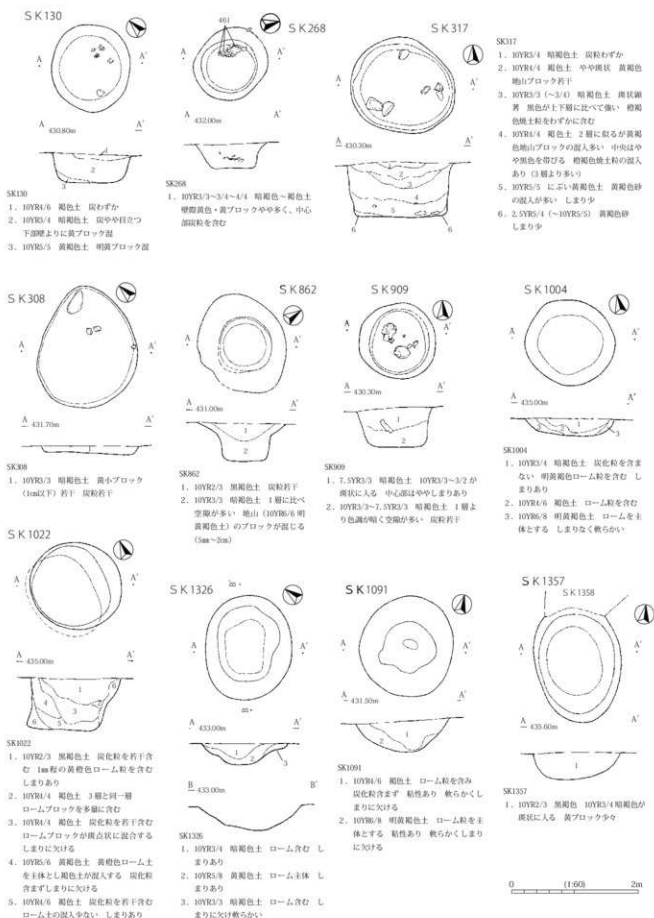


SK80

1. 10YR2/2 黒褐色土 炭粒やや多い
2. 10YR4/4 褐色土~10YR2/4 暗褐色土 黄色が強い部分と暗褐色部分がラミナ状 中央部ではラミナ不明瞭で若干炭粒が混じる



第97図 その他の土坑実測図(2)



- S K 130**
1. 10YR3/6 褐色土 灰むずか
  2. 10YR3/4 暗褐色土 灰やや目立つ 下部壁より黄ブロック凝
  3. 10YR5/5 黄褐色土 明確ブロック凝

- S K 268**
1. 10YR3/3~3/4~4/4 暗褐色~褐色土 暗褐色・黄ブロックやや多く、中心部灰を含む

- S K 317**
1. 10YR3/4 暗褐色土 灰むずか
  2. 10YR4/4 褐色土 中や底状 黄褐色地(ブロック若下)
  3. 10YR3/3 (~3/4) 暗褐色土 黄鉄屑 著 黒色が下層に比べて強い 暗褐色土粒をむずかに含む
  4. 10YR4/4 褐色土 2層に似るが黄褐色地(ブロックの混入多い 中央はやや黒色を帯びる 暗褐色土粒の混入あり (3層より多い)
  5. 10YR5/3 に近い黄褐色土 黄鉄屑の混入が多い、しまり少
  6. 2.5YR5/1 (~10YR5/5) 黄褐色土 しまり少

- S K 308**
1. 10YR3/3 暗褐色土 黄小ブロック (1cm以下) 若下 灰粉若干

- S K 862**
1. 10YR2/3 黒褐色土 灰粉若干
  2. 10YR3/3 暗褐色土 1層に比べ空隙が多い 地山 (10YR6/6 明黄褐色土) のブロックが混入 (5cm~20cm)

- S K 909**
1. 7.5YR3/3 暗褐色土 10YR3/3~3/2 が 混入に入る 中心部はやしまりあり
  2. 10YR3/3~7.5YR3/3 暗褐色土 1層より色調が暗く空隙が多い、灰粉若干

- S K 1004**
- S K 1004**
1. 10YR3/4 暗褐色土 灰化粒を含む 不明黄褐色ローム粒を含む しまりあり
  2. 10YR4/6 褐色土 ローム粒を含む
  3. 10YR6/8 明黄褐色土 ロームを主体とする しまりなく軟らかい

- S K 1022**
1. 10YR2/3 黒褐色土 灰化粒を若干含む 1cm程度の黄褐色ローム粒を含む しまりあり
  2. 10YR4/4 褐色土 3層と同一層 ロームブロックを多量に含む
  3. 10YR4/4 褐色土 灰化粒を若干含む ロームブロックが塊点状に混入する しまりに欠ける
  4. 10YR6/6 黄褐色土 黄褐色ローム土を主体とし褐色土が混入する 灰化粒含まずしまりに欠ける
  5. 10YR4/6 褐色土 灰化粒を若干含む ローム土の混入少ない しまりあり

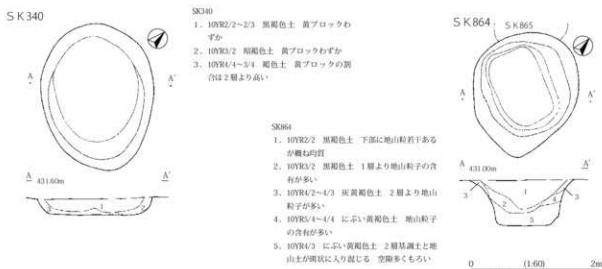
- S K 1326**
1. 10YR2/3 黒褐色土 灰化粒を若干含む 1cm程度の黄褐色ローム粒を含む しまりあり
  2. 10YR4/4 褐色土 3層と同一層 ロームブロックを多量に含む
  3. 10YR4/4 褐色土 灰化粒を若干含む ロームブロックが塊点状に混入する しまりに欠ける
  4. 10YR6/6 黄褐色土 黄褐色ローム土を主体とし褐色土が混入する 灰化粒含まずしまりに欠ける
  5. 10YR4/6 褐色土 灰化粒を若干含む ローム土の混入少ない しまりあり

- S K 1091**
1. 10YR4/6 褐色土 ローム粒を含み 灰化粒含まず 粘性あり 軟らかくしまりに欠ける
  2. 10YR6/8 明黄褐色土 ローム粒を主体とする 粘性あり 軟らかくしまりに欠ける

- S K 1357**
1. 10YR2/3 黒褐色土 10YR3/4 暗褐色土 混入 黄ブロック少々

第 98 図 その他の土坑実測図 (3)

#### 第4章 遺構と遺物



第99図 その他の土坑実測図(4)

単位が組み合せて、分布のまとまりを形成している。1~3基が1つの契機に構築される単位で、それが隣接ないし近接する箇所で繰り返された経緯が推測される。こうした状況は、前期末葉~中期前葉~中期中葉末~後葉2期の土坑群にも窺うことができる。

#### ④ 機能・用途

堅果類の遺存など直接的な証拠は検出されなかったものの、付属坑付土坑と同様に、円形・楕円形土坑は基本的に植物質食料の貯蔵施設として構築されたと理解しておきたい。ただし、他の機能を担っていたものが含まれる可能性はあろう。SK763は、土坑壁近くにほぼ完形の深鉢1個体(後期初頭)が正位で納まり、壁側を除く土器周囲に礫を積み上げたような状況を示していた(第97図)。土坑内へ土器を設置した施設であることは確実と思われる。土器内に遺物が認められないため用途の特定は難しく、また貯蔵穴の再利用であるかもしれないが、食糧貯蔵以外を想定することもできよう。

その他、石皿の大形破片・磨石等の石器を含む礫多数が出土したSK238、大振りの扁平礫2個が底面付近で検出されたSK283(第96図)、ほぼ完周する深鉢胴部片と長さ40cm程の大形礫が土坑底面から出土したSK838、二個体の大形土器片が底面近くで出土したSK1217、壁寄りに礫が扁平を上下に揃えてほぼ同一レベルで並ぶSK764、底面付近に大振りの礫が群在するSK926・1204(第97図)、など、遺物や礫の出土状況が特徴的な例もみられる。ただし、いずれも、意図的に納置したと言い切れる状況ではなく、その土坑本来の機能にどれだけ結び付くのか、それを読み取ることは困難である。

墓塚の可能性については、小形以上の楕円形を呈する土坑などのなかに該当するものがあるのかもしれない。しかし、円形の土坑を含めて、人体の遺存や副葬品と看做し得る種類・出土状況を示す遺物、確実な人為的埋戻しが認められる例はない。上記のような大形土器片や礫の出土状況に、喪被葬や抱石葬を想定することには躊躇を覚える。今回の発掘調査では、明確な墓塚の存在を指摘することができない。

#### 3 陥し穴(第100~115図、PL24~26)

坑底に、逆茂木を設置したと考えられる遺構(底部施設)を有する土坑を陥し穴と認定した。ただし、例外として、底部施設をもたないが、土坑本体の形態により認定した2基(SK22・68)がある。

126基が確認され、すべての実測図を掲載した。なお、付録CDに、付表として「陥し穴一覧表」を収録したので、個々の陥し穴の属性についてはそれを参照されたい。

## (1) 形態の概観

## ① 土坑本体の形態

土坑本体の規模・形状区分は、前項に述べた土坑に準ずる。

平面規模は小形11基、中形71基、大形41基、特大形3基で、特小形はない。深さはSK1069が15cmと最も浅いが、次に浅いSK1066の31cmから、最も深いSK22の145cmまで、ばらつきがある。

開口部の平面形状は、円形、楕円形、方形、長方形に区分できる。底部の平面形状は、この4形状に、長楕円形、中央部がくびれた分銅形が加わり、長方形でも四隅がやや突出する形状もみられる。開口部と底部で平面形状が異なる場合がしばしばみられる。ただし、底部が円形の場合は開口部も円形に限られるなど、底部と開口部の形状は無関係ではない。なお、いわゆるTピットのような溝状を呈する例はない。

底面はほぼ平坦であり、断面形状は、壁面の形状により決定される。壁面がほぼ垂直に立ち上がる箱形状、やや開いて立ち上がる逆台形状、下部がほぼ垂直で上部が開き、その変換が明瞭な漏斗状、ほぼ垂直な下部から上部が開き、その変換が明瞭でない朝顔状、に区分できる。平面形状に比べて例は少ないが、短軸方向と長軸方向で断面形状が異なる場合がある。

埋土の状況は、レンズ状堆積を示し、下部に地山黄褐色土（ローム）を多く含む層、上部には黒褐色土が堆積する傾向が顕著である。同時に、地山黄褐色土の含有割合が壁際に近いほど高くなっている。底面を含めて、埋土中に植物遺体が確認された例はない。

## ② 底部施設の形態

底部施設は、逆茂木と思われる棒状体を埋設したピットで、以下の類型が認められる。

**A型**：坑底中央にピット1基を掘り込み、その内部に1～数本の細めの棒状体を立て、土を充填して固定した構造が推測されるもの。充填土は地山由来の黄褐色～明褐色土で、棒状体痕跡との差は明瞭である。棒状体複数の場合は各棒状体の間隔が開いている。棒状体そのものの遺存は確認されなかった。ピットの外に、棒状体を打ち込んだと思われる痕跡を伴う場合がある（SK304・412）。棒状体の平面形は概ね円形であるが、楕円形を呈する場合がある（SK760・773・937）。棒状体の太さは直径15cmほどの太めのものもあるが（SK760・773・924・937）、5～10cm程度が大半である。ピットの規模・形状で2細分する。

**A1型**：ピットが相対的に小さく、平面円形ないし楕円形を呈する。棒状体は1～4本である。SK304・323・412・760・773・889・920・923・924・936・937・1358・1378の12基が該当する。なお、SK1358は棒状体が明瞭に認識できなかったが、覆土の様相とピット規模からA1型に含めた。また、SK412については、記録を取り忘れたため実測図に表現されていないが、中央の棒状体3本はピットに伴うものである。

**A2型**：ピットが相対的に大きく、平面長方形気味の形状を呈する。棒状体は5本または7本である。該当するのはSK394・824・910である。

**B型**：坑底にピットを有するが、ピット埋土は暗褐色～褐色土主体のしまりのない土で、明確な棒状体および充填土が認められないもの。太めの棒状体1本の可能性、あるいは細い棒状体の束を埋設した可能性もあろう。ピット平面形はほとんど円形であるが、方形のものが2例ある。規模は、長径11～40cmと幅があって、方形のものは大形である。ピット内部ないし周囲に小礫が認められる場合があり、特にSK1090では上部から下部まで小礫が縦に連なる状況である。棒状体の固定など、底部施設の構造に関連する可能性があろう。ピットの設置数は1・2・4基の場合があり、その設置数でB型を3細分する。なお、ピット数3基のB3型は存在しない。

**B1型**：ピット1基のもの。103基あり、確認された陥し穴の底部施設の8割強はB1型である。SK113・1212の2基は、ピットが方形を呈して大形である。



**B2型**：ピット2基のもの。SK216・856・1084・1331・1333が該当する。

**B4型**：ピット4基のもの。ピットは浅く、長軸方向に縦列する。該当するのはSK120のみである。

## (2) 陥し穴の分類

確認された126基の陥し穴を、土坑本体の形態と底部施設の有無・形態の違いをもとに分類する。

**I類**：底部施設を有し、土坑本体底部・開口部の平面形状が円形（底部は円形に近い楕円形・方形を僅かに含む）のもの。

底部施設はB1型に限られる。深さと断面形状で2細分する。

**I a類**：深く掘り込まれるもの。断面漏斗状～逆台形状を呈する。SK03・78・79・82・129・148・149・921・1363の9基が該当。

**I b類**：掘り込みが浅いもの。断面箱形状を呈する。SK291のみ該当。

**II類**：底部施設を有し、底部の平面形状が楕円形のもの（長方形気味のものを含む）。

底部施設の形態さらに底部の幅・長さの比で5細分する。

**II a1類**：底部施設がA1型で、底部が相対的に幅広のもの。

底部ピットの棒状痕数は1～3本で、開口部の平面形状は円形がほとんどである。SK760・773・936・937の4基が該当。

**II a2類**：底部施設がA1型で、底部が相対的に幅狭のもの。ただし、2類との境界は漸移的である。

開口部の平面形状は楕円形。SK889・1358が該当する。SK889の棒状痕数は4本。

**II b1類**：底部施設がB1型で、底部が相対的に幅広のもの。

開口部の平面形状は楕円形ないし円形で、大半が楕円形である。SK12・33・35・36・109・128・133・147・152・187・292・312・314・324・352・378・826・1009・1030・1039・1069・1076・1100・1111・1167・1177・1196・1200・1264の29基が該当。

**II b2類**：底部施設がB1型で、底部が相対的に幅狭のもの。

開口部の平面形状は楕円形がほとんどである。SK10・32・84・204・1090・1150・1190・1260・1330の9基が該当。

**II b3類**：底部施設がB2型で、底部が相対的に幅狭のもの。

開口部の平面形状は楕円形。SK1084・1333の2基が該当。

**III類**：底部施設を有し、底部の平面形状が長楕円形（分銅状・長方形気味のものを僅かに含む）のもの。

底部施設はB型である。底部施設の形態で3細分する。

**III a類**：底部施設がB1型のもの。

開口部の平面形状は楕円形ないし円形で、大部分が楕円形である。SK34・413・420・1083・1097・1107・1119・1188・1308・1328・1332・1372・1373の13基が該当。

**III b類**：底部施設がB2型のもの。開口部の平面形状は楕円形。SK856・1331が該当。

**III c類**：底部施設がB4型のもの。開口部の平面形状は楕円形。掘り込みは深い。SK120のみ該当。

**IV類**：底部施設を有し、底部の平面形状が長方形のもの。底部施設の形態、さらに底部の幅・長さの比で6細分する。

**IV a1類**：底部施設がA1型で、底部が相対的に幅広のもの。ただし、2類との境界は漸移的である。

底部ピットの棒状痕数は3本で、開口部の平面形状は楕円形。SK412のみ該当。

**IV a2類**：底部施設がA1型で、底部が相対的に幅狭のもの。

底部ピットの棒状痕数は3・4本で、開口部の平面形状は楕円形。SK304・323・920・923・924・

1378の6基が該当。

- IV a3 類**：底部施設が A2 型で、底部が相対的に幅狭のもの。  
底部ピットの棒状痕数は 5・7 本で、開口部の平面形状は楕円形。SK394・824・910 の 3 基が該当。
- IV b1 類**：底部施設が B1 型で、底部が相対的に幅広のもの。ただし、2 類との境界は漸移的である。  
開口部の平面形状は楕円形。SK09・67・77・113・132・192・318・411・414・1092・1145・1374・1375 の 13 基が該当。
- IV b2 類**：底部施設が B1 型で、底部が相対的に幅狭のもの。  
開口部の平面形状は楕円形・円形・長方形で、楕円形が多い。SK131・183・298・309・320・393・860・863・892・1103・1152・1164・1169・1212・1306・1352 の 16 基が該当。
- IV b3 類**：底部施設が B2 型で、底部が相対的に幅狭のもの。  
開口部の平面形状は長方形で、底部は相対的に幅狭である。SK216 のみ該当。
- V 類**：底部施設を有し、底部の平面形状が分銅形のもの。ただし、II・III・IV 類にも底部がやや分銅状を呈するものがみられることから、それらのバリエーションとして捉えることもできよう。  
底部施設は B1 型に限られる。底部の幅・長さの比および開口部の平面形状で 2 細分する。
- V a 類**：底部が相対的に幅広のもの。ただし、b 類との境界は漸移的である。  
開口部の平面形状は円形ないし楕円形で、割合は半々である。SK75・90・360・1105・1146・1184 の 6 基が該当。
- V b 類**：底部が相対的に幅狭のもの。  
開口部の平面形状は円形ないし楕円形で、大部分が楕円形である。SK1055・1066・1075・1126・1165 の 5 基が該当。
- V c 類**：底部が幅狭の形状を呈し、開口部の平面形状が方形のもの。SK1077 のみ該当。
- VI 類**：底部施設を有さないもの。  
平面形状は、底部が長楕円形で、開口部が楕円形。掘り込みは深い。SK22・68 が該当。

### (3) 時期

縄文時代中期初頭から後葉 2 期には東部台地において集落が営まれており、その領域は東部台地に広く及んでいた。また、西部傾斜地東端部を中心に後期初頭の土坑群が存在する。陥し穴の分布は中期集落の領域および後期初頭の土坑群の分布範囲に重なっている。したがって、大明神原が陥し穴による狩猟域として機能していた時期は、大きくは、前期末以前と後期前葉以後の二時期あることが想定される。

126 基のうち、時期判断可能な土器を出土した陥し穴は 15 基ある。SK323 で早期前葉の土器および前期後葉と思われる土器、SK68 で早期後半～前期前半と思われる織維土器と中期前葉の土器、SK216・1009 で中期初頭、SK318 で中期初頭～前葉、SK82・90・120・860 で中期前葉、SK291 で中期中葉末～後葉 1 期、SK192・920 で中期後葉 3 期、SK1152 で後期初頭・SK760 で後期前葉の土器が出土している。

他遺構との切り合いでは、SK856 が SB40 (中期後葉 2 期) に、SK824 が円形土坑 SK825 (中期中葉～後葉) に、SK892 が付属坑付土坑 SK891 (中期初頭～前葉) に切られ、SK113 は円形土坑 SK127 に、SK378 は楕円形土坑 SK377 に切られる。また、SK192 は円形土坑 SK210 を切る。前に付属坑付土坑、円形・楕円形土坑を集落に伴う貯蔵穴と推定したが、そうすると、集落を構成する遺構に切られる例と、それを切る例の両者があることになる。

また、圃加速器分析研究所に委託して、陥し穴出土の炭化物 8 件の放射性炭素年代測定 (AMS 法) を行っ

た。測定方法、測定値とその暦年較正年代は、付録 CD に収録した「放射性炭素年代測定報告書」を参照していただきたい。各測定値の暦年較正年代を小林謙一氏による縄文時代の実年代推定（小林 2008）に対比すると、SK36（底面）と SK1373（底部ピット）ともに早期後半、SK910（埋土最下層）は前期後葉から中期前葉、SK924（埋土）は前期末葉から中期中葉、SK22（埋土）は中期後葉末から後期前葉、SK1358（埋土上部）は後期初頭から前葉、SK324（埋土下半部）は後期中葉から後葉、SK760（埋土）は晩期初頭から中葉に相当しよう。

以上の状況を勘案すると、端境期は微妙であるが、陥し穴には、①早期後半～前期末葉に属する一群と、②後期前葉～晩期中葉に属する一群があることが推測される。以下、それぞれ①期、②期とする。集落を構成する遺構に切られる陥し穴は①期に、中期初頭以降の土器を出土する陥し穴と、集落を構成する遺構を切る陥し穴は②期に属すると考えておきたい。

上記の材料から、先に示した類型の時期を推測してみると、まず、A 型の底部施設を有する II a 類・IV a 類は②期の可能性が高いと思われる。SK323 の早・前期の土器は混入と考えるべき。また、VI 類および土坑本体の形態が類似する III c 類は②期に属すると考える。I a 類は SK82 の出土土器から②期と推測しておきたい。一般に円形の深い陥し穴は古く考えられる傾向にあるが、こうした形態が後期以降にも存在する可能性はあるだろう。III a 類は SK1373 出土炭化物の放射性炭素年代測定結果（早期後半相当）から①期の可能性を推測したい。本遺跡の陥し穴の主体をなす類型は II b1・II b2・IV b1・IV b2 類である。II b1 類は判断材料を欠くが、II b2・IV b1・IV b2 類は①期・②期双方にまたがると考え得る材料があり、①期・②期を通して用いられた形態と推測する。

#### (4) 分布と配置（第 13～30・34・35 図、付図 1・2）

陥し穴は、西部傾斜地南部の尾根状微高地の東端部と、南端部を除く東部台地に分布する。立地は微高地や台地頂部平坦地の縁辺部が主体である。周囲の谷や下位段丘へと下る、あるいはそこから上ってきた獣類を狙って陥し穴の設置場所が選定された可能性があろうか。一方、平坦地の内側には分布が少ない傾向が看取され、東部台地の最高所にあたる東端部では直径 100m ほどの範囲が陥し穴の空白域となっている。ただし、東部台地の中央部は、対向するように南北から挟入する谷状地形により、頂部平坦地の幅が狭くなっており、そこには陥し穴が多く分布する。

西部傾斜地の東端部にあたる 20・20b 区では、8 基の陥し穴が検出されており、そのうち 7 基が A 型底部施設をもつ。分布は、北側の一群と南側の一群に分かれる（第 13 図、付図 1・2）。北群は II a1 類の 4 基からなる。西側の SK760・773 は長軸方向を北西―南東に揃え、規模・形状の細部もよく似る。東側の SK937・936 も互いに形態・方向を揃えているが、西側の 2 基に比べて規模が若干大きく、方向は南北である。このことから、西側の 2 基と東側の 2 基は、それぞれ、2 基を一組とする別個の配置単位として把握できよう。南群は IV a2 類 3 基、I a 類 1 基からなる。IV a2 類 3 基は規模・形状がよく似ているが、長軸方向が揃う SK924・920 の 2 基が一つの単位とみられる。北群・南群とも、各単位を構成する 2 基の間隔は 21～23m とほぼ同じである。南群の SK923 さらに 921 に組み合う陥し穴は、西側調査区外に存在する可能性を推測しておきたい。

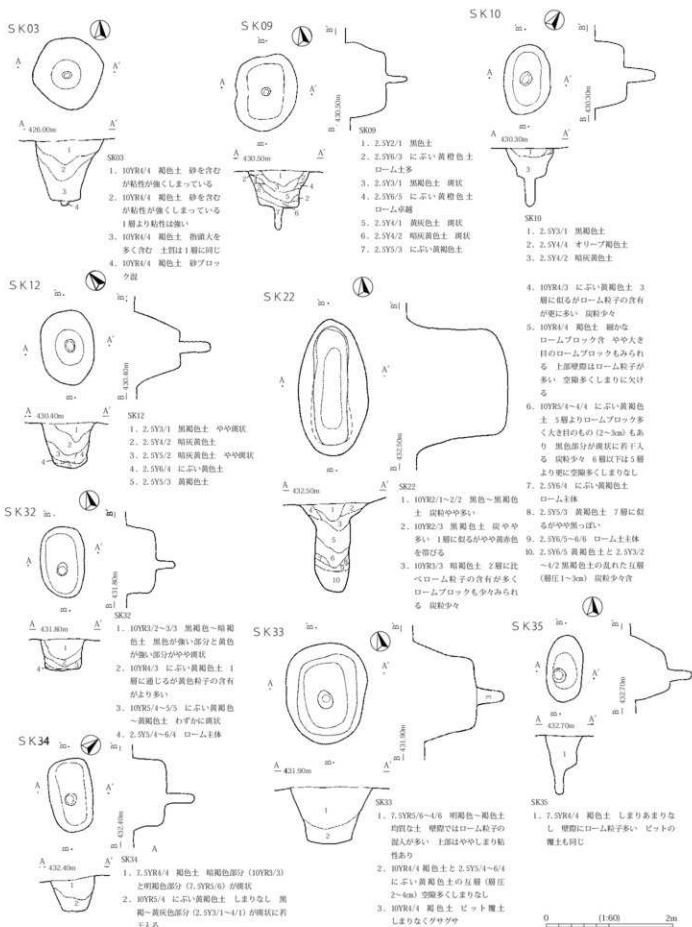
2 基が一組となる配置単位は、西部傾斜地だけでなく東部台地においても認められる。西縁部の北半では SK292・312（II b1 類）、SK860・863（IV b2 類）、南半では SK133・152（II b1 類）、SK84・109（II b2・II b1 類）がみられる。中央部では SK413・1372（III a 類）、SK1374・1145（IV b1 類）、SK1105・1146（V a 類）の例がある。若干の類型差をもつ場合、やや間隔が開く場合（30m 程度）を加えると、東部を含めて事例はぐっと増加し、西縁部から中央部にかけては、大半の陥し穴が 2 基一組単位で構成される。こうした配置

単位が構築の単位であることは確かであろうが、同時に一回の狩猟単位としても把握し得るとすれば、陥し穴2基から成る小規模な仕掛けを用いる狩猟形態が基本であった可能性も考えられる。また、類型を超えて陥し穴の配置法に等質性が窺えることは、時期ごとの陥し穴罠のあり方に、大きな変化がなかったことを示唆するのではなかろうか。

ただし、東部台地西縁部の南部にあたる7区では、合計8基が列状の配置を示す例が認められる。東側の縁辺にSK129・128・147・148・149の5基が等高線に直交して一列に並び、それと対をなすように、西側の縁辺にはSK78・79・82の3基がやはり等高線に直交して並ぶ(第18・19図、付図1・2)。兩列は、台地頂部平坦地部分で広く間隔が開くが、概ね同じ軸に沿っており、全体として機能していたことが推測される。列内の陥し穴をみると、同類型ではほぼ相同な2基が隣接する状況が認められる。東列ではⅡb1類のSK128・147、Ⅰa類のSK148・149が、西列ではⅠa類のSK79・82がそれぞれ隣接しており、2基一組の単位が複数連続して、さらに大きな単位である列状配置を構成する事例と考えられる。また、異なる類型を含むことから、増設が行われた可能性もあり得る。

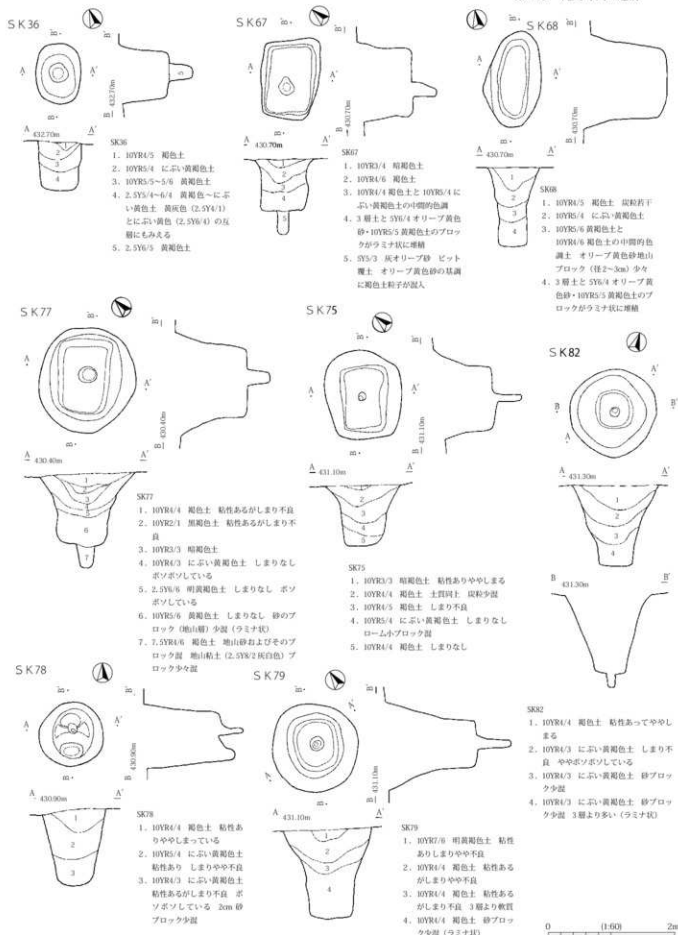
川路大明神原で行われた縄文時代の陥し穴罠には、陥し穴2基による小規模な仕掛けを用いる形態と、列状配置を形成する8基が示すような相対的に大がかりな仕掛けを用いる形態の、二者があった可能性が考えられよう。とはいえ、上記の列状配置8基以外には単位間に明確な連繋を見出すことは難しかったが、2基のみで罠としての有効性を発揮し得るかどうかは検討の余地があり、2基一組の単位が複数組み合う場合がないのかどうか、3基以上が単位となる場合を含めて、配置状況の分析が不十分のままである。構築単位の抽出とともに、単位間の連関をどのように読み取るか、すなわち、狩猟単位をどのように把握するか、周辺地域の事例を含めてさらなる検討が必要である。本遺跡のように明確な列状配置を示さない陥し穴群については、このことが大きな課題となるであろう。

第4章 遺構と遺物



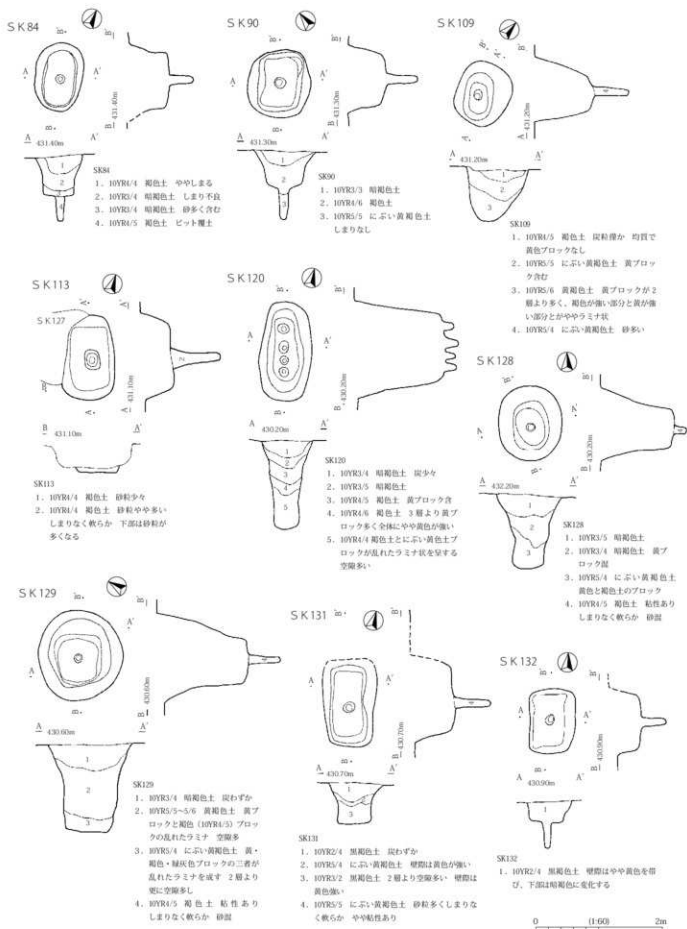
第100図 陥し穴実測図(1)

第2節 縄文時代の遺構



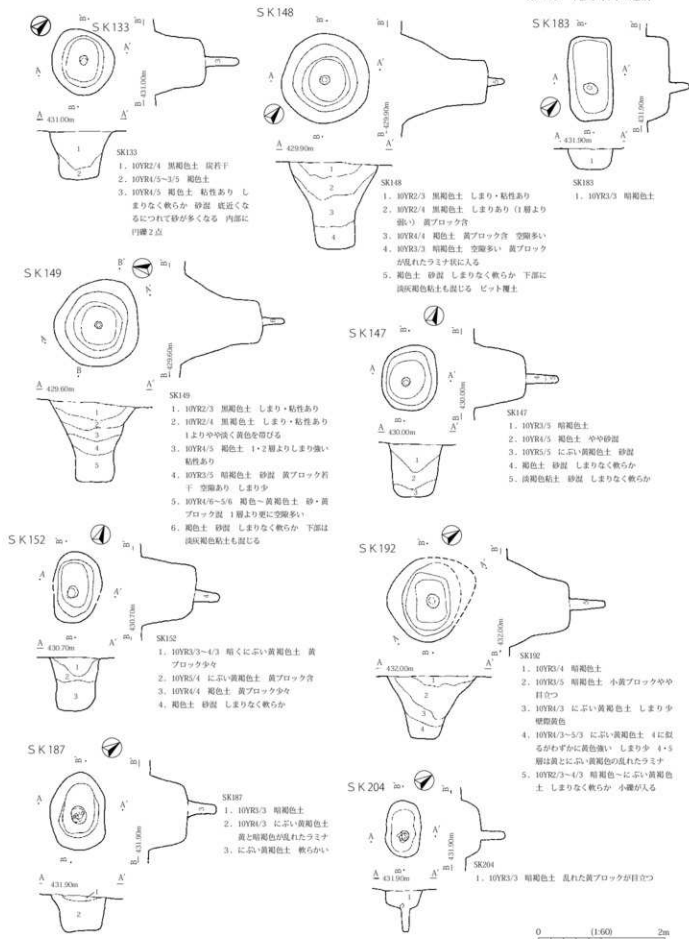
第101図 陥し穴実測図 (2)

第4章 遺構と遺物



第102図 陥し穴実測図(3)

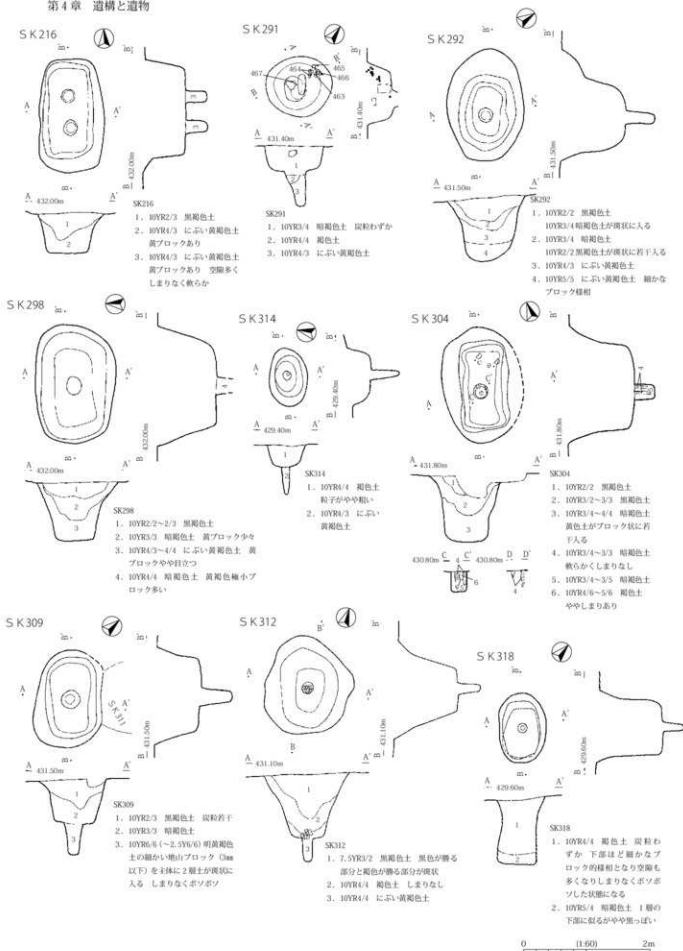
第2節 縄文時代の遺構



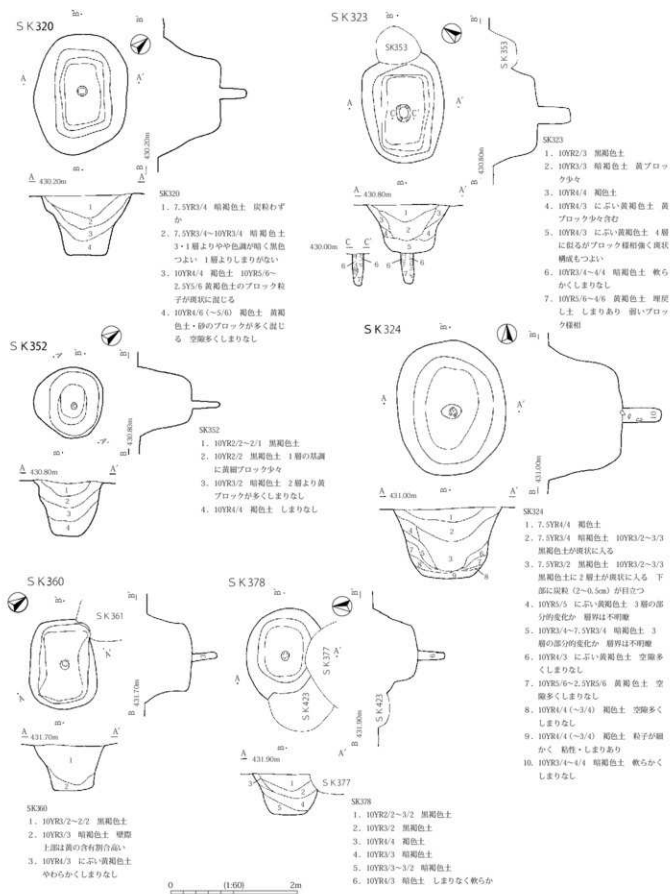
第103図 陥し穴実測図(4)



第4章 遺構と遺物

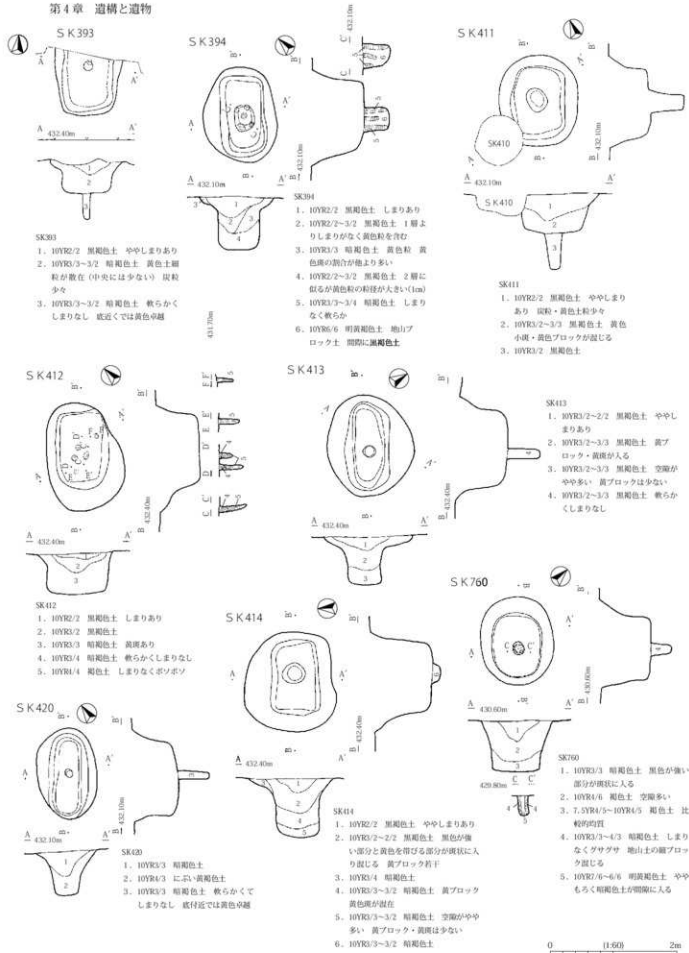


第104図 陥し穴実測図 (5)



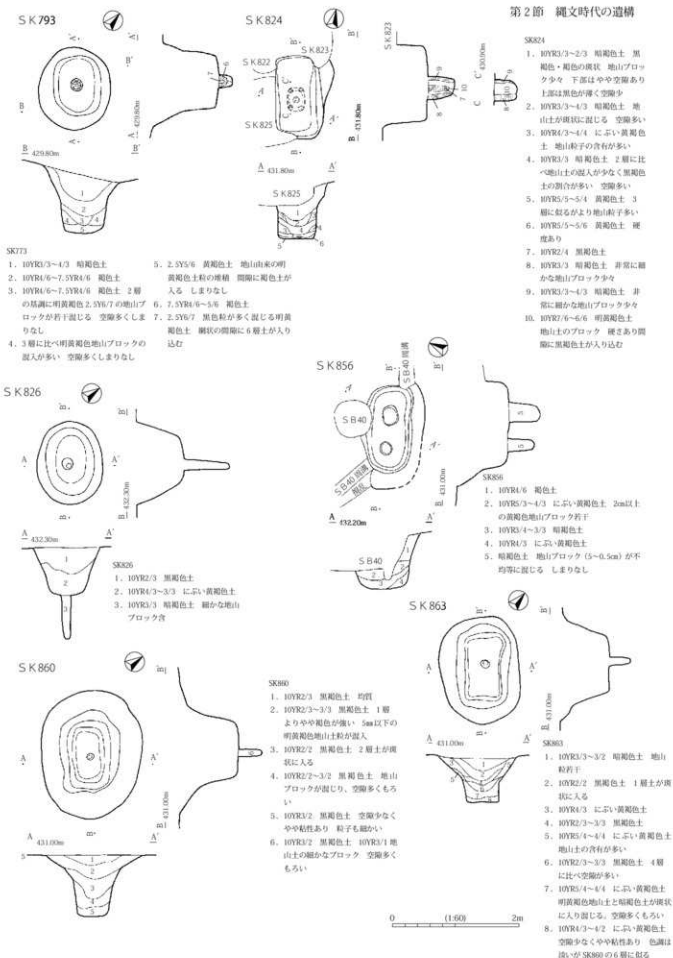
第105図 陥し穴実測図 (6)

第4章 遺構と遺物



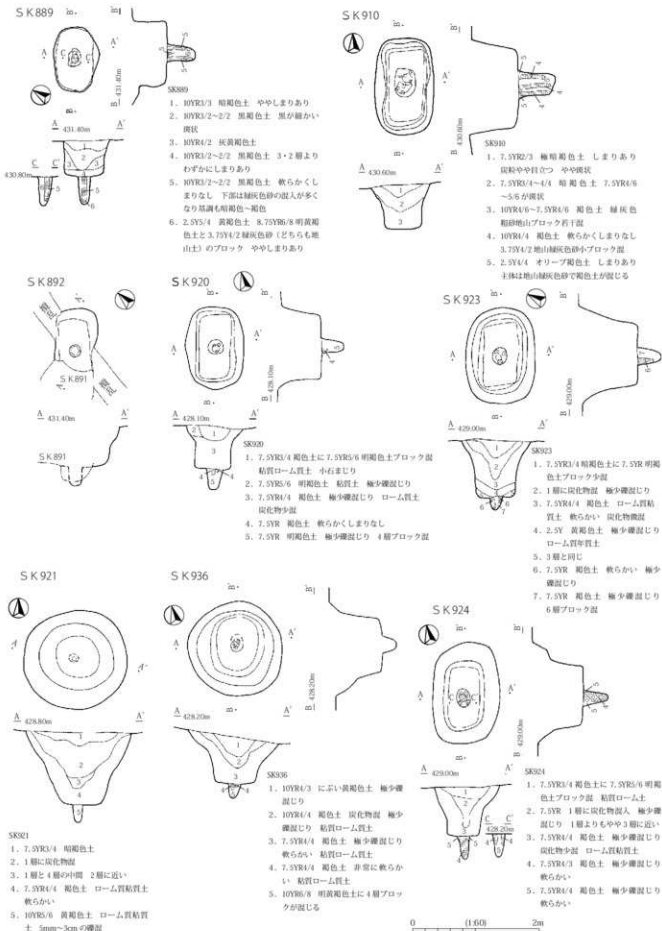
第106図 陥し穴実測図(7)

第2節 縄文時代の遺構



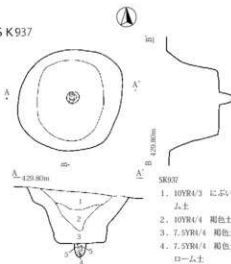
第107図 陥し穴実測図(8)

第4章 遺構と遺物



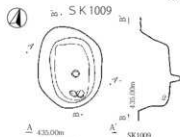
第108図 陥し穴実測図(9)

SK 937



SK 937

1. 10YR4/3 に近い黄褐色土 炭化物混じる 粘質ローム土
2. 10YR4/4 褐色土 炭化物混じり 1層と3層の中間
3. 7.5YR4/4 褐色土 極少炭混じり 炭化物混混
4. 7.5YR4/4 褐色土 極少炭混じり 軟らかい 粘質ローム土
5. 10YR5/5 黄褐色土 3層ブロック混



SK 1009

1. 10YR4/6 褐色土 黄褐色ローム粒を含む 粘性あり しまりあり
2. 10YR4/4 暗褐色土 3~5mmロームブロックを多く含む 1層に比べ粘性弱くしまりに欠ける
3. 10YR4/6 褐色土 1層に比べローム粒を多く含むのみあり しまりに欠ける
4. 明黄褐色土 ローム主体 しまり欠け軟らかい

SK 1030



SK 1030

1. 10YR4/4 褐色土 炭化粒含まず 黄褐色ローム 粘質土混入
2. 10YR6/6 明黄褐色土 ローム粒を主体とし褐色土混入 炭化粒若干含む しまりに欠け軟らかい
3. 10YR5/5 黄褐色土 炭化粒若干含む 2層より硬くしまる

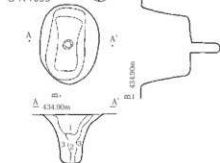
SK 1039



SK 1039

1. 10YR4/4 褐色土 2mmローム粒を多く含む 炭化粒を若干含む しまりあり
2. 10YR5/5 黄褐色土 粘性・しまりあり

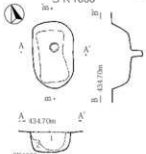
SK 1055



SK 1055

1. 10YR2/2 黒褐色土 炭化粒
2. 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒を含む
3. 10YR6/6 に近い黄褐色土 ローム主体 褐色土含む

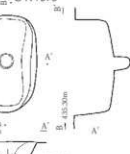
SK 1066



SK 1066

1. 10YR3/3 暗褐色土 粘性弱くしまりに欠ける
2. に近い黄褐色土 ローム土に褐色土含む 粘性弱く軟らかい

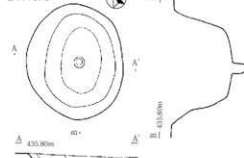
SK 1075



SK 1075

1. 10YR3/4 暗褐色土 炭化粒を若干含む しまりに欠け軟らかい
2. 10YR4/6 褐色土 ローム土に褐色土混入 1層よりしまりに欠け軟らかい

SK 1076



SK 1076

1. 10YR2/3 黒褐色土 炭化粒を若干含む ローム粒の混入少ない 硬くしまる

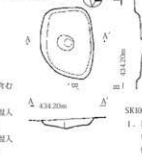
SK 1077



SK 1077

1. 10YR3/4 暗褐色土 炭化粒を若干含む ローム粒の混入少ない 硬くしまる
2. 10YR4/6 褐色土 ローム土に褐色土混入 炭化粒含まない しまりなく軟らかい
3. 10YR4/4 褐色土 ローム土に褐色土混入 炭化粒含まない しまりなく軟らかい

SK 1069



SK 1069

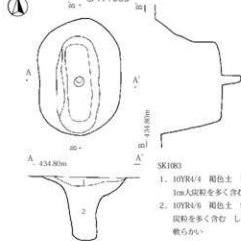
1. 10YR4/4 褐色土 黄褐色ローム粒を多量に含む 粘性弱 炭化粒混入黄褐色ロームが混入混入に多く入る

0 (1:60) 2m

第109図 陥し穴実測図 (10)

第4章 遺構と遺物

SK 1083



SK1083

1. 10YR4/4 褐色土 しまりあり

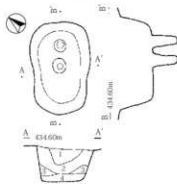
10m大炭粒を多く含む

2. 10YR4/6 褐色土 ローム粒・

炭粒を多く含む しまりに欠け

散らかい

SK 1084



SK1084

1. 10YR5/6 黄褐色土 しまりあり

ローム粒主体

2. 10YR4/4 褐色土 ローム粒含む しま

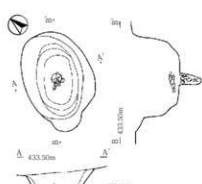
りに欠け散らかい

3. 10YR7/6 明黄褐色土 ローム粒主体

4. 10YR4/4 褐色土 ローム粒含む しま

りに欠け散らかい

SK 1090



SK1090

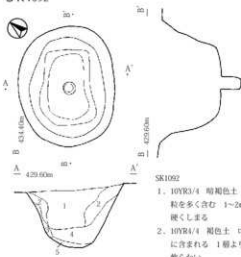
1. 10YR2/3 暗褐色土 2~3m

炭粒を多く含む

2. 10YR4/6 褐色土 ローム粒

を含む 粘性・しまりあり

SK 1092



SK1092

1. 10YR3/4 暗褐色土 2~3mのローム

粒を多く含む 1~2m炭粒を若干含む

硬くしまる

2. 10YR4/4 褐色土 ローム粒が塊状に

含まれる 1層よりもしまりに欠け

散らかい

3. 10YR6/6 明黄褐色土 ローム粒を主

体とする 粘性あり 散らかい

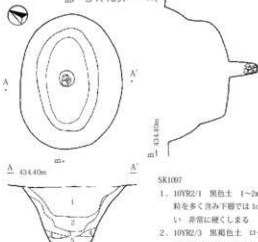
4. 10YR5/6 黄褐色土 ローム粒と褐色

土の混合土 しまりに欠け散らかい

5. 10YR4/6 褐色土 硬くしまる 混合

物はなし

SK 1097



SK1097

1. 10YR2/3 暗褐色土 1~2m大ローム粒を含む 炭

粒を多く含む下層で1.5m大の炭化物が比較的

多い 非常に硬くしまる

2. 10YR2/3 暗褐色土 ローム粒・炭粒を含む 1

層に比べしまりに欠ける

3. 10YR5/6 黄褐色土 ローム粒を主体とする

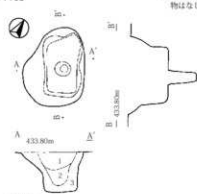
1~2層に比べしまりに欠け散らかい

4. 10YR4/4 褐色土 ローム土を主体とし褐色土が

混ざる しまりに欠け散らかい

5. 10YR2/3 暗褐色土 硬くしまる 粘性あり

SK 1103



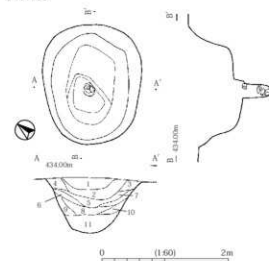
SK1103

1. 10YR3/4 暗褐色土 硬くしまりあり

2. 10YR3/4 暗褐色土 しまりに欠け散らかい

3. 10YR5/6 黄褐色土 ローム粒主体

SK 1100



SK1100

1. 10YR2/3 暗褐色土 硬くしまりあり

2m大炭粒・ローム粒含む

2. 10YR3/4 暗褐色土 硬くしまりあり

ロームが塊状に含まれる

3. 10YR5/6 黄褐色土 ローム粒主体

しまりに欠け散らかい

4. 10YR4/4 褐色土 1~2層のローム粒

主体 粘性あり 散らかい

5. 10YR2/3 暗褐色土 2層に比べしま

りに欠け散らかい 10YR4/4 褐色土を

多く含む

6. 10YR4/4 褐色土 5層に比べローム

粒を多く含む散らかい

7. 10YR5/6 黄褐色土 ローム粒主体

散らかい

8. 10YR3/4 暗褐色土 2~3m大ローム

粒を多く含む しまりに欠け散らかい

9. 10YR6/6 明黄褐色土 ローム主体

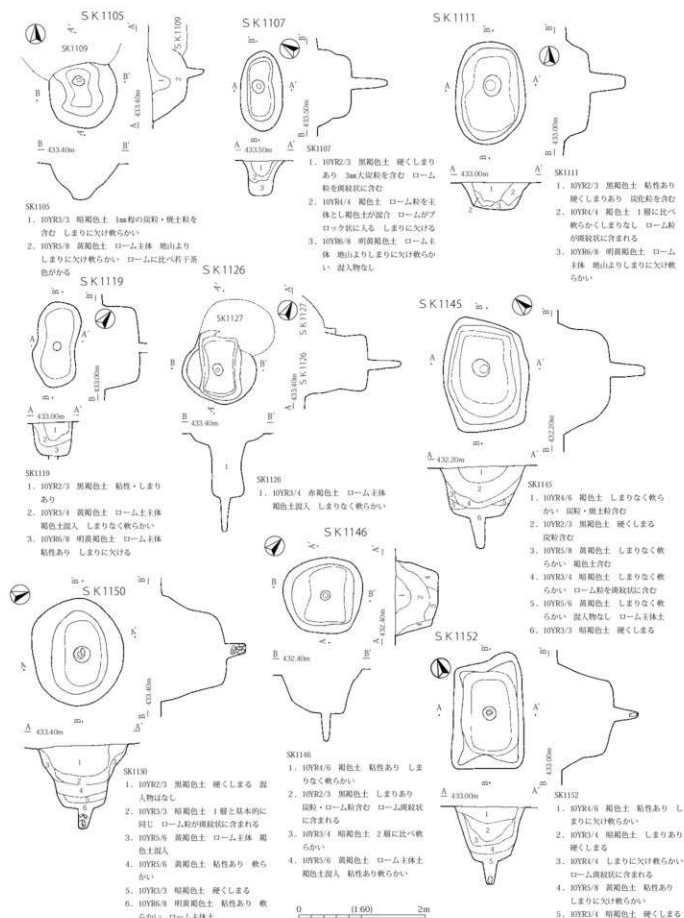
粘性あり

10. 10YR5/6 黄褐色土 ローム主体 散

らかい

11. 10YR2/3 暗褐色土 硬くしまりあり

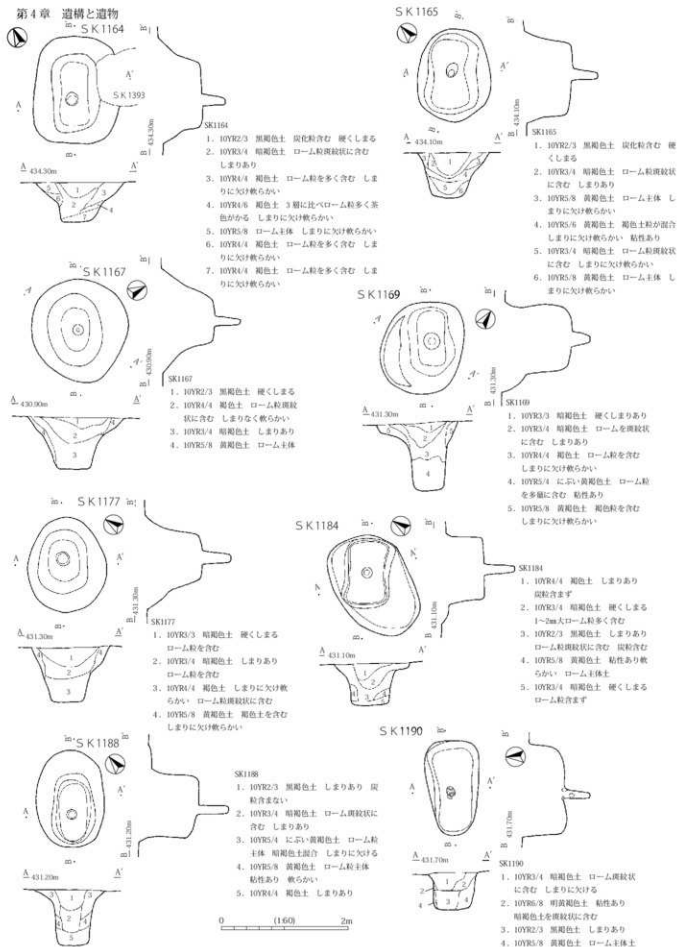
第110図 陥し穴実測図(11)



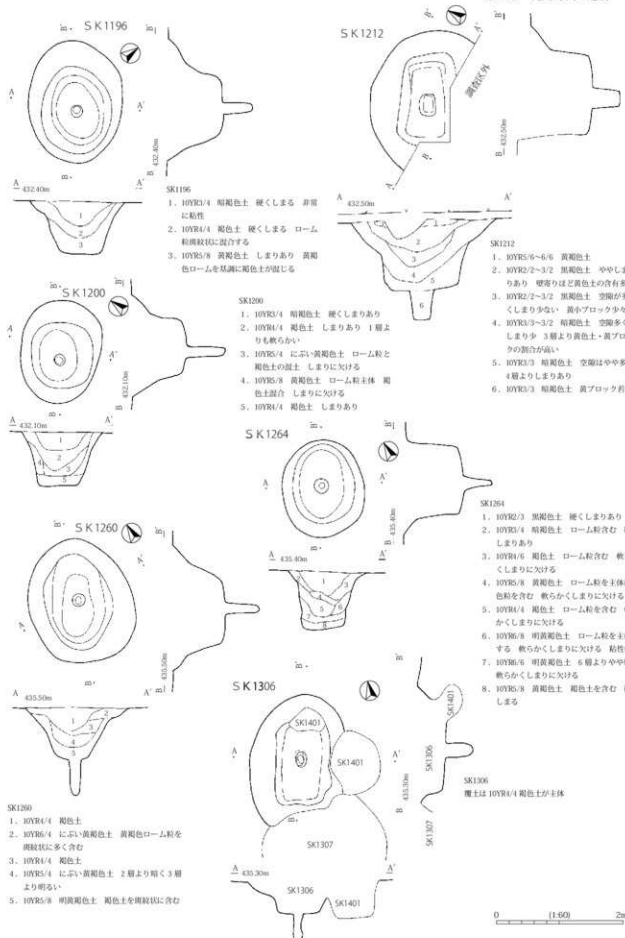
第111図 陥し穴実測図(12)



第4章 遺構と遺物



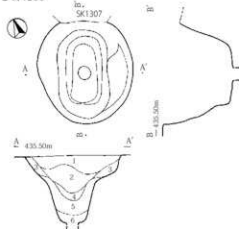
第112図 陥し穴実測図(13)



第113図 陥し穴実測図(14)

第4章 遺構と遺物

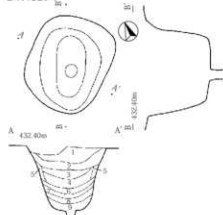
SK1308



SK1308

1. 10YR1/4 褐色土 しまりあり 粘性弱
2. 10YR3/3 暗褐色土 1層より軟らかい 粘性弱 ローム状含む
3. 10YR5/8 明黄褐色土 ローム主体 粘着あり しまりに欠け軟らかい
4. 10YR6/4 暗褐色土 しまりに欠け軟らかい
5. 10YR5/4 に近い黄褐色土 ローム状含む しまりに欠け軟らかい 粘性あり
6. 10YR5/8 明黄褐色土 ローム主体 しまりあり

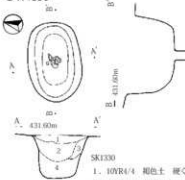
SK1328



SK1328

1. 10YR3/3 暗褐色土 硬くしまる
2. 10YR5/4 に近い黄褐色土 ローム主体 1層より硬くしまる
3. 10YR1/4 褐色土 ローム粒を含む 1層より硬くない
4. 10YR2/3 黒褐色土 ローム粒を塊状状に含む しまりに欠け軟らかい
5. 10YR5/8 黄褐色土 ローム主体 しまりに欠け軟らかい
6. 10YR5/8 明黄褐色土 ローム主体 しまりに欠け軟らかい
7. 10YR1/4 褐色土 ローム混合 しまりに欠け軟らかい
8. 6層と同じ
9. 7層と同じ

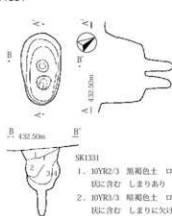
SK1330



SK1330

1. 10YR6/4 褐色土 硬くしまる
2. 10YR5/4 暗褐色土 ローム塊状に含む しまりあり
3. 10YR5/8 黄褐色土 ローム主体 しまりに欠け軟らかい
4. 10YR1/4 褐色土 ロームブロックを含む see大図説含む しまりに欠け軟らかい

SK1331



SK1331

1. 10YR2/3 黒褐色土 ローム塊状に含む しまりあり
2. 10YR3/3 暗褐色土 ローム塊状に含む しまりに欠け軟らかい
3. 10YR1/4 褐色土 ローム塊状に含む しまりに欠け軟らかい
4. 10YR3/3 暗褐色土 ローム塊状に含む しまりに欠け軟らかい

SK1332



SK1332

1. 10YR2/3 黒褐色土 しまりあり
2. 10YR1/4 褐色土 ロームを含む しまりに欠け軟らかい
3. 10YR5/8 黄褐色土 ロームを主体とし褐色土を含む しまりに欠け軟らかい
4. 10YR5/4 に近い黄褐色土 ローム塊状に含む しまりに欠け軟らかい
5. 10YR6/4 褐色土 ロームを含む しまりあり

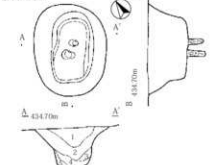
SK1352



SK1352

1. 10YR2/3 黒褐色土 しまりあり 炭粒含む
2. 10YR3/3 暗褐色土 細かい黄ブロック混 1層より空隙多い
3. 10YR3/3~4/3 暗褐色土 しまりなく軟らかい
4. 10YR4/5~5/5 に近い黄褐色土 細かいブロック混 しまりなくもろい 空隙多い

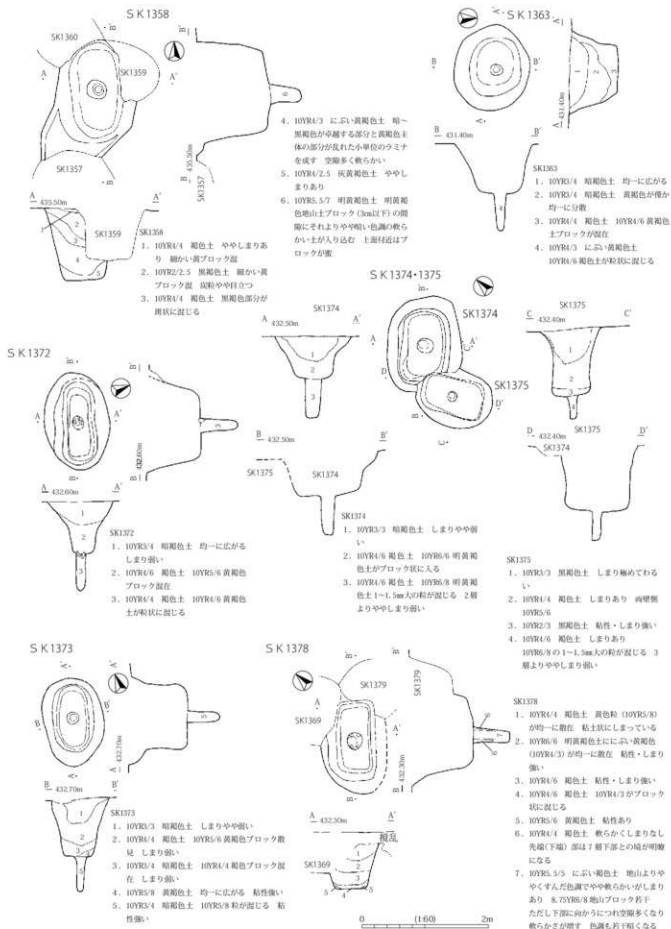
SK1333



SK1333

1. 10YR2/2 黒褐色土
2. 10YR3/3~3/2 暗褐色土 黄褐色土が塊状 塊状は黄色を帯びる 1層に比べ空隙多くしまり弱い
3. 10YR4/6 褐色土 しまり弱い
4. 10YR3/3 暗褐色土 2層に亘るが黄褐色は自立出来ない
5. 10YR4/3~4/4 に近い黄褐色土 しまり弱い 空隙多い
6. 10YR3/3 暗褐色土 しまりなく軟らかい
7. 10YR4/3.5 に近い黄褐色土 1層との境界は不明瞭 しまりなく軟らかい

第114図 陥し穴実測図(15)



第115図 陥し穴実測図(16)

#### 4 小形ピット集中地点（第21・28図）

東部台地の東部～中央部にあたる12・13・14区には、SKではなく「P」の遺構記号を与えた小形の土坑の一群がある。これらは周囲の土坑より相対的に小さく、一定の範囲に集中する場合がある。12区で27基、13区で9基、14区で6基あり、本書では小形ピットと称することとする。小形ピットが集中する地点は、12区に2箇所、13区に1箇所が認められる。また、東部台地中央部の9区でも同様に小形ピットが集中する地点が1箇所ある。これら4箇所は東部台地の東部～中央部に位置している。各ピットの形状・規模等については、付表の「土坑一覧表」に記載したので、そちらを参照されたい。

集中地点1（第28図）：12区、IV T07・11・12グリッドに位置する。P14～26・42の14基が7m×6mほどの範囲に集中する。P14～16が南にやや突出した位置にあり、それを除けば、各ピットは方形を基調とした配置を示すようである。

集中地点2（第28図）：12区、IV T22・23グリッドに位置する。P7～11・SK1311の6基が3m×5mほどの範囲に集中する。配置は不規則である。

集中地点3（第21図）：13区、IV K24・P04グリッドに位置する。P35～41の7基がやや歪んだ方形を呈して並び、P41・35・36の3基は3m×2mのL字形の配置を示す。

集中地点4（第21図）：9区、III T05グリッドに位置する。SK400～402・404～406の6基から成り、SK401・402・404・406の4基が2.5m×2mの方形配置を示す。

これら4箇所の小形ピット集中地点は何らかの建物跡である可能性が高いと考えられる。特に集中地点3・4は竪穴住居跡に類似した上屋構造を推測させるピット配置を示している。時期については、覆土の性状等から縄文時代であると思われるが、集中地点4のSK400と集中地点2のSK1311から無文の土器小片が合わせて3点出土したにすぎないため、詳細不明といわざるを得ない。ただし、その位置からみて、中期初頭～前葉の集落（土坑群）と何らかの関係をもつ可能性は考えられるのではなからうか。

## 第3節 縄文時代の遺物

### 1 土器

飯倉道路の建設に伴う今回の発掘調査では、縄文時代早期～後期に所属する土器が出土した。出土総数は27Lコンテナに換算して114箱であり、そのうち、遺構出土は100箱、遺構外出土は14箱を数える。主体となる時期は中期初頭～前葉および中期中葉末～後葉で、それらは在地系の土器に周辺地域の土器が伴出するなど、良好な資料と評価される。早・前期、中期中葉、後期前葉については断片的な資料である。以下、まず、出土土器の概要を時期ごとに述べ、次に、遺構単位で、遺構外のもの調査区単位で一括し、出土土器を報告する。なお、付録CDに土器・土製品観察表を収録した。

#### (1) 出土土器の概要

##### 早期の土器

土坑から出土した、前葉の土器が認められる。

##### 前期の土器

土坑や遺構外から前葉・後葉・末葉の土器が出土した。その内、遺構出土の前葉・後葉土器は、中・後期の土器と混在しながら出土したものである。また、後葉・末葉には関西系の土器が認められる。

##### 中期の土器

###### ① 初頭

竪穴住居跡・土坑・遺構外から、梨久保式(三上1987)に併行する一群と、平出第Ⅲ類A土器(鶴飼1977)、あるいはそれに併行する一群が出土した。本時期における平出第Ⅲ類A土器は、鶴飼幸雄氏が提示した第一段階に該当すると思われる。周辺地域との関係は、梨久保式に併行する一群には関西系の、平出第Ⅲ類A土器には東海系の土器群がそれぞれ伴出した。

###### ② 前葉

竪穴住居跡・土坑・遺構外から平出第Ⅲ類A土器が出土した。平出第Ⅲ類A土器は、鶴飼幸雄氏の第二～三段階に該当するものが主体と考えられ、わずかに第四段階と推測されるものを含む。周辺地域との関係は八ヶ岳山麓系、浅間山麓系、東海系、関西系の土器群を伴出した。浅間山麓系の土器は、SB03より出土した1点のみ(43)である。

###### ③ 中葉

竪穴住居跡・土坑・遺構外から、下伊那型櫛形文土器(神村1986)と推測される土器や八ヶ岳山麓系の井戸尻式が出土したが、主体とはならず、少数が認められるにすぎない。

###### ④ 中葉末～後葉

竪穴住居跡・土坑・遺構外から出土した。土器群は以下の三時期に大きく分けられる。中葉末～後葉初の土器群については、出土状況から分離することが出来なかったため、中葉末～後葉1期として一括した。

**中葉末～後葉1期**：細隆線文土器(米田1980)を主体とする。中葉末の八ヶ岳山麓系の井戸尻式、梨久保B式、東海系北屋敷式が伴う。**後葉2期**：下伊那タイプ(末木1978)と呼ばれる土器群や東海系中富式の影響を受けた土器群が主体となる。**後葉3期**：2期より新しい時期の資料を一括する。唐草文土器、結節縄文を施す親田式(神村1978)など断片的資料が得られたにすぎない。

長野県史における編年(三上・野村・寺内1988)に対比すれば、中葉末～後葉1期は後葉1期、後葉2期は後葉Ⅱ期、後葉3期は後葉Ⅲ～Ⅳ期、に概ね相当すると思われる。

#### 後期の土器

土坑・遺構外から初頭・前葉の土器が出土した。初頭土器の出土は20区・20b区西部の土坑群に集中しており、そのなかには器形復元可能な個体もある。前葉土器は小破片がごく僅かに検出されたにとどまる。

##### (2) 遺構出土の土器 (第116～156図、PL27～42)

#### SB01 (第116・117図1～16、PL27)

中期前葉の土器群が出土した。1は炉体土器、2～16は覆土から出土したものである。

1は隆帯およびそれに沿う沈線で、U字状の区画を行う。区画内部は縦位・横位沈線、刺突、陰刻などを組み合わせて文様を構成する。器壁が0.5～0.8cmと薄く、不明確だが東海系土器群の可能性はある。

2～7は平出第三類A土器の、第二～三段階に該当するものである。2～5は口縁部で、横位沈線やコンパス文を描く。2・4・5は平行沈線によるが、3は結節状の沈線である。5には口縁部から垂下すると思われる縦位隆帯が認められる。6は押圧を施す隆帯により、胴部を上下に分割する。7は胴下部であり、縦位の平行沈線を描く。

8～12は八ヶ岳山麓系の貉沢式～藤内式に該当する。8は隆帯および幅広の押し文で、サンショウウオのような抽象文を描いており、藤内式に該当しよう。9・10は押し文で文様を構成する。11・12は浅鉢で11は隆帯・突起、12は押し文・突起で口縁部の文様を構成する。

13～15は東海系の山田平式と思われ、半截竹管状工具による爪形刺突・半隆帯・刺突・隆帯で文様を構成する。13は口縁部の器形が確認できる資料で、波状口縁を呈し口縁下部が鐙状に張り出す。鐙状の張り出しは、山田平式の特徴とされる。波頂部下に環状などの隆帯を貼付する破片と、口縁部直下の肥厚部から口縁部にかけて、隆帯を垂下させる破片が見受けられる。

16は関西系の船元式と推測され、縄文地に細隆帯・円形刺突で文様を構成する。

#### SB02 (第117図17～25、PL27・28)

中期前葉の土器群が出土した。17は炉体土器、18は炉内、23は炉の掘り方、19～22・24・25は覆土から出土したものである。

17は口縁部に楕円区画を行い、波状文と幅狭の押し文を施す。口縁部と胴部は( )状の区切りをもつ横位沈線で分割され、胴部には縦位・波状などの文様を平行沈線で描く。口縁部の楕円区画と押し文は八ヶ岳山麓系土器群の特徴、口縁部と胴部を分割する横位沈線および胴部に描く縦位・波状などの平行沈線は平出第三類A土器に認められる特徴で、在地系と八ヶ岳山麓系の特徴を併せもつ折衷的な土器とみることでもできよう。炉内出土の18は、接合しないが17と同一個体の可能性が高い。

19・20は平出第三類A土器の第二～三段階に該当し、19は口縁部に波状文を、20は胴上部に弧状の文様を描く。21は単節縄文を施す土器である。器壁の厚さや胎土・色調などの特徴が、平出第三類A土器と類似するが、小破片のため詳細は不明。

22は八ヶ岳山麓系の貉沢式で、口縁部や突起、楕円区画の内部に角押し文と呼称される幅狭の押し文を施す。23は貉沢式に類似するが、口縁部直下に交互刺突がみられる。

24は半隆帯と刻みて文様を構成する。東海系土器群の可能性のあるものの、小破片のため不明。また、25は縄文の特徴からみて、関西系の船元式と推測される。

#### SB03 (第118・119図26～45、PL28・29)

中期前葉の土器群が出土した。26は炉体土器で、31は炉の掘り方、27～30・32～45は覆土から出土した

ものである。

26~31は平出第Ⅲ類A土器の第二~三段階に該当する。26~28は口縁端部の三角形突起から、刻みをもつ隆帯が垂下し、口縁部に結節沈線もしくは波状文を施文する。胴部は横位の押圧隆帯・平行沈線によって上下に分割され、胴上部には縦位沈線や弧状・波状文を描く。27は胴下部の一部が残存しており、胴部を分割する横位沈線の、( )状の区切りから引かれる縦位沈線がみられる。29は口縁部、30は胴上部、31は胴下部であり、それぞれ平行沈線で文様を描く。32は口縁部と胴部を横位の押圧隆帯で区画し、口縁部を縦位沈線で埋める。平出第Ⅲ類A土器の第四段階と推測されるが、中期中葉下伊那型櫛形文土器(神村1986)の可能性も残る。33~35は平出第Ⅲ類A土器と類似するものの、33は胴上部に押圧隆帯が貼付される点、34は口縁部と胴上部の区画が存在せず、縦位の短沈線を連続して描く点、35は口縁部の波状文が単沈線による点、胴部を無文とする点、さらには器形を著しく屈曲させる点に、それぞれ典型的な平出第Ⅲ類A土器との違いが見られる。36は球状に膨らむ胴部に櫛形文を描いており、中期中葉の下伊那型櫛形文土器(神村1986)の可能性はあるが、口縁部が残存せず不明確である。

37~42は八ヶ岳山麓系の猪沢式・新道式である。角押文・三角押文などの押し文や玉抱き三叉文、隆帯による櫛形・重三角区画で文様を構成する。42は浅鉢であり、口縁部に押し文を施文する。41は器面状態が悪く、一部に条線が観察されるのみで詳細不明。ただし、器壁の厚さや胎土・色調などの特徴は八ヶ岳山麓系の土器群に類似する。

43は浅間山麓系の焼町式である。円形突起を貼付し、隆帯および脇を沿う沈線で縦長の櫛形区画を行う。区画内外には押し文を施文する。本遺跡で出土した浅間山麓系の土器は、図示したこの1点のみである。

44・45は東海系の山田平式と考えられ、半截竹管状工具による半隆帯・爪形刺突、陰刻で文様を構成する。44は口縁下端部が鐮状に張り出すといった器形の特徴をもつ。

#### SB07 (第120図46・47、PL29)

中期中葉末~後葉1期の土器群が出土した。46はP10から、47はP1からの出土である。

46は小形の鉢で、頸部に二本の隆帯に挟まれた幅狭い無文帯をもち、上位の隆帯の上側面に刺突状の短沈線を施す。胴部は弧と逆V字を組み合わせた人体文風の隆帯文で縦位に区画し、隆帯間に斜位・縦位の細かい沈線を密に充填する。47は縦の隆帯と密に施した縦位沈線で文様を構成する。

#### SB08 (第120図48~52、PL29)

中期中葉2期の土器群が出土した。ただし、50は後葉1期に属するかもしれない。48~52いずれも覆土出土である。

48はキャリアー形の口縁部をもつ深鉢で、胴部は底部に向かって僅かにすぼまる器形を呈する。口縁部文様は、一部に突起を伴う隆帯渦巻つなぎ弧文で区画し、区画内に斜位の短沈線を密接施文する。胴部は、縄文地文の上に、縦位・横位の沈線で文様を描き、縦位沈線は腕骨文状を呈する。49は胴部上位に、細い隆帯による隆帯渦巻つなぎ弧文を配し、その下に一部、蛇行垂下文が観察される。地文は縄文である。50は口縁部直下に横位の波状隆帯を貼付し、51は斜位の沈線を密接施文する。52は東海系中富式の影響を受けた土器と思われる、キャリアー形の口縁部に横位の連続刺突文と沈線文を施している。

#### SB09 (第120・121図53~68、PL29・30)

後葉2期の土器群を主体として、中葉末~後葉1期の土器が若干みられる。53~68いずれも覆土から出



土した。53～58は中葉末～後葉1期に属する。

53～55は、口縁部に細い隆帯を密接貼付して装飾文様を構成することを特徴とする細隆線文土器である。斜位の細隆帯を施文している。54・55には頸部無文帯が観察される。56はく字状に外折する口縁端部が無文帯となり、その直下に細い隆帯による二本一組の波状文を廻らせる。57は山形の隆帯下に縦位の平行沈線に密接させて施文する。58は刻み目隆帯によるU字状文を貼付し、その外側に縦位の沈線文が密接施文される。U字状文の内部に刻みを施した縦位の隆帯を加える。梨久保B式に該当しようか。

59～61はキャリバー形の口縁部に隆帯で主要な文様モチーフを表出する。59は刻みを施した隆帯を用いて横走・弧状の文様が描かれ、頸部は無文帯となる。60・61は隆帯渦巻つなぎ弧文を付すもので、60は押引文・短沈線文を伴う。62・63は口縁部に隆帯と短沈線に施文する。62の横位隆帯上には一条の沈線が加えられている。64～65は縄文地文の胴部に縦位主体の直線や曲線、アーチ状の沈線文を描く。

67・68はキャリバー形の口縁部に細い隆帯による渦巻つなぎ弧文を施す。渦巻つなぎ弧文の弧の部分直線的になっている。

**SB10** (第122図69～72)

中期中葉末～後葉1期の土器群を主体として、後葉2期の土器が僅かにみられる。69～72いずれも覆土から出土した。72は後葉2期と考えられる。

69は細隆線文土器で、細隆帯を縦位・斜位に貼付する。70～72は隆帯により主要な文様を構成すると考えられる。70は横位・V字状、71は横S字状の隆帯が貼付されている。72は口縁部に隆帯による渦巻つなぎ弧文などを施文していると推測される。地文は縄文である。

**SB11** (第122図73～76)

出土した土器は数量的にもごく少ないうえ、中期中葉～後葉2期の土器が混在している。73はP3、74はP1、75は埴内、76は覆土出土である。

73・74は口縁に山形突起をもつ。突起頂部直下に、73は縦位の刻み目隆帯を貼付し、74は押引文を伴う刻み目隆帯により縦位の楕円文を施している。75は胴部片で、頸部無文帯下に楕円文を構成すると思われる。73～75は中期中葉の「下伊那型楕円文土器」の可能性が高い。76は隆帯による渦巻文を貼付する。後葉2期であろう。

**SB12** (第122図77～84、PL30)

中期中葉末～後葉1期の土器群が出土した。84は埴内土器である。80は埴掘り方、79はP7、81はP11、その他は覆土から出土した。

77～79は細隆線文土器である。77・79は縦位に、78はおそらく弧状ないし逆U字モチーフに細隆帯を放射状に貼付している。80は楕円文と思われる、細隆線文土器の胴部片である可能性が高い。81・82は頸部に無文帯が廻ると思われる、胴部に隆帯と密接施文の平行沈線による文様が施される。81は楕円文のようなモチーフが横に連続して、一部、その下端から3本の隆帯が垂下する。82は無文帯直下の横位の隆帯からほぼ平行する2本の刻み目隆帯が垂下している。83は頸部に一部刻みを施した隆帯を横走させ、その直上に縦位の短沈線に施文する。口縁部はキャリバー形を呈する広い無文帯を形成する。84は縄文を施した深鉢の胴下部～底部である。

**SB13** (第122・123図85～102、PL30・31)

中期前葉の土器群が出土した。85は埴土土器、86～102は覆土から出土したものである。

85は東海系の山田平式と考えられ、半截竹管状工具による半降帯で文様を構成する。

86・87・89は平出第Ⅲ類A土器の第二～三段階に該当する。86・87は口縁部～胴上部で、口縁部に波状文や横位沈線を描く。86には口縁端部の突起から垂下すると考えられる縦位降帯が残存する。87は胴上部に縦位沈線を描いている。89は口縁部に波状文を、胴上部には縦位沈線を描く。口縁端部の三角形突起から垂下する降帯は長く、口縁部に止まらず胴上部にまで及ぶ。88は器壁の厚さや胎土・色調などの特徴が、平出第Ⅲ類A土器と類似する。しかし、口縁部の文様を連続した刺突文で構成する点が、典型的な平出第Ⅲ類A土器とは異なる。90は胴下部に細い降帯および押し文で、櫛形文と同様の文様を構成する。下伊那型櫛形文土器の可能性も考えられるが、口縁部が残存せず不明。91は縄文地文に、細降帯で文様を構成する。残存状態が悪く型式などの詳細は不明。

92～100は八ヶ岳山麓系の新道式もしくは藤内式である。92～96は新道式で、降帯による楕円もしくは重三角区画、三角押し文と称される押し文などで文様を構成する。97～100は藤内式で、97～99は降帯区画の脇に幅広の押し文を施文する。100は、パネル文と称される土器であろう。

101・102は東海系の土器と推測される。101は口縁下部と考えられる部分に、押し文のような刺突を施す横位降帯を貼付する。胴部は広い範囲に、無文部が形成される。102は波状口縁の波頂部直下に環状の降帯を貼付し、三角押し文に類似した押し文で口縁部の文様を構成する。胴上部は無文の可能性が高い。この2点は押し文で文様を構成する点、特に、102は口縁端部直下に肥厚部および爪形刺突をもたない点、胴上部に無文部を形成する点、頸部に鐮状の張り出しが認められない点などから、山田平式に後続する土器の可能性があろう。例えば、北屋敷Ⅱ式とされる土器に三角押し文などの類似点を見出せるが、明確な点も多く断定できない。

#### SB14 (第124図103～107)

中期中葉末～後葉Ⅰ期の土器群が出土した。103はP6、104はP2、その他は覆土出土である。

103は細降線土器である。やや太目の斜位降帯で区画し、細降線を斜位・縦位に貼付する。104～106は降帯と密接施文の平行沈線により文様を構成する。104は人体文風の刻目降帯文の両側に斜位の平行沈線を充填し、105はX字状降帯の両側に、106は斜位降帯の左側に縦位の平行沈線を施している。107は内傾する口縁部に押し風の連続刺突文が三段に施される。111に類似した器形・文様と推測され、東海系の北屋敷式に該当するものと考えられる。

#### SB15 (第124図108～112、PL31)

中期中葉末～後葉Ⅰ期の土器群が出土した。108・111・112は埴周辺の床面出土、109・110はP6出土である。

108は「中野山越A2類土器」(戸田1995)、また、「波状口縁櫛形文土器」(神村1996)に相当するものである。脇に連続押しを施す降帯により文様の主要モチーフが表出される。波状口縁の波底部から垂下する渦巻文・連続楕円文帯が胴上部まで縦に貫く。波頂部下には、対向弧状文(人体文)の変化と思われる、両下端から弧状文が垂下する栗形ないし菱形の区画文が配される。その区画内には渦巻文が付き、区画内の残部および弧状文間に縦位の平行沈線(半隆起)が充填される。その下は無文部となる。頸部には縦位楕円文帯を繋ぐ横位降帯が施され、胴上部には櫛形文が付きされる。

109・110は細降線土器である。縦位の細降帯を密接貼付して装飾文様を構成する。

111・112は東海系の北屋敷式に該当するものである。波状口縁の端部を内折させて帯状部をつくり、そ

ここに連続刺突文、押し引文を施す。

#### SB16 (第125図113～129、PL31)

中期中葉末～後葉1期の土器群が出土した。113はP3からまとまって出土した。117はP6、その他は覆土ないし本遺構を切る攪乱出土である。

113～120は細降線文土器で、本遺構出土土器の主体をなす。113・114は全体器形をほぼ把握し得るもので、口縁部が内彎して頸部がくびれ、くびれ部から外に張ってから底部にかけてすばむ。113は口縁上端に4単位の突起をもつ。口縁部文様は、突起から垂下する襷紐状降帯と、突起間に配した縦位の平行細降帯で口縁部を八分割した区画内に、装飾文様を施す。胴部文様は、上部に5単位の櫛形文を配し、櫛形の接点部からY字状の降帯が胴下部まで垂下する。114は口縁部だけでなく胴部にも文様が描出される。文様は重弧文を横に連ね、その間を梯子状に表現している。こうした構成は、梨久保B式のキャリバー器形の土器にしばしばみられるものである。115～120は破片で、細降帯を縦位・横位・斜位・逆U字状、格子状などに組み合わせる。117・118は突起部ないしその直下部で、楕円モチーフを中心に抱き込んで文様が構成されている。119の縦位細降帯間には条線が認められる。121・122は櫛形文を施した胴上部で、細降帯で文様を構成する口縁部が続く可能性が高い。

123は頸部無文帯で画された口縁部の降帯区画内に、沈線を密接施文して文様を描いており、沈線と細降帯の違いはあるが、構成のパターンが細降線文土器に類似している。124・125は縦位の降帯を軸に沈線で文様を描く。126は細降帯による装飾をもつが、蕨手文を表出する幅広い降帯は、通常の細降線文土器とは異なるニュアンスを感じさせる。

127・128は沈線で弧状ないし渦巻文を描く。129は口縁内面に肥厚帯をめぐらせる浅鉢で、刻目降帯を口縁端部から垂下させる。実測図正面の垂下降帯は中央の沈線を挟んで稜形状に刻目が施されている。

#### SB17 (第126図130～145、PL32)

中期中葉末～後葉1期の土器群が出土した。130はP10に横位で納められたような状態で出土したものである。132・145はP1、139はP3、144はP3、251はP13、その他は覆土出土である。

130は口縁端部を内側に屈折させ、そこに4単位の小突起となるU字状の降帯を貼付している。器面の摩滅が進んでいるが、口縁部全面に縦位の平行沈線を密接施文し、胴部は無文となるようである。

131～138は細降線文土器である。細降帯を斜位・横位に用いるもの、弧状に用いるもの、梯子状のモチーフをもつものがみられる。131には頸部無文帯を挟んで櫛形文が付されている。134は口縁端部が短く外反して無文部となる。132は細降帯間に押し引文を伴う突起部である。139～141は頸部無文帯下に櫛形文ないし弧状降帯文をもち、細降帯で文様を構成する口縁部が続く可能性が高い。

142は底部で、刻みつけた縦位の降帯を貼付している。縦位の平行沈線を地文とする。梨久保B式に該当しようか。143はキャリバー形の口縁を呈し、頸部はくびれて胴部が張る。口縁下部から頸部に降帯による楕円区画を構成し、区画内に縦位の沈線を充填する。区画は横位の平行する降帯間にX字状の降帯を配することで表出され、横に長い六角形が接続する形を呈する。井戸尻式に多くみられる楕円区画文の系譜を引くものと考えられる。144は外折する口縁部をもつ浅鉢。口縁部下に降帯を押しつぶして形成した三日月状文を連続させ、その上端を押し沈線でなぞった連弧文を併走させる。三日月状文の上面にも縦位の沈線を施している。沈線内には工具先端の状態を反映する細かな平行線状の擦痕が観察される。145は口縁部に降帯による渦巻文を付し、降帯上面に半截竹管状工具の内側を用いた押し引文が施される。

## SB18 (第127図 146～152)

中期中葉末～後葉1期の土器群が出土した。151はP5出土、その他は覆土出土である。

146は口縁部の小破片で、口縁端部内面に横位の隆帯を、さらにそこから口唇を越えて外面へ斜位の隆帯を密接貼付する。内面の隆帯には刻目が施される。

147～150は細隆線土器である。細隆帯を縦位・格子状・斜格子状などに貼付する。151は櫛形文を施した胴上部で、細隆帯により文様を構成する口縁部が狭く可能性が高い。152は隆帯で区画した内部に沈線を密接施文しており、沈線と細隆帯の違いはあるが、文様構成のパターンが細隆線土器に類似している。頸部無文帯下にやや斜めに下る隆帯がわずかに残存する。

## SB19 (第127図 153～156)

出土量がごく少ないうえ、中期中葉～後葉2期の土器が混在している。155はP1出土、その他は覆土出土である。

153は細隆帯を格子状に用いた細隆線土器である。154は隆帯による人体文状モチーフと斜位の刻目隆帯間に沈線を密接して充填する。155は沈線を地文とし、隆帯と沈線で渦巻文を構成する唐草文土器で、後葉2期に属する。156は短沈線を施した隆帯や太く高い隆帯による渦巻文・円形文によって文様が構成される。中期中葉の井戸尻式に該当しよう。

## SB20 (第127図 157～166, PL32)

157はが体土器で、中期前葉に属する。その他の159～166は覆土から出土したもので、中期中葉末～後葉1期に属するが、158は中葉に遡る可能性もあろう。なお、図示しなかったが、覆土からは中期前葉の小片が若干出土している。

157は平出第Ⅲ類A土器の第二～第三段階に該当する胴部で、横位の押圧隆帯・沈線により胴上部と胴下部に分割される。本来、沈線は( )状の区切りをもつ横位沈線だが、157では楕円状を呈する。胴上部には縦位沈線を描き、さらに口縁端部の突起から垂下すると考えられる押圧隆帯を、胴部を分割する横位の押圧隆帯と繋げている。胴下部は楕円状を呈する沈線の端から、縦位沈線を描く。

158は、外折して立ち上がる口縁端部の直下から、刻目隆帯や沈線・三角陰刻文などにより文様が描出される。井戸尻式の可能性がある。159は口縁部に隆帯による横位区画を構成し、区画内部には渦巻などの沈線文を描く。160は内湾する口縁上部に、粘土を貼り付けてやや外傾する直立部をつくり、その部分を幅狭い無文帯とする。口縁下部には隆帯を押しつぶして形成した三日月状文をめぐらせ、その上端を沈線でなぞった二重連弧文を併走させる。三日月状文の上面にも、横位の沈線を1条施文している。連弧文と口縁端部無文帯との間には縦位の沈線を施しているが、摩滅のため詳細は明確でない。161～166は細隆線土器で、細隆帯を縦位・斜位・重弧状などに密接貼付して装飾文様を構成する。164の口縁端部は無文帯をなす。

## SB21 (第128図 167～177, PL33)

中期中葉末～後葉1期の土器群が出土したが、僅かに後葉2期に下るものが混じる。167は住居東壁脇に正位で埋設されていた土器、173は炉2のが体土器残片、その他は覆土出土である。

167～173は細隆線土器で、細隆帯を縦位・横位・斜位・方形状などに密接貼付する。167は器形・文様構成の全体が判明するものである。器形はキャリバー形を呈し、頸部でくびれ、胴部は外へやや張ってから底部に向けてすぼむ。口縁端部を直立させて無文帯となし、そこから頸部まで2本1単位の縦位隆帯

を4単位貼付して区画し、区画内に横位の隆帯を4段に貼付する。頸部無文帯下には櫛形文5単位をめぐらせ、わずかに開いた余白に、隆帯と沈線によるJ字文を挿入する。171は117に文様が酷似しており、突起直下にあたる部分であろう。174は櫛形文を施した胴上部である。

175は梨久保B式に該当すると考えられるものである。キャリバー形の口縁部に隆帯褶曲文を施し、有孔突起を付す。突起の直下から胴上部にかけて橋状把手となるようだが、破折して残っていない。176は縦位の平行隆帯を貼付する。地文は縦位沈線である。

177は内折させた口縁部に有孔の山形突起を付し、その両側に細長い楕円状の沈線文を配する。楕円の接点部は盛り上がりて微小起伏となり、その直下に円形刺突を伴うU字状隆帯が付される。山形突起下には隆帯による渦巻文が付される。東海地方中富式の影響を受けたものと考えられ、後葉2期に属する。

**SB22** (第128図178~183, PL33)

中期中葉末~後葉1期の土器群が出土した。183はP2からまとまって出土したものである。180はP6、その他は覆土出土である。

178・179は細隆線土器である。178はおそらく重弧状、179は縦位に細隆帯を密接貼付する。180は横位・縦位・斜位の刻目隆帯で区画し、隆帯間に沈線を充填する。181・182は櫛形文を施した胴上部である。

183は口縁が直立気味に立ち上がる浅鉢である。口縁部下に、隆帯を押しつぶして形成した三日月状文をめぐらせ、その上端を沈線でなぞった二重連弧文を併走させる。三日月状文の上面にも横方向の沈線1条を施文している。三日月状文の接点はやや突出する。

**SB24** (第129図184, PL33)

土器の出土量は非常に少なく、かつほとんどが無文細片で、時期や型式がわかるものは、図示した184のほかは、細隆線土器の小片1点のみである。

184は非常に薄手で、他の土器との区別は容易である。図示した破片はP21・22からの出土であるが、同一個体の破片がP17および覆土からも検出された。文様は、口縁端部を内側に屈折させ、屈折部を押圧して三日月形の凹面をつくり、そこに連続三角形刺突文を施す。東海系の北屋敷式に該当する。中葉末~後葉1期と考えられる。

**SB25** (第129図185, PL33)

出土量はごく僅かである。そのほとんどが無文細片で、時期や型式がわかるものは、185のみである。

185は胎土器で、中期前葉の平出第三類A土器の第二~三段階に該当する。口縁部は端部の突起から垂下する隆帯を貼付し、横位沈線を描く。胴部は横位の押圧隆帯・沈線で上下に分割され、胴上部には密接した縦位沈線が施文される。胴下部は一部に縦位沈線がみられるものの、残存部が少なく詳細不明。

**SB26** (第129図186~192)

中期中葉末~後葉1期の土器群が出土した。186・188はP3、187・189はP2から出土したもので、190~192は覆土から出土したものである。

186~189は細隆線土器である。細隆帯を斜位・縦位・逆U字状、またそれらを組み合わせて文様を構成する。186はやや外反する口縁端部が無文帯となる。188は頸部の無文帯が幅広い。189は半截竹管状工具による縦位の平行沈線を伴う。514・515に類似した手法といえよう。190は隆帯と単沈線で文様を構成する。191は櫛形文を施した胴上部である。

192は肥厚した口縁端部が幅狭い無文帯となり、その直下に押引文を伴う弧状隆帯を横に連ね、弧状の接点部に小突起を付す。突起部から縦位隆帯が垂下する。

#### SB28 (第130図199～216、PL35)

時期や系統が判然としない214～216があるものの、出土土器のほとんどは中期中葉末～後葉1期に属する。206はP2、210・211・214・215はP11、216は床面、その他は覆土出土である。

199～208は細線文土器で、細隆帯を縦位・横位・斜位に貼付し、また、それらを組み合わせている。207・208は細隆帯に密接施文した沈線を加えて文様を構成する。209は弧状と逆V字状の隆帯を組み合わせて人体文風の文様となし、弧状内に縦位の沈線を充填する。210～212は櫛形文を施した胴上部で、210・211は櫛形の接点部にY字状隆帯を付す。

213は北屋敷式に該当する。内側に屈曲させた口縁端部下を押圧して三日月状の凹面を形成し、その内面に爪形文を連続刺突する。横に連ねた三日月状凹面の境界はひとつおきに突起を成している。

214は横位に縄文を施した胴部で、成形時の器面の凹凸がやや残る。215は口縁端部に突起をもち、口唇には刻みを施している。口唇直下に連続刺突文をめぐらせ、その下は、半截竹管状工具による平行沈線を縦位に施文した上に、同じ工具で斜位沈線を重ねる。216は口縁部内面に円形や横U字状などの隆帯文を貼付する。隆帯脇に沈線を伴う。円形文貼り付け部は山形突起となり、剥落しているが、外面にはそこから橋状把手が付くと思われる。口縁端部は隆帯貼付により肥厚し、口唇部に細長い楕円形の凹面を作出する。

#### SB29 (第129図193～198)

中期中葉末～後葉1期の土器群が出土した。194はP4、197はP6、198はP5、その他は覆土出土である。

193～197は細線文土器で、細隆帯を縦位・横位・斜位、またそれらを組み合わせて文様を描出する。193は上端が微突起状となる縦位隆帯の上に、横位細隆帯を貼付して格子状のモチーフを構成している。197は幅広な頸部無文帯の直上に僅かに横位・縦位の細隆帯が認められる。胴上部には櫛形文が付されている。198は口縁上部が欠け、それ以下は無文である。器形的には細線文土器と同様といえる。

#### SB34 (第131・132図217～240、PL34)

ほとんど後葉2期の土器群であるが、後葉3期に属する土器も出土した。226は周溝、232は周溝およびP8、その他は覆土出土である。

217は口縁部に緩やかな山形の突起が付く。突起を含め口縁端部外面は折り返し状に肥厚する。摩滅のため詳細は明確でないものの、肥厚部下には横方向の沈線ないし条線が観察される。突起下には何らかの貼り付け文が施されているが、剥落している。

218～220は沈線を伴う隆帯で縦位の文様を描く。218・220は腕付文を呈し、220は刺突を伴う。218・219は隆帯脇に条線が観察される。219の条線は隆帯貼付の後に施されている。

221は内側に屈折して立ち上がる口縁部が波状をなす。文様は、押し引きにより描出される。波頂部下および波底部下に渦巻文を配し、その間に横走文を施している。

222～231は東海系の中富式の影響を受けたものである。破片資料が多いが、キャリパー形の器形を呈し、沈線で文様モチーフを描出する。文様は口縁部文様帯と胴部文様帯に区分され、口縁部文様帯の文様モチーフは、弧線のほか、楕円、渦巻がある。楕円文は222・227に認められ、渦巻文は228のほか222の弧線文間にも推測される。ポイントとなる渦巻文を描き、その渦巻文を繋ぐように弧線文あるいは弧線文

と楕円文を組み合わせて配した構成が主体となるのであろう。227は渦巻文に代えて有孔突起が配される。222～224は沈線内に連続刺突を施す例が認められ、229では弧線文の上部に縄文がみられる。225・230は口縁部文様帯の弧線文接続部から沈線文が垂下する。胴部文様は、225で横走文、226で連続弧線文が胴最上部に施されている。地文が観察されるものとして225・226があり、どちらも条線文である。

232・235は「下伊那タイプ」(末木1978)と呼ばれるものである。232は膨らんだ頸部から横状把手が立ち上がる。把手には細い沈線で腕骨文が描かれる。把手下端は左右に分かれて、それぞれ弧状隆帯となり、その内部に沈線で横入組文などが描出される。隆帯下には波状をなすと推測される沈線がみられる。235は膨らんだ頸部が大形になり、口縁部が直立する。頸部から口縁部に橋状突起が付く。突起は上部が塔状に立ち上がり、上面と側面が隆帯と沈線による渦巻文などで飾られる。頸部文様帯は、縦位の腕骨文状の隆帯文で区画し、沈線による渦巻文を中心とした重弧状の文様を充填する。

233は釣手土器である。破片からの推定復元によるが、橋状釣手部の下端が左右二股に分かれて鉤状に外に張り出した口縁部へと移行し、底部がすばまる鉢形の体部をもつ。体部文様は、釣手取り付け部下とその中間に、二本の沈線を垂下させて区画し、沈線渦巻文・曲線文・円形刺突文を施す。口縁部文様は、上面に沈線による渦巻文を描き、その左右に短沈線を施す。

234は直線的にやや開いて立ち上がる口縁部付近の破片である。口縁は波状を呈し、波頂部およびその前面が2単位以上の突起部をなす。突起文様は上面に隆帯による渦巻文、左右の側面に押し沈線による渦巻文を施す。口縁部はやや幅広い無文部となり、その下端を両す横走沈線下に押し引きによる渦巻文を付す。

236～240は後葉3期と考えられるものである。236・237は沈線地文の唐草土器であろう。沈線は隆帯に合せて放射状に施されているように見受けられる。238・239は接合しないが、胎土や焼成、器厚が酷似しており、同一個体と考えられる。口縁部には隆帯による渦巻文が表出され、渦巻の左右には区画文の端部と思われる沈線がみられる。区画内には縄文が施されているようにもみえるが、小範囲と摩滅のため明確ではない。胴部は縄文地文で、三本一組の幅広く浅い沈線が垂下する。240は、239と同様に、縄文を地文として、三本一組の垂下沈線文が施されている。

### SB35 (第133図247～253, PL33)

中期後葉2期の土器群が出土した。252・253はP5、248はP5および覆土、その他は覆土出土である。

247は縦位隆帯間に平行沈線を縦位に密接施文する。248は内彎する口縁の端部を外側に短く立ち上げ、その下に隆帯による横長の区画をつくり、さらに区画面を沈線で縁取りする。地文は縄文である。口縁部文様帯の下は無文部となる

249は頸部が膨らみ、胴部が下膨れとなる器形である。頸部に、連続刺突を施した隆帯による方形区画を横に連ねる。区画内に半載竹管状工具を用いた押し引文が縦位に引かれる。区画間には隆帯による渦巻文または鱗状の突起が付く。突起は、正面が押し引文、側面が短沈線で装飾される。渦巻文と突起下の胴部には逆U字状の隆帯が貼付され、突起下のそれは下端部が開いて端部は渦巻となる。胴部地文は沈線による綾杉文である。

250・251は半載竹管状工具による平行沈線で文様を描くものである。250は2条の直線文間に縦位の対向U字文を描く。251は2条一組の直線文帯と波状文で縦位に区画する。縦位直線文帯の右側には斜位の沈線が密接施文される。左側には横位直線文が引かれ、一部縄文が観察される。

252は中位が膨らむ長い胴部をもつ小形の深鉢である。外反する口縁部は無文で、端部に肥厚帯を有する。くびれ部に、上側面に連続刺突を施した隆帯をめぐらせている。その直下に隆帯による弧状区画を4単位配し、区画内に縄文を施文する。弧状区画の下には、平行沈線による2条一組の蛇行文4単位を垂下

させる。蛇行文単位間には、蛇行文から若干の余白を取って縄文を施している。

253は、口縁が、二股に分かれ断面V字形となった形状、言い換えれば、内側と外側の二重に口縁がめぐめるような形状を呈する。それぞれの端部は隆帯貼り付けによって内外に肥厚し、帯状となった端面には1条の沈線が施文される。口縁には突起が作出される。突起は内側と外側の口縁を橋状に繋ぐ形状で、アーチ形の低いものと、塔状に高く立ち上がるものがみられる。アーチ形突起の外側直下には円形の透かしが1孔開けられている。塔状突起の内部は空洞で、外面にはJ字状・渦巻状などの隆帯装飾がなされ、J字内はその形状に合わせた透かし孔となる。さらに、外側直下と内側(背面)に円形の透かし孔が合計3孔開けられている。また、J字隆帯と胴上部を繋ぐ橋状部が付設される。胴部は縄文地文で、突起下から沈線による蛇行文が垂下する。この土器は「馬蹄形装飾把手付深鉢形土器」と呼ばれるものに該当しよう。類似は、駒ヶ根市大城林遺跡・丸山南遺跡・日向坂遺跡(駒ヶ根市教育委員会1974・1977・1980)、中川村溝林遺跡(中川村教育委員会1980)、飯田市平畑遺跡(上郷町教育委員会1988)などでみつまっている。田中清文氏は「伊那谷中期後半の第1期の梨久保B式土器セットに存在する特異な土器」と捉えている(田中1984)が、これらの出上例をみると、本遺構と同様に後葉2期の土器と共存する場合があり、この種の土器が後葉2期まで残る可能性は高いと思われる。

#### SB36 (第132図241~246)

中期中葉末~後葉1期の土器群が出土した。243はP7、244はP3、245はP8、その他は覆土出土である。241・242は細隆線土器である。241は頸部無文帯の上に横位・斜位の細隆帯で、242は縦位隆帯と横位・縦位の細隆帯を組み合わせて文様を表出する。

243は口縁下端に貼付した横位隆帯と、短く外反する口縁上端の間に縦位の沈線を充填する。244は内彎する口縁の上端と、屈曲点下に横位の隆帯を貼付して帯状に区画し、内部に弧状隆帯を配している。口縁部文様帯の下は広い無文部をなす。245は小破片であるが、器面カーブからすれば、口縁が波状ないし突起部をもち、その波頂部ないし突起部が外側に突出する器形、すなわち上面観が多角形状を呈する形状になることが推測される。口縁部文様は、現状逆U字状に見える隆帯、口縁上縁ラインに沿う押引文列、その下の斜行沈線文で構成される。

246は横断面三角形を呈する角状の突起で、細隆帯とその間に施した押引文により文様を描く。

#### SB37 (第134図254~258、PL35)

いずれも覆土から出土した土器で中期前葉に所属する。

254~258はハケ岳山麓系の桶内式である。254は幅広の押引文と隆帯などで、サンショウウオのような抽象文を描く。257は隆帯による楕円などの区画や幅広の押引文で、文様を構成する。256は浅鉢と考えられ、口縁部を隆帯で区画し押引文を施文する。

#### SB38 (第134・135図259~266、PL36)

中期後葉2期の土器群が出土した。264は床面(炉底)、その他は覆土出土である。

259~261はキャリバー形の口縁に文様帯をもつ。259は隆帯による弧状区画文を横に連ねる。弧状区画文間に渦巻文などのモチーフが挿入されるようであるが詳細は不明。260も弧状区画文と思われる。縄文地文とする。261は、図はあるいは上下逆かもしれない。文様は2本一組の沈線で楕円ないし長方形区画文を描く。区画間に竹管状工具による刺突文を施している。

262は蛇行沈線を3cm~5cm間隔で垂下させる。器面は摩滅しているが、かすかに縄文が観察される部分



がある。263は縦位の隆帯と沈線を施文する。264はかなり摩滅しているが、薄手の深鉢底部である。文様は観察されない。265は突起部分と思われる。沈線と削りにより渦巻文などを半円彫り状に表出する。円形透かし1対もみられる。

266はキャリバー形の器形を呈する。波状口縁の波頂部に沈線渦巻文を配し、波頂間に連続刺突を施した沈線と押し沈線を横走させる。渦巻文下には押し沈線が短く垂下する。口縁部文様帯下は縦位の縄文が施されている。東海系の中富式に類似するものである。

**SB39** (第135図 267~280, PL36)

中期中葉末~後葉1期の土器群が出土した。267はP10を主体にP9・覆土出土の破片が接合した。273は覆土と本遺構を切る攪乱出土の破片が接合した。275は覆土、277・280はP7、279はP8出土である。その他は本遺構を切る攪乱出土であるが、273の例もあり、本来は本遺構に帰属するものと考えられるため、ここに掲載した。

267は、外反して立ち上がってきた口縁上部が一旦内彎し、そこから端部が開き気味に直立する。直立する口端部と頸部が無文帯となり、その間に文様が施される。文様は、弧状隆帯とその斜め下にY字状隆帯を組み合わせた単位を横に連ね、隆帯間に縦位の沈線を密接施文する。沈線は細い。弧状文の接続が途切れる箇所には、横位の短い隆帯を貼付して繋ぐ。文様帯の下端には頸部との境を画するように横位の隆帯をめぐらせている。中葉末の井戸尻式の系譜を引くものであろう。

268~276は細線文土器である。細隆帯を縦位・斜位・逆U字状・重弧状に用い、またそれらを組み合わせている。268・269は口縁上端に角状の突起が付き、突起から区画隆帯となる太目の隆帯が垂下する。270・272の口端部は細隆帯で井桁状のモチーフを構成しているが、272では下の横位隆帯は断面三角形で、上に架す縦位短隆帯の断面は丸いという相違がみられる。273の縦位細隆帯脇には条線が認められるが、整形痕と思われるものであり、515・519のような意図的な施文とは考え難い。275の区画隆帯は摺紐状隆帯を用いている。277~278は柳形文を施した胴上部で、279も同様と思われる。細隆帯で文様を構成する口縁部が続く可能性が高い。277の横位隆帯には刻みが施され、278はJ字隆帯を伴う。

280は、160・183と同様に、隆帯を押圧して形成した三日月状文に沈線を組み合わせた文様である。三日月状文の上面に引いた横位沈線の上に刺突文を加えている。

**SB40** (第136・137図 281~311, PL36・37)

中期後葉2期の土器群が出土した。ただし、281など中葉末~後葉1期の土器が僅かにみられる。287はP4と覆土から出土した破片が接合した。289は灰内、その他は覆土出土である

281は内彎する口縁部に、隆帯による横に細長い弧状区画を設け、その内部に縦位の平行沈線を充填する。弧状区画帯の下は縄文が施される。口縁端部は短く外反し、さらに肥厚させている。中期中葉末~後葉1期と考えられる。

282は縦位の沈線文を密接して施す。沈線内には条線がみられる。

283~287は条線地文に沈線を主体として文様を施すものである。283は頸部に波状沈線をめぐらせる。284は口縁端部に肥厚帯をもち、頸部には横位の平行沈線をめぐらせる。285は胴部で縦位の波状や方形の一部と思われる文様のほか、刺突もみられる。286は口縁付近の頸部で弧状文3条がみられる。287はキャリバー形の口縁部に渦巻文・弧状文を配し、渦巻文の下に押し沈線を加えた垂下文を施す。

288・289は縄文地文に沈線で文様を描くものである。289は平行沈線を用いている。

290~294は下伊那タイプ(末木1978)と呼ばれるものである。290は膨らんだ頸部に弧状隆帯を貼付し、

その内部に沈線で横入組文等が表出される。隆帯下には波状沈線を横走させる。291は頸部の弧状隆帯内に矢羽状に沈線を施す。胴部との境には竹管状工具による円形刺突を伴う隆帯をめぐらせる。胴部地文は条線である。292～294は、接合しないが、胎土・器厚・器面カーブ・文様のあり方からみて同一個体と考えられる。292は口頸部、293・294は胴部にあたる。外反して立ち上がる口縁部は端部に肥厚帯をもつものの無文である。頸部文様帯は隆帯文・沈線文・押引文で構成され、上端が連続刺突を伴う隆帯で画される。胴部文様は、横位・縦位の沈線文が描かれ、頸部との境が連続刺突を伴う横位隆帯で画される。横位隆帯直下の横位沈線文帯の左端は屈曲しており、あるいは入組状モチーフを構成するか。胴部地文は縄文である。

295は隆帯で渦巻文を、296は斜位の沈線を施文する。297は突起部で、沈線ないし半隆帯で渦巻文を主体としたモチーフを表出する。突起両脇には沈線を充填した区画らしき文様のみられる。あるいは後葉3期に属するか。298は蛇行する隆帯に沈線を引いて分割し、平行する2本の縦位蛇行文を表出する。蛇行文の両側には横位の沈線が施文される。

299～306は東海系の中富式に類似するものである。口縁部に、沈線や隆帯により楕円区画文・渦巻文・弧状文などを表出する。299は楕円区画内に縄文を充填している。301・304～306は沈線内に刺突を伴う。303は口縁部を欠くが、頸部に沈線で連弧文を描いている。地文が観察されるものとして300・301があり、どちらも縄文である。

307～310は口縁部に隆帯を主体に文様を表出する。309は渦巻文と3本並列の縦位の短隆帯を貼付する。頸部には押引文を二段にめぐらせ、その下に連弧文の一部と思われる沈線文のみられる。307も3本並列の縦位の短隆帯が貼付される。308は両脇に連続刺突を伴う隆帯で横入組文を構成する。310は隆帯と押引文で弧状文・波状文を描く。311は口縁部に沈線で方形の区画文をつくり、横位の沈線を配する。沈線内には細かい連続刺突が施されている。

#### SB42 (第138図312～323、PL37)

中期中葉末～後葉1期の土器群が出土した。312・317は炉底に敷いたと考えられるもので、内面を上にして出土した。内面にはさきよれたようなアバタ状の凹みが多数形成されている。318・320・321はP3から出土した。その他は覆土出土である。

312～320は細隆線文土器である。312は太目の縦位隆帯と、その間に貼付した斜位の平行細隆帯で区画した中に横位の細隆帯を密接貼付する。太目の縦位隆帯の上部は突出して突起状となる。313は斜位の細隆帯を組み合わせて綾形状の装飾文様を構成するが、明確な区画隆帯は認められない。315は縦位の格子状細隆帯が口端から垂下する。317は平行する2本の細隆帯で区画した中に重弧文を構成し、その周囲に放射状に細隆帯を貼付する。隆帯は断面三角形に仕上げられ稜はシャープである。また、隆帯には砂粒をほとんど含まない粘土を用いており、白色粒・雲母片を多く含む器体とは対照をみせる。320は、まず縦位のやや太めの隆帯で区画するが、さらに口端部近くにめぐらせた横位の隆帯により口縁部文様帯が上下二分される。上部は縦位の短い細隆帯を密接貼付する。下部は斜位の隆帯で三角形に区画し、平行沈線を縦位・斜位に密接施文する。下部文様帯の平行沈線は細隆帯による装飾を平行沈線で表現したものと考えられる。頸部無文帯下には櫛形文が施される。

321は、横位の隆帯と縦位の隆帯を組み合わせて箱形の区画をつくり、その内部に対向する弧状隆帯を配し、沈線を充填する。この単位を、若干の無文部を開けて横に連続させる。隆帯の刺落が目立つが、貼付痕跡は明瞭に残っている。

322は波状口縁の波頂部下に、押引文を伴う隆帯により区画文を構成する。区画内には半隆起状の平行

沈線を充填する。108と同じく「中野山越 A2 類土器」に該当しよう。323は無文の口縁部がやや外反して立ち上がる小形の土器である。胴部は、刻目隆帯を格子状に貼付して、二段の横長長方形区画をつくり、区画内に縦位の平行沈線を充填する。沈線の引き方は粗雑である。縦位の隆帯の上端は小突起状に外側に突出する。

**SB43** (第 139 図 324~335、PL38)

324~334 は中期初頭の梨久保式(三上 1987)に併行する土器群である。半截竹管状工具による、横位・縦位・斜位・斜格子目状などの平行沈線を組み合わせて文様を構成する。329・331には縄文地文が観察される。334は浅鉢であり、内面に3列の押引文を施文する。

335は器壁が0.5cm前後と薄く、結節凸帯で文様を構成する。そうした特徴から関西系の鷹島式と考えられるが、小破片のため不明確な点が残る。

**SB44** (第 139 図 336~346、PL38)

336~346 は中期初頭の梨久保式に併行する土器群である。半截竹管状工具による、横位・縦位・斜位・斜格子目状などの平行沈線を組み合わせて文様を構成する。336~338は口縁端部から口縁上部にかけて、密接した爪形刺突を施す。346には縄文地文が観察される。

**SB45** (第 140 図 347・348、PL38)

中期前葉の土器群が出土した。347は炉体土器、348は炉の掘り方から出土した土器である。

347は八ヶ岳山麓系の新道式で、隆帯による区画や三角押文と呼称される押引文で文様を構成する。また、2ヶ所に縦位の押引文列(1ヶ所のみ拓本で図示)が認められる。348は平出第Ⅲ類 A 土器の胴上部と推測され、弧状の沈線を描いている。

**SB46** (第 140 図 349~354、PL38)

中期中葉末~後葉 2 期の土器群が混在している。354は覆土および本遺構を切る攪乱出土で、その他は覆土出土である。

349は山形をなす隆帯の下に隆帯による渦巻文を貼付する。後葉 2 期であろう。山形をなす隆帯は、おそらく連続する弧状区画の接点部にあたり、区画内には斜行沈線が施文されている。350は2本一組の縦位隆帯に Y 字状隆帯を加えて区画し、斜行沈線を充填する。後葉 1 期あるいは 2 期と思われる。351は内彎する口縁部に隆帯弧状区画を設け、その内部に縦位の平行沈線を充填する。口縁端部は短く外反する。281 とほぼ同型の土器である。中葉末と考えられる。352・353はキャリバー形の口縁に連続刺突文を施す。後葉 2 期であろう。354は細線土器で、対をなす角状の突起をもつ。口縁部から突起側面に細隆帯を密に貼付し、その下には斜位の沈線が充填される。中葉末~後葉 1 期に位置付けられよう。

**SB48** (第 140 図 355・356、PL38)

中期後葉 2 期の土器群が出土した。355は P1 の 1 層および床面付近の覆土から出土したものである。356は覆土下部の出土である。

355はキャリバー形の器形を呈する。口縁部には、縄文地文の上に押引文で楕円に近い区画文を描き、区画内の中央に平行する縦位の押引文を加える。頸部は無文となり、胴部は燃糸文地文の上に縦位の沈線で帯状のモチーフを描く。狭い帯 1 単位と広い帯 2 単位のセットが基本となるようである。356は蛇行沈

線、3本一組の沈線を垂下させる。地文は縄文である。摩滅のため不明瞭であるが、後者には丸く膨らむ部分が見られ、あるいは腕背文となるか。

#### SK72 (第141図 357～360)

357は前期前葉の土器と推測され、無文で、器内外に部分的な擦痕および指頭圧痕が観察される点から中越式の可能性が高い。図示していないが、同一個体と思われる破片がもう1点存在する。

358～360は中期前葉の土器である。358は平出第Ⅲ類A土器の第二～三段階で、胴下部に縦位沈線を描く。359・360は八ヶ岳山麓系の貉沢式と考えられ、角押文と呼称される押引文で文様を構成する。

#### SK73 (第141図 361～365)

361～365は中期前葉に所属する。361は八ヶ岳山麓系の新道式、もしくはそれに併行する土器と推測される。口縁部であり、押引文で文様を構成するほか、突起が認められる。362～365は平出第Ⅲ類A土器の第二～三段階に該当すると思われる。362・363は胴上部に波状文・縦位沈線を描く。364は胴下部で、間隔をあけて描く縦位沈線がみられる。365は口縁部で、押し引き文を施文する。

#### SK74 (第141図 366～369)

366～369は中期前葉に所属する。366は八ヶ岳山麓系の新道式、もしくはそれに併行する土器と推測され、押引文や突起で文様を構成する。SK73出土の361と胎土・色調が極めて類似し、同一個体の可能性が高い。367は平出第Ⅲ類A土器で、胴上部に横位・縦位沈線などを描く。368・369は八ヶ岳山麓系の貉沢式で、角押文と呼称される細い押引文で文様を構成する。369は浅鉢であろう。

#### SK80 (第141図 370～373)

370～372は中期前葉の平出第Ⅲ類A土器で、口縁部に縦位隆帯、横位沈線、波状文が認められる。

373は口縁部に縦位沈線を描く。内面の一部に指頭圧痕がみられるなど、在地系のもと考えられるが、型式などの詳細は不明。

#### SK91 (第141図 374～376)

374・375は中期初頭の梨久保式に併行する土器群と考えられ、374は平行沈線で横位・渦巻状などの文様を描く。375は結節縄文を縦位方向に施文する。

376は口縁端部に突起をもち、端部直下に肥厚部を形成する。縄文を地文とし、平行沈線で文様を描くようだが器面状態が悪く、型式などの詳細は不明。

#### SK92 (第142図 377～381)

377・378は口縁部で、平行沈線もしくは半隆起線、楔状の刺突で文様を構成する。377は波状口縁を呈しており、波頂部から短い隆帯が垂下する。文様要素からみて、中期初頭～前葉の土器と推測されるが小破片のため詳細不明。

379は口縁部に波状文を描いており、中期前葉平出第Ⅲ類A土器の第二～三段階に該当しよう。

380は口縁部で、半隆起線、爪形刺突、楔状の陰刻で文様を構成する。また、隆帯もしくは突起の剝離痕が残存する。381も口縁部で、端部に爪形刺突を行い半隆起線で文様を描く。380・381ともに文様要素から中期初頭～前葉に所属すると考えられるが、小破片のため詳細不明。

SK94 (第142図382~385)

382・383は中期初頭の梨久保式に併行する土器群と考えられ、交互刺突を施す。

384・385は中期前葉の平出第Ⅲ類A土器である。384には胴部を上下に分割する横位隆帯が認められ、385は胴下部に縦位沈線・波状文を描く。

SK97 (第142図386~389)

386~388は中期前葉の土器である。386・387は平出第Ⅲ類A土器の胴下部で、縦位沈線・波状文を描くほか、387には胴部を上下に分割する横位の隆帯が認められる。388は八ヶ岳山麓系の新道式で、押引文により文様を構成する。

389は器壁が薄く、隆帯および脇を沿う沈線?で文様を構成すると考えられるが、小破片で器面状態が悪く、型式などの詳細は不明。

SK98 (第142図390~393)

390~393は中期前葉の土器である。390・391は平出第Ⅲ類A土器に該当する。390は口縁部と胴上部を爪形刺突で区画し、口縁部に横位沈線を描く。391は胴下部で、縄文地に描く縦位沈線がみられる。392・393は八ヶ岳山麓系の新道式で、392は隆帯区画・三角押文と呼称される押引文で文様を構成する。393は浅鉢であり、口縁部に押引文を施す。

SK101 (第142図394~399, PL39)

394は前期末葉の下鳥式で、波状口縁を呈し、平行沈線・結節浮線文で文様を構成する。

395・396は中期初頭の土器である。395は梨久保式に併行する土器群と考えられ、半隆起線で文様を描く。396は東海系の北東C式と推測され、半隆起線で縄文帯を構成する。

398・399は中期前葉の平出第Ⅲ類A土器第二~三段階に該当する。398は( )状の区切りをもつ横位沈線で胴部を上下に分割し、胴下部に縦位沈線を描く。399は口縁部に刻みをもつ隆帯を貼付し、波状に近い横位沈線を描く。胴部は横位隆帯・沈線で分割され、胴上部には密接した縦位沈線を、胴下部には間隔をあけた縦位沈線を描く。

397は隆帯による区画の一部が認められるが、小破片のため詳細不明。

SK103 (第143図400~403)

400・401は中期初頭の梨久保式に併行する土器群である。400は半隆起線もしくは平行沈線・隆帯・爪形刺突を組み合わせて文様を構成する。401は斜位方向の半隆起線を描く。403は小破片で不明確だが、中期初頭~前葉に所属する東海系土器群の可能性があり、半隆起線で文様を構成する。

402は無節縄文を施すのが、型式などの詳細は不明。

SK107 (第143図404, PL39)

404は中期前葉平出第Ⅲ類A土器の第二~三段階に該当するもので、口縁部には横位沈線・波状文を描く。胴部は押圧を施す横位隆帯・沈線によって上下に分割し、胴上部には比較的密接した縦位沈線を、胴下部には間隔を空けた縦位沈線をそれぞれ描く。

SK108 (第143図408, PL39)

408は無文の浅鉢である。器壁の厚さや胎土・色調からみて、中期前葉に所属する八ヶ岳山麓系の土器群に所属する可能性が高い。

#### SK112 (第143図405~407)

405~407は中期前葉の土器で、405・406は平出第Ⅲ類A土器に該当する。405は口縁端部が斜位方向に延びる点から三角形突起付近の破片と思われ、口縁部にコンパス文を描く。胴部は横位沈線で上下に分割し、それぞれ平行沈線で文様を描くが胴上部は極端に幅が狭い。また、胴部全体に跨って、斜格子状の文様を単沈線で描く。406は口縁端部の突起から垂下すると思われる、刻みを施す隆帯が貼付される。407は八ヶ岳山麓系の猪沢式もしくは新道式と考えられ、角押文と呼称される押し文で文様を描く。

#### SK121 (第143図409、PL39)

409は中期前葉八ヶ岳山麓系の猪沢式で、隆帯による楕円区画、角押文と呼称される押し文により文様を構成する。また、図示していないが、同一個体と推測される破片に、口縁端部へ部分的な刻みを施すものが認められる。

#### SK130 (第144図410~417、PL39)

410~417は中期前葉に所属する。410~414は平出第Ⅲ類A土器の第二~三段階に該当する。410は口縁部に結節沈線を、胴上部には密接した縦位沈線を、胴下部には間隔をあけて縦位沈線を描く。胴部は押圧を施す横位隆帯・沈線で分割し、横位沈線には( )状の区切りがみられる。411~414は口縁部で、横位沈線・結節沈線・コンパス文を描くほか、交互刺突を施すものが存在し、更に412・413には縦位隆帯が見受けられる。415・416は八ヶ岳山麓系の土器で、415は幅広の押し文・刺突・突起などで文様を構成する藤内式、416は隆帯による楕円区画、三角押し文と呼称される押し文が施文される新道式であろう。417は東海系の山田平式と思われ、口縁端部直下の肥厚部に爪形刺突を密接に行う。

#### SK135 (第144図418~420、PL40)

418~420は中期前葉に所属する、東海系の山田平式と考えられる。418は口縁部で、爪形刺突を施す口縁端部直下の肥厚部から隆帯が垂下し、半隆起線・刺突などを組み合わせて文様を構成する。419は半隆起線で文様を描く。420は胴部と推測され、破片上部に横位の半隆起線が認められる。

#### SK143 (第144・145図421~424、PL40)

421~424は後期初頭の称名寺式である。421は底部で、底面に網代圧痕が付き、内面には炭化物が付着している。422は口縁部から胴上部にかけて、沈線で二段のJ字文を描く。縄文は施文されていない。423・424は胎土や焼成、施文手法が類似し、同一個体の可能性が高い。423は半円状の突起が付き、その下部には円孔が開けられている。沈線で区画する帯縄文により、J字状などの文様を構成すると考えられる。突起部分の内面には、円孔に沿って引かれた沈線がみられる。

#### SK144 (第145図425・426、PL40)

425・426は中期前葉に所属する、八ヶ岳山麓系の土器である。425は新道式で、隆帯による楕円・三角状区画・三角押し文と呼称される押し文で文様を構成する。426は単巻縄文を地文とし、縦位・横位・斜位方向などの半隆起線、渦巻状の隆帯および刺突を組み合わせて文様を構成する。

SK150 (第146図427~432, PL40)

427~432は中期前葉の土器である。427は口縁部の楕円区画内部に、三角押文と称される縦位の押引文を施す。胴部は横位沈線で上下に分割し、胴上部は両端を閉じた横位沈線および刻みを施す逆U字状の隆帯で文様を構成する。胴下部には縦位・環状・U字状などの沈線を描く。また、口縁端部の2ヶ所に角状突起がみられ、突起下部から胴部全体を縦位分割するような、刻みを施す逆U字状の隆帯を貼付する。口縁部の楕円区画と押引文は新道式、横位沈線による胴部の分割や胴下部の間隔をあけた縦位沈線、さらには器壁の厚さは平出第Ⅲ類A土器的であり、両型式の折衷的な土器と評価されようか。428は平出第Ⅲ類A土器と類似した、横位の押圧隆帯を貼付するが、小破片でもあり型式などの詳細は不明。429・430は八ヶ岳山麓系の土器で、隆帯による楕円区画や三角押文と称される押引文が施文される点から新道式であろう。431・432は東海系の山田平式と推測され、爪形刺突や半隆起線で文様を構成する。

SK153 (第146図433~437)

433・434は中期前葉に属すると思われるものである。433は波状ないし三角形突起をもつ口縁部で、隆帯とその脇に施した幅広の押引文で文様を描く。八ヶ岳山麓系の土器であろう。434は内彎する口縁部に連続爪形文・刺突文・隆帯文で文様を構成する。関西系の船元式に該当しようか。

435~437は中葉末~後葉1期の細線文土器である。435は縦位の連続状隆帯に斜位の細隆帯を組み合わせた、436はやや弧を描く斜位の、437は縦位の細隆帯を貼付する。

SK154 (第146図438・439)

438は縦位・横位の細隆帯で文様を構成し、439は櫛形文を施す。中期中葉末~後葉1期に属する。

SK155 (第146図440・441)

440は口縁端部を折返し状に肥厚させて幅狭い無文部をつくり、その下に半截竹管状工具により横位さらに縦位の平行沈線を施文する。中期中葉と考えられる。下伊那型櫛形文土器の可能性もあろう。441は内彎する口縁部に、隆帯押圧による連続三日月状文を施し、その上に連弧状・縦位・横位の押引文を描く。中期中葉ないし中葉末か。

SK171 (第146図442~444)

442は中期中葉に属すると思われる。内彎して立ち上がる口縁の端部が外折し、その部分が無文部となる。文様は無文部下端から隆帯がS字状に下り、その左に渦巻らしき隆帯文がみられる。隆帯には刻みを施す。隆帯文の両側には縦位の沈線が施文される。443は、2本の縦位の隆帯間に平行沈線による横位の弧状文を施す。縦位隆帯の左側は平行沈線が密接施文される。444は口縁端部がやや肥厚し、摩滅や剥落のため明確ではないが、その下に弧状隆帯を貼付しているようである。443・444とも中期中葉~後葉の間に位置付くものと思われるが、詳細は不明。

SK177 (第147図445)

445は中期中葉の土器で、平出第Ⅲ類A土器の第二~三段階に該当する。口縁部にはやや波状気味の、胴上部には密接した縦位沈線をそれぞれ描く。

SK201 (第147図446~448)

446 は櫛形文の接点部から Y 字状の隆帯が垂下する。中期中葉～後葉 1 期。447 は内彎する口縁部に、刻目隆帯で J 字状ないし渦巻状のモチーフを表出する。448 は 2 本の隆帯で曲線文を描き、縦位・斜位の平行沈線を密に施文する。一部渦巻状の文様も観察される。447・448 は中期中葉 2 期とみておきたい。

#### SK202 (第 147 図 449、PL40)

449 は中期中頭の梨久保式に併行する土器群で、縦位・横位・波状などの半隆起線を組み合わせて文様を構成する。

#### SK219 (第 147 図 450・451)

450・451 は細線線土器で、中期中葉末～後葉 1 期に属する。450 は口縁部に細隆帯を井桁状に密接貼付し、451 は斜位の細隆帯に密接施文の沈線を加えて文様を構成する。

#### SK238 (第 147 図 452、PL40)

452 は細線線土器で、中期中葉末～後葉 1 期に属する。口縁部に細隆帯を斜位・斜格子状に密接貼付する。頸部無文帯をもたず、口縁部文様帯の直下に櫛形文が配される。

#### SK247 (第 147 図 453)

453 は、やや内彎する口縁は広い無文部となり、端部内面は肥厚する。口縁下端には横位の隆帯を貼付している。中期中葉末～後葉 1 期であろう。

#### SK254 (第 147 図 454～456、PL40)

454～456 いずれも中期中葉末～後葉 1 期と考えられる。454 は、口縁部が直線的に開いて立ち上がり、くびれた頸部から胴部が外に張ってから底部に向かってすぼむ器形である。口縁端部内面は肥厚する。口縁部文様は、頸部にめぐらせた横位隆帯と口端部を繋ぐ縦位の隆帯を 4 単位貼付し、さらに単位間の口端部外面に横位隆帯を貼付して、全体として方形に区画するが、区画内は無文である。胴部文様は、口縁部の縦位隆帯直下から垂下する太目の隆帯上に、細い隆帯 2 本を組み合わせると鎖状のモチーフを表出し、最上部には眼鏡状文が貼付される。455 は、下にすぼむ逆 U 字状隆帯と横位の平行隆帯で区画し、区画内に縦位の平行沈線を充填する。逆 U 字状隆帯の上端は小突起状をなす。内折する口縁端部には逆 U 字状隆帯から 3 本の隆帯を横走させる。この 3 本の隆帯と、逆 U 字状隆帯の上端部には連続刺突が施される。456 は櫛形文をもつ。隆帯上には刻みがなされる。

#### SK268 (第 148 図 457～462、PL41)

457～462 は中期中頭の土器群である。457～460 は梨久保式に併行する土器群で、縦位・横位の半隆起線を組み合わせて文様を構成する。459・460 は縄文地文が観察され、460 には縦位の結節回転がみられる。461・462 は関西系の鷹鳥式と考えられ、縄文地文に爪形刺突を施す幅広の突帯により、波状などの文様を構成する。

#### SK270 (第 148 図 468)

468 は中期中葉に属すると考えられる。やや開いて立ち上がる器形で、隆帯と沈線で文様構成する。隆帯文は対向 U 字状になるものと推測され、両脇が沈線でなぞられる。隆帯間に三角形区画状・縦位・斜位



の沈線文が充填される。ハヶ岳山麓系の井戸尻式である可能性がある。

**SK291** (第148図463～467)

463～467は中期中葉末～後葉1期と考えられる。463は直線的に立ち上がる口縁無文帯直下に櫛形文、あるいは縦位沈線を充填した対向U字文を施すもので、中期中葉末の井戸尻式の系譜を引くものであろう。464は櫛形文間にY字状の隆帯を貼付し、Y字内にも縦位沈線を充填している。465～467は細隆線文土器である。465は斜位の、466は口縁無文帯下にやや弧をえがく斜位の細隆帯を密接貼付する。467は、押引文を伴う渦巻状隆帯の外側下部に、放射状に細隆帯を貼付している。

**SK296** (第148図469・470)

469・470は中期中葉に属すると考えられる。469はやや開いて立ち上がる口縁端部が無文帯となり、その下に渦巻文、縦位・斜位の隆帯による区画文を配し、斜位沈線を充填する。470は頭部無文帯の直下に櫛形文を描く。

**SK300** (第149図471・472)

471・472は中期中葉に属すると考えられる。471はくびれ部に隆帯をめぐらせ、その上部に縦位の平行沈線を施文する。472は幅広い頭部無文帯の直下に刻目隆帯をめぐらせ、その下に縦位の押引文を施文する。下伊那型櫛形文土器の可能性があろう。

**SK323** (第149図473)

473は早期前葉の押型文土器で、山形文を施文する。山形文は角度が直角に近く、縦位方向に密接施文しており、文様の重複部が菱形状に見える。立野式であろう。

**SK339** (第149図474・475)

474は前期後葉、475は後期の土器である。474は器壁が薄く、くびれ部に大形の爪形刺突を行う。関西系の北白川下層Ⅱa式と推測されるが、小破片のうえ器面状態が悪く、不明確な点が残る。475は堀之内式と思われ、沈線で文様を描き単節縄文を充填する。

**SK349** (第149図476)

476は深鉢の底部で、無文のため、時期・型式など明確ではない。

**SK365** (第149図477)

477は中期初頭の梨久保式に併行する土器群で、縦位・横位の半隆起線・平行沈線を組み合わせて文様を構成する。また、内面の口縁端部直下に肥厚部を形成する。

**SK367** (第149図478、PL41)

478は半隆起線、爪形刺突を施す隆帯、突起、三角陰刻などを組み合わせて文様を構成する。文様要素から中期初頭土器群と考えられるが、型式などの詳細は不明。

**SK380** (第149図479・480)

479・480は中期初頭の土器である。479は関西系の鷹島式と判断され、縄文地文に爪形刺突を施す幅広いの突帯をくびれ部に貼付する。480は浅鉢で、内面に押引文を施文する。押引文や器壁の厚さ、胎土・焼成などがSB43出土土器(334)と類似し、梨久保式に併行する可能性が高い。

**SK568** (第150図481)

481は縦位の刻目隆帯の両側に沈線で横位の文様を描く。後期初頭の称名寺式と思われる。

**SK757** (第150図482～484)

482～484は後期初頭の称名寺式に該当する。二本の沈線で帯状の文様を構成していると考えられる。482・483は胎土・焼成・器厚がよく似ており、同一個体の可能性が高い。器面は摩滅しているが、482の口唇直下沈線の下に帯状部には縄文が認められる。

**SK759** (第150図485～491, PL1)

482～491は後期初頭の称名寺式に該当する土器群である。485は頸部のくびれが強く、くの字状に屈曲する器形である。口縁は波状を呈し、そのうち1単位は上方に大きくせりあがる。波頂部には有孔突起が付く。文様は口縁直下から胴部まで、沈線で直線状・曲線状に描かれるが、摩滅のため詳細は明確でない。486～489、490・491はそれぞれ同一個体の可能性が高い。どちらも頸部のくびれが弱い器形であろう。前者は2本の沈線で帯状の文様を構成し、帯内に列点文を施す。主要モチーフはJ字文であろう。後者は口端下に1条の沈線を横走させ、それより下に縄文を施文している。

**SK762** (第151図492)

492は竪穴状遺構の床に埋設されていた土器で、形体と推測されるものである。内面は白くささくれたような状態を呈している。時期・型式など不明である。

**SK763** (第151図493・494, PL2)

493・494は後期初頭の称名寺式に該当する。493は周囲を礫で囲ったような状態で埋設されていたものである。胴部の張りが強い器形で、口端から胴部最大径付近まで下ろした縦位の押圧隆帯で4単位に区画する。縦位隆帯の上端は緩やかな二つ山状の突起をなし、一部、小さなU字形の装飾が加えられる。器面は摩滅しており文様の詳細は判然としないが、区画内に帯状の沈線文が描出され、口端直下の横位の沈線文から、曲線的に垂下する文様が認められる。また、帯状の沈線文間には縦位～やや斜位の沈線を施した部分が観察される。494は2本の沈線によって構成される帯縄文で文様を描く。

**SK764** (第151図495～497)

495～497は後期初頭の称名寺式である。495は摩滅のため沈線のほかは判然としないが、496・497は沈線と縄文で文様を構成する。

**SK765** (第151図498)

498は後期初頭の称名寺式に該当するものであろう。沈線で曲線的な文様を描いている。

**SK766** (第151図499～501)

#### 第4章 遺構と遺物

499～501は後期初頭の称名寺式である。499・500は沈線と縄文で、501は沈線で文様を構成する。

#### SK767 (第151図502・503)

502は後期初頭の称名寺式に該当しよう。沈線に区画された帯縄文によりX字状のモチーフを表出している。503は下膨らみの器形を呈し、口縁端に突起部をもつ。沈線らしきものが一部観察されるが、摩滅のため判然としない。後期初頭と考えておきたい。

#### SK769 (第151図504)

504は中期前葉平出第三類A土器の第二～三段階に該当する。口縁部は突起から縦位隆帯を貼付し、刺突で文様を構成する。胴部は横位隆帯・沈線で上下に分割し、胴上部には密接した縦位沈線を、胴下部には間隔をあけて縦位沈線を描く。

#### SK781 (第152図505・506)

505は縦位の平行隆帯の両側に縦位平行沈線を密接施文する。中期中葉末～後葉1期と思われる。506は口縁部に逆U字状隆帯を貼付する。地文は縄文である。中期後葉2期と考えられる。

#### SK784 (第152図507・508)

507・508は中期中葉末～後葉1期であろう。507は、頸部無文帯の上に、細隆帯による横位の鋸歯状文帯を2段以上施す。508は鋸歯状文帯の下に、上部が三叉状となる隆帯を貼付し、縦位の平行沈線を密接施文している。

#### SK789 (第152図509)

509は縄文地文の上に斜位の細い隆帯を貼付している。中期後葉であろうか。

#### SK791 (第152図510)

510は細隆線土器で、細隆帯を縦位・梯子状に貼付している。中期中葉末～後葉1期。

#### SK805 (第152図511・512)

中期中葉と推測される土器が出土した。512は半隆起線・平行沈線で文様を描いており、不明確だが東海系の山田平式に該当しようか。511は口縁部で、突起もしくは隆帯の剝離痕が認められる。残存状態が悪く、型式などの詳細は不明。

#### SK812 (第152図513～517)

513～517は中期中葉末～後葉1期に属すると考えられる。513～515は細隆線土器である。513は、先端が折れているが、角状の突起をもつ。突起から刻目隆帯を垂下させ、これを区画線として細隆帯による装飾文様を施す。主要なモチーフはおそらく重弧文であろう。突起内面にも縦位の細隆帯装飾がなされている。514は縦位と横位弧状の細隆帯を組み合わせ、515は細隆帯を縦位・斜位に用いている。514・515は細隆帯間に半截竹管状工具による平行沈線を施文するが、515が細隆帯に平行に施文するのに対して、514はすべて縦位で横位細隆帯には直交する。516は強く内折する口縁部に突起が付く。突起は押引文で装飾される。摩滅のため詳細は明確ではないが、口縁端部に斜位の沈線を施している。517は長い胴部をもつ

無文の深鉢である。内面には調整痕の条線が部分的に観察される。

岐阜県戸入村平遺跡の調査報告書で、C2群に分類された土器群は「船元Ⅲ式」が在地化したと考えられるもので、貼付隆帯による施文を基調とするキャリパー形口縁をもつ器形の土器群であるが、そのうちA類は隆帯に沿って隆帯間に櫛描沈線を施すもの、B類は貼付隆帯のみで櫛描沈線が見られないものである（岐阜県文化財保護センター 1994・2000）。このC2群A・B類土器は、器形・隆帯の太さや貼付間隔・文様モチーフ形態が細線線土器に類似する。C2群A類と514・515の手法には、櫛描沈線と半截竹管状工具による平行沈線という違いはあるものの、関連があることを推測させる。ただし、平遺跡ではA類とB類の割合に大きな差はみられないのだが、本遺跡では、細隆帯間に平行沈線を施文する例は514・515を含め、ごく僅かに過ぎない。なお、細隆帯間に櫛描沈線ないし条線を施す手法は、木曾の上松町吉野遺跡群SB142・143に認められ（上松町教育委員会 2001）、飯田市内でも増泉寺付近遺跡4号住居跡や大門遺跡群SB33にみられる（飯田市教育委員会 1996・1999a）。本遺跡同様に、その割合は僅かである。

#### SK823（第152図518～521）

518～521は中期中葉末～後葉1期の細線線土器である。518は角状の突起を有し、突起およびそこから垂下する太目の隆帯を基軸に斜位の細隆帯が山形状に貼付される。519・520は同一個体とみなしうる破片で、丸い瘤状の突起をもち、梯子状モチーフを主体とした装飾がなされる。縦位の細隆帯間には半截竹管状工具による平行沈線を施している。521は刻目隆帯を縦位に貼付する。これも同じ時期であろう。

#### SK838（第153図528）

528は後葉2期に属する。やや下膨れの胴部で、縄文地文上に沈線で文様を描く。磨滅のため判然としない部分もあるが、蛇行沈線を垂下させて器面を縦位に区画し、そのなかに2本一組の沈線を組み合わせた十字状のモチーフを配し、十字の交点部にJ字状文を挿入する。さらにJ字状文の上下に細かく振幅する蛇行文を施している。

#### SK862（第153図522～527）

522～527は中期初頭に所属する土器群である。522～526は平出第Ⅲ類A土器の第一段階、あるいはそれに併行する土器群と考えられる。522は口縁部に横位沈線を、胴上部には密接した縦位沈線を、胴下部には縄文地文に縦位沈線および斜格子目状の沈線を描く。胴部は横位隆帯・沈線で分割され、横位沈線には（ ）状の区切りが付く。また、胴下部の斜格子目状の沈線は単沈線である。523は口縁部に横位沈線を、胴上部には縦位・斜位沈線を重複して描く。胴下部は部分的に縄文地文が観察され、V字状の沈線を描く。胴部は横位隆帯・沈線で分割され、横位隆帯には爪形刺突が伴う。524は縄文地文とし、口縁部に横位沈線・交互刺突を、胴上部には平行沈線による三角形状などの文様を描く。525は胴下部と推測され、斜格子目状の単沈線を描く。526は刺突をもつ横位隆帯・沈線により、胴部を上下に分割する。横位沈線には（ ）状の区切りが付く。522～526は胴上部の縦位・斜位沈線、胴部を上下に分割する横位隆帯・沈線、（ ）状の区切りなど、そのまま、中期前葉平出第Ⅲ類A土器の第二～三段階へと繋がる要素が認められる。その一方で、口縁部は幅が狭く、平出第Ⅲ類A土器の第二段階以降に見られるコンパス文や波状文、刺突が施文されず、口唇部の突起やそこから垂下する隆帯が存在しないなど、第二段階以降との違いも指摘できる。また、口縁部の横位沈線は、文様というよりは胴上部の区画沈線のようにもみえる。527は逆U字状を呈する隆帯を貼付し、密接した爪形刺突を行う。小破片のため不明確だが、東海系の北裏C式に該当しうかがう。

**SK874** (第154図529~532)

529~532は中期初頭の土器群である。529・530は梨久保式に併行する土器群と思われ、半隆起線および平行沈線で文様を描く。530には縄文地文が観察される。531・532は口縁部に横位の、胴上部には縦位の沈線を描く。SK862出土土器(522・523)と類似し、平出第Ⅲ類A土器の第一段階に位置付けられる可能性が高い。

**SK882** (第154図533)

533は浅鉢である。外面は無文だが、内面には幅の狭い押し文で横位・環状の文様を構成する。SB43では中期初頭に所属する浅鉢(334)が出土しており、533もそれと類似する点から中期初頭と考えたい。

**SK899** (第154図534~537, PL42)

534~537は中期初頭の土器群である。534・535は口縁部に横位沈線を、胴上部には縦位沈線を描く。SK862出土土器(522・523)と類似し、平出第Ⅲ類A土器の第一段階に該当すると思われる。534は地文縄文が観察され、535は波状口縁を呈する可能性が高い。536・537は東海系の北裏C式と推測される。536は爪形刺突を密接に行う隆帯を2条貼付し、把手状に連結する。内面には三角形の稜が認められる。537は算盤玉状の器形を呈し、浅鉢の可能性も考えられる。文様は胴上部の範囲にみられ、縄文を地文とし、爪形刺突を密接に行う隆帯、陰刻、三叉文などを組み合わせて構成する。

**SK906** (第154図538・539)

538・539は中期初頭の土器群である。538は口縁端部に三角形の突起をもち、口縁部および胴上部にそれぞれ横位・縦位沈線を描く。SK862出土土器(522・523)と同様、平出第Ⅲ類A土器の第一段階に該当しようか。539は東海系の北裏C式と考えられ、爪形刺突を密接に行う2条の横位隆帯を貼付する。

**SK920** (第154図540)

540は中期後葉3期に属する親田式である。U字状・逆U字状の沈線区画をずらして施文し、区画内に縦位の結節縄文を施文する。

**SK931** (第154図541・542)

541・542は早期前葉の押型文土器で、ネガティブな楕円文を施文する土器と推測される。極めて小破片のため詳細は不明だが、文様の特徴から立野式に該当しよう。

**SK934** (第154図543・544)

543・544は中期初頭の梨久保式に併行する土器群と考えられ、横位・斜位・矢羽状の半隆起線で文様を構成する。

**SK947** (第155図545, PL42)

545は細線文土器である。キャリバー形の器形を呈する。口縁部文様は、上端が小突起となる縦位の隆帯で区画したなかに、縦位の細隆帯を密接貼付する。一部の突起および区画隆帯の側面には沈線が施文される。頸部無文帯を挟んだ胴上部には櫛形文をめぐらせ、櫛形の接点部にY字隆帯を配している。中期中葉末~後葉1期に属する。

**SK973** (第155図546・547)

546は細隆線土器で、重弧文の周囲に放射状の細隆帯を加えている。547は櫛形文を施した胴部片である。どちらも中期中葉末～後葉Ⅰ期と考える。

**SK976** (第155図548)

548は中期前葉平出第三類A土器の第二～三段階に該当する。口縁部は円形刺突を施す縦位隆帯および横位沈線で、胴上部は密接した縦位沈線で文様を構成する。

**SK1009** (第155図549)

549は中期初頭に所属する関西系の鷹島式と推測され、底部に縦条の縄文を施文する。

**SK1012** (第155図550、PL42)

550は浅鉢である。口縁部・胴部ともに縦位沈線を地文とし、口縁部に菱形・鋸歯状の文様を平行沈線で描く。口縁端部には三角形突起を貼り、そこから短い隆帯が垂下する。中期初頭～前葉の、梨久保式やハケ岳山麓系の浅鉢とは異なるものだが、型式などの詳細は不明である。

**SK1016** (第155図551、PL42)

551は前期末葉の十三菩提式に該当すると思われる、単節縄文を地文とし、縦位の浮線文を貼付する。破片下部には横位沈線が引かれている。

**SK1037** (第155図552)

552は胴部が膨らみ、口縁部が外反する器形を呈すると思われるが、接合範囲が少なく推定復元による部分が多い。文様は隆帯および横位・縦位方向の刺突で構成し、横位方向の刺突は列点状、縦位方向の刺突は押し状を呈する。文様要素からみて、中期初頭～前葉の土器と推測されるが不明確な点が多い。

**SK1038** (第155図553、PL42)

553は前期末葉の十三菩提式と考えられ、縄文地文に横位・縦位の浮線文を貼付する。SK1016出土土器(551)と同様の文様構成で、更に器壁の厚さや胎土・色調などの特徴が一致する点から、551と同一個体の可能性が高い。

**SK1049** (第155図554～556、PL42)

554～556は前期末葉に所属する。554は胴部に、縦位・渦巻き状などの文様を半隆線帯で描く。器壁が0.5cm前後と薄く、内面には輪積み痕が明瞭に残る。555・556は関西系の大歳山式である。555は底部で、側面に押圧が加えられ、燃りが強く節の細かな単節縄文を施文する。556は555と同様の特徴をもつ縄文を地文とし、Σ字状の刺突を施す断面三角形の縦位隆帯を貼付する。

**SK1058** (第155図557)

557は口縁端部を刻み、端部直下に幅狭の縄文帯をもち、口縁部の文様を刺突、爪形刺突を伴う横位隆帯、横位沈線で構成する。胴部は単節縄文を施文しており、口縁部の横位隆帯から、縦位およびY字状の隆帯が垂下する。文様要素などからみて、中期初頭の土器と推測されるが不明確である。

SK1217 (第156図558・559、PL42)

558・559は中期初頭土器群と推測される。558は口縁端部に三角形の突起を貼付し、端部直下の肥厚部には単節縄文がみられる。口縁部は幅が狭く、爪形刺突と横位の平行沈線で文様を構成する。胴部は単節縄文を地文とし、口縁端部の三角形突起から、爪形刺突をもつ隆帯が垂下する。559は口縁部だけに文様が認められ、爪形刺突を密接に施す3条の横位隆帯および環状の隆帯を貼付する。東海系の北裏C式に該当すると考えられる。558は型式などの詳細は不明だが、559と作出した点を考慮し、中期初頭に含めておきたい。

SK1225 (第156図560)

560は緩やかな波状口縁を呈し、波頂部を切り込む。口縁端部直下に幅狭の縄文帯が認められ、爪形刺突を伴う逆U字状の隆帯、平行沈線、爪形刺突で文様を構成する。内面は、縄文を地文とし、波頂部付近に三叉文を描く。中期初頭土器群であろうか。

SK1276 (第156図561)

561は前期末葉の下島式で、口縁端部直下に刺突を施す。口縁部は平行沈線を地文とし、結節浮線文を貼付する。

SK1345 (第156図562)

562は前期末葉の下島式と考えられ、波状口縁を呈し平行沈線で文様を構成する。

SK1350 (第156図563)

563は前期末葉の下島式と考えられ、平行沈線により文様を構成する。

SK1402 (第156図564～566)

564～566は中期中葉に属すると考えられる。八ヶ岳山麓系の井戸尻式に該当しよう。564は有孔突起が付く口縁部の破片で、渦巻文、交互刺突文、三叉文、沈線文で裝飾される。文様は半肉彫的な表現をとる。565は胴上部で、隆帯円形文、沈線渦巻文、三叉文等が描出される。文様はやはり半肉彫的であり、円形文の上部には突起状の裝飾が加えられる。566は屈折する底部で、隆帯による円形文、横長の楕円文を付し、楕円文内には縦位の沈線、刺突が充填される。

SK1403 (第156図567)

567は中期中葉に属するものであろう。短く外反する口縁端部の直下に、弧状・Y字状・横位の隆帯を組み合わせる区画文を構成し、縦位の平行沈線を充填する。Y字状隆帯の上部と弧状隆帯の端部とがつくる区画内は基本的に無文であるが、隆帯脇には押引文が施されている。頸部は幅広い無文部となる。胴部を欠くが、薄手作りであることからすれば、下伊那型の櫛形土器である可能性も考えられようか。

SK1404 (第156図568・569)

568は細隆線土器である。縦位の隆帯で区画したなかに、細隆帯を縦位・斜位・梯子状等を用いて裝飾文様を構成する。頸部に無文帯をもつ。569は櫛形文とY字文を組み合わせた文様を描出している。どちらも中期中葉末～後葉1期と考える。

(3) 遺構外出土の土器 (第157・158、PL42・43)

#### 7区遺構外 (第157図570～576、PL42)

570は胎土に繊維を含み、早期末葉～前期前半にかけての羽状縄文系土器群に該当すると思われるが、器面状態が悪く明確ではない。内面は、部分的に横位方向の擦痕が観察される。

571は前期末葉の土器で、浮線文により波状の文様を構成する。波状口縁を呈する可能性が高く、内面の口縁端部直下には肥厚部が形成される。

574～576は器壁が薄く、中期初頭～前葉の東海系土器群と推測され、半隆起線・交互刺突・陰刻などで文様を構成する。

572・573は中期前葉に所属する。八ヶ岳山麓系の土器で、572は幅狭の押引文で文様を描く猪沢式、573は隆帯による三角区画、押引文、三叉文などで文様を構成する新道式となろう。

#### 8区・8b区遺構外 (第158図585～603、PL42)

585～587は8区から、588～603は8b区から出土した。

585は非常に薄いつくりの口縁部片で、外面と口端部内面に、細い半載竹管状工具による平行沈線を密接して施文する。外面は縦位に、口端部内面は斜位に施されている。胎土には、本遺跡の他の土器にはみられない片岩系の岩片が多く含まれており、異質である。時期や系統は明確ではないが、前期後半～中期前半の東海地方ないし西日本系の土器ではなかろうか。

586は中期初頭に属すると考えられる。半載竹管状工具による平行沈線を右下がりに密接施文し、その上に左下がりの短沈線を施して、斜格子風の文様を構成する。

587は中期中葉の井戸尻式に該当するものであろう。口縁部に、刻み状の短沈線を施文した弧状隆帯区画文を配している。隣り合う弧状隆帯の接点部は山形突起となる。弧状区画の内部には円形刺突文を抱き込む半隆起線の弧状文、短沈線を挿入する。

588～591は前期後葉に所属する。588～590は諸磯a式で、588・589は幅の狭い平行沈線により文様を描く。590は爪形文で口縁部と胴部を区画し、胴部には単節縄文を施文すると考えられるが、器面状態が悪く原体などの詳細は不明。591は関西系の北白川下層Ⅱa式と思われる。器壁が薄く、くびれ部に大形の爪形文を刺突し、胴部には燃りが強く節が細かな単節縄文を施文する。

592は前期末葉の下島式で、横位方向の細い沈線を地文とし、刻みを施す浮線文をV字状に貼付する。

593～600は中期初頭の土器群である。593～595は梨久保式に併行する土器群と考えられ、半隆起線および平行沈線などで文様を構成する。596は口縁部に爪形刺突を伴う横位隆帯を貼付し、胴上部には縦位の半隆起線を密接に施文する。小破片で不明確だが、9b区出土土器(582)と同様のものと推測され、平出第三類A土器の第一段階に併行する可能性が高い。597～599は器壁が薄く、東海系土器群に該当しようか。597・598は、密接な爪形刺突や半隆起線で文様を構成する。599は口縁端部に2個以上の三角形突起を貼付し、半隆起線の文様に陰刻が伴う。600は半月状の刺突がみられるが、小破片で器面状態が悪く、詳細不明。

601は中期前葉、平出第三類A土器の第二～三段階に該当し、口縁部にコンパス文を、胴上部には斜位方向の沈線を描く。

602は押圧と刻みを施したU字状隆帯と平行沈線で文様を描く。中期中葉～後葉であろう。

603は中期後葉3期に属する親田式である。U字状・逆U字状の沈線区画をずらして描き、下段の逆U字状区画内に結節縄文の結節部と思われる文様が一部観察される。上段のU字状沈線内には連続刺突が施されている。



9区・9b区遺構外 (第157図577~584、PL42・43)

577~579は9区から、580~584は9b区から出土した。

577は前期末葉の曙ヶ峯式に該当する。結節沈線で胴部を縦位に区画し、X字状などの文様を描くと推測される。また、一部に印刻と思われる部分が観察される。

578~584は中期初頭の土器群である。578・579・581は梨久保式に併行する土器群で、半隆起線または平行沈線により文様を構成する。579には縦位の結節縄文が観察される。580は平出第Ⅲ類A土器の第一段階に該当し、口縁部に横位沈線を、胴上部には縦位沈線を描く。破片下部には胴部を上下に分割する横位隆帯がみられ、隆帯上部には円形刺突を施す。582は平出第Ⅲ類A土器の第一段階に併行する土器と考えられる。口縁部は爪形刺突を密接に施す横位隆帯を貼付し、隆帯の上下には半隆起線が治う。この隆帯は波状口縁の波頂部付近において、胴上部へと垂下する。胴部は口縁部と同様の横位隆帯・半隆起線で上下に分割し、胴上部には密接した縦位の半隆起線を施す。胴下部は上半に文様が集中し、爪形刺突をもつ横位隆帯および斜格子目状の沈線で文様を構成する。器壁の厚さ、胎土・色調などの特徴は梨久保式併行の土器群に類似するが、胴上部の縦位沈線、胴下部の斜格子状沈線、および口縁部の幅が狭い点については、SK862出土土器(522・523)など、平出第Ⅲ類A土器の第一段階に類似点を見出せる。583は浅鉢で、胎土・色調の特徴や内面に押引文を施文するなどの点が、SB43出土の浅鉢(334)と類似し、梨久保式併行の可能性が高い。584は関西系の鷹島式と考えられ、縄文地文上に爪形刺突を施す幅広の凸帯で文様を構成する。

18区遺構外 (第158図604・605)

604・605は縄文を地文とする。中期後葉2期と考えられる。604は口縁部に渦巻つなぎ文風の隆帯文を貼付する。605は胴部で、沈線および破線状の沈線で縦位の文様を描く。

19区遺構外 (第158図606・607、PL42)

606は薄手の口縁部~頸部である。口縁端部は肥厚して幅狭い帯状の無文部をつくっている。文様は、刻目隆帯により、対向する弧状文を表出するもので、それを横に連ねた構成と思われる。弧状隆帯は両脇に三角押引文を伴う。上段の弧状隆帯内には、同じ施文具による縦位・三角形状の押引文が充填される。中期中葉と考えられる。下伊那型柳形文土器の可能性もあろう。

607は沈線による縦位区画内に綾杉状沈線を施文する。中期後葉3期と考えられる。

20区遺構外 (第158図608・609)

608・609は後期初頭の称名寺式に該当する。沈線により文様を描くが、摩滅のため、縄文の有無は判断としない。608は波状口縁の波頂部で、上端は突起となる。突起には器面に平行する方向で横に孔が貫通するが、破損のため全体の形状は不明である。609は縦位の曲線的な帯状モチーフを表出している。

2 土製品 (第159図、PL43)

(1) 土偶 (第159図610~617、PL43)

土偶は8点確認された。すべて破片で、610~613は頭部、614・615は腕部、616・617が胴部である。これらは、形態や伴出土器、集落の存続期間から推測して、中期前葉~後葉の所産と考えられよう。615と616は不明瞭であるが、他の6点から類推して、幾つかの粘土塊を合わせて成形した「分割塊製作法」(山梨県教育委員会1987)で作られたとみてよい。出土した土偶は粘土塊の接合部付近で破断した場合が多く、

頭部なら頭部の本来の形状を概ね留めている。部位ごとに分けた意図的な破壊を推測させるが、そもそも「分割塊製作法」が個々の粘土塊にそって壊すことを前提とした製作法であるとするれば、弱い箇所で破断することは当然であろう。しかし、8点とも接合すべき他の部位が一切確認されなかったことは、やはり、意図的な破壊の結果であることを推測させる。8点はいずれも集落の居住域から出土している。土偶の一部位を居住域内に廃棄し、残りを居住域から離れた場所に廃棄するという行為がなされたのかもしれない。以下、各資料について記述する。

610はSK136から出土した。側面観は頭頂部と後頭部が突出する。顔面は写実的に表現され、鼻から眉が隆帯で、目・鼻穴・口は刺突で描出される。肩部末端から伸びる隆帯により頬・顎部の輪郭が表出される。頸部下下に観察される接合痕(剥離痕)の状況から、合わせ目に粘土を巻いて胴部塊と接合したことを推測する。頸部の下端が尖る形状は、胴部のソケットに差し込む方式を思わせるが、明確ではない。

611はSK154から出土した。扁平な頭部形状を呈する。平らな頭頂部には縦・横方向の隆帯が貼付され、後頭部を上下に貫く孔が開けられている。顔面は横長の三角形状を呈し、眉・鼻・目が押引文により抽象的に表現されている。口の表現はみられない。文様は、縦位の押引沈線で頸部の前・後面に施文される。頸部下端の破断面の状況から、610と同様な接合方法によると思われる。後頭部の孔は接合ではなく、紐を通す等、使用方法に関係するか。

612は中期後葉2期のSB40から出土した。扁平な頭部形状をもち、頭頂部は平らである。顔面は、大部分が剥落しており、顎の表現もないが、下端にみられる刺突が口に相当するのであろう。頭頂部から頸部まで貫通孔が開けられており、胴部との合わせに木芯を利用したことが推測される。

613は中期中葉末～後葉1期のSB15から出土した。扁平な頭部形状で、頭頂部は平らである。顔面の造作は刺突による目のみであり、611よりさらに抽象化された表現といえる。後頭部・側頭部は幅5～6mmほどの縦長に細かく面取りされている。髪の象徴的な表現であろうか。頸部下下には接合面が明瞭に認められ、610と同様な方法により胴部と接合したと理解してよいだろう。

614は中期前葉のSB03から出土した。両腕を伸ばして水平に広げた形状であろう。残存するのは右腕部分で、先端部を前へ屈曲させ、端面に横方向の刻みを5箇所入れて、手の表現としている。文様は、前面横位4条・縦位1条、後面横位4条の押引文が施文される。腕付け根の破断面上半には棒状の粘土塊の先端面が観察される。棒状の粘土塊二本を上下に重ねて腕部を成形し、胴部と接合したことを推測する。

615は中期前葉のSB02から出土した。614と同様な形状である。右腕の先端部が前に屈曲し、端面に横方向の刻み5箇所が施されている。文様も前面・後面に横位主体の押引文が施文される。

616は8区遺構外出土である。背面が剥落した胸～上腹部の破片である。丸い瘤状を呈する乳房の間に、半截竹管状工具の内側で押しきした平行線による対向弧状文が施されている。本資料は胴部前面が薄く剥離したような状態であり、偶然に割れたとは考えにくく、意図的な打割による可能性があろう。さらに、摩耗のため明瞭ではないが、2枚の粘土板を合わせて胴部を成形した、その接合面に沿って剥離したことも想定しておきたい。

617は19区遺構外出土である。扁平で腰がくびれた形状の胴部である。押引文により描いた正中線の下端は巻き、下腹部には横位の沈線を、左腰には逆V字状の沈線を施している。胸から上を欠失し、脚部は剥落している。胴部下端面には左右二つの孔が開き、上端の破断面の中央と左側にそれぞれ対応する孔がみられ、下端左側の孔は上端中央の孔と連結して貫通する。二つの孔は粘土塊の合わせに利用した木芯の痕跡と推測され、左孔の状況は左脚部と頭部の粘土塊を1本の木芯で繋いだ可能性を示唆しよう。

(2) 土製円盤 (第159図 618~623, PL43)

土製円盤は6点確認された。扁平な土器片の側辺を打ち欠いて略円形ないし略方形に整形し、さらに側辺に研磨を加えたものである。打ち欠き整形だけのものは認められなかった。623のみ他に比べ大形で、方形に近い形状をもつ。他の5点は略円形を呈し、大きさも似通っている。6点のうち3点で文様が認められる。伴出土器や集落の存続期間を考え併せ、中期前葉~後葉の所産と捉えておきたい。

618は中期中葉末~後葉1期のSB18から出土した。側辺の約1/2周が研磨されている。土器は縄文と沈線を施した破片を用いている。619はSK130から中期前葉の土器とともに出土した。側辺は全周が研磨されている。土器は無文の破片である。620はSK946から出土した。側辺の約4/5周が研磨されている。土器は中期前葉の新道式と思われる破片を用いている。621は8b区遺構外の出土である。側辺の約4/5周が研磨されている。土器は無文の破片である。622は19区遺構外の出土である。側辺の約4/5周が研磨されている。土器は無文の破片である。623は中期後葉2期のSB34から出土した。側辺は全周が研磨されている。土器は縦位の平行沈線を施した破片を用いている。

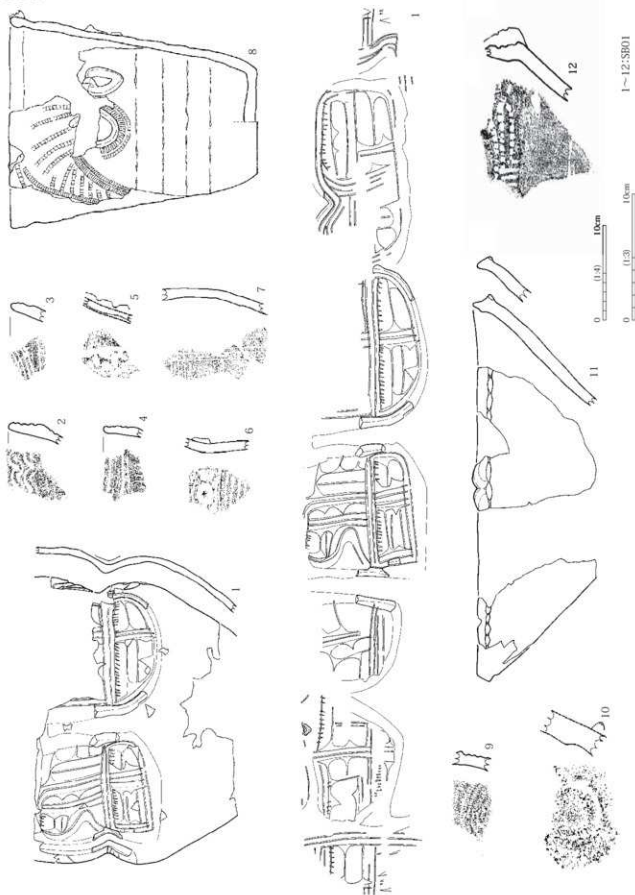
(3) その他の土製品 (第159図 624~628, PL43)

624は小形の匙形土製品である。中期中葉末~後葉1期のSB12から出土した。匙部は平面楕円形・断面U字形を呈する。柄部は断面円形で、匙部の中軸に対して右に傾いた状態で取り付く。

625は環状土製品の一部と推測される破片である。中期後葉2期のSB34から出土した。断面形は円形を呈する。

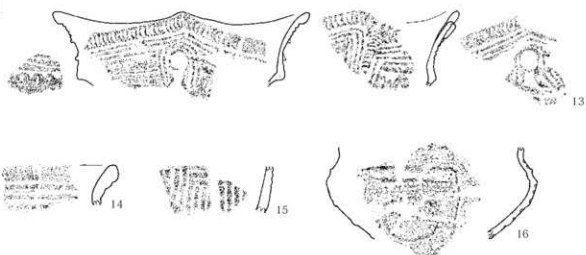
626~628は盤状の形態をもつが、いずれも破損しており、全体形を留めるものはない。3点とも中期中葉末~後葉1期のSB14から出土した。626の残存部は平面楕円形に近い形状で、断面形は実測図の左辺を底辺とする三角形形状をなす。文様は両面相称で、細隆帯を、実測図上での縦位・斜位に密接貼付して構成する。細隆線土器と共通する文様形態であり、同時期の所産であることを示している。627の残存部は平面鉤形に近い形状を呈する。半分折損とするならば、円形の一端に丸い抉りが入った形状が想定されようか。文様は両面相称で、周縁を縁取るように円弧状の隆線・短沈線文帯がめぐり、その内側に押引文が施文される。628は、627と同様な形態・残存状況を示す。文様は、細隆帯と隆線を組み合わせた梯子状のモチーフをV次方に配し、V字内に細隆帯と押引文を施文する。両面ともよく似た構成であるが、相称とはいえない。

SB01



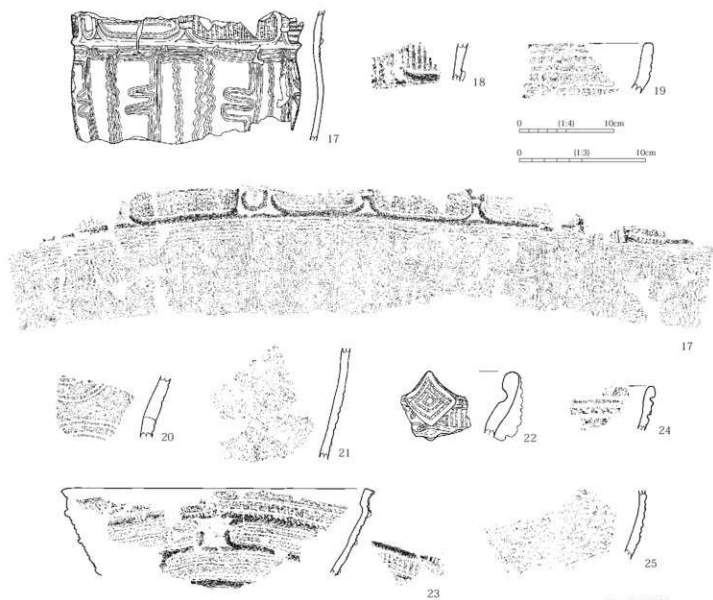
第116図 土器実測図(1)

SB01



13~16:SB01

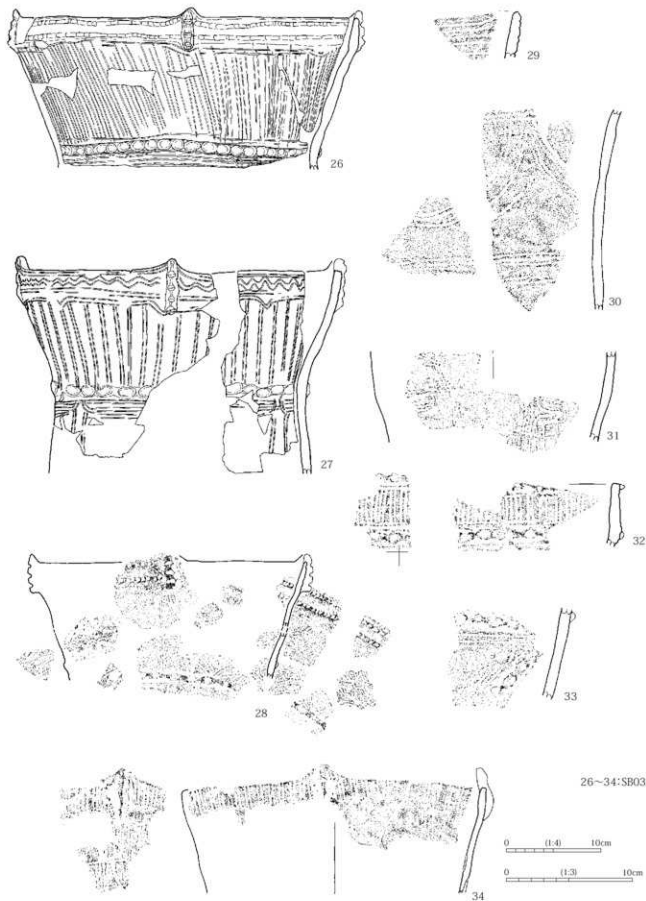
SB02



17~25:SB02

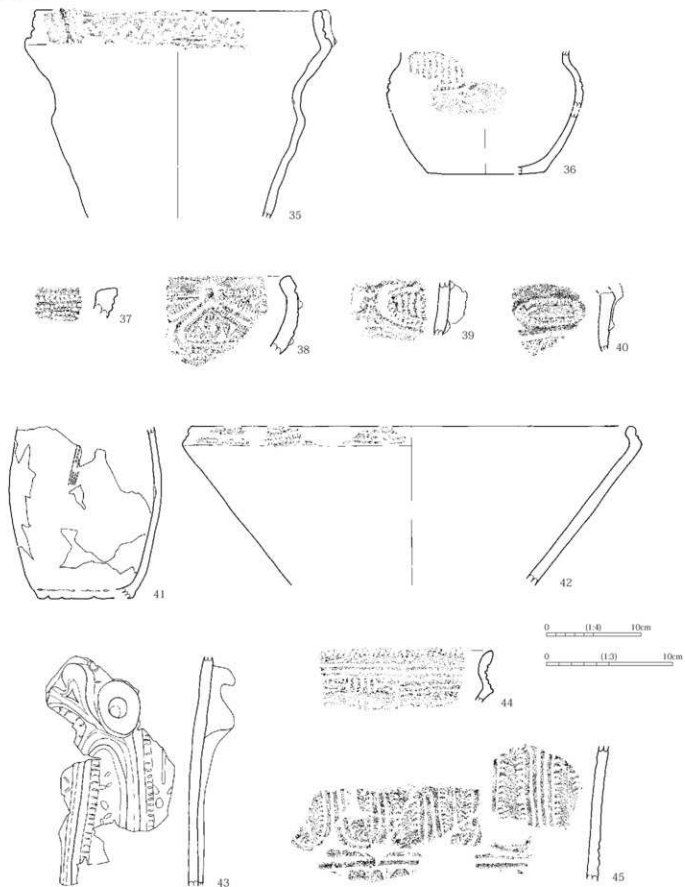
第117図 土器実測図(2)

SB03



第118図 土器実測図(3)

第4章 遺構と遺物  
SB03



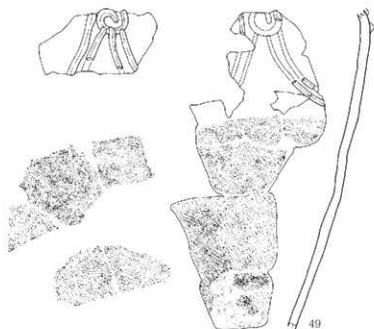
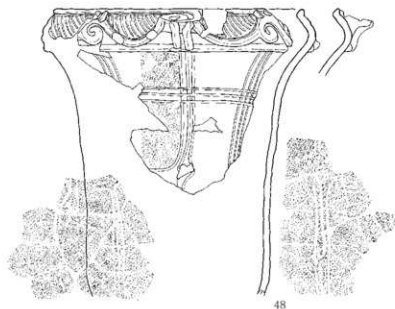
35~45:SB03

第119図 土器実測図(4)

SB07



SB08

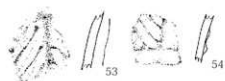


0 (1/4) 10cm

0 (1/2) 10cm

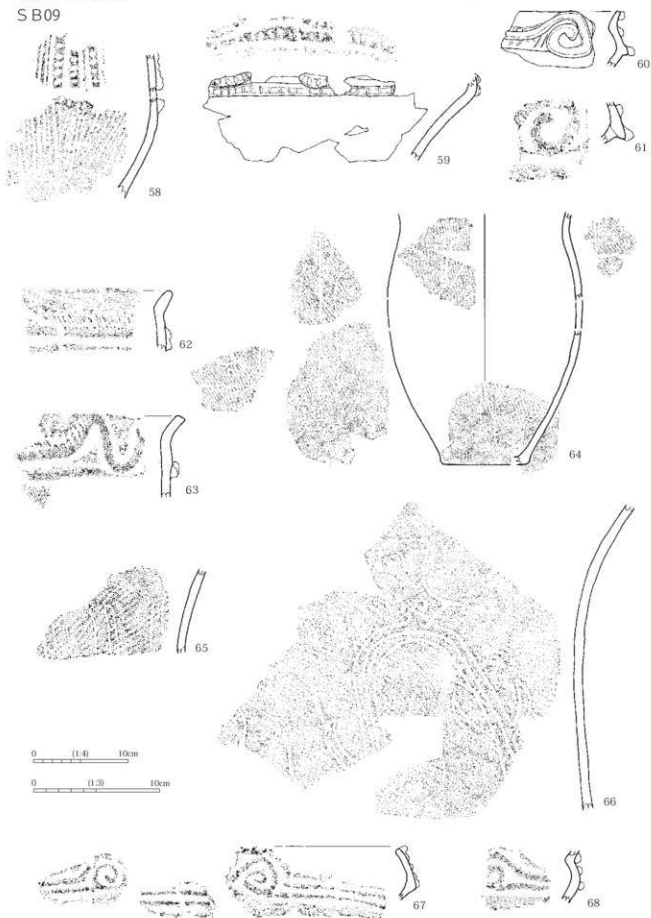
46・47:SB07  
48～52:SB08  
53～57:SB09

SB09



第120図 土器実測図(5)





58~68:SB09

第121図 土器実測図(6)

SB10



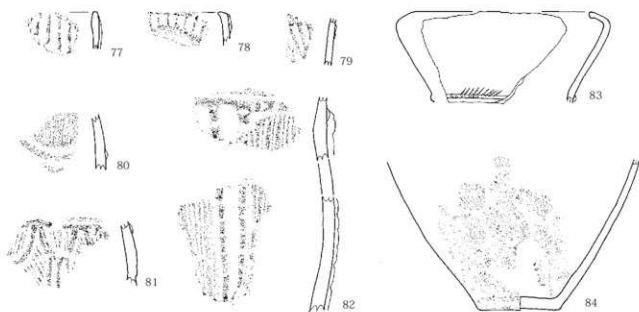
69~72:SB10

SB11



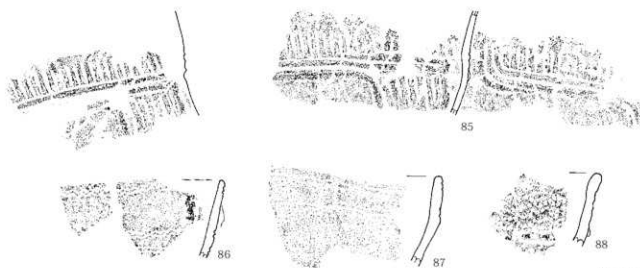
73~76:SB11

SB12



77~84:SB12

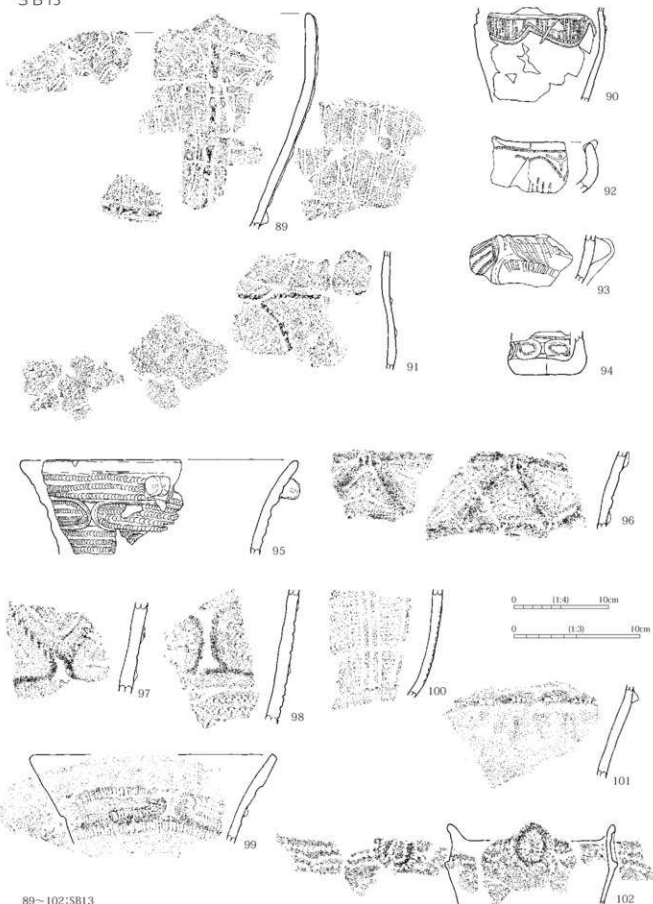
SB13



85~88:SB13

第122図 土器実測図(7)

SB13



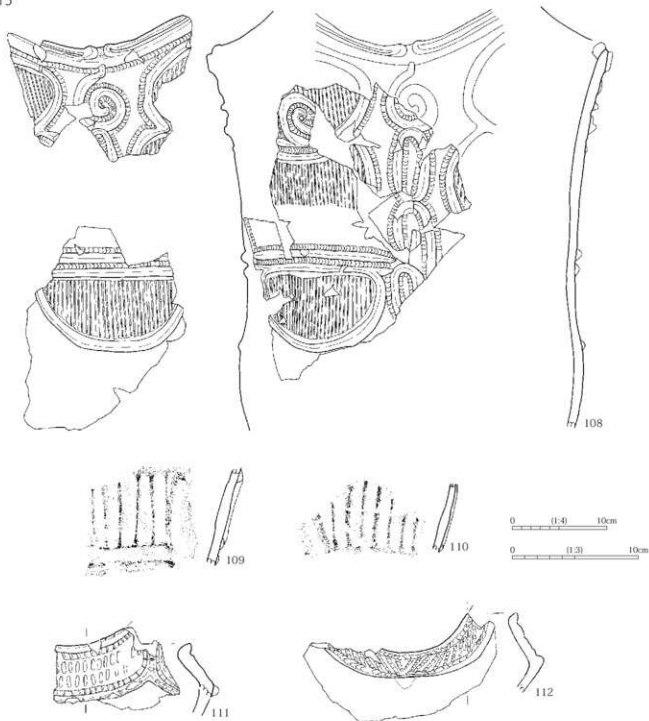
第123図 土器実測図(8)

SB14



103~107:SB14

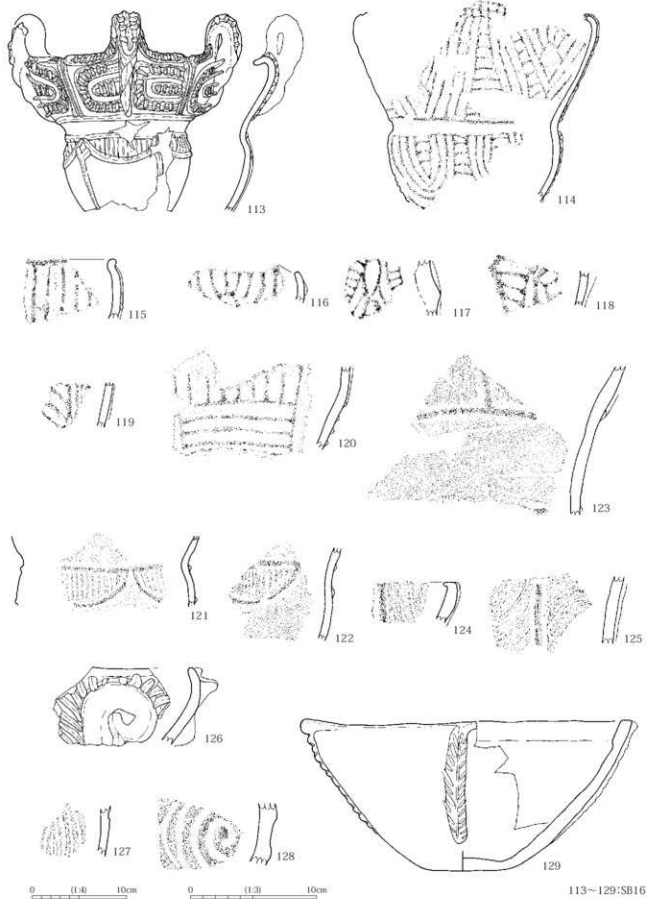
SB15



108~112:SB15

第124図 土器実測図(9)

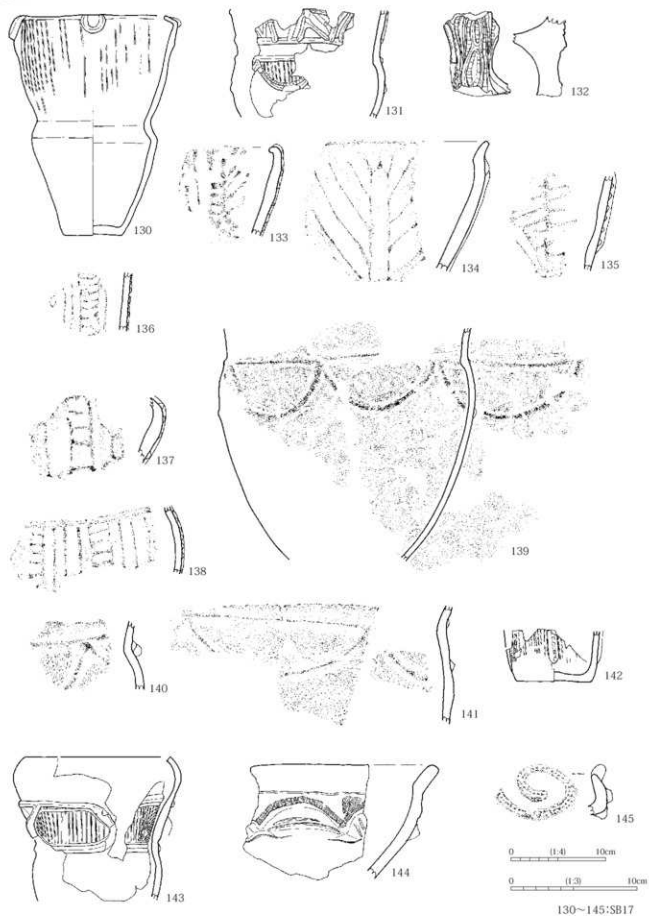
SB16



113~129:SB16

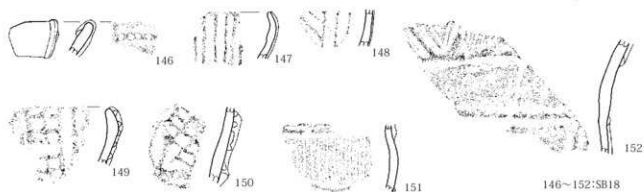
第125図 土器実測図 (10)

SB17

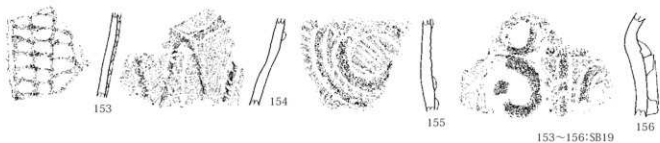


第126図 土器尖測図 (11)

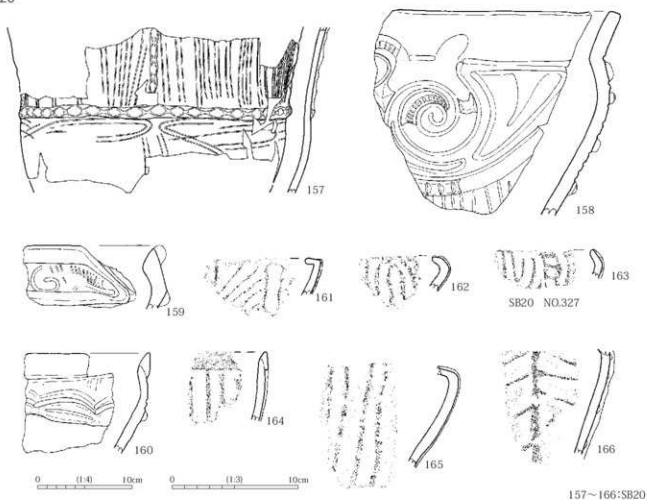
SB18



SB19

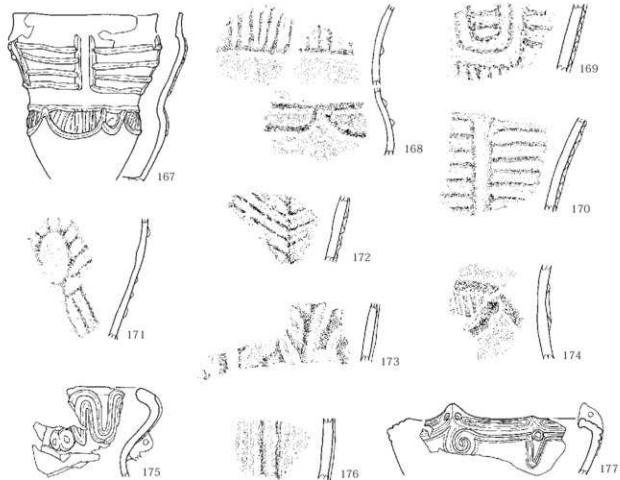


SB20



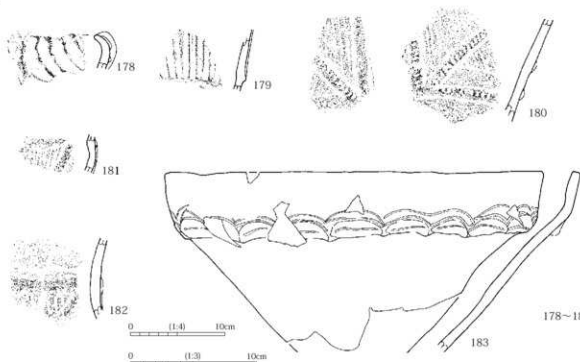
第127図 土器夾測図 (12)

SB21



167~177:SB21

SB22



178~183:SB22

第128図 土器実測図 (13)



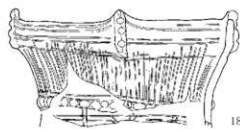
SB24



184

184:SB24  
185:SB25

SB25

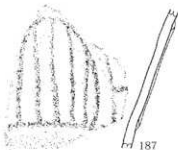


185

SB26



186



187



188



189



190



191



192

186~192:SB26

SB29



193



195



197



194



196

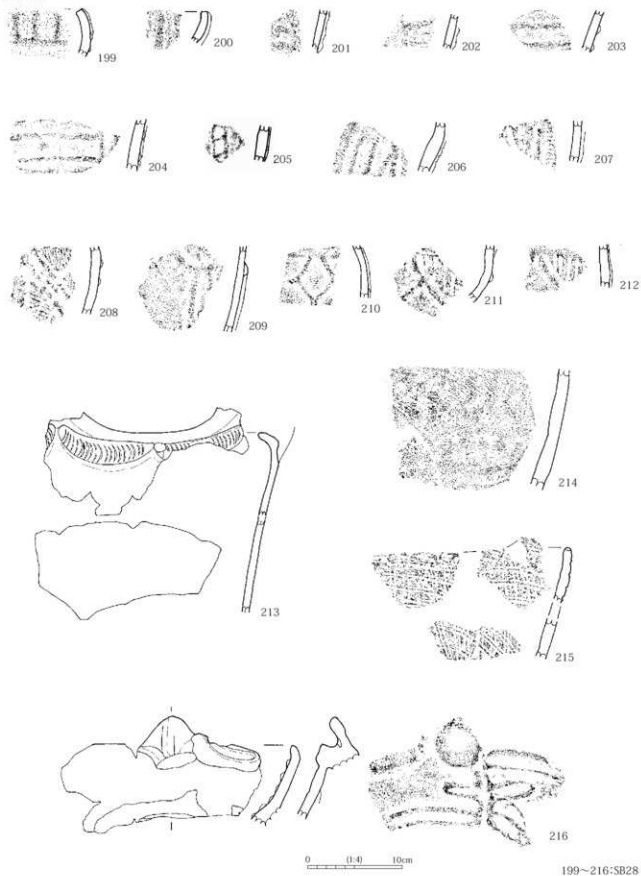
0 10cm (1/4)

0 10cm (1/3)

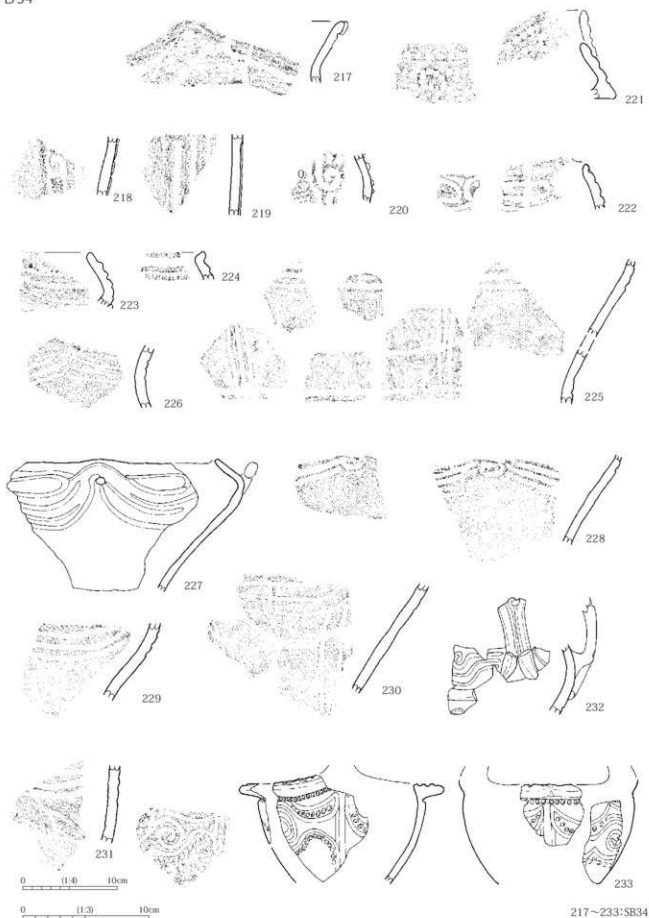
193~198:SB29

第129図 土器実測図 (14)

SB28

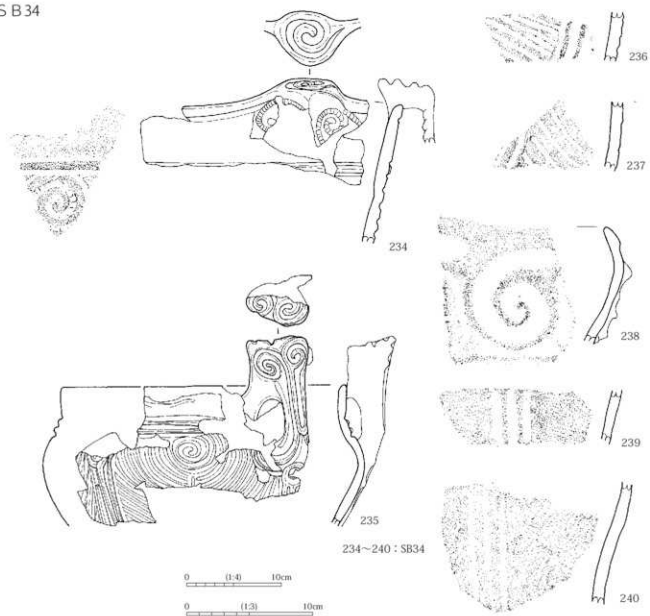


第130図 土器実測図 (15)

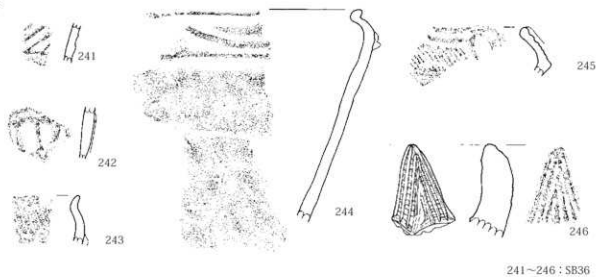


第131図 土器実測図(16)

SB34

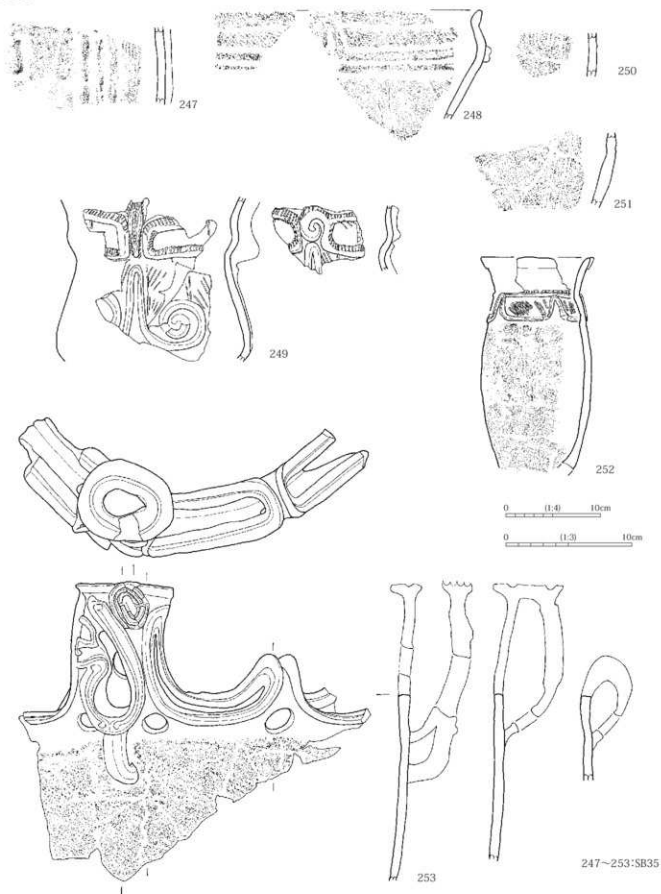


SB36



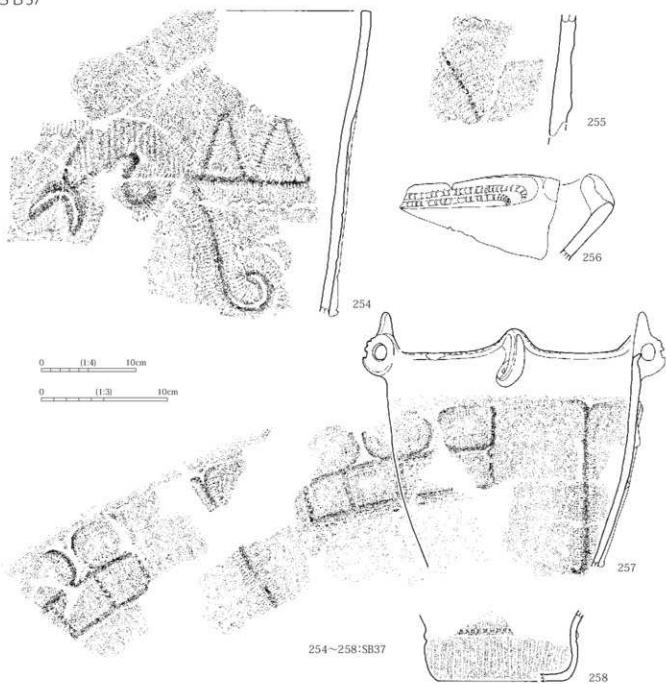
第132図 土器夾測図 (17)

SB35

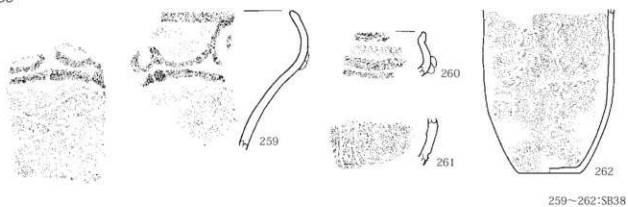


第133図 土器実測図 (18)

SB37

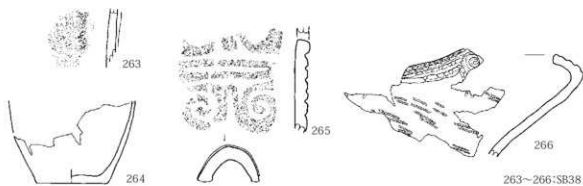


SB38



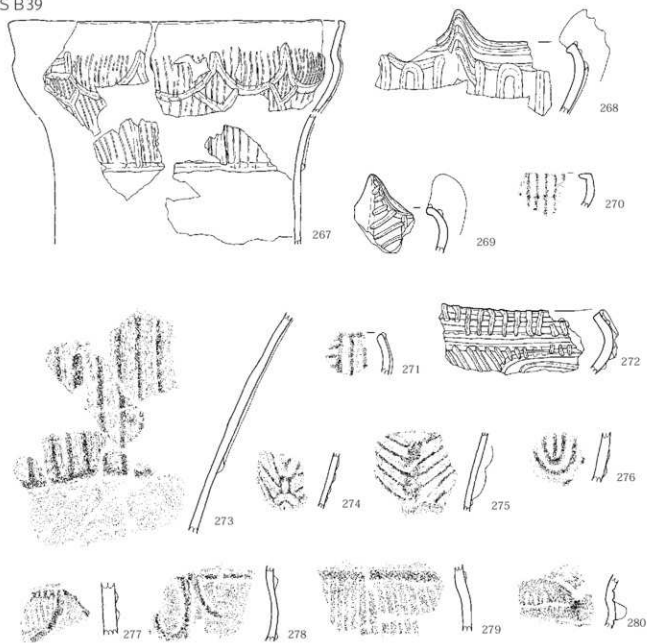
第134図 土器実測図 (19)

SB38



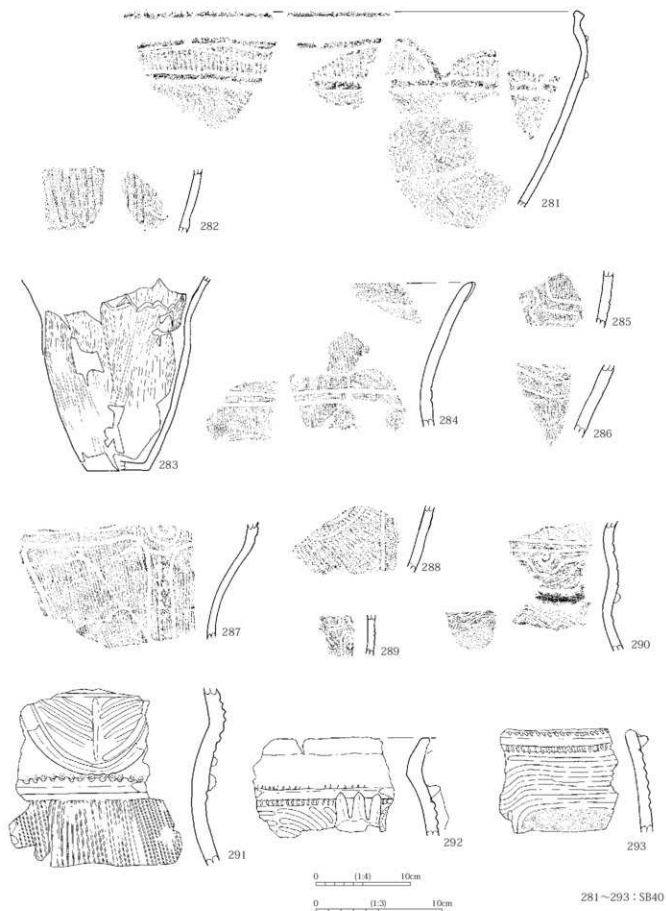
263~266:SB38

SB39



267~280:SB39

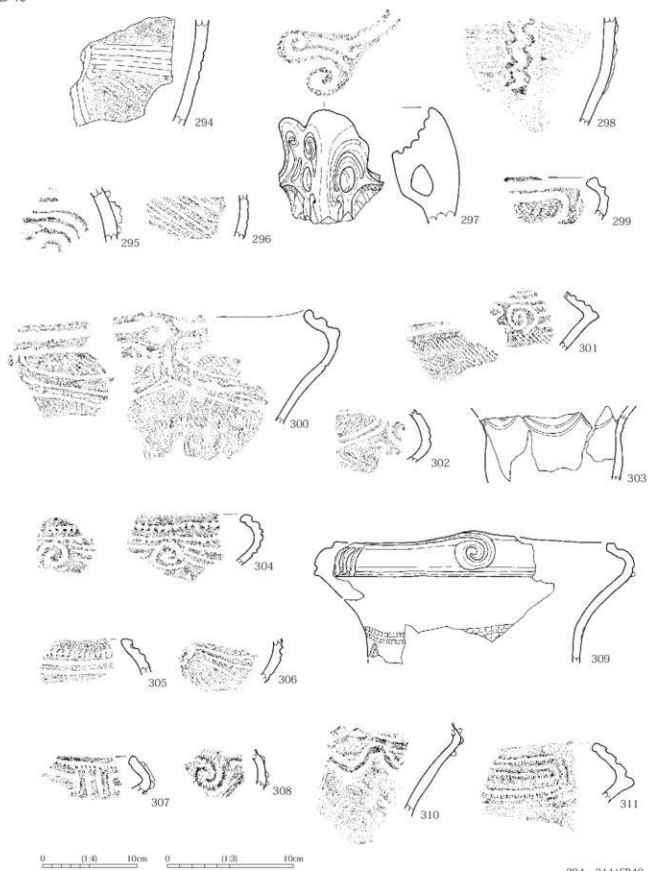
第135図 土器実測図(20)



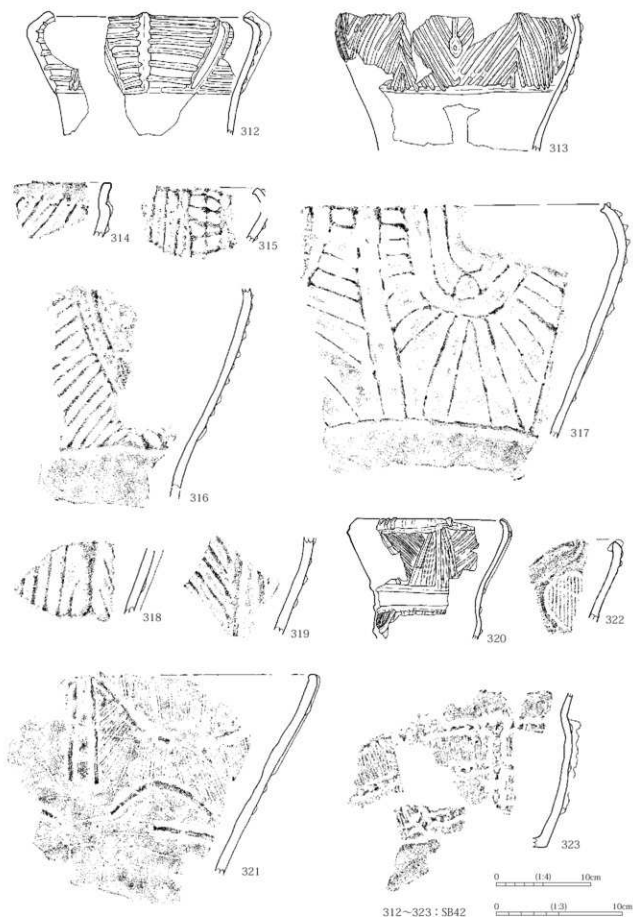
第136図 土器実測図 (21)



SB40

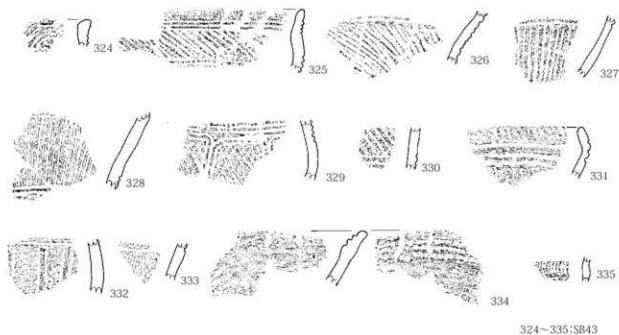


第137図 土器実測図 (22)



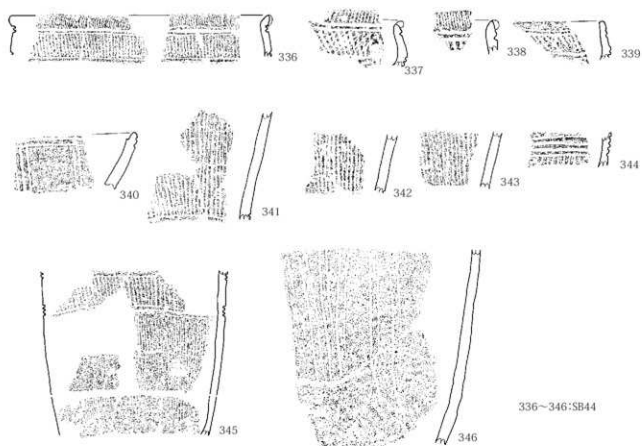
第138図 土器実測図 (23)

SB43



324~335:SB43

SB44



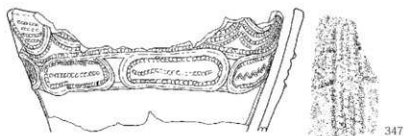
336~346:SB44

0 1(1/4) 10cm

0 1(1/2) 10cm

第139図 土器夾測図(24)

SB45



第3節 縄文時代の遺物

SB46



347

347・348:SB45

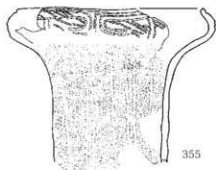


348

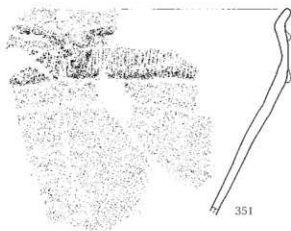


350

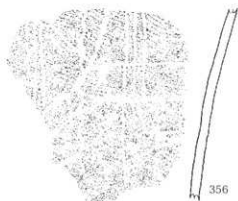
SB48



355



351



356

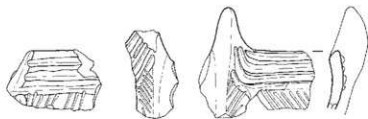
355~356:SB48



352



353



354

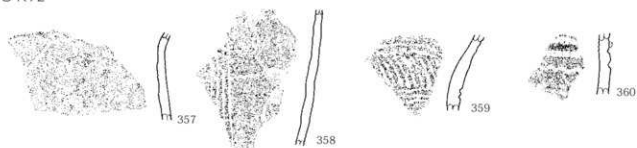
349~354:SB46

0 (1/4) 10cm

0 (1/3) 10cm

第140図 土器実測図 (25)

SK72



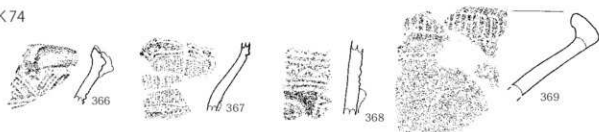
357~360: SK72

SK73



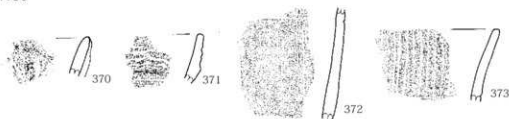
361~365: SK73

SK74



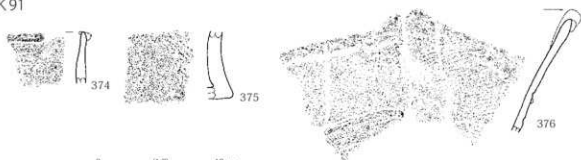
366~369: SK74

SK80



370~373: SK80

SK91



374~376: SK91



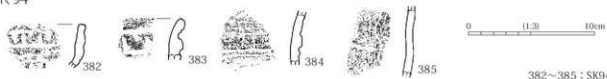
第141図 土器実測図 (26)

SK92



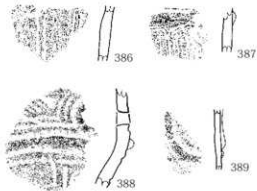
377~381: SK92

SK94



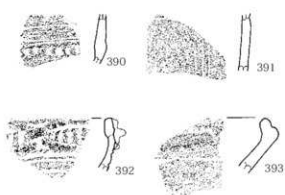
382~385: SK94

SK97



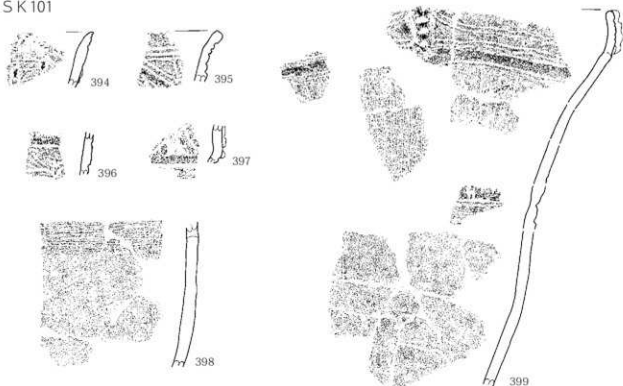
386~389: SK97

SK98



390~393: SK98

SK101

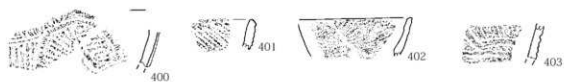


394~399: SK101

第142図 土器夾測図(27)

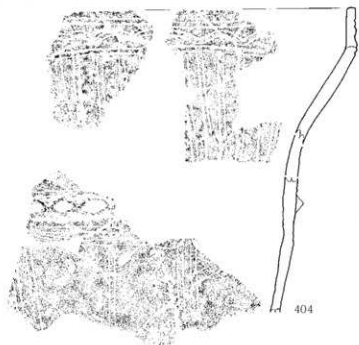
第4章 遺構と遺物

SK 103

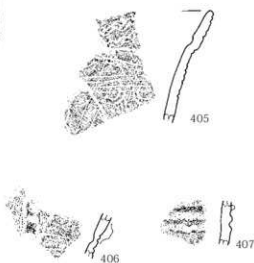


400~403: SK103

SK 107

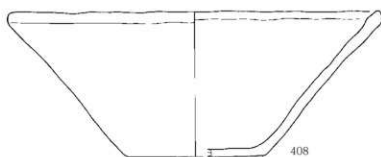


SK 112



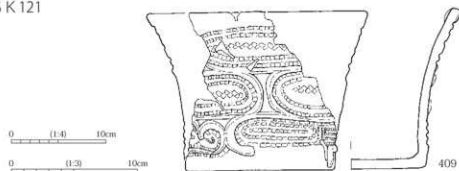
404: SK 107  
405~407: SK 112

SK 108



408: SK 108

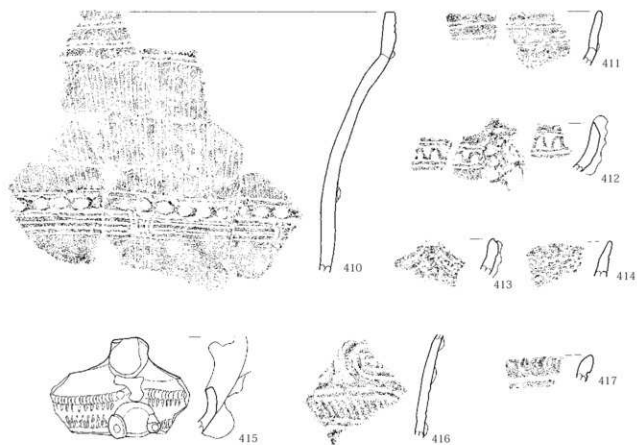
SK 121



409: SK 121

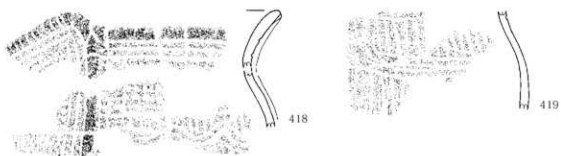
第 143 図 土器実測図 (28)

SK130



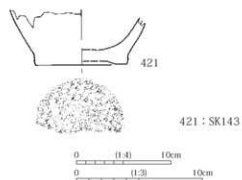
410~417: SK130

SK135



418~420: SK135

SK143

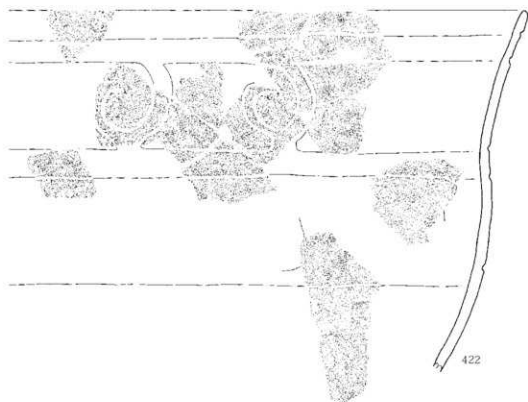


421: SK143

第144図 土器夾測図 (29)

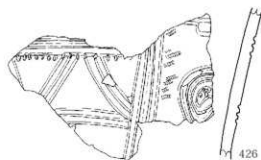
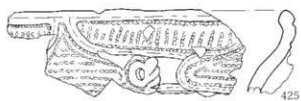


SK143



422~424 : SK143

SK144

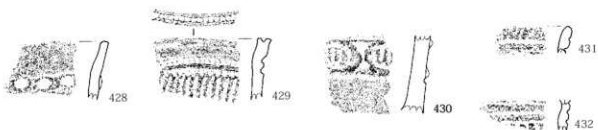
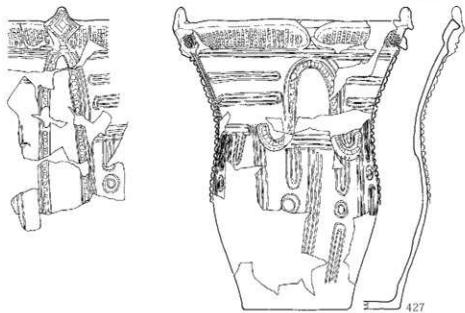


425・426 : SK144

0 1.3 10cm

第145図 土器実測図 (30)

SK150



SK153

427~432 : SK150



433~437 : SK153

SK154

SK155



438・439 : SK154

440・441 : SK155

SK171



442~444 : SK171

0 (1:4) 10cm 0 (1:3) 10cm

第146図 土器実測図 (31)

SK177



SK201



SK202

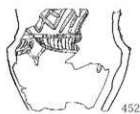


445 : SK177  
446~448 : SK201  
449 : SK202

SK219



SK238



SK247

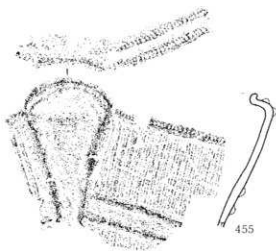
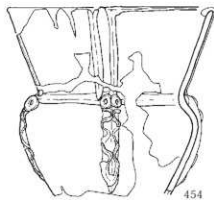


450・451 : SK219  
452 : SK238  
453 : SK247

0 (1/4) 10cm

0 (1/3) 10cm

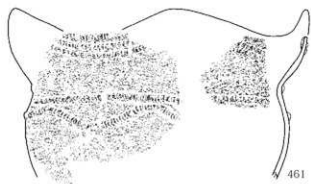
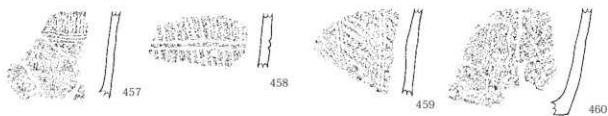
SK254



454~456 : SK254

第147図 土器夾測図 (32)

SK268



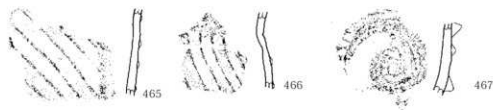
462

457~462: SK268

SK291



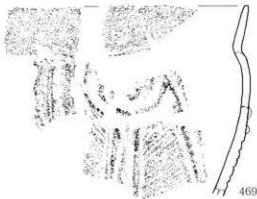
463~467: SK291



SK270



SK296



468: SK270  
469・470: SK296



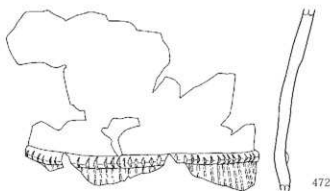
第148図 土器実測図(33)

第4章 遺構と遺物

S K 300



471



472

S K 323



473

S K 365



477

477 : SK365

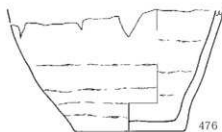
S K 339



474

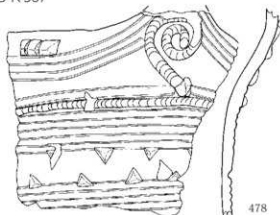
475

S K 349



476

S K 367



478

478 : SK367

471・472 : SK300

473 : SK323

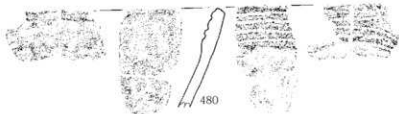
474・475 : SK339

476 : SK349

S K 380



479



480

479・480 : SK380

0 (1:4) 10cm 0 (1:3) 10cm

第149図 土器実測図 (34)

S K568



481

S K757



482



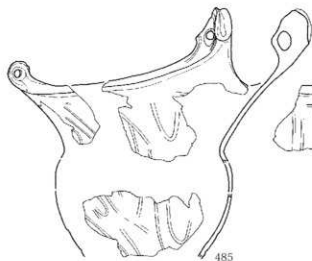
483



484

481:SK568  
482~484:SK757

S K759



485



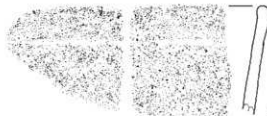
486



487



488



490



489



491

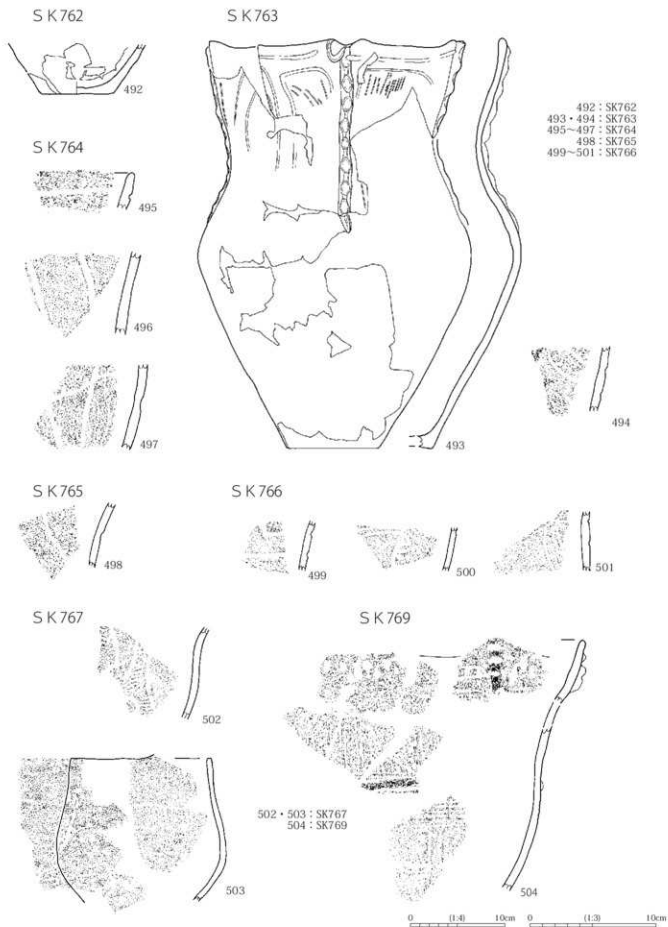
0 (1.4) 10cm

0 (1.3) 10cm

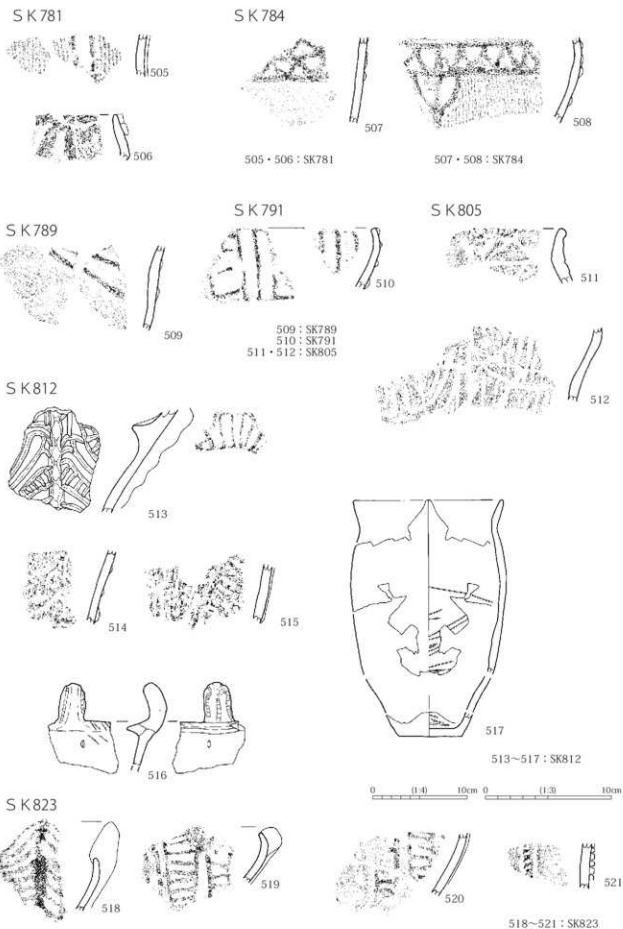
485~491:SK759

第150図 土器実測図 (35)

第4章 遺構と遺物



第151図 土器実測図 (36)

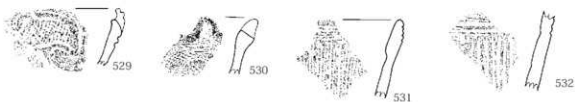






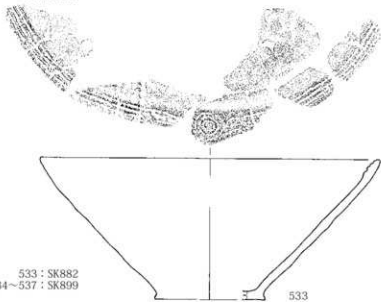
第153図 土器実測図(38)

S K 874



529～532 : SK874

S K 882



533 : SK882  
534～537 : SK899

S K 906



S K 920



538・539 : SK906  
540 : SK920

S K 899



S K 931



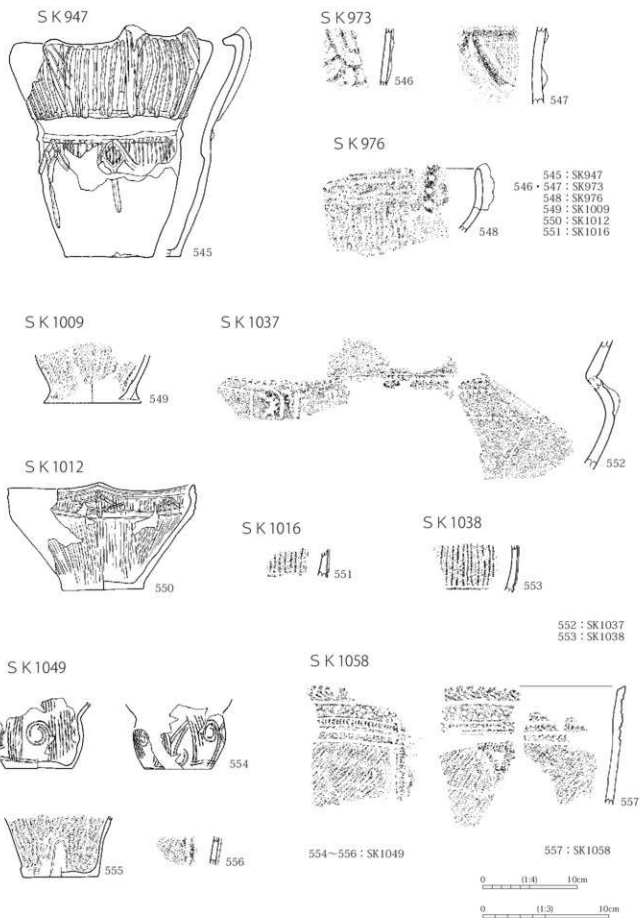
S K 934



541・542 : SK931  
543・544 : SK934

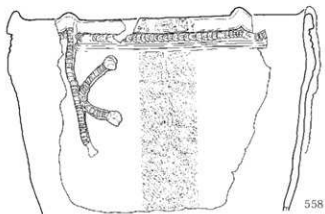


第154図 土器実測図 (39)



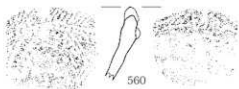
第155図 土器実測図 (40)

SK1217



558

SK1225



560

SK1276



561

558・559: SK1217  
560: SK1225  
561: SK1276



559

SK1245



562

SK1350



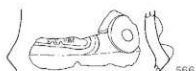
563

562: SK1345  
563: SK1350

SK1402



565



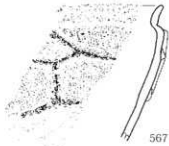
566



564

564~566: SK1402

SK1403

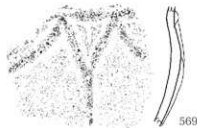


567

SK1404



568



569

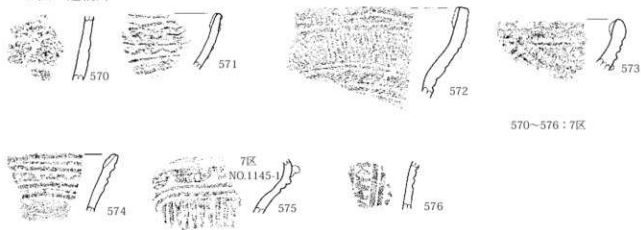


567: SK1403  
568・569: SK1404

第156図 土器尖測図(41)

第4章 遺構と遺物

7区 遺構外

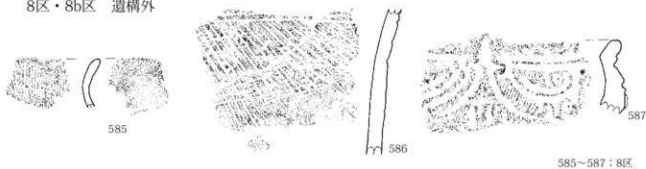


9区・9b区 遺構外

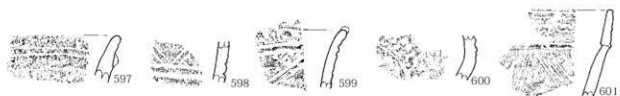
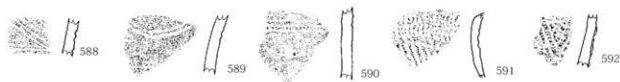


第157図 土器実測図 (42)

8区・8b区 遺構外



585~587: 8区



588~603: 8b区

18区 遺構外



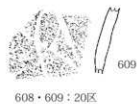
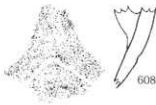
604・605: 18区

19区 遺構外



606・607: 19区

20区 遺構外

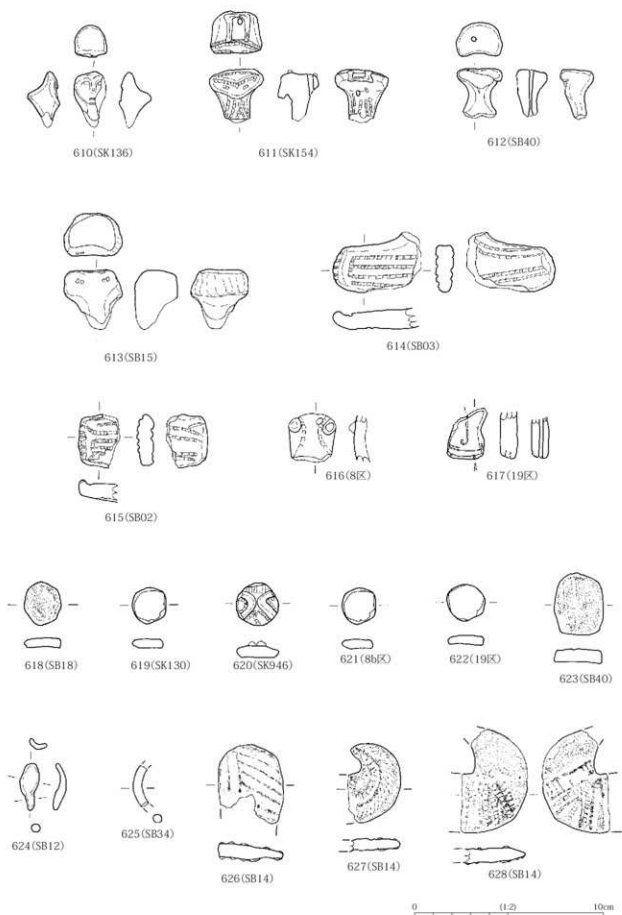


608・609: 20区

0 1.3 10cm

第158図 土器実測図 (43)

第4章 遺構と遺物



第159図 土製品実測図

## 3 石器

## (1) 石器群の概要

## 器種組成と出土状況

川路大明神原遺跡で出土した石器群は剥片石器群と礫塊石器群に大別される。剥片石器群は剥片剥離により原石の形状を留めない形に石器を整形する石器群、礫塊石器群は原石の形状を(ある程度)留めるもので剥片剥離はほとんど行われぬ石器群である。剥片石器群は剥片石器、石核石器、素材・残滓、礫塊石器群は、礫石器、礫に区分され、さらに各器種に分類される(第4表)。次項の「石器の観察」では第4表の器種分類に沿って記述を進める。なお、礫は、使用痕跡は認められないが、人為的に遺跡内に持ち込まれたものであり、使用痕が確認できない利器または、遺構の一部に用いられた石器である。

出土した石器は、石鏃62点、石鏃未成品17点、石錐7点、異形石器4点、石匙16点、挟入石器4点、削器14点、挿器状石器6点、不定形石器4点、二次加工がある剥片60点、楔形石器53点、微細な剥離がある剥片54点、打製石斧465点、打製石斧未成品?8点、横刃型石器334点、研磨痕がある剥片7点、刃器29点、礫器15点、磨製石斧38点、磨製石斧未成品28点、石核61点、原石19点、磨石68点、凹石28点、敲石97点、石錘107点、砥石4点、石皿17点、台石19点、剥片2247点、破片192点で、剥片・破片を除く石器は合計で1645点である。

この他に、楯先尖頭器1点が出土している。剥片の中には、旧石器時代と思われるもの少数含まれており、これらは、『竹佐中原遺跡における旧石器時代の石器文化Ⅱ』(長野県埋蔵文化財センター2010)で報告する。

石器の時期は、縄文時代中期前葉・中葉末～後葉の遺構で出土したものが多く点から、その時期が主体と考えられる。しかし、土坑の一部や遺構外からは、早期、前期、中期中葉、後期の土器が出土したので(第4章3節1を参照)、そうした時期の石器が少量混入していると思われる。

第5表に、遺構別の器種組成を示した。竪穴住居跡出土の器種組成は、中期前葉と中葉末～後葉では、有為な差は認められない。全体的に、打製石斧と横刃型石器の比率が高く、石錘も一定量が存在しており、この3器種の多い点が本遺跡の特徴といえる。

出土状況は、剥片破片を含めた石器群全体では51%が竪穴住居跡から出土しており、27%が遺構外で出土し、約22%が土坑から出土している。多くの器種はこれに近い出土率を示すが、挟入削器と微細な剥離がある剥片が遺構外の出土率が高く、石皿と台石は遺構外の出土率が極めて低い。また、石核と原石と凹石の住居内の出土率が低い傾向にある。(第6表)

竪穴住居跡では、SB09・13・34・40で、剥片・破片を除いた石器(利器)が50点を超え、SB40が84点と最も多い。その一方で、出土総数が10点以下の竪穴住居跡も存在する。出土総数が多い4

第4表 石器分類表

分類	記載順	器種名	出土点数	
剥片剥離石器群	1	石鏃・石鏃未成品	79点	
	2	石錐	7点	
	3	異形石器	4点	
	4	石匙	16点	
	5	挟入削器	4点	
	6	削器	14点	
	7	挿器状石器	6点	
	8	不定形石器	4点	
	9	二次加工がある剥片	60点	
	10	楔形石器	53点	
	11	微細な剥離がある剥片	54点	
	12	打製石斧・打製石斧未成品?	473点	
	13	横刃型石器	334点	
	14	研磨痕がある剥片	7点	
	15	刃器	29点	
	16	礫器	15点	
	17	磨製石斧・磨製石斧未成品	66点	
	18	石核	61点	
	19	原石	19点	
	20	剥片・破片	2439点	
	礫塊石器群	21	磨石	68点
		22	凹石	28点
		23	敲石	97点
		24	石錘	107点
		25	砥石	4点
		26	石皿	17点
		27	台石	19点
		28	礫	508点以上











第6表 器種別の住居内出土率と遺構外出土率

	穂先形 尖頭器	石鏃	石鏃未 成品	石鏃	異形石 器	石匙	挟入削 器	削器	搔器状 石器	不定形 石器	二次加 工があ る剥片	楔形石 器	微細な 剥離が ある剥 片	打製石 斧	打製石 斧未成 品?	横刃型 石器
竪穴住居出土点数	29	9	4	2	7	1	8	2	2	24	28	16	192	5	190	
土坑他出土点数	14	2		1	4		4			19	8	9	106	3	61	
遺構外出土点数	19	6	3	1	5	3	2	4	1	17	17	29	167		83	
出土点数合計	62	17	7	4	16	4	14	6	4	60	53	54	465	8	334	
住居内出土率	0.47	0.53	0.57	0.5	0.44	0.25	0.57	0.33	0.5	0.4	0.53	0.3	0.41	0.63	0.57	
遺構外出土率	0.31	0.35	0.43	0.25	0.31	0.75	0.14	0.67	0.25	0.28	0.32	0.54	0.36	0	0.25	

	研磨痕 がある 剥片	刃器	鏃器	磨製石 斧	磨製石 斧未成 品	石核	原石	剥片碎 片	磨石	凹石	敲石	石鏃	砥石	石皿	台石	合計
竪穴住居出土点数	4	14	8	21	14	19	4	1308	42	7	52	47	1	7	12	2079
土坑他出土点数	4	7	3	6	4	19	11	527	14	12	24	23	1	9	6	903
遺構外出土点数	8	4	11	10	23	4	604	12	9	21	37	2	1	1	1104	
出土点数合計	8	29	15	38	28	61	19	2439	68	28	97	107	4	17	19	4086
住居内出土率	0.5	0.48	0.53	0.55	0.5	0.31	0.21	0.53	0.62	0.25	0.54	0.44	0.25	0.41	0.63	0.51
遺構外出土率	0	0.28	0.27	0.29	0.36	0.38	0.21	0.25	0.18	0.32	0.21	0.35	0.5	0.06	0.05	0.27

軒は、遺構の残存状態が良好で、出土総数が10点以下の竪穴住居跡は、削片を受けるなど、残存状態が悪いものが多い。従って、遺構間にみられる出土総数の差異は、遺構の残存状態の影響を考慮しなければならない。

なお、実測図を掲載しなかった石器も含めて、個々の石器の観察と計測結果を付録CDに収録した。(ファイル名「石器観察表」)

#### 石材組成

第7表に、器種別の石材組成を示した(註1)。本遺跡では、石器の石材として28種類が認められ、石器との関係について次の点が指摘できる。

1. 石鏃・石鏃・異形石器・挟入石器・搔器状石器・不定形石器・楔形石器といった小形石器は、黒曜石が圧倒的に多く75%を超える。この他、小形石器には下呂石、珪質凝灰岩、チャートが少量認められる。
2. 小形石器の中で石匙は、チャート・珪質凝灰岩・硬砂岩が主体である。
3. 打製石斧・横刃型石器・刃器・鏃器・敲石・石鏃は、硬砂岩・緑色の凝灰岩の比率が高い。
4. 磨製石斧は、緑色の凝灰岩の比率が高い。
5. 磨石・凹石・石皿・台石は、花崗岩と硬砂岩の比率が高い。
6. 剥片・碎片で最も多いのは硬砂岩、それに次ぐのは黒曜石で、そのほか凝灰岩が少量存在する。硬砂岩と黒曜石は、原石・石核が出土している。黒曜石は石鏃など小形石器の製作に関わる資料、硬砂岩と緑色の凝灰岩は、横刃型石器の素材剥片や打製石斧と磨製石斧の調整剥片などである。

#### (2) 石器の観察

##### ① 石鏃・石鏃未成品 (第167図1~36、PL44)

石鏃62点、石鏃未成品17点が出土した。

#### 石鏃 (第167図1~30)

石鏃は有茎のものが1点、他は全て無茎石鏃である。黒曜石47点、下呂石6点、チャート2点、凝灰岩1点、その他6点である。最小のものは1.1×1.2cm、最大のものは2.9×1.6cmであり、大きさにバリエー



ションがある。長幅をグラフで示すと、概ね以下の3つの大きさに区分できる。すなわち、長さ1.8cm以下のもの(小形)、2.5cm以上のもの(大形)、その中間のもの(中形)である(第160図)。飯田市下り松遺跡(長野県埋蔵文化財センター2009)の縄文時代中期の石鏃と比較すると、本遺跡では小形の石鏃が多く見られることが特徴である。特に、1.5cm以下の小形のもの、表裏繩文土器から押型文土器に伴って出土する例が多く、本遺跡から出土した小形の石鏃の一部は早期押型文土器に伴う石器であると考えられる。また、26は押型文土器に伴う局部磨製石鏃である。本遺跡ではわずかであるが、押型文土器が出土している。

竪穴住居内の出土例では、SB20、SB21、SB33にまとまって出土しており、特に、SB21とSB33では軒もしくは炉付近から石鏃(2・7・19・21)が出土しており、覆土中に出土した石器とは異なる意味を持っている。すなわち、住居内における石鏃製作もしくは集落内における石鏃の保有の在り方に関わる一資料となると考えられ、注意しておきたい。

#### 石鏃未成品(第167図31~36)

石鏃未成品は黒曜石13点、その他チャート、下呂石、凝灰岩、珪質凝灰岩が各1点である。先端部を作り出している段階のもの(32・34・35)、周辺部に加工を施して形状を整え始めた段階のもの(31・33・36)が認められる。石鏃未成品の認定はあいまいな部分もあるが、胸形遺跡の分析を参考とした(註2)。

黒曜石産地推定分析の結果、黒曜石石鏃分析試料46点中、諏訪星ヶ台群41点、和田鷹山群3点、和田小深沢群1点、推定不可1点であり、石鏃未成品では13点中、諏訪星ヶ台群12点、和田土屋橋北群1点であった。図示した石器では12が和田鷹山群、26が和田小深沢群で、他の黒曜石の石鏃・石鏃未成品は諏訪星ヶ台群である。

#### ② 石鏃(第168図37~41、PL44)

7点出土。黒曜石6点、珪質凝灰岩1点である。棒状の鏃部を持つものは37と40のみである。37は鏃部を明瞭に作り出しているが、磨耗痕は認められない。38は先端部の稜にわずかな磨耗痕が認められる。40は鏃部先端の側縁稜線上に磨耗痕跡が認められる。

黒曜石産地推定分析の結果、分析試料とした5点全てが諏訪星ヶ台群であった。

#### ③ 異形石器(第168図42~45、PL44)

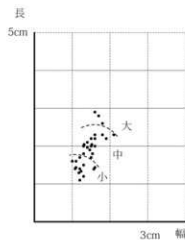
4点出土。黒曜石3点、石英1点である。42と44は欠損しているが、43と同じ形の石器と考えられる。45は剥片状のズリを用いた糸巻き状の形態を示し、正面右側上部の角が著しく摩滅している。二側縁に二次加工が見られるが、側縁は摩滅しており、側縁はつぶれている。黒曜石産地推定分析の結果は、全て諏訪星ヶ台群である。

#### ④ 石匙(第168・169図46~58、PL44)

16点出土。チャート3点、珪質凝灰岩5点、硬砂岩3点、無珪晶質安山岩2点、ホルンフェルス1点、下呂石1点、黒曜石1点である。他の器種に比べ石材のバリエーションが多い。49は刃部裏面に磨耗痕が認められ、肉眼観察で刃縁と平行する線状痕が観察できるが、表面は刃部再生がおこなわれており、線状痕は観察されない。図示していないが、1点の黒曜石産地推定分析の結果は諏訪星ヶ台群である。

#### ⑤ 挟入削器(第170図60・61、PL45)

4点出土。刃部に挟入部があるものを挟入削器とした。いずれも黒曜石で、小形の石器である。形状も定型的ではなく、挟入部の刃部状況も様々ではない。黒曜石産地推定分析の結果は、全て諏訪星ヶ台群で



第160図 石鏃の長幅比

ある。

⑥ 削器 (第170図62～69、PL45)

14点出土。緑辺に連続的な平坦剥離により鋭利な刃部が作り出されているものを削器とした。黒曜石7点、チャート2点、ホルンフェルス2点、凝灰質砂岩1点、珪質凝灰岩1点、結晶凝灰岩1点である。刃部加工は押し剥離による比較的丁寧なもの(62～64・67)、加工であるのか使用痕であるのか判断しがたい微細な剥離のもの(68)、粗い剥片剥離で鋸歯縁を呈するもの(65・66・69)などに区分され、刃部の状態は一様ではない。

63は軟質の珪質凝灰岩であり、遺跡から10kmほど南の阿南町富草地区で採取できる凝灰岩に類似する。69はホルンフェルス製で、主剥離面に粗い調整加工で刃部を作り出し、刃部に対峙する緑辺では、折れ面を打面とした調整加工が見られる。

黒曜石産地推定分析の結果は、64のみが和田鷹山群で、他の6点は諏訪星ヶ台群である。

⑦ 掻器状石器 (第171図70・71、PL45)

6点出土。本遺跡で明確な掻器は出土していない。刃部に微細な剥離により掻器状の刃部ができていたものである。全て黒曜石で、産地推定分析の結果は、6点とも諏訪星ヶ台群である。70は下端部、71は上下と左側縁部に掻器状の刃部がある。

⑧ 不定形石器 (第171図72～74、PL45)

4点出土。二次加工により、何らかの形状の作出が認められる石器を不定形石器とした。いずれも黒曜石である。72～74は初期段階の石鏃未製品であると見ることが可能である。72の1点のみ黒曜石産地推定分析をおこなった。その結果は諏訪星ヶ台群である。

⑨ 二次加工がある剥片 (第171図75～77、PL45)

60点出土。硬砂岩21点、黒曜石18点、ホルンフェルス5点、緑色の凝灰岩4点、細粒砂岩3点、珪質凝灰岩2点、チャート1点、下呂石1点、珪質頁岩1点、石英岩1点、無斑晶質安山岩1点、石材不明2点である。硬砂岩、ホルンフェルス、凝灰岩などの大形の剥片と、黒曜石、チャート、下呂石などの小形の剥片が認められる。二次加工の部位や状態はさまざまであり、特定の形状は作り出していない。77は石刃状の珪質凝灰岩の剥片であり、旧石器時代の石器の可能性が高い。

⑩ 楔形石器 (第171図78～84、PL45)

53点出土。両極打法による剥離が対峙する二辺に認められるものである。黒曜石50点、チャート2点、珪質凝灰岩1点である。ほとんどが長さ1.1cm～2.6cmの間に収まる小形のものであり、長さが3cmを超えるものは82・84など4点のみで、数少ない例である。最大のものは長さ4.0cmのチャート製のものである。黒曜石は産地推定分析をおこなった22点中20点が諏訪星ヶ台群、他は和田鷹山群である。

⑪ 微細な剥離がある剥片 (第171図85～90、PL45)

54点出土。鋭利な緑辺に使用痕と思われる微細な剥離が連続するものである。黒曜石46点、珪質凝灰岩6点、チャート1点、ホルンフェルス1点である。90は5cmを超える黒曜石の石刃状の剥片であり、旧石器時代の石器である可能性がある。

⑫ 打製石斧 (第172図91～第179図149、PL45～48)

465点出土。硬砂岩326点、緑色の凝灰岩128点、ホルンフェルス5点、安山岩1点、輝緑岩1点、火山礫凝灰岩1点、凝灰質砂岩1点、不明2点である。短冊形(91～131・133)が多く見られ、撚形(132・134～137)、分銅形(138・139)は僅かである。このほかに鶴嘴状の先端を有する形状のものも(140・141)も見られる。打製石斧は基本的に剥片を素材として整形されているが、125・127・129のように礫素材の打製石斧も少数見られる。剥片素材のものは片面に自然面を残したものが多い。第162図の通り欠損分類を行い、A類



179点、B1類7点、B2類2点、B3類1点、C1類160点、C2類52点、D類26点、E類1点、F類16点、G類15点である。A類、B類を完形品とすると、完形率は40.6%となる。なお、6個体の接合例を確認した(118・147~149)。3例はSK866・SB13・SB37の同一遺構内での接合で、118はSB26とSB28の接合、148はSK74と遺構外資料(IV C02グリッド)の接合である。149はSB13と遺構外のⅢ I07グリッド一括遺物であるが、出土地点は近接している。118、147、148の刃部には磨耗痕などの使用痕が認められ、使用時の欠損の可能性が高いが、149には磨耗痕は認められず、調整加工による欠損の可能性もある。

磨耗痕はスクリーントーンで示したが、刃部が残る240点中、76点に明確な磨耗痕が認められた。磨耗痕は刃部に見られることが多いが、117・121などのように胴部に認められた例も存在する。93・106・109・115・119・134・142の磨耗部には線状痕が認められる。線状痕は片面のみに顕著に見られる。

なお、被熱によると思われる赤色化したものが29点確認された。赤色化は完形品、欠損品の両方に認められる。図示していないが、黒色の付着物が認められる凝灰岩の完形品1点がSK27から出土した。

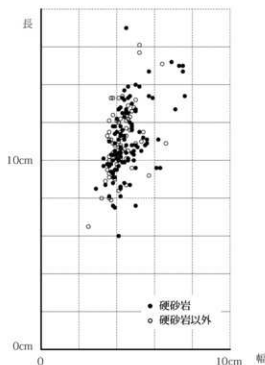
127・129・133などの凝灰岩の資料については、磨耗痕などの使用痕跡が認められず、磨製石斧に凝灰岩が多用されていることから、磨製石斧未成品の可能性もある。125は礫素材であるが、硬砂岩は定型的な磨製石斧には用いられない石材であることから、磨製石斧未成品とは言い難い。礫素材の打製石斧も少数であるが存在すると理解しておきたい。

上記のほかに、仮に、打製石斧未成品?としたものが8点ある。形は整わないが周縁加工が打製石斧に類似したもので、凝灰岩が3点、硬砂岩が5点である。しかし、打製石斧の出土点数に比べ打製石斧調整剥片と考えられる剥片B類、剥片C類の点数が少ないことから、全ての打製石斧を集落内で製作したとは考えられない。未成品の中には、横刃型石器に類似するものも含まれ、明らかに打製石斧未成品といえるものは無い。剥片の観察から、打製石斧製作工程の大半の部分は遺跡外でおこなわれていると考えており、打製石斧未成品については再検討を要する。

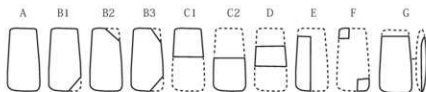
#### ㊦ 横刃型石器(第180図150~第184図177、PL48・49)

324点出土。厚さ1.5cm程度の薄い剥片の縁辺に二次加工を施し、刃部を作り出しているもの、および鋭利な側縁に微細な剝離などの使用痕跡が確認できるものを横刃型石器とした。

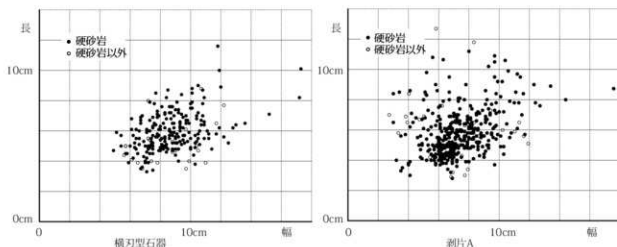
硬砂岩296点、緑色の凝灰岩26点、凝灰質砂岩5点、珪質凝灰岩1点、ホルンフェルス2点、泥岩2点、



第161図 打製石斧の長幅比



第162図 打製石斧の欠損分類



第163図 横刃型石器・剥片A類の長幅比

輝緑岩1点、ヒン岩1点であり、硬砂岩が88.6%を占める。

背面に自然面を残すものが93.7% (313点)あり、さらに、その中で自然面が5割以上残っているものが87.5% (274点)を占める。背面全面が自然面であるものは157点で、横刃型石器の47%を占める。

硬砂岩と凝灰岩の剥片の中に、二次加工や使用痕跡の微細な剝離は確認できないが、鋭い刃部が有り、形状が横刃型石器に類する剥片(剥片A類)が多数存在する。剥片A類は最大長5cm以上の鋭利な縁辺を持つ剥片で、長幅比の分布が横刃型石器と重なる部分が多いことから(第163図)、剥片A類の多くは横刃型石器と同様の機能を有する石器、もしくはその素材と考えられる。剥片A類は555点出土した。硬砂岩513点、緑色の凝灰岩19点、凝灰質砂岩1点である。

横刃型石器と剥片A類の剥片剝離方法は、背面に自然面が多く残されていること、打点に多く見られる剝離破砕痕(171・177など)の状態から「扁平円錐打削技法」によるものと想定される(註3)。

#### ④ 研磨痕がある剥片(第184図178~180, PL50)

7点出土。側縁を中心に研磨痕が認められる。硬砂岩1点、緑色の凝灰岩6点である。178は表裏面に広く研磨が認められるが、179・180は側縁部の両面にのみ研磨が認められる。線状痕は観察されないが、エッジは磨耗しており、特に179・180は擦切り技法に関わる石器と考えられる。179・180はいずれもSB27のピット内から出土している。

図示していないものは、研磨痕がある石器から剝離した剥片2点と、側縁部の両面にのみ研磨が見られるもの1点、硬砂岩の剥片の片面にわずかに研磨が認められるものである。

本遺跡では磨製石斧の製作の痕跡が認められる。磨製石斧の生産遺跡では磨製石斧の研磨に用いられたと考えられる研磨痕がある剥片が出土するが、本遺跡の研磨痕がある剥片には、磨製石斧の仕上げの研磨に関わるようなものは認められない。

#### ⑤ 刃器(第185図181~第186図188, PL50)

29点出土。硬砂岩28点、緑色の凝灰岩1点である。厚手の剥片や分割した礫を素材とし、5cm以下の小形の剥片を連続して剝離しているもの。剥片を素材としたものの中には横刃型石器と類似するものもあるが、横刃型石器よりも刃部の剝離が大きく、2.5cm以上の剥片を連続して剝離しているものを刃器とした。横刃型石器に比べ厚い剥片を素材としている傾向がある。刃器から剝離した剥片を素材とした石器が明確に確認できないことから石核ではなく石器と認定した。以下のように細分した。

1a類:調整加工が片面のみで、一側縁に加工があるもの。(181・182)

1b類：調整加工が片面のみで、二側縁以上に調整加工が及ぶもの（求心的な剥離）。（183～186）

2a類：調整加工が両面に及び、一側縁に加工があるもの。

2b類：調整加工が両面に及び、二側縁以上に調整加工が及ぶもの（求心的な剥離）。（187～188）

1a類が13点、1b類が8点、2a類が1点、2b類が3点、欠損により分類不能が4点であり、片面加工のものが多し、本器種名は当センター一行の鹿田市内の「石器原遺跡他」の報告書（註4）の器種名を踏襲しており、刃器の中には横刃型石器との境界もあいまいな部分があり、小形の貝殻状の剥片を剥離するため

の石核である可能性を100%否定することはできない。今後、器種名、器種の範囲について検討する必要がある。

#### ④ 石器（第187図189～195、PL50）

15点出上。硬砂岩が13点、緑色の凝灰岩が2点である。礫素材で小形の剥片を連続して剥離しているものである。以下のように細分する。刃器の問題点と同様に、石核を含む可能性がある。

1類：片面加工のチャウレット状の石器（189～193）。5点出上。

2類：両面加工のチャウレット状の石器（194）。5点出上。

3類：1類・2類に分類できないもの（195）。5点出上。

⑤ 磨製石斧・磨製石斧未成晶（第188図～第193図、PL51・52）

磨製石斧が38点、磨製石斧未成晶が28点である。

磨製石斧（第188図196～205・207～第190図215）

緑色の凝灰岩24点、輝緑岩6点、凝灰質砂岩1点、閃緑岩2点、粘板岩2点、硬砂岩1点、不明2点で、粘板岩したものは2点とも凝灰岩が被蝕し、変色した可能性がある。形面的な特徴、および調整方法の差異などから次のように分類される。

1類：断面形状が扁平で、全体もしくは部分的に磨

調整を施し仕上げするもの（196～203・205・213）。19点出上。

2類：乳棒状石斧に該当するもの（204・207～210・212・214・215）。16点出上。

3類：刃部のみに剥片剥離・研削調整が見られるもの（211）。1点出上。

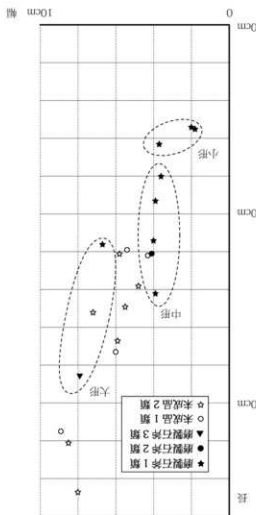
なお、このほか細部片のため分類不能なものが2点存在する。

これらの分類とは別に、大きさにより細ね大形（長さ15cm以上または幅5cm以上）、中形、小形（長さ8cm未満）の三種類に区分できる。なお、大形の認定に幅を考慮したのは、特に大形の磨製石斧ではリダクションによる長さの減少が考えられるためである。

1類は長さ5.5～6.3cm、幅1.8～3.7cmの小形と、長さ8.0～11.6cm、幅3.6～6.7cmの中形が存在する。それぞれ

る。196～199・205は小形のもので、剥片素材に研削を

第164図 磨製石斧関連資料の長短比



施すか剥離面を残すものが多い。197～199・205は側面を研磨で作出する。199は右側面に磨耗痕が観察される。200～203は中形のもので、幅は3.6～4.0cmの範囲に収まる。200・201・213はほぼ全面に研磨を施すのに対して、202・203は刃部以外の研磨が部分的である。202・203のように横長の剥片素材で研磨が部分的なもの、欠損品の場合、打製石斧との見分けがつけにくい。213は刃部の大半を欠損するが、一部に先端が残る。幅広で、リダクションによる長さの減少を考慮すると大形に分類される。

2類は長さ12.1cm、幅4.1cmの中形と、欠損のため長さは不明であるが、幅5.0～6.7cmの大形が存在する。207は中形のもので、欠損品の204も中形であろう。欠損品で長さは不明であるが、208～210・212・214・215は大形である。212は全面に研磨が施されているが、刃部以外では敲打痕が残っている。214・215の上端部には顕著な敲打痕が残る。214は刃部が残り、欠損面に敲打が施されているので敲打への転用品となろう。209・215は表裏面に自然面である平坦面が観察される。210も表裏面ともに自然面であり、側面のみに敲打の後の研磨が観察される。表裏面に自然面を残す特徴的な乳棒状石斧が大形に存在する。

3類は211の1点のみである。扁平な楕円礫を素材とする大形の磨製石斧で、刃部のみに剥片剥離・研磨調整を施し、そのほかの部分は自然面のままである。

#### 磨製石斧未成品 (第188図206・第191図216～第193図234、PL51・52)

緑色の凝灰岩25点、輝緑岩2点、凝灰質砂岩1点である。

これらの中に、以前に表面採集された資料が3点(228・233・234)存在する(註5)。出土地点や出土状況が不明であるため、表面採集資料の3点は以下の分類の対象から除外し、出土品の25点を分析対象とする。

磨製石斧未成品は、3点が剥片素材、19点が礫素材である。3点は素材形状が不明であるが、礫素材の未成品が圧倒的に多い。礫素材は長楕円形のものを選択している。剥片剥離、敲打の状況から以下のように分類した。

1類：周縁部に剥片剥離を行うもの(216・223～227)。10点出土。

2類：剥片剥離と敲打が認められるもの(206・217～222)。11点出土。

3類：敲打による形状整形を行うもの(229～232)。4点出土。

1類は剥片素材の224を除き、扁平な楕円礫を素材とする。打製石斧の未成品・欠損品を含む可能性もあるが、礫素材で石材が磨製石斧の完成品に多い凝灰岩であることから磨製石斧の未成品と考えた。224～226は打製石斧の大きさをはるかに超えており、磨製石斧未成品とするのが妥当であろう。

2類は剥片剥離とともに敲打調整を行うものである。206のみが、薄い横長剥片を素材としており、打製石斧の可能性が残る。側面のみに敲打痕があるもの(218・220・222)と、敲打面が広がり全面に敲打が及ぶもの(219・221)が認められる。

3類は広範囲に敲打調整が行われ、磨製石斧2類(乳棒状石斧)の未成品と考えられる。全て欠損品である。230・232は敲打が表裏面に及ばず平坦な自然面が残り、209・210・215の磨製石斧完成品の特徴と共通する。

さらに、打製石斧に分類した127・133は凝灰岩の礫素材で、加えて133には敲打調整がみられる点から磨製石斧未成品の1・2類に該当する可能性がある。磨製石斧未成品が存在することから、遺跡内の磨製石斧の製作が想定されるが、その詳細については後述する。

なお、地元の方から提供された表採資料である228・233・234は、広範囲に敲打調整が認められるので磨製石斧未成品である。233・234は出土した磨製石斧未成品に比べかなり大形の原石を用いており、分割した剥片を素材とする。剥離面はほぼ平坦面をなし、素材の形状、大きさ、敲打の特徴などが発掘調査による出土品と異なる。また、敲打調整の面には黒色に変色した部分が見られる。

## ⑧ 石核 (第194図235~240・第195図251~258、PL53)

61点出土。黒曜石が34点、硬砂岩17点、ホルンフェルス4点、チャート4点、凝灰岩1点、水晶1点である。黒曜石の石核は、2g~12g程度の小形のもので、237・238は本遺跡の黒曜石の石核で最大級のものである。なお、硬砂岩は長さ10cm前後の扁平な楕円礫であるが、その内8点は石核であるかどうか判断に迷うものである。黒曜石は25点の産地推定分析をおこない、諏訪星ヶ台群が23点、和田鷹山群1点、和田高松沢群1点の分析結果を得た。

## ⑨ 原石 (第194図241~250、PL53)

19点出土。黒曜石16点、水晶1点、チャート1点、硬砂岩1点である。黒曜石は214gの大形品(250)が1点ある他は、3.6g~37.4gの小形品(241・242・244~249)である。最小のものは図示していないが2×1.6×1.2cmほどである。250は11.1×5.6×3.8cmで他の原石と比べ特異であり、稜部に微細な剥離が集中するところがある。自然面と剥離面の区別が不明瞭で、実測図正面図右側面を打面とした剥片剥離がおこなわれている可能性もある。出土位置はSB07範囲内の検出面で、IVa層中の褐色シミ状部分から検出されたが、旧石器時代の遺物である可能性がある。小形の黒曜石の原石は板状のものが多く、表面の風化が著しい所謂ズリである。241・242はSK774、245・247・248はSK1225、246・249はSK1037の土坑からまとめて出土しているのが注意される。

243は水晶の原石である。水晶製の石器は原石と石核のみであり他の器種には見られない石材であり、剥片石器の素材ではないかもしれない。

この他にチャートと硬砂岩の礫があるが、いずれも自然状態では含まれない石材であるため原石と認定した。チャートは11.8×8.6×5.3cmで重さ866.6g、硬砂岩は19.0×16.4×6.0cmの扁平礫で重さ2,190gである。硬砂岩の礫はこの他にも多数出土しているが、横刃型石器や打製石斧の素材剥片を剥離できる扁平礫はあまり見られず、他の硬砂岩は礫として分類したが、石器製作のための原石として持ち込まれたものも含まれている可能性は考慮しておきたい。硬砂岩の礫の詳細は後述する。

なお、黒曜石原石の産地推定分析の結果は、小形品はすべて諏訪星ヶ台群であるが、大形品(250)は未分析である。

## ⑩ 剥片・破片 (第169図59)

剥片2247点、破片192点が出土した。第8表に竪穴住居跡を中心に遺構別の剥片・破片の点数を示した。他の遺構の詳細は付録CDの剥片破片集計表にデータを示した。剥片・破片の石材組成は硬砂岩1323点、黒曜石749点、緑色の凝灰岩213点、チャート55点、ホルンフェルス30点、下呂石18点、珪質凝灰岩16点、頁岩5点、無斑品質安山岩4点、メノウ、輝緑岩、石英、泥岩などその他の石材が26点である。

剥片では硬砂岩と黒曜石が主体を占める。硬砂岩の剥片は打製石斧、横刃型石器、刃器の製作に関わると考えられる。黒曜石の剥片は、石鎌、石錐、異形石器、石匙、削器、挿器状石器、楔形石器などの小型石器の製作に関わると考えられる。次いで多数出土している緑色の凝灰岩の剥片は、打製石斧、横刃型石器、磨製石斧の製作に関わると考えられる。

第169図59は黒曜石の剥片で、6.8×4.8×1.0cmで33.8gの法量で、他の黒曜石の剥片に比べ大形である。本遺跡で2番目に大きな剥片は6.4gであるのでその大きさは特異である。

出土状況では、石器の点数が多い竪穴住居跡に剥片が多く出土する傾向がある。また、SB20では黒曜石破片が98点と他の竪穴住居跡に比べ突出して多く出土しているのが注目される。

硬砂岩と緑色の凝灰岩の剥片は、横刃型石器の素材と考えられるものが多数含まれているため、石器の素材剥片と調整加工で生じた剥片と区分するために、以下のように分類した。

剥片A類：一側縁に鋭利な刃部が有り、最大長が5cmより大きいもの。背面の全面もしくは半分

第8表 竪穴住居内割片集計表

出土場所	石材														合計							
	硬砂岩 割片A	硬砂岩 割片B1	硬砂岩 割片B2	硬砂岩 割片B3	硬砂岩 割片C	凝灰岩 割片A	凝灰岩 割片B1	凝灰岩 割片B2	凝灰岩 割片B3	凝灰岩 割片C	チャート 割片	チャート 砕片	ホルンフェルス 割片	頁岩 割片		黒曜石 割片	黒曜石 砕片	珪質凝灰岩 割片	下呂石 砕片	下呂石 割片	無異曲雲山岩 割片	その他石材 割片
S801	1	1	2	1		1			1						4						1	12
S802	3		1	3					1						4							12
S802orS803	1																					1
S803	11	12	8	6	9	2	1	2							6						1	58
S804	1	2	2							1											1	7
S806	1	1								1												3
S807	1																					1
S808	6	1	2		3	1			1		1				6		1					22
S809	20	4	7	2	12	1	1	2			1				20							70
S810	3	3	2		2	1									1							12
S811	2				1																	3
S812	8	3			4				1	2					8	3					1	30
S813	27	18	14		12	2		8	1	4	4	2	2	18	18	3						109
S813・S814															1							1
S814	11	6	7	2	3		1	1		1			1	6		1				1	1	41
S815	10	3	3	2			1								1							20
S816	12	3	10	2	2			3		2			1	4	1						5	45
S817	7	3	3	3	3	1		1		4		1	1	6								28
S818	6	2		4		1				4		1	11									29
S819	4									1												5
S820	15	6	11	2	3		2	1	1	1	1	1	18	98	1					1	1	160
S821	14	9	8	4			1	3	1	1	1	1	3	1								45
S822	15	1	4	1	1			2														24
S823										1					2							3
S824	3		2	1											3							9
S825	1														2							3
S826	5	8	3		1		3	5	3	2				2								32
S827	4	3	2				1								1					1		12
S828	11	5	5						2						6		1					30
S829	4																					4
S831		2								2					17	2						23
S833	4		3												5							12
S834	20	13	15		8	1		1		1				45	2							106
S835	6		1				1		2					4								14
S836	1		1												3							5
S837	4	2	1	1				1	2	1				10		2						24
S838	11	5	4	1	2										8							31
S839	11	15	2	1	1	1	1	1			3				6							42
S840	18	4	12		1	1		3	3				1	25	1							69
S842	14	6	1	1	1	1	1	1	3	1	3	1		4	1		2	1				41
S843			1					2							11	10						24
S844	1	4	1	2	2				1						9	8	1		1			30
S845		1	3	1											1	5						11
S846	3	4	3	1		1		1	1	1					3	5						23
S847		2	2	2			1						1		4							12
S848	3	2	1			1	1								1							9
S849												1										1
その他の遺構	90	70	72	48	24	10	9	22	18	3	7		8	1	114	10	5	8		1	7	527
遺構外	125	61	71	16	29	10	11	23	5	4	16	1	15	1	160	37	3	4	2	1	1	604
合計	519	275	291	111	127	36	35	82	49	11	53	2	30	5	563	186	16	14	4	4	26	2439

以上が自然面であるものが94%を占め、ほとんど全ての剥片に自然面を有する。横刃形石器もしくはその素材剥片と考えられる。硬砂岩519点、凝灰岩36点出土。

剥片B類：最大長が5cm以下の剥片で、以下の3類に分類される。基本的には調整剥片と考えられるが、小形の横刃型石器の素材も含むと想定される。

B1類：片面全面が自然面である剥片。小形の横刃型石器の素材である可能性がある。硬砂岩275点、凝灰岩35点出土。

B2類：表裏両面に剥離面がある剥片。硬砂岩291点、凝灰岩82点出土。

B3類：表面に複数の細かな剥離痕が認められる剥片。打製石斧などの調整剥片、打製石斧または横刃型石器の刃部小破片を含む。硬砂岩111点、凝灰岩49点出土。

剥片C類：欠損等で剥片の全体形状が想定できずA類、B類に分類できないもの、打面、主剥離面、バルブ等が明瞭でないもの、破砕した破片等を含む。硬砂岩127点、凝灰岩11点出土。

上記の硬砂岩と凝灰岩の類別した剥片数と、これらの石材に関連する、打製石斧、横刃型石器、磨製石斧の点数を比較すると以下のことが推定できる。

- ・打製石斧の製作は遺跡外で行っているが、刃部調整などの部分的な調整加工は遺跡内で行っている。
- ・横刃型石器は素材剥片の形で遺跡に持ち込まれている。
- ・加工痕または使用痕は確認されないが、剥片A類の中には横刃型石器と同様の機能を持つ石器を含んでいる可能性がある。
- ・緑色の凝灰岩の磨製石斧は未成品の存在と考え合わせると、遺跡内で初期段階からの製作をおこなっている。しかし、剥片数は213点と少なく、磨製石斧の製作は大規模なものではない。

㊦ 磨石（第196図259～第197図272、PL54）

68点出土。花崗岩45点、硬砂岩18点、安山岩1点、輝緑岩1点、閃緑岩1点である。以下のように分類した。

1類：側面に平坦な機能面を有するもの。（259～269）

2類：表面または表裏面に滑々の機能面を有するもの（270～272）

3類：明確な機能面は認められないが、大きさ、形状が2類に類似し、磨石に適する形状を持つもの。

1類が25点、2類が11点、3類が32点出土した。欠損品は1類が11点、2類が2点、3類6点と1類の欠損率が高い。1類は二側面に機能面があるものが多いが、1側面のもの、全周に機能面がめぐるものがあり、凹痕を有するものも見られる（267・268）。3類は磨石として機能した道具であるかどうか判断できない「磨石？」とも言うべきものであるが、遺跡内に自然状態である礫ではなく、持ち込まれた礫であるため、使用痕は観察できないがその形状から積極的に磨石と評価した。

㊧ 凹石（第198図273～279、PL54）

28点出土。敲打による凹痕のみが見られるものを凹石とした。硬砂岩16点、花崗岩9点、ホルンフェルス1点、輝緑岩1点、砂岩1点である。欠損品が11点、破片1点ある。279は他に比べ大形で2,680gの重量がある。台石と分類すべきであるかもしれない。この他に大形のものが2点ある。

㊨ 敲石（第199図280～第200図306、PL55）

97点出土。石材は硬砂岩49点、凝灰岩32点、凝灰質砂岩7点、砂岩1点、輝緑岩1点、ホルンフェルス1点、泥岩1点、チャート1点、不明4点である。礫の形状・大きさ、敲打痕および剥離の位置から以下のように分類した。

1類：塊状の礫を素材とし、多面に敲打痕が認められるもの（280～284・286・289）。14点出土。

- 2類：棒状の礫を素材とし、長軸の先端部および側面・表面の一部に敲打痕や剥離が認められるもの(293~297)。16点出土。
- 3類：扁平の楕円礫を素材とし、長軸の先端部もしくは周縁部に敲打痕や剥離が認められるもの(285・287・288・290~292)。23点出土。
- 4類：扁平で小形の楕円礫を素材とし、周辺部に敲打痕や剥離が認められるもの(298~306)。40点出土。このほか、細片のため分類不可能なものが4点存在する。
- 1類は礫の角や稜上に著しい敲打痕が残る。石材は凝灰岩、凝灰質砂岩、輝緑岩で磨製石斧と共通する。また、他の磨製石斧生産遺跡で認められる磨製石斧製作作用の敲石と、形状と敲打の状態が類似しており、磨製石斧の敲打調整に使用された敲石と考えられる。
- 2類は長さ8.0~11.1cm、幅2.8~5.1cmの小形と、長さ13.9~17.0cm、幅4.5~6.2cmの大形があり、293・295は前者に、294・296・297は後者に該当する。石材は硬砂岩と凝灰岩が多く、ほかに凝灰質砂岩、ホルンフェルスが用いられる。293は表面の敲打痕が線状にくぼむ。また、295は長軸の先端部のみに敲打痕が認められる。
- 3類は長さ14.0~14.6cm、幅9.0~10.8cmの大形(非掲載)と、それよりも小形(285・287・288・290~292)が存在する。石材は硬砂岩が多く、ほかに凝灰岩、砂岩が用いられる。小形のは長軸の先端部のみに敲打痕をもつ290~292と、周縁部に敲打痕および剥離をもつ285・287・288に分かれる。大形のは周縁部に敲打痕と剥離をもつもので、このほか不明確ながら分割された可能性がある礫を素材とするものが3点認められる。そのうち2点は周縁部の一部に敲打痕が見られ、もう1点は分割時に生じた稜上に敲打痕と剥離が観察される。
- 4類は小形石器の剥片剥離用ハンマーと推測される。石材は硬砂岩が多く67%を占め、凝灰岩が15%とそれに次ぐ。素材となる楕円礫の長さは4.0~7.5cmで、敲打・剥離が側面の全周に及ぶものと一部のみで見られるものが存在する。この差異は使用頻度の表れであろう。

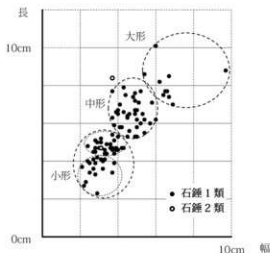
#### ㊦ 石錘(第201図307~第202図335、PL55・56)

107点出土。以下の二種類に大別した。

- 1類：挿入部が打裂のもの(307~333)。105点出土。石材組成は硬砂岩78点、凝灰質砂岩10点、凝灰岩6点、輝緑岩3点、泥岩3点、ホルンフェルス2点、片麻岩1点、不明2点である。
- 2類：擦り切りにより挿入部を作り出す切目石錘。2点出土(334・335)。硬砂岩1点、泥岩1点である。
- 1類は、大きさにバリエーションがあり、便宜的に小形(307~316)、中形(317~329)、大形(330~333)の3種類に分類した(第165図)。小形が57点、中形が37点、大形が11点である。素材礫は楕円形のものが多い。SK566では、中形のもものが7点出土しており、いずれも硬砂岩の扁平な楕円礫を用いている。その他、SB13(5点)、SB26(5点)、SB34(7点)、SB40(4点)などの竪穴住居跡で1類が比較的多く出土している。それぞれの遺構では概ね同じ大きさのものがまとまる傾向にある。SB13、SB34では小形、SB26、SK566では中形の石錘が出土している。

#### ㊦ 砥石(第202図336)

4点出土。大形で、置き砥石と思われるものが2点あ



第165図 石錘の長幅比



り(336)、うち1点は小破片である。この他に、硬砂岩の剥片(16.4×6.0×3.2cm)の剝離面が研磨しているもの1点。花崗岩もしくは閃緑岩の板状礫に溝状の窪みが認められるが、表面の風化が著しく、人工的なものであるかどうか判断できないものが1点ある。

336は砂岩の砥石である。表裏面に研磨面が認められる。表面はわずかな凹面をなすがほぼ平坦で、縦方向の浅い線状痕が認められる。裏面は窪んだ平坦面に研磨面が認められ上縁部に玉砥石状の溝状の研磨部が認められる。全体的に赤褐色に変色しており、表面の剝落がある。下端部は欠損している。本遺跡では磨製石斧の未成品が出土しており、336や研磨痕がある剥片は磨製石斧の研磨に関わる砥石である可能性がある。

㉞ 石皿(第203図337~341、PL56)

17点出土。凹面の平坦な磨面が認められる大形の礫を石皿とした。花崗岩11点、硬砂岩5点、不明1点である。この内5点是小破片で、わずかに磨面が部分的に確認されるものである。形状が把握できる石皿12点について、以下のように分類した。

1類:機能部が皿状に窪んでおり、機能部と縁が認められるもの(339・340)。7点出土。

2類:機能部が平で、縁を持たないもの(337・338・341)。5点出土。

表面の手触りで磨面が区別できる部分をスクリーントーンで示した。337と341は中央部が特に顕著に滑らかな面をなしている。341は両面に機能面が認められるが、他は片面のみに機能面がある。340は完形品、他はいずれも欠損品または破片である。

1点を除き全て遺構内である。分類可能な12点は全て遺構内より出土しており、竪穴住居跡からは5点、土坑から7点出土した。この内、SB13とSB40からは各2点、SK238からは3点出土している。

㉟ 台石(第203図342~344、PL56)

19点出土。敲打の痕跡が認められる大形の礫を台石とした。花崗岩9点、硬砂岩8点、緑色の凝灰岩1点である。完形品8点、欠損品9点、破片2点である。敲打痕の状態により3細分する。

1類:凹痕がないもの。9点出土。(344)

2類:顕著な凹痕があるもの。1点出土。(342)

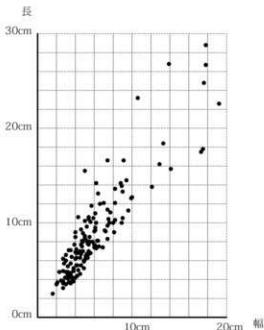
3類:上記以外で敲打痕が明瞭でないもの。表面の風化などにより敲打痕が認められないが、石材、形状、大きさが1類・2類に類似するものを含む。

10点出土(343)

342は片面に顕著な凹痕が認められ、部分的に赤色化している。343は集中した敲打痕は確認されないが、片面中央部に部分的に敲打痕と思われるものが認められる。344は片面の凹面に浅い敲打痕が広範囲に認められ、部分的に赤色化している。なお、図示していないが、緑色凝灰岩の扁平礫の片面が研磨され線状痕が認められるものがSK925で1点出土しているが、石皿とは石材、研磨面の状態が異なり台石とした。

㊱ 礫

硬砂岩、緑色岩、花崗岩の円礫が多量に出土している。これらは石器石材に用いられており、特に硬砂岩と緑色岩は自然状態では遺跡内に存在しない礫であることが



第166図 硬砂岩礫の長幅比

ら、天竜川の河原より持ち込まれたものと判断した(註6)。使用痕跡または剥片剥離が認められないものを礫とした。出土したすべての礫を持ち帰っていないので、遺跡に残された全体量は正確でないが、硬砂岩は410点(完形115点、欠損259点)で約7割が遺構内出土。緑色の凝灰岩・輝緑岩は34点(完形33点、欠損1点)で約4割が遺構内出土。花崗岩は64点(全て完形)で約9割が遺構内出土である。それぞれの総重量は硬砂岩145.4kg、凝灰岩・輝緑岩89.7kg、花崗岩67.0kgである。

硬砂岩の礫について、表面の赤色化と黒色付着物の有無を観察し、完形品のみ大きさを計測した(第166図)。2.5×1.6×1.6cmのものから、最大で28.8×17.8×7.5cmの礫が持ち込まれている。10cm以下の扁平楕円または扁平円礫が多い。赤色化した硬砂岩が100点確認され、その内84点は欠損している。また、10点の礫に黒色の付着物が確認された。赤色化や黒色付着物は被熱による現象と考えられる。赤色化は花崗岩などにも少数認められる。

### (3) 黒曜石産地推定分析について

蛍光X線分析による黒曜石の産地推定は、原則として加工が認められる石器、石核の全点と、SB13、SB34の剥片を対象とし、219点の黒曜石の分析を行い、第9表の結果を得た。分析は、独立行政法人国立高等専門学校機構沼津工業高等専門学校の望月明彦教授の受託研究として実施した。諏訪星ヶ台群が203点と主体を占め、次に多いのが和田鷹山群の9点であり、和田高松沢群、和田小深沢群、和田土屋橋西群、和田土屋橋北群が各1点確認された。諏訪星ヶ台群が主体を占め、和田鷹山群が少量混じっている状況は、縄文時代中期の下り松遺跡、竹佐中原遺跡の分析結果と一致する。SB13とSB34はそれぞれ中期前半と中期後半の住居跡である。住居跡毎に産地を概観すると、SB13では楔形石器と削器が和田鷹山群で、他は全て諏訪星ヶ台群である。SB34では剥片2点が和田鷹山群と和田土屋橋西群であり、他は諏訪星ヶ台群である。このように、一定の時期にある程度限定できる資料においても諏訪星ヶ台群以外の産地のものが混在している。諏訪星ヶ台群を主体に少数の産地の異なる石器もしくは原石が本遺跡に入ってくる経緯はどのようなものであったのか、興味深い。早期の局部磨製石鏃(第167図26)が和田小深沢群であり、他の石鏃と異なる産地を示した。形態が特徴的で時期が限定できる石器の産地資料を蓄積していくことも、石器の流通を考える上に重要な作業であろう。

望月教授の報告データ(ファイル名「川路大明神原遺跡推定結果」)と産地推定分析結果に石器の属性を付加した「黒曜石産地分析台帳」は付録CDに収録した。

### (4) 磨製石斧の製作について

本遺跡出土の蔽石1類と砥石の一部、磨製石斧未成品は磨製石斧の製作に関連する石器で、製作途上に生じた可能性がある緑色凝灰岩の剥片類も存在する。そうした一連の資料から、本遺跡内では磨製石斧が製作されていたことは確実であり、それについて若干の考察を行う。

#### ① 製作時期

第10表は磨製石斧製作関連資料の、出土状況を示したものである(註7)。磨製石斧の完成品は前期

第9表 黒曜石産地推定結果集計表

器種	諏訪星ヶ台群	和田鷹山群	和田高松沢群	和田小深沢群	和田土屋橋西群	和田土屋橋北群	推定不可	合計
楕先形尖頭器	1							1
石鏃	41	3		1				46
石鏃未成品	12					1		13
石鏃	5							5
異形石器	3							3
石匙	1							1
挟入削器								4
削器	4	1						5
接縁状石器	6							6
不定形石器	1							1
二次加工がある剥片	18	1						19
楔形石器	20	2					1	23
異様な剥離がある剥片	2							2
石核	22	1	1					24
原石	15							15
剥片	48	1			1			51
合計	203	9	1	1	1	1	3	219

末葉、中期初頭・前葉・中葉末～後葉の遺構に認められ、未成品・敲石1類は中期以降の遺構に限られる。中期初頭は量的には少数で、SK91・367から未成品が、SK862からは敲石1類が各1点出土した(実測図非掲載)。中期前葉と後葉は資料が多く、例えば前葉のSB13では磨製石斧未成品(218)と敲石1類(281～283)が、中葉末～後葉のSB17では磨製石斧未成品(226)と完成品(214)が、後葉のSB40では磨製石斧未成品(216・224ほか1点)と完成品(200・209ほか4点)が出土した。未成品の存在、さらには完成品・未成品・敲石1類・凝灰岩の調整剥片が揃う点を考慮すれば、本遺跡で磨製石斧が製作された時期は中期初頭・前葉・中葉末～後葉と考えられる。中期初頭は資料が小数であり、多少の不明確さは残る。また、前期末葉は完成品1点(211)が出土したのみで、後述するとおり中期以降の磨製石斧とは特徴が異なる。

#### ② 中期における磨製石斧の製作工程

本遺跡の磨製石斧は扁平で全体もしくは部分的に研磨調整を施し仕上げる1類、乳棒状石斧の2類、刃部を作出するためのみに剥片剥離と研磨を施す3類に分類される。3類は前期末葉の資料(211)なので、ここでは除外して考える。磨製石斧の製作には完成品と未成品の状況から、礫の採取→剥片剥離調整→敲打調整→研磨調整といった工程が想定できる。1類は顕著な敲打痕が観察されず、剥片剥離調整から直接研磨調整に移行したと推測される。礫の採取

検出された中期前葉・中葉末～後葉の住居跡群(集落)は天竜川に近く、直線距離にして約400m、比高差70m～73mの台地上に位置する。磨製石斧や敲石1類の素材となる緑色凝灰岩・輝緑岩は、天竜川の河原で入手でき、自然状態では遺跡内に存在し得ない礫である。従って、素材の礫は天竜川の河原で適切なものが選択・採取され、集落へと持ち込まれた可能性が高い。中形・大形の磨製石斧は長楕円形の礫を素材としており、そうしたものが選択・採取されたと思われる。また、少数だが剥片素材のものもあり(202・203・224)、その素材となるような大きさの剥片が集落では出土していないので、河原で礫の粗削りなどを行い、素材剥片を獲得していた状況も併せて推測される。素材が入手し易いという意味では、本遺跡は磨製石斧の製作遺跡として絶好の立地条件を備えている。

#### 剥片剥離調整・敲打調整

集落へ持ち込まれた礫と素材剥片は、剥片剥離調整および敲打調整で形状が整えられる。剥片剥離調整段階の未成品は、長楕円形礫(216・225～227)や素材剥片(224)に剥片剥離のみが観察される1類が該当しよう。出土した調整剥片の中に凝灰岩が認められ、接合作業を実施していないので不明確だが、その中に磨製石斧の剥片剥離調整段階に生じたものが含まれている可能性がある。また、中期初頭の未成品も1類に分類され、断面形状が扁平で凝灰岩製の長楕円形礫に剥片剥離のみを施すものである。

敲打調整には敲石1類(280～284・286・289)が使用されたと考えられる。他の磨製石斧の生産遺跡では、磨製石斧の石材と敲打調整に用いる敲石石材の石材が同じである場合が多い。本遺跡の敲石1類も磨製石

第10表 磨製石斧関連資料

遺構名	時期	磨製石斧 未成品	敲石1類	礫	凝灰岩剥片
SB01	中前		2		2
SB02	中前	1			1
SB03	中前	1			5
SB08	後2	1			2
SB09	後2		1	2	4
SB10	不明	2			1
SB12	中末～後1	1			1
SB13	中前		1	3	11
SB16	中末～後1	1			3
SB17	中末～後1	1	1		2
SB20	中末～後1			1	3
SB21	中末～後1	1	1	1	4
SB22	中末～後1	1			2
SB24	中末～後1	1			0
SB26	中末～後1	1			1
SB27	中末～後1	1			1
SB28	中末～後1	1			2
SB34	後2	2	2		2
SB37	中前		1		3
SB39	中末～後1	1			3
SB40	後2	6	3		7
SB42	中末～後1	2			9
SB46	後1～2				3
SK91	中初	1			0
SK163	中末～後1			1	0
SK192	不明			1	0
SK200	不明	1			0
SK238	中末～後1	1	1		0
SK367	中初?	1			1
SK800	後	1			0
SK813	不明	1			0
SK848	後1～2	2			0
SK862	中初			1	2
SK1049	前末	1			1
SK1159	不明		1		0
SK1197	不明				1
遺構外		11	7	3	2
合計		38	25	14	4
					139

斧と石材が一致し、敲打痕が多面にわたり礫の稜が潰れるなど、使い込まれたものが多い。未成品の2類(217~222)は剥片剥離と敲打痕が観察され、剥片剥離調整を経た敲打調整段階のものとなることができよう。未成品の3類(228~232)は敲打調整段階の乳棒状石斧未成品である。広範囲に敲打を施すが全て欠損品で、敲打調整段階の破損品と考えられる。大形のもの(230・232)は側面に入念な敲打を施し、表裏面は一部に礫の自然面を残す。自然面は完成品(209・210・215)にも観察され、敲打調整の特徴の1つといえる。

#### 研磨調整

研磨調整は扁平な磨製石斧の表裏面と側面を研磨したり、刃部を作出する仕上げの段階でなされる。完成品の1類で剥片素材の中形とした磨製石斧(202・203)は、刃部のほかは部分的な研磨に止まる。本遺跡で出土した砥石は4点を数え、そのうち2点は大形の置き砥石である。掲載した1点(336)は砂岩製の置き砥石で溝状の研磨部が観察できる。磨製石斧の生産遺跡である神奈川県尾崎遺跡(神奈川県教委1977)では、本遺跡の砥石1類に該当するハンマーストーンに敲打痕と研磨痕が観察され、剥片剥離調整・敲打調整・軽い研磨調整を同一のハンマーストーンで行った可能性が指摘されている。しかし、本遺跡では砥石1類に研磨痕が認められるものは存在しない。

#### ③ 本遺跡における磨製石斧生産の評価

本遺跡で磨製石斧の製作が開始された時期について、未成品の存在から中期初頭の可能性を示唆した。中期初頭に製作が開始されたとすれば、前期末葉までは少数の土坑で構成されていた本遺跡に、小規模ながら集落が形成された時期と一致する。そして、集落規模が広がる中期前葉・後葉において磨製石斧の製作も本格化する傾向が見受けられる。しかし、磨製石斧の製作関連資料は石器の組成上多いとはいえず、組成率は磨製石斧完成品で2.3%、未成品で1.5%、砥石1類(0.8%)と砥石(0.2%)に至っては1%以下である。また、磨製石斧製作に関わる凝灰岩の剥片B類は166点でこの中には打製石斧の調整剥片も含まれる。この状況は製作された磨製石斧がほかの遺跡へ供給された可能性は否定できないにせよ、主に集落内で消費された程度の製作点数であったことを示しているようか。また、冒頭で触れた前期末葉の磨製石斧(211)は中期のものと同素材の点では共通し、剥片剥離調整・研磨調整が刃部を作出するためのみに施される点が異なる。この違いは時間的な製作工程の差異とともに、ほかで製作された完成品が本遺跡に持ち込まれた可能性を含んでいる。

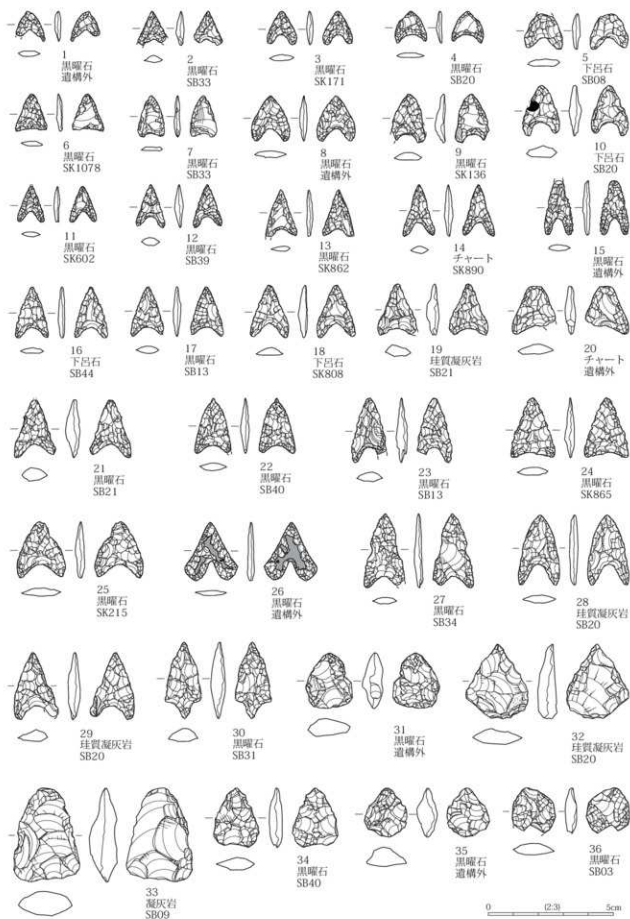
#### ④ 周辺遺跡の様相

磨製石斧の製作遺跡は竜丘地区の城陸遺跡(註8)、上郷黒田地区の増田遺跡(註9)、松尾地区の松尾城遺跡(註10)など本遺跡以外にも認められ、未成品や砥石1類に該当するものが出土している。城陸遺跡は中期前葉の例で、本遺跡と時期が一致し、遺跡の位置が天竜川から直線距離にして約500mと近く本遺跡と同様の立地条件を備える。また、増田遺跡は天竜川から約2.5kmと若干離れているが、中期中葉・後葉の資料が見受けられる。松尾城遺跡は天竜川から約1kmの距離にあり、中期中葉の資料が出土している。増田遺跡と松尾城遺跡が目玉されるのは、本遺跡では集落が希薄となる中期中葉の下伊那型磨製土器の時期に所属するものが出土している点で、これにより飯田地域には中期をとおして磨製石斧の製作遺跡が存在したとすることができる。こうした遺跡に共通するのは磨製石斧製作関連資料の出土量からみて、ほかの遺跡へ供給するよう量の磨製石斧を製作していないと思われる点で、多量の資料が出土した富山県境A遺跡(註11)や神奈川県尾崎遺跡(註12)など、他遺跡への供給を前提とする生産遺跡とは明らかに性格が異なる。一方、当センターが報告した山本地区の中期後葉に所属する下り松遺跡(註13)のように、磨製石斧の完成品は出土しているが、製作した明確な痕跡が見当たらない遺跡も存在する。今後はより多くの遺跡で立地条件や磨製石斧製作関連資料を検討しその成果を積み上げ、遺跡間で比較することができ

れば、飯田地域の縄文中期における磨製石斧生産の実態に迫ることができよう。

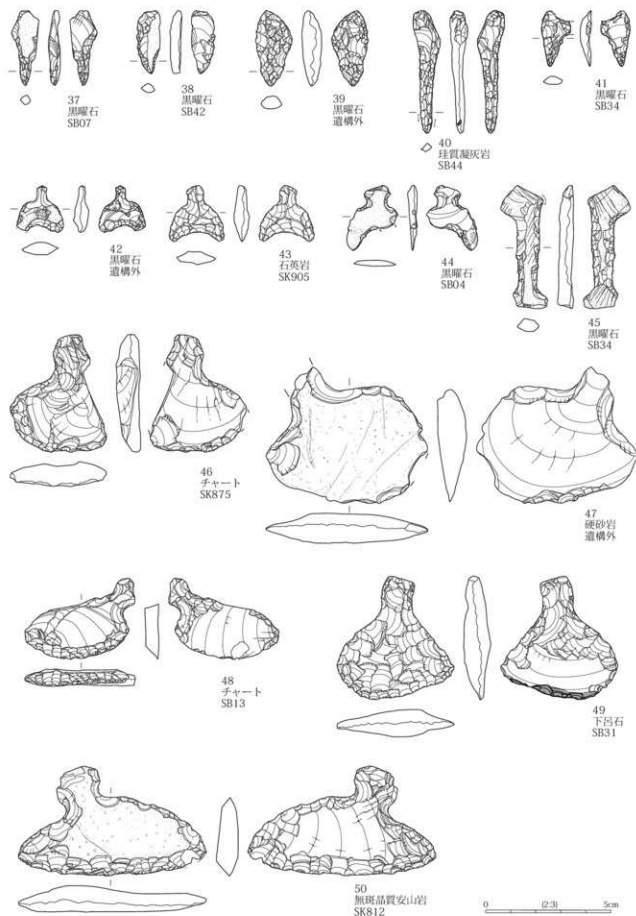
註

- 1) 石材分類は信州大学理学部原山智教授の指導により調査研究員鶴田典昭がおこなった。
- 2) 長野県埋蔵文化財センター2007『県道諏訪茅野線建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書 駒形遺跡』
- 3) 『扁平円礫打割技法』は『曾利』（富士見町教育委員会1978）で小林公明氏等が命名した技法で、扁平な緑礫の側縁部を台石にたたきつけて、ハルプが発達しない平坦な板状の剥片を得る技法である。「扁平円礫打割技法」による剥離をおこなったときの、剥片に付いて小林氏は以下のように述べている。「台石に打ちつけられた衝撃点には小さな破砕が入る。そこには恰も撃で削ったごとく扇形に消し飛んで、裂片を合わせてみると紡錘形の隙間ができる。おそらく、この割り方に特有な破砕痕であろう。ただ、力の加減や振りおろす角度によっては明確に判別できないこともある。」（小林公明1991『新石器時代の石器の製作技術』『季刊考古学』第35号）。本報告ではこの破砕痕を「剥離破砕痕」と称する。
- 4) 『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書80 中央自動車道西宮線飯田南ジャンクション埋蔵文化財発掘調査報告書 石子原遺跡 山本西平遺跡 辻原遺跡 赤羽原遺跡』（長野県埋蔵文化財センター2007）では、同じ縄文時代早期の押型文土器を主体とした『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書60 山の神遺跡』（長野県埋蔵文化財センター2003）に従って、従来礫器、石核と呼ばれていたものを刃器と分類することを踏襲した。石子原遺跡の報告では器種分類の問題点についても指摘しているが、同時期の石器群を比較するため「刃器」の器種分類を用いた。
- 5) 3点の磨製石斧未成品は、2004年（平成16年）年4月に、飯田市川路在住の中島氏から、川路大明神原遺跡採集資料として寄託されたものである。採集した年月日、詳細な位置は不明である。
- 6) 地表下5mほどの基盤層には天竜川礫床があるが、基盤層の礫が包含層に混じったとは考えられない。
- 7) 凝灰岩剥片は磨製石斧製作に関連する資料（磨製石斧・磨製石斧未成品・最石1類）が出土した遺構と遺構外の出土点数のみを表示している。
- 8) 飯田市教育委員会2003『城跡遺跡』
- 9) 上郷町教育委員会1989『ツルサシ遺跡 ミカド遺跡 増田遺跡 垣外遺跡』
- 10) 飯田市教育委員会2005『松尾城遺跡』。報告書では磨製石斧未成品の報告は無いが、緑色岩敲打器とされるものが最石1類と同じものと考えられ、写真図版には磨製石斧未成品と思われるものが認められる。実見していないので確認はできないが、磨製石斧製作に関わる資料の候補としてあげておきたい。
- 11) 富山県教育委員会1990『北陸自動車道遺跡調査報告一朝日町編5一 境A遺跡石器編』
- 12) 神奈川県教育委員会1977『神奈川県埋蔵文化財調査報告13 尾崎遺跡』
- 13) 長野県埋蔵文化財センター2009『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書86 国道474号（飯森道路）埋蔵文化財発掘調査報告書3』

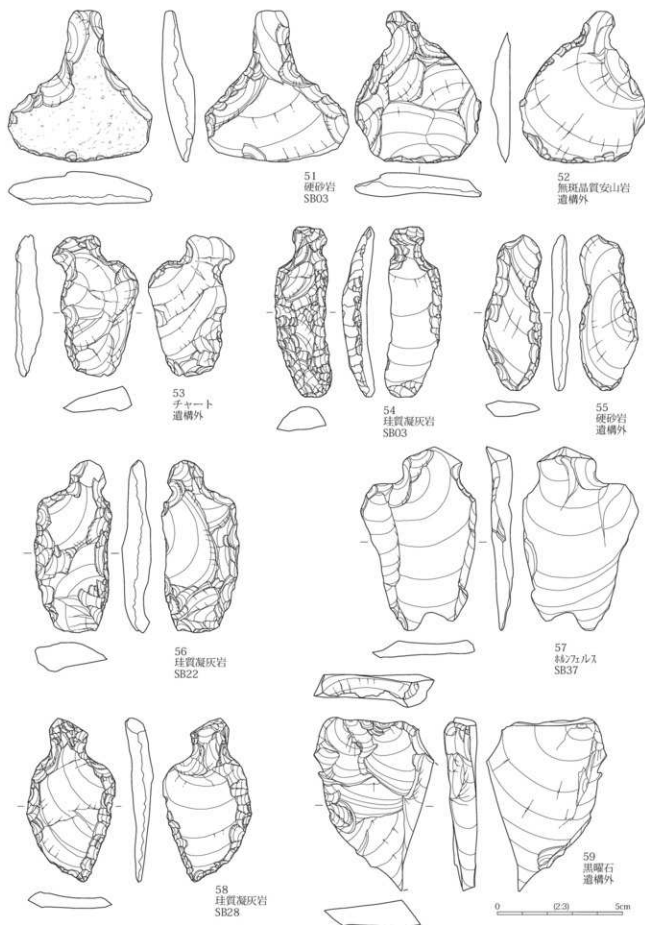


第167図 石器実測図(1)

第4章 遺構と遺物



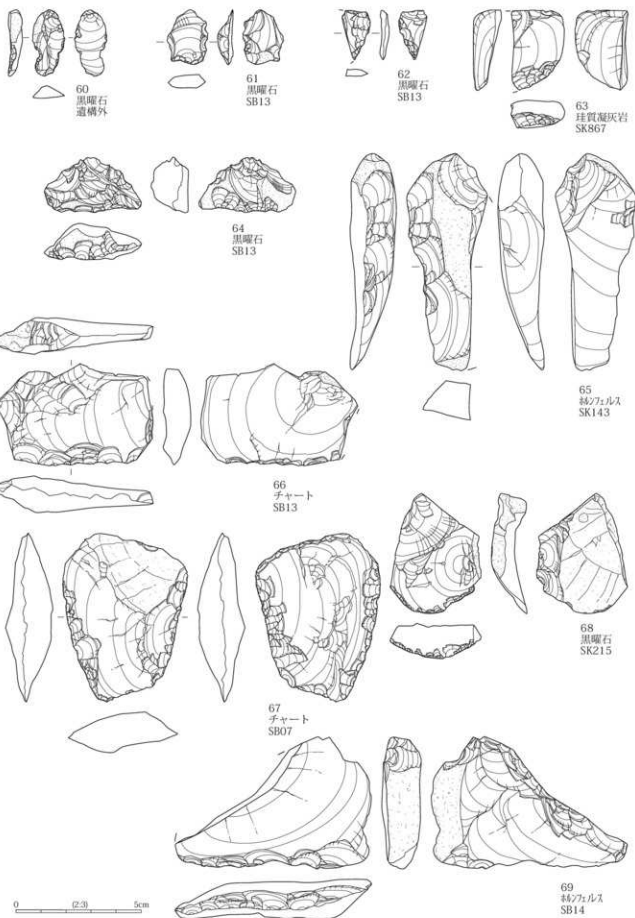
第168図 石器実測図(2)



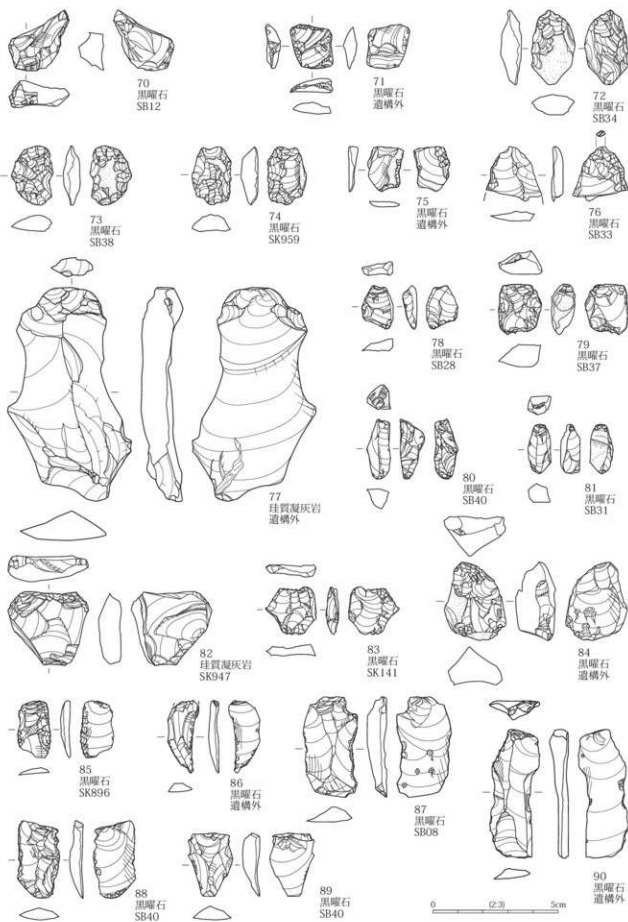
第169図 石器実測図(3)



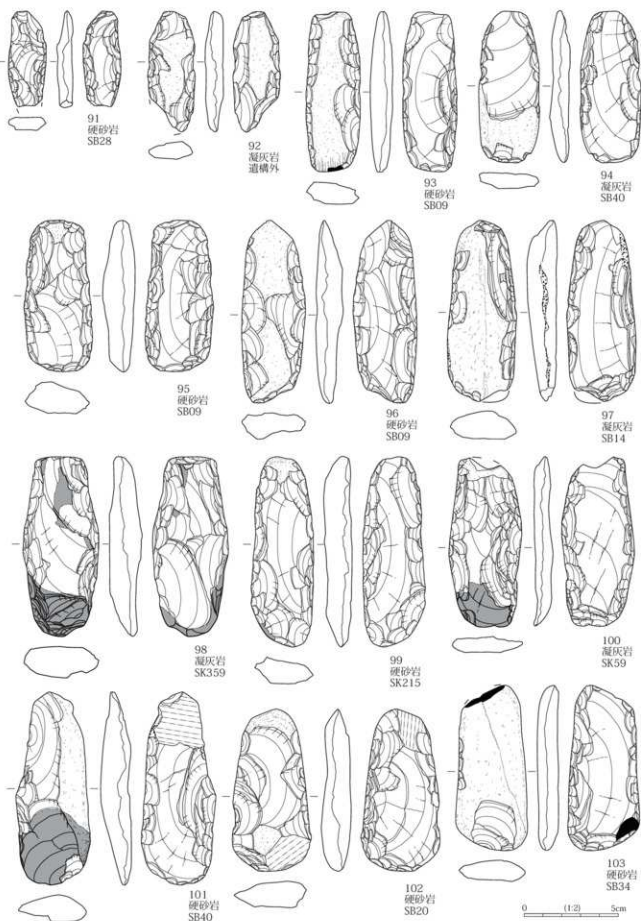
第4章 遺構と遺物



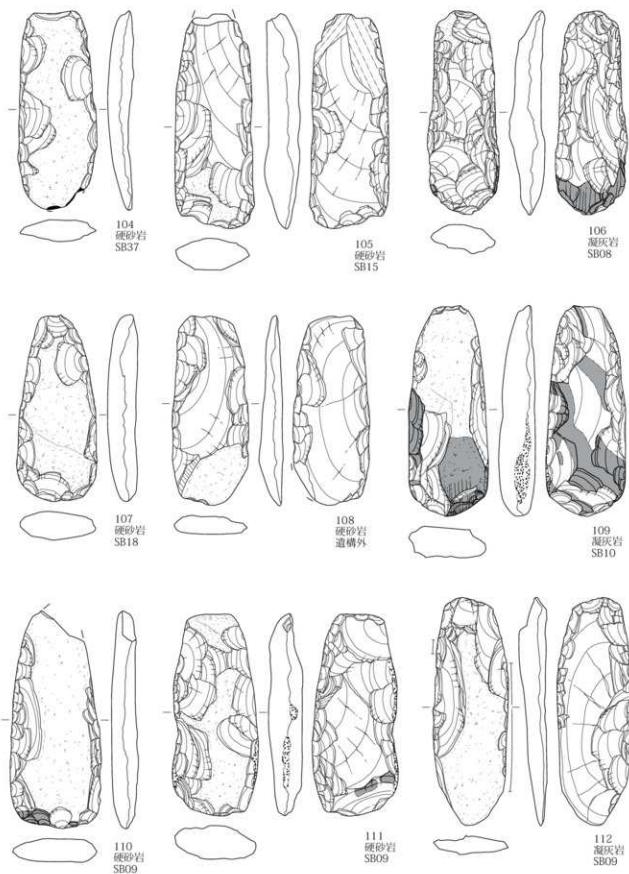
第170図 石器実測図(4)



第171図 石器実測図(5)

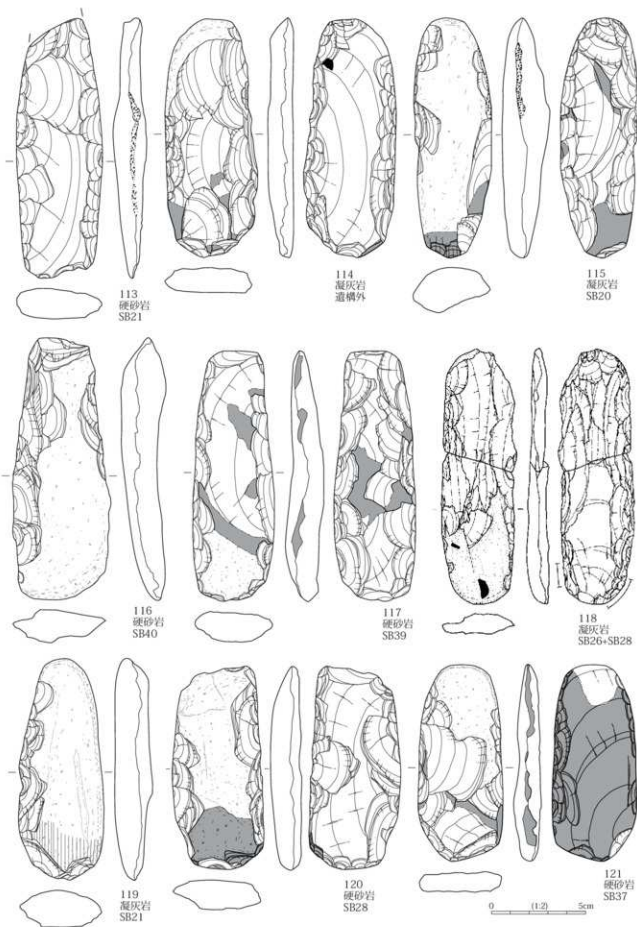


第172図 石器実測図(6)

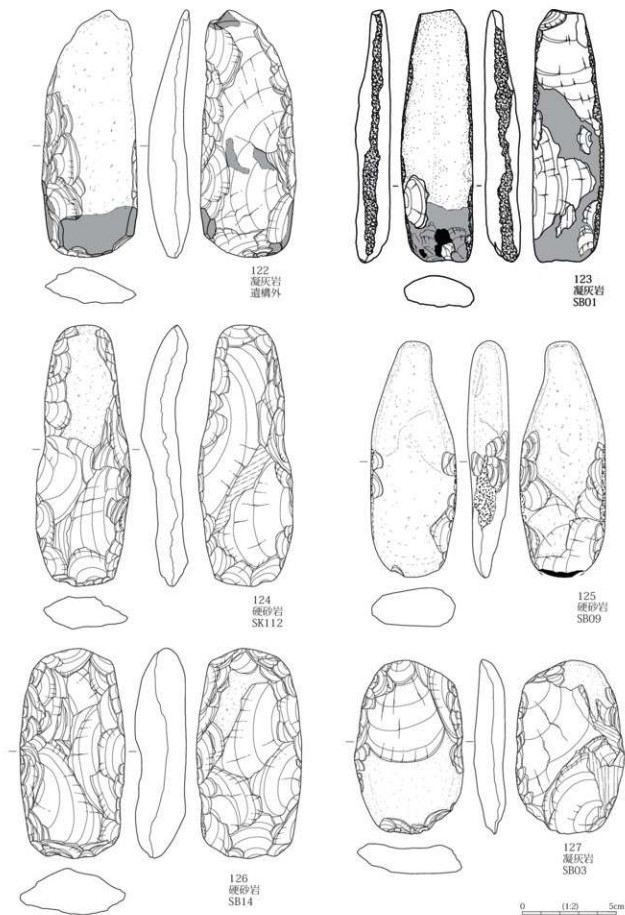


0 11.2 5cm

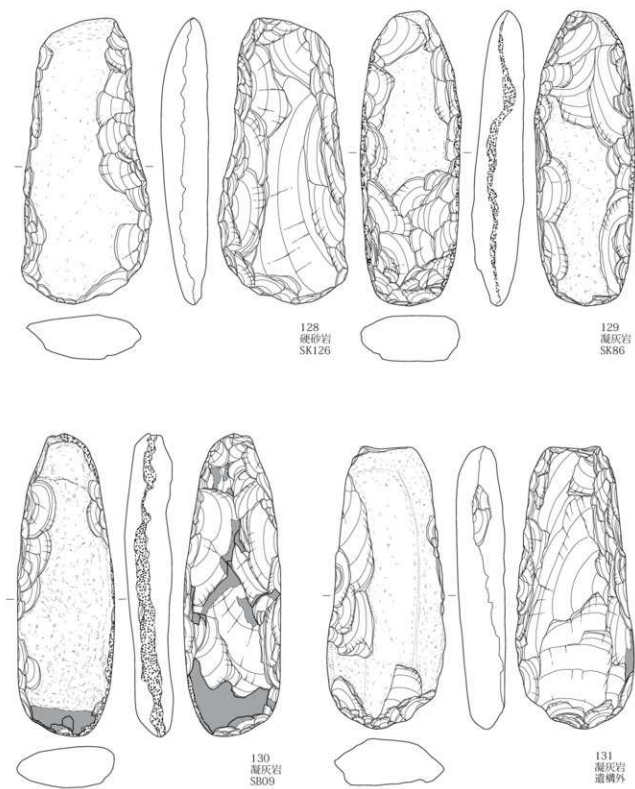
第173図 石器実測図(7)



第174図 石器実測図(8)

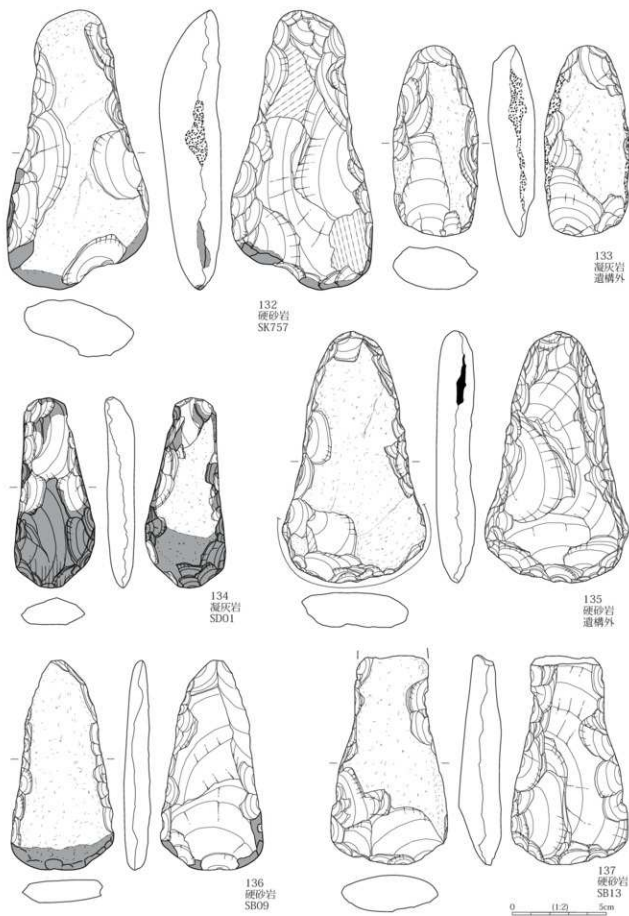


第175図 石器実測図(9)



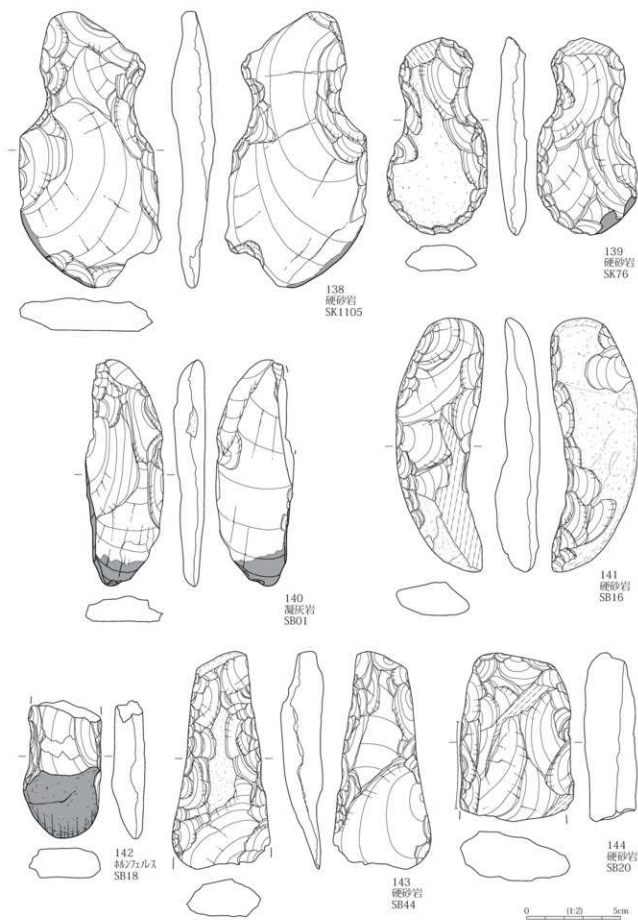
0 (1.2) 5cm

第176図 石器実測図(10)

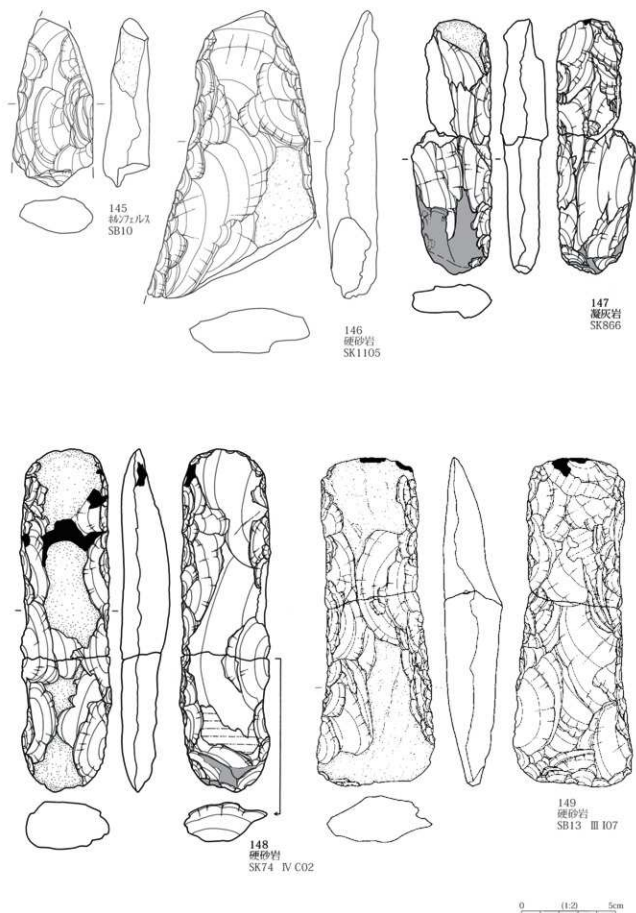


第177図 石器実測図(11)

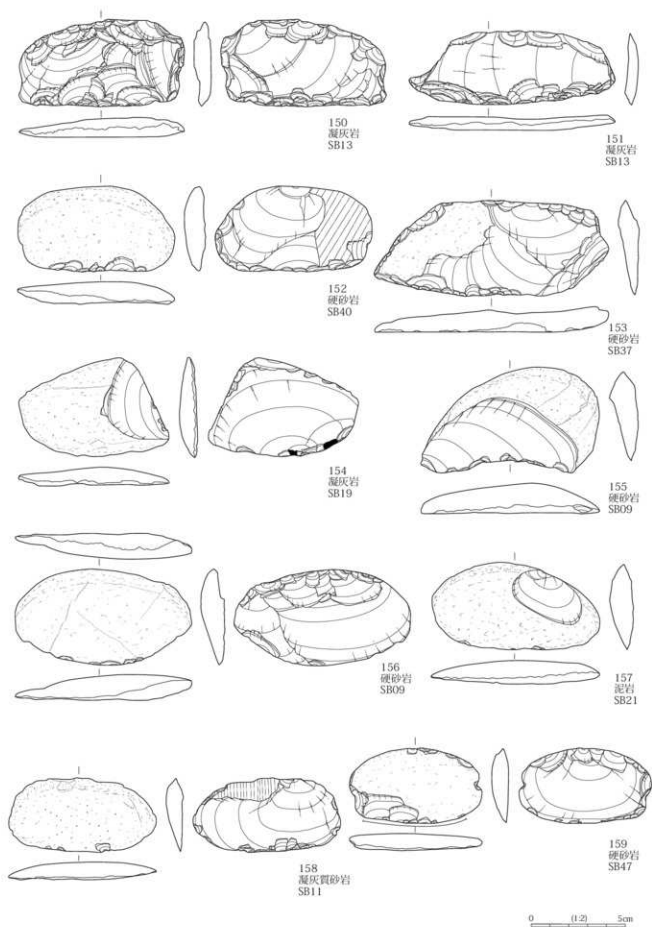




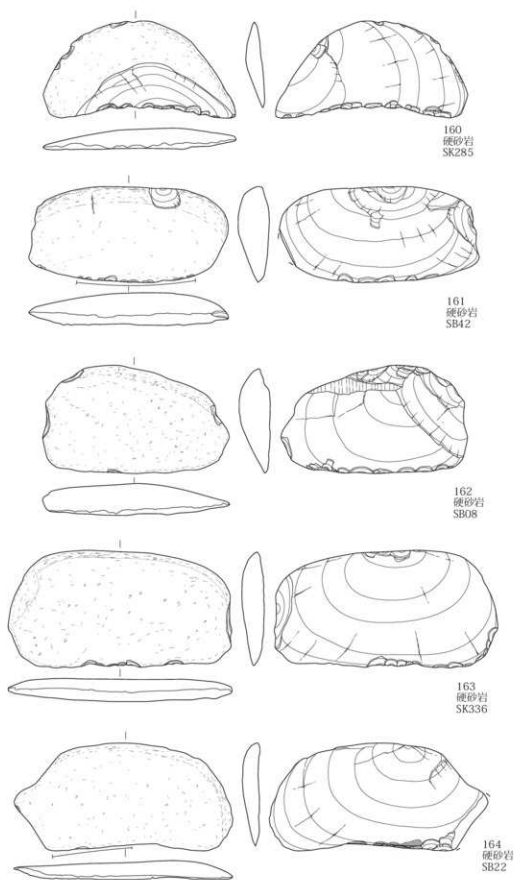
第178図 石器実測図(12)



第179図 石器実測図 (13)

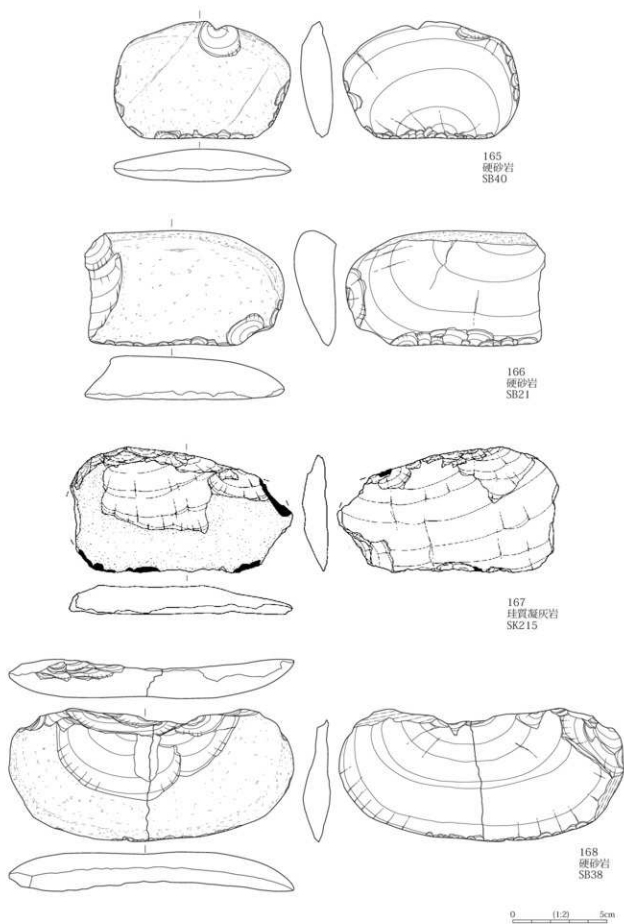


第180図 石器実測図 (14)

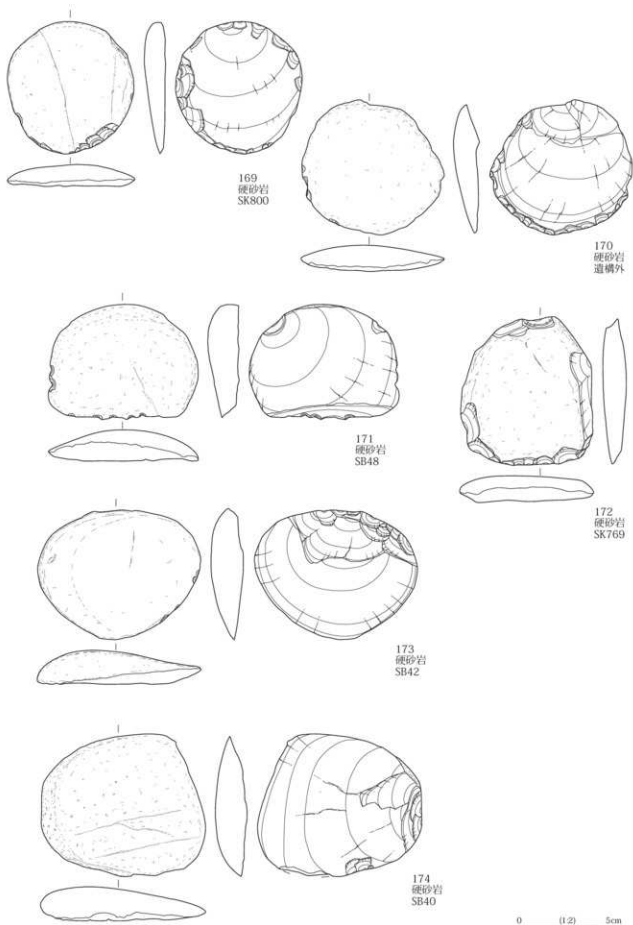


0 (1:2) 5cm

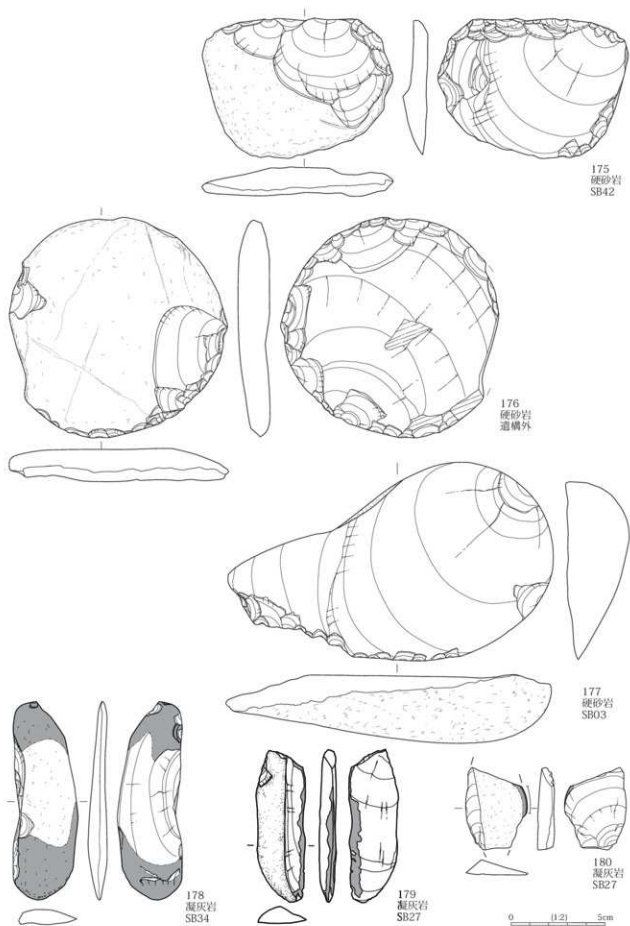
第181図 石器実測図 (15)



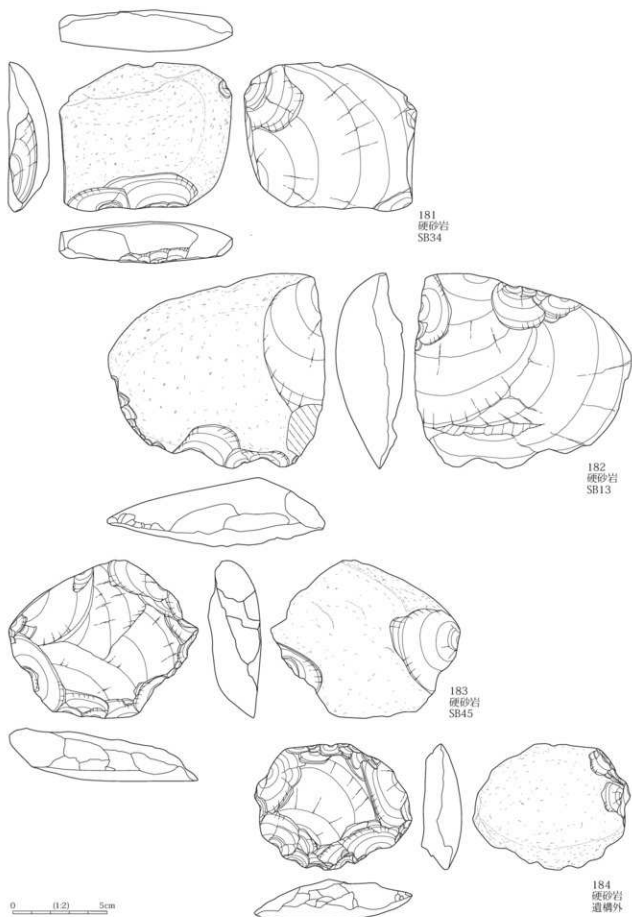
第182図 石器実測図(16)



第183図 石器実測図(17)

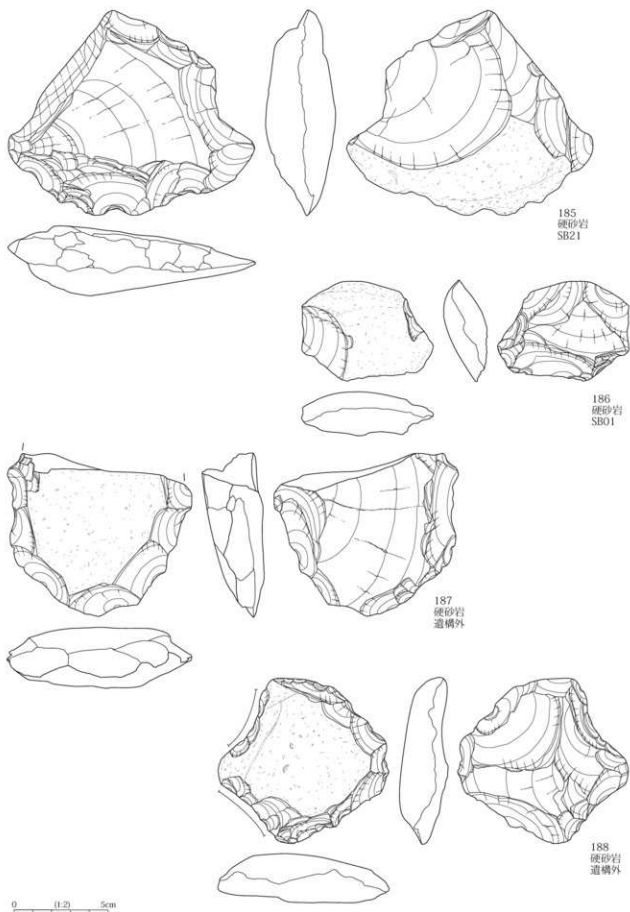


第184図 石器実測図(18)

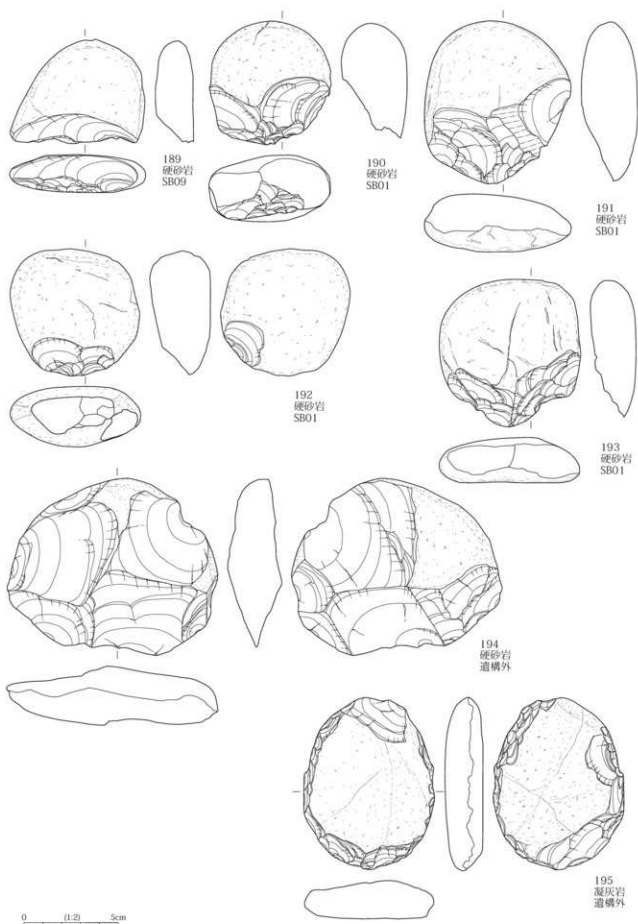


第185図 石器実測図(19)



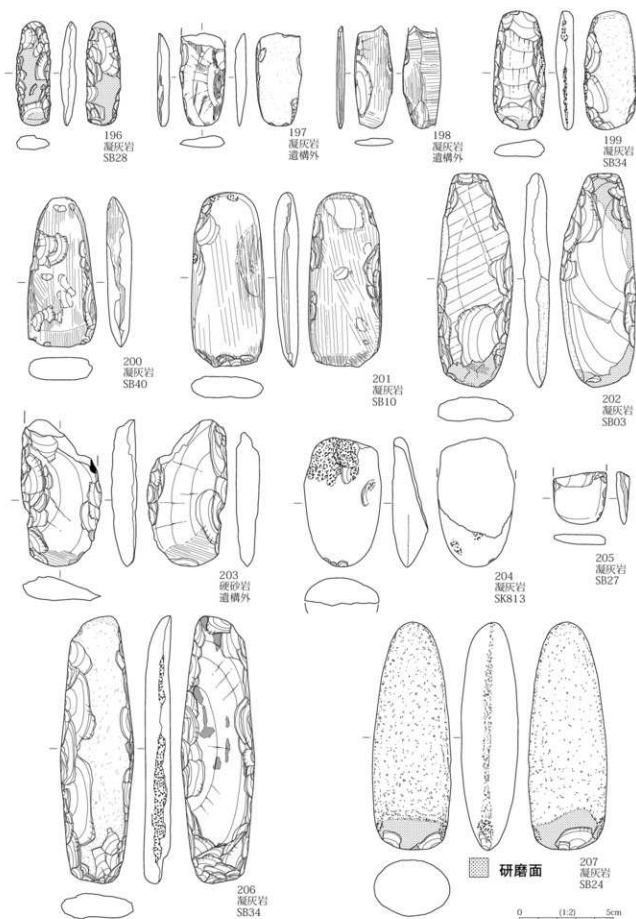


第186図 石器実測図(20)

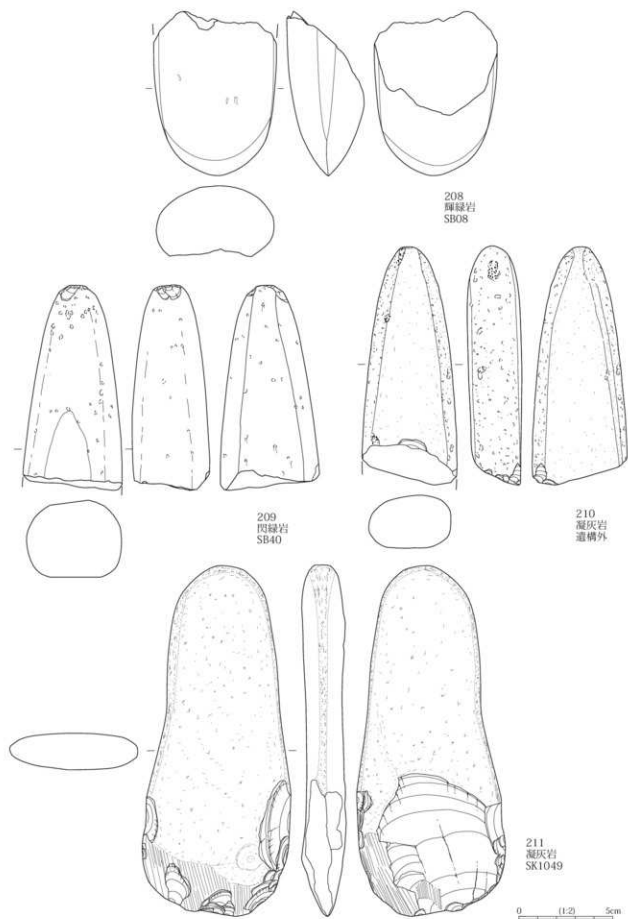


第187図 石器実測図 (21)

第4章 遺構と遺物

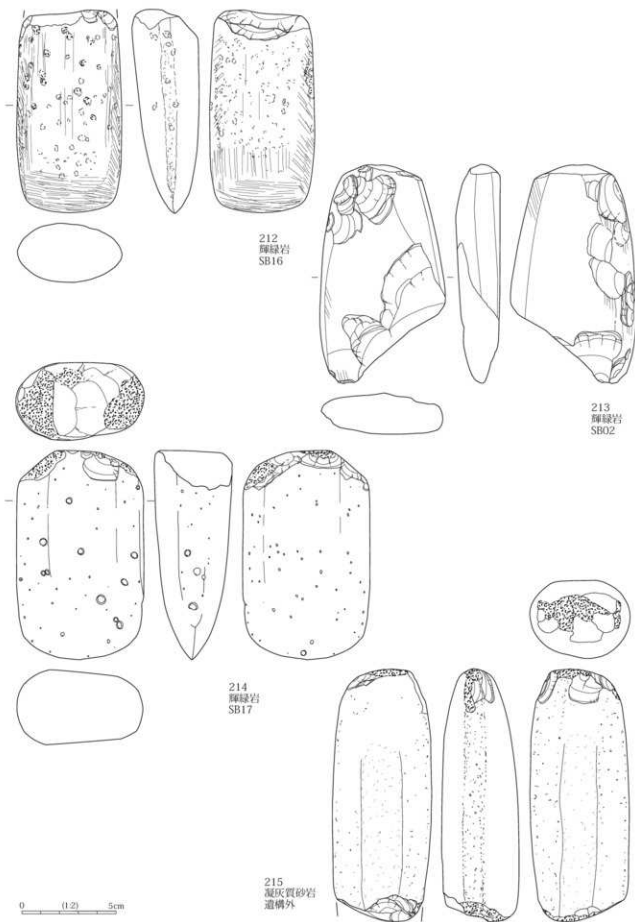


第188図 石器実測図 (22)

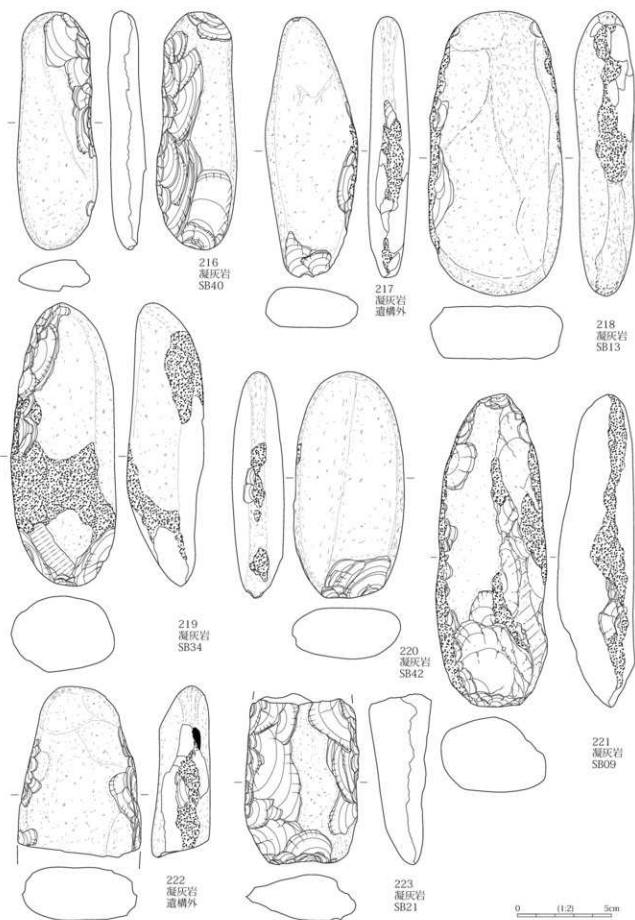


第189図 石器実測図 (23)

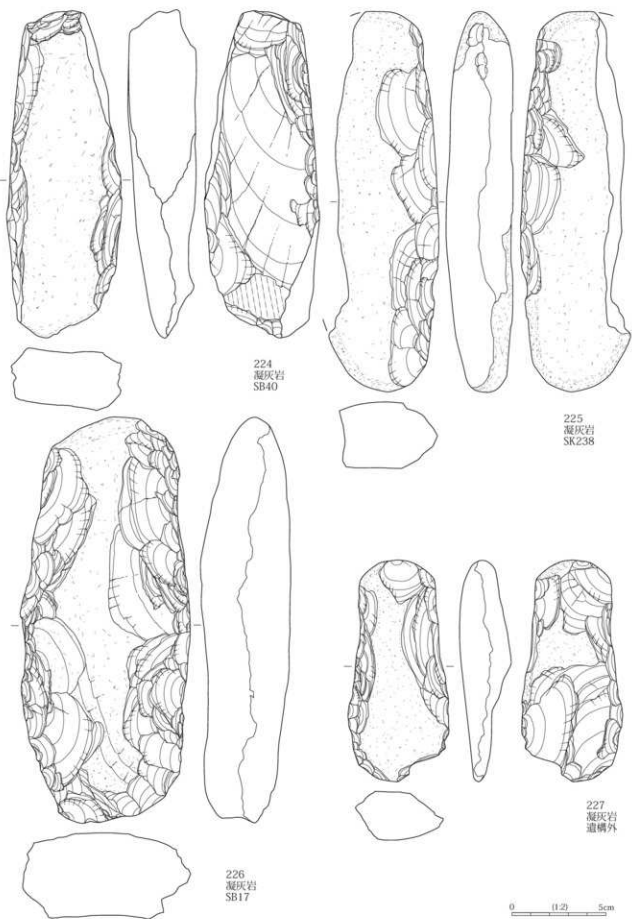
第4章 遺構と遺物



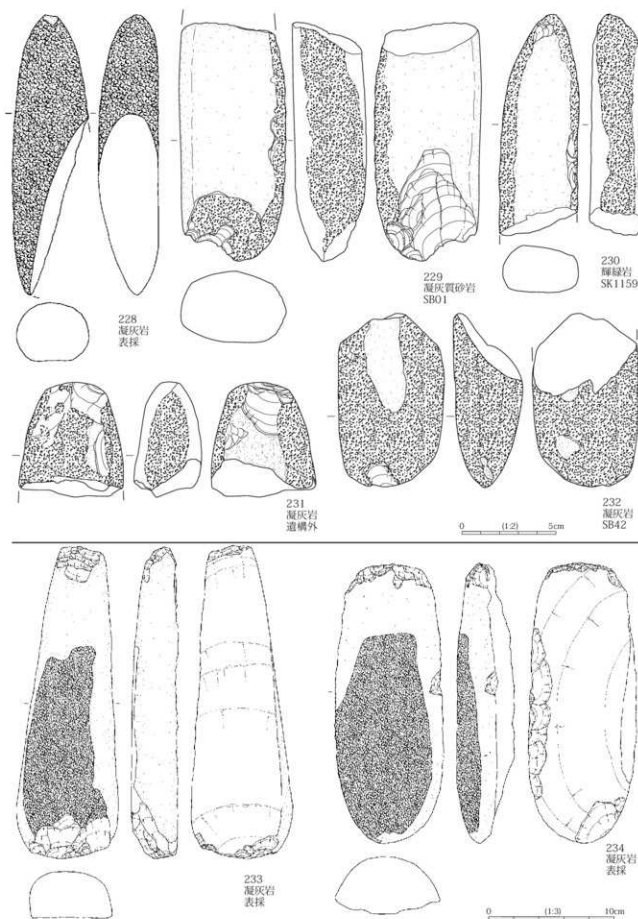
第190図 石器実測図 (24)



第191図 石器実測図 (25)



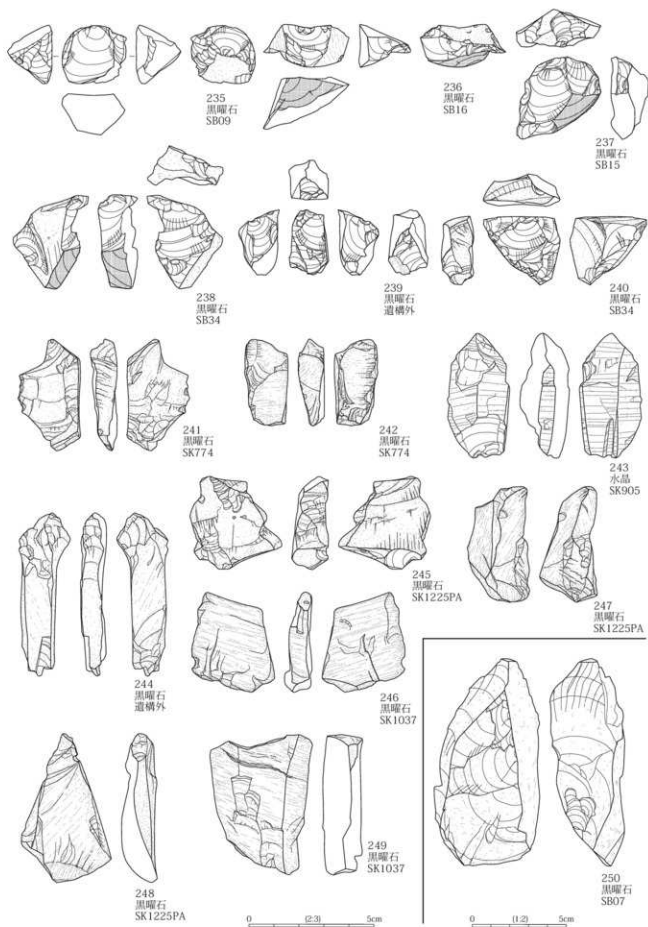
第192図 石器実測図(26)



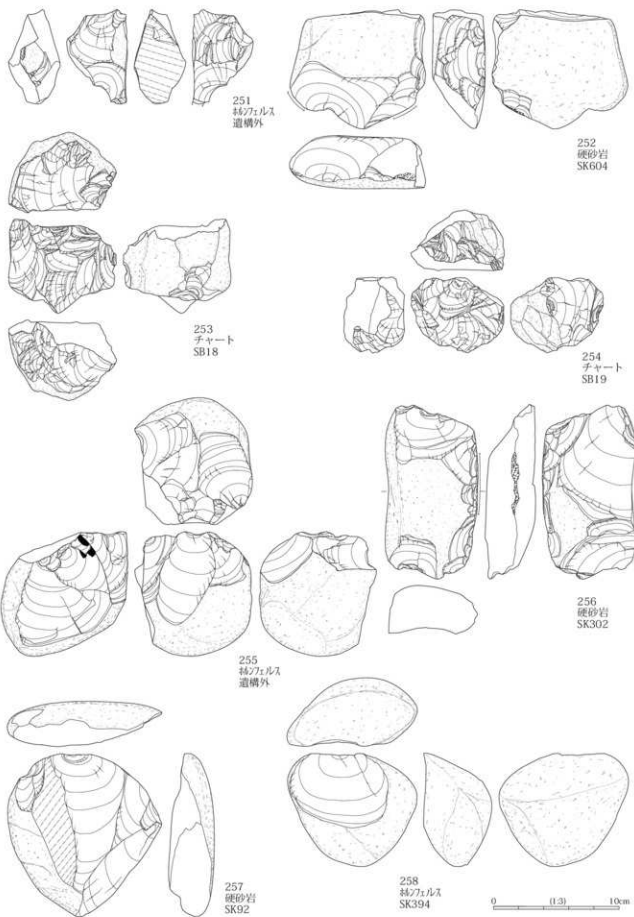
第193図 石器実測図 (27)



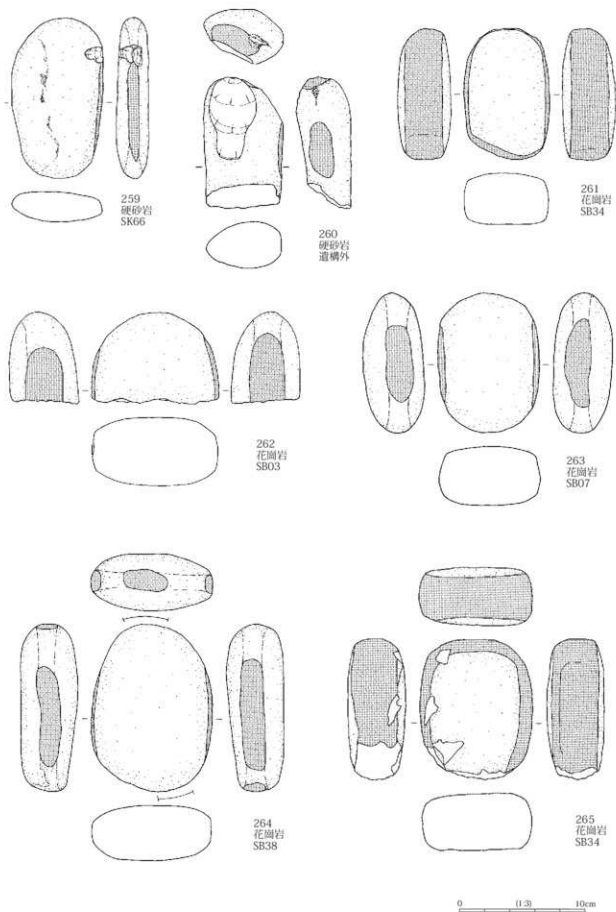
第4章 遺構と遺物



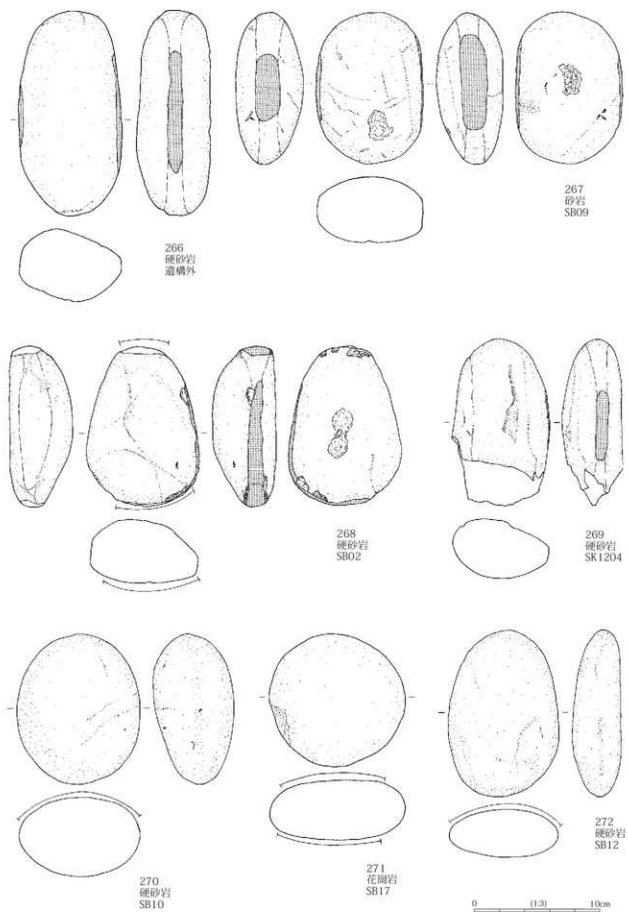
第194図 石器実測図(28)



第195図 石器実測図(29)

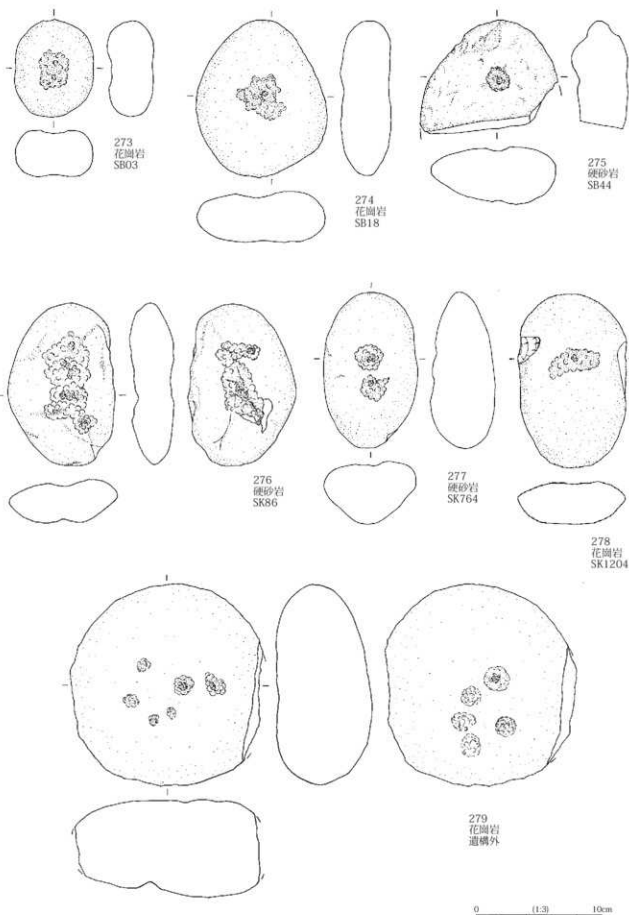


第196図 石器実測図 (30)

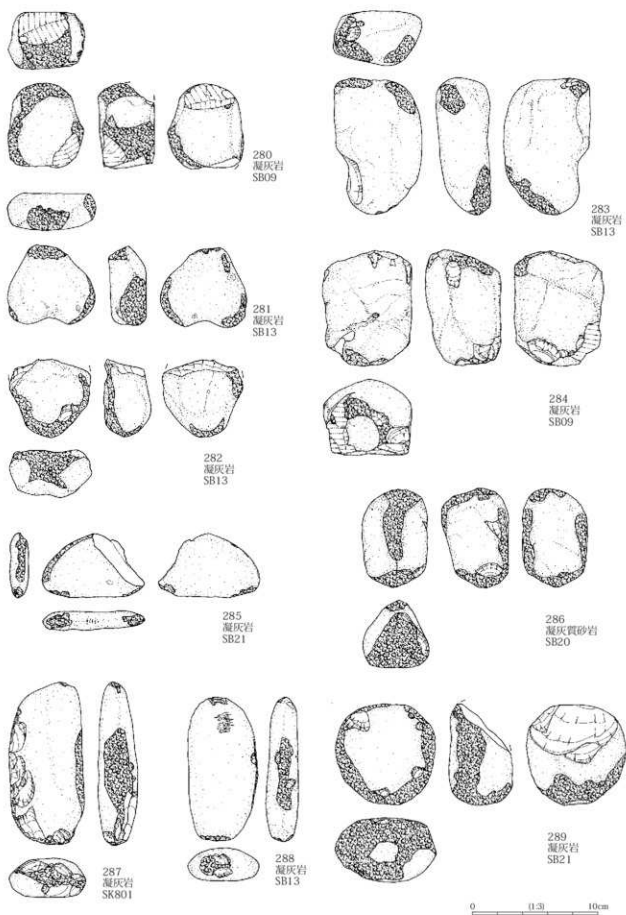


第197図 石器実測図 (31)

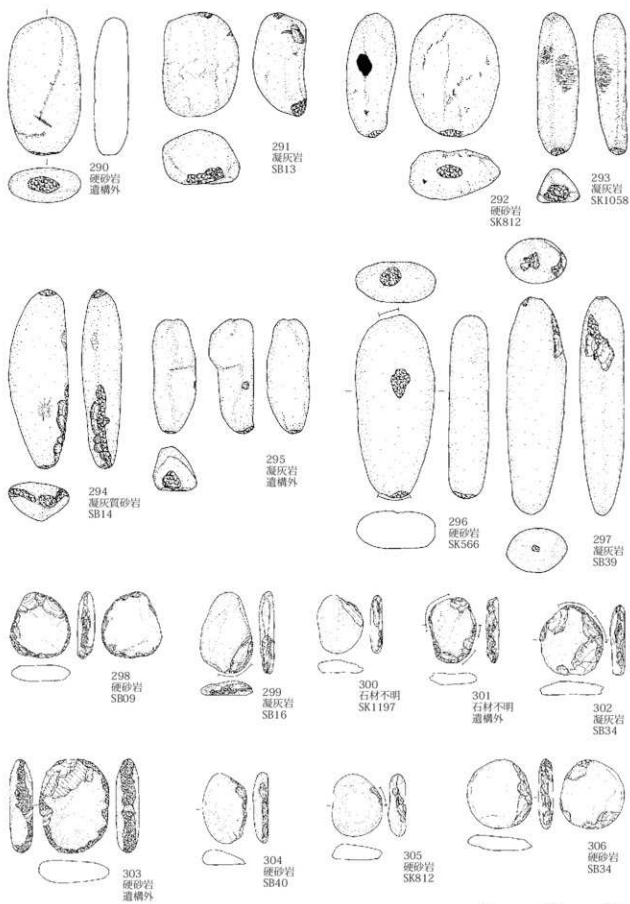
第4章 遺構と遺物



第198図 石器実測図 (32)

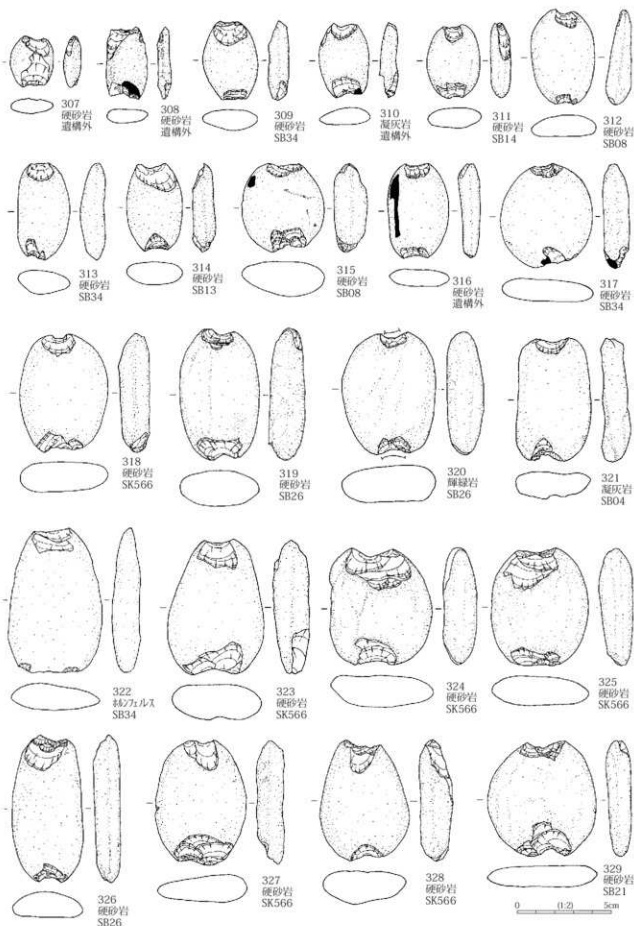


第199図 石器実測図(33)



0 (1:3) 10cm

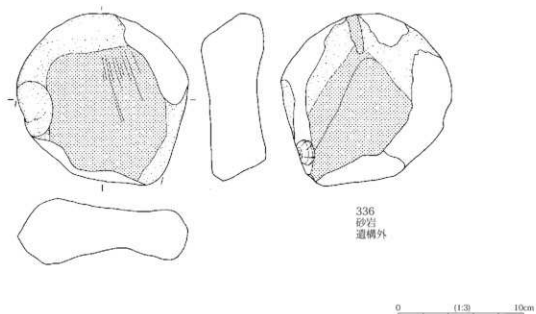
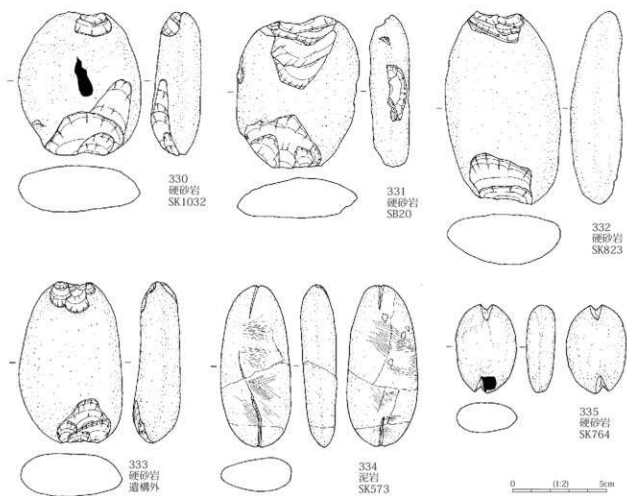
第200図 石器実測図 (34)



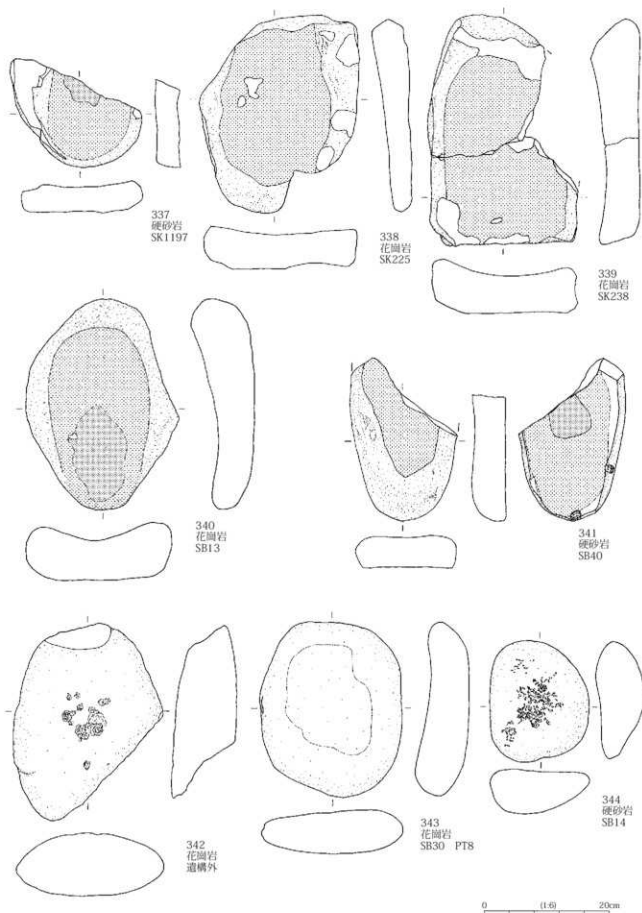
第20図 石器実測図 (35)



第4章 遺構と遺物



第202図 石器実測図 (36)



第203図 石器実測図 (37)

## 第4節 弥生時代および時期不明の遺構と遺物

今回の発掘調査では、弥生時代の遺構として竪穴住居跡 SB47 が検出された。古墳時代以降については明確な遺構は確認されていない。ただし、時期不明の遺構として、竪穴状遺構 SB31・32、掘立柱建物跡 ST01 が検出された。

## 1 弥生時代の遺構と遺物

**SB47** (第204図、PL16) 位置：8c区、Ⅲ C18・19・23・24 グリッド

形状：方形 規模：長軸 440cm、短軸 <420> cm、床面積 <16.8> m<sup>2</sup> 長軸方向：N73° E

検出：Ⅳ a 層上面の検出である。削平により北辺～北西隅の壁が失われている。

床・壁：部分的に貼床（5層）を施すが、大部分は竪穴掘り方底を平坦に整形して床面とする。全面がやや硬化している。壁は最大高さ 8cm が残存する。

柱穴：P1～4 が主柱穴と考えられる。壁から 60～80cm 内側に方形に配列されている。各柱穴は、円形ないし楕円形で、深さ 40～65cm を測り、下部～中部は直径 15cm 程でほぼ一定しているが、床面近くでラッパ状に広がり、長さ 35～45cm となる。覆土に柱痕跡は認められなかったが、柱穴下部～中部の形態からすれば、その直径が柱材の直径に近似することが推測されよう。

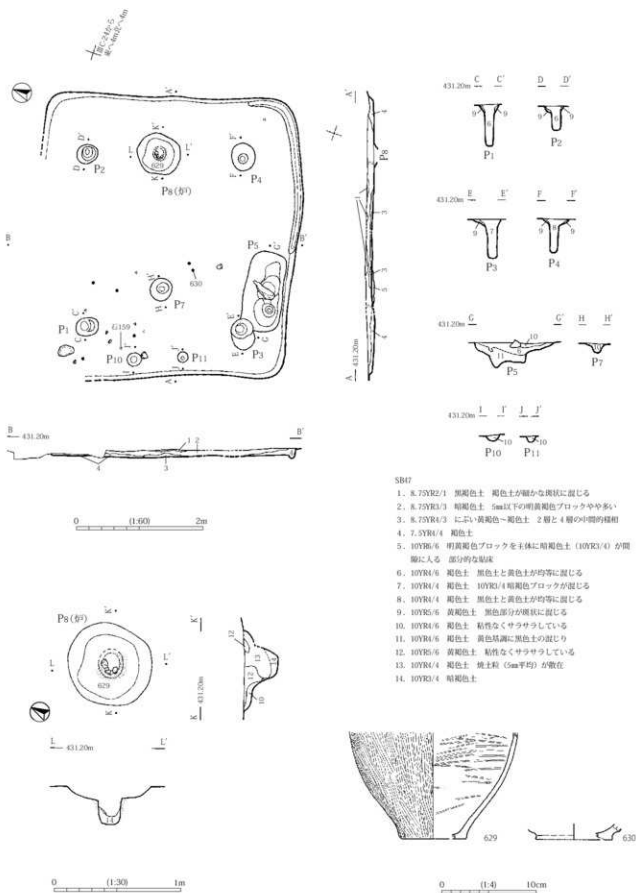
炉：東側の柱穴 2 基を結ぶ線の中点に位置する土器埋設炉である。床を長さ 70cm、短径 65cm、深さ 10cm ほどの円形に掘り窪め、さらにその中央を掘り込んで敷土を施し、裏の下部（629）を据え付ける。炉体土器は遺存状態が悪く完周しない。炉体据え付け坑の上部は被熱劣化している。

周溝：南壁東半部から南東隅部にかけて周溝がめぐる。幅 8～12cm、最大深さ 4cm の断面 U 字形を呈する。その他の施設：西壁中央沿いに、80cm の間隔（心々）で並ぶ P10・P11 は小形で浅く、主柱穴配置の東西中軸を挟んで対を成すように位置している。その形状や位置から、出入り口施設に関係するピットと推測しておきたい。竪穴の東西中軸上に位置する P7 は浅く、これも上屋を構造的に支える柱穴とは考えにくい。性格の推定は難しい。また、南壁西半部に並行して、長さ 130cm、短径 60cm の楕円気味の長方形を呈する P5 が掘り込まれている。底面は平坦ではなく、浅い 2 箇所の窪みが長軸方向に並ぶような形状で、深さは最大 38cm を測る。何らかの貯蔵施設である可能性を考えておきたい。

覆土：四層に分層された。最下に、壁際～中央付近にかけて断面三角形に堆積する褐色土（4層）、床面中央にふい黄褐色土（3層）が薄く堆積し、その上を明黄褐色土粒を含む暗褐色土（2層）が広く覆う。さらに黒褐色土（1層）が中央部の狭い範囲に堆積している。

遺物：炉体土器のほか、弥生土器・縄文土器・石器が覆土中から散漫に出土した。その量はごく少ない。器種や部位が明確な弥生土器は、炉体土器を含め、図示した 2 点のみである。629 は炉体に用いられていた甕である。底部がややすばまる器形で、外面は底部まで縦方向のヘラミガキが施されている。ミガキは器体を上から見て基本的に逆時計回りに進行する。内面はヘラナデ。底部は、1/3 周ほど残存するに過ぎないが、穿孔している可能性がある。630 は底部片で、おそらく壺であろう。調整痕は観察されない。石器は、硬砂岩製の打製石斧 1 点・横刃型石器 4 点が覆土から検出されたが、縄文時代遺物の混入と捉えるべきだろう。なお、P5 覆土上部から長さ 40cm 強の緑色岩礫が出土した。石器石材や炉石などに用いられていた可能性はあるが、意図的な剥離痕や加工痕・使用痕は認められない。

時期：住居構造と炉体土器から弥生時代後期と考えられる。



第204図 SB47実測図

## 2 時期不明の遺構

**SB31** (第205図、PL16) 位置：21区、II H16・21グリッド

形状：方形 規模：長軸378cm、短軸360cm、床面積10.4㎡ 長軸方向：N51°W

検出：4a層上面の検出となる。トレンチ調査により一部が確認され、その後の面的精査でプラン全体が検出された。SB32を切る。

覆土：二層に分層された。ただし、下層(2層)の褐灰色土はごく一部に存在するだけで、堅穴のほとんどは上層(1層)の褐灰色土が埋積している。なお、1層は21区の現耕作土によく似ている。

床・壁：堅穴掘り方底を整えて床面とする。貼床・硬化面は認められない。東南壁寄りの1.3m四方ほどの範囲が、深さ約10cmの浅い窪みとなっており、何らかの施設の痕跡かもしれないが、明らかではない。壁は最大高さ16cmが残存する。立ち上がりは斜めである。

柱穴：円形ないし楕円形のビット12基を検出したが、規則的な配置を示していない。各ビットは、長さ15～35cm、深さ5～40cmと規模のばらつきも大きい。このため、明確な柱穴を指摘するのは難しい。また、いずれのビットの覆土も1層によく似た褐灰色土であるが、同様な形態・覆土のビットが本遺構の周囲に多く存在している。発掘時には認識できなかったものの、本遺構とは別個のビット(土坑)である可能性もある。

遺物：覆土中から散見し出土したが、その量は少ない。土器は細片がごくわずかに出土したのみである。摩滅したものが多く、文様や調整痕をとどめるものはない。胎土の特徴は、縄文土器的なものがある一方、土師質に近いものもある。石器は石鏃1・石匙1・楔形石器2・二次加工がある剥片1・石核1・剥片23点が認められる。また、覆土中には礫が多く含まれていたが、加工・使用痕が認められるものはない。

時期：帰属時期は不明である。出土遺物からは縄文時代以降としかいえない。ただし、覆土が、他の縄文時代・弥生時代遺構とは大きく異なり、現耕作土に類似していることは、現代に近い時期であることを示唆しているのではあるまいか。

**SB32** (第205図、PL16) 位置：21区、II H16・21グリッド

形状：方形か 規模：確認最大長360cm 長軸方向：不明

検出：4a層上面の検出となる。SB31に切られる。

覆土：二層に分層された。ただし、SB31に大きく切られて部分的に残るにすぎない。黄褐色ブロック土(4層)の上に、黄褐色土とSB31の1層に酷似する褐灰色土ブロック土(3層)が堆積している。覆土の様相からすると、埋め戻されている可能性がある。

床・壁：堅穴掘り方底をそのまま床面とするが、残りが悪く詳細は不明である。残存部では貼床・硬化面は認められない。壁は最大高さ16cmが残存する。立ち上がりは斜めである。

柱穴：検出されなかった。

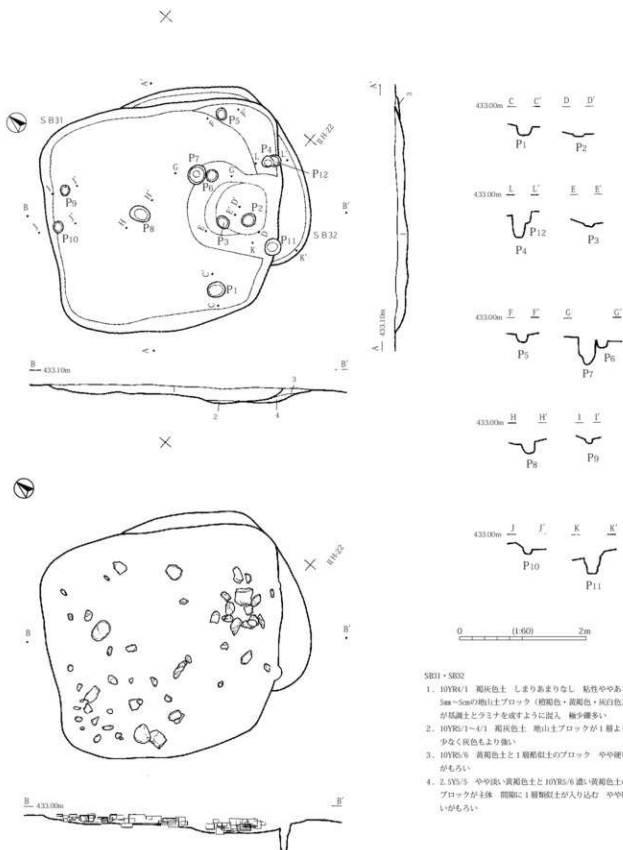
遺物：出土していない。

時期：帰属時期は不明である。SB31より古いとしかいえない。ただし、覆土にSB31の1層に酷似する土が混じることから、SB31より大きく遡ることはないかと理解しておきたい。

**STO1** (第206図) 位置：4区、VII V06・07・11・12グリッド

規模：南北4.4m、東西5.3m 柱間：梁行2間×桁行2間。庇が付属する形態か 長軸方向：N19°E

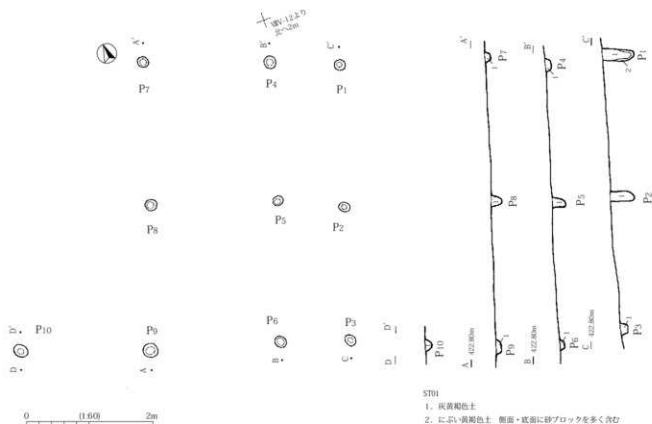
検出：VII層上面で、小形の円形ビットを10基検出し、方形に配列することから掘立柱建物跡と認定した。ただし、P10は北側に対応するビットが検出できず、本建物跡に伴うものか判断としない部分が残る。



SB31・SB32

1. 10YR4/1 赭灰色土 しまりあまりなし 粘性ややあり 5cm~5cmの礫山土ブロック (橙褐色・黄褐色・灰白色) が基礫土とラミナを成すように混入 礫少量多い
2. 10YR6/1~4/1 赭灰色土 礫山土ブロックが1層より少なく灰色もより強い
3. 10YR6/6 黄褐色土と1層礫山土のブロック やや硬いがもろい
4. 2.0Y5/5 やや強い黄褐色土と10YR5/6 濃い黄褐色土のブロックが主体 間隙に1層礫山土が入り込む やや硬いがもろい

第205図 SB31・32実測図



第206図 ST01実測図

**覆土:** P2~10は灰黄褐色土(1層)の単層である。P1はにぶい黄褐色土で、側面・底面に砂ブロックを多く含む(2層)。

**形態・構造:** P1~3列とP4~6列の柱間寸法が、P4~6列とP7~9列の柱間よりも狭く、本来はP10の北側にも対応するピットが存在した可能性は高い。P10を本建物跡に含めると梁行2間×桁行2間で、東側に庇を付属させる形態であったと考えられる。P10が伴わない場合、東西方向は約3.2mである。柱間寸法は東西方向でP10-9間が約2.1m、P9-6間が約2.0m、P6-3間が約1.1mで、南北方向はP1-2間が約2.2m、P2-3間が約2.2mとなる。柱間寸法は比較的規格性が高い。ピットは円形で直径約20cm、検出面からの深さはP1が50cm、P2が35cmで深い、他は15cm以下と浅い。

**出土遺物:** なし。

**時期:** 不明である。主軸方位が、耕地整理以前の地境の溝と思われるSD02とは大きく異なる点から、それより古いと推測する。

## 第5章 結語

今回の発掘調査では、総面積 80,590㎡という広い範囲を調査した。その結果、旧石器時代、縄文時代、弥生時代の資料を得ることができた。主体となるのは縄文時代である。検出された遺構は竪穴住居跡 46軒、土坑 904基、陥し穴 126基など相当数を数える。竪穴住居跡は縄文中期に属し、土坑もそのほとんどが該期に属する。縄文時代の川路大明神原において、人々が定住生活を営んでいたこと、陥し穴による狩猟活動を行っていたこと、この性格が異なる二種類の活動の痕跡が遺跡内容の最大の特徴といえる。以下、この二点について簡潔に整理し、結語としたい。

縄文時代中期の集落は東部台地西縁部の南北に長い帯状の平坦地を主な居住域として展開する。集落跡からは中期初頭～前葉および中葉末～後葉前半の土器が相当数検出された。それらは在地の土器に他地域系の土器が伴出しており、周辺地域を含めた土器編年の確立に寄与する良好な資料となろう。石器については、集落内での磨製石斧の製作を示す資料が明らかになったことが特筆される。

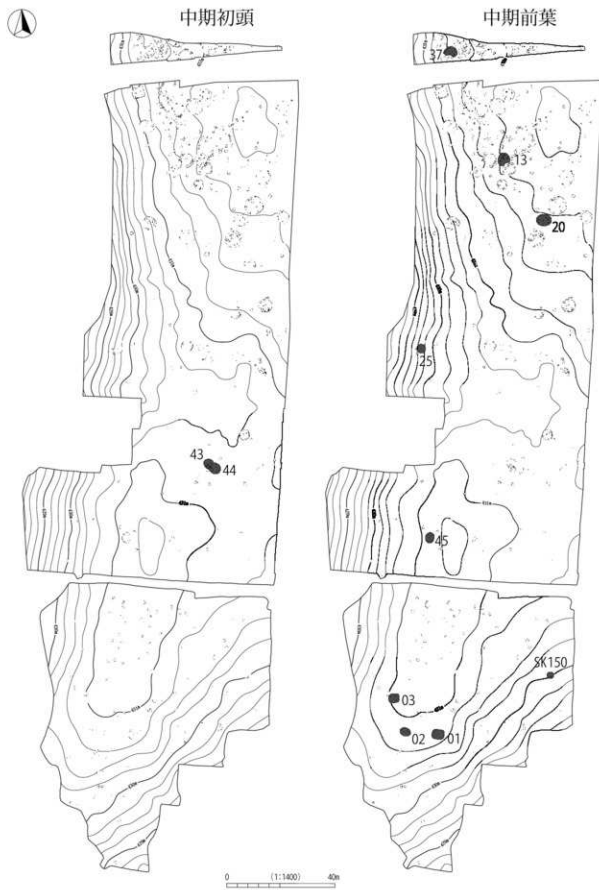
中期初頭の住居跡は 2軒重複して検出され、中期前葉は住居跡 8軒が調査範囲の北端・中央・南端に分散している。該期の土坑は西縁部から中央部・東部の頂部平坦地に広く分布する。これらの土坑は集落に伴う食糧貯蔵施設と推測され、付属坑をもつ特異な形態のものを含めて、住居から離れた区域に幾つかのまとまりをもって群在する。中期初頭～前葉の集落は、一時期に 1～2軒程度の住居が散在する集落景観が想定され、居住域と貯蔵穴域とがそれぞれ区域を異にして存在する構成であったと推測される。中期中葉は、若干の土坑が検出されたのみで、集落は希薄となる。なお、付属坑をもつ貯蔵穴は前期末葉から中期初頭の諏訪地域で一定の広がりをもつが、下伊那地域では本遺跡が初見のようである。その成立と展開、さらなる用途の特定のために、今後の資料蓄積が期待される。

中葉末～後葉 1期は 19軒、後葉 2期は 7軒の住居跡が確認された。住居跡は調査区の北半ないし北端に集中する。飯田市教育委員会の調査結果からみて、後葉 2期の居住域の主体は、今回の調査区の北側に存在すると思われる。貯蔵穴は住居跡の分布に概ね重なる範囲に構築されており、特定箇所に密集する場合もある。中期中葉末～後葉 2期の集落は、前葉までに比べ、住居数の増加から推測される人口規模の拡大と集住化が進展し、貯蔵穴群が居住域に取り込まれるなど、集落構成に変化が起きている。後葉 3期の遺構は確認されておらず、この時期をもって中期集落は断絶するとみられる。

遺跡内容のもう 1つの大きな特徴である陥し穴群は、遺跡内の広範囲に認められ、縄文中期の集落領域と重なって分布する。川路大明神原が陥し穴による狩猟域として機能していた時期は、縄文中期集落の形成以前の早期前葉～前期末葉と、集落廃絶後の後期前葉～晩期中葉の 2時期あることが推測される。本遺跡の陥し穴群は明瞭な列状配置を構成しないことが特徴である。一方、2基が一組となる配置単位が数多く把握された。それぞれ構築の単位として理解し得るが、各単位に連繫を認め得る例はごく限られる。川路大明神原では、陥し穴 2基から成る小規模な罟を用いる狩猟形態が基本であったのか、それらが組み合ったより大きな仕掛けを使用していたのか、その判断は難しい。また、類型ごとの詳細時期を特定するに至らなかった点もあるものの、調査例がごく少ない下伊那地域において、縄文時代の陥し穴罟の実態を考えるうえで重要な基礎資料となるであろう。

以上、飯倉道路の建設に関連して発掘調査した川路大明神原遺跡の報告を行ってきた。得られた資料がもつ多くの様々な価値や課題を充分引き出すことができなかった点は、担当者の努力不足によるところで、反省の限りである。本書に報告した諸資料が地域史解明の一助となることを願い、ご協力いただいた関係各位、諸機関に深く感謝して、開始から 11年に及んだ発掘調査を終えたい。

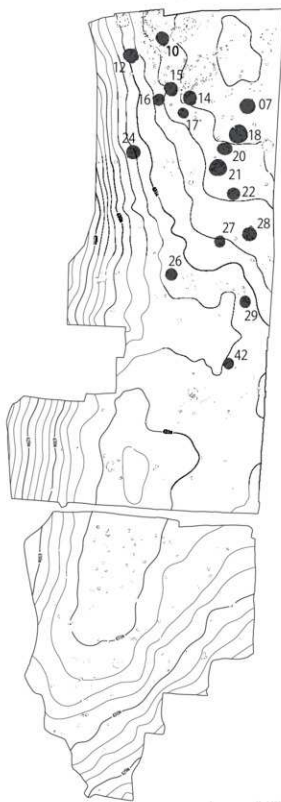




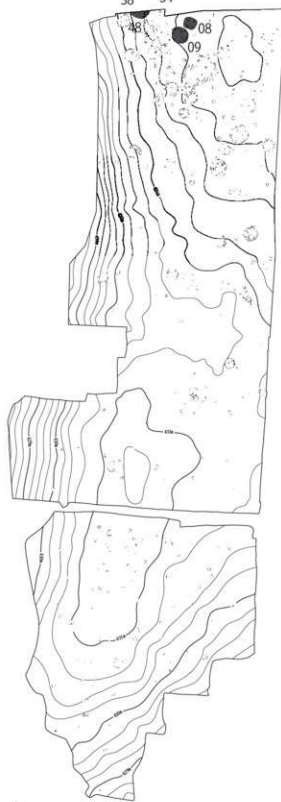
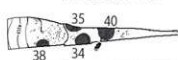
第 207 図 竪穴住居跡時期別分布 (1)



中期中葉末～後葉1期



中期後葉2期



0 (1:1400) 40m

第 208 図 竪穴住居跡時期別分布 (2)

引用・参考文献

- 上松野教育委員会 2001 『吉野遺跡群』  
 飯田市上郷考古博物館 2004 『伊那谷の土偶』  
 飯田市上郷考古博物館 2005 『下伊那唐草文土器』  
 飯田市教育委員会 1995 『北方大原遺跡Ⅱ』  
 飯田市教育委員会 1996 『増泉寺付近遺跡』  
 飯田市教育委員会 1997 『黒田大明神原遺跡』  
 飯田市教育委員会 1998a 『飯田の遺跡』 市内遺跡詳細分布調査報告書  
 飯田市教育委員会 1998b 『美女遺跡』  
 飯田市教育委員会 1999a 『大門原遺跡』  
 飯田市教育委員会 1999 『三尋石遺跡Ⅲ』  
 飯田市教育委員会 1999 『三尋石遺跡Ⅳ』  
 飯田市教育委員会 2001a 『大門原遺跡Ⅱ』  
 飯田市教育委員会 2001 『井戸下遺跡』  
 飯田市教育委員会 2002 『月の木遺跡 月の木古墳群』  
 飯田市教育委員会 2003a 『城跡遺跡』  
 飯田市教育委員会 2003 『土前遺跡』  
 飯田市教育委員会 2003 『留々女遺跡』  
 飯田市教育委員会 2003 『殿村遺跡 大荒神の塚古墳』  
 飯田市教育委員会 2005 『松尾城遺跡』  
 飯田市教育委員会 2008a 『川路大明神原遺跡 携帯電話中継基地局铁塔建設に先立つ埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』  
 飯田市教育委員会 2008b 『川路大明神原遺跡 個人住宅建設に先立つ埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』  
 今村啓爾 1973 『薮ヶ丘遺跡の土城に関する考察』 『薮ヶ丘 薮ヶ丘遺跡調査団』  
 今村啓爾 1983 『陥穴（おとしあな）』 『縄文時代の研究』 第2巻 雄山閣出版  
 今村啓爾 1989 『群集貯蔵穴と打製石斧』 『考古学と民族誌 渡辺仁教授古稀記念論文集』 六興出版  
 鶴崎幸雄 1977 『平出第三類A土器の編年的位置付けとその社会的背景』 『信濃』 第29巻 第4号 信濃史学会  
 海老原郁夫・常川秀夫 1975 『梨木平遺跡 第4次調査報告書（縄文時代中期袋状土坑の研究）』 上河内村教育委員会  
 海老原郁夫 1986 『梨木平遺跡-第1次～第4次発掘調査の総括-』 上河内村教育委員会  
 海老原郁夫 1992 『北関東における縄文中期の群居性土城』 『縄文時代』 3 縄文時代文化研究会  
 岡谷市教育委員会 1972 『梨久保遺跡 第3次・4次発掘調査報告』  
 岡谷市教育委員会 1974 『福平遺跡』  
 岡谷市教育委員会 1986 『梨久保遺跡 第5次～第11次発掘調査報告書』  
 上郷町教育委員会 1988 『平細遺跡・八幡原遺跡』  
 神村透 1978 『結節縄文をつけた一群の土器』 『中部高地の考古学』 長野県考古学会 15周年記念論文集 長野県考古学会  
 神村透 1983 『下伊那型櫛形文土器』 『長野県考古学会誌』 51 長野県考古学会  
 神村透 1996 『袋状・線櫛形文土器を追う』 『長野県の考古学』 (財)長野県埋蔵文化財センター研究論集1 長野県埋蔵文化財センター  
 神村透 2003 『下伊那系(タイプ)土器は唐草文系土器ではない—地域差ではなく、独自のもの—』 『長野県考古学会誌』 101 長野県考古学会  
 岐阜県文化財保護センター 1994 『戸入村平遺跡』  
 岐阜県文化財保護センター 2000 『戸入村平遺跡Ⅱ・小谷戸遺跡』  
 榎生直彦 1985 『東京都における縄文時代の袋状土坑』 『東京考古』 3 東京考古談話会  
 小塚一夫 1999 『遺構研究 集石遺構』 『縄文時代』 10 縄文時代文化研究会  
 小林宇彦 1985 『天竜川流域における唐草文土器の検討—器形を中心として—』 『信濃』 第37巻 第12号 信濃史学会  
 小林謙一 2008 『縄文時代の暦年代』 『歴史のものさし 縄文時代の考古学2』 同成社  
 小林達雄 編 2008 『総覧 縄文土器』 総覧縄文土器刊行委員会 アム・プロモーション  
 駒ヶ根市教育委員会 1974 『大城林・北方Ⅰ・Ⅱ・高原・射殿場・南原・横前新田・塩木・北原・富士山』  
 駒ヶ根市教育委員会 1977 『丸山南遺跡』  
 駒ヶ根市教育委員会 1980 『日向坂・赤須城・七免川A・七免川B遺跡』  
 佐川隆 2003 『縄文時代貯蔵穴の研究 未完成考古学叢書5』 アム・プロモーション  
 佐藤徳信 1991 『第二編第三章第二節三縄文時代中期の遺跡 川路大明神原遺跡』 『下伊那史』 第1巻』 下伊那誌編纂会  
 佐藤宏之 1989 『陥し六瓶と縄文時代の狩猟社会』 『考古学と民族誌 渡辺仁教授古稀記念論文集』 六興出版  
 佐藤宏之 1998 『陥し六瓶の土俗考古学—狩猟技術のシステムと構造—』 『縄文時代生活構造 土俗考古学からのアプローチ』 同成社  
 佐藤宏之 1999 『遺構研究 陥し穴』 『縄文時代』 10 縄文時代文化研究会  
 下伊那教育会 編 1955 『下伊那史』 第2巻』 下伊那誌編纂会  
 下伊那教育会 編 1955 『下伊那史』 第3巻』 下伊那誌編纂会  
 下伊那教育会 編 1961 『下伊那史』 第4巻』 下伊那誌編纂会  
 下伊那教育会 編 1967 『下伊那史』 第5巻』 下伊那誌編纂会  
 下伊那教育会 編 1970 『下伊那史』 第6巻』 下伊那誌編纂会  
 下伊那教育会 編 1991 『下伊那史』 第1巻』 下伊那誌編纂会  
 下伊那地質誌編纂委員会 編 1972 『下伊那地質図 第1版』 下伊那誌編纂会  
 下平博行 1999 『第Ⅳ章 総括』 『大門原遺跡』 飯田市教育委員会  
 遠那真貞 1965 『飯田市川路大明神原遺跡発掘報告Ⅰ・Ⅱ』 『伊那』 第13巻 第6・7号 伊那史学会

- 縄文セミナーの会 1998 『第11回縄文セミナー 中期中葉から後葉の諸様相』 縄文セミナーの会
- 末木健 1978 『伊那谷中部縄文中期後半の土器群とその性格—予察—』 『信濃』 第30巻 第4号 信濃史学会
- 諏訪市教育委員会 1988 『一時坂』
- 長野県教育委員会 1992 『神谷河遺跡1』
- 田中清文 1984 『伊那谷縄文中期後半土器編年への展開—第1期土器群の基礎的把握』 『中部高地の考古学Ⅲ』 長野県考古学会
- 田中清文 1999 『唐草文土器の誕生(1)(2)(3) 一重弧文土器から唐草文A類土器へ—』 『伊那路』 第43巻 第3・4・5号 上伊那郷土研究会
- 茅野市教育委員会 1996a 『小堂見遺跡』
- 茅野市教育委員会 1996b 『北山高須沢A遺跡』
- 茅野市教育委員会 2002 『大六観遺跡・駒形遺跡』
- 塚本師也 1993 『食糧貯蔵』 『季刊考古学』 第44号 雄山閣出版
- 東京都埋蔵文化財センター 1984 『Na740 遺跡』 『多摩ニュータウン遺跡』 昭和58年度(第7分冊) 雄山閣出版
- 東京都埋蔵文化財センター 1986 『Na597 遺跡』 『多摩ニュータウン遺跡』 昭和59年度(第4分冊) 雄山閣出版
- 東京都埋蔵文化財センター 1987 『Na182 遺跡』 『多摩ニュータウン遺跡』 昭和60年度(第1分冊) 雄山閣出版
- 東京都埋蔵文化財センター 1989 『Na426 遺跡』 『多摩ニュータウン遺跡』 昭和62年度(第5分冊) 雄山閣出版
- 東京都埋蔵文化財センター 1991 『Na382・384 遺跡』 『多摩ニュータウン遺跡』 平成元年度(第4分冊) 雄山閣出版
- 戸沢充則 編 2001 『縄文時代研究事典』 東京堂
- 戸田哲也 1995 『中野山越 A2 類土器論』 『先史考古学研究』 第5号 阿佐ヶ谷先史学研究会
- 中川村教育委員会 1980 『溝林遺跡』
- 長岡史起 1999 『遺構研究 貯蔵穴』 『縄文時代』 10 縄文時代文化研究会
- 中山庄一 1998 『長野県北部飯山市における陥し穴』 『貝塚』 52・53合併号 物質文化研究会
- 永瀬福男 1982 『貯蔵穴』 『季刊考古学』 創刊号 雄山閣出版
- 長野県教育委員会 1997 『大規模開発事業地内遺跡』 遺跡詳細分布調査報告書
- 長野県 編 1983 『長野県史 考古資料編 全1巻(3) 主要遺跡(中・南信)』 長野県史刊行会
- 長野県 編 1989 『長野県史 考古資料編 全1巻(4) 遺構・遺物』 長野県史刊行会
- 長野県埋蔵文化財センター 2002 『広域営建地地産整備事業八ヶ岳地区埋蔵文化財発掘調査報告書 馬捨場遺跡』
- 長野県埋蔵文化財センター 2007 『中央自動車道西宮線飯田ジャンクション埋蔵文化財発掘調査報告書 石子原遺跡・山本西平遺跡・注原遺跡・赤羽原遺跡』
- 長野県埋蔵文化財センター 2009 『国道474号(飯高道路) 埋蔵文化財発掘調査報告書3 山本大塚遺跡・下り松遺跡ほか』
- 長野県埋蔵文化財センター 2010 『国道474号(飯高道路) 埋蔵文化財発掘調査報告書2 長野県竹佐中原遺跡における旧石器時代の石器文化Ⅱ』
- 中山貞治 1997 『縄文中期初頭の西関東・中部高地における東海系土器—特に北裏CⅠ式系の搬入土器をめぐって—』 『東京考古』 15 東京考古談話会
- 林茂樹 1976 『縄文中期土器「平土三A」の系譜—月見松遺跡と山溝遺跡—』 『長野県考古学会誌 藤沢宗平追悼号』 長野県考古学会
- 原村教育委員会 1992 『長峰遺跡』
- 松島信幸・寺平宏 1999 『伊那谷の地形面の編年と気候変動および地盤運動との関連』 『飯田市美術博物館研究紀要』 9 飯田市美術博物館
- 松島信幸・寺平宏 2000 『10万年前頃の天竜峡峡谷部における天竜川Lの塞き止め現象—大明神原での観察—』 『飯田市美術博物館研究紀要』 10 飯田市美術博物館
- 町田洋・新井房夫 2003 『新編 火山灰トラス [日本列島とその周辺]』 東京大学出版会
- 三上敬也 1986 『中部・西関東地方における縄文時代中期土器の変遷と後葉土器への移行』 『長野県考古学会誌』 51 長野県考古学会
- 三上敬也 1987 『梨久保式土器 再考』 『長野県埋蔵文化財センター紀要』 1 長野県埋蔵文化財センター
- 三上敬也 1998 『長野県における中期前半東海系土器』 『縄文時代中期前半の東海系土器群 北原敷式土器の成立と展開』 静岡県考古学会
- 三上敬也・野村一寿・寺内隆夫 1998 『Ⅱ2(5) 縄文中期の土器』 『長野県史 考古資料編 全1巻(4) 遺構・遺物』 長野県史刊行会
- 三上敬也 2002 『所謂「唐草文土器」の構造・変遷と型式に関する考察』 『長野県考古学会誌』 98 長野県考古学会
- 宮沢恒之 1966 『縄文前期後半の一種相—長野県飯田地方における土器型式設定の資料として—』 『信濃』 第18巻 第4号 信濃史学会
- 守矢昌文 2006 『八ヶ岳西南麓・霧ヶ峰南麓における縄文時代の落し穴について』 『新尖石縄文考古館開館5周年記念考古論文集』 茅野市尖石縄文考古館
- 八木光剛 1976 『縄文中期集落の素描(1)(2)—信濃伊那谷における集落共同体をめぐって—』 『長野県考古学会誌』 25・26 長野県考古学会
- 山下勝年 1998 『山田平遺跡出土の縄文中期初頭の土器1』 『伊勢湾考古』 12 知多古文化研究会
- 山下勝年 1999 『山田平遺跡出土の縄文中期初頭の土器2』 『伊勢湾考古』 13 知多古文化研究会
- 山梨県教育委員会 1987 『釈迦堂Ⅱ』
- 吉川金利 2003 『下伊那縄文中期後葉に於ける土器様相と編年』 『長野県考古学会誌』 102 長野県考古学会
- 吉川金利 2004 『伊那谷南部の中期中葉から後葉への移行期の土器について』 『シンポジウム縄文集落研究の新天地Ⅲ—勝坂から曾利へ—発表要旨』 縄文集落研究グループ セツルメント研究会
- 米田明調 1980 『南信天竜川沿岸における縄文時代中期後半の土器編年—所謂「唐草文土器」を中心として—』 『伊斐考古』 17(1) 山梨県考古学史料室

遺跡主要部全景  
(南東から)



左：7区遺構群  
(右が北)  
右：SB01-03  
(下が北)



平成12年度  
調査範囲  
(北から)





左：8区遺構群  
（西から）  
右：8区南部  
遺構群  
（右が北）



左：9区遺構群  
（下が北）  
右：9区西部  
遺構群  
（左が北）



平成13年度  
調査範囲  
（北東から）



左：19区遺構群  
（西から）  
右：19区遺構群  
（下が北）

左：12区遺構群  
(上から北)  
右：11区遺構群  
(上から北)



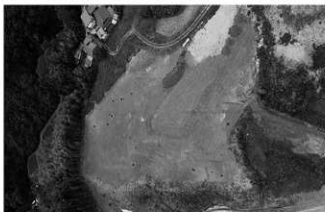
左：20区遺構群  
(南から)  
右：21区遺構群  
(東から)



左：15b区遺構群  
(北から)  
右：8b区遺構群  
(上から北)



左：20b区遺構群  
(右から北)  
右：8b区北部  
遺構群  
(上から北)



左：8c区遺構群  
(南東から)  
右：9a区西部  
遺構群  
(北から)





左：SB01 完掘  
（東から）  
右：SB01 断面  
（西から）



左：SB01  
遺物出土状況  
（西から）  
右：SB01 井  
（北東から）



左：SB02 完掘  
（東から）  
右：SB02 井断面  
（南西から）



左：SB03 完掘  
（東から）  
右：SB03  
遺物出土状況  
（西から）



左：SB03 井  
（東から）  
右：SB03 井  
掘り方断面  
（北から）



左：SB04 完掘  
（南西から）  
右：SB05 完掘  
（西から）



左：SB06 完掘  
（南西から）  
右：SB07 完掘  
（南西から）



左：SB07 P10  
土器出土状況  
（西から）  
右：SB07 伊  
（南東から）



左：SB08 完掘  
（北北東から）  
右：SB08 伊  
（北から）



左：SB09 完掘  
（東南から）  
右：SB09 伊 1  
（西から）





左：SB10 完掘  
（東から）  
右：SB10 炉  
（東から）



左：SB10 P4  
遺物出土状況  
（西から）  
右：SB11 完掘  
（南西から）



左：SB11 炉  
（南から）  
右：SB11 炉廻り  
方  
（北から）



左：SB12 完掘  
（南西から）  
右：SB12 P10  
遺物出土状況  
（北東から）



左：SB12 炉  
（南東から）  
右：SB12 炉  
廻り方断面  
（西から）

左：SB13 完照  
（北東から）  
右：SB13  
遺物出土状況  
（北西から）



左：SB13 伊1・2  
（南東から）  
右：SB13  
伊1 掘り方  
（東から）



左：SB14 完照  
（東から）  
右：SB14 伊2 新  
掘（北から）



左：SB14 伊1  
（南から）  
右：SB14  
伊1 掘り方  
（北東から）



左：SB15 完照  
（北西から）  
右：SB15 伊  
（東から）

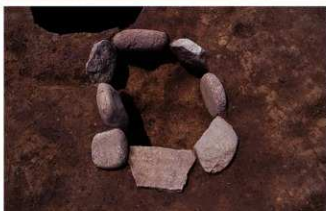




左：SB15 伊  
羅り方  
（北から）  
右：SB15  
P5 断面  
（北西から）



左：SB16 完掘  
（北西から）  
右：SB16  
遺物出土状況  
（西から）



左：SB16 伊羅  
遺物出土状況  
（北から）  
右：SB16 伊  
（南東から）



左：SB16 P3  
遺物出土状況  
（北西から）  
右：SB16 P3  
遺物出土状況  
（西から）



左：SB17 完掘  
（北東から）  
右：SB17 P13  
遺物出土状況  
（南東から）

左：SB17 P10  
遺物出土状況  
(北から)  
右：SB17 P10  
埋出土状況  
(東から)



左：SB18 突籠  
(北西から)  
右：SB18 伊1  
(南東から)



左：SB18  
伊2 新道  
(南から)  
右：SB19 突籠  
(東南から)



左：SB20 突籠  
(東から)  
右：SB20  
遺物出土状況  
(北から)



左：SB20 伊1  
埋出土状況  
(北から)  
右：SB20 伊1  
突籠  
(東から)





左：SB21 穴掘  
（東から）  
右：SB21 葬 1  
（西から）



左：SB21 葬 3  
（北から）  
右：SB21 P13  
石器出土状況  
（南東から）



左：SB21  
埋設土器  
（南から）  
右：SB21  
埋設土器  
（南西から）



左：SB22 穴掘  
（南から）  
右：SB22 P2  
遺物出土状況  
（北西から）



左：SB22 P7 断面  
（西から）  
右：SB23 穴掘  
（東から）

左：SB24 完掘  
（北西から）  
右：SB24 葬  
（北から）



左：SB25 完掘  
（西から）  
右：SB25 葬  
（北から）



左：SB26 完掘  
（西から）  
右：SB26 P4 断面  
（南から）



左：SB27 完掘  
（北西から）  
右：SB28 完掘  
（北から）



左：SB28 葬  
（東から）  
右：SB28 葬  
遺物出土状況  
（北から）





左：SB29 穴窟  
（西南から）  
右：SB30 穴窟  
（北から）



左：SB33 穴窟  
（北から）  
右：SB34 穴窟  
（西から）



左：SB34 坪  
南北断面  
（南西から）  
右：SB35 穴窟  
（西から）



左：SB35 P5  
遺物出土状況  
（北から）  
右：SB36 穴窟  
（北東から）



左：SB37・38 穴窟  
（西から）  
右：SB37 穴窟  
（南西から）



左：SB37  
遺物出土状況  
（西から）  
右：SB37 埴  
（東北から）



左：SB38 完掘  
（西から）  
右：SB38 埴  
（東から）



左：SB39 完掘  
（西南から）  
右：SB40 完掘  
（南から）



左：SB40 埴  
（北から）  
右：SB40 埴 完掘  
（粘土上面）



左：SB41 断面  
（南から）  
右：SB42 完掘  
（南東から）





左：SB42  
遺物出土状況  
(南東から)  
右：SB42  
遺物出土状況  
(北東から)



左：SB42 炉内  
土器出土状況  
(南東から)  
右：SB43・44 完掘  
(南東から)



左：SB43 完掘  
(南西から)  
右：SB43 炉  
(北から)



左：SB44 完掘  
(南西から)  
右：SB44  
遺物出土状況  
(南西から)



左：SB45 完掘  
(南から)  
右：SB45 炉  
(南から)

左：SB45 掘り方  
土層出土状況  
(南から)



右：SB46  
遺物出土状況  
(南から)



左：SB46  
遺物出土状況  
(南西から)



右：SB48 完掘  
(北西から)



左：SB48  
遺物出土状況  
(北西から)



右：SB48 P1  
遺物出土状況  
(西から)



左：SB49 完掘  
(北西から)



右：SK19 完掘  
(南から)



左：SK31 完掘  
(南西から)



右：SK150 完掘  
(南東から)





左：SK150  
遺物出土状況  
(南東から)  
右：SK150  
遺物出土状況  
(東から)



左：SK762 完掘  
(西から)  
右：SK762 伊断面  
(北西から)



左：SK762 伊完掘  
(北西から)  
右：SK890 完掘  
(南東から)



左：SK890  
礎出土状況  
(北東から)  
右：SB47 完掘  
(南から)



左：SB47 伊  
(南から)  
右：SB31・32 完掘  
(西北から)

左：SK276 完掘  
（北西から）  
右：SK311 完掘  
（北西から）



左：SK370 完掘  
（西から）  
右：SK370 断面  
（東南から）



左：SK375 完掘  
（西から）  
右：SK376 完掘  
（東北から）



左：SK399 完掘  
（南東から）  
右：SK399 断面  
（南から）



左：SK891  
付属坑 P2  
掘出状況  
（東から）  
右：SK891  
付属坑 P2  
断面  
（南東から）





左：SK091・  
892 片皿  
（北東から）  
右：SK1116 片皿  
（西から）



左：SK1139 片皿  
（南西から）  
右：SK1139 断面  
（南東から）



左：SK1144 片皿  
（南から）  
右：SK1158 片皿  
（南東から）



左：SK1258 片皿  
（南から）  
右：SK1258 断面  
（西から）



左：SK1259 片皿  
（南西から）  
右：SK1261 片皿  
（南西から）

左：SK1261 全景  
（南西から）  
右：SK1261 穴掘  
中央部  
（北東から）



左：SK1263 穴掘  
（南西から）  
右：SK1267 穴掘  
（南東から）



左：SK1272 穴掘  
（東から）  
右：SK1272 断面  
（北から）



左：SK1273 穴掘  
（東から）  
右：SK1279 穴掘  
（東から）



左：SK1313 全景  
（東から）  
右：SK1313 穴掘  
北部  
（南から）





左：SK351 完掘  
（北東から）  
右：SK1032 完掘  
（西から）



左：SK1131 完掘  
（東南から）  
右：SK1222 完掘  
（北西から）



左：SK1257 完掘  
（東から）  
右：SK1316 完掘  
（北から）



左：SK44 完掘  
（北東から）  
右：SK51 完掘  
（南東から）



左：SK54 完掘  
（南西から）  
右：SK100 完掘  
（南西から）



左：SK02  
 礎出土状況  
 (南から)  
 右：SK02  
 断面(下部)  
 (西から)



左：SK02 完照  
 (南南東から)  
 右：SK42 礎出土状況  
 (東から)



左：SK123  
 礎出土状況  
 (南東から)  
 右：SK931 完照  
 (南東から)



左：SK316  
 礎出土状況  
 (北西から)  
 右：SK316 完照  
 (北西から)



左：SK1037  
 礎出土状況  
 (右が東)  
 右：SK1219 完照  
 (北から)





左：SK107  
遺物出土状況  
(南西から)  
右：SK108  
遺物出土状況  
(北西から)



左：SK143  
遺物出土状況  
(南西から)  
右：SK238  
遺物出土状況  
(北西から)



左：SK300  
遺物出土状況  
(西から)  
右：SK759  
遺物出土状況  
(南から)



左：SK764  
遺物出土状況  
(南から)  
右：SK764  
礎出土状況  
(南から)



左：SK763  
遺物出土状況  
(西から)  
右：SK769  
遺物出土状況  
(南から)

左：SK838 完掘  
（北から）  
右：SK864 断面  
（南から）



左：SK905 完掘  
（北西から）  
右：SK905 断面  
（西から）



左：SK886  
遺物出土状況  
（北東から）  
右：SK926 断面  
（東から）



左：SK1012 完掘  
（西から）  
右：SK1204  
遺物出土状況  
（北西から）



左：SK1217  
遺物出土状況  
（北西から）  
右：SK1355  
礎出土状況  
（南西から）





左：SK22 断面  
（南から）  
右：SK67 完備  
（南西から）



左：SK75 完備  
（南西から）  
右：SK77 完備  
（南西から）



左：SK84 完備  
（南東から）  
右：SK120 完備  
（南東から）



左：SK129 完備  
（南西から）  
右：SK149 完備  
（南東から）



左：SK204 断面  
（北西から）  
右：SK204  
底部ビットと鏝  
（北東から）

左：SK216  
底部ビット  
完掘・検出  
(東から)



左：SK312 断面  
(北から)



左：SK360 完掘  
(北西から)



左：SK420 完掘  
(南西から)



左：SK824  
底部施設  
棒状痕検出状  
況  
(北西から)





左：SK863 断面  
（北西から）  
右：SK910 完麗  
（南から）



左：SK1077 完麗  
（北から）  
右：SK1152 完麗  
（東から）



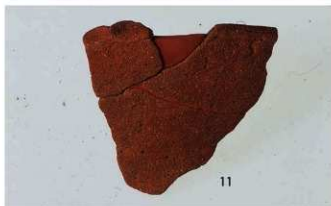
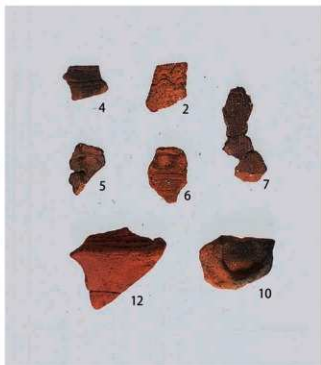
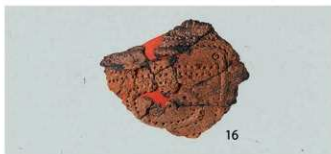
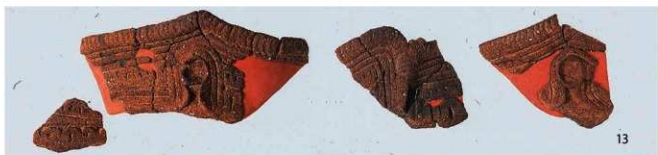
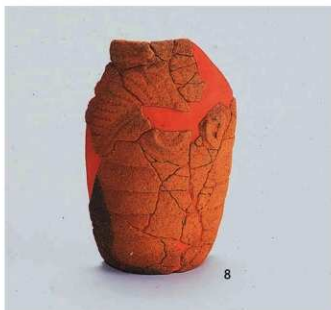
左：SK1146 完麗  
（北西から）  
右：SK1308 完麗  
（南から）

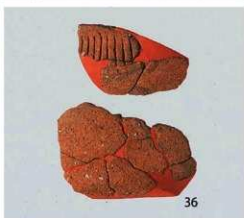
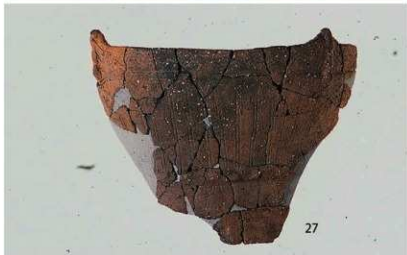
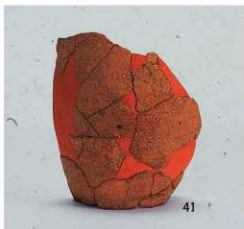
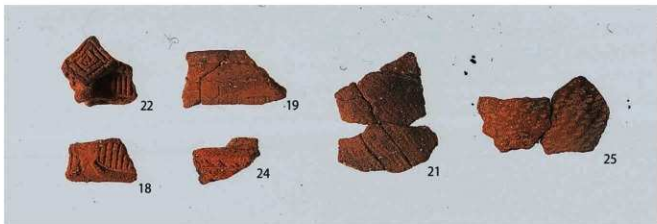


左：SK1331 完麗  
（北西から）  
右：SK1375 完麗  
（北西から）

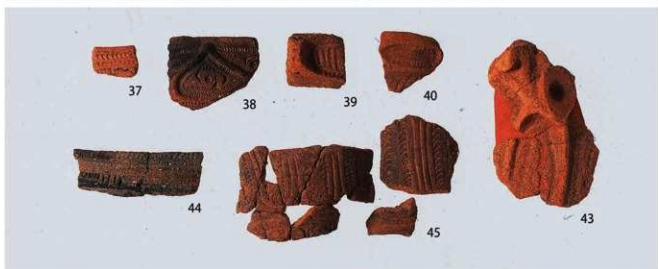
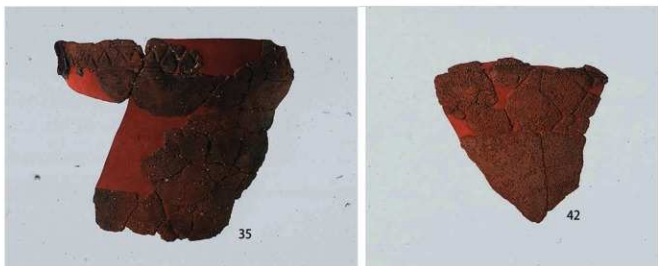
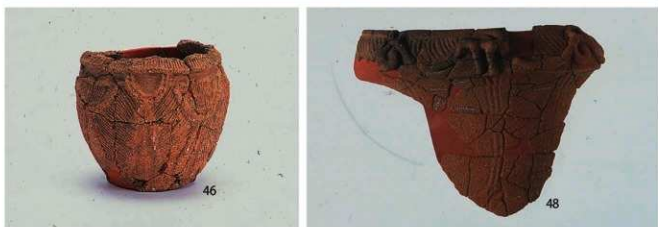
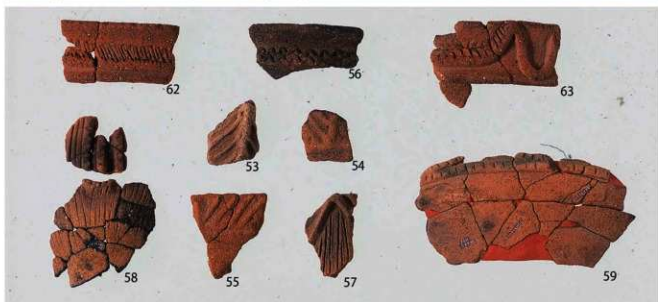


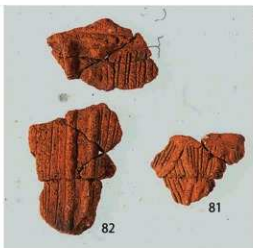
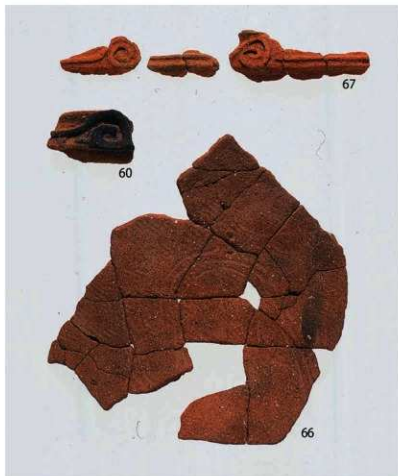
左：SK1378  
底部施設  
様出状況  
（北東から）  
右：SK1378  
底部施設  
調査状況  
（南東から）

SB01  
土器SB02  
土器

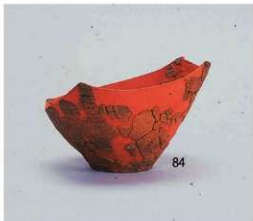




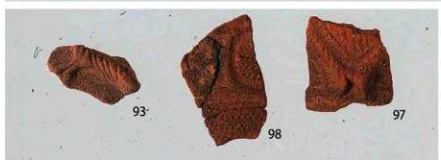
SB03  
土器左: SB07  
土器  
左: SB08  
土器SB09  
土器

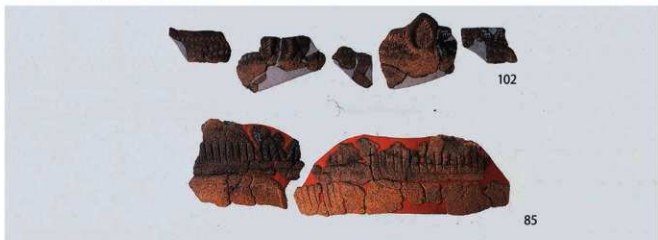


左: SB09  
土器  
右上・右下  
: SB12  
土器

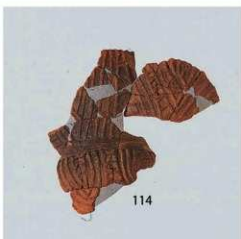


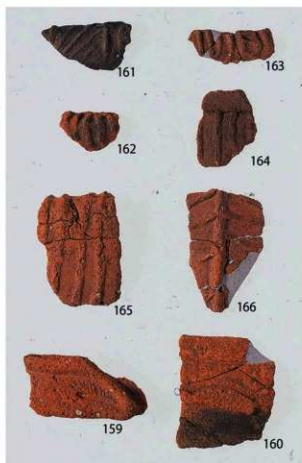
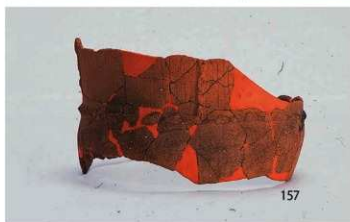
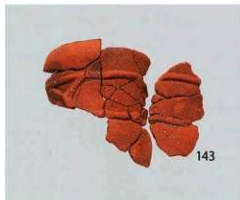
SB13  
土器



SB13  
土器

左上・左下  
 SB15  
 土器  
 右上・右中・右下  
 SB16  
 土器

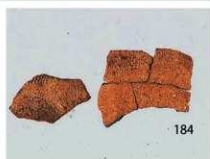




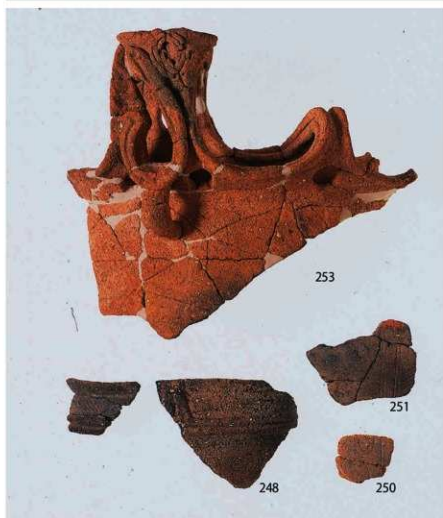
左：SB21  
土器  
右：SB22  
土器

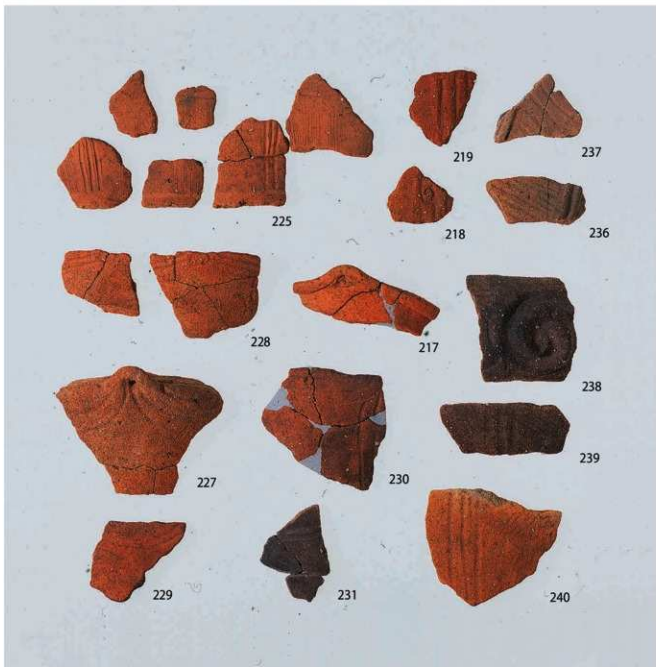


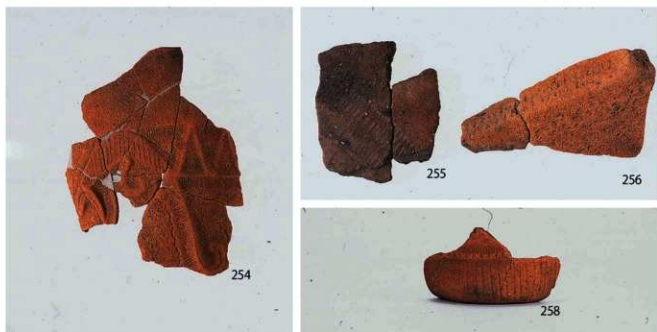
左：SB25  
土器  
右上：SB24  
土器

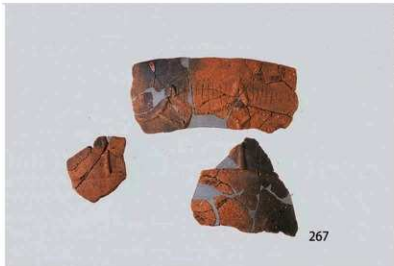


SB35  
土器

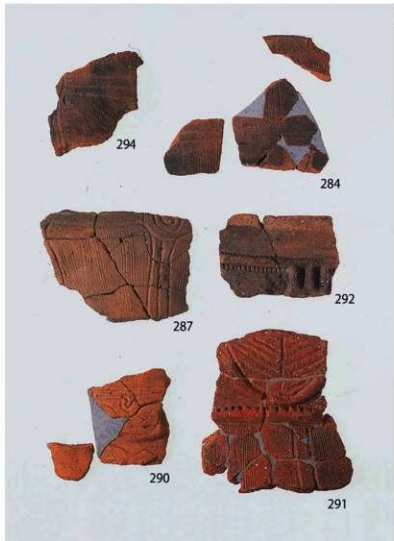
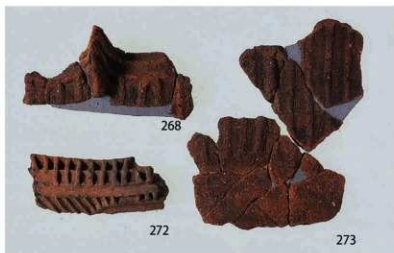
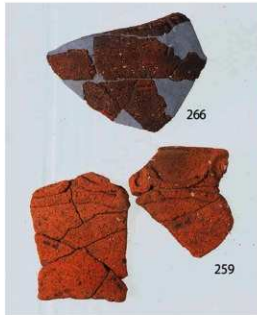




SB28  
土器SB37  
土器



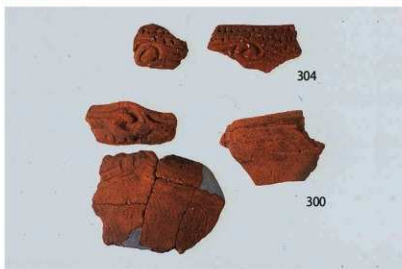
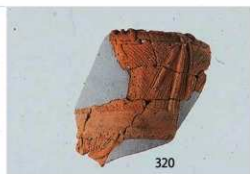
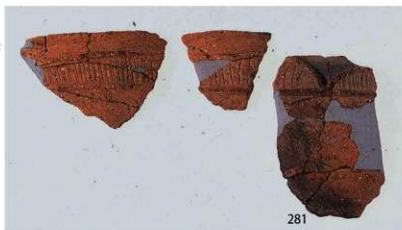
左上・左下  
: 5838  
土器  
右上・右下  
: 5839  
土器



5840  
土器



左上・左下  
: SB40  
土器  
右上・右中・右下  
: SB42  
土器

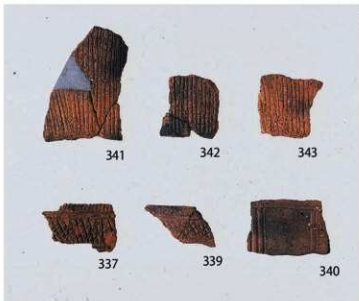
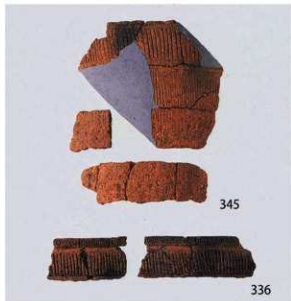


SB42  
土器

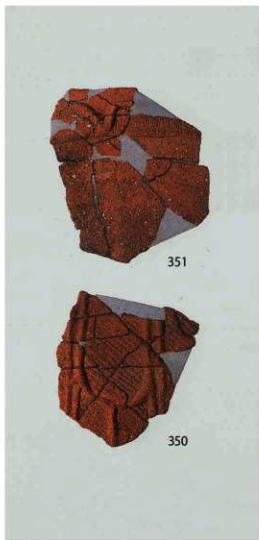




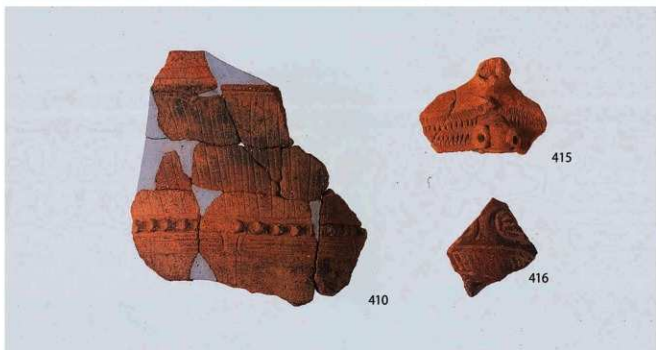
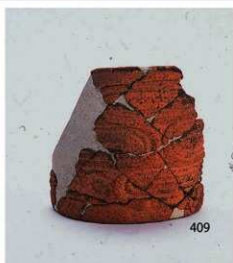
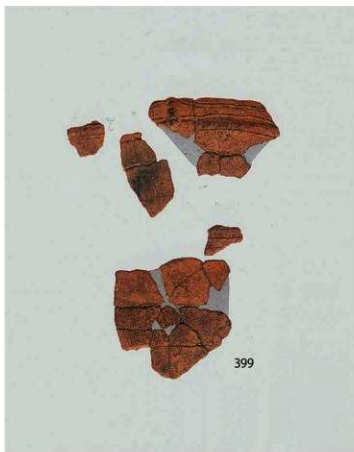
SB43  
土器

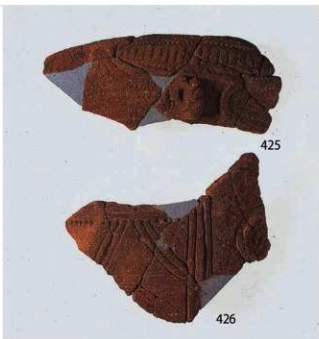
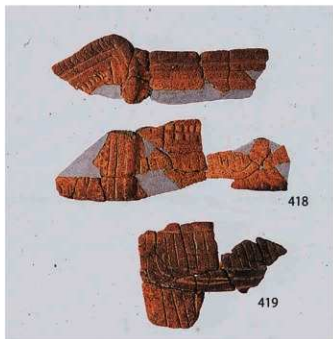


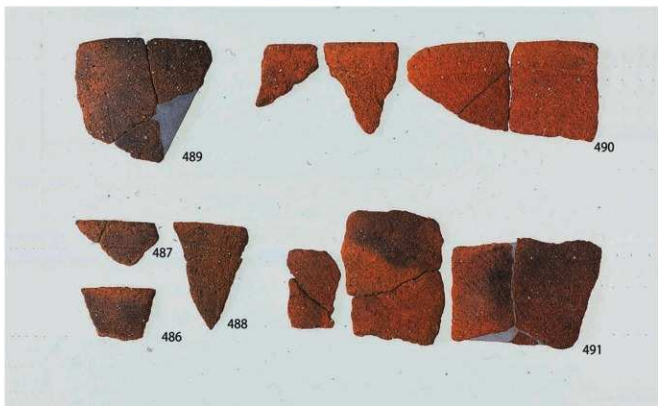
SB44  
土器

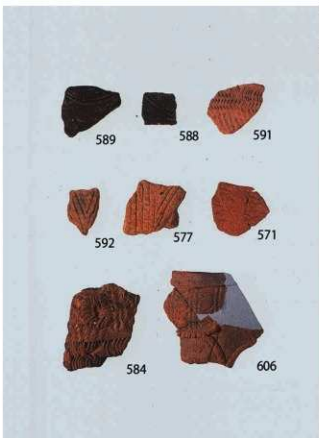


左上・左中  
: SB45  
土器  
左下  
: SB48  
土器  
右: SB46  
土器







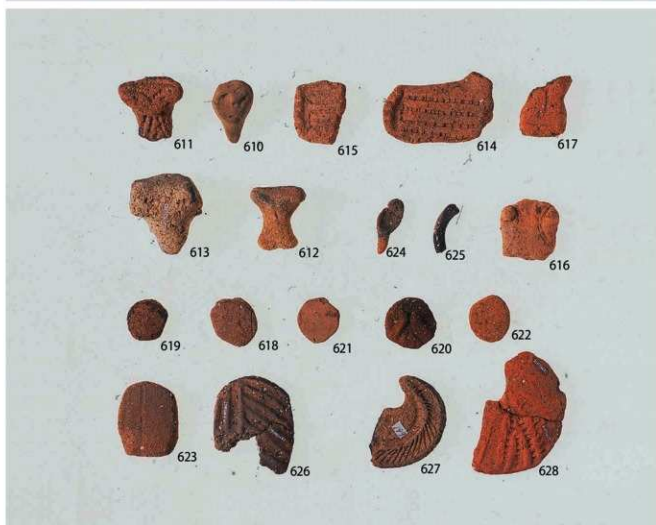


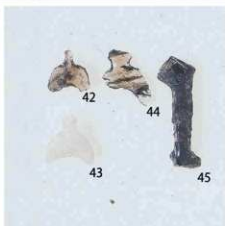
SK  
土器

左上・左下  
: SK  
土器  
右: 遺構外  
土器

遺構外  
土器

土製品





左：石鏢未成品  
中：石鏢  
右：異形石鏢





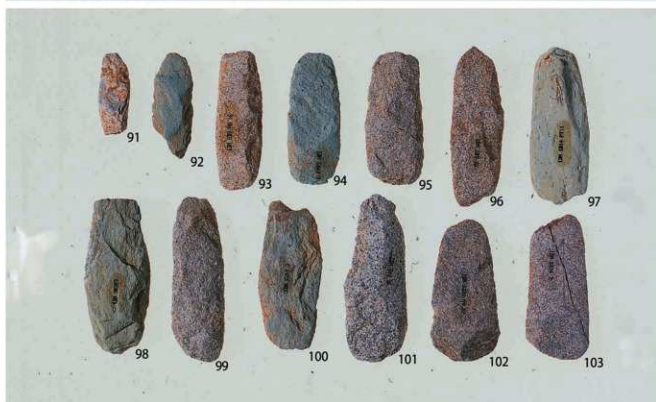
挿入形器  
形器

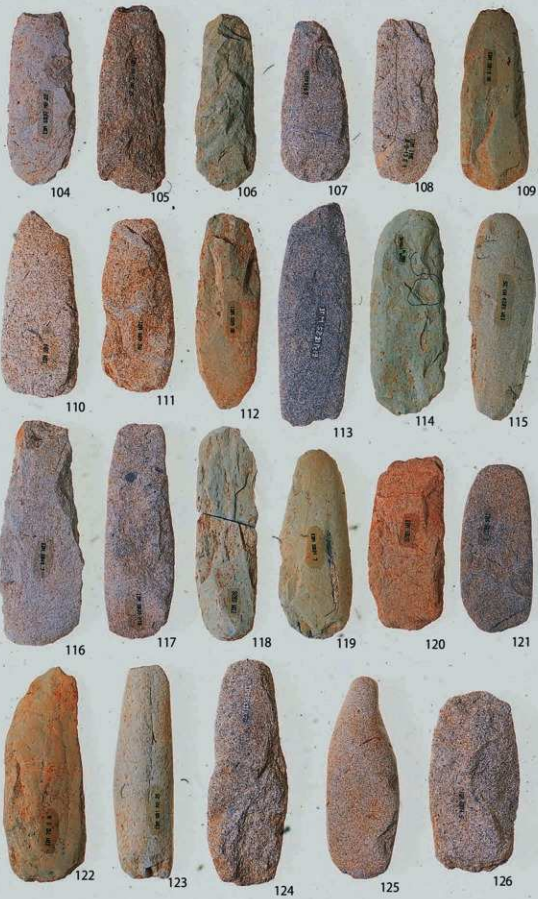


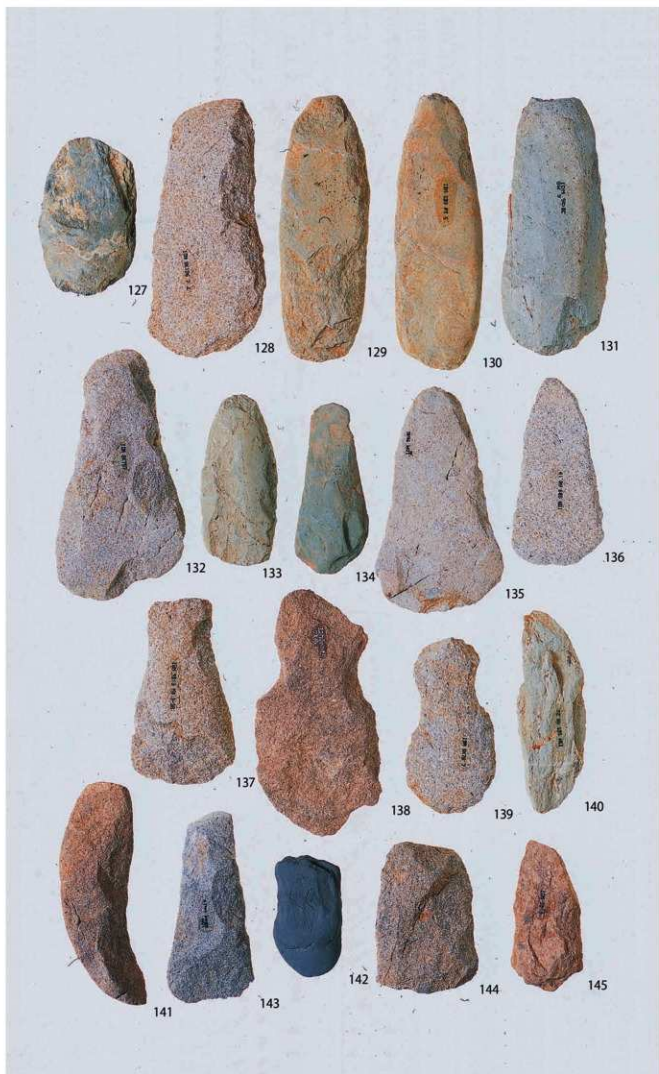
棒状石器  
不定形石器  
二次加工がある剥片  
楔形石器  
微細な剥離がある剥片

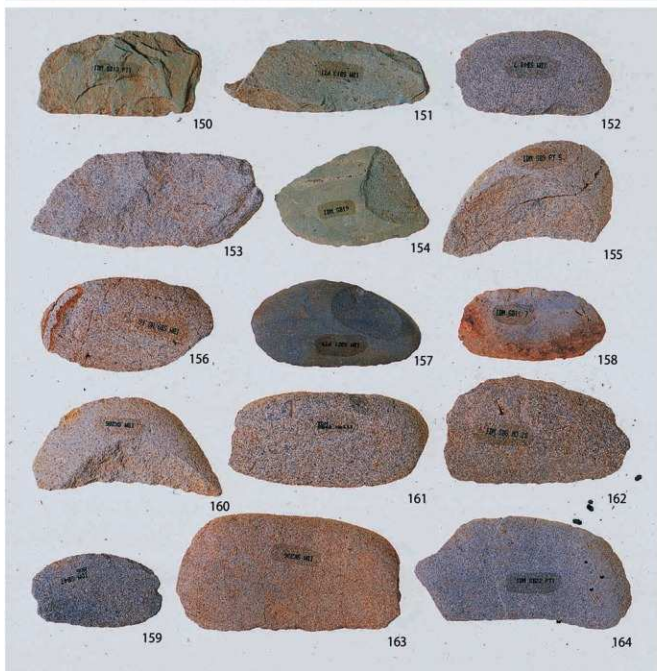


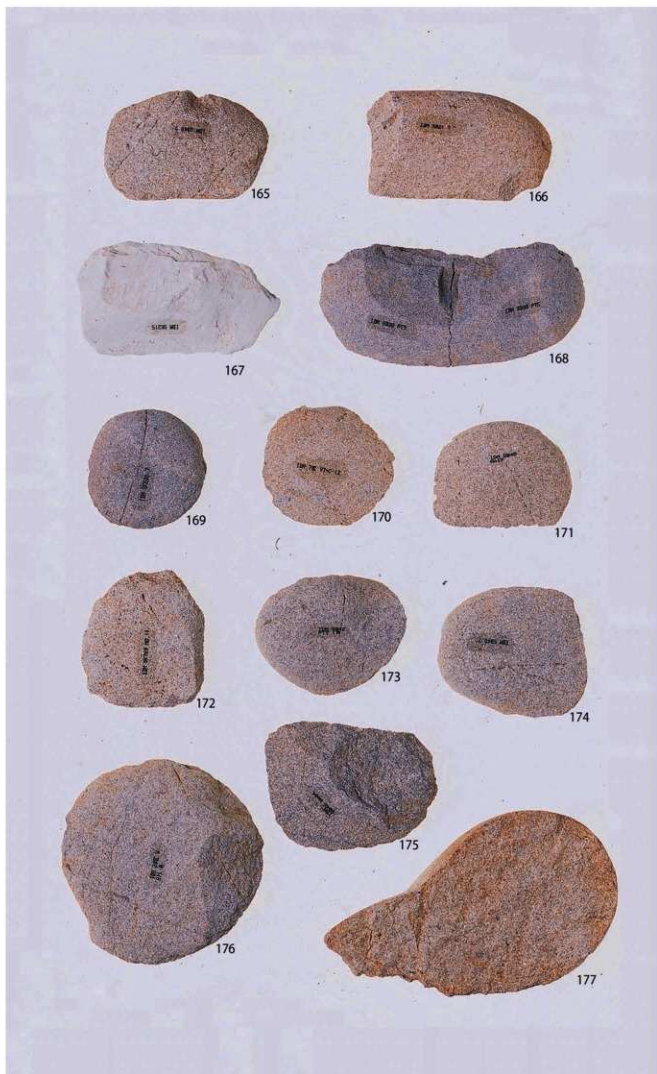
打製石斧













178



179



180



181



182



183



184



185



186



187



188



189



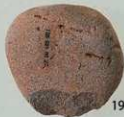
190



191



193



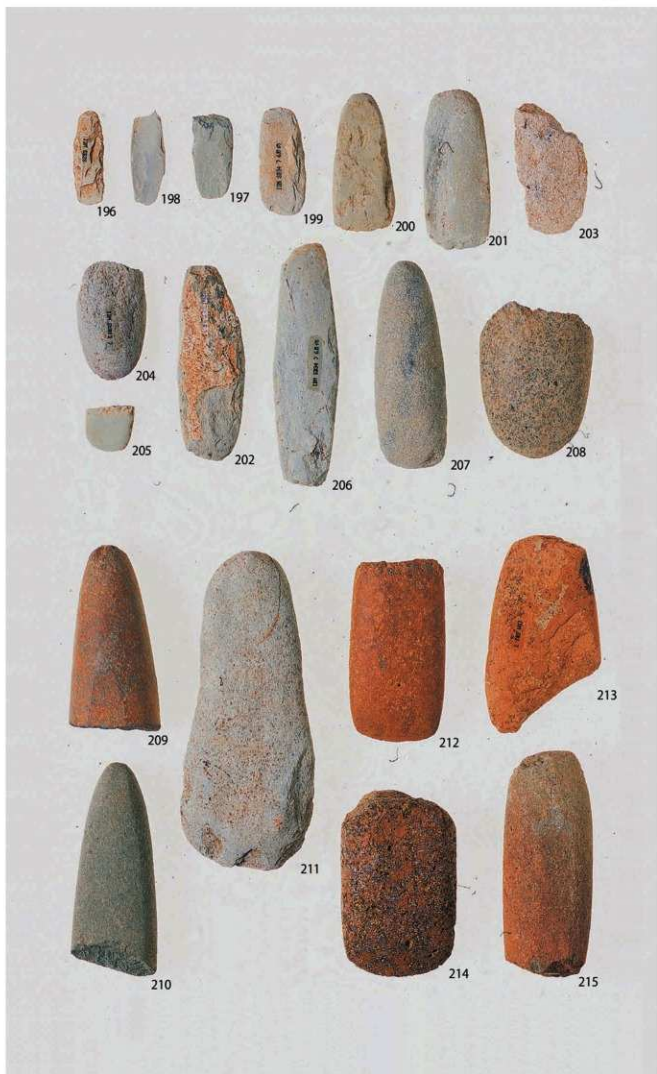
192



195



194







石核  
原石



左下：原石

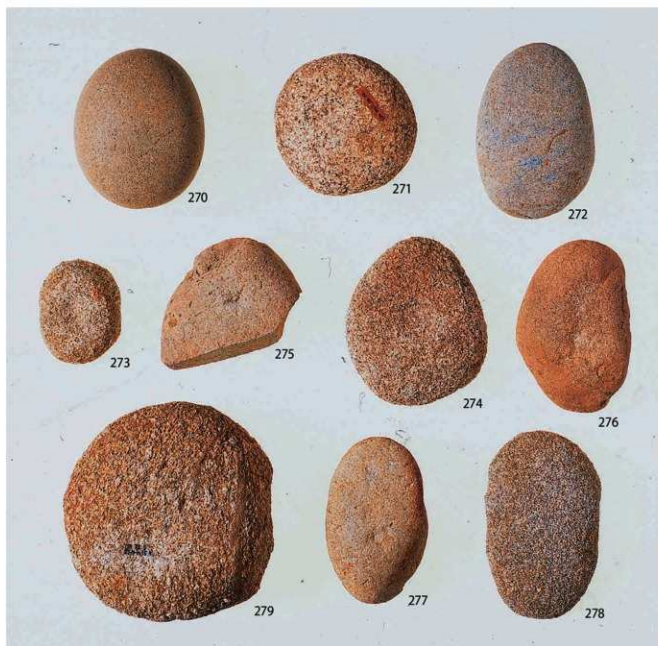


石核



磨石





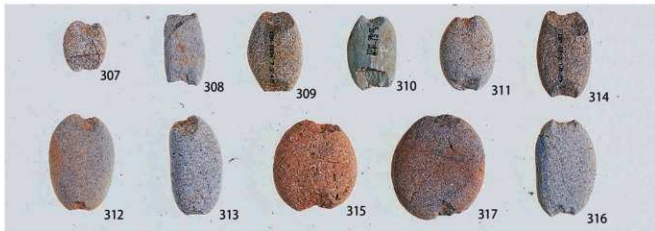
敲石

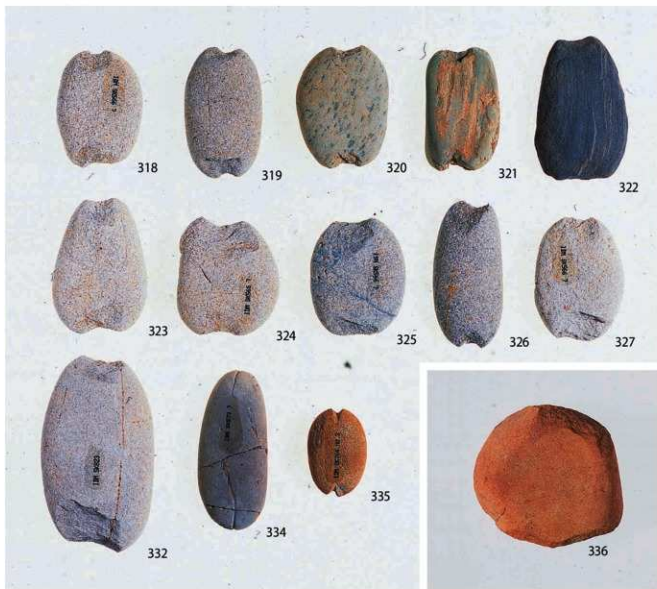


敲石



石錘





右下：礮石



338



340



339



342

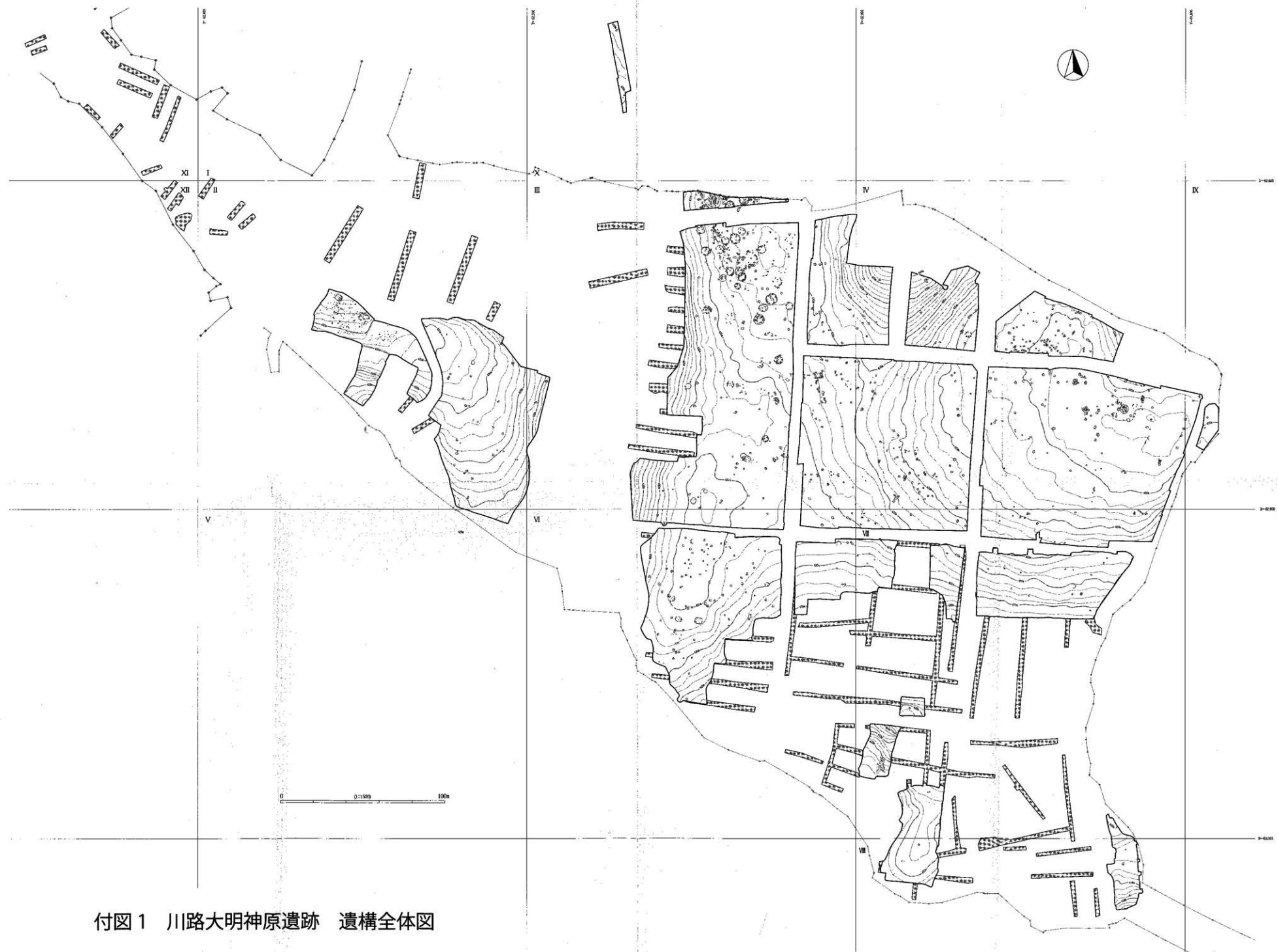


343



344

石皿：338～340  
磨石：342～344



付図1 川路大明神原遺跡 遺構全体図



## 報告書抄録

ふりがな	こくどう 474 ぐう (いいたかどうろ) まいぞうぶんかざいはくつちょうさほうこくしょ
書名	国道 474 号 (飯高道路) 埋蔵文化財発掘調査報告書
副書名	川路大明神原遺跡
巻次	4
シリーズ名	長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	87
編者著者	若林 卓 額田典昭 費田 明 上田典男
編集機関	財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター
所在地	〒 388-8007 長野県長野市篠ノ井布施高田 963 - 4 1n.026 (293) 5926
発行年月日	2010 年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村 コード	遺跡 番号	北緯 (世界測地系)	東経 (世界測地系)	調査期間	調査面積	調査原因
川路大明神原遺跡	長野県 飯田市 川路	20205	424	35 度 26 分 07 秒	137 度 48 分 51 秒	19990422-19991119 20000417-20001223 20010423-20011221 20030123-20030207 20030714-20030717 20040423-20040825 20050818-20051202	80,590㎡	国道建設に伴う事前 調査

所収遺跡名	立地	種別	主な時期	主な遺構	主な遺物	特記事項
川路大明神原遺跡	天竜川西 岸に面し た段丘上	集落	縄文時代 中期	竪穴住居跡 46 軒 竪穴状遺構 4 基 土坑 860 基	中期初頭～後葉上器 土偶 石器	中期初頭～前葉と中葉末～後葉で 集落構成が変化 集落内での磨製石斧の製作
			縄文時代 後期	土坑 11 基	後期初頭上器	
			縄文時代	被熱土坑 3 基 集石土坑 6 基	被熱土坑 1 基から早期前 葉上器	
		狩猟域	縄文時代早期～前期、 後期～晩期	陥し穴 126 基	早期前葉・前期後葉・後 期初頭・後期前葉上器	2 基一組の配置単位 14C 年代から晩期を含む可能性あり
集落	弥生時代 後期	竪穴住居跡 1 軒	後期上器	段丘上の小規模集落		
発掘調査により、縄文時代の居住域と陥し穴による狩猟域が捉えられた。縄文時代中期の集落は、初頭～前葉は小規模散在型の集落形態が想定され、居住域と貯蔵穴域とがそれぞれ区域を異にして存在する。貯蔵穴には付属坑をもつ特異な形態のものがある。中葉末～後葉には住居数の増加と集住化が進化した。貯蔵穴群が居住域に取り込まれ、集落構成が変化する。集落からは該期の豊富な土器資料が出土され、また集落内での磨製石斧の製作が判明した。陥し穴群は縄文中期の集落領域と重なって分布する。本遺跡の陥し穴群には明確な列状配置を構成しないことが特徴で、2 基が一組となる配置単位が数多く把握された。各単位はそれぞれ別個の構築単位として理解し得るが、単位間に明確な連繋が認められる例はごく限られる。						

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 87

国道 474 号（飯橋道路）  
埋蔵文化財発掘調査報告書 4

－飯田市内その 4－

川路大明神原遺跡

発行 平成 22（2010）年 3 月 31 日

発行者 国土交通省中部地方整備局

（財）長野県文化振興事業団

長野県埋蔵文化財センター

〒 388-8007 長野市篠ノ井布施高田 963-4

Tel 026-293-5926 Fax 026-293-8157

E-mail info@naganomaibun.or.jp

印刷 篤友印刷株式会社

〒 381-8511 長野市平林一丁目 34-43

Tel 026-243-2351 Fax 026-251-0001